THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春期大附錄號

第廿七年第四號

第貳百七拾七號

田岡嶺雲先生譯並註

和譯春秋左傳

春秋の時代は所謂武裝的平和の下にある世界の現狀を類す、春秋に齊晉秦楚あるは、猶今日の歐州に英獨佛露あるが如く、而して列國國際の間に同盟あり、盟主あり、外交あり、鐵火あり、春秋左傳は當時の史實を述べて最も詳なる者、此を以て單に三千年前に於ける一魯の史記に過ぎずとする莫れ、今猶古の如し、左傳一部を將つて世界の現狀を鑑む可らざらんや。

四六版總クロース 金文字入美本
上下二冊
正價各一圓廿錢
郵稅各十二錢

和譯漢文叢書既刊書目

著者同上

第一編 和譯老子莊子 正價壹圓 郵稅十二錢
第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵稅十二錢
第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵稅十二錢
第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵稅十錢
第五編 和譯史記列傳 卷上 正價壹圓廿錢 郵稅十二錢

第六編 和譯史記列傳 卷下 正價壹圓廿錢 郵稅十二錢
第七編 和譯七書 附鬼谷子 正價壹圓 郵稅十錢
第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵稅十二錢
第九編 和譯墨子列子 正價壹圓十錢 郵稅十二錢
第十編 和譯東萊博議 (本月中旬發行)

全十二冊

樋口銅牛先生著

碑碣法帖談

附 孫過庭書譜 和漢歷代法書

書道の嗜なきは士人の恥也
本書は書學書道の燈明臺也

菊判總クロース 金文字入美本
全一冊
正價一圓五十錢
郵稅十二錢

發行所 東京市神田區雉子町 振替東京七九五五番 玄黃社

肺結核新藥

グアヤコーゼ

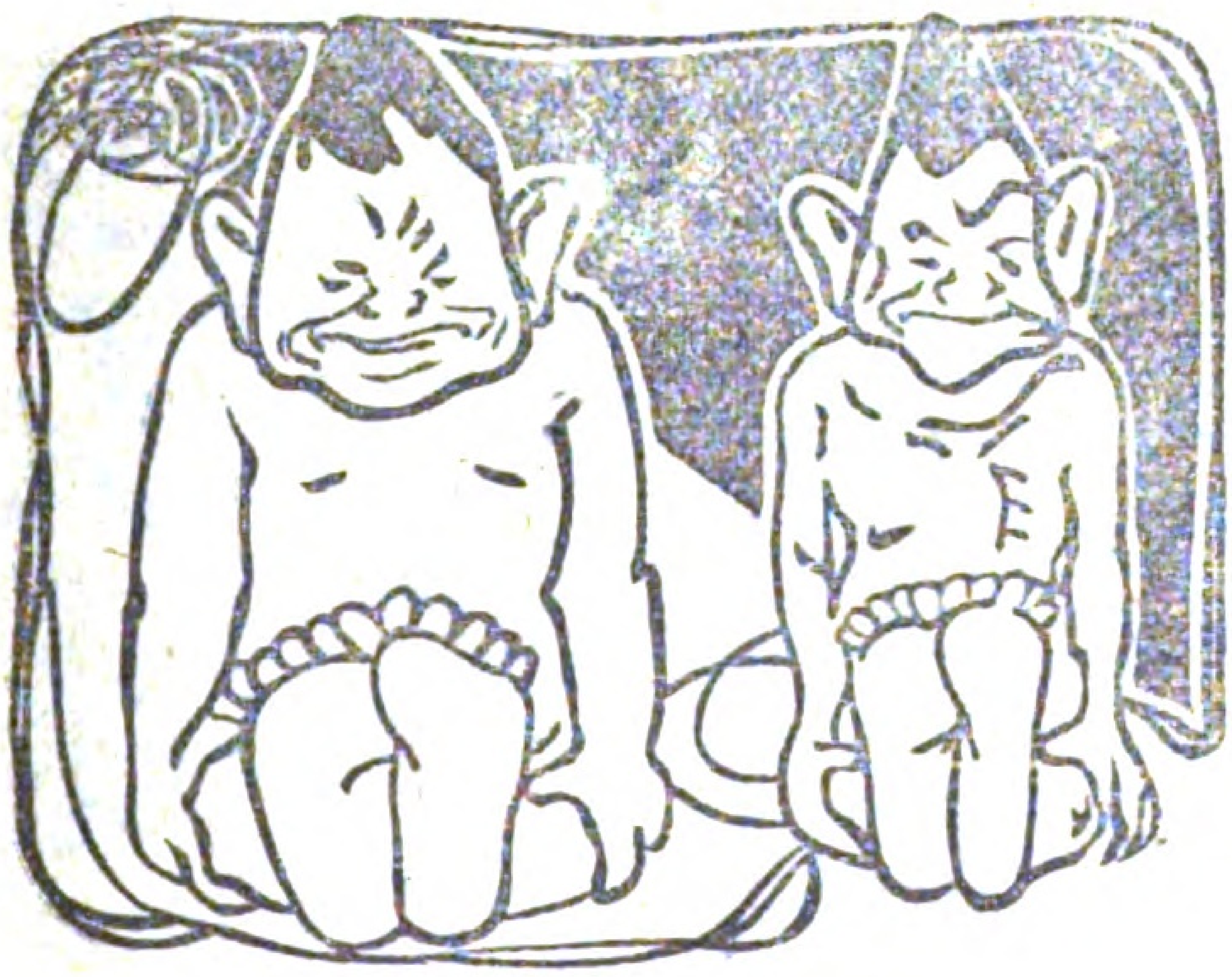
グアヤコーゼは肺結核唯一の治療藥として公認せられたるグアヤコーゼの最も無毒なる化合物を卓越の滋養品として賞讃せらるゝソマトーゼに配合したるものなれば、食慾と消化を催進し清鮮なる血液を作り咳嗽を鎮め喀痰を容易にし盗汗を防止するを以つて肺結核の症状を速かに改善すべし

（說明書進呈）

一回四乃至五瓦
一日三回食後服用

發賣元
横濱市山下町百八十三
神戸市明石町四十七
フリードリツヒ、バイエル合名會社

滋養強壯劑 ソマトーゼ



全世界に著明なる強壯劑ソマトーゼは食慾、消化を佳良ならしむるは勿論總べて體質の新陳代謝を營み絶えず、新鮮にして健康なる血液を構成し筋肉組織を改良し諸器官殊とに神經の營養を良好にし從つてこれを强壯にす故に精神過勞に依つて起る種種の障害精力の衰亡記憶力の減退等を忽ちに回復すべし。

全國の藥舗に販賣す

輸入元
横濱
神戸
バイエル會社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

豫約募集

通俗日本全史

申込四月廿日限【見本】申込次第送呈す

體裁

菊版總洋布製金文字入美本全十七冊總紙數一萬餘頁

五號新活字二段組假名附和紙着色刷肖像五十餘枚入

時代	書目
神代	日本神代志（新著）
王朝時代	上代王朝志（新著）
	前々太平記（二十二卷）
	前太平記（四十二卷）
源平時代及鎌倉時代	保元平治記（十卷）
	源平盛衰記（四十八卷）
	北條九代記（十二卷）
南北朝時代及室町時代	太平記（四十卷）
	後太平記（四十二卷）
安土時代	織田軍記（二十二卷）
桃山時代	太閤記（八十四卷）
徳川時代	三河後風土記（四十二卷）
	難波戰記（十卷）
徳川一統以前	徳川太平志（新著）
別錄地方戰史	鎌倉九代記（十五卷）
	北條五代記（十卷）
	陰德太平記（八十一卷）
	甲越軍記（六十卷）
	四國軍記（十二卷）
	西國盛衰記（十六卷）
	北陸七國志（二十卷）
	新編東國記（十卷）
	東國太平記（十六卷）

豫約代金

甲種（即納）金拾四圓

乙種（分納）金拾七圓（分賣を諾せず）

送料

	一回	全部
東京市内	四錢	六拾八錢
内地	拾貳錢	貳圓四錢
清鮮樺臺	廿五錢	四圓廿五錢

◀出來期＝五月より毎月一册發行▶

本史は千歳不朽の名著たる軍記物語を補ふに新著作を以てし娛樂の間に組織整然たる本邦古來の史談に精通すべからしめたるものなり大和魂の流露せる本邦の軍記が忠烈正義の一大鼓吹者たるは何人も疑はざる所則ち本史が萬戸必備の良書たるは茲に呶々するを要せざる也

豫約元 東京牛込早稻田 **早稻田大學出版部** 取次所 全國各書店

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

旅順攻圍軍

志賀重昂著

△正價金七拾錢　郵送料八錢▽

洋裝大判
本文紙數
三百餘頁
挿畫寫眞
版百個石
版畫壹葉

滿天下の義人に薦む

是れ南山の戰に鹵獲せし露西亞馬ヤー號を躍らし萬雷の如き砲火の間を馳驅されたる矧川志賀先生の旅順攻圍軍日記なり馬上文章挾「風霜」の事實是に於てか見る日本魂を發輝するに漢文體の淋漓たる大筆を以てし而かも叙景は全く西洋文なり、西洋の批評家が『世界一品』と呼びたるは即ち此の旅順攻圍軍なり、志賀先生先きに大役小志を著はさるゝや彪然たる一千四百頁の巨卷なるを以て世を擧げて旅順攻圍軍の一卷を單行本となさんことを熱望せり而も是れ當初著述の志にあらざるを以て敢てせざりき、今茲に某方面の踏査大計畫に使用すべき地理調査費の不足なるや旅順攻圍軍を別本となし以て其收益の一切を擧げて之に寄附するものとす、江湖の諸氏幸に此の擧を贊し速に一本を求められんことを。

著者の所得は勿論**發行**者の收益の全部を悉く**擧**げて**地理調査**費に充つ**國家**的**出版**物也

發賣所　東京振二七〇　神田　東京堂　東京本町　博文館　賣捌各地書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

炫燿たる櫻月號の盛觀

文藝倶楽部

四月一日發行　十八卷第五號　正價廿五錢　郵税二錢五厘●前金十六冊一ケ年分郵税共三圓九十錢

□小説 **谷間の宿**　江見水蔭
□小説 **病馬篇**　山田旭南
□脚本 **南と北**　田口掬汀
□講談 **國定忠治**　松林右圓

◎新潟花柳界と新潟女　卯木庵
◎雲右衛門寂び鮎　あめん坊
◎呑屋と合百の客引　蠣殻童子

■花紅柳緑　贋阿彌
■市川左團次論　生田葵
■演藝當座帳　鬼太郎
■仙術と禁厭　迎日子
■京都の島原　孤村生
■一寸申上候　小さん

●本町誌　思案
○有樂座の晝と夜　百生
○八十九歳の噺家　曉紅
○踊の三津五郎　秋湖
○出放題　閑太郎
○ビリケン福神　胡蝶園

●落語 空中飛行器　園遊

口繪
精彩木版の清麗なる寫眞版の艶容嬌態共に天下無雙の絶品也

東京本町 博文館

信用ある店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

▲若宮卯之助君著

豈辯を好まんや

▲定價金六拾錢 ▲郵稅金六錢
▲四六版三百六十ページ

◉本書を發行せし理由！！！

僕は平生隱れたる人物を世間に紹介し、其議論によつて世間を益し度いと思つて居る。然しさう云ふ人物は滅多に無い。玉と思つたのが案外瓦であつたりする。所が、昨年友人の紹介で、本書の著者若宮卯之助氏に會ふや、忽ち其の人格、學問、識見に傾倒して了つた。氏の如きは、眞に學者振らざる學者、敬虔なる眞理の探求者、勇敢なる眞理の擁護者であつて、當代比肩者を見ざる眞人物である。そこで、僕は氏に懇請して、毎號吾が實業之世界に氏の卓說を掲ぐる事とした。これは讀者諸君の知らるゝ通りである。而して僕は、氏の議論が世間を稗益することが多大であることを信ずる餘り、氏が是迄實業之世界以外に掲げた諸種の問題に關する數十篇の論文を輯めて出版せんことを氏に計つた。氏は出版する程の事はないと謙遜されたが、僕は、遂に氏を口說き落して出版する事とした。本書は小冊子に過ぎないが、其含蓄する所は、最新の學理の基礎に立てられたる深奧なる思想の結晶であつて、實質は世の學者先生達の等身の著書にも優つて居る。其論議關渉する問題の廣い事も無類であるが、其れに對する批判の正確にして卓拔なるは、驚嘆に値ひする。文章は獨創的で、清新である。實に本書の如きは、生きたる書籍である。僕は斷言する、現代の如き各種の複雜な問題が坌湧する時、此の著の如きは、最も信頼すべき思想上の羅針盤であると。

發行者 實業之世界社々長 野依秀一

發行所 東京芝愛宕町 實業之世界社 振替貯金口座三四三參

斬新にして周到・完全にして至廉なる作文自習機關

文學博士芳賀矢一先生 杉谷代水先生共編

作文講話及文範

見本進呈 往復葉書申込

菊判美本上下二冊
紙數千四百五十頁
定價金參圓
送料内地廿錢臺樺四十錢鮮淸五十錢

不朽の盛事と稱へられたる文章は、一方に於ては吾人處世の要具たり。容易に作文の呼吸を會得し、細大の技術に精通せんと欲せば本書を繙け。本書は純文學界、教育界及一般社會に共通し、美文普通文の二面を兼ね、講話、文範及便覽の三方面より作文一切の秘訣と資料とを網羅す**講話**は古今東西の作文法、修辭法、雄辯術及文則の神髓を博採し、優等及第落第の三級を設け、普通人士の常識を本位として、一々原理と實習法とを講説すると詳明懇到**文範**は記叙論説情感賀吊より飜譯文廣告文の實際方面迄、數百名家一粒選の模範文を掲げ、適切なる評釋を添ふ**便覽**は國文法、假名遣、字畫、用字格等机上必讀の實用的諸表を集載す。蓋し作文自習の機關は茲に始めて完備せりと言つべく、高等の學生教師受驗者は勿論、專門以外の士女も一度本書を手にせば又文を草するの難きを覺えず直接の利益、間接の興味實に意想の外なるを經驗すべき也

一萬部限 **特價** 金貳圓六十錢

東京神田 **富山房** 振替東京五〇一一番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



萬年筆

萬年筆の世の中也、會社の重役より米屋、酒屋の御用聞きまで、大學の博士より小學の坊ちゃん方まで、紳士のポケットにも令嬢のオペラバッグにも、日々の事務を取る時は勿論、運動にも芝居にも旅行にも買物歩きにも、書齋は本より座敷にも應接間にも、手紙日記は云はずもがな、一家の主婦の小遣帳も、商家の勘定の書き出しにも今日以後一切萬年筆の事。

理想的　**オノト萬年筆**　自金六圓　至金六拾五圓

ビジネス用　**オリオン萬年筆**　金貳圓八拾錢

(御申越次第目錄進呈)

丸善株式會社

東京日本橋通
大阪心齋橋筋
京都三條通

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

ALBERT MOORE



"BLOSSOMS"

中央公論



第二十七年第四號
春期大附錄號
第二百七十七號

日英同盟の實効を疑ふ

（一）

日英同盟は、實に我が最高政治の樞軸たるもの也、其の明治三十五年二月十一日を以て發表せられたる以來、今に及びて十年餘を經過し、曾て之に異議を懷けるものも、竟に悉く渾然として此の同盟を信倚するに至れり、我が國命を賭して强露と戰ふや、同盟を結べる英國官民が我れに致せる好意と誠心とは、我が國民の感謝して永く忘るゝ能はざる所とす、乃ち此の同盟が純然たる國民的同盟となり、其畛域單に政治上のみに止まらずして、經濟上にも延長せらるゝが如き狀況にあるとは、吾人の信じて疑はず、又當然の結果としたりしもの也

然るに近時我が有力なる大阪の一新聞紙が、蒙古に於ける露國の活動を論究して、日英同盟の効果の茲に及ばざるが如きを慨し、同盟尙ほ活けりや否やと絕叫するや、英國の新聞紙中また此の疑問の當然なるを說き、甚だしきは日英同盟の竟に弛廢せらるゝを論ずる者さへ生ずるに至れり、吾人もまた豫てより、英國人中に態度の怪むべきものあるを看て、一抹の暈翳或は擴がりて此の同盟の前途に障害を及ぼすなきやを掛念し居たりしが、今や此の念慮の漸く切なるを感ぜざる能はざらんとす、乃ち一言して以て我官民を警醒せん

（二）

英領印度は、日英同盟の規定せる攻關守繫の一基礎を爲す所たり、詳らかに言へば、印度が露國又は支那獨逸等より侵犯せらるゝときは、我が日本實に兵を出して之を防衛せざる可らず、即ち日本は英國のため印度擁護の義務を負ふもの也、印度にある英國人が殊に日本に信賴し、隨つて日本人に好意を表すべきや、洵に理の當然なりとせざる可らず

然るに印度在留の英國官民は、我が日本人に與ふるに善意を以てせずして惡意を以てし、日本人と握手するに、溫き掌を以てせずして、天鵞絨の手套に包める鐵拳を以てせり、否、露骨にも冷き鐵拳を以てするものに似たり、試みに我が官民の印度內地を旅行する者に聞け、英國官民は日本人を視ると恰も軍事探偵の如く、到る處猜疑の眼を輝かして之を睨むに止まらず、在留の日本商人等も、冷酷なる待遇を受けて、頻りに痛き壓迫を感ずと言はずや。此の形勢は殊に日露戰爭以後に於て甚だしといふ、想ふ

に英國官民は、我が日本人を以て、印度人を教唆し煽動して其の獨立を慫慂するものと做すなるべし、然れども我が日本人は幸か不幸か、未だ同盟國の領民に勸むるに、其の本國に叛むくの陰謀を以てするが如く多智多能ならざるを奈何せん

印度人中或は獨立を希望するものあるも知る可らず、殊に日露戰爭に視て、東洋人の能力の必ちずしも西歐人に劣らざるを自覺して、其の羈絆を脱せんと欲するものを生ぜしや事實なるべし、是れ必らずしも印度人の或る者のみに限らざる也、安南緬甸に於ても然り、波斯に於ても然り、埃及に於ても然り而して土耳其に於てもまた亦然り、然れども是れ間接の結果のみ、我が日本人の好んで爲す所にはあらず

英國にして、眞に其の保護國臣民の信服を得んとせば、能く人道に隨つて善政を行ふべきのみ、苟くも仁義に反して惡政を布かんか、民心の離叛する猶ほ水の卑きに流るゝが如けんのみ、何ぞ教唆者煽動者の有無を俟たんや、更に試みに思へ、埃及に於て獨立を圖るものありても、其の背後に何の日本人ありや、日本人の埃及に到るものは、世界旅行の途次、偶々ピラミット、スフィンクスを訪ふて以て古を撫するのみ、其れも一年にして一人ありや否やも保しがたし、日本人にしてアレキサンドリヤ、カイロ等に居住する者に至つては、或は一二人ありや否や、恐らくば絶無なるべし

我が日本人如何に奇を好むと雖も、未だ時日と資財とを浪費して印度人に獨立を勸誘するが如き奇行を敢てする者あるとなし、而して其の印度に到る者は、通商上の利益を求め、若くば熱帯地の地理動植

物を研究し、或は佛陀の遺蹤、經典の埋沒を發見せんと欲するに過ぎず、然るに一概に軍事探偵又は陰謀獎勵者の如くに看做し、到る處監視を嚴にして之を疾視し壓迫するは、果して同盟國人を待つの情誼といふべき乎、素より一圖に結論するを得ずと雖も、少くも印度に於ける英國官民の行爲は、全く日英同盟を咒詛するものと爲さゞるを得ず、其の行動たる日本を同盟國と視ずして、寧ろ全く敵國と做すに齊しければ也

（三）

更に近時の支那事變に對する英國官民の行動を視よ、其の政治上に涉るものは、外交機密として吾人尚ほ緘默を守るべきも、彼の經濟問題に於ける彼等の措置に至ては、亦全く日英同盟の存在を無視したるものと稱するも不可なからんとす

上海南京間の一部鐵道を擔保として、我が大倉組より三百萬圓を貸出さんとするや、英國は直ちに一種の抗議を持込み來れり、其の言路必らずしも條理あるにあらず、唯だ從來多少の交涉ありたるがために、強いて口實を設けて之を阻止し、己れ獨り代つて借款に應ぜんとしたりしのみ、若し彼等にして、眞に日本との同盟の情誼を思はゞ、一種の抗議必らずしも不可ならずと雖も、何故に腹藏なく心底を打明け、兩國協同して以て借款を成立せしめんとせざりし乎、或は日本の資本の薄きを掛念する乎、然らば則ち此出資の割合を日三英七と爲すも可他、日四英六も可也、日二英八、若くば日一英九また又妨げず、要は唯だ兩國人協同を堅持すれば則ち可なるのみ

招商局の借款もまた然りとす、若し英國にして日本と協同事に當らば、此の借款問題にも亦十分の成功を告ぐるを得たりし也、然るに英國資本家の爲す所玆に出てず、唯だ一圖に日本を妨害し阻止して、竟に成ると能はざりしのみ

支那もまた印度と齊しく日英同盟一半の基礎を爲す所也、之を條文より解釋せば、或は二三の辨疏を爲す難からざるべし、然れども支那問題に於て、日英兩國が歩調を一にして其の平和を支持し、以て自他の利權を擁護し增進せんとは、正さしく同盟の要素たるにはあらずや、然るに英國の資本家等、日本と提携して以て事を成すを欲せず、動もすれば却つて日本人の爲す所を障害せんとす、嗚呼同盟の情誼なるもの果して斯の如き乎

夫れ同盟問題の重要なる骨子たるべき印度と支那とに於て、英國人の行動や斯の如し、英國政府及び英國の輿論にして、苟くも之を是認せん乎、吾人は此の同盟の果して尙ほ生氣あり効果ありや否やを疑はざらんと欲するも能はざる也

同盟條約は約束也、其の政府及び國民の情誼敦からず、而して又之を遵奉し實踐する誠意を缺かん乎是れ一片の反古紙のみ、况んや約束なるものは、其の對手に於て之を破らんと欲すれば、何者も其の自由を拘束し得さるをや、吾人は素より英國との同盟を歡迎し、且つ向後其の永久に繼續せられて、最善の効果を奏せんとを切望す、然れども英國にして之を欲せずんば、抑も奈何すべき、吾人もまた別に覺悟する所あるを要す

吾人を以て日英同盟に反對するものと誤解するヿ勿れ、繰返して言ふ、吾人は實に日英同盟を以て我が最高政治の樞軸とし、其の永く堅實に繼續せられて、以て最善の効果を擧げ、少くも東洋の平和を支持して世界人道のために貢せんヿを切望すと雖も、英國政府及び其の國民にして之を欲せず、現に事實に於て着々之を無視し反對する趨勢ある以上、吾人も亦國を擧げて別に大に爲す所なかる可からすと爲すのみ、蓋し好むに非ざるも、また實に已むを得ざる也

(四)

我れ既に朝鮮を領有し、且つ利權を南滿洲に確立せる以上、一種の大陸國として世界に立たざる可らず、況んや其の利害の關する所、最も多く支那に在りて、其の治亂安危は延きて直ちに我が國命に影響するものあるをや

此の見地よりして、吾人は朝鮮及び支那と境壤相接する露國と同盟し、兼て獨逸との向背に重きを措くの自然にして且つ至當なるヿを信ぜんと欲す

露國との戰ひの時、我れ實に十萬の生靈を殞し、廿億の資財を糜して、日本有史以來空前の大犧牲を提供するの苦痛を負へり、然れども是れ我れ彼れを誤解し、而して彼れまた我れを誤解したる結果のみ一度び相觸れて大に相衝突するに及びて、彼我共に國民性を領會して、互ひに相欽すべきものあるを發見したり、相重んじ相尊ぶは是れ自然に堅く相親む所以也、露國の軍人中には素より復讎戰を必期するものあり、彼のノヴオ、ヴレミヤ新聞の如き、公然復讎戰の永續すべきを斷言して憚からずと雖も、是れ

唯だ一部の見解感情のみ、其の有識なる政事家、及び一般國民に至ては、必らずしも然らざる也、思ふに卓越なる露國政事家にして永く其の國を指導し、而して露國々民の意思また漸く其政策の基礎を爲す以上、日露同盟の締結必らず難からず、要は我が官民の意向と行動との如何に由るのみ

露國にして日本と同盟せん乎、支那問題の如き實に自由に解決するを得べし、英米諸國の如き、能く雄を海上に稱するを得るも、陸に於ては奈何ともす可らず、長鞭竟に馬腹に及ばず、印度の如きもまた日露兩國に反する能はざるに至らんとす、況んや滿洲をや、又況んや支那大陸をや

今や我が輿論は海軍擴張の一點に傾倒し來れり、近く貴族院に於ける豫算の討議に徴するも、明治四十六年度より必らず擴張を實行すべく、其の財源の如き、之を行政整理の結果に仰ぐ能はずんば、増税に由てもまた必らず之を斷行すべき誓言を内閣總理大臣に爲さしめたるにあらずや、惟ふに最新に建造せらるべき我が最大艦扶桑型の少くも六隻と、同じ比叡型金剛型の精鋭なる快艦各六隻とを以て艦隊を組織するにあらずんば、海軍の事多く言ふに足らざらんとす、是れ我が官民の全力を盡すべき所のものにして、彼の露國と同盟して以て後顧の憂を斷ち、我が優良なる地位を確立する一事の如き、之を爲すに於て最大の便宜たらずんばあらず、即ち單に海軍擴張のみの必要より視るも、露國との同盟を最良の手段とす、況んや一種の大陸國として、朝鮮の安固を欲し、支那問題に最善且つ最便の解釋を與ふるにも、一に露國と親睦し一致し協力するを以て最も切要と爲すをや、日露同盟は宜しく我が國是として以て官民の全力を盡して成立せしむべきもの也

日露同盟が日英同盟と相干格せざるは、猶ほ英佛の情誼が佛露同盟と相戻らざるが如し、英國眞に好意あらば、必らず之を歡迎すべし

或は英國にして自から進んで日本との同盟破棄の意を表明せん乎、我が日本は唯だ之に應ず、の外あらず、對手にして其の約束を棄てんと欲する以上、之を奈何ともす可らざれば也、此の場合我れは外づ露國と同盟するの外、尚ほ獨逸とも提携するを妙とす

獨逸は其の聯邦の興隆尚ほ日淺きに拘らず、學術優秀にして世界に冠絶するに止まらず、其の國民また勤儉質素にして極めて忍耐力に富み、事を創むるに學術を應用し、組織的に井然たる理路を進むが故に、其の發達の迅速なる、流石に米國を瞠若たらしめ、今や駸々たる富度、英を凌ぎ米を壓せんとす、而して軍隊の精鋭にして、而して官民の不撓不屈に進取に雋なる、實に我が官民の範と爲すべきもの多し、況んや近く膠洲灣に租借地を控へ、山東省の炭坑に着眼して、其の支那との利害關係の深き、遙かに列國に優さるあるをや、英國との同盟彼れより破棄さるゝ以上、獨逸は必らず之に代るべき者也

(五)

三び締結せられし日英同盟の條文に於て、英國が概括的仲裁々判條約を締結したる國に對して、攻守相關せざるの除外例を設くるの意思を表明したるは、米國との關係上、餘儀なき事情あるべしと雖も、此の除外例に何等制限をも加へず、絶對に攻守相關せずと爲せるは、決して同盟に忠實なるものと稱すべからず、既に他國と攻守同盟を訂結せる以上、更に別國と概括的仲裁々判條約を結ぶが如きは、眞に

信義あるものゝ大に省慮すべき所なれば也、彼の墺伊兩國を同盟とする獨逸が斯る條約に與かるを欲せざるは、吾人の寧ろ[illegible]貨を禁ぜざる所とす

[illegible]顧り[illegible]るがために、英米仲裁條約は中絶せられしと雖も、最近電報によれば、米國上院　再び該條約に修正を加へて、其の第三條を削除したる上、モンロー主義及び外國人就學並びに移住民等の問題を擧て、全然仲裁々判より除外するととしたりといふ、斯くまで仲裁條約を蹂躪し、其の要點を沒却したるに拘らず、英國政府にして尙ほ且つ忍んで之を有効ならしめん乎、是れ全く日英同盟破棄を宣言したるに齊し、英國果して斯る米國との仲裁條約を有効ならしむべきや否や、吾人は當さに刮目して之を視ん

* * * * * * * * * * *

今や我が最高政治の樞軸に動搖を來し、或は全く其の異動を視るもまた測る可らざらんとす、是れ豈我に取て重大なる問題にはあらずや、我が官民宜しく大に注意すべし、世人曾て評すらく、英國の自由黨實は日英同盟を贊せずと、今や自由黨政府に於て、サア、エドワード、グレーの爲す處、着々として日英同盟の効果を稀薄ならしめ、吾人を危惧せしむる斯の如し、世評果して當らば吾人實に遺憾を禁ぜざる也

鐵道國有の成蹟

(一)

去る明治三十九年鐵道國有案の出づるや、吾人は多數新聞紙の主張に反對して一意國有案を贊成したりき

今や國有實行後幾んど五年、其の成果の良否を視るも無要ならず、一時反對論を絶叫しながら、其の後は恰かも忘れたるが如く之を放棄し置くと、舊時の我見に執着して、今尙ほ漫然として因襲的に國有の非を唱ふるが如きは、倶に國事に親切なるものと稱す可らず、吾人の敢て執らざる所也

(二)

吾人が鐵道國有を贊せしは、能く管理に統一を保ちて、運轉を敏活ならしむると共に、又能く運賃を低減し、由て以て産業の發達を資け得べしと做したれば也、今試みに最も注目すべき運賃の一事を視るに、國有以前に在ては、一人一哩北海道、北越、七尾の二錢を最高とし、日本の一錢四厘、山陽の一錢二厘餘を最低とし、平均一錢五厘(官線は一錢五厘强なりき)なりしもの、今や一錢三厘九毛となりて、唯だ僅かに山陽線より高きのみ

更に事實に徵するに、三等旅客の賃金新橋下ノ關間に在て七圓七十錢なりしもの六圓餘となり、靑森八代間十五圓なりしもの十圓四十錢となれり

次に貨物一噸一哩の賃金を視るに、山陽の一錢三厘を最低とし、炭鑛の一錢六厘を次とし、日本は二錢、九州甲武は二錢六厘、京都の如きは四錢を超えて、平均二錢一厘なりしもの、國有後は平均一錢六厘六毛となりて、僅かに山陽より高きのみ

更に平均率に徴するに、貨物一噸一哩の賃錢最も高きは三十四年の二錢、三十八年の一錢八厘餘にして、四十年の一錢七厘より漸次低下して四十三年には一錢六厘六毛となり、又旅客一人一哩の賃錢は、三十五年、三十九年、四十年の一錢五厘を最高とし、漸次低下して四十三年に一錢三厘九毛となれる也

試みに之を歐米に比較するに、旅客一人一哩の賃錢最も高きは英國の四錢五毛、米國の四錢四毛、伊太利の二錢二厘六毛、佛國の二錢二厘三毛、墺國の一錢八厘七毛、獨逸の一錢八厘六毛、白耳義の一錢四厘五毛にして、唯だ露國の一錢三厘四毛を我より聊か廉なりとするのみ、又貨物一噸一哩の賃錢は英の五錢五厘四毛を最高とし、伊太利の四錢五厘六毛、墺國の二錢八厘七毛、獨逸の二錢八厘、佛國の二錢七厘三毛、露國の二錢三厘三毛、日本の一錢七厘六毛の順序にして、我より廉なるは、唯だ僅かに米國の一錢五厘二毛あるのみ

(三)

茲に稍々興味ある一問題あり、列國の營業線路十哩に對する機關車、客車、貨車の輛數を比較するに左の順序となると是れ也

△機關車數

(一)白耳義　十四　(二)英國　十　(三)獨逸　七　(四)日本及び佛國　五　(五)墺國及び露國　四　(六)伊太利　三　(七)米國　二

△客車數

(一)白耳義　十七　(二)英國　廿三　(三)獨逸及日本　十四　(四)佛國　十一　(五)伊太利　九　(六)墺國　八　(七)露國　四　(八)米國　二

△貨車數

(一)英國　三百卅八　(二)白耳義　三百〇六　(三)獨逸　百四十五　(四)佛國　百廿九　(五)墺國　八十九　(六)米國　八十七　(七)露國　八十二　(八)日本　七十三　(九)伊太利　五十二

即ち日本は、機關車客車に於て共に三乃至四位にあるも、貨車に至つては第八位に落ち、露國にすら及ばざると遠し、是れ最も吾人の遺憾とする所、現に各所に於て貨物停滯の愁訴あるに於て、此感殊に深しとす、鐵道當局宜しく大に反省するを要す

因みに各國鐵道哩數及び其の資本の比較を左に示さん

△各國營業哩數　(四十三年)

(一)米國	二三三、六七八哩
(二)獨逸	三五、四七五哩
(三)露國	三四、七〇〇哩
(四)佛國	三〇、〇二九哩
(五)墺國	二五、七六三哩
(六)英國	二三、二〇五哩
(七)伊太利	一〇、四二五哩
(八)日本	五、一五七哩

△仝上百平方哩に對する哩數

(一)英國　十九哩一　(二)獨逸　十七哩　(三)佛國　十四哩五　(四)墺國　十哩七　(五)伊國　九哩四　(六)米國　七哩九　(七)日本　三哩七　(八)露國　一哩八

△鐵道資本額

(一)	米國	三百廿三億五千四百万圓
(二)	英國	百廿三億九千七五万圓
(三)	獨逸	八十億四千九百万圓
(四)	佛國	六十八億四千五百万圓
(五)	墺國	四十五億六千万圓
(六)	露國	三十三億一千二百万圓
(七)	伊太利	十九億一千五百万圓
(八)	日本	八億九千七百万圓

△仝上一哩平均額

(一)英國　五十三萬四千圓　(二)佛國　二十七万四千圓　(三)獨逸　二十二万八千圓　(四)伊太利　十九万八千圓　(五)墺國　十八万八千圓　(六)日本　十六万一千圓　(七)露國　十五万圓　(八)米國　十四万圓

然れども我が車輛數は、國有後著るしく增加せられたり、即ち線路十哩に對する割合を擧れば、機關車に在ては、明治三十九年に四輛(總數一千八百十八輛)なりしもの四十三年には約五輛(總數二千二百三十一輛)となり、客車に在ては卅九年に十二輛(總數五千六百六十一輛)なりしもの四十三年には十四輛(總數六千八百六十六輛)となり、殊に貨車に在ては、卅九年に六十五輛(總數二萬九千五百六十八輛)

なりしもの四十三年には七十二輛(總數三萬五千七百四十九輛)となれる也

(四)

國有に由て、鐵道統一の効果ありしとは、遠距離の旅客賃金の著るしく低減したるに徴するも明白ならん

更に車輛走行千哩に對する燃料及び燃料の代價を視るに、三十九年四十年には二千六百斤を要せるもの、四十一二年には二千四百斤以下となり、四十三年には二千二百斤となり、随つて其の代價に於ても三十八年には十五圓五十錢、卅九年には十三圓、四十年には十一圓餘を要したりしもの、四十三年には遙かに減じて七圓となれり

旅客用機關車の如きも、明治三十七年に在ては、重量三十七噸なりしもの、四十四年には六十一噸となり、随つて著るしく時間を減ぜしとは、世上の普く知る所にして、是も亦國有統一の一の賜と稱して可ならん

鐵道の運轉に事故多きとは、動もすれば世人の指摘する所なれども、事實は却つて減少せり、即ち最も多かりしは三十八年の千三百五十回、四十年の千三百回とし、四十三年には僅かに七百五十回のみとなれり

吾人は以上の事實を綜覽して、鐵道國有の結果の惡ならずして善なるを知る、少くも不良にあらざるとは、明らかに斷言するとを得、何者の瞶々者流か敢て之を惡罵するぞ

凡そ獨占的事業は、之を一私人又は少數資本主の經營に放せずして、國家又は市町村の如き公共團體の手に移し、改良及び公益を圖るを最良とす、是れ社會政策上注意を要すべき所、殊に最近經濟學說の承認する所なり、彼の陳腐なる民業壓迫と稱して東京市の電燈經營を難ずるもの丶如き、畢竟今の世に行燈を點する亞流に過ぎず

（五）

然れども今の鐵道當局者の爲す所、未だ必らずしも完全と稱しがたし、貨物の賃率を定むるに特別法を用ひて、未だ全く產業發達に留意せざるが如き形迹なきに非ざれば也

最も聞くべきは、鐵道國有後、其の改良及び延長資金の潤澤ならざるを指摘するの說也、然れども此の有望なる事業を以て、最善の改良計畫を立てば、內外債を起す豈難からんや、國有後と雖も、資本供給の方法一二にして足らず、唯だ斷じて之を行ふの活手腕家なきのみ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

國有鐵道の改良、殊に鐵道管理の統一に就て、吾人は玆に鐵道院前總裁後藤男の功績を沒す可らず、國有後混雜を極めたる鐵道管理に、兎も角も組織あり秩序あらしめたる彼の手腕は、平生彼の敵たるものも、之を否定する能はざる可ければ也

ダーウヰニズムとマルキシズム

(進化論と社會主義)

河上肇

「中央公論」記者足下、足下が官業と民業との得失に關する質問を提供して意見を徴せられたるに對し、其に御答せずして却て斯かる愚論を差出すことは、或は足下の迷惑とせらるゝ事かと思ひますが、之には多少の行掛りがあるので、兎も角一應事情を聞いて下さい。

實は此の論文は『東亞の光』に寄稿したものてあるが、同誌は新聞紙條例に依つて發行して居るものてないので、掲載し兼ねると云ふ返事てあつた。然るに僕は始めより此の論文を公にする事を進んて居たのては無いから、それが掲載せられぬと云ふ事に爲つたのは寧ろ幸と思つた位の事て、早速原稿の返送を求めた。處が數回の催促の後やつと昨日送り返へされたが、其の添狀には、僕が改めて此の論文を書き換へて、更にかく〳〵の條件を承諾するならば掲載してやらうと云ふ意味のことが書いてあつた。そこて僕も意地を張つて此の論文をば敢て反古とせ

ず、又た何等書き換ふること無くして、他の有力な雜誌に是非載せて貰ふと云ふ氣を起しました。仍つて原稿中『本誌』となつたのを『東亞の光』と書き改め、一二の添削をして、其のまゝ茲に之を足下に郵送する次第であります。稍々長文であるので、御迷惑かとも思ふが、若し餘白を割いて下されば、僕の大に本懷とする所であります。

（二月二十二日）

一、序言

『東亞の光』から度々何か書くやうにとの御依賴を受けながら、同誌に適當な題目が見付からぬので、其度毎に辭退して今日に到つたが、重ねて御依賴を受けたので、餘り度々辭退するのも失禮と思つて、强いて此の一篇を起艸することにした。實は茲に論じやうとする題目は、昨年三月『東亞の光』第六卷第三號に掲載された井上哲次郎博士の『現代思想の變化に對する覺悟』と題されたる講演の筆記を讀んだ時から心付いて居た所であるが、一は問題が社會主義に關する事柄である爲め世間の思惑の聊か危ぶまれたのと、又一は内容が博士の議論の非難である爲めに博士の主幹して居らるる雜誌に之を寄稿すると云ふ事は禮儀上如何であらうと危ぶまれたので、今日まで躊躇して居たのであるが、不相變別に恰好な題目も思ひ付かぬので、已むなく此の論を掲げた。博士の寬容は必ず吾人の無禮を許さるゝ事と信ずる故、それは强いて氣にせぬが、學問の何たるやを解せぬ世間一部の偏狹者流は、吾人が社會主義を論ずるを見て無用有害の事として許さぬかとも疑はれる。仍つて本題に入るの前、少く其事を辯じて置きたいと思ふ。

社會主義は何故之を研究し說明し批評しては爲らぬの乎。殆ど了解し難い。殊に吾等の如く、經濟學史經濟史を專攻し、其の智識に依つて、其の智識を增進するとに依つて、始めて家の命じたる官職を執り行ひ得る地位に置かれたる者より見れば、社會主義乃至社會主義的運動は近世に於ける經濟學史經濟史の最も主要

る部分を占むるものなるが故に、之を研究し説明し批評することは國家が吾等に命じたる職責の一と考へざる得ぬのてあるから、何故世人が之を研究し説明し批評しては爲らぬと云ふの乎、實に殆ど了解に苦む。或は社會主義は思想界の恐るべきバチルスてあるから、極力之を排斥せねばならぬと云ふの乎。然らば問ふことがある。爾か云ふ人は如何にして社會主義がバチルスの如き恐るべき害物たるを知つた乎。社會主義を研究せずして其の然ることを知り得た乎。試に其のバチルスに就いて考へ見るも、其の恐るべき所以、之を撲滅する方策、是等は皆な其のバチルスに就いて精密熱心なる研究を爲したる結果始めて知り得た所ては無い乎。段々バチルスに就いて研究して見ると、其中に恐るべきものがあり、恐るべからざるものがあり、或は又た大に以て利用するに足るものがある事が分り、而して恐るべきものは之を如何にして撲滅し、利用すべきものは之を如何にして培養すべきかが分つて來るのてあつて、縦ひ其の凡てが大に恐るべきものだとするも、其の如何に恐るべきか、如何に之を退治し撲滅すべきかは、何れも皆バチルス其物を研究して然る後吾等の知るを得た所ては無い乎。危險だからと云つて研究しないて居ては、實は危險之より甚しきは無いのである。

今日の人間は昔日の人間てはない。理由なくして、充分なる理由なくして、容易に事を信じ得ないのが今日の人間てある。社會主義は危險だと云へば、必ず何故かと問はずには居られない。何故と問ふて充分なる説明を得た後に非ざれば、容易に其の然ることを信じ得ない。然るに世の識者が社會主義の普及を防禦する爲めに、社會主義に關する智識の普及を禁遏せんとするは何事てある乎。凡て物の批評に先つものは物其のものに關する正當の智識てある。人物の是非高下を批評するにも、先づ必要とする所は其の問題と爲れる人物の品性行狀に關する精確なる智識ては無い乎。或者が危險てあると云ふ事を知らする爲めには、先づ其の或者の本體眞相を明かに爲なくては爲らんては無い

乎。若し其の本體眞相を明かにせんか、其の危險ならざることとの知れ渡らんを慮ると云ふの乎。若し其物にして眞に危險ならざれば、危險ならざる事の知れ渡るに於いて何の恐るべき事がある。問題は危險なる社會主義の普及を防遏すると云ふにあるので、若し其の所謂社會主義にして危險ならざるものならば、之が普及は則ち歡迎すべきこととては無い乎。

又た或る識者は――余の此の部類に井上博士を編入することとを敢てする――社會主義を防遏するが爲めに、其の一方便として――然り余は之を方便としてに非ざれば他に考ふること能はず――社會主義を至極淺近のものに解釋し又は製造し、斯くて其の隨意に解釋し又は製造し、得たる社會主義の藁人形を土俵の上に持ち來り、極めて簡單に之を土俵外に抛り出して得々として居る。而して斯かる角力は、一部の觀客の拍手を買ふ場合もあれど、而かも吾人は今日我國の青年の大部が凡て此の如き角力に滿足する程の幼稚な者であるとの無禮なる推定をば、吾人の敬愛する我國の青年の大部に向つて敢てするを欲せざる者である。看よ社會主義の思想は鞺々乎として今や歐米の全土に澎湃して居るては無い乎。故人カール、マルクスを始めとして、姑く之を獨逸に就いてのみ言ふも、曰くカウツキー、曰くベルンスタイン等、當代一流の學者にして此の主義を主張し此の主義を信奉する者敢て少からざるは何が故である乎。我國多くの識者が一手を擧げ一足を投げて直ちに推し潰して仕舞ふが如き、爾く簡單な主張、爾く淺薄な思想でない事は、只だ此の一事を以ても明かで無い乎。

エリス、バーカーは帝國主義の論者として我國多數の人に知られて居ると思ふ。現に此の一月の『新公論』にも此の黄禍論が抄譯してあつたと思ふが、此人の『英國社會主義』と題する著書の一部には左の一句がある。

『社會主義は此國に於いて將に甚大の危險――今日現はれ居るよりも更に遙に大なる危險と爲らんとしつゝある。されば社會主義に反對する者が單に之

を輕蔑嘲笑して止むは賢しと謂ふべきて無い、彼等は宜く之を研究し且つ之を理解すべく試みなければならぬ。是が爲めには相當の時間を割くの價値がある而して吾人は、之が研究理解を遂げて後、若し其の主義を有用のものと爲さば、始めて之が普及を爲すことを得べく、若し之を有害のものと爲さば、始めて之と戰ふことを得べく、若し又た此の主義たる、元と眞實の苦惱缺乏を救はんが爲めに生じたるものなれども、只だ其の方法に於いては誤る所ありとするならば、然る後始めて吾人は其の誤謬を正すことを得るのである。かの社會主義の如き大なる且つ危險なる政治運動に無智たることは、最も恐るべき結果を齎すに相違ない。惰け者は歷史を造り得ぬ、只だ之に惱さるゝだけてある。』

然り、彼の社會主義の如き危險なる思想に無智たることは其れ自身が却て大なる危險てある。諸君、吾人は惰け者に終るべきてない、歷史を造らなければならぬ、歷史に惱さるゝ衆愚に甘んじてはならぬ。

諸君、誤解してはならぬ。吾人は社會主義を研究する必要を認むる者てある、而かも之が鼓吹の必要を唱ふる者てはない。肺病のバチルスを研究すると云ふ事と其のバチルスに感染すると云ふ事と同一てなく、又た其のバチルスの研究に從事せる學者は必しも之に惱されつゝある肺病患者たるを要しない以上は、社會主義を研究すると云ふ事は之を信奉すると云ふ事と同一てなく、社會主義の研究者たる爲めには必しも社會主義者たることを要しない。凡て無智は一切の禍の源てある。若し社會主義にして眞に危險ならば、之に對する無智は更に危險なる禍の元てある。此の意味に於て吾人は時あつて社會主義の論を試みる。世人は之を以て危險とすれども、吾人は之を以て危險を防がんとする者てある。

吾人が以下本論に述べんとする所は、只だ社會主義と進化論との關係てあつて、純乎たる學問上の事柄に屬するが、斯かる單純なる事柄を述ぶる爲めにも、斯くまて長文の序言を必要とするらしく感ぜざるを得ぬ吾

等が思想上の環境は、不幸と云へば即ち不幸である。

二、ダーウヰンとマルクス

標題にダーウヰニズムと云つたのはダーウヰンの名に依つて廣く世間に知られて居る生物進化論のことてあり、又マルキシズムと云つたのはマルクスの創説に成る社會主義のことである。今日單に社會主義と云へば何を以て社會主義とすべきかに苦まざるを得ぬほど、種々雜多の議論がある。併し米國の有名なる社會學者の一人たるヴエブレン教授が云つた如く『今日希望と恐怖とを人心に鼓吹(インスパイアー)する所の社會主義はマルクスの流に屬するそれてある。』而して余が以下單に社會主義と云ふ所も亦た此のマルクス流の社會主義に外ならぬ、

扨て進化論と社會主義とは衝突相容れざるものなるかに考ふる人々が少くない。頗る公平な思想を持つて居る人達ても、多くは此の如く考へて居る。

併し歐米の社會ては、社會黨の書店にダーウヰンの『種の起源』が社會主義の書類と共に陳べてある。之を日本の事情に就いて考ふるに、佛教書肆にはバイブルが無く、基督教の書店には佛典が無い。等しく宗教に關する書籍ても、其の流派を異にすれば既に此の如くてあるのに、若し進化論が社會主義の爲めに一大打擊と爲るものならば、到る所の社會主義の書店にダーウヰンの著者を飾つて居るのは不思議てはあるまい乎。

マルクスの有名なる著述の一たる『經濟學批判』(Zur Kritik der Politischen Oekonomie) は前後八ヶ年に亘る勞作の產物であるが、それが彼の細君イエンニーに依つて淸書され、かくて其の原稿が獨逸なる出版書肆の手に届いたのが一八五八年の十二月て、愈々印刷に附せられて世に公刊に爲つたのが翌年の夏てある。而して彼の社會主義の根本基礎たる唯物史觀が最も明瞭に述べてあるのは、此書の序文てあつて、彼は其の史觀をば『研究の結果余の到達したる一般的結論にして、既に之を得たる後は、余が其後の研究の指南車となりしもの』と云つて居る。故に彼の唯物史觀を離れて彼の社會主義を是非するは抑々末て、彼の社會主

義を理解する爲めには先づ其の唯物史觀を研究しなければ爲らぬ。即ち彼の唯物史觀は其の社會主義の根本基礎であつて、此の基礎なくんば彼の社會主義も亦た無しと云つて過言でない。扨て少しく餘談に亘つたが、此の如き彼の根本思想を序文としたる彼の『經濟學批判』が出て間もなく、其年の十一月二十四日に出版されたのがダーウヰンの『種の起源』である。而して『種の起源』は直にマルクスの手に渡り直に彼の讀了する所と爲つた。扨て其時、マルクスは一讀卷を措いて驚いた乎。若し彼の社會主義が易々と進化論の爲めに打破らるべき程のものであつたならば、此の有名なるダーウヰンの著書を一讀して大に驚いたに相違ないが、彼は果して驚いた乎。然り、大に驚いた。乍併そは恐るべき敵として驚いたのでなくて、計らずも有力なる味方を得たのに驚いたのである。彼は此書を以て思想界に大革命を起すべき書なりとして大に之を推賞し、その出版後一ヶ月間と云ふものは（マルクスは當時既にロンドン客寓の身であつた）殆ど此の書物のことばかり話し合つて居つたと云ふ事である。此の一事を以てしても、晩年彼の說き出したる社會主義が進化論と矛盾衝突すべき筈のもので無いことが分る。否な、ダーウヰンの『種の起源』の思想界に於ける價値を最も早く認識した者は、實に我がマルクス其人である。

社會主義を感情的に惡む人は、所謂科學的社會主義の鼻祖たるマルクスを以て極惡非道の人たるかに想像すれども、彼には彼の一生を通じて彼の爲めに最も深厚なる愛情と最も有力なる助力とを吝まざりし二人の友人があつた。其の一人は女性で、即ち彼の細君たりしイエンニーであり、今一人は男性で、即ち彼の親友たりしエンゲルスである。イエンニーの事は姑く舍く。マルクスの始めてエンゲルスに逢ふたのは一八四四年のことで爾來兩人の交際はマルクスの死せし一八八三年に至るまで、實に前後約四十年間一日もかはる事は無かつた。兩人が始めて逢つたのは前述ぶる如く一八四四年であるが、翌年には兩人共著の名の下に『神聖家族』（Die Heilige Familie oder Kritik der Kritischen

Kritik)と題する書を公にした。此書は兩人の共著と云ふも實は殆どマルクスの手に成つたもので、エンゲルスの書いた部分は全體の中で一枚半位のもので、あるとは、エンゲルスの書翰の中に見へて居ると云ふ事であるが、それよりズツト後に出版した『共産黨宣言』も矢張り兩人共著の名前に爲つて居るけれども、之も主としてマルクスの筆に成つたものである。猶ほマルクスの大著たる『資本論』(Das kapital)は其の一巻が生前に公にされたきりで、後の第二巻第三巻はマルクスの遺稿をばエンゲルスが非常な骨折の下に整理して出版したものである。社會主義者と云へば利己主義者の集りの如く能く人が思ふけれども、マルクス及びエンゲルスの間柄は滔々たる今の世の手を覆せば雨と爲り雲と爲るのとは、最初から最後まで大に趣を異にして居たらしく思はれる。餘談が又長引いたが、マルクスとエンゲルスとは此の如き關係から殆ど一身同體で、最も能くマルクスを解するものは即ちエンゲルスの外に無いのであるが、そのエンゲルスが一八八三年三月十七日(マルクスの死後三日目)にマルクスの墓前に立つて痛沈なる弔詞を朗讀した折、其の一節には『有機的自然界の進化の法則を發見せしはダーウキンにして、人類歴史の進化の法則を發見したるは我がマルクスなり』と云ふ一句があつた。若し或る人々の主張する如く、ダーウキニズムがマルキシズムに取つて恐るべき打撃と爲るべきものならば、マルクスの無二の親友たる彼れエンゲルスが斯かる場合斯かる場處に臨んで、何んでダーウキンを引き合ひに出さう。之を見てもダーウキニズムとマルキシズムとの關係は略ぼ推察されるだらうと思ふ。更に同じくマルクスの親友たりしリープクネヒトは其の『回顧錄』に誌して云ふやう、ダーウキンの進化論が極めて重要なる意義を有することを認め、且つ之を以て自己の學說と離るべからざる關係に置きし學者は、彼れマルクスを以て其の第一の人と爲すと。マルクスの詳傳は近年スパルゴーの手に依つて始めて著はされたが、紙を費すと約三百五十頁、最後の章に於て彼は何と云ひしか。曰く、『マルクスと

ダーウヰンとは啻に其の時代を同うせしのみならず、彼等の成業は或る程度まで驚くべき併行を成しつゝありダーウヰンは生物進化の法則を闡明し、而してマルクスは社會進化の法則を闡明せり。ダーウヰンは人類を說明し、而してマルクスは人類の社會制度を說明したり』と。是等の言は皆な併せて以て證すべきもので、ダーウヰニズムとマルキシズムと啻に相背馳せざるのみならず、却て密接なる關係を有するものなること、之に依つて旣に甚だ明瞭である。

三、井上博士の議論

事情此の如くであるに拘らず、進化論を以て社會主義を攻擊するの武器と爲さんとする者ある事は、吾人の傍觀して聊か奇異に感ずる所で、盜人を捕へて見れば吾が子なりに終りは仕舞ひかと氣遣ふのである。乍併、斯かる奇怪の議論は今猶ほ我が日本の識者に依つて唱へられつゝあるので、(無論西洋にも斯かる例はよく在るので、現に新しい本ではヘドレーの『ダーウヰニズムと近世社會主義』の如きも其の一例であるが、西洋のことは姑く舍くとして今ま日本のことに就いて述ぶれば)、吾人は其の一例として玆に井上博士の所言を引くを得るを遺憾とするものである。博士が『東亞の光』(昨年三月發行)に載せられた『現代思想の變化に對する覺悟』を見るに、其の一節には社會主義を批評して次の如く述べてある。

『近來社會主義と云ふものが段々日本に這入つて來たのでありますが、私は是れは大に研究すべきものであると考へて居ります。(河上云ふ、博士の如き學問上社會上の地位名望を有して居られる方から、此の如き明白なる社會主義の硏究奬勵の言葉を聽くとは、吾々の大に力强く思ふ所であります。)一體社會主義は社會の組織を變更する上に於て一の空想 Utopia を有つて居るのでありまして、資本と土地を共有にして、さうして勞働者にそれ〲平等の仕事を與へ平等の賃銀を與へやうと云ふ考を有つて居るのであります。併ながらさう云ふやうなことは果して出來るや否や。其可能と云ふことに就いて疑がある

のみならず、先づ私有財産を無くなすことは出來るか何うかそれが疑はしい。それをやり遂げて以上果して宜い結果を生ずるや否や餘程疑はしいのであります。第一。平等の仕事を各個を各個人に與へると云ふことは、迚も出來ることでない。仕事の種類はなか〱多い。中には土を運ぶやうな白痴でも出來る仕事があるけれども、又建築のやうな特別の技術を要する仕事もある。さう云ふ仕事になると、餘程學識才能がなくては出來ぬ。さう云ふ具合に仕事の性質がそれ〴〵非常に違ふからして平等に各個人に與へることは迚も出來る譯のものでない。(中略)

社會主義者の空想(理想と言はぬ)として居ることが果して行はれるや否や、又行はれた所がそれが本統に好い結果を生ずるかどうかと云ふことは非常な疑問である。(河上云ふ、若し社會主義なるものが博士の說明さるゝ如きものならば、其の行はれ得ざると、又た假に之を行ふも其の結果を生ぜざることは、全く疑問にならずして、始めより何等の議論を要せざる自明の事柄だと思ふ)。第一人間は平等なものでない。不平等と云ふことは進化論の結果から見ても明かである。才、不才、賢、不肖と云ふやうに人間には色々な種類がある此の才、不才、賢、不肖といふことを平等にすることは出來ない。人間の力量は實際に於て大變に違ふのであるから之を平等に取扱ふことは甚だ不公平である。同じく平等にして徒に數量的にのみ平等にしたのではいけない。數量的にのみ平等にしたならば是れ程不公平なものはない。才能の有る者も才能の無き者も同じ様に取扱ふことは大變な不公平である。けれども才能ある者は其才能の程度に從つて之を待遇する、才能の無きものはそれ程に報酬を與へないと云ふことにすると、社會主義の空想は到底行はれぬと思ふのであります。(圈點は原文のまゝを存し、更に多少を加ふ。)

以上が井上博士の議論の要點である。徒に紙面を塞ぐことと爲るから、彼れ是れ省略した部分が少くない故、委しくは前掲雜誌第六卷第三號を參照されん事を希望

する。

今吾人は右に掲げた博士の議論に對して、何等直接の批評を加へやうとするものでは無い。今を去ること四十年前即ち明治十年頃に起つた獨逸の或る昔話をすれば、それが自ら右の議論の批評に爲る。仍つて次に其の昔話を紹介しやうと思ふ。

四、ヘツケルの議論

抑々ダーウヰンの進化論とマルクスの社會主義と如何なる關係あるやに就いては種々の議論あることとなれども此點に關し最も興味ある一例と爲すに足るものは、一八七九年九月バヷリアのミユンヘンに催された生物學大會の席上に於いてヘツケルとヰルヒヨウとの間に開かれた論爭である。此の當時歐羅巴の生物學者はダーウヰンの自然陶汰に贊成せるものと反對せるものとの二派に分れて居た、がヘツケルはダーウヰン説の贊成者側の主論者として九月十八日大會の席上に於いてダーウヰン説の爲めに最も有力なる講演をなし、之を以て宜く學校の敎課中に加ふべきものであると論じたのである。而して之に就いては、贊否の兩面に於いて更に多くの學者が交々立つて其の説を主張したが、遂にヰルヒヨウが出て「ダーウヰン説は直接に社會主義を生むもの也」と論破するに至つて、生物學上の議論は一時中止の姿と爲り、社會主義が生物學者の論爭題目と爲るが如き奇觀を呈するに至つたのである。

斯かる事情よりしてヘツケルは俄に防禦の地位に立ち其の主張する所のダーウヰニズムが決してソーシアリズムを生むもので無いと云ふ事を辯解するの必要に迫られたのであるが、其の結果として彼が公にした一文は、社會主義に關する誤解の適例として同主義者の能く引用する所である。其の原文はエンリコ・フエリの「社會主義と近世科學」の中に全文が揭げてある。此の書は元と伊太利で著はされたものであるが、今は英譯も日本譯もある。又たレーウヰスの「進化論」と云ふ小冊子の中にも、原文が容易に手に入り難いと云ふ理由から、其の英譯の全文が載せてある。余は左に其の議論の大要を紹介して見やうと思ふ。

ヘッケルの議論の内容は凡そ三段に分たれて居る。其の第一段の議論の要旨は、社會主義は各個人の平等を主張すると雖、進化論は其の反對に、各個人の平等を期するところの全然不可能なるを主張するもので、二者全く相容れざるものであると云ふので、氏は則ち次の如く述べて居る。

「社會主義は凡ての市民に向つて平等の權利、平等の義務、平等の處有及び平等の享樂を要求す。之に反し、進化論は、是等の希望を實現することの全然不可能なること、即ち人類社會に於いては動物社會に於けると等しく、社會各員の權利なり、義務なり、將た處有なり、享樂なりは、凡て平等ならず、又た到底平等なるを得ざることを立言するものである。」

「進化の大法則の敎ふる所に依れば、種々なる現象は元來は單一なりしものより、種々なる作用は原始には一樣なりしものより、複雜なる組織は最初は簡單なりしものより、流れ出でたるものである。凡ての個人の生存條件は、生れ出でたる其時よりして、既に平等にあらず。加ふるに、其の遺傳性及び內部の傾向は、廣く種々の差異を存するものなる事を忘れてはならぬ。既に然りとせば、何んぞ凡ての者の勞務及び報酬をして平等ならしむ事が出來やう。」

ヘッケルの第二段の議論の要旨は、社會主義は社會各員の生活を保護せんとするものなれども、進化論は之に反し、人類社會に於ても、かの動植物の社會に於けると等しく、生れ出でたるもの丶中、大多數は死滅すべきもので、只だ一部少數のもの丶みが生存競爭に勝利を占め得ることを主張するのであるから、此點に於ても二者全く相容れぬものであると云ふに至る。今其の言に曰く

「淘汰說の敎ふる所に依れば、人類の生活に於いては、植物及び動物の生活に於けると等しく、自己の生活及び發達に成効する者は、到る所常に、只だ少數の特權ある一部のものに止まり、大多數のものは、之に反し、早くよりして種々の困難及び失敗を免れぬものである。……」

「殘酷無慈悲なる「生存競爭」は凡ての生あるものを通じて到る所に行はれ、又た其物の性質上行はれざるを得ざるものであつて、凡ての生物の間に於ける此の永久不動の競爭は、拒むべからざる一の事實である。此の競爭の鬪に於いて勝利を占め得るものは極めて少數の最强者又は最適者あるのみである。不幸にして競爭に失敗せる大多數のものは、當然死滅するの運命に在る。斯かる悲劇的の運命は誠に悲むに餘りあれども、而かも何人も之を否認し又は變化するを得ないのである。「召さるゝ者は多けれども、選ばるゝ者は僅か也」とは即ち此の謂てある。」

ヘッケルの第三段の議論に曰く、生存競爭行はるゝが故に、「至善者の殘存、至適者の勝利」と爲り、之に依つて社會は益々進歩するのみならず、其の必要の結果として社會は益々貴族的となるけれども、社會主義は斯かる生存競爭を否認し、社會をして民主的たらしめんとするものであるから、其の主張は全然進化論に反論するものと謂はなければならぬと。

社會主義と進化論とは正に相反するもの也とのヘッケルの議論は略ぼ以上の如くである。之に依つて見れば前に引きたる井上博士の議論は、正にヘッケルの第一段の議論に相當すと見るべきて有らう。

そは兎もあれ、ヘッケルは其著 Natürliche Schöpfungsgeschichte の第二卷の卷末に於いて、更にヰルヒョウを攻撃し、氏は病理學に於いてこそ近世の大家てあつて、其の獨創の學說は三十年前醫學の進歩の爲めに一大貢獻を爲したものであるけれども、而かも彼は動物學者に非ざるが故に、其の專門とせる病理學と全く別個の科學たる生物學の範圍に於いて、かのダーウヰニズムに反對するに至つては、全然失敗を招くの外なきに至つたと論じて、其の筆を結んで居る。併しながら若し吾人をして言はしむるならば、ヘッケルがヰルヒョウを攻撃した此の一句は、直に移して以てヘッケル其人を攻撃するの句と爲し得るので、即ち彼が生物學の大家たることは言ふを待たざれども、而かも彼は經濟學者にあらざるが故に、其の專門とせる生物學

と全く別個の科學たる經濟學の範圍に於いて、かの社會主義に反對するに至つては、彼は全然失敗を招くの外なきに至つたものである。

五、的なき所に矢

蓋し社會主義と進化論と全く相容れざるもの也とのヘッケルの議論は、全然社會主義の誤解に本いたものである。彼はマルクスの社會主義に就いては何等の智識を有せざるもので、其の攻擊する所の社會主義なるものは、彼が斯かる議論を公にせしより既に三十年前即ち今を距ること約七十年前に、社會主義者自身の夙に拋棄せし所である。而して此點に於いては、我が井上博士も亦た同樣の非難をば免れ得ないではなからうかと疑はれる。博士は社會主義の思想を目して一の空想だとされて居るが、實に博士の解せらるゝ如き社會主義は眞に一の空想であらう。併しエンゲルスの『空想的及科學的社會主義』(Die Entwicklung des sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft) の本文は元と Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft と題する書の一部を別冊として公にしたものであるが、其の原書の方は既に一八七八年の昔に著はされたものである。博士の言葉の中には『此の社會主義はなか〳〵歐米諸國に擴がつて居る大問題でありまして、其が派の人々は尙ほ研究をして居るのでありませうから、今後其の空想をどう云ふ風に代へて來るか測り難いのであります』と云句が見へて居るが、博士の解せられて居るが如き空想的社會主義は、今後どう云ふ風に變つて來るか測り難いのではなくて、或はとくの昔に大分變つて來て居るかとも思はれるのである。

餘話は舍いて、先きに揭げたヘッケルの議論が全く社會主義の誤解に本いて居ると云ふ事を、取急いで述べることにしよう。

社會主義の主張は果して如何なるものであるか。之を知る爲めには、他人の議論を聞くよりも先づ社會主義者其人の議論を聞くのが、最も捷徑で且つ確實であるが、幸にもヘッケルの議論に對しては多くの社會主義者が相應の批評を加へて居る。就中エンリコ・フェリ

の批評は、著者が有名な學者であるだけに頗る要領を得て居るのみならず、其の著書『社會主義と近世科學』は全部日本語に譯されて居る。譯文はまだ手にしないけれども、樋口龍峽君の手に成つたもので『社會政策と近世科學』の名の下に出版されて居ると云ふ事である。何んでも大逆事件のあつた後で。社會主義に關する出版物の取締は非常に嚴重に爲り、或は過度ではあるまいかと危ぶんで居た當時に此書は出版されたと思ふが、其の發賣禁止にならなかつたのは、まさか標題の『社會主義と近世科學』が『社會政策と近世科學』と改めてあつた爲めのみではなくて、當時檢閲官が、これは學問上の議論をしたものであるから、其の內容も廣く世間に流布して差支ないものであるとの國權的認定をされたものと信ずるから、以下余は主として此のエンリコ、フエリの議論を紹介するのみに止めて、萬一の危險を避けるの賢き方法を採らうと思ふ。多少は他人の議論も混ずるであらうが、なるべくはエンリコ・フエリの議論の要旨そのまゝを抄錄するに止める積りである。以下述ぶる所は即ち其れである。

六、ヘッケルの議論の批評＝其一

先づヘッケルの第一段の議論に就いて批評せんに、社會主義は決して各個人の不平等を否認するものではない。そは否認せんと欲して否認するを得ざる所で、苟くも常識を具ふる者が左樣な馬鹿げた議論を唱へる者でもなければ、又た歐米社會の衆愚が如何に愚物と云つても、左樣な馬鹿げた論に威服して騷ぐほどの愚物ではない。然り人は不平等なり乍併人は凡て人なりと云ふことは是れ社會主義の根本思想とする所である。故に社會主義は、二種の人の存在を否認する。其の第一種は働かずして食ふ人で、其の第二種は働いて食ふ能はざる人である。(玆に食ふと云ふは人らしく生活すと云ふ意味であることは言ふを待たぬ。)されば社會主義の主張する所の平等なるものには、謂はゞ二の方面がある。第一は生活する爲めには働かざるべからずと云ふ平等の義務で、第二は社會に向つて一定の勞働を提供する者は凡て人らしき生活 Menschenwürdigdasein,

existence worthy of a human を爲し得べしと云ふ平等の權利これてある。更に具體的に云はゞ、經濟階級を廢止し凡ての人をして其の出發點を平等ならしめ、之に依つて人間の不平等をば益々有利に導かんとするに過ぎぬ。故に社會主義の所謂平等なるものは、只だ相對的の平等て、決して絕對的の平等てはない。從て社會主義の下に於ては、今日と同樣に種々の分業が行はれ、又た事業の種類に依つて人々の受くる報酬即ち其の所得にも各々多大の差異あるべきてある。井上博士は『仕事の種類はなか〳〵多い。中には土を運ぶやうな白痴ても出來る仕事があるけれども、又建築のやうな特別の技術を要する仕事もある。さう云ふ具合に仕事の性質がそれ〴〵非常に違ふからして平等に各個人に與へることは迚も出來る譯のものてない』と云つて居られるが、誠に其の通りてある。併し其の通りてある代りには、社會主義者と雖も其の迚も出來る譯のものてないことを別に出かさうとする譯のものてはない。

盛に進化論の立場から人生を論じて居られる丘博士の言を借りるならば、『他の動物には金貸し、地主、資本家などの如き、懷手をしながら贅澤に暮す階級は決して見出すことは出來ぬ。人間社會ては一度或る手段に依つて一定額の財產を造つて置きさへすれば、自分の一代は素より、未來永刧幾百代の末までも働かずに食ふて行くことが出來て、尙其上に財產が漸々に增へる』のてあるが、博士は此事を以て所謂文明の弊の根元として居られる。而して社會主義は此の如き文明の弊の根元を無くしたいと云ふのてある。

或は、社會主義が經濟階級を無くせんと主張するを目して不可能とするの論者があつて、蜂や蟻の社會に於ける階級の存在てふ生物學上の事實を以て其の論據とするかも知れぬが、蜂や蟻の社會に於ける階級別は生理的の階級別てあつて、王や女王を始めとし、軍事に從事する者、勞働に從事する者等、凡て生れ落ちた當時から其の生理的構造を異にして居るのてある。(例へば之を蟻に就いて云へば、女王は文字通りの國母てあつて、一社會の蟻は凡て其の腹から生れたものてあ

る。女王は卵を産む能力を具へて居るのみて、姙娠後は動くことさへ自由に出來ぬのである。而して職蟻及び兵蟻は皆な生殖器の發育の不全なもので、彼等は社會の强制に本き已むを得ず其の生殖慾を抑壓して居るのでは無くて、生れながらにして生殖慾を解せぬのである。勞働又は兵役に服すると云ふ事が、生れながらにして彼等の生理的天職である。)然るに社會主義が其の廢止を主張する所の階級別は、此の如き生理的階級別にあらずして、經濟的階級別である。丘博士の所謂他の動物には見出すことの出來ぬ地主資本家などの如き懷手をしながら贅澤に暮す階級と然らざる階級との別を廢止したいと云ふのである。而して地主資本家など云ふ階級別は所謂生理的の階級別でないから、地主の子も資本家の子も乃至は勞働者の子も乞食の子も、生れ落ちた時には、資本家の子としての特徵もなければ、勞働者としての特徵もないのである。蟻の社會で兵蟻の階級に屬する者は、職蟻の階級に屬する者と比べると、生れ乍らにして頭が大きく、腮も長くて鋭いのであるが、人間社會では、別に資本家の子は頭が良くて、勞働者の子は手が特別に大きいと云ふやうな差異はない。蟻の社會では王侯宰相各々種ありだが、人間の社會には王侯宰相豈に種あらんやである。最も生れ落ちた子が皆平等であり同一であると云ふのではない。資本家の子にも才、不才、賢、不肖の差があると同時に、勞働者の子にも亦た才、不才、賢、不肖の差がある。然るに資本家の子に生れた者は、縱ひ不才不肖でも、過分の物質的資料を享受して十分なる敎育を受くることが出來るけれども、不幸にして勞働者の子に生れた者は、縱ひ才あり賢なる者と雖も、其の物質的境遇が不完全なる爲めに、成人しないで早くも夭死する者があり、たとひ成人しても十分なる敎育を受け得ぬために、其の天稟の才を發揮することが出來なくて、一生を車夫馬丁に過ごすと云ふのが常である。斯くて廣く世界の人心に慰安を與ふべき大宗敎家大文學者と爲り得たる者も、成長せずして早く死に去り、廣く人類の智見を開發すべき大學者大發明家と爲り得

たる者も、一生を學問以外研究以外の事に費して仕舞ふことと爲る。それ故社會主義は、是等の才、不才、賢、不肖の者共をして其の出發點を同うせしめ、斯くして以て、才ある者には遺憾なく其才を發揮せしめ、賢なる者には遺憾なく其智を磨かしめ、之に依つて人間の不平等をば益々有利に導かんとするのである。社會主義の主張が實現された時、果して此の如き良好の結果を生ずるや否やは、元より之を疑問とすることを得るも、而かも社會主義が人に才、不才、賢、不肖の別あるを否認する者に非ずして、寧ろ却て之を有利に助長せんとする者なることは、吾人の認めざるを得ざる所である。(而して國庫の負擔に依り次第に國民全般の義務教育の年限を擴張しつゝある現代の文明國は、此點に於いて正に社會主義の主張を徐々に採用しつゝある者である。)

若し夫れ社會主義を以て凡ての人に平等の所得を與へんとするものであると云ふが如きは、妄も亦た甚し。消費又は報酬の點に於いては、社會主義は勞働を標準とするもので即ち being to each according to his labour の形式を採り、共產主義は欲望を標準とし即ち to each according to his needs の形式を採るものである。前者は個々人に依つて大少の差異ある個人的所得を認め、後者は斯かる所得を認めざる所に、其の區別が存する。社會主義は凡ての人に平氣の報酬を與へんとするものなりなど云ひて之を攻擊するは、的なきに矢を放つも亦た甚しと謂ふべきである。尤も勞働と所得との平衡を如何にして保つかと云ふことは、社會主義にとつて一の重要なる研究問題であらう。しかし將來の實際上の細かい事柄は、到底彼等の豫言し得ぬ所である。これは今日の科學の力の及ばぬ所、たとひ現制維持者と雖も五十年後百年後の社會に於ける實際上の細かい事柄は矢張り之を豫言し能はぬので、獨り之を社會主義者に責むるは或は酷であるかも知れぬ。

七、ヘツケルの議論の批評＝其二

以上の平等論に對する誤解は最も廣く行はれて居ると思ふからして、之に對する駁論も可成り委しく紹介

して置いたが、此の一文も次第に長篇と爲つて來たから、以下の議論はなるべく簡單に片付けて置かうと思ふ。

次にヘッケルの第二段の議論に就いて批評せんに社會主義は決して人間社會に於ける生存競爭を否認せんとする者ではない。從て生れ出てたる人間の中、少からざる者が成長するを待たずして死亡すと云ふ事實は、社會主義の決して否認する所に非ず、又た否認せんと欲してする能はざるの事實である。生存競爭は凡ての生ある者を通じて到る處に行はれ、又た其物の性質上行はれざるを得ざるもので、此の競爭は永久不拔てあると云ふのが、進化論者の主張ではないか。然るに社會主義を實行すれば、生存競爭が止まるから宜しくないと云ふのは、彼等の自殺である。善惡可否の論は含いて、斯かる競爭にして若し永久不拔であるならば、社會主義の下に於いても同樣の競爭は必然に行はるべきものである。即ち召さるゝ者は多けれど、選ばるゝ者は僅かなりと云ふことは、ヘッケルの云ふが如く、質に凡ての生物に適存するの現象で、社會主義は敢て之を否認せんとするのではない。乍併之を生物進化の歷史に徵するに、動物は其の高等と爲るに從ふて、選ばるゝ者の數は次第に增加するのみならず、ヘッケルの云へるが如き殘酷無慈悲の生存競爭は、又た動物の高等と爲るに從ふて、同じ種の仲間に於いては次第に緩和さるゝに至るものである。而して社會主義は只だ此の進化の大勢に從ふて、人生の改良を計らんとするに外ならぬものである。蓋し一般動物の進化は、生理的生存競爭に本く自然的器官の發達に本いて始めて行はれる。然るに獨り人間に在つては、今も昔も其の生理的構造にさしたる變化はないが、否な或る部分の器官は次第に退化しつゝあるが、それにも拘らず、其の精神的乃至物質的文化は年を追ふて進化しつゝある。人間は牙や爪や翼の外に道具と機械と、即ち大砲や、軍艦や、汽車や、飛行機を作り得る動物である。是れ牙や爪や翼は次第に退化しても、其の精神的乃至物質的文化の益々進化して行く理由である。

最後にヘッケルの第三の議論に就いて一言し置かんに、前既に云ふが如く社會主義は決して生存競爭に本づく淘汰を否認せんとする者では無い。只だ社會主義は現時の社會組織の下に於ける惡淘汰を矯正し、淘汰の作用をして人類社會の進步發達を計るの目的に合致せしめんとするに過ぎぬ。蓋し自爲淘汰の結果として生ずることは、至善者の殘存 Survival of the best ではなくして、實は至適者の殘存 survival of the fittest に過ぎぬ。即ち只だ其時、其處に於ける外圍に最も適應したる者が殘存すと云ふだけのことで、人生の幸福、社會の進步と云ふ點より觀察する時は、其の殘存したる至適者が必しも至善者と云ふ譯では無い。良種と云へども石上に落ちたるものは枯れ、惡種と云へども豐土に播かれたものは繁殖するのである。加ふるに、人類社會に於いては、所謂自然淘汰の外に社會淘汰なるものがある。然るに現社會組織の下に於ける社會淘汰は、正直者と云ふのが馬鹿者と云ふのと同じ意味に響くの例に依つても分るが如く、弊害百出して到底人生の健全なる進步を計る所以と爲らないのである。否な一步を進めて云へば、丘博士の云はるゝが如く『懷手をしながら未來永刧働かずに食ふて行く』者が社會に居る爲めに人類社會では充分の淘汰が行はれぬので、此勢で進んだら丘博士の所謂人類の滅亡が來るのである。而して地主、金貸等は他の動物社會には見ることの出來ぬ現象であると、丘博士は云はるゝけれど、かの動物社會に於ける寄生動物は正に之に相當するもので、而して此の寄生動物と被寄生動物との關係が兩者の進化上に及ぼす惡影響は人の能く知る所である。故に社會主義者をして云はしめば、社會主義の組織の下に於いてこそ、始めて人生の目的に適合したる健全なる淘汰が行はれ、肉體上及び精神上に於いて最も長所を有すな所の個人即ち至善者の殘存を見るに至ると云ふのである。されば社會主義にして實現せらるゝも、社會は或る意味に於いて依然貴族的の社會たるを失はぬけれども、只だ等しく貴族的と云ふても、之は世襲的、經濟的性質のものでなくて、各個人の死と云へる平均の

勢力に依つて常に一定の範圍に制限さるべき性質のものと爲ると云ふのである。

八、補　言

以上吾人は專ら社會主義の辯護をしたる一學說を紹介した。社會主義が進化論と相容れぬと云ふ非難を受けつゝあるに對して、エンリコ・フェリーの說を紹介して敢て多少の辯護を試みた。然るに斯かる辯護は誤解を招き易い。吾人は本論の冒頭に萬一の誤解を防いで置きたいと思ふ。

今日は罪人の裁判にも、或る特別の場合を除くの外は、必ず辯護士なるものが附いて居て、其の犯罪の辯護をするのが文明國の常態である。極惡非道の人間で進んで辯護する者の無い時でも、所謂官選辯護士なるものが選定せられる。併し是等の罪人惡人を辯護する所の法學者が、凡て等しく罪人惡人の仲間であると云ふ譯でもなければ、是等の辯護士が犯罪や罪惡の益々廣く行はれんことを希望して居る譯でもない。只だ如何なる罪人惡人でも、强盜した者を殺人の罪に問ひ、窃盜した者を强姦の刑に處するが如きことを避けんとするが、今日の文明國の道德である。今ま社會主義は極端な平等を主張する者として進化論の學理の下に一も二もなく毆き付けられて居る。それを辯護したからとて、早くも吾人を目して彼は危險なる社會主義を奉ずるものなりとせらるるは、吾人の大に迷惑とする所である。辯護士も嘗て代言人と云つて居た頃は、矢張り强盜や窃盜の仲間に近い者の如く思はれて、一般社會から甚しく擯斥されて居た者である。されば吾人と雖も社會主義の罪を問ふ所の判事乃至檢事の地位に立つ方が、其の護辯士と爲るよりも差當つて都合の好い事を能く知つて居る。併し人々悅んで判事檢事の席に着き好んで杜選な論告や判決して居るに、誰も辯護人の側に立つ者がないから、已むなく吾人が暫く其席を占めただけの事である。而して殺人の嫌疑を受けた者を辯護したからと云つて、それは檢事の列擧せる證據が不十分だと云ふ事を證明したまでの事で、實際は其の嫌疑を受けた者が眞に人を殺したのかも知れぬ。ま

た縱ひ人を殺して居らぬ處が、窃盗位はして居るかも知れぬ。辯護士は何もそんな事にまで論證し及ばんとするては無い。況んや其人を至極の善人として世間に推賞せんと努力して居る譯ては決して無い。吾人は、社會主義が進化論と相容れぬと云ふ世上の議論の中て、甚しく間違つて居るものを非難しただけの事てある。實際に於いては、或は其他の點て大に衝突して居るかも知れぬ。況んや其他の方面に於いて果して如何に重大なる缺點あり謬想ありや否やに至つては、肯否定共に吾人の玆に全く與らぬ所てある。吾人は是等の點に就いて、嘗てヘッケルがダーウキンの進化論の討議より已むなく社會主義論を爲さざるを得ざるに至つた如き思ひ掛けなき運命に陷らん事を、豫め防禦して置きたいと思ふ者てある。

社會主義は到る所に於いて人氣が無い。從つて社會主義者の態度は眞劍てある。最新の科學的智識を以て其の武器と爲し、盛に思想界の戰闘に從事しつゝある然るに社會主義の攻撃は、之に反し到る所人氣が好い。從つて此の方面の論客は、動もすれば怠慢に陷り易い。藁人形を假想の敵に立てては、頻りに土俵の上て全勝を誇つて居る。それて拍手も起れば、祝儀も貰へる。そこて浮つかり油斷して、譯なく敵を倒した積りて居ても恐るべき眞の敵は最新の科學的智識て造り上げた巨砲巨彈を以て歩一歩攻め寄せつゝありとしたらば、どうてあらう。若し眞に社會主義が危險てあるならば、學問界思想界の此の現狀こそ眞に危險千萬てはあるまい乎。昔より兵法には敵を知るを以て第一として居る。少し眞面目に爲つて社會主義の眞相を理解するの工夫を仕なくては、二十世紀の此の思想界の大戰爭に勝利を得るなどは覺束なからう。不文の此の一論、もし多少にても世の有志者の刺戟と爲つたらば、それは余が望外の幸とする所てある。猶ほ終に臨んて、余は、井上博士が余の不遜の言を許容されん事を祈る者てある。

（明治四十五年一月初七稿）

古事記論

（太ノ安萬侶は根本史料として之を採らず）

文學博士　久米邦武

太ノ安萬侶は古事記の選錄者であるに拘らず、書記の根本史料として之を採つて居らぬ事は明白である。斯う言つたら從來古事記信者で之をば神道の經典の如くに、又安萬侶をば其祖師の如くに信じて居たものは流石に驚くも知れぬ、けれども安萬侶等が舍人親王の總裁の下に日本書紀を選定した事は、弘仁私記の序で明であるにも拘らず、其書紀中に古事記を取入れた痕迹の少しも發見出來ぬ事が何よりも其證據である。是程の事は既に百數十年來此書を國學者の中で盛に攻究したのだから、中には氣附くものもあるべきであるのに、今に至る迄猶ほ之を言ふものの無いのは如何したのか、私は之をこそ却つて驚くのである。惟ふに初より此書を取出して崇信を生じたのは、漢文を嫌ふ歌人の思想が其因を爲し、次第にそれに釣り込まれて注意か疎かになつたのであらう、此書の成立ちは安萬侶の序文が唯一の證據なのだけれど、何しろ其文が四六體の漢文で書かれて居るから、それに對する國文家の理解力が乏しく、只さへ注意が落ち誤想を生じて來て居るのに、今は舊來の陋習を破り、智識を世界に求むる時代となつた爲。何となく此書に對する信仰が段々薄く爲つて居る一方に、諸外國語を學ぶの多忙を致し漢文を讀む力が一般に薄らぎつゝある、其爲依然として舊來の誤謬を繼ぎ人をして愈よ批評判斷の混亂に陷らしめて居る樣子である、試に右樣の者の例として玆に代表者を擧げて見やう。

去る二月刊行の一雜誌に古事記に關する新說があつ

た。就いて見るに此書の成立ちを論じ、其序文を引いて、「以二和銅四年九月十八日一詔二臣安萬侶一、撰二録稗田阿禮所レ誦勅語舊辭一以獻上者」と記し、其前に阿禮の人物を許して、「年是二十八、爲レ人聰明、度レ目誦レ口、拂レ耳勒レ心」とあれば、阿禮は只聞いた事を暗記するに止まらず、一度見たものをも能く誦んで行く。それて天武天皇當時に在つては既に諸方に記錄もあれば皇室にも記錄の官吏が居り、紙も有れば筆も有る、其記錄を讀む學者も居る事故、何も特に暗誦者を求むる必要はないのだけれど、此の如く阿禮は格別偉らい人であるが故に關係させたものであらう。すれば安萬侶は安萬侶の造つた多くの材料から比較研究し、己れ一個の考に成る古事記を編纂したものであらう。て安萬侶はそれが餘り獨斷であるから、是は自己の意見ぢやない。古來よりの天皇の思召に從つたものだと附記し、幾分責任を免れんとして斯樣に序文を書いたのではなかろうかと疑はれる。それを德川時代では日本書紀は漢文で書いたから信用し難く、古事記は純粹の日本文だから大に信じて宜いといふ如き說があるけれども、見方によつてはそれの反對を立て得る餘地がある云々と書いて居る。如何にも新說ではあるが如何にも亦胡亂な解釋である、斯う迄無茶苦茶に此序文を混ぜ反されては安萬侶も散々になつて仕舞う。況して獨斷で著述したなどといふに至つては思ひもよらぬ事だ、玆に撰錄とあるは實は先づ校訂したといふ程の意味に過ぎぬのである、今其所以を述べやう。

元來安萬侶が極めて短日月に此書を撰錄した事は序文に明白である。即ち前にも有る如く、和銅四年九月十八日に詔を受け、翌五年正月廿八日に献上したのであるから其間僅々四ヶ月と十日といふ速成である。此短時日に其樣な編纂とか著述とかいふものの出來やう筈がない、之を出來ると思ふならば抑も修史事業を侮蔑したものと謂つつべきである。先年岩倉公の晩年に宮内省に學者を集め、二三ヶ月間で歷史を編輯させ樣と企てられた事のあつた時、私が其樣な速成の歷史が出來るものか、味噌でも六十日位では喰べられぬとい

つたら、同僚の重野、三浦等が失笑して、遂に其話は立消となつた。古事記は上中下三巻あり、毎巻約二萬字宛としても六萬字ある、之を毎月一巻宛作り上げて更に浄書する、そして之を丁寧に寫し直して序文を加へて献上したる迄の間を十日とすれば、左ばかりの時日間に何分の考を遊ばしむべき餘地のないは定まつて居る。是程の事は學者としては氣附くべき筈なのに今迄何人も、此處に氣附かず、其事を言つて居る者の無いのは可怪しい、是が即ち私の編錄は校訂といふ位といふ事の明證なのだ。

併し一般がまだ此點に氣附かぬ以上は、更に其序文に、安萬侶に詔し勅語舊辭を撰錄して献上せよとあり又其前に、天武天皇の阿禮に詔し、帝皇日繼及び先代舊辭を誦習せしむるとある。其撰錄と誦習との二の語義を玆に解釋しやう。誦習は讀習とは違う。分り易からしむべく短い例を引いて見るなら、佛僧が大般若經を轉讀するといへば、經巻を引繰り返して讀む姿をするに止まるが、それを諷誦するといふと、調子に掛け、木魚に和して誦することである。誦するや極めて早くとも尚ほ節、調子には掛つて居る。陀羅尼を誦するとは皆それを調子に掛けて暗誦するを言ふのだが、之を語るといふも亦誦するといふと同じ事、即ち矢張り扇や笏を打ち拍子取つて語る、後には琵琶又は三味線に調子を合せて語るのである。古い時代に在る語部なる者の語は如何様な形式かは知らねど、先づ今の祝詞の様な風に誦したものであろう。そして此處に誦習なる文字の使つてある如く、古事記は其語物の本であろう。いや斷じてそれに相違ない。

安萬侶の撰錄といふは、阿禮の誦習した語物の原本に就いて之を誦し乍ら、其誦し方の音調やら及び文字やらを修正し、中には删除改修する等の事もする、即ち今でいへば謠曲本に章をさすといふ様なことをしたに過ぎぬのだと思ふ。謠曲本には印本はなく、面々に寫してそれを控本とし、本式は暗誦して謠ひ方を教へる、其時文字に假名を附け、濁點を打ち、小節を記して傳習するものである。古事記の撰錄も亦此の如き

ものであつた。試に原文に就いて見れば直に知れる。先づ初に、「天地初發之時。於高天原成神名、天之御中主神」とある下に、「訓二高下一云二阿麻一、下效レ此」とあり、又「次天之常立神」の下に、「訓レ常云二登許一、訓レ立云二多知一」とあるが、是は皆昔の假名付である、扨て其次には「宇比知邇上神。次妹須比邇去神」とあるが、此上は音を「ニ」揚げ、去は「ニ」と急に短く切るを表はすもので、是が節の章をさすと同然の事になる。即ち此に施した譜で此書を暗誦し、語るに誤のない樣にと安萬侶の正したのを斯く選錄といつたものである。

今謠曲本に章を嚴重にさすには、必ず師匠と指し向ひて謠ひ乍ら、其控本の上にさして行くを法とする。其囑托を受けてさす場合にも、必ず自分の門人と相對して謠つてさして行く。それ故僅か一番を終るにも乾度五六日を要すると聞く。況して古事記の一卷は凡そ謠曲の四五番にも相當する程の字數だから、先づ一ヶ月の日數を要したてあろう。加之阿禮の誦習した原本には必ず蕪雜な所もあり、或は誤もあつたからして、それ等に一々删訂も加へねばならぬ筈である。それも

今の謠曲を例に比較すれば直に氣付く。羽衣の謠に「其名も月の色人」とあるが、其「色」は「宮」の字の草體を誤つたもの、今日或る流では「宮」と改正して居る。又安達ヶ原に「臭穢は滿ちてほうちやく」とあるが、其「く」は「う」の誤で「ほうちやう」即ち膨脹の事であろう。又花筐にも「りせうと申太子のいとけなくましますが父帝にそうし給ふやう」とあるけれど、漢の武帝の太子の名は「りせう」といはぬ。多分是は「李生といふ方士の童顏なるが武帝に奏する樣は」などいふ原文の斯う迄間違つたことであるべく、謠曲の書は久しく諷誦に任せて文字を訂正せなかつた所から此樣な誤謬を傳へて居る。此如く阿禮の誦習した原本も古い語て成立つて居るから、之を撰錄するに當つては此類の訂正をもした事てあろう、又其中には全然删り去つたものもあるてあろう。仲々撰錄といつても手數の多い事に思ふ。

が安萬侶の敏才なる。餘り多く時日を費さない便法

を取つた即。ち矢張り右の序の終に近く、「一句之中、交二用音訓一、或一事之內。全以ㇾ訓錄、即辭理難ㇾ見以ㇾ注明、意況易ㇾ解更非ㇾ注」とある如く。是等の點は頗る後の古事記信者の嘆稱する所だけれど、實は是が抑も此書の速成した所以てある。何故かといへば、それは唯暗誦の控本だから、耳に聞いてさへ誤がなくば、目に見る文字には拘泥を要せぬ。例へば謠曲の羽衣にも、「せうちやくきんくご孤雲の中」とあるが、文字て目に訴ふべき性質の物なら、必ず「笙笛琴箜篌孤雲の中」と書かなければなるまいが、謠ひ本てあるからには斯う書いた方が却て假名附を要せなくて便利てある。古事記も語物てあるからには矢張り其通て、初に在る「次國稚如二浮脂一而、久羅下那洲多陀用幣流之時、如二葦牙一、因二萌騰之物一而成神名、宇麻志阿斯訶備比古遲神」とある所には、「時」の下に「琉字以上十字以ㇾ音」と註し、「神」の下に「此神名以ㇾ音」と註しあるが如き、即ち前の「せうちやくきんくご」と同じ譯てある。若し是が耳を主とする語本てなくして書紀の如く、目て讀み行く文てあるなら是ては濟まぬ、文章には文字の並べ方を整へるのも修辭上美を加へる一助と爲るのだから、之を疎かにすべきてない、然るに上には「葦牙」と書き作ら、次の神名の處には「阿斯訶備」としてある如き、文字が不整頓てある。又其前に在る「高御產巢日神、神產巢日神」の如きも、是も文字の並べ方が六字と七字の對稱て片跛になつて居る、一方に「高御」と書くならば他方にも「神御」と書くべきてあるけれど、併し左樣書いては誦習するに當り、「ミ、ミ」と重るから却て御の一字を省く方が宜くなるので省いたのだ。是等も此書速成の一因てあろう。若し目て見る爲に文字の整頓を謀るならば、更に產巢日も實は巢の一字が重複ていけぬ、矢張り書紀の如く、「高皇產靈、神皇產靈」と書くを要する。此の如くに校訂し行くなら、又命といふ字も自然書紀の如く天皇を「尊」と書き其他を「命」と書き分くる必要を生ずべきだが、左樣すれば其處に日本武尊に「尊」、五瀨命には「命」と書くなどいふ疑問を生じ、色々事が六かしくなり行くべく、書紀には此等の穿鑿に

無論時日を費したてあろう。斯う見て來れば畢竟耳を主とする語物と目を主とする記錄との必然の相違からの事て、必ずしも安萬侶が速成の便法を取つたともいへぬ。それをも辨へず、古事記を偏信する歌人達は、「命」の字一字て押し通して居るのを古を存すなどといつて賞翫し居るけれど、古を存する點からいへば「ミコト」といひ「スメラミコト」といふ語も矢張り音假名を以てせなければならぬ。「ミコト」といふ語が必ずしも命といふ意義てはあるまい。然るに矢張り古事記には訓假名を使つて居るから「ミコト」といふ意義は紛はしくなり來る。すれば「尊」と「命」との書き別けをせぬとて左して得失もなく、言ふべき程の事もない譯てある。古事記には天照大神を「天照大御神」と書いてあるが、素盞男尊には只「大神」と書き「御」の字がない、が此「御」の字の有無が何等勝劣の意味に關係のない事は「迦毛大御神」とも書いてあるので證せられる、是等は唯語るに便なる儘にしたもので、其目に訴ふる文字の整頓に注意したものてない。

右て太ノ安萬侶の古事記の撰錄は阿禮の誦習した語本の校訂に過ぎず、從つて此書は語本て記錄の歷史ては無いといふ事が明瞭になつたてあろう。それに付いては尙ほ此撰錄が元明天皇の詔てあつたといふ事にも聯想して見なくてはならぬ。元明天皇は女帝て御座います。それ故、奈良朝成つて軈て和銅四年九月に此詔のあつたのは、當時天皇の下に橘三千代が政事を輔佐し、宮中の女官の勢力が盛てあつたから、女官達の先代舊事に通ずるを必要とし、此撰錄の命が安萬侶に下つたものと思ふのてある。即ち古事記は何處迄も只の物讀本てあるから、自ら修史の史料とは爲り得ぬものだ。

されぱこそ安萬侶は、此撰錄を自身て爲し乍ら、其自分等の手に成つた書記には此古事記を採用し居らぬのてある。尤も古事記同様の事は天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神を一所に擧げあるを主として數多その事實が擧り居るけれど、阿禮が誦習した勅語舊辭てはなくて其原本が各史料に在るを採錄したものてあるこ

とは、文章の相一致せないのでも證せられる。茲に安萬侶が修史館の史料中に採らなかつた一證を擧げやう。

古事記は序文にもある如く、帝皇日繼及び先代舊辭の二つの合はされたものだが、先代舊辭といふべき分は顯宗天皇迄てあつて、以後は帝皇日繼、即ち天皇の御系圖に止まつて居る、然るに書紀の欽明天皇紀に蘇我小姉君の腹に生れ給うた四男一女を記して其下に、中字で記し、一書の説を兩樣擧げ、其次に下の如く書いて居る。「帝王本紀多有二故事一、撰集之人、屢經二遷易一、後人習讀、以レ意刊改、傳寫既多、遂致二舛雜一、前後失レ次、兄弟參差、今則考二覈古今一、歸二其眞正一、一往難レ識者、且依レ一撰、而註詳二其異一、佗皆倣レ此」と、斯樣に念入に書いてあるが、扨て此本文と一書の二つは皆皇子皇女の順序や名に多少の違がある、即ち其二つは皇女を第三に書き、他の一つは第二に書いてある、處て古事記に至つては又此三者と名も違ひ、且つ其順序も皇女を第四と書いてある。即ち此處には古事記を引用して居らぬ事が明々白々て、又以て其舍人親王總裁の下の修史館には此書が採用されなかつた確證である、

それも其筈物語本の史料とされぬ事は獨り此時に限らぬ、後世でも伊勢物語や源氏物語では根本史料とはならん、今昔物語、宇治拾遺物語は勿論、平家物語でも太平記でも、乃至淨瑠璃本となつては尚更の事決して史料には充てられぬ、謠曲の如きも猿樂法師などいふ下賤の者の演ずる謠ひ本であるから、歷史を勝手に改作してある、例へば養老の謠の如き、事實は養老元年に美濃の多藝郡の鑛泉に行があつので、それが年號と迄爲つたといふ故事に基くものだけれど、謠曲には場所を美濃の本巣の郡とし、時を雄略天皇の時として居る程てある、斯樣な譯て如何に文學好の者といつて之もを史料には採らぬのてあるが、藤原氏以來皇后の威勢宮中に盛になつたのと、その後に又武家時代に移り、文盲な武士の世の中と爲つて以來、それ等の物語て歷史思想を充たす婦人や武士の誦習す者が遂には眞の歷史の如くに思ひ做さるゝ。それと共に又古い語部の語つた物語が自然に行はれなくなつて久しくなつた所

から、その語本なる性質も忘れられる等、それや此れやの關係から、後に至つては書紀の外に此古事記が參考すべき好史料として取出され、遂に漢文嫌ひの歌人の嗜好に投合し、果ては此百五十年間書紀以上の古史の如くに尊崇さるゝに至り、今日に至るも猶ほ何人もその元の物語本あるに氣付かぬ次第である。從つて安萬侶の序文さへ其解釋を誤られて居る。尙ほ玆にそれを辯じて置かう。

彼の序文に天武天皇の詔を擧げ「朕聞、諸家之所レ賚、帝紀及本辭、既違二正實一、多加二虛僞一、當今之時、不レ改二其失一、未レ經二幾年一、其旨欲レ滅、斯乃邦家經緯、王化之鴻基焉、故惟撰錄、討二覈舊辭一、削レ僞定レ實、欲レ流二後葉一、時有二舍人一、姓稗田、名阿禮」とある、一寸見ると此詔書は、阿禮が誦習せしめられた帝皇日繼及び先代舊辭の爲に出たものらしくも見ゆるけれど、阿禮に賜はつたものは別に敕語といつてある。敕語と詔書とは是も物語と記錄との相違同樣に違つたものである。然らば此詔書はといふに、天皇の十年三月に大極殿に御して川島皇子、忍壁皇子以下十二人に詔し、「令レ定二帝紀及上古諸事一、大嶋(中臣)、子首(平群)自執レ筆以錄焉」とあるそれである。即ち書紀を見るに、此中臣大嶋、平群子首の筆に成つた分は神代の卷から天武天皇紀の上卷迄であり、そして前文に在る帝紀及び上古諸事は即ち帝皇日繼、先代舊辭の代語であるからすれば、此詔書は日本書紀を編ませる爲に發せられたもので、阿禮には別に詔書はなく、只天皇の敕語のみによつて命ぜられて居る事が殆んど明白である。然らずして若しも此詔書が阿禮に賜はつた敕語と一とするなら、斯樣な詔書まで出て成立つたものが、天武崩御の後卅五年間も其儘に擱かれ、元明天皇に至つて漸く取出さるゝも不都合である。又天武天皇がそれ程此誦習を重んぜられたとせば、彼の欽明の皇子女を書紀には何故に古事記を棄てて他の三書のみを擧げ辯解して居るか、特に安萬侶は其史館に筆を執り乍ら、斯く迄大切な古事記をそれに採用せぬ譯にもなる。其樣な胡亂な事は無い筈である、それ故此詔は、日本書紀編輯の爲に發せ

られた事に極まつて居る。

古事記の反對に日本書紀は非常に長い年代を費して撰定されて居るが、餘りに長い爲に、念入り過ぎて書損じを生じ、却て非難が湧き出て居る。此編纂の年紀をかい撮んでいへば、應神、仁德の朝に對岸の高麗、百濟の修史に引續ぎ、我國にも修史事業を始められたと思ふが、其兩國の歷史の速成て言語同斷の惡史になつたに反し、當時の日本は流石に愼重の態度を取り、輕々しくは撰定せず、履仲帝の時より史氏をして史料を集めさせられ、推古帝の時に至り、聖德太子總裁の下に編輯を始められたけれど、太子の薨去により中止した。それを前にも述べた如く天武天皇の朝に至り、川島王子の下に中臣大島、平群子首等が筆を執つて書いたのが神代から天武帝紀の上卷迄てある。其後持統帝の時に十八氏に詔して祖先の墓記を奉らしめられ、和銅に至り此古事記を太安萬侶の撰錄し奉つた翌々七年に、紀淸人、三宅藤麿に詔して撰錄させられたのが、天武天皇二年紀の下卷から持統天皇紀て、是て三十卷が完成した。尙ほ原書に當つて見ると、崇神帝紀迄は既に聖德太子の時に原稿が出來て居たと思はるる筋がある。それは聖德太子の生立を用明帝紀と推古帝紀とに重複して書いてあるが、前者は書振が着實てあるに對し後者は靈異を交えてあるを見ると、此方は天武天皇の時に集めた材料かと思ふ。即ち是て考へると、書紀の初から崇神帝迄は着實てあつたのを、天武帝の時大島子首等が文筆の才を競ひ頗る修辭を加へたと疑はるる、夫の神武帝紀が神代の卷に接して俄に修まつた漢文の語句と爲り、全然淸魏人擬ひの文調を以て、「運屬二鴻荒一時鍾二草昧一故蒙以養レ正、治二此西偏一皇祖皇考、乃神乃聖、積慶、重暉、多歷二年所一」などとあるは、如何にしても其時神武天皇が諸兄達に仰せられた話としは承認し難く、又國語ては稱せられぬのてある。全く記者の修飾に相違ない。斯樣な所が漢文嫌の國學家から特に痛く嫌はるゝ所てある。次には又「是年也太歲甲寅、其年冬十月丁己朔、辛酉、天皇帥二諸子一」と書き、是迄何萬年かの神代てあつたものを俄に立派な曆

を掲げて記し出し、紀元はそれより始まつて居るが、是は必ず天武天皇の時に推暦して書き入れたものに相違ない。其他後の雄略天皇の頃から支那の隋唐の歴史に在る文を、其儘生呑活剝して擧げた處も幾個所もあるけれど、是も聖德太子の時に出來たものでない事は時代を考へれば明白の事で、同じく天武天皇の時に書いたものに相違ない、此様な修飾より始めて前に述べた如く文字の階級や整理などの詮議に年月を徒費したものなるべく、そして其徒費した丈益々欠點を生じ非難を受けるのである、文を重んずる記錄となると此の如き弊を生ずるものである。之を要するに、此天武天皇の時書き定めた際に、他の異なれる材料を一所に載錄したもので、本文より一字下に書いてあるのが其原文と思はれる。養老四年に至つて舍人親王が詔を奉じ、太安萬侶等が撰して功を卒り奉つた時は、既に和銅年中に持統帝紀迄編輯されて三千卷を完成した後であるから、安萬侶等は更に之を校正した迄である。即ち夫の註解に書いてある校註は安萬侶のが筆といつて然るべきであるが校註に一つも古事記を載錄してないのを見れば、古事記其時の修史館に採用されなかつた書物で、それを奉敕撰錄した安萬侶が、歷史の根本史料として認めなかつた事は、明々白々少しも疑を容るるの餘地がない。是迄無數の學者が、中には有名なる大學者もあるに拘らず、少しも此處に注意の及ばぬこそ實に怪訝に堪えぬ事といふべきであろう。

運命と自己

金子筑水

第一

春が來て、都の空が花に曇るやうな時節になれば、氣はおのづから浮きたつてくる。花も散つて青葉の時節になれば、氣分もまたおのづから變つてゆく。四季に變る人ごゝろ、月々に動いて熄まない我々の氣分、そこに人間の生活が有るのだといふ。成程さうかもしれない。さうでないとは斷言し得られない。

無邪氣な夢のやうな少年時代から、百花一時に綻びそめるやうな青春の時代、すべてがロマンチックに華やかに、所謂現實の苦痛や悲哀さへも、華やかな氣分の中に包まれてしまふ。若い血潮と燃えるやうな精神とは、すべてを濃艶な色彩に化さなければ已まない。けれども花の盛りは短い。三十代から四十代までの間が、如何にもあわたゞしい。四十代から五十代、肉體も精神も次第に老境に近づいて行く。華やかなロマンチックな精神が衰へて、次第にかたくなゝ冷たい氣分が增して行く。前途はもはや幾何もない。心細い賴(たより)少なの感じが、しうねく附きまとつてゆく。運命の斯うした成行きを、我々は如何ともすることが出來ない。たゞ默々として、其の指揮に盲從して行くより外、どうすることも出來ない。

そこが人生だ。そのどうすることも出來ない所が、我々の運命だ。青春の花の盛りも運命であれば、所謂肉體の秋も運命である。さうした運命に引廻されて、さうした運命を味つて行くが、人間の生活であるといふ。如何にもさうかも知れない。さうでないとは斷言出來ない。

甚だ遲ればせではあるが、自分は先頃アンドレエフ

の『人間の一生』といふ脚本を讀んだ。藝術品としては、此の人の他の作ほど深い興味は覺えなかつたが、廣く人間の一生を此の作者が如何に觀てゐるかといふ點に一種の興味を感じた。論文のやうな此の作は、さま〳〵な事柄を考へさせた。就中人間の運命に就いて、さま〳〵な暗示を與へた。

元來此の作者は、好んで一種神秘な人間の運命、人生の裡面に隱れて、而も人生をあやつゝてゐる恐ろしい不可思議な運命を描くところが長所であると聞いてゐるが、こゝに取出した『人間の一生』も、矢張其の種類の運命を描いた作である。そして此の作中の人物には、ひとりも名前が附けてない。主人公もたゞ男としてあり、其の外の登場人物にも、更に名前が無い。廣く人間といふ者の一生を描いたシムボリカルな作だといふことを思はせる。

全體の五幕五場の中に、人間一代の運命の縮圖が描かれてゐる。第一は人間の誕生、第二が結婚時代、第三中年の盛運時代、第四初老の悲運時代、第五最後の死。勿論各時代の間の連續が缺けてゐるため、普通の劇としては、餘りにシムボリカルに、餘りに露骨に過ぎて、興味が纒らない。それにも係らず、人間一代の運命を、全體として感じさせやうとしたところが、此の劇の大膽な（併しやゝ無理な）試みである。

先づ大序（プロローグ）の中に、人生をあやつゝてゐる不可思議な運命が、シムボリカルに描かれてゐる。暗黑な舞臺の上に、うす黑い着物を着けた惡魔のやうな人間のやうな神のやうな恐ろしげな者がつゝ立つてゐる。勿論運命のシムボルである。彼れは人をぞつとさせるやうな悽愴たる聲を放つて、先づ人間一代の運命を宣言する。闇黑（やみ）から闇黑（やみ）の中に消去つて行くところを知らないが、人間一代の運命ではないか。不可思議な運命の力によつて、暗黑の虚無世界から、俄（にはか）にさゝやかな燈火が輝く。それが現世に產れてた人間ではないか。彼れはいづこより來たつていづこに行くかを知らない。寸前はすべて暗黑である。短い〳〵現世の苦樂を味つて彼れはやがて再び闇黑の裡に消失せてしまふ。『人間は

すべてさういふ風に死んで行く。暗夜から現はれて暗夜に返へり、無限の時の裡に跡かたもなく消えてしまふ。」それが人間の生涯ではないかと。

作者が如何に人生全體を觀てゐるかゞ、ほゞ察せられる。

第一主人公誕生の場に於ては、舞臺の蔭に產婦の苦悶を聞かせて、親類緣者が心配してゐる不安な心持が描かれてゐる。苦悶の呻吟が熄んで、出產のために、母親が亡くなつてしまふといふやうな事が寫されてゐる。

第二の幕に於ては、主人公の心身が立派に發育して、若い美しい妻君と、最はやさゝやかながら家庭を造つてゐる。互に靑春の花の盛りの甘い蜜を甞めながらも、未だ家庭の土臺が据はつてゐない。赤貧洗ふが如き境遇に、二人は深いトイキをついてゐる。戀と貧と、それが彼等の運命であつた。もはや食ふべき何ものも無いときは、キッスを以て、互に間に合はせておく。二人は未來の盛運を夢想して、現在の苦を忘れてゐる。

第三幕　果たして彼等は盛運に達した。けれども彼等はもはや初老の年輩に達してゐる。きらびやかな住居と數多い召使、界隈の羨望の中心と成つてゐる。二人は傲然として世間を見下してゐる。舞踏會が開かれて、多數の客人が招待される。招かれた客人は、それを無上の榮譽に感じてゐる。主人公の產落ちから、絕えず其の後に彼の恐ろしい運命のシムボルが立つてゐる。彼れは燈された蠟燭を手に持つてゐる。蠟燭の光は、今を盛りに燃えてゐる。盛んに燃えてはゐるが、もはや其れ以上には燃えない。そり〳〵明滅する。

第四幕　二人の頭の毛は、もはや餘程白くなつてきた。住居だけは前と同じ廣やかな住居ではあるが、きらびやかな裝飾や道具はすべて取去られてしまつた。がらんとした空屋のやうな冷めたい中に、二人は衰へて行くすべての運命を喞つてゐる。一人ぼつちの愛兒が死の床に就いてゐる。二人は如何に苦慮しても、生命を取りとめる力が無い。雨風や鼠だけが、時を得顏に、此の淋しい家を賑はしてゐる。

第五幕 運命のシュボルが掲げてゐる蠟燭は最はや殘少なに成つてきた。細々した光が、かすかに暗黑の中に認められる。衰去つた見すぼらしい主人公は、見供や妻君に死にわかれて、汚い眞闇な居酒屋の片隅にうごめいてゐる。同じやうな醉ひどれの多數が、寄つてたかつて、彼れを嘲る、なぶる。地獄のやうな恐ろしい光景がそこに畫かれてゐる。彼れはよろ〳〵と立上つて、遂に其の場に倒れてしまふ。同時に運命のシュボルが持つてゐた蠟燭が燃盡きてしまふ。四邊がだん〳〵暗くなつて行く。醉ひどれのわめき叫ぶ聲が恐ろしげに聞こえる。やがて世界は深い沈默の中に無くなつてしまふ。

アンドレエフは人間の一生をさういふ風に觀じてゐる。短く果敢ない現世に於て、同じく短く果敢ない苦樂や浮沈を味はつて、遂にまた闇黑の裡に沒してしまふ、それが人間の生活だと觀じてゐる。

果たしてそれが人間の眞の生活であらうか。

第二

四季と共に移ろひ行く人ごゝろ、歲と共に變つて行く我々の生活、不可思議な運命に支配されて、運命の指圖のまゝに變遷流轉して行く世相、それが人間の生活であることは、何人も疑ふことの出來ない事實である。アンドレエフが掲げた『人間の一生』に對して、勿論我々は、肅然として襟を正さゞるを得ない。それが人間の一生であり、それが我々の運命であることに、勿論深い同感を禁じ得ない。若い血潮のめぐつてゐる時期も束の間、あとはだん〳〵と衰へて行く淋しい運命、我々の一生が、畢竟さうしたまはりあはせに外ならないことは、如何に否定しやうと思つても、どうすることも出來ない嚴格な事實である。

どうすることも出來ない嚴格な事實であるから、さうした運命が、畢竟人間の生活だと諦めるより外に仕方がない、人生は結局さうしたものではないかと念じやうとすると、さて此の結局の觀かたに至つて、不思議にも我々は、一種の深い々々物足らなさを感じてくる。我々の一生は、結局さうした運命とは知りながら

も、どうもさうばかりではない、それぱかりが我々の生活ではない、といふ深い々々不滿の念を禁じ得ない。そして此の不滿の念には、更に深い根抵が有る。

アンドレエフが掲げた人間の一生、其の外之れに類似の觀かたは、勿論それが正しい判斷ではあるが、餘りに正しすぎて、又は餘りに當前すぎて、却つて我々の生活の本意を閑却し去つた嫌ひはないか。人生に春夏秋冬が有り、現世は短い榮枯盛衰の舞臺であるといふやうな觀察は、古來餘りに普通な觀察で、又平凡淺薄な樂天觀などに對してこそ効力もあれ、全體の觀察が、まだ現實の眞相に徹底してゐない嫌ひはないか。

現實々々といふ狙ひが、動もすれば上すべりがして、徒に現實の表面觀察又は外面觀察に終つてしまふ如く、人間の必然的運命を指して、それが人生だと敎へるは、現實を表面的に又は外面的に觀察した結果で、まだ裡面の複雜な内生活に徹底してゐない嫌ひはないか。餘りに當りまへすぎた外面觀察に終つて、肝腎の内面觀察に及ばない嫌ひはないか。

どうすることも出來ない必然的運命が、我々人類の生活であるには相違ないが、一層深く現實の眞相に就いて觀察すると、さうした必然的運命は、少なくとも我々の全生活ではない。我々の全生活には、もつと違つた意義が有る。一ト口に人間を運命やチャンスの奴隸といへばそれまでゝあるが、勿論運命やチャンスに支配されながらも、たゞ運命やチャンスに引かれて行くまゝを、ジッと眺めたり味はつたりしてゐるばかりが、人間の全生活とは言へない。幸か不幸か、純消極的にジッと構へてゐられないが、人間の特殊な運命である。必然的運命やチャンスに支配されながらも、尙さういふ境遇に於て、さま／＼な欲望を懷いたり、欲望の實現を果たさうとしたりするが、我々の現實生活ではないか。群がり來たる欲望を禁止したり、欲望の實現を斷念したりして、たゞ運命に引かれて行くまゝに、瞑目して其の成行きを味はふといふが如きは、初から人間には不可能な態度ではないか。運命やチャンスに支配されながらも、尙其の裡に在つて、曲りなり

にも自己の小天地を造らうとするところに、現實生活の意味が汲みとられるではないか。

押しつめて言へば、我々に取つてどうすることも出來ない絶對的運命は、嚴格な意味に於ての我々の生活でない。歲と共に老ひくちて行くといふこと、老ひくちては、我々は遂に死んでしまふといふこと、そんな事は、殊更我々の生活の意義とするに足りない。老ひさらばひながらも、それ相應に自分を働かせ、死に瀕しながらも、尙自分の個性を光らせるところに、我々の眞の生活が存する。毫末も自分を働かせ又は自分を主張しないところに、果たして生活といふものが存在し得るであらうか。

我々は充分此の點を明らかにしたい。アンドレエフが描いた貧賤富貴の運命に就いて考へて見る。世の富貴貧賤は、半ばは運命やチャンスの働きである。純粹に運命やチャンスの働きで出來あがつた富貴や貧賤は、それが自分の力で出來あがつたものでないかぎり、自分には縁遠い偶然な運命に過ぎない。そこには嚴格な意味で謂ふ自分の生活といふものが無い。たゞ偶然な運命が有るばかりだ。若しまた貧賤富貴が、假令運命やチャンスが働きながらも、尙自分の力によつて招かれた境遇であるとすれば、さういふ富貴や貧賤こそ、初めて自分の生活を標章してゐるものと言はれやう。而もたゞ自分の生活を標章してゐるに止まつて、其等の富貴や貧賤や、まだ自分の生活其のものではない。我々は、此等外的な富貴や貧賤の裡面に、深いそして豐な生活の流れを見出だすではないか。アンドレエフが描いた主人公は、如何にして富貴の境に達したか、又如何にして悲慘な境遇に沈んだか。彼れは如何なる個性を如何やうに働かせて、富貴又は貧賤の境に達したか。彼れが個性を働かせて、或は富貴を得、或は悲慘な境遇に沈んだとき、彼れは現實の榮枯盛衰について、どんな深い又は淺い情味を味はつたか。個性の複雜な變遷推移について、彼れは自我の中心に、どんな動搖波瀾を感じたか。自我生活の深い々々奥底に、彼れは無限の變遷活動を感じなかつたか。自分を働かせ

ての斯ういふ內的經驗こそ、眞に自分の生活であつて、他人の生活でない。嚴格な意味で生活といへば、外的な事件や境遇ではなくして、さういふ事件や境遇のもとに、自分を働かせ又は自分を主張することではないか。さういふ生活を除いて、果たして我々に別種な生活が有るであらうか。

斯やうに考へると、世間に有りふれた人生の觀かた、即ちどうすることも出來ない運命が人生だといふやうな觀かたは、外的な運命やチャンスにのみ重きを置いて、肝腎の內面生活其のものを閑却した觀かたではないか。外的な運命やチャンスは、嚴格な意味に於ての我々の生活でない。其等は、我々の力の及ばない、どうすることも出來ない運命ではないか。どうすることも出來ない運命の中に、自分の生活を見出ださうとするが、そもそも人間の果敢ない空想ではないか。

人生はたゞ運命に引かれて行くもの、我々はたゞ運命の奴隷だといふやうな觀察は、結局現實生活の實相を盡したものとは言はれない。勿論さういふ觀察が誤だとは言はれないが、現實生活の實相に關する觀かたとしては、エムファシスの置きどころが間違つてゐる。斯ういふ觀かたは、現實の外面觀察又は皮相の觀察であつて、まだ其の內面に徹底してゐない。生活情調を簡單に苦樂の二語を以て形容することが間違つてゐるごとく、人生全體を單に運命と解釋するは、複雜多樣な內面生活を等閑視するものと言はなければならぬ。

第三

勿論我々は、無數のどうすることも出來ない運命やチャンスに取圍まれてゐる。さういふ運命やチャンスに取圍まれてゐることは、我々の生活に取つて、眞に大事中の大事であるに相違ない。從つて斯ういふ大事が我々の內面生活に及ぼす影響は、眞に深く且大きいと言はなければならぬ。否、斯ういふ運命に支配されることが、それみづから、我々の內面生活の最も重要な部分を成してゐる。春夏秋冬榮枯盛衰といふやうな必然的運命が無かつたならば、人間の生活は、如何に荒れすさんだ殺風景なものとなるであらうか。運命や

チャンスを味はつて行くことが、それみづから、內面生活の重要な部分を成してゐることは、初から明白な事實である。我々は決して其の點を疑ふのではない。のみならず、自然とか自然の運命とか、すべてさういふ方面に重きを置いてきた近代文明が、我々をして、おのづから其の方面に重きを置かしめるに至つたは、これもまた必然な成行きに違ひない。非常に擴張された客觀生活のために、主觀生活が殆ど全く犧牲にされた今日、我々の內面生活の殆ど全部が、さながら運命やチャンスの觀照であるごとく思はれるは、これもまた眞に已むを得ない必然の成行きであらう。我々は必しも其の點を疑ふのではない。

　けれども運命やチャンスは、我々の生活の全體ではなく、眞生活は、むしろ運命やチャンスの外に在るとすれば、ひとへに外的な運命やチャンスにのみ着眼せず、翻つて自己の內面生活の中に、眞の生活を見出だすべきではないか。我々は、どうすることも出來ない生活から、再びどうかすることの出來る生活に還へるべきではないか。我々は、其の點にエムフアシスを置かうとするに過ぎない。

帝國財政の現狀

片岡直溫

　帝國財政の前途について話せとの御注文であるけれども、財政の前途を論ずるには先づ財政の現狀を知らなくてはならぬ。財政の現狀が分れば、前途の如何は何人でも想像がつく譯である。それで私は玆に主として財政の現狀についてお話して見やうと思ふ。

　財政の現狀を知るには差當つて、本年度の豫算の實況を調べることが必要であらうと思ふ。先日私は大阪の銀行集會所に於て豫算に對する批評をやつたのであ

るが、今其れを土臺として、財政の現狀に論及して見ませう。

私は先日來議會に於て本年度の豫算に就て當局者に質問を試み、尙自己の平素懸念して居る點に對して、改善を求めたいといふ趣旨を以て、微力を盡して見たのであるが、何分微力且つ少數の味方であつて何等益する所もなかつた。然し此豫算の將來に就ては、經濟界に仕事をして居る方々は勿論、一般國民も亦餘程注意を拂ふ必要があらうと考へて居るのである、

御承知の通り日清戰爭の前、即ち明治二十六年に於ては、我國の歲出は八千四百餘萬圓であつた、而して日露戰爭の前即ち明治三十六年に於ては二億四千九百餘萬圓であつた、而して明治四十五年度の總豫算は五億七千二百餘萬圓、之に近頃新聞紙上に現はれて居る追加豫算の要求がある。戰爭以來國費の膨脹を來した事は實に甚しきもので、國債費に於ては三十六年は三千六百餘萬圓であつたが之が今や一億四千二百餘萬圓、軍事に於ては三十六年に八千二百餘萬圓であつたものが四十五年の豫算には一億八千六百餘萬圓、丁度一億四百萬餘圓を增加して居る、行政費が一億三千萬圓であつたのが二億四千四百餘萬圓になつて居る、如此國運の隆盛と共に國費の膨脹を來すといふ事は、一面から見れば喜ぶべき點もあるが、國費膨張の割合には國力の增進を來しては居るまいと私は考へるのである、抑も日露戰爭に於て、一時に多額の外債を起した時に、若し戰後の經營宜きを失へば、丁度戰爭當時にその戰費を內國に於て調達したのと、苦痛の度を同うする事の結果になるだらうと私は懸念して居たのである。處が今や不幸にして將にその狀況を目前に見なければならぬ始末になつて來た。それはこの明治四十五年度の豫算について話す前に、先づ正貨流出の狀況を述べて置いた方が、捷徑だろうと思ふ。明治三十九年から同四十四年まで……尤も四十四年は關税改正の爲に、見越輸入が非常に多かつた年であるから之を除いて……四十三年までの五ヶ年の平均輸出入を見ると、輸出平均は四億二千一百十九萬九百八十九圓輸入平均が四億

四千百五十八萬八千三百十三圓であつて、平均輸入超過が二千三十九萬七千三百二十四圓、即ち二千餘萬圓どいふものは貿易上に於て輸入超過といふ事になつて居る。昨年の如きは六千六百餘萬圓の輸入超過を見て居るが、之は見越輸入の場合であるから之を取除いて見た所で左様である、この外に公債の元利金、それから政府が直接に軍事に關係し、其他政府必要の物品を買入れて直接正貨を拂ふ金額を、政府へ要求して尋ねて見ると、公債の利子、公債の利子といつて居たが國債市債銀行會社の社債を合せて七千二百七十六萬千六百六十八圓、それに内國債にして外國人の手に持つて居つて、常に正金で拂はなければならぬ利子を加へると四十三年の如き一億二千八百七十八萬九千三百三十圓之に政府直接の購入品に對して支拂つた金が千七百八十八萬七千二十四圓、合計一億四千六百六十七萬六千三百五十四圓で、之を三十九年から四十四年度までずつと平均して見ると貿易の作用に依るものゝ外に正金の出るものが一億四千四百八十二萬七千二百四圓といふ事になつて居る。て之は毎年一様になつて居ぬ所を見ると、公債借換の勘定が多少之に入つて居ると見へる。故に之より殖へる事はあるまいと考へる、この一億四千四百八十萬圓に貿易の結果、即ち輸入超過となる二千萬圓を加へると一億六千四百萬餘圓程の金は先づ出るといふ勘定になる、此點は將來に於て餘程考へものであると私は思ふ。それと同時に、又日本の歳入歳出の組立をする上に於て餘程關係を持つて來る、今正金の日本銀行に於ける正貨準備並に政府の懐合に在るといふものは合計三億七千二百萬圓、之に對して今の數字を擧げて大藏大臣に將來の政策に就て質して見ると、大藏大臣は正貨準備なるものは各國々の兌換の三分の一若くは四分の一を以てして居のである、日本に於ては三億七千二百萬圓も現在あるのであるから常に流通して居る通貨以上になる、故に此所二三年間別に焦慮を要せずとかう答へて居るのであるが、實はこの點は議會の本會に於て一寸述べた迄で餘り深くは言はなかつたのである、何故なれば政府の持つて居る

所の一億五千萬圓餘の金は、既に支拂を約束して居る所の利子、並に政府の註文をして居る品物の代金に拂つて了へば、後は殘り少ななものである、而して帳面上から云へばあるが之が支拂は定つて居つてまだ支拂はぬといふだけて、實をいへば甚だ心細い事てある、如斯事柄を公けに議會に於て堂々と述べる事は、却て吾國の爲に餘り有益な事ては無いと思つて、故らに略して唯その意味丈け述べたのてあるが、今度東京市債が成立したやうてあるから、直に正貨準備の補充も出來今目前に兎や角といふ程の懸念は生ぜぬかも知れぬが我國の財政計畫そのものは、即ち財政の基礎は甚だ不鞏固てあるといふ事の懸念を與へれば、先づ當分此外に外債は成立しないと見て置かなければならぬのてある。今日の東京市債の如きも如此出來榮を以て誇るに足りるかといへば、實は日露戰爭後數年を經過した今日と、その戰爭の終るや否やに出來た關西鐵道の四朱五厘手取九十二圓のものに比較して見ると、餘程退歩した勘定になつて居る、かやうな有樣て一面ては一向に輸入が減じない、輸出が殖へない、から云ふ事て行つたなれば我國民は先に私がいつた、戰爭當時に於て戰費を内國に調達したのと仝一の苦痛を戰爭後の數年に於て見るといふ悲境に陷るのてはあるまいかと思ふ。

本年の豫算の大體に就いては大藏大臣並に總理大臣の說明に依つても、均衡を保つ事にしたといふ事、それから緊縮の方針即ち入るを量つて出づるを制するといふ方針を採つたといふ事が、當局者の豫算に對する根本說明てある、然るにこの豫算をずッと見るとその歲入歲出の均衡を保つたといふ中に於て、鐵道に於て四千萬圓、臺灣に於て二百五十八萬圓、治水費に於て八百九十八萬圓、朝鮮事業費に對して二千四百九十萬圓、合計七千六百四十九萬圓といふものは公債若くは借入金に依るといふことになつて居る。即ち歲出歲入は極めて鞏固に、歲入の如きは所謂確實なるものを主としたといふその下に於て、借入金が歲入の中に如此見てある、之に加ふるに昨年中の豫算に於ける鐵道作業費

五千萬圓中、その全金を以て支拂つた殘りの四千萬圓は大藏證券を發行し以て作業費に宛てゝある、その大藏證券は期限到來に從つて借換をして行かなければならぬ、然らば之に加るにこの四千萬圓といふものは矢張り本年中に大藏證券を募るか、又公債を募るかせなければ、歩みが取れないものになつて居るのであるそれから入るを量つて出づるを制するといふ事にしたといふその下に、鐵道に對して五千五百八十一萬圓、朝鮮鐵道に於て百九十萬圓、臺灣の打狗築港に於て千二百七十八萬圓、基隆に五百十七萬圓、臺灣縱貫鐵道に於て三十萬圓、林野費に於て三十六萬圓、京都大學に於て二萬七千七百圓、合計七千六百三十六萬圓といふものは之は繼續費の繰上追加てある、一方に緊縮をしたといつて而してこれだけのものが更に繰上追加をしてあるのてある、それ故にこの繰上をした結果、他の特別會計の全般に亘つて、將來缺陷を生ずる原因となるものと考へなくてはならぬ。

そことて私の最も懸念をしたのは本年は假りに之て宜しいとした所て、四十六年度に於ける即ち繼續費、特別會計の上に於て、少なからざる歳入の缺陷を生ずるのてあるから、之はどう計畫をするかといふ事を確めると、來年の事はどうも分らぬといふ事てある、來年の事は分らぬと云つても既に繼續年度割といふものは定まり特別會計といふものは既に定つて居る以上は、今年の事だけを以て足れりといふ事は出來ないから、明年以後に於ける凡そ政府の見込といふものを示さなければ、本年の豫算に協贊を與ふべきや否やの決心がつかない、之を出すのは政府の責任てあらうといふ事を以て政府に迫ると、政府は「出來たら差上げます」といふ譯だ。「出來たら差上げる」といふ事は怪しからぬ話てあつて、既に繼續費、特別會計等に對して十一年計畫といふものが先に出來て居る、その十一年計畫を本年の豫算に於てはすつかり打毀はしてあるから、その將來はどう云ふ事をするといふ事を定めずして、而して本年だけの協贊を求むるといふ事は甚だ無理な注文てある、又「出來たら差上げる」といふ事は國政を料

理ずる人として甚だ不親切な仕方であるといふ事を以て攻めたら、成るべく早くして差出すといふのが終りてあつた。而して先づその提出するものを見なければならぬが、この缺陷を生ずるその金額は分らぬが、併し缺陷を生ずるといふ事になつたらどうする、之は成るべく缺陷を生ぜぬやうに辻褄を合すつもりである、合すといふ事を仰つしやるがどういふ事になさるかといふと、その結局はどうも合はなければ仕方が無い、事業を繰延べるか然らざれば見合すといふ事てあつたのてある。政府當局者としては責任上隨分面白からざる答と考へたから、更に國務大臣に向つてこの答辨を認むるや否や、責任を以てこの答辨に同意なさるるかといつた、然るに全く同意といふ大藏大臣の答てあつたから、之は攻めやうが無かつたのてある。

斯の如く明年度に於ては歳入の上に缺陷を生ずるといふのに、又別に海軍擴張といふ問題がある、之は世間の傳ふる所に依れば豫算編成の前に當つて內閣會議の問題となつて、遂に四十六年度より海軍力充實の計畫を立てやうといふ事て折合が付いたといふ事てあつた。それて之を議場て確めて見ると海軍大臣は本年より充實を計らなければならぬといふ考てあつたが、何分財源が無い故に明年度に於て之を提出する事にいたしたのてあるといふ事てあつた、而して明年は何を財源としてやるかと聞いて見ると、制度調査の結果節減すべきものを節減して而してその餘る金を以てするといふ意味に答へられたやうてある、そこて若しその制度整理の結果財源を見出さなかつたなれば海軍擴張は財源を見出す迄延べて宜ろしいのか、又財源の有無に拘らず四圍の狀況は最早見合す事は出來ぬといふお考てあるかと問ふと、海軍大臣は財源の有無に拘らず明年より四圍の狀況は最早見合す事は出來ぬのてある、明年より斷然着手するといふ答てあつた、而してその充實を要する程度及び之に對しての費額等は秘密會議に於て聞いたのてあるから、今こゝてはいはぬ。扨て海軍の充實を圖るといふ事は是非斷行するといふ事てあるから、そうすればこの財源も亦足りない、之を行

はなくても今申した如く既に足りないのであるから、其上尚一層足りないといふ事になるのてある。

又此豫算中に於て大藏省即ち一般會計に於て大藏證劵を發行する程度を八千萬圓としてあつたのてあるが之が今年の豫算に於ては一億萬圓となつて居る、この大藏證劵は煙草專賣の運用資金補足として二千百萬圓それから製鐵所の運用資金補足として千二百萬圓、之だけは大藏證劵を發行する事に議會が協贊を與へて居るのてある、そこへ持て來て今度八千萬圓のものを一億萬圓にするといふので、之はどう云ふ理由てあるかといふ事を質して見ると、從來は軍事費の殘りその他預金部若くは他の特別會計中から流用をする事の出來たものが、今日は全く流用する所の金が無いのてあるそこて一面に歲入は租稅の延期納附を許して居る爲に、必要な歲出に對して租稅の入つて來るものが間に合はぬのてある、その他政費の運用上到底八千萬圓の限度ては運用が付かぬ故に一億萬圓に增額する譯てある、から云ふ說明てあつた、之は實際その通りてあろうと思ふのてある、さうすれば一般會計に依て一億萬圓、煙草專賣の方て二千百萬圓、製鐵所の方て千二百萬圓、合せて一億三千三百萬圓の大藏證劵を發行しなければならぬ事になる、然るに民間に於ける大藏證劵の消化力といふものは如何てあるか、私の今迄知り得て居る所のものは五千萬圓を超した事はないと思ふ、五千萬圓しか消化力の無い所へ以て來て又增額を要するといふが如き事は經濟界に大いなる壓迫を加ふるものといはなくてはならぬ。その壓迫を來す所の事柄は遂に兌換の膨脹となり、兌換の膨脹は物價の騰貴、勞銀の騰貴となり、その結果が輸入超過といふ事になつて來るのてある。それ故にこの點を充分に確めて見ると、多少の壓迫は來すてあらうが何分急激の變化を來す事は出來ぬのてある、已むを得ざるに出づるのてあるといふ事てあつた、所て之に對して私は實例を擧げて當局者に問ふて見ると殆んど之に對する答辯は無かつた。それは昨年の暮兌換劵が未曾有の膨脹をしたとき、即ち四億三千三百餘萬圓といふ巨額に上つた時て

ある、この時に當つて民間に放資さるべき金額と政府が使用して居つた所の金額とを調べて見ると、政府關係の方に使用した金額は三億二千八百餘萬圓で、その内譯を見ると五千萬圓程は公債に充用し、五千八百萬圓は大藏證券、二千二百萬圓程は法定貸上金、その外は臨時貸上金といふ事になつて居つて、民間に放資さるべきものに充つべき金額は總計に於て一億五百餘萬圓しか無い、如此未曾有の兌換劵發行の當時に於てさへも、五千八百萬圓の大藏證券を日本銀行が脊負つて居るといふ事實に徴して見ても、民間に於て之を咀嚼する力はないぢやないかといふと、之は一時に要するものでもなし、全部の場合は極く少ない事であつて、そういふ場合あれば止を得ず兌換劵を膨脹せしめてやるが成るべくはさういふ事の無いやうに努める外はないといふ事で、的確に安心をする事の出來る答辨は得られなかつたのである。

扨て斯うなつて見るとこの豫算そのもの丶適當不適當といふ論よりもこの豫算を通過させた所が、之を執行する上に於て非常なる困難になる、大藏證劵の所たけにしても非常に六ケ敷なる、そこへ加ふるに公債に求め借入金に求める、その中でも臺灣の二百五十八萬圓といふものは臺灣銀行に於て之に應ずる仕組になつて居る、それから治水費八百九十萬圓中二千五十萬圓は民間より公債若しくは借入金をするといふ事になつて居る、然らばこの借入に求むべき財源の在るものを除いて六千二百五十萬圓、それから昨年中の鐵道作業費中四千萬圓は大藏證劵となつて居る、て之は借換をして行かなければならぬもので、合計一億五十萬圓といふものは借入金若くは公債に依らなければならぬ、この點に關して到底今日の民間の狀態では公債を募るといふ事も甚だ困難ではあるまいかといふ事を確め、同時にこの政策を行ふとすれば一方五千萬圓の公債を償還して、一方に於て之より非常に多いものを募るといふ事は、政策として甚だ矛盾しはせぬかと問ふて見た、所で大藏大臣はそれは多少矛盾するかも知れない、乍併公債を募る若くは借入金をするといふ事は

民間の狀態に應じてする事であつて、別にどちらにするといふ事に極まつて居らぬ、又一方に公債を償還するからといふて又他に公債を募るといふ事は他國に於て類例があつて更に妨げは無いと思ふといふ答辨であつた、併し之は經濟界の狀態が國債償還を欲しない、金融界に極めて餘裕がある時に於てはそれは一面に公債を償還し一面に於ては公債を募るといふ事は行はるゝが、今や多くの兌換券を發行されて居る時でさへも民間に對して放資さるべきもの一億餘萬圓に過ぎない、此の時に當つて續々と民間へ賣出さうとしても應ずる者ない譯である、縱し出來るとしても今日は現に公債の市價は額面を切込んで居のであるから其以上に條件を善くしなければならぬ、その條件を善くするといふ事に付いては、既往の公債に大打擊を加へはせぬかといふ事を確めて見るに、それは打擊を與ふるかも知らぬと云ふ事より外何にも之に對する答辨を得なかつた、それて如此狀態て詳細に之を考へて見ると遂に實行不能に終りはせぬかと認められる事由が段々强く起つて來るのである。之が私の最も掛念に堪えぬ所である。

之は丁度四十年に西園寺內閣が四十一年度の豫算を組んだ時に、總歲入の中に於て一億千四百萬圓を公債に求めて、繼續費として四十二年度より四十六年度に至る迄の間に更に五千二百萬圓を公債に求めるといふ方針を立てた、而して之を四十年に於て四十一年の豫算に計上したのであるが、四十五年度の豫算に於てどうなつて居るかと云へば、一億五千萬圓といふものは公債若くは借入に依るものである、先年のは一億一千四百萬圓で一千萬圓違ふだけて方法は同じである、それから四十年の時に於て四十一年の大藏證券はどうなつて居つたかと見るに九千六百萬圓であつた、今日は前いつた通り一億三千三百萬圓、それから四十年の暮に四十一年の豫算を組む時に於て、日本銀行の兌換券發行の狀況はどうなつて居つたか、而して之を四十四年の暮に較べて見ると、四十年には八千八百二十四萬千九百八十圓の制限外發行をして居つて、四十四年

の暮に於ては八千四百二十四萬四千八百九十六圓の制限外發行をして居る、之は四十四年の方が少し數が少ないのであるが能く似て居る、而して四十五年度豫算參考書を見ると、八千萬圓以上の制限外發行をした事は明治二十四年より四十四年迄の間に前後三回しかない、即ち三十七年と四十年と四十四年の暮との外は無い、して見れば之も亦似て居る、それから公債の値段をずッと調べて見ると、西園寺內閣當時即ち三十九年十二月と四十年十二月とを比較して公債相場を見ると內地特別五分利公債であるが之が五圓六十七錢下がつて居る、さうすると四十四年の方は下がつて居るにしても下がり方が少ないが、併し之は私の想像としては東京市債が近く成立するといふ氣構があつた爲め、これだけの力を有して居ると思ふが、此點に於ても恐らく實質に於て違はないであらう、現に今日公債下落の狀況に於ても分る、それから倫敦相場を之と同じやうに較べて見ても、倫敦に於ける第一回四分利英貨公債は五磅十六分九下がつて居る、それから四十四年一月と四十五年一月とを較べて見ると之は五磅十六分十五下がつて居る、かやうに皆下がり方が同じ狀況であるさうすると西園寺內閣は四十一年度豫算をどうしたかといふと、一億萬圓の第一回國庫債劵の借換を確か八朱三厘何毛かに當つて居つたと思ふが、それすら充分に行かなかつた、而して遂にこの內閣は骸骨を請ふに至つたのである、して見ると本年の豫算は假りにこの儘通過するといふ事にした所が、之を實行するに當つて非常な困難を生じて來る、その困難を生ずる事は一億萬圓の國庫債劵借換を爲した場合と同じ事に遭遇すると思ふ、唯少し違ふのは東京市債の成立である。之は後に於て少し述べたいと思ふから茲には唯狀勢が少し違ふといふ事だけをお話して置く。

如此豫算の全體を通じて見ると非常な窮迫なものになつて居る、之に加ふるに淸國事件費といふものに對して更に豫算が組んで無い、之は議會の始めに於て私より質問を試みたのであるが追加豫算の形式に依つて求めるといふだけの答辨であつた、而してこの追加豫

算を提出せらるゝ前に於て、特別會計より流用支辨法案といふものが出たのであるが、之が私と大藏大臣との問答に於て新聞の種を作つた事であつて……この特別會計といふものは餘程澤山ある、殆ど日本の歳入歳出の立方は少し面倒なものになると直ぐに特別會計にしてある、その中で預金部特別會計、減債整理基金特別會計、それから森林資金特別會計、貨幣整理特別會計、この四種より借入若くは流用するといふ事にするといふ大藏大臣の説明であつたのである。然るにその森林資金を見ると既に日露戰爭の當時に於て支出して今に戻入れずに使はれて居るものが四百萬圓ある、て帳面には金があつてその實は悉くは無いのである。それから預金部に於て既に八百餘萬圓といふものは治水費に繰入れる事にしてあつて餘分はもう無い、預金が増せばあるのだが増さなければもう無いのだ。それから貨幣整理資金といふのは五十錢二十錢の銀貨を小さく改鑄して其間から利益を生ずる譯のものである、之は唯今材料を持たぬが確か千百萬圓程あると思ふ。然るにこの豫算をずつと調べて行くと五百七十萬圓程は既に本年の豫算に組込んである、どうも之は私は無いと思ふのであるが、責任者があると答へるから在ると見て宜しいが、その金は現存して居るかと云へば流用されて現に無い、それから次は減債基金之はある、即ち五千萬圓は償還するといふ事に本年の豫算にも明かに組んである、乍併この減債基金は五千萬圓外に金があるかと申すと百五十萬圓しか無い、もう外は使ひ盡して居る。さうすると之をどうするかといふ事を段々尋ねて見ると、どうも帳面上にある金が無いのであるから之は大藏證劵等を發行してそれから戻入をして置いて使ふ外は無いといふ、さうすると曩にいつた一億圓の一般會計の中若くは他の特別會計中の大藏證劵中から流用して間に合せる外無いのである、此點から見れば豫算分科會に於て大藏大臣の説明は打消されて全く矛盾して居つて事實は當方の推定通りと見る外は無いと私は思ふ。而してどれ程の金が要るかといへば、今日迄使つた金は八十七萬圓餘、それから今後使ふ所

の金は九月迄每月五十萬圓づ丶三百萬圓あれば足りるといふ積りである、そこで私と大藏大臣と衝突を起した譯であるが、政府當局は三百萬圓で足りるとすればかやうに種々な特別會計を以て來て流用せずに、何でもよい三百萬圓調達の出來るものを見付けて置いて、それで支辨したらどうかと云つて見ると、それで宜いといふ意見も付けられるが、乍併清國事件費はどれ程要るか前途の見定めが付かぬから、若し要るとすれば先へ行つて繰込まれるやうにして置かなければならぬといふ、さうすると減債基金に當る金までも使ふつもりかと云へば、どうも必要なれば仕方がないので、公債償還をやめてもやるか若くは增稅をやつてもやるといふ。さうすると三百萬圓といふ豫算は隨分薄弱てはないかといふと、それで足りると思つても國際間に於ける已むべからざる出來事であるからその金は使はなければならぬ、それなれば政府は緊急敕令を發してよも、その金を調達する事が出來るのである、今三百萬圓しか要らぬといふ時に當つて、減債基金中の金を之に當てるといふ事は、國民に不安の念を甚しからしむるものであつて、頗る愚策ではないかと私が云つたのに對し、大藏大臣は鸚鵡返しに若し國民に不安の念を與へるものがあれば、それは片岡君なりと云はれた、之は段々問ひ詰めて來ると、先の先まで問ひ詰めるのであるから、自然大藏大臣はかう云はなければならぬして見れば問ふ人が不安の念を高からしむるものであると解釋せられたのであらうが、どうも大藏大臣より左樣な事を聞棄てにする譯には行かぬといふので、速記錄にはこの問答……不安の念といふ文句は取除くといふ事で、折合を付けて置いたのであるが、事實は矢張り同じ事で既に新聞紙はその通り傳へて居る、歸する所已むを得ずんば其所へ立ち至るといふ事は是は掩ふべからざる事實である。

扨て斯樣になつて見ると豫算の五億七千萬圓中に於て何とか繰合せを付けなければならぬが、總體に於て三百七十萬圓の剩餘金しかない、殆んど六億の歲計中に三百七十萬しか剩餘金がないといふ事は、實に非常

な窮迫といはなければならぬ、況や內務省、大藏省、遞信省等に於て四十四年度追加豫算を求めて居るものもあるから四十五年度に於て求めて來るものが勿論あるに違いない、そこで私共をして之を論ぜしむれば通常の場合に於ては剩餘金若しくは豫備金といふものは成るべく多くして置くといふ政策を取つて置きたい、然るに本年度は僅かに三百七十萬圓を殘したゞけである、斯くなつて見ると勢ひこの歲出歲入の中、歲出に大鉈を振つて切り詰めるといふ外に、誰が政局に立つても安全に行かないといふ考である、殊に本年の如き一面大藏證券は減じて然るべきに却て二千萬圓を增す、それから公債の値段を下げる傾向を以て來て居る時に、尚公債を一億萬圓募るといふ事をするに於ては、之は國家非常の場合に於ては已むを得ぬが、通常の場合に如此事をするといふ事は甚だ許すべからざるのみならず、輸出を增加せしめ輸入物を成るだけ內地に於て調達せしむる政策の必要なる時に於て、政府の都合ばかりを計つて行くといふ事は甚だ當を得て居らぬ事と考へる。

そこで豫算に對して六千萬圓を削るといふ意見を立てたのである。その趣意は明年度に於て即ち海軍擴張の財源を作る、それからもう一つ營業税、所得税その他税の權衡を失つて居る即ち偏重偏輕のものを矯める、營業税の如きは此所に會社を設立するとすれば直に登記税を拂ふ、資本の拂込をすると又税だ、それから家を建てると家屋税、人を使へば人頭税がかゝるといふ事で、到底今日の税法にしては充分にその發達を來すといふ事は、民間に於て期せられぬ事である、之は是非改正をしなければならぬ、殊に今日の税の負擔は極めて重きに失する、重きに失して居るが爲にこの生產發達等の上に於て害を爲して居るものである、故に此の税制を整理しなければならぬ、如此して始めて輸出の獎勵、生產發達獎勵も行はれる、而して又一面大藏證券の發行を減ずる事が出來るのである、から云ふ考を以て六千萬圓削減を立てゝ見たのであるが、之に對して最も世間で八ヶ間敷且つ議會でも八ヶ間敷い所

のものは、左樣に節減をするには各款項に亘つて節減をする費用を立て丶修正案を出せといふので、世間ばかりでなく議會でも反對派は之が金城鐵壁のやうになつて居るが、今日の豫算の立て方を見ると到底款項に亘つて修正案を出すと云ふ事は、出來る事は出來るが直に破れる、それに歳出は……憲法の規定に依つて既定の歳出に對しては政府の同意を得ずして削る事は出來ない、て如此事を議會が自由にする權能は實は議會は持て居らぬ、てあるからこの款項を削るべしと述ぶると、この時に政府委員は同意を表しない、すると折角の修正案は破れる、解散を賭して行くなら格別、兎に角目的を達する事は難いのてあるから、之は政府と協定するにあらざれば出來ない、即ち第一期の議會てあつたと記臆して居るが、議會に於て八千萬圓に近い歳出に對して政府は八百萬圓の削減を唱へて同意しない、てこの豫算に對して兩々相持して居つたが、遂に政府は折れて六百何十萬圓の削減となつたのてあるが、政府は款項に亘る修正は政府に任かして呉れと云ふ事て、議會は政府に任かして濟んだ事があつた、かういふ事を國民も忘れ議會も忘れたのか或は爲にするものがあつたのか、款項に亘つて細目の修正を出さぬといふのは甚だ無責任てあるといふ事が餘程八ヶ間しい、而して勢力のある論のやうてあつたが、豫算の實質を見れば到底出來ない相談てある、そこてこの六千萬圓をどうして削るかといふのが大問題になるのてある、困難は困難てあるが、左迄六ヶ敷い事ては無いと思ふのてある、それ一番初めに述べた如く行政費一億一千萬圓、軍事費一億四百萬圓、國債費に一億六百萬圓殖へて居るが、國債費は今日如何ともすべきものてないとして、軍事行政に於て二億一千四百萬圓殖へて居る中から、六千萬圓を減ずるといふ事は之は無理な注文てないと思ふのてある、一寸此所て一例を述べて見ると、明治三十六年度と戰爭の一寸始末が着いた四十一年度とを比較して見ると、文官に於て勅任が百四十六人、奏任が千四百九十一人、判任が一萬五千十三人、雇その他の者は四萬七千五百六十一人殖へて居る、

之は今日に於ては多少その數は變つてゐるが、俸給に於ては三千九十九萬四千六百五十二圓殖へて居る、之に一昨々年の桂内閣に於て官吏の增俸を行つたから、その結果として一寸七百萬圓ばかり殖へて居るので即ち三千七百九十萬圓、ざつと三千八百萬圓といふ俸給增加になつて居る、この俸給の外に下級の巡査とか何とかいふもので尙殖へて居るが大體かやうな有樣である、この中に於て多少人を減ずるといふ事はどうも差支ないやうに思ふのみならず、今日の官制といふものは、御承知の通り十八年に伊藤公がこの模範を立てられて、爾來今日迄の間に多少修正を加へて來たのであるが、大體に於ては之れをずつと攢めて來たのである、そこでその十八年の方針はどういふものであるかといふと、政府はずつと偉いもの官吏は地位の高い者、人民は低い者即ち低度の者又實際低かつたに違いない、所が今日になつて見ると餘程民間の方が向上して居る、或るものに依つては之れは政府に高い人が居るか知らんが民間にも亦偉らい者が居る、さう民間を低く見なければならぬといふ程度のものでない、御承知の通り隨分大學卒業生などを入れて、猶外國へ留學をさせて使つて居る會社も澤山ある、所が政府は十八年に定めた時の方針その儘である、それ故に監督、檢査、保護、干涉、許可、認可といふやうなもの丶總ての仕方が極く低い者に向つてするやうな風になつて居るから、今假りに一の會社を起して之に對する營業認可を受くる迄の間には、分り切つた事柄に餘程面倒な手數を要する、鐵道を敷設するとか、電氣事業とか瓦斯を敷くとか云ふ時は、それはどうも複雜なものである、それ故に早く濟む仕事でも長くかゝる、中には半年一年といふやうにかゝつて、それで上局の方では何も知らないといふものがある、之は保護干涉主義を根本的に改むる時期になつてゐると思ふ、之を根本的に改めて監督の如き檢査の如き今日官民の程度が同等である以上餘程制限して宜しいので、この主義を以て根本的に改正を加へる日には、事務も甚だ敏捷に行はれ又政費の節減を見るのは勿論である、その點から見て官吏の數を

三人の所を二人にするのは一向譯は無いのでさう出來るところは多い、デこの點に於て私はこの豫算中から算盤を採ると、下級の者及び役所の小さなものを除いて俸給四千六百三十五萬五百餘圓程ある、その中で六百九十五萬二千五百七十五圓は確かに減ぜられると思ふ、それから廳費に於て今述べたやうにして四百三十六萬九千二百十四圓の中六十六萬五千三百八十二圓程は減ぜられる、旅費に於て六百五十三萬四千三百八十二圓の中九十八萬圓は減ぜられる、雜給及び雜費の方に於て千四百八十九萬二千三百二十七圓の中二百二十三萬圓は確に減ぜられるので、此點だけに於て既に千八十三萬圓程は減ぜられる、それからこの繼續費中に於て、御承知の通り繼續費の豫算を悉く實行して居るかと云へば、實は毎年一億萬圓若くは九千萬圓或は八千萬圓といふが如く繰越を始終して居る、事業そのものゝ繰越であつて其財源を當方に持つて來る譯には行かぬが、その內豫算實行の不必要といふものは毎年約一千二三百萬圓ある、豫算には組んで置くが實際その金は使はんで宜しいといふものがある、さうすればこの豫算の立方を緊縮して、而してその實行不必要であるものを始めから不必要にして置けば、之に依つて千二百萬圓といふものを得られる、それから私は注文として陸軍に於て千五百萬圓を削るといふので、之は陸軍大臣が始めて聞かれたが、困まられたものと見へて驚かれた顏をして居られたから、定めし御同意ではあるまいが、御承知の通り我國の陸軍制度は日露戰爭以前と今日とを較べると、常備兵に於て二倍二割五分殖へて居る、之は師團を殖やした事、其の次に三年兵を二年兵にして三年で作るものを二年で作り上げる事にした結果丁度戰爭以前の二倍二割五分殖へて居る、之は無論國防充實といふ點に於て惡るい事ではないが、今日の場合に於て三年兵も同じやうに常備兵を備へて置くとしても、師團は別に減らさなくとも何も四五年の間辛抱は出來ぬ事はない、さうすれば此點に於て餘程金が出る、それから陸軍糧秣費、被服費といふものは、御承知の通り委任經理といふものになつて居る、

て被服費下付の方法は兵隊に對して二年に一回新服をやるといふことになつてゐる、所が戰をした師團に於ては一年に一回づゝ渡されて居るものもある、之は師團の古いのと新らしいのと多少別はあるが、實際二年一着といふのは其の實三年に一着しかやつて居ない、それからこの被服の製造に於ては今は千住の製絨所から陸軍省へ納める、之は私が實地に行つて見ないから違つて居るかも知れんが、能く私が聞き質した所では三人に對して二十ヤール宛やる、之を陸軍省で裁つて渡すがその結果五ヤール程のものが餘る、この餘り物は直ちに士官達が勝手にして居るといふのでは無論ないのであつて、相當の準備に宛てゝある事であらうが之に對して充分の餘地があるといふ事は確かである、それからしてこの糧秣費の如きものに至ては一ヶ年多額の糧秣を買入れる事であるから、まさか妙な事はあるまいが、仕樣に依ては隨分安く買入れられるのてあるが、その結果として……兵器彈藥の製造に於ても、之を成るべく民間の方て出來るものは民間てさせる事にして、民間の仕事まて取上げるといふ事を避けますると、之等が三千九百十三萬七百四十圓の中五百八十六萬圓を減ずるといふ事は一向難い事てはない、それから千住製絨所の如きは之を斷然民間へ拂下げて宜い事てある、之を拂下げたならば歲入の上に於ては增す事もなければ別に又減ずる事もない、別段出入に於ては動きはせぬが資本を注入するといふ必要はない、それから又民間に於てこれだけの仕事を移し得るだけは民間の霑ほひとなる仕事てあるのみならず、擴張して行くといふ事は結構な事て、一面支那方面へ得意を擴へて行くといふ事に就いても今日の場合必要な事てある、それから被服費に於て約四百萬圓を出すといふ事は一向困難てないやうに見受ける、その他外國の在留民取締費と云ふものも設けてあるが、之は多少要るが決してこの豫算に組んてゐるやうな多額のものは要らぬ、それから海陸軍の手當金等に於ても餘程減ずる餘地がある、又海軍の被服費……海軍に於ては私は八百萬圓の減額論者てある、水兵等の服に於ても成るべく

職業服を着せて置いて、祭日その他陸上等晴れがましい所へ出る時はあの羅紗服を着せる事にすると被服費に於ても節減が出來る、次に修繕に於ても戰爭の場合に於ける如く大概は艦内でやると之も餘程餘地がある、加之鎭守府は御承知の通り旅順も鎭守府である、然るに彼處へ行つて見ると小さな船を入れるのみで迚も一萬噸といふ船が入ることは出來ない、其所へ以て來て鎭守府を置くといふ事はほんの飾りに過ぎない、今日は船も段々大きくなつて來る場合であるから、我海軍としては例の鎭海灣、佐世保といふが如き處には大なる計畫設備を要する事であるが、その他の鎭守府の如き之は朝鮮を領土内に入れ又滿洲をも我が權利の下に置き樺太も領土とした時に於て鎭守府の如き今俄かに廢するといふ事も出來ないといふ事情もあらうが組織でも變へれば宜からうと思ふ、それから艦船の整理を能く付ければ又金を絞り出す事が出來る、而して今述べた繼續費の緊縮と、それから海軍、陸軍の大削減と、それから俸給、雜給、旅費、廳費、それから被服費、糧秣費といふ如きもの丶中に立至れば、結局六千萬圓の金に足りるか足りんかといふ所まで來る、若し之にして勢ひ六千萬圓に足らぬとすれば、所謂特別會計の繰延を行ふより外仕方が無い、然しながらさうしなくとも朝鮮關東都督府臺灣等の官吏加俸、之が俸給の五割若くは四割、ずつと役の低い所には六割といふ事になつて居る、之も極く下級の所を除いた所が一寸三百六十一萬圓の加俸…御承知でもありませうが朝鮮の官舍は立派に出來て居る、それから日用品が安い尙煙草、酒が内地より誠に安く得られる、其所へ以て來て一般より四割、五割或は六割の加俸を有するといふ事は贅澤過ぎる、之が處に依つては半減する、或は幾割かを減ずるといふと三割や四割の節減は優に出來る、それから特別會計中殖民地と内地に於ける關係であるが、之はどうも驚くべきものになつて居る、一例な述べて見ると關東都督府では鹽が安く出來る、其所で鹽の捌場所を探す爲に朝鮮へ輸入を企てるので朝鮮へ輸入させるには多少補助を與へてやるといふ事で、

補助金を與へて朝鮮へ送る、所で朝鮮では鹽を官營直轄にするといふ事で、鹽の製造所をへ拵るといふやうな事をする、どうも日本の政府でありながら甲乙と區域の違ふ爲に政策にかう矛盾をして居るといふ事である、デ之を矯めやうとしても今日の場合只管多數黨が政府のした事を直すと威信に關するといふので何等効を奏しなかつたのである、それから之は誰も御承知の事であるだらうが、臺灣の特別會計で今日は四百餘萬圓の剩金を生じてゐる、そこで其の金を母國へ返へしては殘念であるといふ事で今年は二百五十萬圓の病院を建てる事にした、内地には未だ二百五十萬圓程の病院は無い、東京にも大坂にもさういふ病院は無いが臺灣ではさういふ事をやつて居る、而して軍隊の如きものゝ費用は母國から出してゐるのである、之は軍事の獨立維持から云つて各國之をやつてゐるといふ實例があるからださうである、かやうにして金が餘つても母國へは戻さんといふのである、それから倘能く臺灣の歲入歲出を精しく見ると、砂糖消費税が八百萬圓程見積つてあるが、之は實際臺灣出身の人に質して見ると千二百萬圓もあるといふ事であるが、併乍八百萬圓とあるからは八百萬圓として消費税といふのは内地へ送つて始めて起るのであるのにその消費税を臺灣の收入にしてゐる、かういふ風になつてこの臺灣の方では今の病院の如きものや打狗その他の築港等皆共に多額の金を入れて居る、内地では神戸とか云ふやうな築港は手遲れになつてゐるのである、かやうに母國と殖民地との政策、政費の負擔など甚だ不均衡になつてゐる之を矯めるといふ事に着眼したならば之亦多少金が出てゝ來る事になつて居るのである、右述べた外に製鐵所であるが、之は當局者に問へば別に民間でそれだけの品物を拵へて使ふといふ事は、軍事の獨立を妨げるからいかぬといはるゝけれども、若し之を民間に移すか若くは半官半民にするといふ事にしたならば、之は戰爭その他の事變等に對して多少其の業務の性質が性質であるから、格別この事業の大小擴張の順序變更を生ずる事もあらうから、之は多少補給利子をやらなけ

ればならぬが、之を假りに六朱づゝ出してやるとしても、今日の政府で持つて居るよりは擴張の必要を生ずる時に民間にやらせる方が、政府財政の方から云つても宜いのである、尤も今年は一萬何千圓かの利益を生ずる事になつて居るから、此所で拂下げをするのは殘念であると云ふ感じもあらうが、之を民營に移すといふ事にすると、一面民間出資は政府に回收するといふ便宜もあるから、海軍擴張の一時の財源を補充する途もあるのである、而して今日の如く政府の力が多過ぎて民間の力を殺いで居るといふ時に當つては是非決行せねばならぬ、それから尙之をしても六千萬圓に足りぬといふ事であれば……前に述べた悉くを之へ以て行く事が出來ぬとなれば今度は繼續費の繰延をする、之をするには何にも差支は無い、

而して斯うした所の結果に於て一つ此所に世人の最も注意を喚起すべき事柄は先に述べた東京市債が既に成立して居る、之て正貨準備の補充も出來るてあらうし今日の場合ては喜ぶべき事てあるが、私は將來財政の基礎が改まらない限りは外債を募集する事は當分の間之を打止めと見て居るのである、さてそうなればこの金の使ひ途を十分考へなければならぬ、多分當局者としては一時議會の攻擊に對する埋合せとして兌換券の膨脹するに拘はらず、一時の人氣を立てやうといふ事に、努められるのではあるまいかと私は思ふて居る、若しそういふ政策を取つて來られたならば其後の反動がもう一つ嚴しく來る、之は議員として議會に於ては最早や如何ともしがたい事となつて居るから、民間の經濟界に立たせらるゝ方々に於ては、當局者とよく意志を疏通して、この金の運用を誤らしめぬやうにせられたいものである、政府は此の金を以て先に述べた大藏證券若くは公債等の目的を達しやうといふ考を廻らされて居ないか、私の見た所ではこの金は一ケ年内に株主に渡すと決めた以上は、株主はその金は入るべきものと見越して、その使用方法は夫々チヤンと立てゝある、唯多少銀行の融通したものに回收し得らるゝ事が出來るからといつて、金融界が直ちに洪水期

に達するといふ程の餘裕を、株主から生ずるものではなからうと私は思ふのである、私の愚見としては、この金を運用する事は今述べた通りであるが、正貨流出の甚しくなつて居る以上その歸着點は二つしか無いと思ふ、若し正貨準備缺乏せば政府は借金して之へ繰入れる、而して世間體に於て正貨準備は缺乏して居らぬかの如く見せるといふ政策を續けて行くか、若くは貿易の作用に一任して別段人爲を以て補充することなく、遂に不換紙幣に陷ゐるも止むを得ずとして、而して之が回復するのは數年の後に於て、自然の回復を待つ方が國家の爲に利益なりとかう斷定を下すか、二つに一つしか外無からうと思ふ、同時に貿易の作用は如何なる偉らい者が來てやらうとしても今俄かに輸出が非常に殖へると云い事には立至らぬ、さうすれば正貨準備は殘り少なになる、さうすれば又兌換券の如きも多くを發行して行くといふ事はせずとも宜しい、又政府もさうすれば兌換券を無暗に發行することは出來ない、若し又正貨準備を繰入さへすればズン〴〵兌換券を發行する事は出來る、まあかういふ二つになるのであるが、只今まで隨分と氣樂に世渡りをして過ぎ去つて居る今日に於て、左樣な窮境に陷ゐつたとしたならば之は餘程の奮勵心を要する、それにしても後の打擊が甚しいものである、願くば左樣な事に至らぬやうにして之が改善の途を立てたいと私は思ふ、之をやるとすれば、前に述べた如く財政の切盛を餘程縮め上げて仕舞つて、而して一面には國民の氣力を增進せしむる爲に、戰爭の當時に於て行つた增税を減ずるより仕方がない、それと今の正貨準備の補充に對しては一面に於ては是迄の策を繼續する外ない、その策は何に依るか、之は鐵道に依る外はない、その鐵道は今や收支を引去つて千百餘萬圓の益金を見られる、さうするとこの一千餘萬圓の財源を以て五朱の公債を募るとしても二億萬圓は出來る、又財政の基礎を極めて鞏固に改善をした曉には、鐵道が負債をして居る六億萬圓の五朱を四朱五厘に借換へすることも絶望と見るべきものではない、然らば一面に於て非常な英斷を用ひ非常な覺

悟を以てそれ相當な政策を採ると仝時に、一面に於てこの金を調達する方法を以て結局貿易をして輸出超過の金を以て借金の元利を支拂ひ得るに至るまでの政策を施すより外はあるまいと思ふ。而して其之をなさしむべきは西園寺内閣である。何故であるかといへば西園寺内閣は之をやらなければならぬ義理がある。蓋し四十一年の豫算を組む時に酒造税千三百五十五萬四千七百七十五圓、砂糖消費税四百七十二萬九千二百五十三圓、石油消費税百九十五萬三千八百六十一圓、合計二千二十三萬七千八百八十九圓といふ戰後に於ける増税を行うた、それから煙草專賣益金即ち煙草代金の値上て千二十六萬九千三十八圓、總計して三千五十萬六千九百二十七圓の税を高めた。

それから外に徴税方法に於て改善の途を取るといふ名目に依つて四十一年の豫算に於て名は改善に依る増收として書いてある、云はゞ之に依つて税の誅求をやつた、即ちこの徴税方法の改善といふ名の下に於て所得税百八十五萬八千六百九圓、營業税百三十五萬六千百九十圓、相續税十二萬五千三百八十九圓、酒造税百七十九萬九千六百圓、醬油税三萬六千七百七十八圓、砂糖消費税二十二萬九千五百八十六圓、織物税二百三萬六千六百七十三圓、印紙税三十六萬二千五百十六圓合計七百八十萬五千六百四十一圓といふものは租税徴收方法を改良したといふ事の爲めに増收されたといふ名目て増徴した、之を前のと合せて三千八百三十一萬二千五百六十八圓の増税をかけたのである、戰時に於ける種々の税を通常税と同じやうに取るといふ方法に改めたのみならず、如此増税を以てして而して今の豫算を倘悲境に至らしむるといふ原因を作つた人は西園寺さんである、この西園寺さんはもう一つ鐵道を國有にするに就て、一般財政の基礎を鞏固ならしむる爲に鐵道を國有にすると云つて居る、而してその一般の財政に累を及ぼすものは今日の鐵道國有である、扨て此の如くした事を今になつて咎むる者ては無い、必要としてやられたのてあるが、次に之を受繼いてやり直されたのが、桂内閣てある、その桂内閣は四十一年に代

つてどういふ風にやつたかといふと、西園寺內閣が計畫した所のものから節約した金額が五百二十五萬圓、事業繰延金額が一億六千八百十八萬圓、これだけの改正を企て而して尙五千萬圓を下らざるものを國債償還に充てるといふ事を以て計畫を立てられたのである、それから地租營業稅、相續稅、砂糖消費稅、織物消費稅、狩獵免許稅から云ふものを改正し、即ち戰後の經營として稅制の整理といふ名目の上に於て改正をなし、其結果千五百三十二萬三千百五十六圓の減稅をする、一面此稅を減じて一般會計の方で五百二十五萬圓の節約をし、加之事業繰延をやつた上に五千萬圓の國債償還といふ事を立て、未募集公債を悉皆打切つた、之が桂內閣の仕事で之は諸君も御承知の如く國民皆歡迎した、然るに西園寺內閣は財政の基礎を鞏固にする爲めといつて國有にした鐵道を、桂內閣は鞏固所ではない甚だ累を及ぼすといふ爲めに、一般會計にその累を及ぼさゞらん爲に特別會計を立てた、その當時私はこの會計法は獨立になつて居らぬ、如此事をして一時の間に合せをしたなれば困る事に陷りはせぬか、又一面國債償還をするといふ政策と矛盾する、何となれば短期公債を發行するとか借入をするとかいふ事は、遂に公債を募らなければ納りが付かぬといふ事をいつたのであるが、之は何等聽かれなくして通過した、その爲めに鐵道の如き作業費の始末が四十四年度のものが今日殘つて來て今日尙整理を付けて行かぬければならぬ事になつて居る、その他治水費の如きも之に類したものである、兎に角西園寺侯が計畫を立てられて桂公が之に修正を加へた程不充分である、聞く所に據れば桂公は既に我財政計畫に一大改善を加ふるの必要を悟り其胸算を定められたるも、國民倦厭の情を生じたるを見て遂に骸骨を請はれたさうで、之を引繼いだ西園寺內閣は自分で立てたその源を今日に於て忘れざれば、どうしても此の所に於て國民の民度に相當し四圍の狀態に當て嵌まるやうにしなければならぬ、而かも議會に於ては絕對多數黨を率いて居る內閣にして、之が出來ないと云へばその責任上實に殘念な話してある、然

るに之を矯正せんと努めた結果が何等効を奏せず、一厘一毛も削減を加へずして政友會は我黨が修正を加ふれば政府の威に關するといふ意味に於て、之を丸呑に通過するに至つたといふ事は、甚だ遺憾に考へるのである、之て濟めば事足れりてあるが、どうもこの終りは濟みさうに思はれないのみならず、此後の遣方如何倘誤つたなればもう一つ困難の上塗りをする、即ち東京市債の如きものに對して正貨準備に繰入れて一時の賑いをするといふ政策を取られたなれば、仕舞にはその反動が甚しく來はせぬかといふ事を恐れる譯てある、乍併之は又多少見樣に依つて意見を異にする點もあらう、又正貨の流出、貿易の狀況等に對して私の意見と相一致せざる人もあらうと思ふが、之を要するに何れの點に於ても政費の膨脹は抑へ、抑へるのみならず大鉈を加へざれば、到底褄辻が合はないと云ふ事は掩ふべからざる事實てある。

尙一言附け加へて置きたいのは、先に私より要求した四十六年度以降の財政の見込を出さずして、この協贊を求むるは無理ぢやないかといふ事に對して、政府は只一葉の表のやうなものを出した、迚も之を以て論究する事は出來ない、乍併之を以て見ましても歳入增加は無い筈てある、加之一面所得税改正、營業稅改正何れも減稅をし又鹽の値段も下げるといふ事を議會に誓つたその內閣が、翌年以後の歲入の殖へるといふ目安の立つ譯がない、此の一片の表を見ても之は確かに不信用極つたものてあると云ひたくなる。併し又一面から觀察すれば議會に於て如此大藏大臣が宣言をしたといふ事は大政黨の要求に應じたのてあつて政府の立場てはない。今日の通過を計る上に於て或は來るべき總選擧などて、民心の餘り離れない事を期する爲め、先づ實行の如何に拘らず如斯態度を示して置く必要ありといふのてはないかとも觀察が出來る。

要するに今年の豫算の實況によつて、帝國財政の現狀を知り而して其將來を考ふれば實に寒心に堪へぬ次第てある。

太閣論

福本日南

三千載の光輝ある吾國史中にて、最も適當なる日本人の代表的人物は誰かと問はれたら、自分は第一に豊太閤なりと答へる。全體

日本人の天性

は天空海濶である。謂ふ所の「喜べば春風佳氣となり、怒れば雷霆霹靂となる」といふのが、本源自發の天性である。それで吾古代史中に見える神人を御覽なさい。何れも直情徑行の人ならぬ人は無い。彼の喜怒色に見はさずなど、いふ事は、支那の教義を受取つた以來の後天性である。隨つて斯くの如きは「漢心のねぢけ心」と平田篤胤翁などは排斥して居る。流石に日本學者の泰斗だけに善く吾國民性の本源を見得たるものである之に就いて自分は日本歷史の名著者マルキー・ド・マズリエールの立論に日頃同意する。彼は日本人の天性に就いて、面白き觀察を下して居る。

「土地の沃饒と、氣候の溫和とは、相依り相輔けて、日本人をして夙に群島內に發達させ、且つ其文化を高めさせ、其上生活が容易であつた爲に、彼等住民をして可憐の習慣と快活の精神とを享受せしむるに至つたらしい。獨り是ればかりでない。彼邦土の絕美なる、到る處に花は笑ひ、鳥は歌ひ、長閑けさ言はん方も無い。日本人が天然に美想、詩想及技藝の趣味を領得せるは、斯影響であらう。されど又一方から謂へば、其土壤は火山質で、火山の烟炎は處々に立昇る。地震は年中幾度と無く震動する。お負けに大風は吹荒ぶ。洪水は汎濫する。是に由つて又同時に彼日本人に激烈なる性情と、感動し易い意氣とを享有せしむるに至つたらしい」

とは見到るの言ではない歟。彼マズリエールは又鎌

倉を見舞ふて、奇警の觀察を同書の中に留めて居る。其言に

「鎌倉に遊んで、鶴ヶ岡八幡に詣て、それから降つて長谷の大佛に參れば、日本に存する兩箇の精神を言ひ見らはさうとするものがあるやうだ。其一は勇猛にして激烈なる精神て、其二は和寛にして慈悲なる精神、即ち是てある」と。

以上を簡單に言ひ易えれば「喜べば春風佳氣となり、怒れば雷霆霹靂となる」といふ事ては無い歟。而して日本人の此二大特性を最も適當に代表するのが則ち太閤てある。

半面神秘の太閤

「太閤様」といへば、天下何人も之を知らぬ者は無い。世界の人名辭書の上に、日本人て第一に其名を耀かせて居るのも、斯英雄てある。それだけ彼の傳記は山ほどある。併ながら其傳記は十の七八まて傳説的にして、史實的て無い。或人が彼を雲中の龍に譬へたのは甚だ妙てある。如何にも彼の鱗甲爪牙は歴々と見えるが、半面は今尚ほ雲中に包まれてある。兎いふは彼の生年月日竝に其父の何人てある歟からが、所傳既に區々てある。而うして彼れ年歯二十一二歳に達するまての閲歴といふものも、殆んど全く知ることが出來ぬ。彼の半面が今尚ほ神秘の中に在るといふのは、此てある。然れど此間に在つても、其鱗甲爪牙は雲中から一寸〳〵と影を見はして居る。此に其鱗甲爪牙を捕捉して、

太閤の素生

を一顧してみやう。全體日本の亂離狀態は足利氏の末造ほど甚しい時代は無い。是時に當つて、朝廷は在れども無きが如く、室町政府も早く政權を失墜し、四方の土豪は所在に割據し、朝たに夕べに戰鬪攻伐て、五畿八道到る處血の雨のふらぬ處は無い。天心にして亂を厭はゞ、一人の英雄を斯世に降して、生靈を塗炭に救はれねばならぬ時運に際會した。

此時運、人皇は一百四代後奈良天皇の天文六年（西暦千五百三十七年）丁酉の二月六日（秀吉事記）尾州愛知郡中村郷の中々村のあやしげな賤が伏屋に一人の男子は出生した。父は木下彌右衞門といひ、多年織田信長の父備後守信秀の鐵砲足輕を勤め、各處の戰役に從軍し、負傷の爲に身體不隨となつたので、職を辭して郷里に歸休し、同郡御器所村から一女を娶り、夫婦農業に從事し居たが、其中に一女を設けた。是に至つて更に又一男子を擧げた。當時の素樸さと、お負に農家であるから、無雑作にも其男子を猿と名けた。此猿こそ後に世界の歷史に照耀せる曠世の大英雄大閤であつた。而して御器所出のお袋は悴の猿が出世に頼つて、他年一日大政所と崇め尊ばれるには至つた。（太閤素生記）

扨此猿が八歳の時、父彌右衞門は敢えなく病歿した。爲に母の手一つでは二人の子を育ひて、家計を立てるに困難てある。恰も好し、當時同村の人に竹阿彌といふ者があつて、同じく織田備後守に事へ、同朋（即ち童坊）を勤めて居たのが、病氣にて郷里に引退した。それて村民等之を周旋して、木下家に入聟に取持つた。此入聟竹阿彌と猿のお袋との間に、又男子一人と女子一人は出來た。男子は父が名の竹阿彌に因んて、小竹と稱した。後の所謂大和大納言秀長は此小竹てある。女子は長じて德川家康に嫁した南明院。それから猿と同父の姉は三好武藏守吉房に嫁して、關白秀次を生んだ瑞龍院が、其人てある。（太閤素生記）

太閤の素生として信憑するに足るものは雑と是れだけてあるが、何といつても人間以上の英雄が出て來たのてあるから、雑多な傳説は其人の身邊を圍繞して發生した。先づ第一は

猿が問題

てある。猿の誕生を天文五丙申の年正月元旦の日の出てあつたといふのが太閤素生記で、同じ申の年の六月十五日の出生と傳へるのは祖父物語てある。前書の正月元旦の日の出と同時てあつたといふのは、日輪のまをし子といふに附會せんとの業らしく　信を置くに足

らざれど、申の年といふのは、後書に一致する。而うして公卿補任にも亦天正五年に生るとあれば、或は申の年の誕生が事實かも知れぬ。扨は其のエトに因んで猿と呼做し來らぬとも測られぬ。是れだけにてもまだ〳〵研究を重ねゝばならぬ。併しながら太閤の祐筆太田牛一が手に成つた秀吉事記は一通り太閤の檢閲を受けたといふ其書に『殿下誕生の年月を算するに、丁酉二月六日の吉辰也』とあれば、先づ之を正しとせねばならぬ。尤も是れにも周易を引いて、未來記めいた事を附加へてあるから、後人に疑ふ者もあれど、それは自ら偶中てあれば、それて生年月日を疑ふには足らぬ。

兎にも角にも彼英雄の幼名を猿と稱したゞけは事實と信ぜられる。而うして其幼字猿のまゝにて織田家へ奉公に出たらしい。そこて濶達豪放なる信長は其儘彼を猿々と呼んで親近せられたが、此猿人となり智慧敏捷、萬人に殊絶するので、猿の登庸は人目を聳動し、早くも世の評判となつた。爲に何時しか其面が猿に肖て居たの、擧動が猿に類して居たのといふ傳說は生じ來たものと見える。

太閤素生記に據れば、猿十六歲の時（丁酉の生れとすれば十五歲の時）奉公を志ざして、生鄕をさまよひ出て、行々路用に針を商うて、遠州牽馬川の邊へと差掛つた。其際の行裝をいつたら、垢だらけな白木綿の着物を纏ひ、乞食同樣の姿であつた。其頃濱松の城主に今川の幕下にて飯尾豐前守顯玆といふが居た。同じ今川の幕下にて同所より程遠からぬ久能（是れ斷じて西掾の誤傳）の城主松下加兵衛之綱は前の豐前を訪問せんとて通りがゝりに、猿に出遇ひ、凝みれば如何にも異形な小僧『猿かと思へば人、人かと思へば猿』其儘そこてゆくりなく語を交へ、再問答の末、不思議な小僧てあることを覺り、其場から之を召抱へ、伴の中に召連れて、豐前が館に到り、『今日道にて異形なる者を見つけたり。猿かと見れば人、人かと見れば猿なり。御覽あれ』と主人に示した。主人を始め、一家の子女聚つて之を覽るに、如何にも加兵衛の辭に違はず。そこて栗を取出して之に與へれば、口にて皮をむき、むしや〳〵と食ふ『其口許猿に均し』そ

れから其家にて愛せられ、先づ沐浴させた後、舊き小袖や袴を與へ、衣裳をそつくり着けかへさせれば『其形濟らかにして、始の形に異なり』見違へるばかりの人品となつたと傳へた。是が抑猿公を眞猿にした初であらう。其後に出來た書には、是れだけではまだ物足らずと思ふ歟。『承塵へ飛び上り、柱を傳はり抔して、身の輕きこと猿の如し』とまで附加へた。箇樣な奴があるもの歟。斯くして終に正眞正銘な猿面郎として仕舞ふた。當時未だ其地位を得ざりし猿公をして之を聞かしめば、洒々落々たる先生が事なれば、猿とはつらいネッちやら事仰しやいました歟ネと手を拍つて大笑したてあらう。次は

日神のまをし子

てあつたといふ事に言及せねばならぬ。是は虚から出た實である。後年彼英雄が大に志を得て、海内を統一し、更に世界征服を思ひ立ちたる時、諸外國に與へた當時の國書中に歷々と誕生の靈異が記してある。其一は天正十八年九月十五日附を以てフィリッピン太守に與へたる公書中に『予や誕生の時に際し、天下を治む可きの奇瑞ありしを以て、壯歲より國家を領し、十年を歷ずして、彈丸黑子の地を遺さず、域中悉く統一せり』といへるは、其一つ。但し是れだけては、誕生の奇瑞が如何なる奇瑞てあつたかを知ることを得ねど、同年十一月朝鮮國王に與へた國書中には『予や素部陋の小臣也。然りと雖も、予が在胎の時に當り、慈母、日輪懷中に入るを夢みたり。相士曰く、日光の及ぶ所、照臨せざる無し。壯年の日、八表仁風を聞き、四海威名を被る者、其れ何ぞ疑はんと。此奇異あるに依りて、敵を作す者は自然に摧破し、戰へば則ち勝たざる無く、攻むれば則ち取らざる無し。既に天下大ひに治まり、百姓を撫育し、孤獨を憐愍す。故に民富み、財足りて、土入古に萬培せり。本朝開闢以來、朝廷の盛事、洛陽の丘觀、今日の如くなるは莫し』と見ゆる。此他高山國に與へたる公文、それから明の大使に目のあたり告げたる語にも、亦之を繰返して居る。是に由つて太閤

が日神のまをし子であるといふ事は、太閤自身も之を公言して憚らなかつたことが知れる。夫れ其人自身も之を公言して憚らぬに至るまでには、當時の社會の公認を經ねば、バッパと口外せられる事柄で無い。即ち其時代に於ける國民の多數が殿下は實に日神のまをし子にておはしますと信じて居た事も、亦慥に推せられる。そこで甫庵が太閤記には『或時母懷中に日輪入り給ふと夢み、已にして懷姙し、誕生しけるにより、童名を日吉丸と云ひしなり』とは記したのである。即ち是は太閤に關する公けの事實である。但し太閤日神のまをし子であるから、童名を日吉丸と稱したといふだけは、甫庵の細工らしい。兎いふは太閤の幼字が日吉丸といつたといふ事は、それ以前の記載に一つも見えぬ。全體日吉の語は近江の日吉神社から起り、之をヒヨシと稱へ來たのも、近き事では無けれど、元是れ延暦寺の僧徒等が叡山の上に崇祀したる山王權現の別稱であつて、根元はといへば比叡神社、それに日吉てふ佳字を充てたのであるから、日吉と日神とは無關係。寧ろ山王の眷屬は猿であるといふ傳説こそ一般の信ずる所である。そこで甫庵、太閤の幼字猿から思ひつき猿では如何にも尊嚴を缺ぐ所から、山王の別名日吉の文字に着想し、到頭幼名を日吉丸とまで捏ちつけたものと見える。それとも太閤もサル者であるから、天下を掌握したる後、幼名は日吉なんぞと言はせた歟どうだ歟。自分はどうも甫庵の細工臭いと思ふ。

是に至つて太閤日神のまをし子といふ當時の公けの事實の又其眞相を指發しやう。之に關しては、嘗て自著の英雄論中に左の如く概論して置いた事がある。

『呵々、是れ風氣未發の時代に於ける英雄が籠罩術の存する所なり。蓋し英雄に取りて幸なるは、英雄を以て神の權化なりとする一般の信念なり。是れ此信念は、神代以來深く人心に印象し、世を歷、時を易えても、尙ほ斯生民の腦裏より去らず。故に天下に爲すことあらんと欲すれば、先づ人をして、彼は神人なり、人間以上なり、到底人力の企て及ぶ所に非ずと信仰せしむるより便なるは無し。一たび此信仰

を惹かば、統馭に、征服に、力を用ゐること一半にして、功を收むること倍蓰す可し。英雄豈神異を假らざるを得んや。顧ふに漢高の如き、固より壯士、芒碭山中夜行の際、靑大將の一匹やそこら斬りて棄てたる事實はあらん。後れて到れる一人が聽得たる老嫗の赤帝白帝談は、恐らく漢高方寸の自作。否らざれば、後れて到りし彼參佐、亦此際より畫心ありて、當時未顯の英雄に、豫め箔を着けたるならん。其他の雲龍五彩の譚、亦又之に類せんのみ。　太閤の時代近しと雖も、此故智尙ほ時代に用ふ可し。母氏の夢みし所のもの、果して日輪なりけん歟。若くは懷裏に入りたるは、其形團々日輪の如く、其光赫々大陽の如き、彌右衞門が禿顱なりけん歟。今日よりして知る可からざるも、此夢一世の承認を經て、山澤の英雄、土民の子、將門の將種より貴きを見る」と。太閤の靈地下に知るあらば、嬌瞋を發し『フヽ馬鹿め、餘計な事をスッパ拔いて、俗人どもに知らせるな』と枕頭に現はれて、自分を一喝するであらう。それから今一つは

御落胤

といふ說がある。それは彼英雄が大いに志を得たる後參內の度每に、施藥院に立寄つて衣冠束帶した。一日大內から退いて、此院に休息の折柄、伺候の公卿に向ひ、我は尾州の民間から出でたれば、草刈る術は存ずれど、筆執ることは得知らず。從つて詩歌の才すらあらざるに、圖らずも斯く雲上の交りをするやうになつたのは、寔に冥加至極である。が、是には不思議なゆかりがある。それは我母若き時、大內の御厨子所のお婢を勤めて居た中に ゆくりなく玉體に近づき奉つた。すると其夜の夢に萬千の御祓筥が伊勢から播磨の方へと大空を掠めて飛行く所を見、又『千早振神のみてぐら手に取りて』といふ御夢想に感じて、自分を孕んだそうな。其夢合かして、今日は斯かるやんごと無き地位とはなつたと語られたと、松永貞德が戴恩記に見える。

又一つには、萩中納言某卿といふがあつて、讒言の爲に尾州に配流され、當時三歳の息女を伴うて、此地に下り、村久野といふ處に謫居せられた。其息女幼少から京に出て、禁中に宮仕せる間に、玉體に近づき、乃て懷胎して、再たび尾州に歸り來り、一子を産落されたのが、即ち太閤殿下であると書きつけたのが、秀吉事記である。

以上の二書は孰れも朦朧ならぬ書てあるに、箇樣見える所を以てすれば、太閤自身斯く言觸らさせたかも知れぬ。是れ亦日神のまをし子と一般、英雄人を欺くのみ。そこで後世には野合の子てあらうなどの臆測説も出てゝ來た。是は亦餘りの妄想てある。要、天の人物を生ずる、何ぞ必らずしも種あらんやだ。時代の必要、此に一人の英雄を日本の中央に降されたものと見える。是から

猿の幼時

を概觀しやう。天文十二年、彼猿八歳(丁酉より推せば七歳)の時に父彌右衞門中村にて病歿し、乃て繼父として同郷の人筑阿彌を戴く事となつた。(太閤素生記)が言はゞ一家は水呑百姓、お負に繼父は病身(仝上)てある。そこて申さば口減らしの爲に、同國光明寺へ弟子坊主として遣られたのてある。處が猿中々の腕白、經文などを敎へても、頓と覺えず。其のくせ人の武事を談ずるを聞けば、耳を傾けて一々聽取し、心にチヤンと會得するものがある。居ること二年、彼は一日慨然として、出家は畢竟乞食の徒だ。男一匹として此亂世に生れながら、乞食の修業する馬鹿者があらう歟といひながら、大いに決心する所があつた。蓋し彼が一代の運命は此際の立志から胚胎したのてある。それからといふものは、馬鹿徒らをする、喧嘩をする、和尙もほと〳〵持て剩して彼を追還すといひ出した。是れこそ猿が望む所、されども在りの儘を告げられた日には、繼父の折檻、母の迷惑は定てある。そこて彼は四邊も構はず、若しも己に難癖ても附けて追還して見ろ、寺に火を取りつけて殿堂殘らず灰にして遣ると放言した。彼の腕白さは放

火しかねぬ奴であるから、坊主も大いに恐怖して、ヤッと可恰口實を作り、衣類扇子などを與へ、兎角に拵へて親許へと送りつけた。是が猿十歳の時であつた。（太閤記）

彼は斯くして僧徒となるの厄を免かれ、一旦生家へ歸つて見たもの丶、貧乏親爺の許にジッと居る譯にはゆかぬ。そこで今度は奴僕奉公にと出掛けたが、卓落不羈にして大志ある者が、斯かる卑賤な業をして、爭て辛抱の成る可きや。彼方に三箇月、此方に半年といふ有樣にて、近國處々方々を渡り歩いた。（太閤記）蓋し彼が立志から察すれば、決して〱奴僕奉公に甘んずる者では無い。此間と雖も、良主を擇んで之に事へ、是より身を立てんと思つたに相違ない。が、土民の子にして、お負に小僧と來て居るから、誰も知つて呉れる者が無かつたらしい。そこで無闇にそれからそれへと辿り歩いて見たものと見える。

松下家への奉公

天文二十年、猿十六歳の春（丁酉より推せば十五歳）繼父の筑阿彌も亦病歿した。猿は益々ぐづ〱して居られぬので、繼父が己に遺した永樂錢一貫文の中少許を携へて、吾家を飛出し、先づ淸洲に出て、縫針一束を買入れ、路々之を賣つて路用に充て、東國へと志した。蓋し當時東國には今川・北條の如き豪族が居る。便を求めて、是等に就き、身を起さんとの意であつたらう。彼は行いて遠州濱松の町はづれ牽馬川の邊へと差掛り、暫時橋の上に休んで居た。此處にて偶然にも邂逅たのが、前にも一寸述べた所の松下加兵衛之綱である。此際猿の身裝といつたら、垢づき汚れた白木綿の着物、如何にも穢ない容子ではあるが、何處と無く寧馨兒の面影は見えたらしい。之綱聲を掛け、

其方は全體何處の者で、此邊にはさまよふの歟。

と問へば、

尾張の者にて、是から東國の方へ身上稼ぎに出掛ける途中で御座る。

と答へた。之綱打笑ひ、

其方が身裝、顔つきにて、誰が抱へる者があらう。

といへば、猿は却つて之を嘲り、

殿は大將の器量を備へぬ人と見える。自分が氣に入らねばとて、何人の氣にも入るまいとは、扨も狹い御量見。左樣なものでも御座るまい。

といふ。之綱グッとつまり、小僧中々面白い奴と思ひ、

どうだ是から自分が家來にならぬ歟。

と問うて見た。すると猿は小首を傾けて、思按の體、容易にウンと返辭せぬ。蓋し彼は此之綱、主人には不足なれど、今川の幕下といへば、一時之に仕へるも、亦一方便ならん歟など思量し居たのであらう。之綱重ねて、

何を考へて居る。

と問へば、さあらぬ顔して、

殿の分限を考へる所て御座る。

といふ。之綱可笑しく思ひて、試に

何程と思ふ歟、中てゝ見よ。

といへば、

左樣大概八千石から一萬石ぐらゐの間て御座らう。

ウン何として左樣察した歟。

さればて御座る。尾張にて五千石取る人に比べ見れば、それには優り、一萬石取る人に對へれば、それより劣つて御座る。察する所此邊は土地一帶に瘠せて居るから、それて八千石乃至一萬石と踏んだので御座る。

といつた。之綱大いに感じ、

奉公するに何ぞ差支へがある歟。

と問へば、

某さへお承けをすれば、何の支へも御座らぬ。

と答へる。さらばとて其場にて召抱へ、伴の中に收めて、濱松の城主飯尾豐前守顯茲を訪ひ、四方山の話から、今日途中て不思議な小僧を召抱へ、連れて參つたと語つた。主人は前の問答を聞き、是れ亦大いに之を奇とし、妻兒まで呼集へて、之を見るに、如何にも穢ないが、又如何にも尋常てない。そこて湯に入れ、古小袖、古袴など與へて、着易へさせられれば、見違へた

済げな若衆となつた。早や其時は酒宴の席、何ぞ一節歌へといはれゝば、臆面も無く田舎謡を節も可笑しく謡ひ出た。一家は興がり、是非此子を家に貰ひ受けたしと之綱に求めたのである。之綱乃て猿に向ひ、

貴様は寔に仕合せ者、當家の奥方御娘子のお氣に入り、其方を御所望との事なれば、是から御當家へ遣はすが宜しい歟。

といへば、猿は喜ぶかと思ひの外、色を正して、

以ての外な事を承る。左様な儀ならば、此場にてお暇を頂戴する。

と言ひ出した。之綱は案に相違し、

何故暇を取るといふの歟。

と押返せば、猿は打笑ひ、

凡そ主従の間柄を申せば、主人の新参者に對するには、一年使つて見て、物の用に立たぬ時は、之に暇を遣はし、又家來とし新主人に對するには、三年勤めて、見据えつかぬ時は、暇を貰うて立去るといふが大法ては御座らぬ歟。然るに殿は某を今日抱へて、今日他に行けと仰せられる。それ故御免を蒙らうと存ずるので御座る。

と答へた。彼や沈竹林の小わつぱとはいへ『今の時に當つては、君の臣を擇ぶのみならず、臣も亦君を擇ぶ』の意を自然に會得して居る。之綱深く其理に伏し、其のまゝ伴うて久能（西家の誤傳）へと連れ還つた。（太閤素生記及名将言行録參酌）

猿の寃罪

猿は松下家に就いてから、陰日南なく忠勤を勵む。之綱は乃て彼に矢倉番を申付けると、彼は一疋の狗を飼つて、おさ〳〵警備を怠らぬ。それて是迄は時々倉の物を盗まれたのが、パタリと止まつた。箇様に忠實に精勤するので、之綱も二なき者に思ひ、段々取立てゝ、納戸の用金其他の物の出納役を命ずるに至つた。是れ亦其職に稱つて、其の取扱ひが洵に正しい。すると家中の連中、就中朋輩等が一つには役得が出來ぬやうになつたのを怨み、又一つには此新参者を主人がチヤホヤするのが嫉ましいので、何の箇のと難癖を附け

出した。一挺の小刀が失せたといへば、ソラ猿が取つたらうといひ、一吊の印籠が見えぬといへば、猿が盗んだに相違ないなど〻、頻に囃し立てたが、之綱容易に之を信じないので、皆の者共は刼を煮やし、果ては殺しも兼ねまじき有様である。之綱熟〻此光景を察して、不愍な事に思ひ、一日猿を召して、家中の内情を語り、此方が爲に如何にも氣の毒であるから、此地を去れとて、永樂三十疋を與へて、暇を遣つた。猿は深く之を殘念がり、爭つて見たが、如何ともし難いので悄然として松下家を辭し去つた。此間が恰度足掛け三年であつた。（太閤素生記及名將言行錄參酌）

猿の松下家に於ける事實は斯くの通りである。然るに甫庵が太閤記に、一日之綱は秀吉に向ひ、此方は尾張の者なれば、善く存じて居るであらう。織田家にては如何樣の具足を用ゆる歟と問ふた。すると秀吉之に答へ、織田家の具足は此地方に在る桶皮胴のやうな窮屈な物ては御座らぬ。胴丸と申して、右の脇にて合せ伸縮自在の鎧て御座りまするといつた。さらば其甲冑一式を求めて參れとて、黃金五六兩を托すると、秀吉途中より思案を易へ、此金を以て身の仕度を調へ、信長に事へて、出世を圖り、他日之を償はんと、歸つて之を叔父に議れば、叔父も亦大贊成。そこで愈〻決心して之を實行した抔と書立てた。それを復た後世に至り、賴山陽が能文の手に譯して、

二十歲の比、遠江に如きて、士豪松下之綱の家奴となる之綱其才幹を愛して、事毎に之を使ひ、名を與助と命ず。之綱一日從容として問うて曰く、汝は尾張の人なり。織田氏用ふる所の鎧の何樣なるを知る歟と與助對へて曰く、天下の鎧は皆桶皮にして、尾張獨り胴圓を用ふ。縢を右肋に施して、屈伸意の如しと之綱曰く、吾れ胴圓一領を得んと欲す。汝、吾が爲に往きて買來れと。則ち黃金六兩を附して之を遣る。與助行く〳〵自ら計りて曰く、吾れ此金を攘みて、仕途に資せん。苟も意を得なば、他日之を償はんこと易々たるのみ。小節拘はるに足らざるなりと。乃ち尾張に入り、其叔父に就きて謀る。叔父之を可

とし、因りて織田氏に仕を勸む。なんぞと違つたので、可惜名譽の少年を到頭金箔着きの拐帶者にして仕舞つた。太閤は迷惑千萬である。加之、山陽が成る手に委せて一度之を日本外史に譯出した以來、正義の感念に乏しい惡少等に、惡影響を及ぼした事は實に非常である。鼠小僧の講談の毒は下等の賤民等に止まつたが、此方の害は中流社會の子弟に加はつた。此の處、山陽、甫庵と同罪を以て論ぜねばならぬ。

織田家への奉公

猿は僅に三十疋の永樂錢を路銀として、生國へと歸り來る途すがら、淸洲に立寄り、同鄕人にて當時信長のお小人頭を勤めて居た一若といふ者を音づれた。蓋し彼の意衷は大概察せられる。信長尙ほ年若く、且つ未だ大いに顯はれぬが、行く〳〵大有爲の將たる可き器量は、此頃から次第に見えて來た。彼は此將の龍髯に攀ぢて、宿昔靑雲の志を達しやうと思ひついたのであらう。一若は猿を見て、且つ驚き、且つ喜び、此三年、お前は何處に彷徨つて居た。お袋の心配は一通りては無いぞ。急ぎ歸つて顏を見せて來い。御當家へはお前の親以來因みがある。御奉公の出來るやう自分が取持たうと、忠だつて諫めて吳れた。そこで歸つて久々振に母の氣嫌を伺ふと、母の喜びは大方ならず。乃て自分の希望を母にも告げたらう。母も同意であつたに相違ない。再たび淸洲に出て來り、一若の取持に賴つて、信長のお草履取とはなつた。是が天文二十二年猿十八歲（丁酉より推せば十七歲）の時であつた。（太閤素生記）

是より懸命に奉公したが、其間にも奇行の見る可きものが多い。當時信長は尙ほ年壯の事とて、一夜局に忍ばれた。其際猿をお伴に連れられた。折節寒中にて寒さ甚しい。猿は夜徹し外に在つて、主人を待つて居たが、曉方に信長は立出られた。それといふ間に、猿はお草履を揃へた。信長之を穿かれゝば、何處やら溫かい。氣早の若主人、猿奴尻に藉き居たなと叱せられるを聞き、勿體もない、此寒中定めて御足お冷たから

んと存じ、終夜肌につけて暖めて居たので御座りますると申上げた。信長聞いてウイ奴と思はれ、其後も大概彼を召連れられたが、猿も亦頭にことわり、他人の番でも代つて伴に立ち、勉めて主公に接近した。（名将言行録）

一日猿は清洲城の大手松木門の下を通り掛かると、節穴から誰やら小便を溺掛けた。猿大いに怒り、何奴なれば無法はすると叫びながら、此方の裏に跳り入らうとする。信長笑ひながら、

乃公ぞ〳〵、苦しうあるまい。

と云はれゝば、

乃公とは誰れ。

と問返す。

三郎ぞ。

と重ねて宣ふに、

何、お主と仰せられる歟。設ひお主にもせよ、小便しかけられては無念て御座る。

と尚も焦つて争はうとする。信長會釋して、

堪忍せよ〳〵。實は其方を試して見たのである。以來は取立てゝ召使ふからソウ腹を立てるな。

との挨拶に、猿も我慢して退いた。（祖父物語）濶達豪放な信長であるから、是れぐらゐな事はあつたらう。而うして猿が自尊不屈の氣象も亦此間に躍出して居る。

未だ幾ばくならずしてお小人頭に擧げられて、其名をも改め、木下藤吉郎と名乘つて奉仕するやうになつた。是より以後、月を追ひ、年を逐つて立身し、次第に人の目につくやうになつた。（太閤素生記）

藤吉郎阿稱々の結婚

爰に信長の家中に淺野又右衞門といふ弓手の士があつて、津島に住したが、其妻は木下某の女で、藤吉郎の伯母である。二人の間に子が無いのと、何ぞ事情もあつたらう、朝日鄕の人杉原助右衞門といふ人の娘二人を養女にした。其姉娘は名をお禰々といつて、歳頃になつたが、中々の美人であつた。藤吉郎親族の事てあるから、時々音づれたに相違ない。すると又右衞門

は女房に向ひ、藤吉は彼の通りの利發者であるから、行く〳〵は屹度出世するてあらう。惣領のお禰々を嫁せて、我聟にしては如何がと相談すると、女房も大賛成それからお禰々の內意を聽けば、是も疾うから憎くからず思つて居たので、信長公に申立てゝ、早速婚儀を取結ぶ事にしたが、當時藤吉郞は未だ家をも持たぬ。さらばとて又右衞門が長屋を當分新夫婦の住居に充てさせた。

扨其長屋といつたら、茅葺屋根に、竹の簀、其簀の上に藁を敷き、又其藁の上に薄縁を延べて、式場は出來た。乃て其場に見はれた花嫁御は、信長公が左義長に用ゐられた萠葱染と蘇黃染との木綿の旗のお流れを、兎や角して小袖に仕立てあげ、それを晴着にして其坐に着いた。此際花聟の行裝も大凡想ひ遣られるのてある。斯くして祝言の式は擧げたと、お禰々の政所後まて人に語られしとぞ。(太閤素生記、祖父物語及諸系譜參酌)

又一說には、信長或日鷹野に出て、又右衞門が家に立憩はれた。其際お禰々が茶を運び出てたのを見て、歸城の後ち、彼女は藤吉郞が女房にしてふさはしい。二人を夫婦にして遣れと命ぜられたので、結婚する事となつたと云。(永夜名談)顧ふに當時の主從關係は甚だ近い。それて又右衞門と藤吉とが親族の間柄てある事も、信長承知の上、斯かる指圖をせられたのてあらう。此事頗る信に幾い。

之に就いて想ひ合せる事がある。當時諸家の所謂郞黨なる者は、後世の從臣の如き者ては無い。朝たに事へるかと見れば、夕べに去る。多くは獨身の浮浪の徒てある。信長の烱眼なる、夙に之を看取せられ、其足を繫ぐには、女房を持たせ、家を成させるに限ると發明し、大いに妻帶を奬勵せられたらしい。其證據には後年江州安土に居城せられた頃、弓手の一人福田與一といふ者の長屋から火事を出した事がある。すると信長、是は與一奴屹度尾州から妻子を召連れず、獨身生活の結果に相違ないと覺られたので、一々着到牒を調べて見られると、按に違はず、弓の者・馬廻各〻六十人都合百二十人といふ者は、妻子を尾州に殘し置き、熱

れも獨身て勤番し居たのてあつた。之を視て、信長は勃然として怒り、日頃の申付に背き、妻子を引具せざるは、善く〳〵家が不入用と見える。不入用な家なら遣はし置くに及ばぬとて、弓の者六十人が住宅を悉く燒拂はせ、庭木までも切つて棄てさせられた事がある是から推して見ても、藤吉郎に妻緣を命ぜられたといふ傳への眞に幾きを想はしむる。而うして英雄の着眼は千古違はず。今日世界の植民論者が獨身的出稼きを排して、家族的移住を主張するは、畢竟此遺意たるに過ぎぬ。誰か英雄を不必要といふ者ぞ。

藤吉お禰々の此結婚に就き、尚ほ爰に一言を加ふ可きものがある。主將の見旣に彼が如くなれば、機敏の藤吉郎、亦早く其意を迎へ、竹の簀の痩世帶ても、一家を形作つたのてあらうが、それにしても如何に早婚時代とはいへ、少くともお禰々の娶御寮は十六七て無ければならぬ。他年政所高臺院の薨去せられたのは、寛永元年九月六日にて、享年七十六歳てあれば、是かれ推せば、其人十六七の花盛りは、正しく永祿七八年すれば藤吉郎二十八九の頃てある。是時までは古今獨步の大英雄も尚ほ未だ素寒貧のお小人頭か、それに少々毛が生へたくらゐの處てあつたのが知れる。

藤吉郎の出世

天文廿二年、猿歲十八（丁酉より推せば十七）清洲に赴いて、信長の草履取となつてから、追々信長に知られたとはいへ、永祿七八年の頃、お禰々と結婚の式を擧げるまで、通じて十二三箇年。而うして一世一代の華燭の典の其の身そぼらしさから見ても、お小人からして、お小人頭が關の山てあつたらしい。其間には桶峽の大戰もあれば、美濃一圓の征服もあつたが、地位を得ぬ身の悲さは、未だ之に參加するを得ぬ。否や參加はしたかも知れねど、チヤンバタ刀の陣笠ては、何とせん術も無かつたと見える。從つて甫庵の太閤記や、羅山の秀吉譜や、其の復た受賓の諸傳記に吹聽する、淸洲の城普請墨股の築城、扨は大澤誘降の調略、其他雜多の功名談、結局傳說の傳說たるに過ぎぬ。

但し此間と雖も、小身は小身なりに自家の前路を開拓するに力を用ゐた事は勿論である。從つて同じ郷里の淺野・木下・杉原等を手懐けたり、隣國美濃の野武士・山賊の頭領等と交つたりして、次第に爲すことあるの素地を準備し居たのである。何ても彼は結婚の前後頃からメキ〳〵と頭角を露はして來たらしい。信憑す可き信長公記に木下藤吉郎の名が始めて見えるのは、永祿十一年九月、信長出馬、佐々木承禎征伐の時からであるが、此際箕作山城攻圍軍の將として、佐久間右衞門・木下藤吉郎・丹羽五郎左衞門・淺井新八の四人に仰付けられ、即日同城を攻落したとある。而うして豐鑑に藤吉郎の戰功を記したのも、亦此箕作山城の攻陷からである。今此攻圍軍部將の任命を看るに、藤吉郎は早く織田家歷々の宿將たる佐久間右衞門と丹羽五郎左衞門との中間にある。是に於て乎彼は信長幕下に在りて、始めて將官の地位に達したのである。是れ彼が三十三歲(丁酉からは三十二)の頃である。

是から以後、彼英雄の行動は雲霧を排いて天日を見るの心地がする。即ち翌永祿十二年には伊勢の國司北畠征討の軍に參加し、淺香の攻城には、手を負ふまで働いて、其城を攻降し、轉じて國司父子が立籠つた大河内城の總攻圍には、四方よりの寄手四軍の中にて、木下藤吉郎は西口寄手大將の筆頭であつた。旋つて元龜元年には、彼れ歲三十四(丁酉より三十三)朝倉征討軍に加はつて、越前に入り、一時金ヶ崎城在番を命ぜられたが、同年江州横山の城主を仰付けられて、此に入城した。是か彼人一城の主となつた始である。其翌二年まで彼は尙ほ木下藤吉郎と稱して居たが、三年八月に至り、信長、越前の朝倉押への爲に江州虎御前山(前の虎姬)に新城寨を興されるに及び『羽柴藤吉郎を定番として入置かる』と、羽柴の姓が始めて是時から信長公記に見はれた。

元龜四年に改元があつて、天正元年となつた。此時藤吉郎三十八歲(丁酉から三十七歲)てあつた。其年七月、信長は將軍足利義昭の籠城した宇治の槇島を攻落させ、義昭を河內の若江に押籠められた。其際之が警固護送を羽柴

筑前守秀吉に命ぜられたと、同記に見える。羽柴筑前守秀吉と稱するに至つたのは、蓋し此頃からの事である。而うして此歲信長の宿敵であつた近江の淺井、越前の朝倉共に皆討滅されたが、此役に秀吉の戰功最も著るしかつたので、八月廿七日『爰に江北淺井跡一職進退に羽柴筑前守秀吉へ御朱印を以て下さる。忝くも面目の至り也』とある。是に至つて江州小谷二十二萬石の嚴然たる大名とはなつた。

是から恰度十年目、天正十年六月二日、明智光秀の謀叛に由つて、本能寺の變とはなつた。そこで同月十三日には山崎合戰となり、翌天正十一年四月廿一日には、賤ヶ岳合戰となり、天下の大權は自ら此英雄の掌中に歸したのである。

そこで太閤一代の蹤跡を概括し、其事蹟の如何を大別すれば、

天文六年丁酉（或はいふ五年丙申）二月六日の誕生から、天文二十二年、彼が信長の草履取に住込むまでの十七年間（丙申からいへば十八年間）は、木下猿の漂泊時代である。

次に天文二十二年から、弘治と永祿大部分の歲月を空しく打通し、永祿十一年小分ながら方面の一部將に推擧せられるに至るまでの十六年間は、猿の改名木下藤吉郎がお草履取から、お小人扱はお小人頭等に齷齪せし、謂はゞ無駄骨折時代である。尤も此時代を內譯すれば、其の十二三年目から、十六年目までの四五年間、つまりはお禰々の嫁御寮が輿入れ頃から、方面の一部將となるまでの間には、お小人頭から、士分となり、五石・十石から、百石・二百石、若くは千石・二千石と不次の登庸を經たてあらうが、文献缺げたれば知ることが出來ぬ。要するに以上三十二歲（丙申から三十三歲）まで、此曠世の大英雄は神秘の裏に包まれた。

次に永祿十一年、佐々木征伐の一將官となつてから天正十年の中國大返しに至る、十五箇年間は、彼の出世時代ともいはふ歟。昨日までの木下藤吉郎は、今日羽柴藤吉郎となり、前年の羽柴藤吉郎は、翌年羽柴筑前守秀吉となり、忽ちにして橫山の城主、忽ちにして長濱の藩主、此期の中間より以降は、名は播磨一州の

主てあつたが、其實中國探題となつた。

次に天正十年六月、彼れ年方に四十六歳(丙申から四十七歳)天王山を取切つて、明智を一戰に討滅ぼしてより、慶長三年八月十八日、享年六十二歳(丙申から六十三歳)にて伏見の城中に薨去されるに至るまで、中間の十七年間が、彼の全盛時代であつた。

扨彼が如き大英雄を知らんと欲すれば、一面には其事業を觀ながら、一面には其人格及技倆を察せねばならぬ。彼は抑〻如何なる人物であつたらう。是から歩々に吾觀察を進めて見やう。

第一には彼の至誠

てある。一たび甫庵が太閤記に松下加兵衛之綱が委托の黄金六兩を拐去らつて、尾州に突起つたなどゝいふ在られも無い惡名を被せてから、天性横着な人間のやうにして仕舞つた。が、其實太閤は決して左樣な寒しい卑しい人物で無い。彼は天性至誠の人で、邪まな曲つた事が大の嫌ひであつた事は、松下家へ當季の奉公に住込みながら、其家中が主人の物を私するを惡み、倉番となれば、藏品の保管に心を配り、納戸の出納掛となれば、金錢の出入に間違なきやうに心掛けたのでも知れる。而うして一旦同輩から惡名を附けられゝば死を以て爭はうとした。

獨り是れのみで無い。永祿六年の秋、信長西美濃を徇へて、墨俣に軍せられた時である。陣中に於て福富平左衞門が刀に着けた金龍の飾ある笄が紛失した。平左陣中に出入した者は藤吉郎といふので、嫌疑は彼の上に落ちかゝつた。藤吉郎は深く之を遺憾とし、必定賊は贓品を津島あたりにて金にするであらうと推量し、急ぎ同地の質屋に就いて、斯く〳〵の品を發見して届出た者には、若干の褒美を賜はると内々觸れて、待つて居ると、賊は果して質置きに來たから、直ちに引捕へて、陣中に歸り、有司に訴出てたので、其身の潔白を表し得たのみならず、信長の耳に入つて、御感に預つたと、太閤記にも見える。曩に松下家に在つた時其寃名を憤り、死を以て爭はうとしたのと、彼是對

照すれば、其人の律義な事は彰然てある。

或は難じて、左程律義な人が、信長の後たる三法師を、何故何處までも主人に戴き通さなかつた歟といふてあらう。如何にもそれは失徳のやうに見える。然りながら當時の天下は到底空名無實な人物ては統馭する事が出來なかつたからてあらう。而うして彼が至誠の人たる事は、其の得意時代に於て最も善く觀ることが出來る。

それは彼の明韓征伐てある。此擧は彼が群雄を制服し、海内を統一した、其餘威を以て彼兩國に加へんとするのてある。而うして彼兩國は固より吾帝國の領土て無い。此大日本こそ萬世一系の天皇の知ろし召す國てあるから、如何に曠世の英雄と雖も、不軌の志を起さぬは其筈てあれど、當時の世態として、殊に彼が如き英雄として、大陸を併呑せんとするは、成吉斯汗の如く、忽必烈汗の如く、自ら此に帝たらんと欲するが爲てあつたらうとは、何人も想像する所て、後世の史家も概ね皆左樣傳へて居る。處が其實は決して左樣て無い。彼は東洋一帶を收めて、之を天皇に捧けまつらんと欲したのてある。それは軍を出だすに先だつて、朝鮮國王に與へた公書中にも『吾朝の風俗を四百餘州に易へ、帝都の政化を億萬斯年に施かん』とあるのでも分る。併し是は漢文國書の一節てあるから、それだけては未だ十分に眞意は見えかねる。が、天正二十年五月、彼が名古屋の行營から、關白秀次に與へた訓令に徴すれば、彼の精神は一毫の疑ふ可きものも無い。其書は左の通りてある。

覺

一殿下陣用意、由斷ある可からず候。來年正二月比、進發たる可き事。

一高麗の都、去二日落去候。然る間、彌々急度御渡海なされ、此度大明國迄も殘らす仰付けられ、大唐の關白職御渡し成さる可く候事。

一人數三萬召連る可く候。兵庫より船にて相越さる可く候。馬計り陸地差越さる可き事。

一三國中御敵對申す可き者これ無しと雖も、外聞にも候間、武器の嗜事一に候。下々迄も其通り申聞かさる可き事。

一召具し候者共、人持内へ三萬石、馬廻内へ二萬石、下賜遣はす可く候。人數も似合〳〵、下賜遣はす可く候事。

一京都御城米として積置き候八木（八木は米の謂。）手付けある可からす候。其外三十万石を最前すゝめられ候。八木陣用意迄に召遣はされ、不足候へば、醍醐御倉米、入次第申遣はさる可く候事。

一鉄付の刀・脇差千腰、用意ある可く候。餘り大に候へば、差候者、逆送迷惑せしめ候間、刀七腰・脇差三腰餘にて申付く可き事。

一鉄付の薙刀三十枚、鉄付の槍二十本、此外は無用の事。

一長柄の槍は、柄を銀に仕る可く、毛の投鞘は無用に候。大阪に樫枝の枯らし候て置候が是れある可く候間、用ひ處候はゞ、申寄す可く候事。

一銀數手前にこれある分拂底候て、ことかぎ候へば、聚樂にこれある銀數一萬枚、大阪に遣はす、大阪の金數千枚、召寄す可く、但し五百枚用ひ處候へば、銀數千枚替に遣はす可く候。如何程にても、十分の一たる可き事。

一緞子・錦襴・唐織物類、用ひ處候へば、注文を以て申さる可く候。如何程高價買ひあげらる可く候。

一黒毛の鎧五六挺、之を持つ可く候。餘地は無用候事。

一御馬ともに只今拵へ半分牽かせ候。名護屋に鞍解き共に殘置かせ候。其方より數多牽き候儀、無用に候。廣島にも十匹置かせ候條、彼處より牽返さす可く候。皆々飼置く可きの旨、申聞く可き由、西尾教光仰遣はされ候事。

一名護屋・高麗所々、御兵糧澤山にこれあることに候間、用意に及ばず候。路次中の覺悟計り覺悟仕らす可き候。

一小者・若黨以下、下々迄も申置く可く候。此方へ小者共雇はせ候間、俄にこれある可からず候條、前廉御用意肝要の事。

一丹波中納言此方へ申寄す可く候。用意せしめ、一驛相待つ可く候。八月以前たる可く候。借米等のこと山口方へ仰遣はされ候。八月以前に召寄せられ、高麗か名護屋を、御留守仰付けらる可く候。

一高麗御留守居として、三宅中務法印召寄せらる可く候。用意せしめ相待つ可き旨、仰付けられ候事。

一大唐の都へ叡慮うつし申す可く候。其御用意ある可く候。明後年行幸たる可く候。然れば都廻の國々十ヶ國、之を進上す可く候。其内にて諸公家衆何れも知行仰付けらる可く候。下の衆其十増倍たる可く候。其上の衆は仁體に依る可き事。

一大唐關白、右仰せられ候如く、秀次へ讓らせらる可く候。然れば都の回り百ヶ國御渡し成さる可く候。日本關白は大和中納言、備前宰相兩人の內、覺悟次第、仰出さる可き事。

一日本帝位の儀、若宮・八條殿、何れにても相究めらる可き事。

一高麗の儀は、岐阜宰相歟、然らざれば、備前宰相置かる可く候。然れば丹波中納言は、九州に置かる可く候事。

一震旦國へ叡慮ならせられ候路次、例式行幸の儀式たる可く候。御泊の儀、今度御出陣道筋御座所、然る可く候。人足・傳馬は、國限りに申付く可き事。

一高麗國、大明までも、御手間要らず仰付けられ候。上下迷惑の儀、少しもこれ無く候間、下々逃走る者ある間敷候條、諸國へ遣はされ候奉行共召返し、陣用意申付く可き事。

一平安城並聚樂に御留守の儀、追て仰出さる可き事。

一民部卿法印、小松播磨守（秀政）石川伊賀守（定政）以下用意せしめ、御採用次第參陣致す可き旨、申聞かす可き事。

右條々、西尾備後守に仰含められ候。其意を得らる可く候也。

天正二十年五月十八日　秀吉朱印

以上の訓令中に『大唐の都へ叡慮（天皇を指す）うつし申す可く候。明後年行幸たる可く候』といひ、『日本帝位の義若宮・八條殿、何れにても相究めらる可き事』とあるのにて、彼の誠意は明らかである。要するに彼は根本に於て正義の觀念強き人である。此至誠あればこそ彼一代の大事業は自然に成立したのであると思ふ。

第二には彼の威嚴

彼の身體は魁梧奇偉でも無ければ、亦其狀貌婦人の如しても無い。朝鮮の柳成龍が懲毖錄に『明使者を遣はして、太閤の相貌を窺はしめたるに、矮にして、色黧く、他の異なし。唯其眼光烱々として人を射るを覺えしと云』もの、極めて好く當つて居る。それで彼は幼少な時から、人に馬鹿にされぬだけのものがあつたらしい。彼が乞食同様な行裝で、牽馬の橋上に休らひ居たのを、松下加兵衛が見出したといふのも、何處にか屹とした品格を具へて居たからであらう。左も無ければ、小さくても西塚の城主、容易に辭を掛けるものでは無い。

扨彼に非常な威嚴のあつた事は、得意の日を待つて知る可きで無い。それは光秀討滅後、彼が寶寺城に在る時であつた。彼の大度洪量なる、光秀が殘黨は悉く赦免する、主取其他勝手たる可しと布告したので、殘黨の面々何れも新主人を求めて、各がじゝ在りつかんとする中に、津田與三郎重久（太閤記に所謂伊勢與三郎と同人と思ふ）といふ剛の者が居た。彼は光秀が士大將の一人として、山崎合戰にも一軍を率ゐて闘つた者である。敗軍の後ち暫らく高野に匿れて居たが、此頃の恩典を幸に京近くに出て、機會があらば、秀吉に一刀報ゐて吳れうと覘つ

て居た。恰も好し細川忠興は光秀の女聟て、秀吉の信任を得て居たから、此人に頼つて謝恩を口實に、秀吉に接見を求めた。大氣の秀吉早速に承諾し、日を刻して來訪を受けやうといふ。重久は雀躍し、寶寺の館へ伺候すると、一間の裏に請ぜられた。復讎を遂げんは此時なるぞと、堅唾を飲んで待つて居るが、主人中々出て來ない。時間が移るので、待ちあぐんで居ると、思ひがけ無く後ろの襖を颯と開け『與三！好う來た』と大喝された。不意を喫つて、ハッと平伏すれば、秀吉は手に杖を携へたまゝ、ツカ〱と其側に立寄り『其方は感心に天命を知つて居る者ぢや。遲く參つたら此通りてあつたものに』と輕く杖を其首に加へながら、間も置かず疊み掛けて『其方が器量からいへば、萬石も高くは無いが、一旦我等に敵對した者、左樣取らせる譯にも參らぬ。三千石遣はして、旗下に列する。當分それて我慢しろ』と思ひも寄らぬ恩命に、重久は再たびハッと頭を下げて居る間に、秀吉は奥へ入つた。それから彼は前志を飜へして、秀吉に事へるやうになつた。彼は後年前田家の家老となつたが、當時の事を語り出てゝ『殿下は實に天授の人、百萬の敵にも臆せざる積りの重久も「與三！好う來た」と大喝された時には、一斗の水でも浴せられたやうに、覺えず頓首再拜して、醉ゑるが如くに邸を出た』といつたと云。（加藩史料）

又天正十八年、秀吉東征して、小田原包圍中の事であつた。狡猾なる伊達政宗は久しく頑强にして命に抗したるも、大軍の旋つて封境を壓せんことを畏れ、遲れ馳せに小田原に馳せ參じて、緩怠の罪を謝した。秀吉怒つて、淺野長政等をして其罪を詰責させた後、三日目に始めて謁見を免された。橫着者の政宗は胸に一物を蓄えて伺候すると、秀吉は笠懸山の中腹芝生の上に牀机を据え、之に憑りながら、政宗を延見し『此度の遲參、緩怠千萬ぢや。去りながら對顏を許した上は最早念頭に留めぬ。遠來の馳走に陣營の有樣を見せやう』とて、自分の佩刀を彼に持たせて、後ろの山に登り、片岨に足を駐めながら『其方邊鄙の小競合には慣れて居やうが、未だ大軍の分配を見た事があるまい。

善く見て置いて、後學の爲にせよ。彼處に軍を配つたのは攻撃の爲ぞ。此處に兵を置いたのは押への爲ぞ」など、杖の尖にて一々指點して説聽かせながら、後の方を振向かうともせぬ。其大度と威嚴に恐入り、流石の政宗唯々として引きさがつた。後に彼は人に向ひ「自分小田原に參陣するまでには、分別して置いた事もあつたが、扨愈々拜謁した際には、一點の害心が發すればこそ、只管恐入つた次第であつた。何樣殿下は大器にして、天威のあつた人であつた」と語つたとの事である。碎玉話、軍秘錄等 東奥の豪傑獨眼龍すら斯くの通りである。太閤の威嚴以て想見す可きである。

第三には彼の精力

太閤が如何に精力旺盛の人であつた歟は、一生の行事を通じて知る可きであるが、それてば餘りに博過ぎるので、一寸想像に上りかねる處もあらう。試に之を彼が勃興の當年に徴して御覽なさい。

天正九年十二月下旬、秀吉は播州姫路を發して、信長の居城安土に赴き、夥しき献上物を調へて、歳末の御祝儀を申上げ、明くれば彼の一生中に記念す可き、

天正十年正月、姫路に歸て來た。すると恰度其月の九日、備前・美作及備中半州の領主宇喜多直家病歿したので、秀吉は直家が子の秀家を子の如く養ひ、信長に申請して、それに直家の後を承けさせ、三州の地を安堵したから、播磨・因幡・但馬・備前・美作の五州と備中及伯耆の各半州とを擧げて、己の節度に歸した。すると彼は一萬五千の軍を率ゐて、備中に入り、麥飯山の城を拔き、先づ軍威を耀かして置いて、一たび引還し、

二月には大いに管内外の兵を發し、

三月、大擧して再たび備中に入り、

四月までの間に、巣雲塚・冠・河屋等の諸城を攻めて或は破り、或は降し、同月廿七日より、

五月に掛けては、有名なる高松城を圍み、大土工を興して、世にいふ高松の水攻を開始し、併せて水を隔てゝ毛利の援軍と對陣した。すると

六月四日に至り、城中五千の士卒悉く魚鼈の餌食と

なるを悲み、城將清水宗治兄弟が割腹して城を致したので、澄ました顔して城を受取つたが、實は其前夜、本能寺の變報は本營に達して居た。此間鬼神も窺ふ能はざる程の快速な手段にて、高松城を受取ると同時に變報を秘して、即日毛利家と講和條約を有利に調へ、茲に東上の大策を決して、五日の夜明けから退軍を始め、八日姫路に入つて、一日人馬の足を憩めたが、大將自身は諸將の延見、全軍の部署、金穀の指圖等を了へて、母堂の氣嫌を伺ひ、「ドレ一風呂と湯に入られたが、風呂の中から『今夜四ッ時の頭に一番貝、九ッ頃に二番貝を立てさせよ。三番貝は人數揃への合圖と心得よ』と訓令した。それから僅に一睡されたかと思ふ間に、忽ち九ッの二番貝起れば、早や馬を躍らせて、城門を出て、夜のひき明けを待つて、印南野に大閲兵式を行ひ、其儘鞭を揚げて、畿内を指し、十一日には早くも攝津の尼ヶ崎に達し、其翌日十三日、山崎の一大血戰を用ゐて、光秀が三日天下を覆した。十四日は殘黨の追擊、それから引續いて畿内の處分、茲に始めて大勢を制した。

此月柴田勝家は領國越前から兵を率ゐて南上したが、秀吉に先を越されて、大難鎮定の大功を美事其手に收められた。そこて勝家は岐阜に赴いて、織田信雄信孝兄弟、瀧川一益、丹羽長秀等を始とし、信長勳舊の諸將を同地に召集し、此に繼嗣會議を催した。其の催に應じて、秀吉も亦之に赴いた。すると勝家は信孝擁立說を主張し、之を擁立して、秀吉の權勢を摧かうと企てたが、秀吉が三法師推戴說の正論に破られて、終に其論に決定したので、秀吉は三法師を抱いて、諸大名を朝させた。勝家は一再の失敗に刧を煮やし、一策を設けて、秀吉に詰腹切らせうと巧んだのは是時てあつた。幸にも其議に連なつた丹羽長秀が密告し呉れたので、病氣と稱して、直ちに岐阜を引拂ひ、

七月、京都に出て丶、右近衛中將の寵任を拜し、それより領國播州に歸つて、山崎大勝の論功行賞、扨は戰後の經營に取掛つた。すると勝家は如何にしても秀吉が除きたい。そこて今度は亡主總見院殿の大法會を

名義にして、秀吉の上京を促し來た。明智の秀吉はトックに其謀計を見拔いて居るから、それは至極の御催してあるが、名に負ふ天下の信長公の御法事には一新寺院の建立なくては協はぬと申遣つた。勝家亦も此人に陰謀の裏を掻かれ、それとは悟らず、

八九の兩月は晝夜を別たず、京都に於て大伽藍の新築に齷齪し居た。秀吉は此間隙を利用して、大に軍備を整へ、精兵二　餘人を率して、

十月京都に押上つた。之を聞いて勝家・信孝等は風を喫つて、ホウ〳〵の體にて岐阜へと逃去つた。秀吉は之を素知らぬ顏、同月十一日から御法會を開くから御來會を待つと申遣つたが、政敵はモウ懲り〳〵して出て會はぬ。そこで申さば秀吉の獨土俵入、他の大小名を會して、一七日の大法要を執行した。勝家之を傍觀して、憤恨胸に充ち、此上は一大血戰を試みて、雌雄を一擧に決するの外は無いと決心したが、最早十月北國の天、ちら〳〵雪が降出したから、瀧川一益が計を用ゐ、一時和議を調へて、秀吉に油斷させ、明年解雪の候を待ち、大いに三軍を整へ、一益、信孝及佐々成政等と連衡して、一擧に秀吉を滅さんと、密々秘策を定めた上、前田利家を使として、講和を申込んだのである。處が秀吉政・戰兩略の碁に掛けては、勝家よりも數段の上手であるから、是れぐらゐの手は一昨日御承知である。大いに喜んで其議に同じ、數寄屋を建て茶器を買ひ入れ抔して、使節をもてなして還したから勝家手を拍つて、吾計成ると思つたのは、ユートピヤの夢。

十一月上旬には、秀吉管内五萬の大軍を引率して、北江州に出て、長濱城を收めて、賤ヶ岳一帶に三箇の城塞を興させ、轉じて美濃に入つて、岐阜城に取掛け咄嗟に二の丸まで踏破つたから、信孝窘窮して策の出づる所を知らず、丹羽長秀に泣きついて、人質を入れヤットの事に和議を取組んだ。そこで秀吉は濃紅二州を定め、

十二月二十三日、安土に赴き、三法師君に謁見して歲末御祝儀を申上げ、二十六日寶寺の居城に入つて、

諸軍を慰勞をしたが、

天正十一年正月元旦の祝ひを擧げるや否や、寶寺を出發し、其夜の夜半に姫路に到着した。從士は家に歸つてホッと一息、一年の勞苦を忘れんと、己がじゝ祝宴を開き、此處も彼處も謠の聲。なれど主將は少しも休息せず、祐筆數輩に申付け、將校下士卒に至る行賞の恩典から、引手にす可き馬・鞍・太刀・小袖等の品々を計上させ、奉行十人を選定して、五日が内に之を取極む可き旨を命じ、二日の正午頃朝飯を了へて、此に始めて寢に就いたが、恰度一晝夜打通して、グウ〳〵と熟睡した。扨三日の正午後に目を覺まして、氣嫌善く起きあがりながら『昨日來の熟睡で、氣力も殊の外元氣づいた。此分では鬼とも取組めそうぢや』と笑はれた。一食の後には、直ちに諸士の年賀を受け始め、七日には早や再たび上洛。八日安土に詣でゝ、九日には年始の御禮を申上げ、二十三日には七萬の大軍を指揮して、勢州に討入つた。賤ヶ岳の一戰に全く一代の運命を定めたのは、實に此年四月である。（以上川角太閤記、甫庵太閤記、家譜、野史等參酌）

以上僅々一年間餘の行動に視ても、彼太閤が精力主義の權化であつた事が知られるのであらう。彼の天下を取る所以のもの、抑々亦偶然ではない。

第四は彼の快活

即ち如何にも氣嫌の好かつた事である。之を言換ゆれば、物に屈托の無い、淀みの無い、光風霽月の如き氣分で、而も極めて面白みのある人であつた。之に就いても、亦幾多の例證を擧げる事が出來る。

小牧の役に、家康の軍來つて營を對したが、深く警戒して出て來らぬので、秀吉戰書を與へて、明朝快戰しやうと挑戰すれど、家康老功、中々應じない。のみならず人をして之に復せしめて、惡言を加へさせた。すると秀吉、畜生がと憤り、左右數騎を從へて、本營から馳出でられた。素破といふ間であるから、後騎も纔かない。時に敵兵との距離は甚だ近い。秀吉は小高い岡に驅登り、馬より下りて、敵を眺めて居られたが、

忽ち後ろ向き、戎衣の裳をクルリと捲くつて、赤裸々に臀を露はし『家康之を咍へ！』と叩いて見せられた。東軍此侮辱を受け、銃を攢めて狙撃する。其彈丸のシウ〳〵と脚下に落下するを見ながら『乃公樣に丸が中るもの歟』と一笑して退かれた。武邊叢話 之を飯田忠彦が野史に『東照公之を嚼め！』と罵られたと書きつけて居る。如何に徳川時代の著作だからとて、嫚罵の場合に後からの敬語を上せ、東照公此を嚼めとは、呆れ反つた愚文ぢや無い歟。是こそ實に鼻持がならぬ。

又名護屋陣の時でもあらう歟。一日太閤は微行して麾下の諸營を巡見された。すると其一營で小鼓に合せて、小謡を謡ふのが聞える。ハテなと太閤立寄つて、ソッと之を窺はれゝば、それとも知らず、一人は具足櫃に腰打掛けて鼓を打つ。一人は扇を披き、謡ひながらに起つて舞ふ。他の一人は盃を抱へ、笑ましげに眺めて居た。左右の人々大ひに氣を焦み、悪い處が御目に注つた、如何なる御尤めに合ふ事であらうと、顔見合せて控えて居ると『アレ見よ、孰れも甲冑の儘ぢや退屈せぬ奴共ではある』と微笑しながら、本陣に歸り靑樽一荷を『彼奴共に取らせて遣れ。併し餘りに喫ひ醉ふなといひつけ置け』と命せられた。備前老人物語

箇樣な人であるから、主從の間にも隔が無い。其一節を擧げれば、左右に召使はれる童坊の中に某阿彌といふ氣釋な男があつて、日頃太閤の氣入て居たが、一日如何したか御氣嫌に觸れた。太閤怒つて杖追取り、此奴メがと追掛けられる。某阿彌逃げながら、後ろを振向き『殿下暫く御待ち遊ばせ。上樣とて私とて、餘りの違ひも無きやうに存じまする。違ひは只の一日の事、今日こそ私大の過仕れ、明日は上樣とて如何なる御過なきにも限りませぬ。されど彼所樣は殿下の御身分、私奴は童坊の是非なさ、只御仕置次第に御坐りまする』と其儘其處に平伏した。太閤聽いて、忽ち怒を解き『小僧善く申した。今日の事は免して遣る』といひながら、『一寸待て』とて、突立ちながら、

世の中は今日ばかりこそ悲しけれ、昨日は過ぎつ明日は知られず。

と即吟して、徐かに奥へ立戻られた。當時傳へて御名吟なりと感稱したとの事である。全上

彼の臣下に對する、概ね斯くの通りである。それて彼は屢〻人に向ひ「己ほどの主は多く無い筈ぢや。從つて己に謀反する者も無からうと思ふ」と言はれた。老人雜話 然り彼れ一代の間に、昨日の朋輩・政敵などを悉く籠罩して、意のまゝに頤使したにも關はらず、孰れも殿下と崇め尙びて臣事したのは、是にこれ由るからであつたらう。

彼の快活斯くの通りてあるから、巧からうが、拙からうが、遠慮は無い。畏こき邊に於いて宮中御能の御催しなどある時には、毎々伺候して、自身も能役者の群に立交り、能を舞はれた事も度々てあつた。而うして御上から能役者共に御かづけ物などある場合には、同様に拜領し、肩に懸けて引込まれた。或日の如き、宮中の御能日であるとて、馬上參内の途上、烏丸通に差掛られると、若き女共四五人赤前垂を掛けて、見物し居た。すると太閤は馬上より認め「只今內裏にて御能がある。己も舞ふから、御階の下まで、皆々拜見に參れ」と言棄てゝ行過ぎられた。老人雜話 其眞率も亦想見す可してある。

○

以上述べ來つた所は、彼雲中のドラゴンが鱗甲爪牙の一端に過ぎぬ。是から彼の大度、宏量、大志、壯圖、又其傍には細心、堅忍、慈愛、同情、それから一方には其美想、理想、他方には其主義方針、扨は用兵の戰術・戰略、爲政の技倆・手段を觀察し、小さくしては英雄色を好んだり、たわけを盡したりする處までに及ばうと思ふが、生憎天が時間を假さぬから、遺憾ながら此度は此邊にて一段としやう。

官業主義と民業主義

官業主義と民業主義

法學博士　戸田海市

一

官民業兩主義の得失如何は、我國に於ける自由民權論の勃興以來常に朝野の研究題目となつて居り、之に關する一般論を繰返すのは興味の少ないことゝてあるから、茲には研究の範圍を限り、現今開明國に於て益々盛んに行はれつゝある重要の官業に付て二三の注意すべき點を述べやう。今日開明國に於て益盛んに行はれつゝある官業とは、國民全體又は一地方住民の共同生活に重要の關係を有し、且つ自然的獨占の性質を有する事業であつて、全國に亙り郵便電信鐵道とか、都市の電氣事業瓦斯事業等が即ち是れてある、尙ほ茲に官業と云ふは獨り國家の直接に經營する事業のみに限らず、國家の機關たる自治體の經營する事業をも併せ稱するのてある。目下我國に於て國家直接の經營に係る官業に付ては、財政の關係上之を擴張するの餘地は殆んとなく、問題は寧ろ鐵道製鐵所製材所製絨所等の現在の官業を民業に拂下くべきや否やと云ふ消極的の問題てあるが、各地大都市に在りては今後水道電車電燈等の共同的事業を市營とすべきや否やの積極的問題が常に發生するのてある。

二

從來の獨占的事業に付き民業論の主張する根據は種々あるが、其の最も重要なるものゝ一は、之を官業として事業の成績に直接利害の關係なき役人に之を經營せしむるときは、經費徒らに多くして効果は甚だ少なしと云ふのてある。此論たる歐米先進國に於ては頗ぶる能く事實に合するの論てあるけれども、我國ては大に

割引して聽かねばならぬ。云ふ迄もなく此種の大事業を民業とする場合には、個人の資力の及ばざる所てあるから是非とも株式組織の事業とせねばならぬ。然るに近來は餘程改良せられたりとは云へ、本來我國の會社なるものは一種の御役所的空氣に包まれて居り、其の冗員冗費の多きは政府部内の夫れと多く讓らざるが如き狀を呈し、双方とも其の運轉の局に當る役員即ち官僚には多大の缺點がある。成る程會社の官僚は政府の官僚よりも一層其働きが活潑有力てあるが、一面には一層不正直て規律が亂れて居る。又會社の事業は大體政府事業よりも經費が少ないと云ふ事實はあらうが這は必ずしも民業に於て眞正なる事業の改良進步の行はれる爲めのみてなく、內に在ては使用人勞働者の待遇を酷薄にし、外に在ては消費者顧客の削減するの結果てある場合も頗ぶる多い。加ふるに洋の東西を問はず民業の長所は自由競爭の行はるゝ普通の事業に於て充分に發揮せらるるも、他に競爭者のなき獨占業に於ては、民業の長所は完全に現はれずして其の短所は著しく現はれて來る。英國の如く輿論政治の健全有力に發達した國ても、鐵道の如き獨占的の民業に適切の監督を加ふるとは非常の難事てあり、政治上公衆の自治自衞の力甚だ弱き今日の我國ては、固より其困難は更に甚だ大てある。

民業論の重要なる根據の他の一つは、此種の共同的事業を官業とすることは、國民發達の範圍を狹め、國民の企業心を萎微せしめると云ふのてある。成程立憲政體以前の歐洲諸國に於けるが如く、事業の性質如何を問はず、財政の目的から種々雜多の事業を官業とする場合には、此論は寔に適切てあるが、之を直ちに今日の獨占業官業の場合に應用せんとするのは當を得ない。民業の長所は前述の自由競爭の行はれる場合に遺憾なく發揮せられ、又民業の貴き所以も主として其の自由競爭の精神に在るのてある。獨占的事業を民業としたからとて、決して一般の企業心を振起することは出來ない。却つて此等の獨占業が民業となり、從つて主なる企業家は何づれも此の獨占の城壁內に其の根據

を据へるやうになれば、一般眞正の企業心は萎微不振に陷らねばならぬ。近來我國で新事業と云へば常に電車電燈や瓦斯事業に限られて居ると云ふが如きは、企業界の爲めに甚だ悲むべき現象と云はねばならぬ。活氣の旺溢せる企業界は須らく當に自由競爭の天地に突進するの勇氣がなくてはならぬ。成る程此等の事業を公營とするときは、其資金を代表する所の國債市債は民間投資者の手に固定せらるゝ傾あるに反し、之を民業とするときは、其資金を代表する所の株式は金融界に浮動し、取引所に於ける投機取引だけは之が爲め大に活潑となる譯であるが、投機取引の盛否如何を以て眞正なる企業心の消長をトすることは出來ぬ。尙ほ獨占業を官業とすれば、我國では幾分政府官僚の勢力を增長するの結果となるが、其の代り之を民業とすれば金權の跋扈を來たす虞がある、普通の事業が盛んとなつて大金權の發生するは、寧ろ社會の進化として喜ぶべきであるとしても、獨占業の場合には金權が國會や市會を金力で左右すると云ふが如き政治上の腐敗を生し易いから、獨占業に立脚する金權は頗ふる危險のものと云はねばならぬ。

三

以上論する所により直ちに我國は今後獨占的事業を盛んに國營市營とすへしと結論し得るやと云ふに必しも然らす。之を公營とするには第一に國家自治體の財政上の地位より考へねばならぬ。現に國家の財政より見れは官業縮小を餘義なくするの狀態であり。又自治體の財政とても多くは甚た切迫して居る。併し予輩か公營事業に付き此際特に讀者の注意を請はんとするのは、此財政の點よりも寧ろ今日國民か國家自治體をして獨占事業を公營せしめんとするの精神及國家自治體の當局者か之を公營せんとするの精神如何の點てある予輩は此精神か時勢の進步に伴はさる幼稚のものてあり、又此精神を以て公營を爲すことは之を民營とするに比して劣らさる弊害ありと信する者てある。

我政府か鐵道國有の方針を採用した場合を見ても、又今日多くの都市に於て電車電燈等の市營論の起る場

合を見ても、之を以て好個の財源たらしめんとすることは、其の最も有力の動機となつて居る。財源の枯渇せる我が公共團體の現狀では、此動機が重きを爲すは自然の勢であらう。予輩も公營事業は絶對に實費主義を採るべく、如何なる場合にも收入主義を採るべからずと云ふのではない。事業の改良進步を行ふて生產費を節減し得たる範圍內に收入主義を採ることは必しも常に批難すべきではない。併し乍ら官業は本來民業よりも事業の改良進步に由て生產費を減少することが困難であるから、收入を重要な目的として始めた官業は概ね失敗に了らざるを得ない、强て收入の目的を達せんとすれば純營利的の民業と同一の弊害に陷り、外に向つて料金を高くするか、又は設備に資金を投じて公衆の便益を圖ることを避け、即ち劣等品を供給して不當の高價を貪るか、若くは內に在て資本の消耗に對し適度の償却資金を積立てざるか、即ち資本を虐使するか事業に使用する所の勞働者の待遇を酷薄にし、即ち人間を虐使するかの弊に陷らざるを得ない。公衆に高率の料金を課するは一種の消費税又は營業税となるのであるが、元と公營事業は社會公衆の共同生活に必要の事業であるから、租税賦課の目的としては概ね適當なものでなく、寧ろ公共團體は經費を投して其の普及發展を圖ることを必要とする場合が多いのである。又資本を虐使して目前の收入增加を圖るか如き自殺的方針の不都合なるは多言を要せぬが、人間の虐使も亦決して許すべからざる方法である。否な現代の國家自治體は人間の使用に付き社會政策上新なる重大の責任が生じて來た。此點は特に讀者の注意を請はんとする點である。

我國も經濟狀態の變遷に伴ひ、不完全ながらも工場法を制定して、先進國と同じく社會問題解決の大事業に着手した。既に國家が社會政策の實行を企て、民業に對して勞働待遇の改善を命しながら、一面國家自治體の事業を行ふ爲め自から勞働者を使用するに方りては營利一片の民業と同樣に出來る丈け之を虐使して收入の增加を圖ることは甚しき矛盾であり、又社會政策を

實行せんと決意せる國民の良心の許さゞる所である加之國家は勞働者待遇に付て成るべく營利一片の民業に對し模範を示し、之を誘導する道德上の大責任がある。今日多くの國では國有鐵道、郵便電信、陸海軍の兵器製造、大藏省の專業事業や市營の水道電氣瓦斯等の事業に於て多數の勞働者を使用し、國內に於ける最大の雇主となつて居るから、其の勞働者待遇の如何は一般民業に對し重大の影響を及ぼすのである。固より國家の使用する勞働者は一國全體の勞働者に比すれば小部分に過ぎない。故に其待遇を飛び離れて厚くするは不公平の處置であり、又民業に對して勞働需用の競爭上不當の壓迫を加ふる結果ともなり、一面民業に對し模範となりて之を誘導するの効力を生ずることも出來ぬ。故に國家の勞働者待遇の改善は勿論適度を失ふてはならぬが、苟くも社會實行の責任を有する國家が自から雇主となる場合には前述の如き重大なる責任を免れることは出來ぬ。現に先進國に於ては國家自治體は其の使用に關する勞働者に對し、生命健康風紀を保護する爲めに工場の設備を完全にするは勿論、給料も勞働組合の決定する標準率を認め、勞働時間も成るべく短縮し、救濟事業に補助を爲し又は勞働保險の賠償金に補給を爲し、賜暇の制度を設け、住宅を建設し、消費組合を補助し、其他修養慰安に必要な設備を爲し、凡て勞働者待遇上常に民業に卒先して之を誘導するのみならず、國家自治體が其需用の物品供給や工業を民業に請負はしむるには方りても、勞働者待遇上一定の條件を附して、之を守らざる者には請負はしめないやうな間接的政策をも次第に採用して來た。勞働者虐使に由り生產費を節減して最低價の入札を爲す請負者に落札することは、國家が間接に勞働者の膏血を絞る不道德の處置であると考へらるゝに至つた。我國では今ま一朝にして歐米先進國の如く國家自治體の勞働者待遇を手厚くすることの出來ぬは勿論であるが、社會問題の次第に切迫しつゝある今日、特に工場法を制定して之が解決に着手せる今日に在ては最早や社會政策上の責任を無視して官業を營むことは出來ない。果して

然らば官業に由て正當に收入を得べき場合は益々減少せざるを得ない。

四

官業に於ける勞働者待遇上今一つ社會の政策の上から注意すべき大問題がある。先日東京市營電車の從業員が同盟罷業を起したことは、我國の勞働運動上重大の新例を開いたのである。元來同盟罷業の目的には二種ある。一は勞働者が雇主に對し最も有利の條件を以て勞働を賣り付けんとする爲めであり、其性質は恰も生産者商人が聯合して商品賣買の掛引を爲すと同様な經濟的のものである。然るに他の一は同盟罷業に由て社會公衆を威嚇し、以て無産者階級に有利なる社會組織の變更を企つるのであり、此目的を達する爲めには其の罷業の大規模なることを必要とし、又社會共同生活の運營を危險に陷らしむることがあるから、共同生活に直接の關係ある郵便電信如き事業に付て罷業を起すのが常てある。此罷業は政治的意義を有し、特に現代革命主義たる社會主義者の一部が好んて採用せんとする所てある。尤も罷業の目的は純經濟的のものてあつても、鐵道、郵便、電氣、瓦斯等の事業に付て罷業を起すときは、直接に社會公衆の共同生活に危害を加へるから、其弊は多く政治的の罷業と異ならぬ。現に此頃英國の炭坑夫が起さんと聲言しつゝある同盟罷業は、雇主をして給料最低率を定めしめんとする經濟的のものであると同時に、頗る政治的色彩を帶び、鐵道從業員等と聯合して石炭の供給を停止し、以て常に獨逸に由り威嚇せられつゝある英國の海軍をして戰鬪力を失はしむると同時に、石炭と鐵とに由て運轉せられつゝある一般産業に大打擊を加へんとするのだと傳へられて居る。此種の罷業は社會の共同生活を危險に陷れるから、若しも勞働者の社會的政治的勢力が强大てあれば、政府や輿論は勞働者を責めて其罷業を鎭壓するよりも、先つ勞働者の要求を斥けて重大の罷業を起すに至らしめた雇主に對し壓迫を加へ、事の正否を問はず之をして成るべく勞働者の要求を容れしむるやうに努力するの傾がある。

共同生活に直接關係ある事業に於ける同盟罷業は其の目的の如何を問はず、安寧秩序を亂すの結果を生ずるから、之が取締に付ては特に注意せねばならぬ。彼の警察及軍隊の力を以て之を鎭壓するが如きは最も拙策で且つ最後の手段でなくてはならぬ。或は此種の事業に付ては同盟罷業を禁止し、之が違反に對して重き刑事制裁を附することも一の方法であり、近來此方法は次第に廣く行はれんとするの勢が見へる。併し同盟罷業は資本の勢力に對する勞働者の自衛運動の最後の手段であり、其最後手段を缺く所の運動は恰も兵備を伴はざる外交と同じく効力が甚だ少ない。公衆の安寧の保持の爲め已むを得ずして勞働者より此最後手段を奪ふときは、一面國家は常に勞働者の正當の利益を保護するの方法を設けなくてはならぬ。特に注意すべきは他の事業であれば數多の雇主があつて、互に勞働の需用に付て競爭するから、勞働者の利益は自然に保護せらるるのであるが、獨占業に付ては雇主間の競爭がないから、同盟罷業の手段を奪はれた勞働者の地位は甚だ不利に陷らねばならぬ。故に此種の事業に於ける勞働紛擾を防ぐには、勞働委員即ち勞働者全體の要求を正式に代表する所の機關を認め、雇主の委員との意見が一致しない場合には、更に其爭議を公けの調停及仲裁に附して其決定を强行するが如き方法を採らねばならぬ(拙著日本の社會第十七篇勞働委員參照)。併し此の委員制度や仲裁制度は勞働の團結運動の進步し且つ其社會的地位の向上した所でも實行は中々困難であり又勞働者が擧つて仲裁々判の判決に服從を拒むときは非常手段に訴へて之を鎭壓するの外はない。然るに此種の獨占事業を國家自治體の公營に移し、其勞働者の待遇を模範的にして不平を起さしめず、又重立ちたる勞働者をして官公吏の身分を得せしめ若くは之れに同樣の待遇を與へ、特に永久其業に安んじ得るが如き保證を與ふることゝすれば、同盟罷業の危險は實際消滅して仕舞ふ。元來獨占業を公營とする第一の目的は、金權が公衆より不當の暴利を貪ることを防ぐのであるが、同時に社會問題の切迫に伴ふて開明國の公安

を危ふする所の同盟罷業を防止するにも最も有効の手段となるから、其の公營は所謂一擧兩得の策である。彼の伊太利の鐵道國有を實行した場合にも、鐵道に於ける危險な罷業を防止することが、其の一大理由となつたのである。

我國に於て多數の勞働者を使用する大規模の工業と云へば、紡績製糸の如く主に女工を使用する事業てあるから、重大の同盟罷業が起る危險は極めて少ない。然るに鐵道郵便又は電氣瓦斯等の獨占事業は何れも多數の勞働者を使用し、且つ其勞働者は相當に智識も進歩して居るから、今後勞働運動の進むに從ふて此種の事業に於ける同盟罷業の危險は頗ぶる大となる。故に國家自治體が此等の事業を營むに付ては、同盟罷業に由て公安を危險に陷らしめざるやう努力するの責任がある。而して此責任を盡すには決して單純なる威力を以てすべきてない。特に市の如く警察の實權を有せざるものは威力も甚だ乏しい。此責任を盡す根本方法は本來公共團體が負擔して居る社會政策上の任務、即ち自己の使用する勞働者の待遇を模範的にすると云ふ方法の外にはない。此の本來の任務を盡せば同盟罷業の危險は自然に消滅するのである。東京市の電車罷業は甚だ不條理なもので、市の當局者が其責任を負ふことは出來ぬかも知れぬが、現今我國に於て公營事業に關係せる國家自治體の當局者や又社會一般の輿論は、未だ公營事業に於ける社會政策上の重大なる任務を理解して居らぬのではないかと思はれる。當局者や輿論が此の重大の新任務を理解しない間は、歐米諸國に於けるが如く國家自治體が盛んに獨占事業を公營するの資格はないのである。

官業民業と分くるは非科學的也

法學博士 男爵 阪谷芳郎

官業主義民業主義といふ事は非科學的の分け方で其意味が甚だヴエー

グだと思ふ。明治初年より今日に至る四十五年の間我政府の方策として何も官業主義などいふ一の固定した主義によつた事はなく、從つて又歐米あたりに唱へらるゝ社會主義とか何とか云ふ如き思想を受けて如何といふ樣な事は少しもないのである。主義をいへば民業を重んぜなければならぬに極まつて居るので、只明治の初から是は官業と定まつたものは貨幣、紙幣、印紙、又は兵器彈藥等、其性質の國家の信用又は軍備の秘密に屬するものだけであつた、否此種のものは一歩進めて、決して將來と雖も其全部を民業に委する事は無いと思ふ、けれども是とても必ずしも政府の手ですべきものと限る譯けではない。若し國家で經營して自國に需用するだけのものを製造するとなると、勢ひ巨額の固定資本流動資本を寢かす事となるが、此場合に左樣な窮屈な事をせず、自國丈の需用を充たすのみでなく、民間の商業として、他國の註文をも受け製造する事となると左樣な資本を寢かす憂がない、卽ち一國經濟の上に多大の利益がある。すれば民業としても差支ないので歐米諸國には現にそれが許されて居る。卽ち兵器軍艦などは夫の有名な獨逸のクルップや英吉利のアームストロングといふが如き、何れも私立の會社で盛に製造して居る、此等の實況を私も彼地へ行つて觀察して來たのです、近年我國でも次第に民業を許し、現に室蘭には英人と日本人と組合の大なる兵器製造所が出來、又平塚にも英人の建設に係る火藥製造所が出來た。軍艦の如きも矢張り軍備の秘密に屬するといふので、初は只橫須賀其他官立の造船所以外には製造の註文が無かつたのだが、近年では三菱や川崎の造船所へ註文が出て追々盛に製造して居る、又明治四年に黑田淸隆さんが北海道の開拓使長官に爲られ、開拓の必要からでもあらうが彼の時分は妙な事で、北海道全部を十ケ年間開拓長官に御委任といふ事になつた。で北海道では製麻なり砂糖なり麥酒なり炭坑なり色々の仕事を一切開拓使の手でやつた、又伊藤博文さんが工部省を起された時には、鐵道、電信からセメント製造迄もやる、製鐵もやる其他種々の工業をやられた、當時はまだ科學が進まず、肝腎な技師さへ人物が乏しいといふので假に工部大學と云ふ學校迄も造つて專門家を養成するといふ樣な事をした。尙ほ大藏省の造幣局でも印刷局でも其頃は色々の工業に手を着けたもので、今の大阪の三菱會社で經營し居る精煉所の如き、それから硫酸製造の如きものをまでも其處で經營して居つた。處が明治十四年になると開拓使の任期十ケ年といふのが滿期になつたが其際黑田開拓長官に對する非難が世間に囂々と起り、諸所で演說なども盛に行はれた結果、開拓使官有物一切の拂下となる、又明治十四年十月政變があつて大藏卿の大隈さんが辭職し代つて松方さんが、其椅子に凭るといふ事となつたが、此北海道に於ける官有物拂下が導火線と爲つたといふで無いかも知れぬけれど、兎に角紙幣整理の必要もあり繼いて凡ての官有物がなるべく拂下の方針となつた、卽ち政府が自ら事業をして民業と競爭するは宜しくないといふ事で、今迄の官業が續々民業に移さるゝこととなつた。

が考へて見れば何も政府が間違つて居たではない。初は民間に委れんとしても、如何せん德川幕府三百年間の鎖國時代の後で、凡ての民業が

發達して居らず、之を彼等に任せ樣としても出來ぬ。如何しても政府が先づ創めて見せなくては駄目である、民間では利を見ぬ事業に手を出さぬ限前に五分なり六分なりの利益の配當を見ぬ間は決して投資するものでない。之を自然の成行に任せて相當の利益の見ゆる迄放つて置くとすると何時になる事やら前途は遼遠である。それでは到底歐米諸國と頡頏か出來ぬ、で據なく政府が先づ御手本に色々な事業を創めて見せなければならぬ必要を生ずる、謂はゞ官業主義ではなく、一の敎育主義である。が今は其必要が無い。是迄手を引いて來てやつた子供は最早や大きくなつて此上手を引く必要がないから離した迄だ、それより後は右の敎育主義は變じて保護主義となつた。即ち單獨では經營の六かしい事業に政府が補助金を出し相當の補給をしてそれを成立たせたのである。鐵道會社、郵船會社東洋汽船會社等がそれである。又銀行の如き是は必ずしも補給ではなく、澤山の株を政府で持つてやつたものもある。即ち正金銀行とか日本銀行とかいふのがそれだ、又朝鮮銀行や農工銀行等には補給もして居る。是は斯樣にせなくては到底其事業が成立たぬ、而かも之を成立たせれば一國經濟の上に非常に利益があるといふ場合にするのである。それ故是も決して官業主義などといふ名を負はすべきでない。

それから鐵道を國有としたが、是も社會主義者は或は喜んだか知らぬけれど、何も社會主義の思想が與つて力を爲したものでない。卽ち明治卅九年に私が大藏大臣であつた時分此鐵道國有論を採つた主旨は、交通機關の發達は國民の利福を增すものであるのに、民業であつては其發達が到底思ふ樣に望めぬ、民業であると實に幾多の小會社がある。卽ち全國の鐵道が澤山の小會社に區分されて居る、一寸東京から甲府迄行くにも途中十六哩の甲武鐵道がはさまつてあると云ふ有樣である。斯樣に小會社が多くては經濟上に非常の損がある、各會社に各々の社長を置き各々の工場を持たなければならぬが、今それ等に大きく統一が與へられると、つまり機關車其他も新橋の工場で修繕もする製[illegible]もする、社長も亦全體を通じて一人で濟む、多くに分れればそれ〲に機關を要するものを一つに纏めて仕舞へば大に費用が省けて萬事輕便に成り行くは見易い道理である。又改良を行ふとしても、統一がなくては所詮行へる事でない。此頃は廣軌にすべき議論があつて漸次左樣なるべき氣運に向つて居るが、何れも一つの手で經營されるんでなくては駄目である、卽ち後と前とが廣軌に改まつた所で、中間の十六哩が他の會社の經營に屬し、廣軌に改めない場合には困る。之を壓制して改めさす譯にも行かぬとすると、後前の列車が互に其處迄來るとそれより前に運轉出來ぬ事となる。斯樣な譯で日本の肝要な戸口々々が方々妨害されるとあつては其不便不利益は言ふばかりない。是非とも鐵道には統一を要するといふに在る、私の考へた所は只統一を主とするにあるので必ずしも其統一を官業でするといふのではなかつた。勿論政府に居るものとしては自ら官業で統一するといふ事に考へ及ぶであらうが、當時民間には二つの議論があつた。卽ち官有統一と民有統一とであつた。けれども如何せん民間には到底一個人の力で之を爲し得るものがないので、勢ひ矢張り政府で統一を附けなけれ

ばならぬ事となつた。而かも政府の手で統一するとなると其上に軍事上の便益もある。即ち此の如く只國家經濟の眼目からしてしたもので、それ以外何等固定の一主義の影響を受けた事ではない。

鐵道の國有は要するに小國に於て特に行はれる。即ち小國に於て民有となし幾多の小會社を立てて交通機關の統一を缺くが如き事あつては甚しく不利なのであるそれ故歐羅巴でも瑞西、白耳義の如き小國は皆國有であるが、是等は恰も日本の如きと國情の同じい所がある爲であらう、其他大國に於ても、獨逸の如き國有である佛蘭西の如き漸次國有に爲しつゝある。英吉利も其領屬地印度に於て鐵道を國有とし樣として居る、只買上年限が定めてあるので、其滿期を待つて決行するのだからまだ多少間がある、之に比すれば日本は日露戰爭の後を利用して無理矢理決行して仕舞つたのだから稍激烈のやり方の嫌はあるけれども、彼我國情の相違で已むを得ぬ。

尙ほ私の當時の考では鐵道で得た收益を一般會計に廻し、それを以て成るべく租稅を輕減し民間の負擔を少からしめんとしたものであつた、然るに其後政府は鐵道事業を全く特別會計と爲し、一般會計より獨立させて仕舞ひ、得たる收益を以て鐵道線路の延長等專ら其事業の發展に投ずる事とした、是は如何いふ考であつたか、兎に角私の考とは違ふ。私の思ふには民間では利益のある處に必ず投資する。即ち從來會社の手に任せてあつた時は、株金若くは社債を以て經營して來たものであるから、それが國有となつたからとて利益のある處には資金は苦まずに集る、今迄株金若くは社債であつたものが、今度は國家の手だから公債の名で集まる。すれば必ずしも特別會計と爲し、それで得た收益を事業の發展費に流用するの要を見ない。それに今迄國民は鐵道株を持ちて利益の配當を受けて來たものを、國家の手で强制的に買上げたのだから、收益は其點から考へても一般國民の利益になる樣に使用すべきである。即ち一般會計に納附して租稅の輕減を計るといふ事が一番合理であらうと思ふのである。私の居つた時ですら千萬圓の利益があつたのだから、其後事業の發達に從ひ追々增進すべき筈であるとすれば、假にそれを以て公債の利子を拂ひ尙ほ且つ一方線路の延長を爲すと共に、一般民人の負擔をも輕減せしめ得たと信ずる。當局者の意は今は建設時代發展時代であるからとの考でもあつたろうけれども、私は右の理由を以て甚だ之を遺憾とする。私は甚だ之を憂ひて、時の當局者に色々忠告をも試みたのだけれど用ひられず、又如何せん斯樣な問題は極めて機微の事で、派手な性質のものでない所から左迄世間の注意を惹くに至らず了つた。即ち私の最初の政策は明に其後に於て少くも一半は破壞されて了つたものである。

國民は重稅の負擔に苦んで居るが、能く研究すれば未だ幾らも面白い方面がある。森林問題の如きも左樣だ、此邊を能く調査すると世人の一寸氣付かね財源がある。オールド、カントリーとしては日本程多く森林を持つて居る所は少ない、之を巧に整理して行くなら大に國利を起し民力の休養を謀る事が出來るので、私は在職時代に其整理を試みたのである。今の處では何處の森林も濫伐又濫伐、場所によつては山元の人民が愈と

火を附けて枯しなどする。之を政府では枯損木と稱して僅に拂下ぐるといふ樣な事をする。又官有森林と帳簿にはチヤンと載つて居る所でも、實際行つて調べて見ると僅か二三本の杉が淋し氣にヒヨロ〳〵立つて居る所を隨分見受ける。斯樣な處を調べ出し、到底收利の見込なく又何とも手の着かぬといふ處はそれ〳〵拂下げ、その金を以て一方殖林を勉める事にする。左樣して時機を見て材木を伐り出し市場に出すといふ事にすれば非常の利益を見る事が出來る。で私は農商務省山林當局者の議に贊成して森林を獨立經營とした、即ち特別會計としたのだあつたが、其後は如何なつたか、今でも其方針でやるべき筈であるけれども如何なつて居るか、調べても見ぬから現在の所は分らぬ。

電車市營の如き、此方には或は幾分社會主義者の思想が加味されて居るかも知らぬ。例へば前に電車燒打の如き事件もあつたから、それ等の事情も幾らか斟酌されて居るやは知らぬ、併し是とても想ふに必ずしも左樣ではあるまい、只前の鐵道國有とは違ひ重に市の財政問題より其必要を感じたものであらう。是は又自ら別問題にはなるが、兎に角今日は市町村の財政といふ事が重要な問題となつて居る。それで其方の補給を計る爲に此電車市營を策したものであろう。それは或は左樣ばかりでもないも知れぬ、會社側の運動も隨分あつたであろうし、市當局者にも亦何等か自己の腕が出したく、自分で大きな事業の經營をして見たいといふ點からも、色々計畫のあつたのかも、知れぬけれども、それが最後の斷案たるべきものではない。フアイナルレゾリユーシヨンとしては正理の命ずる所に據はればならぬものだから、矢張り如何しても市の財政といふ事が主たるものであつたらうと思ふ。其備を爲したるものは大阪である、大阪市では築港問題に莫大の投資をしたが、其後一向利益を見る事が出來なくて困つて居る、埋立地も後年になつたら價が出て、騰貴するかも知れぬけれども今分では駄目である。さればとてそれを悉く戶數割に掛けて市民から誅求するにも忍びぬといふ譯で、時の市長の鶴原氏が私の處へも度々來て相談をした。で鶴原氏は電車を市營とし其利益で市の財政を補ふと云ふ考を起され私も之れに同意したのであつた、が下手をやつて士族の商法にならなければ宜い、何しろ大阪には川船が縱橫に通つて步行くから如何かとも心配して居たけれど、元來大阪人は算勘に長じ經營が旨いからか、やつて見たら結果が宜い。心配した川船も、川は其性質上迂餘曲折して居る上に船の人を乘せる量も亦知れたものである所からか、市民は皆電車を便利とした。此樣な有樣で築港の損失も大に此電車の利益で補給する事が出來た。此結果を見たものだから東京でも京都でも其例に倣ふて電車市營を願出たのであらう。私の在職中にも既に東京市から其願を出したのであつたが私は許さなかつた。何しろ大阪市の例があるのでそれを楯に取つて迫つて來るに相違ないので、當局者も亦それあるが爲に遂に許すに至つたのであろう。私は大阪市にだけ許したものの、他には其後成る丈、許さぬ方針で居つた。といふのは許して大阪市の樣に、必ずそれが爲市民の負擔を減ずるものなら宜しいけれども、左樣でなくして反對に增す樣な事になると、之を許可した

政府が市民に對して申譯のない事になる。東京市の出願に對しても、私自身で算盤を取り、其負債やら、利子やら其他の費用一切等を取調べて見ると、如何しても市で經營しては割に合はぬ、利を見る事の出來ぬものに對して盲印を押すことはならぬ、苟も政府が之を許可する以上は必ず人民がそれによつて大に負擔を免るゝの確信がなくては駄目である。彼の滿鐵の如きも左樣である。壹億圓或は貳億圓に近き資金に對し六朱の利益を政府が保證したのであるが、その社債に對しても政府が保證を與へた所が當時外國の新聞紙は之を非難し日本政府が負債義務を增加するの不得策なることを囂々と議論を揭げた、それに對して私は、政府が保證した以上は自ら負擔となる樣な保證はしないことを答辯したのである、即ち私は滿鐵會社は必ず六朱以上の利益を生ずるものとの見込が付いたから保證したのである、若しも私の見込が間違つたら政府で一ヶ年に少くも五六百萬の利子を負擔せなければならぬから大した事には相違ないが、私には成算がなければ保證はしない。若し萬々一結果が見込通りいかぬとすればそれは會社の遣り方が惡いのだから、私自身直に官を去り、其社長なり總裁なりの位置に就いて經營し、自分の豫算通り成し遂げるだけの覺信を有するのである、

敢て迷惑を國家に掛けぬとの自信あつての上である。私は無暗に保證せず又無暗に許可せぬ、けれども其保證し許可した者に損を見る事はない。即ち今日に至つても猶ほ左樣であろうと信ずる、或は何處かに損を見るものもあるか知れぬが、左すれば其經營者が乾度惡いと信ずる。

要するに主義としては官業でなければならぬとか、民業でなければならぬとかいふ事はなく、只前にもいつた如く教育主義と國家經濟主義とに因る者で、一々其時と其場合とによりて各事業の性質次第で取捨せなければならぬ、即ち郵便、電信、鐵道の如き專占の性質を有する大きなものは國家の手でするを自然宜しとすべく、然らざるものは民業とするが宜い。原則としては成るべく民業を盛にすべきで、政府は之と利を爭ふべからざる事は言ふ迄もない。彼の製鐵所や製絨所の如きでも政府は故らに民業と競爭せん爲に經營したものでない。今は民業が猶ほ不發達で充分の供給を得る事が出來ぬ、さればとて之を外國から買へば徒に利を外人に委するばかりである。といつて民業に補給金を出すとすれば其大の額を要する然るに政府が經營するとして見るも補給方法よりも算盤が持てるといふのでやつたのだから、民間の事業として進み、羊毛の產出も澤山に出來、製絨業が盛になるに至れば政府は何時其製絨業を止めても宜しく、左樣なれば當然之を民業に拂下ぐべきである、亦製鐵事業に付ても同じ道理である。

政府のフアンクシヨンは國家の治安秩序を保つを主とする、それ故工業までも自らする必要は毫も無い其民業とすべきは民業とすることに勉めるが當然である、鐵道の如きも、單に運輸丈を政府で掌るとし、其鐵工所の如きは民業にして宜い、即ち大宮其他の鐵工所の如きも何も强いて何時迄も政府が自らする必要はない。只時期の問題である、何時之を拂下ぐべきかが問題である。要するに官業主義民業主義の議論のやり方は頗

るまづい、アンサインチフィックの言ひ方である。それを言ふには最少と能く過去の歴史に遡つて實情を調査する要がある。

市營事業について

田川大吉郎

◎もと〳〵總ての事業は民業を土臺として出來て居る、即ち昔の國家には、今の所謂官業なるものは全く無つた、今の所謂官業は、要するに近代的國家の特有物である、それだけ國家の觀念、若くは其意識か變化して來たのだ、或は發達して來たのだ、知らず今の非官業論者は、此變化若くは發達を如何に思ふて居るか、これが僕の非官業論者に先づ問ふて見たい第一聲である。

◎去りながら、左様に思ふからとて僕は何でもかんでも皆官業にしようと思ふ者ては無い、官業にしていゝものもあるが、矢張民業が土臺だ、概して言へば民業が其一般的基礎を爲して、所謂官業は其間に點綴せらるゝ一二の散らし見たやうなものである、若くば斑點見たやうなものである、故に所謂官業に就ては自然に嚴密の檢索が要る、其檢索なしに、一概に官業がいゝ、官業が利益だ、必要だと主張する事はとても出來ない、從つて只漠然たる官業民業の比較論も出來ぬ、前提として、先づ如何なる官業が必要か、適當かの具體的提案が要ると思ふ、

◎然し其方面の注意を凝らした議論は必らず有るだらうから、僕はそれらをそれらの君子に委ね置き、僕としての緣故最も直接的なる市營事業に對し、少しく述べて置きませう、市營事業を所謂官營事業の一部として（そこに區分のあるべきことは僕も知らぬては無いが、便宜上、更に日本に於る實際の傾向上進んで其區分論までには深入せずともと思ふて）

◎僕が曾て讀んだ本に「市營事業の範圍」と題する一節があつた、つまり市營の事業は民營の事業に對してどこに其分界線を描くか、水道市營に止まるか、それとも電燈瓦斯に及ぼすか、それとも電車に止むるか、

又屠殺場、肉類市場に及ぼすかと曰つたやうに、各方面の事實並に要求、成績に照して、其範圍を限定する標準を求めんとしたのであつたが、其著者はそれからそれへと論じて、殆んど其區域をこゝにと限り得ず、或は限るに及ばぬ意向かと猜せしむるに足る赴があつた、僕はそれを甚だ面白く讀んだ。

◎其議論の中に、今じや市營の水道、瓦斯、電燈、電車は、殆んど普通の事實と爲つたが(著者は英國の人)假に所謂獨占的性質のあるものは、之を市營にしたがいゝといふ論法から考へると、市營の事業は以上の數者に止まらぬやうである、何となれば今では、石炭、牛乳、麥酒、パン、滊船、滊車、保險、電話、家屋、土地の如きものは、大抵、競爭が熄んで仕舞つたのであるから、其論法から言へば、これらも亦市營にすべき當然の事業であると言はねばなるまい、否、さう論ずることが當り前で、殆んど疑ひを容るべき餘地が無い、吾等は既に市營の水道、瓦斯、電燈、電車に依つて、此等の市營が、同種類の民業よりも遙に良好にして且低廉幸福なることを承知した、其吾等は何故に市營の石炭、麥酒、牛乳、パン、靴、保險、家屋の類を企て能はぬだらうか。

◎人は瓦斯なく、電燈なく、電車なくても暮すことが出來る、然しながら食物なく燃料なく、家屋なく、衣服なくては暮すことが出來ない、此等のものは生存上の便利の要件といふよりは寧ろ必要欠ぐべからざる要件である、其便利の要件を充たす市營が必要なら、其必要の要件を充たす市營は一層必要では無いか、と言つたやうな調子で、隨分、痛快に、又太だ鮮明に論じて居た、僕は今此說を是認してどうのかうのと言ふのでは無いが、どうか舊習に囚はれて、それを墨守して、全く其範圍内にこびりついて居るかの如き世上或種の人々に此等の思想、研究の存在する事實の一端だけは知つて居て貰ひたいと思ふのである。

◎善く家屋の話が例へに出る、それは此うだ、世間の家主さん達が、貸屋を建てるのは、貸屋を建てゝ一と儲けしやうと考へる迄の事である、即ち儲けが其唯一

の目的てある、けれども市て貸屋を建てるとなれば、市が儲けるといふは寧ろ第二義て、市民をして市民の健康を增進するに適したる家屋に住はしむる、成し得る限り廉價の家屋に住はせ、其生活上の便利、幸福を保障し增進するといふのが主眼てある、故にいくら入つて、いくら儲かるといふことよりも、光線の工合はいゝか、排水法はいゝか、便利はいゝか、其健康はよくなつたか、其死亡率は減つたかといふやうな事が、依つて注意せらる、大切の條件てある、左すれば民間の貸屋よりも、所謂市營の貸屋が、善く出來るのは言ふ迄も無い事じや無いかと。

◎僕は何としても以上の道理を疑ふことが出來ない、故に僕は或種事業の市營論者てある、いよ／＼何を市營にするかとなれば、いろ／＼研究してかゝるので、滅多に此事業、彼の事業と斷言することは出來ないが、以上の道理、傾向だけは、僕は如何にもさうだと首肯いて居る、而して此趣意、心持を抱いての市營事業を起すことは、今日の日本に、切に其必要を見ると信じて居る。

◎以上市營事業に對する僕の考へは、手も無く之を官營事業に移すことが出來る、僕は同一の意見標準に基ついての官業論者てある、それ故に僕は必らずしも官業計畫を大ざつぱに非議はしない、反つて或場合には其辯護の矢面に立つこともあらう、只、いづれの事業か、官業としていゝか惡いかは、繰返して尙問題てあると斷つて置く。

◎例へば數年前に行はれた鐵道國有は、僕は贊成てあつた、其ために、僕は舊知の友人と相乖離した、然も主義のため、主張のためならば、それも亦辭すべからざる事と、僕は今に至るまてそれを甘んじて居る、顧みれば僕も英國派の經濟思想の流れを汲んだ一人てあつた、其餘香は今も尙僕の胸底に存して、所謂自由貿易主義非干涉主義は、今に於ても僕の主張の半面てある、然しながら、其英國の經濟學說も其後既に幾度か變遷した、所謂大陸の思想に至つては、流石に別天地の感がある、而して僕はそれらの刺激影響を次々に受

けた、僕の今の考へは確に二十年前の考へては無い、現に僕は英國の私立鐵道が遠からず、國有に進めらるゝ場合のあることを信ずる者てある、日頃、其様な議論を讀んて、其様な議論の年ごとに殖へ往くのを見て、僕は心竊に左様に觀じて居る者てある、僕は單純に官業非なりといふの論を、今日に相當したる進歩的意見とは信じ得ない。

〇又市營の方面に返るが、ビックミーヤとかいふ人があつて、市營の事業に一種の標準を立てた、(一)其事業は、其費用を負擔する市民一同の幸福利益を保障し進捗すべき性質のものか(二)其事業は獨占的性質を帶び、其地方の租税負擔の營業者と競爭する虞れなきものか(三)其事業は若し市以外の營業者の手に委すれば、市民の便利及び健康を汚損する虞れのあるものか、左様な性質、若くは虞れのなき、又あるものならば、當然に之を市營とすべきてあるが、其以外のものは市營にしてはならぬと。

◎僕は以上の限定を其通り承認するとも言はぬ、然し畧ぼ同様なる要求の國家に向つて提起さるゝは、今日に當りどうしても拒ぐべからざる考ひだと思ふて居る。

官業主義歟民業主義歟

津村秀松

一

官業主義是か、民業主義非かてふ問題は、須らく先づ之を二つに別つて研究せねばならぬと思ふ。其の一は此問題を學理上より抽象的に判斷することである。其の二は此問題を我國の現狀に照して具象的に研究することである。先づ第一に就て論じ、然る後第二に及ぶこととしやう。

此問題を究理的に又抽象的に研究しやうとすると、勢ひ絶對的に官業主義を採る可きか、將又絶對的に民業主義を採る可きかといふ所まで、此問題を持ち込まねばならぬ。是れ蓋し官業萬能主義たる可きか、將又民業萬能主義たる可きかといふ極端論に至て、此問題の是非が最も能く判明するからである。

所で、絶對的なる官業主義を採り、何もかも一切萬事を擧げて國有とし官營とすることになると、それは何のことはない、つまり社會主義の國家と化することである。少くとも今日社會主義者の理想とする所とな

然一致することになるのである。其の曉には、假令政治上に於て相變らず議會を維持し得ても、經濟上に於ては確に社會主義で、唯在來の國家なり君主なりが、其の儘存續するといふ點に於て、政治的革命が直接に伴はないといふだけのことである。であるから、其のもう一つ先きが思ひ遣らるる。

然し玆には政治上の問題を論ぜない。唯經濟上からのみ絕對的官業主義を採つた國家、即ち事實に於て社會主義の國家たるものの利害を述べて見やう。今若し國家が絕對に官業主義を採ることになると、今日の意味に於ける資本、即ち個人の財産中の生産手段なるものは、如何なる形式に於ても、發生す可き餘地がなくなる、又土地たると、家屋たると、鑛山たると、工場たると、交通機關たると、機械器具たるとを問はず、一切の生産手段たるものは、早晩一切之を國家の公有に歸せしめねばならぬことになる。然るときは、世には國家の公的資本なるものの外、又私的資本（即ち今日の所謂資本）なるものなく、國家は唯一の資本主で、又唯一の企業家で、從て又唯一の雇主となる。人民は國家の事業即ち官業に勞働に從事する外、又別に仕事なく、萬民等しく國家の勞働者となる。されば國家は是等無數の勞働者を統轄し、分類し、指揮し、監督し、之をして各其の欲する所の勞働に從事せしめ、斯くて得たる勞働の結果たる一切の財を、各人の需要に應じて供給し、販賣するといふ組織になる。

斯かる國家は一見する所理想の國家で、又理想の社會狀態であるが如く見ゆるが果して左樣であらうか。第一に疑はるる所は、斯かる國家に於て果して能く需要供給の投合が行はるるであらうか。勿論斯かる國家に於ては、一切の生産が一切國營であるから、政府は先づ豫め斯國民の向ふ一箇年間の一切の需要品の種類、品質、數量等を測量し、豫算し、之を各地の各工場に割り當てて生産せしむる次第であるから、一切の財に就て過不足なかる可しといふであらうが、昔の如く經濟の範圍、交通の範圍が狹小なりし時代ならばいざ知らず、今日の如く世界經濟時代となり、國際間の交通貿易日に月に發達して、自國內の需要は、之を自國內に於て充すと同時に、又多く之を外國に仰ぎ、又は仰がざる可からざる時代に於て、自國の產物は之を自國內に於て消費すると同時に、又多く之を外國に賣却し、又は賣却せざる可からざる時代に於て、斯くて市場は世界的となり、斯くて需給の投合は國際的となれるの時代に於て、斯くて財の種類に千差ある可く、又人の嗜好に萬別あるの時代に於て、少數の官吏が如何にして斯の如き複雜極れる一國一箇年の需要供給の（場合によつては世界の需要供給の）投合を豫算し得可きであらうか、頗る疑しと謂はればならぬ。

加之、國家が若しも絕對的官業主義を採つたならば、結局一切の資本は國有となり、一切の事業は官營となるから、國家以外に一の資本主なく、國家以外に一の雇主なく、苟も職に勞働に從事し、玆に衣食の途を求めんと欲するものは、全然官吏の指揮に屈服せねばならぬ、萬事役人の指圖に盲從せねばならぬことになる。其の結果は、人民に職業撰擇の自由なく、職工に賃金約定の自由なく、其の間官吏の命ずる所、如何な

る職業も辭す可からず、又如何なる勞働條件も甘せざる可からずといふことになる。斯くては人民は奴隷の如く、彼等の生殺與奪の權は擧て政府者の手に委れらるる。斯くては平等は得られても自由は恐らく得られない、政府萬能主義の國家と化することになる。

且つ夫れ斯かる國家に於ては、產業上の自由競爭なるものが、全然認められなくなる、從て自然淘汰が全然行はれなくなる、從て事物の改良進步が遲々として振はなくなる。是れ蓋し自由競爭のみが、世の進步發達の唯一の原動でなくとも、極て有力なる原動力なることは疑を容れないからである。引證は小さいか、日本の煙草が官營となつてからは、以前の如き著しい改良がない。官營である佛蘭西の燐寸は、民營である獨逸の燐寸より著しく粗惡である。日本の鐵道が國有となつてから、衝突其の他の故障が多くなり、近頃電鐵の競爭が起つてから、其の競爭區域たる京濱間とか、京神間とかだけが著しく改良されたるのが、何よりの證據である。又土地は多く貴族の所有に歸して、小作人や借地人の多い英吉利や、獨逸や、露西亞の農業よりも、小さいながらも自作地主が殆んど全部を占むる丁抹の農業の著しく發達して居るのも、又我國に於て到る處村地村山村林(即ち町村の共有田畑山林を云ふ)が、私有地、私有山、私有林に比し、甚しく荒廢に歸して居るのも、殊に九州地方に於ける入會林野の山骨露出して居るのも、皆是れ這般の消息を傳ふるものである。煙草や燐寸のみならば可なり、鐵道や山林のみならば尙ほ忍ぶ可しであるが、若しも極端なる官業主義の結果、一切の農業も林業も工業も何もかも斯の如くになると、其の結果は國家又は社會の幸福であらうか。主我が全然沒我に代り、利己心の如くに利他心が盛んに働き、自他の區別が全く沒却して、諸人皆神や佛の如くにならなければ、全部官業主義で國家社會の幸福――少くとも物質的幸福の增進を期せられないと思ふ。

二

以上は絕對的官業主義の弊害を羅列したのであるが、絕對的民業主義にも、亦之に劣らぬ弊害あることは、別に改て論ずる迄もないのである。蓋し絕對的官業主義を採るの國家は、即ち純然たる社會主義の國家であるが如くに、絕對的民業主義を採るの國家は、即ち純然たる個人主義の國家であるから、そこで個人主義の弊害が極端に發揮せらるるからである。即ち優勝劣敗が弱肉强食になるし、自由競爭が市場獨占になるし、貧富の懸隔が貴賤の懸隔になるし、物質的幸不幸が精神的幸不幸になるし、人の力が金の力となるし、勞働者と資本家との衝突が次第に激しくなつて、職工組合の組織が進めば、企業聯合の組織も進み、同盟罷工を企つれば、工場閉鎖を以て之に答へ、衝突又衝突、暴動又暴動で、所謂「階級戰」なるものが、絕間なく發生する、國際戰爭はなくても、國内戰爭が續發する。それでは國であつて國でなく、社會であつて社會でなく、人間共同生活の實が全く擧らなくなるからである。永く個人主義を標榜し、民業主義一天張で決して動かなかつた英吉利も、二十世紀に入つてから、だん／＼に調子が變つてきて、各都市の公營事業が次第に多きを

加ふるに至つたのみならず、最近には所謂『ロイドジョーヂの社會的立法』なるものが、急轉直下の勢で猛進し、鐵道工夫等の同盟罷工が動機になつて、鐵道國有說さへ主張するものあるに至つたのは、個人主義も民業主義も之を今日も此後も絕對には保持し得ないものであることを證明するものであると思ふ。

斯樣な譯であるから、官業主義是なりとしても、それならば之を絕對に執行して弊害ないかといふと、決してそうでない。又民業主義可なりとしても、それならば之を絕對に固守して差支ないかといふと、亦決してそうでない。社會主義でも、個人主義でも、國家主義でも、民主主義でも、自由主義でも、保護主義でも、何でもかでも、苟も主義と名の付くものは、皆然りである。であるから、官業主義を採る可しとか、民業主義を採る可からずとかいふやうな一刀兩斷的な、更に心持の宜い斷案を下すことが出來ないのは、甚だ遺憾ではあるが、然し社會の實情が何れの國でも之を許さないのであるから致方がない。つまり其の國々の社會の實情に照し、國情民性に應じて、此二主義孰れかに就き、取捨加減を施して行くより外に方法はないのである。果して然らば、次に社會現代の國情民性に照して、孰れの主義を採り、之に向て取捨加減を施して行く可きかてふ第二の問題に移ることになる。

三

熟々我國現代の國情民性に照して考ふるに、私は大體に於て民業主義を採り、之に官業又は公業を加味し行く可しと斷定する。然し是れ丈けの斷定では、極端なる社會主義者若くは極端なる個人主義者でない限り、誰れしも異存のない所で、又特に我國の國情民性に徵せずとも、孰れの國に於ても此方針に出づるを以て、適當とし穩當とするに違ひない、であるから、更に一步を進めて、我國現下の官業は之を民業に移す可きか、我國現下の官業は更に一層擴張す可きか、將又我國現下の官業を官業の儘とし、民業を民業の儘とす可きか、換言すれば、我國現下の國情民性に照して、更に官業の範圍を擴張す可きか、若くは更に民業の範圍を擴張す可きか、抑も又現狀を維持す可きかてふ現實なる問題に接觸せねばならぬ。而して此點に就ては、私は此上官業の範圍を擴張するは不可にして、現在官業たるものも、成る可く之を、民業に移す可しと斷案する。其の之を主張するは、やはり我國現下の國情民性に徵してからのことである。以下其の理由を述べたいと思ふ。

凡そ日本の國情ほど、盛に國家本位主義を發揮したるものは、他に類例が乏しい。國家本位主義が極端に發揮するといふことは、同時に國民本位主義から漸次遠かるといふことを意味するのである。勿論、世界に國を建つる以上、民は國を以て主とせなければならぬが、之と同時に、國も亦民を以て本とす可きを忘れてはならぬ。然るに從來日本の政治は餘りに重きを國家の上に置き過ぎて。餘りに輕く國民の存在を視る傾向を有して居る。即ち國政は盛に發揚するが、爲めに民政が屢々看過せられんとするの有樣を呈して居る。國民が兎角國家の下敷になり、民政が

屢々國政の犧牲に供せられて居る。

茲に國政といふのは、國民の隆盛を圖る政事をいふのである。茲に民政といふのは、人民の幸福を圖る政事をいふのである。一國の政治に常に此の二種がある。勿論、此の二種決して相扞格するものでない。國家の隆盛を圖れば、それが結局人民の幸福になるし、又人民の幸福を增進すれば、それがつまり國家の隆盛の基となる。國利民福は脣齒輔車の關係で又因果の關係をなすものであるが、其の關係が鎖國時代の舊日本と、開國以後の新日本に於て、大分違ふてふことを知らねばならぬ。前の時代に於ては、其の間の距離が、甚だ近かつたが、後の時代に入るに從て、それがだん〳〵遠ざかつて來たといふことを悟らねばならぬ。それは蓋し一國だけの世界であつた昔と、世界の一國たるに至つた今と、同じ一國でも、其の同じ一國の爲されねばならぬ仕事並に爲さんと欲する仕事即ち國政の範圍が廣くなり、規模が大きくなるから、從て民政との距離が遠くなり、關係が疎になるからである。

斯くて國政と民政との區別が、漸く明かならんとするに至つた今日でも、日本の政治家が尙ほ舊時代の觀念を脫し得ないで、何事でも兎角『國の爲め』で押し通そうとする。『民の爲め』といふ政治は殆んど顧られない。日本の人民も亦多くは之を不思議とも、不條理とも、何とも思はない。寧ろ當然であるかの如き態度であつた。そこで日本の經濟は常に日本の財政の爲めに犧牲に供せられた。社會政策上の理由も常に軍事政策上の理由の爲めに壓倒せられた。國民の幸福といふことよりも、國家の隆盛といふことが常に重んぜられた。幸ある人生を樂まんとするよりも、寧ろ光ある國運に憧がれんとした。であるから益々國家本位主義が發揮せらるるに至つたのである。勿論、我國は開國日尙ほ淺く、突如として世界の競爭場裡に突入したのであるから、先つ以て國命を擁護する必要もあるし、又國權の擴張を計る必要もあつたのであるから、從來我國の爲政家が國の爲めに民の幸福を顧みるの遑なかつたといふことも、幾分無理のない次第ではあるが、今尙ほ其の態度を改めないから、國としては益々强くなつても、民として愈々貧しくなつて、遂には國も民も貧弱になりしはしないかと疑はるる。であるから、今の時代は大に囘顧す可き時代であると思ふ。

四

又日本の民性ほど、深く國家萬能主義に心醉したるものは、他に類例が乏しい。日本に於ては國家は絕對に本位であると同時に、又萬能である。本位であつて又萬能であるから、之に依賴することが、日本に於ては何よりも成功の捷路であるといふ觀念が、上下一般に橫溢して居る。そこで日本の國民は何んでも保護を歡ぶ、日本の政府は何んでも干涉を好む。そこで政商の結托が盛に行はるる、政府に睨まれた事業は遂に成立たぬ、政府の御聲のかからぬ事業は誰も發起せぬ、政府關係の疎密が、事業の盛衰を定むるといふやうな時勢になつてきた。「國家は萬事を爲し得可く、又爲さざる可からず」Der Staat alles machen kann und [illegible]

hen soll とか、「萬事は國民の爲めなり、されど萬事國民によつて爲すを要せず」Allesfür, nichts durch das Volk とか、「自助は用なし、國助こそ肝要なれ」Staatshilfe, nicht Selbsthilfe とかいふやうな十六七世紀の歐洲の「マーカンチリズム」の響聲が、今將に盛に鳴り響いているやうに思はるる。

斯様にして我が國情民性が極端なる國家本位主義で、又盛んなる國家萬能主義で、國家の爲す所――といつても其の實政府の爲す所――に反對しかぬる國情が、更に一歩を進めて、政府の爲す所に依頼る民性を造るに至つたのである。であるから又官吏は總て聰明で人民は常に暗愚であるといつたやうな信念が、何時とはなしに、政府當局者の頭の內に深くなつてきた。どうも日本の產業の開發といふことも、交通の發展といふことも、人民にしみ委して置けない、政府者が一々之を指導誘掖して行かればならぬといふ氣焔が盛つてきた。そこへ持てきて、日清日露の戰爭が起る、戰後經營の必要が起る、豫算の膨脹が起る、歲入增加の必要が起る。そこへ持てきて、當時西洋で流行の國家社會主義とか社會政策とかいふ主義思潮が盛に流入する、近世の國家たるものは宜しく公利公安の爲めに全然私利私益を沒却せしむ可しとの議論が盛になつてきた。そこへ持てきて、是も亦當時西洋で流行の帝國主義とか世界政策とかいふ主義政策が輸入される、將來の國家たるものは宜しく國土の擴張を圖らざる可からず、それには軍事上國家として必要なる一切の設備を國有官營す可しとの主張も加つてきた。そこで歷代の政府、殊に國家本位主義並に國家萬能主義の本家本元である官僚政府は、こは願つてもなき幸であるとして、上記の經濟上、財政上、社會上、軍事上の理由を楯に、どし〳〵國有をやる、官營をやる、專賣をやるに至つたのである。

顧るに、維新以來我國の民業なるものは、時に浮沈を免れないが、一般に年を逐つて發達し、殊に日清日露兩戰爭後に於て、著しき發達を見たのである。が然し之と同時に我國の官業なるものも、亦近年著しく膨脹して、近年に至ては、其の膨脹の程度遂に民業を壓し、彼此略ぼ相當るの現狀を見るに至つた。即ち左の如くである。

年次	民業資本	官業資本	民業資本一〇〇に對する官業資本の割合
二八	一七四、〇四七 千円	一三五、七一三 千円	七七
二九	三九七、五一〇	二一五、四五八	五四
三〇	五三二、五二二	二三六、六一八	四二
三一	六二一、六七六	三〇二、五〇八	四八
三二	六八三、八二〇	二八九、二一七	四二
三三	七七九、二五一	二三六、七一五	三〇
三四	八二九、四五五	二三九、三六二	二七
三五	八七八、七六三	二七二、四七九	三一
三六	八八七、六〇六	二八六、七三九	三二
三七	九三一、二九二	三一一、六九六	三三
三八	九七五、八三六	三四四、三五〇	三五

三九	一、〇八九、九五六	四五三、八五〇	四一
四〇	一、一一四、二二七	六六五、五八七	五九
四一	一、二一五、三八六	一、〇六七、七三九	八七
四二	一、三六七、一六四	一、一三〇、一八四	八二

是に由て之を觀ると、方今日本の產業なるものは、殆んど半分は民業で、他の半分は官業で、即ち半官半民の有樣であると稱す可きものである。斯樣な國は果して他に類あるであらうか。斯程までに官業は跋扈し、其の結果、民業は蠶食されても、既に國家本位主義である我が國情、又深く國家萬能主義を信ずる我が民性は、之に向て何等の反抗がない、何等の疑問を懷かない、寧ろ斯くある可きものと認めたかの如くであつた。

五

所が漸く近頃になつてきて、少しく目を醒して來た。鐵道が國有になつてから發達が遲い、少しも改良されないのみか、衝突事故が頻發する。製鐵所は設立後、既に十數年にもなるが、今に損失續きである。煙草や鹽が專賣になつたものだから、無暗に價が高くなつて、品質が益々劣等になる。「ヒーロー」や「サンライス」時代に支那朝鮮に擴張した販路が、「リリー」や「チエリー」時代になつてだん〱縮小する。國鐵が海運を壓迫する。官民の製材が到る處に同士打をやる。所で斯樣な不始末を演ずる爲めに、國家は幾許の資本を卸して居るかといふと、主として是等官業を含んで居る所の所謂る特別會計に屬する資金なるものが、最近十年間に、總額二億三千六百萬圓から、十一億三千餘萬圓に達し、十年間にして約五倍となり、一箇年平均增加率が正約四割に上つて居る。勿論これより生ずる政府の收入も少くない。特別會計の收入二億餘圓の大部分は、即ちそれである。して見ると、今や我國は租稅收入の半を占むる官業收入を有するものであるが、之を得る爲めには、又巨額の支出を要して居るし、殊に其の資本の大部分は、公債となつて、年々少なからざる利子の支拂を國民に負はしめて居るものであるのである。畢竟するに、今や我政府の官業收入の巨額なるは、一面に於て、民業を蠶食せることの巨額なるを示すと同時に、他面に於て、人民に負擔せしむる所亦巨額なるを示すものである。即ち我國民は官業主義の增長によつて、收入の途を次第に減縮され行く一方に、負擔の高を次第に增加され行くてふ二重の打擊を蒙りつつあるものである、これでは益々生活が困難ならざるを得ないといふ所から、近頃になつて大分目が醒め、民間の一角に官業熱に對する反抗が起つてきて、政府の反省を促すやうになつてきた。

然し日本政府の官業熱も是迄の程度に止るならば尙ほ忍ぶ可しである。之だけならばまだ宜しとも言へるが、前年政府財政の困難なる折に、生糸、一羽二重精練業、舞寸の官營說が持上つた、砂糖、酒、石油の專賣說が起つた、保險、海運、貯蓄銀行、取引所、水力電氣の國有國營さへも、議に上つた。之には歲入增加の理由の外に、それ〱相當の特別理由もあるし、又中には意氣地のなき當業者が進んで買上運動をやつたこ

とも動機となつたのではあるが、兎に角今日のやうな我が國情民性である以上は、此の上更に軍備擴張等の必要が起つたならば、租税は增徵出來ず、外債は募集出來ず、さりとて內債も六ヶ敷いから、結局、復新に前記のやうな官業計畫が起りしはしないであらうか。郵便貯金の流用で味をしめた我が財政家は、更に一歩を進めて貯蓄銀行の官營や、保險事業の官營にまで手を出すに至りはしないであらうか。煙草の官營で油の乘つた我が大藏省は、更に砂糖や酒にまで猿臂を延しはしないであらうか。甚だ心元ない次第である。萬一此後斯様な成行を見るに至つたならば、それこそ民業存在の餘地がなくなる、少くとも國民の活動の範圍が大に縮小する。少くとも國民の企業心が著しく萎微する。それでは到底國民の活躍を認めない。それでは到底國民經濟の發達を抑せられない。日本の國家經濟は膨脹しても、日本の國民經濟は衰滅する。

六

斯く言へばとて私は絕對に官營事業に反對するのでない。人民の爲すを欲せざるもの、又は人民の爲す能はざるものにして、猶ほ爲さゞる可らざるものは、政府の經營による外はないは勿論、人民の爲すを欲するもの、又は人民の爲し能ふものにして、猶ほ一般の公益の爲め、國家の經營に移さざる可からざるものもあるのである。が然し兎角日本の國情民性はこの政府の經營による外なきもの並に政府の經營に移さざる可からざるものを、成る可く廣義に解し、次第に布衍し行くの惡癖がある。この惡癖を矯めなくては、到底日本の國民經濟の健全なる發達を遂げられない。之を矯めるには、官業主義を捨てて、民業主義を採るのが第一であると思ふ。

元來、日本の國體主義といふものが、西洋の團體主義のやうに、永年個人主義的文明が十分に發達した上で生じた、言はば自覺的團體主義なるものであるならば、又西洋のやうに漸次官業主義に傾き若しくは傾かうとするのは、發達の順序であるかも知れないが、實際日本には未だ個人主義的文明なるものが起らない。日本國民の個人主義的活動なるものが未だ勃興せない。不羈獨立の民業なるものが縱にも横にも未だ十分に發展しない。で、僅に自由企業の曙光を認めた許りであるのに、左樣な時代を既に經過して然る後起つた西洋の團體主義、殊に國家社會主義なるものの思潮にかぶれて、鐵道などの國有論が起つてきた矢先に、又財政上收入增加の必要が加つたものだから、常に全智全能を自信する我政府は得たり賢しで。どし〱官營方針を採る、又今に盲目的團體思想を脫し得ぬ我國民は、之を別に不思議に思はない、寧ろ當然であるかの如き態度を採つたのが、何事も總て士族の商法どころか、官吏の商法であるから、遂に今日の如き失態を演ずるに至つた所以である。此上此失態を重ねることになると、獨り此上更に國民の負擔を增加するのみならず、此上更に其の負擔に堪ゆ可き財源を枯渇するに至るであらう。

今の日本は此上猶ほ國政を重んじ、民政を輕んず可き時でない。此上更に日本の財政をして、日本の經濟を壓迫せしむ可き時でない。今は國民たる義務を負はしむるのみでなく、又國民たる權利を伸長せしむ可き

時である。個人の自覺を喚起して、自主自營の精神を鼓舞す可き時である。個人の自覺に基く國民の一大飛躍があつて、然る後初て生ず可き弊は其の時代に至つて除去す可き必要が起るのであるし、又適當に除去し得る時代が到達するのである。今の日本は須らく先づ個人の安全なる存在を要求す可き時代である。國民の自由なる活動を要求す可き時代である。人民の不羈獨立なる企業を奬勵す可き時代である。此の際とても其の間より生ずる弊害は、之を看過す可きでないが、さりとて之を一々官設するは不可である。之を官營に移すは適當でない。唯政府は常に之に對する取締を嚴重にして以て、公益を擁護すると同時に、私益を尊重するの態度に出づ可きであると思ふ。

官業主義なるものの有るべからず

早川鐵冶

官業はいかん。民業なら銘々直接自分の利益關係だから忠實に仕事をするが、官業となるとそれがないから自然營業振に熱心が足らぬ。從つて事業の大なる進歩發展が望めぬ。社會主義を政策に取入れれば官業を可とするといふが、一體其社會主義なるものが氣に食はぬ、日本の社會主義は如何様なものか能くは知らんが、獨逸あたりに在る様なステートソシアリズム、即ち國家社會主義といふものではない様だ。之を歐羅巴風に飜譯するとニヒリズムとなるんぢやないかと思ふ。ステートソシアリズムならまだ宜いが、日本のは一歩進んだニヒリズムてはないか、無政府主義には反對である、其様な主義は又實行し様たつて出來はせぬ。彼等は平等を尊んで利益を共分しやうの財産を共有にしやうのといふが、其平等を説くからが間違つて居る、人間は由來平等の天分を得て生れはせぬ、天分の已に平等ならぬものに報酬のみ獨り平等なるべき筈がない、之を恨むなら即ち神を恨むより外はない、此事は獨り人間ばかりでない。牛ても馬ても皆左様てある。御覧なさい、昨日今日の様な空模様て道は丸て、泥田同様に痛んで居る處を、ヤクザな馬は荷車を挽き、進まぬ脚に鞭たれて汗みどろになつて歩くてない

か。然るに質の好い馬は種馬となつて、普段何もせず、好い飼料を食つては孳尾するより外仕事がないてはないか。優勝劣敗は宇宙を通じての一大法則である。それを人爲て直さうたつて直る事でない。

それに社會主義が行はれれば、身體の弱いもの、器の惡いもの役に立たぬものが得をして、身體の健かな器の善いもの大に働けるものが損をする事になる。それては平等でない。平等といふなら惡平等である、人間を單なる動物として見る丈でも前にいつた通りであるが、況して之を萬物の靈長として見ると尙更ら競爭が激甚でなければならず、そして進歩發展は其處から來るのであるのに、今之を止むるべく社會主義などを行はうものなら、進歩發展は出來なくなる。馱目な平話である。社會主義は所謂弱者落伍者の獨り唱ふる不談であつて、決して相當の腕あり力あるものの口にすべき事でない、口にするは意氣地無しの骨頂である。特に思へば日本の如き、デモクラチックの處は又々世界にない、考へても御覧僅か十年十五年前迄は憐れな生活をして居たものが、少し金を持つと早や社會の表面に立つて威張れるぢやないか。自由な國である。貧乏士族の息子に生れた早川鐵冶でも、時と場合で腕さへあれば隨分大臣にもなれ樣といふ時勢ぢやないか、此樣な自由の國が何處に在るか、歐羅巴の如きは仲々嚴重な階級があつて、下級の者が上級になる事は難い。早く開けて社會の秩序の定まつた所は斯うてあるが、日本は今が過渡時代である丈に自由である。然るに下らぬ社會主義などを唱へるとは意氣地の無いことを自白するものである。どうあれ官業主義は不贊成である。

其理由は初に說いた通りて、局に當るものが如何樣に働いて無理矢理金を儲けた處で、其儲けが直接彼等の物になるではなし、勢ひ緩怠を免れない。早い話が山陽鐵道の如きを見ても分る。曾ては客車を好くする。速力を好くする。一體に待遇を好くする。然るに今日に於てはそれが無くなつて居る、何となれば昔と今とは彼等の關係が違ひ、幾ら儲かつた所で給料が其

割に增されるでもなければ賞與がそれ丈出るでもない、鐵道院總裁が他の官吏の率よりも十倍の賞與金を得るといふ譯にはいかぬ、併し鐵道はまだ其性質上稍々國家的のものであるけれども、物によつては隨分民業に移して宜いものがある。例へば、紡績、製鐵、造船といふが如き、何れも營利事業であるから之を民業にして宜い、即ち競爭で行かしむるが宜い。之を國家に任せてはいけぬ。政府萬能主義ではいけぬ、要するに日本の今日は、一方に歐羅巴の思想を無暗に輸入し、社會主義などを說くと同時に、一方には又封建の餘習で未だに政府を萬能と思ひ、政府をのみたよる事をする、丸で思想が新舊ゴッチャ交ぜである。官業主義なども其爲に起るのだ。吾人は何處迄も官業にはやりたくない。鐵道の如きは先づ一番國家的のものだとはいつたが、是とても民業に出來ぬ事はない。否民業にすればまだ〳〵交通の便が今日の狀態に發達せずに居る事はないと信ずる。が事業には眼前に收益がないとか。小資本では企てられぬとか、左樣いふ性質のものがある。此樣いつた種類のものとか、生產の爲とか若くは軍備の爲とか、即ち軍器、彈藥といつた樣に、特に機密を要する類のものは、其性質上民業に委ねべきではない、けれども主義としては官業を可とするなどいふ事のあるべきでない。社會主義などいふものを政策に取り入れて事業の發達を鈍くし國運の進歩を阻む樣の事をすべきでない。社會主義などは弱者の聲だ。弱者の聲に聽いて御附き合に貧乏して如何なるか。馬になるなら種馬になれだ。其樣な說は齒牙に掛くべきでない。

御附合ひに貧乏するのみではなく人種迄も墮落する。人種改良の點からいつても社會主義はいけぬ。癈疾のものでも低能兒でも、凡ての弱者無力者迄が何時迄も他と伍して生存し得る事になるから、優等の人種を作り出す事は出來ぬ、人種改良が行はれぬ。私の理想からいへば、意氣地なしや弱虫や、それから肺病患者癩病患者といふ樣な輩は、眞逆に此世に生を受けて來た以上殺す譯にはいくまいから、凡て去勢術を施す

が宜いと思ふ、男子よりは睾丸を去り女子よりは子宮を去るさ。良い種を得んとすれば斯うでなければならぬ。現に他の動物には之を行つて居る、雞などには御覧なさい。ケーポナイジングといふ語があるが御存じか。ケーポナイジングとは牝雞の子宮を去るといふ事だ。人間でも是でなくてはいかぬ。

自家撞着を止めよ

鎌田榮吉

政府は社會主義を嫌ひながら官業主義を取るといふ事は、辻褄の合はぬ話である。社會諸般の事業は凡て個人の自營に任かせず、社會自らが經營せなければならぬといふのが社會主義者の主張である、而して其經營の機關は政府であると云ふのである。尤も社會主義の中にも色々の流派があつて必しも國家に依らず團體組織に依て凡ての營業をやらうといふ主義のもある、兎に角凡ての事業を個人の經營に放任しないで國家社會で經營しようといふが社會主義の要點だとすれば今の官業主義は即ち此主張を是認するものである、又其幾分を實行するものである、それなら何も社會主義を蛇蝎の如く忌み嫌ふべき筈はない。其主義を採用し乍ら其主義者を忌み嫌ふとは矛盾の甚しきものであると云はれても遁辭があるまい。

又從來政府は一面に於て頻に教育を奬勵し普及させて居る、而して今日の教育とは何かといふに、立身出世の元入であるとは教育者も被教育者も共に〲思つて居るのが實際の狀態である事は誰しも疑はない所だ先づ實業に就いてお金を起そうと云ふ爲めの準備である、此準備が出來て學校を飛び出して見ると、有利な事業は盡く官業と爲つて居る、働かんとしても働くべき餘地がない。寃も蹄を十分數へられ、扨ていよ〲蹄らうとすると蹄るべき舞臺は政府が取つて仕舞つて居るといふ有樣である。これに這入り込まうとしても其處に夫れ〲城壁が固く鎖して容易に入るべからざる事になつて居る。企業心を満足させる場所がないのは、勿論糊口を凌ぐ所もない結局の處此かる者が相率ゐて勢ひ不平家、危險思想家の樣なものと爲らざるを得まい。政府が一面には教育を奬勵してそして他面には官業をするといふ事は、即ち其最も忌み嫌ふ不平家、危險思想家を増すといふ結果になる。是に至つては其の自家撞着も益〲甚しいと云ふべきである、而して政府なるものは營業を爲し得る能力があるかといふに到底營業には適しない事になつて居る。官府は全體規則に依て律せられて居るから、一何事も局に當るものの獨斷擅行を許さぬ。殊に日本の御役所なるものは商賣的に組織されて居ない。一寸譬へて言へば煙草を賣るとして見れば、販賣部の役人は賣れ高さへ多ければ賦金の取れる取れないは集金部の責任で此方の知つた事ではない只餘計に賣

るのが手柄になる、それだから買方の如何に係り頓着はしない、それで品は賣れても割合に金が集まらぬといふようなことが多いと云ふ工合に兎角陷り易いのが政府事業の常である。そこで又大和といふ烟草が能く賣れる、敷島が能く賣れないといふ事があつても、最初の豫算に大和が幾何、敷島が幾許と製造高が一度決定せられてあると、其製造高の加減をするが出來ないから賣れる煙草も賣れない煙草も無差別に豫算通りに作つて行くといふ様な風のことが往々あろう。或は鐵道の如きも官營に成てからは會社時代とは大に趣が變つて職員達も其の仕事に面白みがなくなるから自然とはげみが付かぬ、例へば或る所に或る有利な事柄を思ひ付てそれを視に行く必要を生ずる、としても既定の事務に屬せぬ事であつて而かも其費用が豫算にないとすれば、之を建議して上司の指揮を俟たなければならぬ。或は事に依ると翌年度の豫算に計上されてからといふ事になる、例令其年度内に指令が下りても既に／＼其間に時機を逸して仕舞ふ、しかし一旦伺つて指定があつた上は時機は既に去つて居てもせ行かぬ譯には行かぬといふハメになる、それで用もないのに態々形式的に行く、即ち行かずとも濟む處へ無理に行つて矛盾を拒ぐ爲めに其旅費を使つて來なければならぬといふ事が出來る。實に抱腹の至である、けれど其性質上、官府の仕事は兎角斯くならざるを得ぬのである。一言に云へは利口な人が大勢集りて馬鹿なまねをするのが官業である、又工業にしても製鐵とか造船とかが旨く行つたと云ふような事があるが、地代も拂はず租税も拂はず地方稅も町村費も拂はずに資本を官金に取りてやつた仕事だから本當の成功と云ふ譯には行かぬ、是は丁度、昔の大名が御庭燒杯といつて、庭に窯を築きて陶器を燒かしてよく出來た／＼と自慢をしたと同樣である、今の官業は維新後の所謂士族の商法で十露玉杯に乘らぬ話である。

又歐米に於ても政府が營利事業をするからは役人もメリツトシステムにするがよいといふ説がある。メリツスシステムといへば、其事業／＼に精通し事柄に熟練した人物をのみ使役するといふ事であるが、人は如何に精通し熟練し居つたとしても此處は人の話でない。官そのものが營業に適せぬ性質のものであるのだ。が幾らメリツト組織に成ても到底駄目である。官では絶對に營業は不可能である。

但し玆に新しい事業を成立たす爲に、先づ官で試に營業をするは、一時の政策として宜い場合はあろう。之は長くやるのではなく利益が見へる樣に成つたらば機を見て民間に拂ひ下ぐるなどいふ樣にする最初は損が立つから民間では何人も手出しをせぬから率先してやり試みるといふ樣な、教育的營業の種類なら宜い。けれどもそれを營利の目的でやるならいけぬ、又駄目である。或は收稅の目的でする烟草の樣なものもある。けれどもそれなら矢張り重稅を課した方が宜い。然らずして政府自身に收益を見んとするのは甚だ悪い。取別けそれで民業を壓服するといふ樣な事は最も取らぬ。例へば官で監獄に於て色々な製作物を囚徒にさせ、それを安く市場に出すけれども、殆んどコスト、オヴ、プロダクション、即ち生産費なるものは構はずにやる仕事だからいけぬ。第一賃錢も官の定め

次第である上に地租も拂はれば地方税も負擔せず又地を買入るゝ費用建物を造る費用といふ樣なものも場合に依ては必要かも知れぬ。然るに今日の所謂官業は既に〳〵民間に在て有利なものから官の手に收めんとして居るから、上述の敎育的官業とは丸で反對だ、

又此官業擴張の影響は外資を集むるに於いても大なる妨害になる。外國人が日本の企業に資本を卸さうとするに當り、其事業は政府の都合次第で何時でも國家に買收されるといふ樣な事では、永遠の利益を目的とするものにはとても投資しない。日本人の方は、小利益を見ても容易く官に賣るけれど、事業の自然の發展に伴ふ永遠の利益目的に投資しやうとする外人は寄り付かぬ。それは公債なり私債なり借金の形による外資の輸入は出來様けれども、斯る不健全な不自然な外資の輸入は甚だ惡い事である。

それだから今日の官業に屬するものはどん〳〵民間に賣却するが宜い。鐵道でも烟草でも製鐵場でも皆民間に賣るが宜いのである、況んや此後更に官業を擴めるなどいふは至つて惡い。それには社會主義ならば宜い。が今の政府は之を嫌厭するを以て方針として居る。既に然らば官業は早く止めたが宜い。何にも彼の社會主義を生ま嚙みにした生ま學者の生ま學說を採用して社會主義者に迎合する杯はとんでもない見當違ひであると思ふ。

官業主義の四缺點

松山忠次郎

事業の性質によつては、初めから官業にする必要のあるものがある。之はよく政治學の書物や財政學の書物に論じてある所であつて誰も彼も皆知つて居る所である。例へていうて見れば、民業では到底も出來ないもので而かも國に必要なものであるとか、又民業に任して弊害のあるものとかは官業にしなくてはならぬ。或は收入の目的の爲めに專賣をして官業にするものもある。此等のものを官業にすることには何人にも異論がない筈である。

そこで民業がよいか官業がよいかといふことは、民業に任しても前記の如き批難のないものを、官業でやるがよいかわるいかといふ問題であらうと思ふ。若しさういふ意味なれば私は矢張り民業でやらした方がよいと思ふ。さういふものまでも官業でやるのは餘程わるいことゝ思ふ。それから政府が收入を得る爲めに、

民業にやらしても差支ないものを官業にするのはよくない事と思ふ。其理由は

第一に官業はどうしても民業よりも不經濟である。民業では引合ふべき事業も官業では損をするといふ事になる。若し之に反して官業の方が經濟的であつて決して不利益でないといふ場合には民業は非常に壓迫を蒙る譯である。國家が個人と競爭することになる。此奴は頗る戒めなくてはならぬ。多くの財政學の書物でも之ばかりは禁じてある。其れは其筈で、國家が事業をやる時には利子も少い。民業では一割の利子で金を借りなくてはならぬ時に、官業では五分か六分で借りられるのである。民業が競爭に堪へる譯はない。又租税も官業には要らないのである。殊に近來の日本では、國税は申す迄もなく、地方税市町村税など隨分澤山に課せられるのである。民業では之を負擔しなくてはならぬし、官業では要らぬ事になる。それでは競爭に堪へない。そこで當前は官業で事業を經營するならば、官業は民業を壓倒するのである。否らざれば官業は頗る不經濟なやり方をする場合である。

第二に官業とすれば意外に仕事の擴張は出來ないものである。今迄よく官業としてやるべき性質の事業の中に、民業の資本の足りないものを官業にしなければならぬと書いた本もある。又官業は資本が豊かであるし、民業は資本が少いから競爭が出來ぬといふ人もある。然し之は皆反對である。昔にはさういふ時代があつたかも知れぬが、近頃の文明國では反對である。官業の方が資本に困つて、民業の方が資本が豊かである。例へば民間の會社で、少し有望な會社であれば資本はいくらでも集る。株主の方からして頻りに會社に増資を迫る。何故なれば有利な會社なれば會社の株劵は必らず拂込以上に賣買されるのである。即ちプレミアムがつくのである。此場合に株主が増資すれば自分の財産が増えるのであるから、頻りに増資を迫るのである。だからして有望な事業ならば資本には困らない。官業は其逆さまであつて、財政の狀態次第によつては、有利なる事業でも思ふやうに擴張は出來ない。現に電話

が其一例である。日本の電話は餘程儲かつて居るのである。例へば投じた資本に對してどれ丈けの利廻りなるか、今數字て以て示すことは出來ないが確か一割以上になつて居ると思うて居る。一割以上の利益のある會社といへば、民業としては餘程有利な事業である。然るに政府は之を擴張する丈けの充分の資本を有たぬのである。得意に澤山にある。然し之に應じ切れないのてある。そして加入權に何百圓といふプレミアムがつくのである。民業なれば決してさういふ事が起らぬが、官業は存外資本が足りなくて困るものである。鐵道もさうてある。今迄の日本の經濟て以て、鐵道を頻りに敷設したいが資本の財源がない爲めに困つた例は澤山あるのである、只鐵道は議會て以て各地の議員が自分の方へ鐵道を布かうと競爭するからして――詰り鐵道を土産にせんと競爭するからして、いろんな無理をして財源を拵へて今は大分鐵道も布けるやうになつたが、さういふ理由が無ければ鐵道でも矢張り財源に窮するのである。其適例は印度にある。印度ては段々に鐵道を國有とする方針て以て、民業を許すについても何年かの後には買上げるといふ條件をつけて、成るべく官業て布設せんとしつゝある。處が其資本が足りないが爲めに思ふやうに布設されない。民業も何年かの後に買上げらるゝのであるから餘り盛んにならない。然るに印度の經濟界はずん／＼進歩する。そこて貨物乘客は輻湊する。何ても印度の鐵道ほど混雜する鐵道はないといふ話てある。一列車に對する乘客の割合も印度の鐵道程多い鐵道はないのである。といふのは詰り建設資本が十分てないからてある。官業とすれば存外資本に苦んて擴張が出來ないのてある。

●第三には官業を矢鱈に起せば、動もすれば累を財政に及ぼし國家の信用を傷ける。其事業が失敗に歸したが爲めに累を財政に及ぼすはいふまでもない事てある。假令失敗しないまでも巨額の資本の要る仕事をやれば、財政は餘程困るのてある。現に日本ても今言ふた通り鐵道の資本に困つて居るのてある。今迄から鐵道は概ね公債を發行して布設することになつてゐる

る。現に日本の財政で一番の弱點になつてゐるのは、鐵道の爲めに毎年數千萬圓の公債を發行せねばならぬ事てある。又外國でも普魯亞の如きは其適例である。普魯亞は鐵道國有の主義を以て單に私設鐵道を買上げるのみならず、公債を發行して新規の鐵道を布設する。そこて毎年巨額の公債を發行する必要がある。從て普魯亞の公債は最近二三十年の間に於て非常に增加して居る。其結果普魯亞の公債といふものは存外安い。獨逸本國でもさうであるが存外公債が高く賣れない。二十年程前には伊太利と獨逸と比ぶれば非常の相違であつて、伊太利が安くて獨逸が高かつた。然るに今日は反對となつて獨逸及び普魯亞が安くなつて居る。之は一面からいへば獨逸及び普魯亞の信用が伊太利の信用より低いといふ證據てある。從つて官業を盛んにやれば旨く行つた所て財政に累を及ぼすといはれる。萬一其計畫が違つて旨く行かない時は、非常な危害を財政に及ぼすことはいふまてもない。

第四に民業を段々官業にすれば知らず識らず間に、國家の歳入が減るといふ事も忘却してはならぬ。例へば東京の電車の例てある。電車は民業として居る間には所得稅營業稅等の國稅も拂つたし、東京市に對して此等の附加稅も拂つた。それから幾分の補償も拂つた。然るに之が東京の市營となれば國家の歳入がそれ丈け減ずる譯になる。最も大きいものは鐵道國有てある。日露戰爭までに私設鐵道會社は相當の所得稅營業稅を拂つたのてあつた。又各地方に向つて地方稅其他の附加稅も拂つたのてある。所が國有となつた爲めに、國家はそれ丈けの歳入が減じた。市町村及び地方の收入も減じたに相違ない。て官業になつたが爲めに租稅の減るといふ點も、餘り看過する譯に行かない。固より有利な事業なれば夫れ以上の利益を國家が得るかも知れぬが其有利といふ事は少くとも民業てやれば拂はねばならぬ租稅を差引いて見なくてはならぬのてある。

官業主義的思想を排す

本多精一

近頃獨人ラートゲン敎授の新著「世界經濟に於ける日本人」と題する小著作を一讀したが、其中に敎授は日本に於ける事業界の傾向を論じ、日本に於ける事業は會社の數からいへばなか／＼長足の進歩をして其數も餘り少くない。然しながら大規模の企業に至つては寂々寥々たる狀態であつて、僅かに銀行業鑛山業、及び鐵道業の外は何れも拂込資本は小さくあつて、小資本の小會社が群立して居ることを記述し、而して其原因に關して氏が說いて居る一節に、元來日本に於ける企業家は昔の商人階級から出でたるものが比較的少くして昔の武士社會から出たものが比較的多い。而して昔の武士なるものは何れも皆貧乏人ばかりであるからして、此等の人間は勢ひ諸外國に於けるが如く、大資本を以て自ら事業を經營するとか、或は會社にしても大資本を集めて大事業を起すといふ事は其資力が許さないのである。從つて止むを得ず小さな資本を集めたる小さな株式會社を組織して、そして事業を經營して居るといふ狀態である。夫れ故に日本の事業界は諸外國の事業界とは其趣を異にし、會社は澤山に存在するも其規模たるや極めて微小たるを免れないといふ風に說明をして居る。然しながら之と同時にラートゲン敎授は日本に於ける事業界の前途を豫想して必ずしも悲觀をして居らない。只日本人に對する警告として次のやうな事を言うて居る。「日本國民が堅實なる個人性を發展せしめざる限り、又日本國民が獨立せる科學的研究の精神を發揮せざる限り、又日本國民の思想が單に手近き目先の問題に囚はれつゝある限り、日本人は工藝上に於ても又經濟上に於ても現代の重要なる工業國民の後へに瞠若たらざるを得ざるべし」といふ事を說いて居る。此警告は日本人にとつて頗る適切なるものであつて、政治上に於ても同樣であるが、殊に經濟上に於て、日本人の堅實なる個人性を有せず又獨立せる科學的研究の精神を缺いて居るといふ事は、不幸にして爭ふべからざる事實であつて、ラートゲン敎授は昔久しく日本に居り、又日本の國情民俗に通曉して居る丈けに、警告の甚だ適切なるを覺える。而して我國の事業界に於て、官業及び官業思想が今日の如く頗る旺盛であつて、其結果純然たる民業の發展が極めて微弱であるといふ事は、之を一口に論じ詰めれば、要するに我國の事業家はラートゲン敎授のいふ如くに、堅實なる個人性を事業の上に發揮しないといふ一點に歸着すると思ふ。

本來官業主義といふ事は啻に政府直營の事業が澤山に行はれるといふ事のみならず、之と同時に民間の事業が兎角政府に依賴して、或は補助金の要求を濫りにし、或は特別の特權を要求したり、或は政權に依賴して以て自己の利益を計つたりするやうな傾向は皆廣き意味に於ける官業主義の經濟と稱すべきものであつて、若し現代の事業界の中から此等の官業主義的思想の產物を取除いて了ふならば、嚴格なる意義に於ける民業といふものは果して幾何殘るか。事業界の發展と稱しても此見地から

觀察すれば、民業の現狀頗る哀れなるものである。彼の滿鐵や東拓の如き半官半民の事業も亦官業思想に胚胎したる事業界の畸形兒であつて、素より純然たる民業と稱することが出來ない。其他形式に於ては純然たる民間の資本で經營する大會社と雖も、政府の補助金に依賴して僅かに其營業を繼續して居るもの亦甚だ少くない。或は又一個人の經營に係る事業の如きは、固より其形式に於ては民業の體を裝うて居るけれども、此等の事業が或は世間の認めて以て御用商人となすものゝ手に成り、或は政府と一種の特權的關係の下に之を經營して居るものが多いといふ事は、之れ亦純然たる民業を以て之を見ることが出來ぬ。して見れば官業主義の事業といふものは單に政府の直營にかゝる製鐵所や、製絨所や國有鐵道や、其外世間に於て普通民業と稱して居る範圍内に於ても、現に著しく其思想が彌蔓して居るといふ事を認めなければならぬ。近き例を取つて見れば今日吾國の事業界に於て有數の事業家と稱せられ、若くば大會社の代表者と稱せらるるものゝ中、政府の保護恩惠以外に超越して獨立獨行、ラートゲン教授の所謂堅實なる個人性を事業の上に發揮して以て其地位を有して居るものが果して幾何あるか。斯く觀察するならば我國現時の事業界は廣き意味に於ては殆んど全然官業主義的思想に魅せられて居るというても强ち過言であるまいと思ふ。是れ即ち現代我國に於ける企業界の一般の傾向である。

我國の事業界をしてかゝる傾向に趨かしめた原因の一つはラートゲン教授の說明せるが如く、新日本の事業家なるものゝ多くは古の武士階級から出て、從つて何れも資本を有せず、僅かに其事業界の知識ばかりに依賴して事業を經營せんとして居るにもよる。從つて資本の缺乏を補はんが爲めに、事毎に政府に依賴し、政府も亦事業界の進歩を期せんが爲めに種々の特權、恩惠を與へた結果、今日の如くなつたのは我國の如く總ての點に於て、後れ馳せに西歐文明に追着かんとせる國に於ては事情止むを得ずといへば、いふ事も出來るけれども、結局今日の御用商人とか或は官吏の古手とかが事業界に澤山に其地位を占めて居るといふ事は、我國の事業界が或意味に於ては何れも半官半民の意味を帶びて居るといふ事を證明するものである。故に一口でいへば現代の事業界は溫室的發達を遂げたものであつて堅實なる事業家の個人性の發達に基いたものにあらざるは爭ふべからざる事實である。

顧つて官業主義と民業主義が何れか事業界を利益するかといふに、抽象的に其利害を論ずる日になれば、官業主義も絕對的に之を排斥することが出來ぬ場合もある。例へば或試驗的の事業にして若干の期間は到底事業の利益を期待すること能はず、而かも將來に重要なる事業の如きは政府自ら金を投じて、之を經營して其模範を示す場合もあるし、或は電信、電話事務の如き公共事業にして全國劃一の施設を要するものゝ如きは、之を政府直營の事業として經營するを以て比較的安全とする場合もある。故に學術上の抽象論としては、官業主義は悉く國民經濟上弊害を伴ふといふ事を極言することは出來ぬ。然しながら我國の事業界に於ける實際問題として之を論ずる日になれば、今日は官業主義の利弊如何を

當ずる場合にあらずして、如何にせば、我事業界より官業主義的思想を驅逐して、我事業界をして事業家の堅實なる個人性の基礎の上に建設せしめるやの問題となるのである。言葉を換へて之をいへば今日の事業界をして政府の補助金より獨立せしめ、政府の特權、恩惠より獨立せしむるかに歸着するのである。此獨立狀態に立至らしめぬ以上は政府の財政は、年々種々の名義に於ける補助金、奬勵金を加ふるばかりであり、而して民間の經濟界は、政府の保護奬勵の下に生存する大會社大商人の爲めに堪へず不公平なる壓迫を蒙り、眞に獨立獨行、自己の人格と努力と資本とを以て事業を經營せんとするものは、之が爲めに何時までも競爭上不利益なる地位に立たざるを得ぬ結果となる。此點實に我國の前途の爲めに憂ふべき事と思ふ。元來事業界の發展なるものは、或種の特權を有つて居る大會社大事業が大いなる勢力を揮つて存在することを意味するにあらずして、寧ろ中流及び其以下の事業家が何れも相當の設備の下に其業に安んじて、健全なる發達をするといふ事を意味するのであるからして、少數の大會社大事業が、假令存在することなくとも、多數の中事業中商人が、獨立自營の途に安んずることを得るといふを以て事業界の理想とせねばならぬ。經濟上の事も亦政治上に於けるが如く少數の貴族、特權階級の存在を喜ばないのである。故に政治上に於ては四民平等、更らに進んでは普通選擧を理想とするが如く、事業界に於ても亦少數の特權者の爲めに多數の獨立せる事業家が、種々の壓迫を蒙るのを避けるを經營上の眼目としなければならぬ。かゝる狀態を實現せんが爲めには第一着に今日我國の事業界に横溢しつゝある所の官業主義的思想を驅逐するが急務であると思ふ。で官業主義的思想の驅逐といふ事は、啻に政府の直營にかゝる事業の或者、即ち製鐵所の如き製材所の如き、製絨所の如き、尚一歩を進むれば國有鐵道の如きを民間の企業に移すといふ事のみならず、仝時に民業の體裁を裝へる部分に深く浸潤して居る所の保護思想及び特權思想を驅逐することをも意味するのである。此等の思想を驅逐する方針を採るに於ては今日の事業家中、之が爲めに非常なる打撃を蒙るものも少からぬかも知れぬが、之は政治上の革命に於て少數の貴族、僧侶其他の特權階級が一時特權の剝奪によつて困難すると仝じ事であつて、我國の事業界をして、假令革命とまで行かずとも、今後の新時代に處して其新生面を開かしめんが爲めには、之が爲めに多少の犧牲を拂ふといふ事は固より覺悟しなければならぬ事である。

民營は原則、官營は例外

武富時敏

元來政府といふものは營業の機關ではない。其性質としては寧ろ營業に不適當なものである。然し例へば國が幼穉にして、只人民丈けに任かして置いては其事業が起らんといふやうな場合には、政府は其模範を示

す爲めに止むを得ず自ら經營するといふやうな事がない事はない。然しそれは最早今日の時代に言ふべきことてはない。維新當時にはあつたのてあるが、今ては過去つた昔譚になつて了つて居る。それから又政府てどうしてもやらなくてはならぬといふ譯てはないが政府てやつた方が都合のよいといふものがある。例へば軍器の製造の如きものて、日本の政府も現に東京大阪の砲兵工廠て盛んに軍器製造をやつて居る。軍器の製造を民間にやらせれば、秘密の洩れる恐れがあるからしてこれは政府てやつても仕方がない。然し之とても絕對に陸軍省てやらなければならぬといふ必要はない。現に英國ても獨逸ても、軍器、軍艦の製造を民間てやらして秘密は保たれて居る。夫れ故に絕對に官營てなくてはならぬといふ事はない。然し軍器の製造などは、どうせ餘り多く儲かる仕事てもないから政府てやつても別に差支はない。今日ては或は政府てやつた方がよいかも知れん、其他には是非政府てやらなくてはならぬといふものがない。只煙草の專賣、鹽の專賣は歲入を得る爲めに政府の專賣にして居るのてあつて、之とても絕對に政府てやらなければならぬといふ事がない。專賣局の如きは民間の一會社に請負はしてもやれん事はない。然し行掛上政府自ら經營することになつて居るから、專賣の利害得失は別論として政府て經營しても仕方がない。さういふ二三のものを除く外は是非政府自ら經營しなくてはならぬといふものがない。製鐵所の如きは無論民營に移して少しも差支ないと思ふ。製鐵所は確か明治二十四年に初めて起つたものてあるが其時には軍器の獨立といふ事が根本になつて起されたのてある。然し今日ては事業が次第に擴張されて、單に軍器專問てない。殊に昨年から大擴張されて、其の擴張された部分は軍器には關係なく、全く市場品を作る目的てある。例へば軌道(レール)だとか釘だとかいふやうな市場品を作るのてある。專ら兵器用の製鐵業は、海軍省てすゝめて造つた室蘭製鐵所てやる。今迄の製鐵所は軍器の部分ても鐵板のやうなものをやる。さういふものは無論民間の會社なり或は個人

なりに移して少しも差支はない。又陸軍省て持つて居る製絨所も民營に移して差支ない。民營に移すと却て其事業が盛んになる。戰爭があつて羅紗の需要が殖えた時には、アレ丈けでは政府の要求に應ずることが出來ない。東京大阪あたりの會社からも買上げて、民間に羅紗製造の盛んになることを奬勵して居る。さういふ譯であるから成るべく民間の製絨所の起ることは陸軍省としても望む所である。政府として全く不適當な營業をやるよりも民間に拂下げて差支がない。差支ないのみならず却て利益である。其他製材所の如きも無論民營に移して差支がない。それから之は急には行かんかも知れぬが鐵道——之は國有になつてから已に八年、而かも國有當初の目的は一つも達せられてゐない。統一〳〵といふが、ちつとも統一がつかずに依然たる會社時代の有樣てある。統一したのは從事員の製服が一定した位のものであるが、そんな事は詰らん事て、本當の目的は些つとも達してゐない。のみならず政府が經營して居るが爲めに動もすれば財政と搦み合つて、鐵道本來の進歩を妨げる。八年間の間に鐵道を財政の遣り繰りに供した事は一再に止らない。これでは鐵道の進歩は期せられない。急には出來ぬにしても行々は政治とは引離して、運輸の機關としての本分を全くさせなくてはならぬ。一度國有にしたものを忽ち拂下げることが出來ぬならば、鐵道は政府の所有にして置いて、運輸丈けを民間にやらせるといふ事にしてもよい。或は又官民合同でやつてもよい。之はいくらも外國に例がある。佛蘭西の如きは、鐵道は官有て、運輸の營業は民間にやらして居る。伊太利も亦殆んど同樣てある。此等を參酌してやれば鐵道の爲めに利益ある組織にすることが出來やうと思ふ。廣軌鐵道にするといふ事も始終財政に絡み着いて來る。廣軌の爲めに外債を募集する。さうすると在外正貨補塡の爲めに內地は忽ち通貨膨脹となる。其點て廣軌は急に運ばれない。財政上の論點から大いに反對する人が出て來るのも其爲めてある。只鐵道のみを考へると狹軌より廣軌のよいことは當り前であるし、且つ滿洲なり支那なり

と車輛の連絡貨物の連絡丈けても、幹線を廣軌にしなければならぬ事は論はない。論はないが始終財政に絡み合ふからして、財政上の利害から反對が起るのである。そこで政府と引離して獨立して經營することになれば、財政の絡み合ひが除れて鐵道業が獨りて進歩することになる。て我輩は行く〳〵は政府と引離さなくてはならぬと考へて居る。

まア大きいものは以上の如きものであるが、少さなものが若しあつても、それは皆官營にする必要がなく、民營にして一向差支ないものである。

畢竟政府て事業を經營することになれば算盤玉と相談をせず、無勘定にやる。だから民業と競突したり或は壓迫したりすることになる。商買といふものは總て儲けなくてはならぬものである。損をしてもよい商買人といふものはない。然るに政府は損をしてもやる。故に或新奇な、而かも國家に必要なる事業の模範を示して、追々民間からも手を出させやうとする政略の上から官業をやることはあるが、然し今日ては日本人も左様な幼稚な國民てはない。そんな考てやつては大間違を起す。どうしても政府の仕事の中て營業に屬するものは成るべく民營に移す方針を取らなければなるまいと思ふ。

總選擧に對する國民の覺悟

有識者の奮然蹶起すべき秋

尾崎行雄

日本現在の總選擧といふものは極めて無意味なるものである。論評する値打もなく又興味もない。何故なれば國民多數の代表者を選擧するといふ意味もなく、又或主義政策の勝敗を爭ふといふ戰でもなく、只無主義無定見の四五百の候補者が或は當選し、或は落選するといふ丈けのものであつて、甲の黨派が勝つたからといつて別に國家の政策が變るでもなし、又乙の黨派が勝つたからとて外交上に影響があるでもない。强いて其差異を求めて、彼等が口にして爭ふ所の言葉を擧ぐれば、積極方針とか消極方針とか言ふけれども、然し實際に於ては積極方針を唱へたからとて、やれないものはやれないし、消極方針を唱へたからとて、やらなくてならぬものはやらねばならぬ。詰りどつちも同じ事になる。又よく憲政有終の美といふ事をいふ。何れの黨派もよくいふ。然し何れの黨派が勝つた所で負けた所で國政に何等の變化を及ぼさない。其一勝一敗は兩國の國技館に於ける角力の勝負程の意味もない。夫れ故に全國の見物人も角力を見る程の興味を以ても總選擧を見ない。又當選者が議院に集つて國事を議するに當つても矢張り角力に對する感興の半ばをも起さぬ位であつて、人氣は已に全く議院から去つたものである。其有樣は恰度見物人のない所で芝居をするやうで、いくら聲を怒らしても、何の張合もない。然しながら選擧といふ事は、立憲政體の骨子である。選擧なければ立憲政體がないのである。然るに箇樣な有樣であ

るからして酷評すれば日本には立憲の名あつて其實なしといはれても辯解の辭がない。又實際天下の酷評するものは皆さういふて居る。日本は西洋の眞似をして立憲政體にしたけれども、實は本當の立憲國てないというて居る。然し我國が一旦立憲政體を取つた以上は此狀態を此儘に捨てゝ置くことは出來ぬ。捨てゝ置いては、立憲政體が全く崩れることになる。今日を以て廿餘年前に比ぶれば選擧は寧ろ退いて居るとも進んでは居らぬ。故に眞面目なる國民は先づ瞑目沈思して立憲政體を崩すか、存續させるかを考へて、其結果を今回の總選擧に事實にあらはして貰ひたいものである。

全國の選擧人は約百六十萬人であるが、中には候補者の人物、主義、政見によつて取捨を定むるものもないではないが、過半數、否な大多數は、情實により、請托により、或は無意味なる他人の勸誘により投票するのであるから、未だ立憲國民としての權利をも義務をも心得て居らぬ狀態である。歐米に於ては婦人すらも參政權を得ねばならぬというて、生命財産を抛つて大活働を初めて居るのに、日本に於ては堂々たる男子中僅かに百六十萬、即ち五千萬の全國人に對して三十分の一にも足らぬ少人數よりしか選擧權を有せぬけれども、殘りの人は少しも之を欲しいともいはず、又之を求めもしない。隨つて政府も亦選擧區の大小は念頭に置いても、選擧權の擴張は全て考へてゐない。然し之は政府がわるいのでなくして、人民の程度が低くて之を欲しないのであるから、與へぬに過ぎない。英國の如きは丁年以上の男子に悉く選擧數を與ふるを以て滿足せずして、丁年以上の女子にも之を與へなければというて騷いて居る。丁年以上の男子といふ文句の男子を削つて、單に丁年以上のものとした議案が、今年は通りさうな形勢になつて居る。然るに我國に於ては全國人口の三十分の一も選擧權を持つて居るものが無くして、殘りの三十分の二十九以上は全くの無資格者である。それにも拘らず少しも之を求むるの聲がない。同じ立憲國といひながら、其内容に至つては實に斯くの如き相違がある。

之といふのも只人民がわるいのみならず、各方面殆んど悉くわるいのである。上流の政治家も主義政見を以て指導することをなさずして、地方の利害問題を以て人心を惑亂し、一般人民は納税器械たるを以て滿足して、少しも己れの意志を政治上に實現せしめたいといふ考を持たない。其結果かゝる狀態となるのである。故に總ての人が其責に任じなくてはならぬ。然し只人を批難して居つても何の效能もないから、次第に之を矯正するの策を講じなくてはならぬ。それには先づ第一に主義政見を以て選擧を爭ふことゝし、選擧をして意味あるものとしなくてはならぬ。一定の旗印を樹てゝ、其旗印によつて勝敗を決しなくてはならぬ。歐米諸國に於ては甲の旗印と乙の旗印と顯然として分れて甲の黨派が勝てば箇樣な政治を行ふ、乙の黨派が勝てば箇樣な外交をするといふ事が分つて居るからして、政治の綱目によつて總選擧の勝敗が分れるのである。我國に於ては政友會が多數を占めたからとて如何なる政治を行ふか、國民黨が勝つたからとてどういふ政治をするか、ちつとも分らない。全く選擧場裏に旗印がなく、政黨に一定の主義方針がない。故に世間ては官僚とか政黨とかいふけれども、官僚の内閣も政黨の内閣も似寄つたもので、政黨が樹てた內閣も、官僚內閣の衣鉢を踏襲するが如きは、無意味も茲に至つて極れりといはなくてはならぬ。

斯くの如く政界の混沌たる場合に於て總選擧を行ふのであるから、今回の總選擧も矢張り從來の總選擧の無意味なると一向變る所がなからうと思ふ。之れ實に天下有識者の憤然として蹶起すべき秋である。憤然蹶起して此誤れる時代の思想を矯正しなくてはならぬ。又全國の人民も候補者の人格、主義、政見を審察して其取捨を定めなければならぬ。又選擧權を持たない多數の人間は、一人の選擧人は己等無資格三十人强を代表するものとして、充分に其投票の入れ方を監督しなくてはならぬ。一枚の投票を情實の爲めに入れるのは三十人の無資格者を誘うて情實の淵に沈ましむると同じ事である。己れ一人誤に陷るならまだしも罪に輕い

が、他の三十人をも同じ誤に沈ましむるは選擧人の責任極めて大なりといはなくてはならぬ。選擧權を持たぬものも矢張り立憲治下の國民であるからして、充分選擧人を監督するの責任を盡さなくてはならぬと思ふ

又今日の選擧の一番の惡弊は、投票を賄賂、請託によつて賣買することである。政府當然の責任として選擧法を勵行し、此等の惡弊を芟除しなくてはならぬ。白晝公然選擧法に違反するものを其儘にして置くのは白晝公然盜賊を捕へぬのと些つとも違はぬ。而して其の弊害の及ぶ所、國政を禍する所、寧ろ盜賊を横行させるよりも甚しい。然るに區々たる選擧干渉といふ名を恐れて、法律を勵行せぬといふとは、實に政府の怠慢といはなくてはならぬ。或町村の如きは町村會で協議して全部の投票を一人に賣るといふやうな事があるそれを警察官が知つて、默つて居るのは、巡査が盜賊の横行に任せるのみならず、其仲間入をしたといふべきである。かゝる證據はいくらでも擧げることが出來る。縁もゆかりもない人が或地方から突然當選するなどいふ事は實に不思議な事である、斯くの如きことを取締らざる警察官は立憲政體の罪人であつて同時に職責上の罪人である。然るに政府之を尤めず、又選擧人の法律違反を座視傍觀して居る。斯くの如きは立憲政體に不忠なる官吏にして、かゝる官吏が其職に當る以上は、選擧法を如何に改正しても、其効果を擧ぐることが出來ない。

內務省及び地方官にして此弊を矯めんと欲すれば、總選擧に當つて斷然選擧法を勵行して貰ひたい。之を一回やつても必らずよくなる。況んや二回三回と續けて勵行すれば、其弊害は半ば以上減少することが出來るけれども、此等責任者は選擧干渉の批難を恐れて盜賊の横行を許して居る。今回の總選擧に於ては法律の明文丈けは是非勵行して、貰ひたい。總選擧の度毎に賄賂請託の行はれるのを傍觀して居るのは風敎の維持にとつても頗る寒心すべきで、官吏自ら國民に向つて惡事を敎ふるも同樣である。學校に於ては善を爲せと敎へ、選擧に於ては惡事をなすものが成功するといふ

風に示して居る以上は、學校の道德敎育の如きは寧ろ罷めて了つた方がよからうと思ふ。何故なれば人間を動かす力は敎室で敎ふる机上の理論よりも、實際社會の實物敎育の方が强いからである。

總選擧をして有意味のものたらしめよ

衆議院議長 大岡育造

總選擧は何の爲めにするか。議院と政府と敢て大いなる齟齬を來したる問題もない。又議員も此四年間に漸く議政事務に熟して來た。而して其功蹟をいへば、戰後經營、税制整理、條約改正、日韓併合、凡そ此等の事皆議員の與つて協贊せざるものはない。目下國政は兎も角も圓滿に進行しつゝある。然るに今や任期の滿了によつて改選を行ふ。何の爲めに總選擧を行ふかといへば、任期滿了の爲めといふより外はない。任期滿了の故を以て、只任期滿了の故を以て、總選擧を行ふといふが如きは餘りに無意味に屬する。而して國民の多くは無意味に總選擧を迎へ、無意味に總選擧を送らんとする。是に於てか選擧界にいふべからざる弊風が起る。故に我輩は此選擧を有意味のものにしたいと思ふ。任期滿了の總選擧は新らしき國民の意志の表彰を俟つのである、議員の候補に立つ者、よろしく確信ある政見を掲げて國民に問ふの途に於て勝敗を爭ふべし。政府も亦此意を以て選擧界に望を囑し、十二分の言論の自由に向つて保護を盡すことを要する。立憲治下の總選擧に不言實行といふが如き曖昧なる、劣卑な、不法なる手段は、嚴に之が取締りを勵行すべし。斯くの如くして初めて選擧場裏の武器は言論にありと知るべく、策戰の第一義は即ち政策上のにあるべしと思ふ。

一國の爲めになる人物を選べ

（談）武富時敏

總選擧に於て國民の注意すべきことゝいへば、人民の爲めになる議員を選べといふより外仕方がない。人民の爲めになるといへば、一村の爲にするも人民の爲めであるし、一郡の爲めにするも人民の爲めであるし一縣の爲めにするのも人民の爲めであるに違ひない。然し一縣一郡一村の爲めのみを考へる人を議員に擧げてよいかといへばさうは行かない。必ず一國の利益を計る人を擧げなくてはならぬのは論のない話だ。所が動もすれば一縣一郡の利益のみを矢釜しくいふ人を、地方の選擧人が擧げる傾がある。世間の所謂お土産案即ちどこの地方に鐵道を布くとか、どこの港灣を修築するとか、一縣一郡の利害を主眼とした說が、此頃の議會に續出する。世間の人は此お土産案なるものを當てにして今度の投票を行ふ。かういふお土産案を出す人を國民が議院に送るべきや否や。成程それが其案の通りに出來るものであればよいかも知れない。然しそれが出來ないといふ事は分り切つて居るのである。どこの隅々までも鐵道を布き、又如何なる港灣でも修築するといふ事はわるい事でない。然しまだ〱官線の鐵道さへも不滿足な狀態であり、又横濱、神戸の如き日本の大玄關でさへも一向修築が出來上つてゐない。畢竟一國の政務は一時に全國の津々浦々までも及ぶ事が出來ない。全國の力を集中して事の最も急なるものに注がなくてはならぬのである。それであるから津々浦々の港を修築する、或は如何なる山間僻陬の地までも鐵道を布くといふ事は、口に言ふべくして實際には行はるべき事でない。それが行はるべきものでないといふ事は、昨年政友會から出した鐵道港灣の提出が三億何千萬圓かになる。今日政友會が内閣を取つて居るけれども、昨年建議した事が一つも出來てゐない。つまり財政が許さないのである。所謂無い袖は振れぬので

金がなければ仕方がない。官線の鐵道でも、横濱神戸の如き大玄關さへも不滿足の狀態にあるから、山間僻陬の鐵道や、津々浦々の港灣を持出しても今日行ふことが出來ぬのは分り切つて居る。然るにかゝる問題を餌にして選擧人の歡心を買はんとする人が多い。又た選擧人も喜んでさういふ人を選ぶといふ風である。然しそれが出來た例がないので、最早國民も多年の實物教育によつて、箇樣な空な、實行の出來ぬお土產案に欺かれて投票するものは今回は少からうと思ふ。が、然し世の中は廣いから、さう斷言は出來ない。今度の總選擧に出やうとする人は、セッセとお土產案をやつて居るのであるから、選擧人は成るべく眼を大きく開いて一國の爲めに盡すやうな人を多く選んで貰ひたいものである。

私の國に天山といふ山がある。そこの麓に天氣を見ることが極めて上手な男があつた。今日は雨だといへば詰度雨降る。今日は天氣だといへば詰度晴れる。其豫報が一々當る。そこで領主の殿樣が、かう天氣占が上手ならば旅行には持つて來いの人間だといふて、江戸參觀の時お伴を言附けた。所が國を出發してからはどうしても當らない。東海道へ來たら當らないのみならず丸でいふ事が反對になつた。それでどうして當らないと詰ると、天山は一向に見えません、一體天山はどうなりました。といつたさうだ。東海道へ來て天山の見える筈はない。天山に雲のかゝる具合で天氣を見て居つた此男に、天山が見えなくなれば天氣が分る筈はない。それと同じやうな譯で、いくら地方の事について經驗のある人でも、議員となつて一國の政務を議することが出來るかどうかは容易に判じられない。一國政務の得失は地方の利害とは又別である。天山の天氣見では一國の政務を議するに不適當である。選擧人たるものは是非智見を開いて一國の利害に着眼し、一國の人民の爲めになる人物を精選して出して貰ふやうにしたいものである。

總選擧に對する國民の覺悟

法學博士　戸水寛人

總選擧の期日も追々近づいて來たが、總選擧の度毎に何時でも行はるゝ弊害は、投票の賣收及び候補者の賣收である。一票幾らといつて賣收したり、又甲の候補者と乙の候補者と爭うて居る場合に、甲から金をやつて乙の競爭をやめさせるといふやうな事をする。之は何時もある事で非常な弊害と思ふ。一體選擧人は自分の選擧權の貴い事を自覺しなくてはならぬ。何の爲めに選擧權は貴いかといへば、それで以て國政に參與することが出來るからである。澤山の國民が自ら議場に出ることが出來ぬから、自分の代表者を選んで國政に參與せしめるのである。夫れ故に其事柄たるや甚だ重大な事である。日本が國を開いてから僅か數十年しかならぬが、國勢は隆々として東洋の一方に輝いて居る。之が一歩進んで東洋の覇權を握るか、或は退いて列國の玩弄物になるか、今日は實に其浮沈の別れ目である。日本國民は全力を傾注して國の爲めに盡すべき秋である。善政を行へば國が榮え、惡政を行へば國が衰ふるのは分り切つた事であつて、心あるものは國政に參與して善政を行ふ事に骨を折らなければならぬ。然るに此國政に參與すべき選擧權を、金で賣つたり、或は雨が降るからといつて行使しなかつたりするのは私は國民たるの價値なきものと思ふ。冀くば日本國民は選擧權を尊重して、之を適當に行使して欲しい。

日本全國を通じての大弊害は、所謂運動者なるものがあつて、代議士たらんとするものは、此運動者に運動費を拂はなければならぬ事から起る。運動費の遣ひ方は實に亂暴なもので、餘りよい所には遣つて居らん甚しきは此選擧運動を職業として、之によつて衣食して居る者さへある。然し箇樣な運動者は深く求むるに足らんが、此運動者からして金を貰つて、自分の擧選權を賣る者に至つては、其心術の陋劣なる、其の國民

たるの本分を閑却する、實に恕すべからざるものと思ふ。

此弊風より生ずる所の害は、枚擧に遑あらずてあるが、直接に其主もなるものをいへば、さういふ事があるが爲めに、代議士たらんと欲する時には、其運動費を要することが多大てある。歐羅巴諸國に於ても、運動費は少からぬと聞いて居るけれども、然しながら日本の如く不正なる消費の仕方は少からうと思ふ。斯くの如く多額の運動費が要るが爲めに、所謂資産家や山師は好んて代議士になるが、學識非凡てあつて且つ淸貧に甘んずるやうな人物が出なくなるのは甚だ遺憾てある。日本に於ては今日の國の狀勢に鑑みて、立派なる議員を選ばなければならぬから、成るべく速かに斯の如き弊風を一新しなければならぬと思ふ。

如何なる種類の人物を代議士に送つてよいかといへば先づ第一には、固より學識豊贍て且つ世故に長けた人を擧げなくてはなるまいと思ふ。只金があつて運動費さへ遣へば誰てもなれるといふのは甚だ面白くない現象てある。斯くの如くして選ばれた議員中には立派な人物がないといふ事を斷言する譯てはないが、成るべくば運動費を散布する高に着目せずして、立派なる人物を選ぶことを心懸けて貰ひたい。

第二には實地問題に着眼する人を議院に送らねばならぬ。世の中には政論家が澤山あるが、政論家多くは空論家てある。實際に行はれぬ議論を唱へて得々として居る、斯ういふ人を議院に送つても格別用をなさない。議場に於て政府の惡口さへいへば能事畢れりとするが如き輩は何の爲めにもならない。議場は演說會とは違つて居る。只議論さへすればよいといふものてはない。實地に行はれることを主とせずして、行はれざる議論を吐いて政府を痛罵して、それて國政を旨く料理することが出來るものじやない。勿論私は政府を痛罵してはならぬとはいはぬ。議論が違へば痛罵してもよい。只一時の快を取る爲めに痛罵するのは役に立たぬと斷言するのてある。

第三には一國の政のみならず、地方の利害をも顧る

人を議院に送つて欲しい。諸々の地方が、各々自己の選擧區から代議士を出して居る。此等代議士は固より其地方のみを代表して居るものではないが、然し選擧區を地方に割當てたのは、地方の利害をよく知つて居る人を出すといふのが一つの目的である。政府は固より各地方の利害を討究して政をなすけれども、然し中には手落もある。其等の手落は代議士が指摘するの必要があると思ふ。地方の利害に關することを代議士が建議案として出すと、お土產案であるとて笑ふが、それは甚だ非であると思ふ。地方の利害は其地方に關係ある代議士が最もよく知つて居る譯である。此等の代議士が地方の爲めに建議案を出すのは固より當然の事である。私が七尾築港に關して建議案を出すと、之をお土產案であると罵倒した人もあり又之を新聞に書いた人もある。甚しきに至つては此の如くせざれば次の總選擧に當選出來ぬと云つた人もある。併私からいへば七尾築港の建議を出すは當然の事と思つて居る。此案の提出によつて私の投票を多くせんとの考も毫頭ないし、又之によつて一票も多くなることもないのである私は金澤市選出の代議士であつて、今後も金澤市で爭はうと思つて居る。金澤市と七尾とは甚だ違がつて居る。のみならず七尾の人士は私に向つて投票する權利がない。私は市部の候補者であるから、私に投票するのは市丈けのもので、郡部には及ばないのである。七尾に痛切に利害を感ずるのは七尾及び其附近の人であつて、金澤市の人は七尾の事を念頭に置いてゐない。それに私を以て自分の投票でも多くする爲めに建議案を出したなどゝいふのは此れ小人の心を以て君子を忖度するものである。私が斯る事を建言した趣意をいへば澤山あるが、一體私は北陸の發展に力を用ひたいと思うて居る。廣くいへば北日本の發展の爲めに盡したいと思うて居る。

北日本と南日本とを對照すれば、南日本は鐵道も略ほ完成して居る。之に反して、北日本は鐵道が完成して居らない。海岸に沿ふ所の鐵道はまだ十分出來上つて居らない。本會計年度から敦賀と舞鶴の線路は着手

するさうだが、今はまだ出來てゐない。又所謂羽越線なるものも出來てゐない。其他北日本に完成せぬ線路がいくらもある。又汽車を對照して見ると、南日本の所謂東海道線は奇麗で、食堂もあれば寢臺もある。北日本のにはそんなものが一つもない。私の鄕里の金澤に行かうとすれば寢臺がないのみならず、食堂もない位だ。新潟行の汽車に至つては金澤行のより一層惡るい。食堂も寢臺もないのみならず、電燈なども碌につけてない。其便所の不潔に至つては言語道斷である。豚を運ぶ汽車ならよいかも知れぬが、人間を運ぶ汽車としては甚だ粗末なものである。東海道を旅行して、下の寢臺でなくてはイヤだ、上の寢臺は嫌ひだなどゝいふのは頗る贅澤である。試みに新潟に旅行して見たら何人と雖も其汽車の粗末なのに驚くであらう。

鐵道によつて南日本と北日本とを對照すれば以上の通りであるが、船舶の出入する港灣についても亦同樣である。南日本の港灣は可なり改良せられてある。之に反して北日本の港灣は世人の爲めに閑却せられて居る。亞細亞大陸の一部が日本の領土となり或は勢力範圍となつた以上、北日本は斯く閑却すべきでない。又高等なる學校についても同じ事をいはなくてはならぬ。南日本には高等の學校が澤山あるが、北日本にはない。要するに北日本は政府の爲めに虐待せられ、國民の爲めに閑却せられて居る。之は北日本の人民の憤慨に堪えざる所である。斯くの如き事は北日本から選出せられて居る代議士が指摘して然るべき所である。斯くの如きことについて冷酷なる批評をする人は、畢竟代議士の職分の何たるを知らぬ人と思ふ。

最後に選擧せらるゝ人についても亦一言したい事がある。日本に於て多少の敎育を受けた人は各々適當な事業に從事して居るが、概して國政に冷淡なのは甚だ不都合な事と思ふ。已に日本は立憲政體の下に立つ以上は、自ら進んで其政に參與した方がよろしい。學識經驗ある人士は自ら進んで代議士となつた方がよろしいと思ふ。自分の個人の財産の増加に熱中し、又は學術の研究に熱中するのも結構な事であらう。然し國政

を顧みぬといふ事は中流以上の人間に取つては甚だ好ましくない事である。國政は成るべく專問の人にのみ任せずして、種々の方面から之に參與しなくてはならないと思ふ。今回の總選擧にはどうか立派な人物が澤山候補に立たんことを希望する。

政友會員としての希望

子爵　秋元興朝

私は政友會員でありますから、單なる純理の上からばかり此問題についてお話する譯には行かない。矢張り政友會員としての希望を申上げるより仕方がないのてある。尤も政友會員として申上げるからとて、心にもない、いゝ加減な事をいふのではない。

若し正面から此問題について簡單にいへば適材と思ふ人に投票せよ、國民の意志を代表する、所謂代議士といふ名に協ふ實を備へた人を選擧せよといふの外はない。之は誰も異論はない筈である。

只吾々政友會員からいへば、議場で議論をする丈けて實行を缺いた日には何にもならんから、政友會の如き大多數の政黨がある限り、其れ以外の黨派の代議士が出た所で到底何も出來んから成るべく政友會から多く出して貰ひたいと思ふのである。議論をする人は、政友會は大多數を賴んで專横する。健全なる分子を新たらしく入れなくてはならぬなどゝいうて居るが、それぢやどういふ專横が政友會がやつたかといふと、別に攻撃する程の事もないやうである。尤も役人の選擧とか何とか小さなことには或は公平に行かんかも知れんが、大きな事については私はまだ見た事がない。又或は過去に遡つて情意投合をやつて前内閣の政策を多く踏襲して居るのを其儘にして置くのはよくないなどいふ人もあるけれども、現内閣の總理大臣が政黨の首領であるから、大體贊成して行くのは當り前の事てある。それならば之を攻撃する反對黨に何か具體的の成

案でもあつて、國利民福を增進するには斯く〳〵の政策があるといふなら格別だがさういふものも別にないやうてある。經費節減といつて五千萬圓とか或は六千萬とかいふが、天引論とかいふ總論的のもので、具體的の案がある譯てない。根本の大經論といふものはないやうてある。さうすれば矢張り五十步百步であるから自分の黨派の内閣總理大臣に從うて行くのが當り前と思ふ。それて私は矢張り今の處、どうしても政友會に據るより外仕方はあるまいと考へる。然し今行政整理財政整理といふ大事なものをやりかけて居る處であるから、同じ政友會員ても、成るべくよい人物を選んて、行政整理、財政整理の實を擧げ得る人を多く選ぶことを政友會員として希望するのてある。

此際大に國民の自覺を要す

伯爵　大隈重信

近來は一般に國民が選擧に冷淡になつた、敢て必ずしも五十錢一圓但しは一席の御馳走によつて自己の權利を人に與へるといふ譯ではない樣だ、即ち近來は段々棄權者の數が殖ゑて來て居る。それ故運動するものは先づ此棄權者を尋ね廻り驅り出して自分の方に投票させ樣とする。それて又特に選擧運動者なるものが出來色々の術策を弄する事になつたものてある。一般に今日の國民にはまだ立憲政下の國民は代議士を選擧するを以て己れの負ふべき當然の義務であるといふ樣な信念を持つて居らぬ、それも據ない、今日はまだ教育界にも憲政的教育が施されて居ない。それ故憲政運用の權利を與へられて居ても其權利を行使することを解せずに居るのて、所謂敎ひられざる民てあるから仕方がない。已に選擧運動者がある、從つて其處に選擧法違犯が現はれるのは已むを得ない。今日は其百人に一人が

それに問はれて物議を惹起す位のもので事實はそれ以上に仲々多い事であらうが。そして多くは見逃されて來て居る、警察官などにその何れかの黨派の間柄が近いと往々檢擧されずに濟んで居る。村長とか村會議員とか、府縣會議員とか、參事會員とか、それ等重なる地方のものに選擧運動者は結び付いて色々な術策を弄する。斯る事で自然選擧に澤山な金を要するが其力を賴まなければ到底當選は叶はぬ。如此く已に選擧に於て澤山な金を要するから、選ばれて代議士となる曉は何等かの方法を以て一旦失つた金を取返さうとする。是は人情の自然である、代議士に收賄其他色々不廉な行爲の多くあるのは勢ひ免れぬ。されば斯かる代議士を以て組織した議院其者に又何の威嚴があらう、又何の神聖があらう。此に於てか政府者のそれに對する態度も昔とは變つて自然に敬意を欠く。主義と主義とを以て互に爭ふべきであるのが。今は然らずして政府者は單に術策を以て議會に臨む。即ち今日では官民の間に操縱とか妥協とか、甚しきに至つては情意投合などいふ事さへいはれて居る。是では仕方がない、政黨其者が今日では何等の重きを國民の間に存して居らぬ。中央の此有樣が廣く又地方に影響し、果が更に因を爲して益々國民の選擧に對する熱情を薄らがしめつつあるのである。是は甚だ憲政の爲に慨かしい事だが此の如くにしては最早や幾多の弊害の忍ぶべからざるものがある。國民も今は痛切に是を感じつゝあるのであるから、此際に十分に自覺の眼を開いて來るべき總選擧には其自己の選擧權の行使を誤らぬ樣に勉むべきである。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

陸軍參謀

▼快絶凄絶壯烈鬼神を泣かしむ▲

元帥奥大將閣下題字
阪井中將閣下題字
比志島中將閣下題字
井上文學博士題字
參謀本部附某參謀官實歷講演

陸軍部内有名の實歷談(著者の實名を公表し得ざるを遺憾とす)空前の大快戰奉天包圍戰の作戰計畫に資せん爲め滿洲軍總司令官より重要なる

定價一冊八十錢 郵税八錢

騎兵斥候 露軍橫斷記

官口演忽ち五版

石版刷表紙頗美麗
口繪三色版一葉入
挺進斥候地圖一枚入
斥候里數高低表
寫眞版十數葉
其他插畫澤山

敵情捜索の大命を受け大膽不敵にも單騎露軍を橫斷したる一大快擧=此の行動日數實に二十三日里程實に二千清里全篇悉くこれ血と涙より成る

▼我武士道の精華大和民族の誇▲

東京神田表神保町 同文館

(中付の一)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

德富健次郎序　木下尙江序　石川三四郎著

最新刊

哲人カアペンタア

大哲人の大思想を紹介せる快著刻下の生活問題に一大鐵案を下すは本書也！

文明と稱する一大疾病が人類を襲ふてより茲に幾千歳。此爭奪修羅の巷となり、寂寞荒寥の野となれる文明世界救濟の福音を傳ふるものはカ翁なり。翁は現に英國シエフイルドの片田舍に自ら家を建て自ら耕し、煩雜今日の如きはなき中に悠々自適しつゝあり。トムスアン氏は翁を評して曰く「彼の性はクロポトキンとラスキン、トルストイとヰリアムモリス、シエレーとホイットマン等を打て一丸となせしものなり」と。著者この哲人を敬慕すること多年、今翁の經歷、翁の自然的簡易生活、文明疾病論、非科學論、非進化論、統一的人生觀、自由戀愛論、宗敎未來觀、其他社會經濟論、藝術論、及び最近の訪問記等周到の紹介をなせり。本書の出現は以て現代の虛飾文明に慊たらざる人々に絕大の慰安と樂生の光明とを與ふべき乎。

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番）　東雲堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

最新刊

木村鷹太郎先生
清水孝教先生 著

兵部卿護良親王

河村清雄 中澤弘光 齋藤松洲 吉川靈華 四畫伯 裝幀及畫

菊判六百餘頁●總クロース金文字天金箱入頗美本●口繪三色版二頁●石版十數度刷密書一頁●コロタイプ寫眞版二頁●石版數度刷地圖一頁●挿畫銅版地圖七頁●本文寫眞版八十餘個入●裝幀優美高尚天下無比

▲定價金貳圓五拾錢◎壹萬部限**特價金貳圓廿錢** 郵稅 內地十二錢 臺朝淸四十錢

本書は南北朝史の中心人物にして又日本歷史中の一大悲劇的人物たる兵部卿護良親王の御事蹟を著者自ら其遺跡を踏破し精密なる探査を行ひ苦心研究初めて公にせられたるもの一言一行苟もせず屢々古書の誤りを正し前人未發の新見を吐露せる點蓋し此種の著書中出色のものと云ふを憚らず、尙附載の親王の御足蹟地圖及帝室御物たる親王遺品模寫コロタイプ版等は何れも珍となすに足るべく、また裝幀は河村淸雄畫伯の筆になり最も善美を盡し此稀代の大著を飾るに耻ざる物たらしめんことを努めたり

東京市神田區西小川町二ノ三
明治出版社發行
振替貯金口座東京三九三四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

池邊吉太郎氏著

明治維新三大政治家

（新刊出來）

大久保・岩倉・伊藤論

特製　定價七拾五錢
美本　郵税金八錢

附錄　現代の人物

○大隈伯○山縣公○井上侯○桂公○西園寺侯○寺内子と山本伯○東郷と乃木○德川公○原敬○犬養毅○尾崎行雄○後藤新平○山縣副統監○龜井總監○伊集院公使○大岡と杉田○大倉と安田○大石正巳○其他略す

尋常史家の見地を抜くこと千萬丈、從來幾百を以て數ふ可き三公の傳記評論の一切の巢臼より脱して、其人と其時代との眞相に徹し最も正確に最も鮮明に三公の眉目を描く。一面に於て維新前後より日清戰後に亘る明治政界の秘史活史として是を高級讀者に薦む。

東京麴町飯田町三丁目廿五番地　新潮社　電話番町二二二三　振替東京一七四二



帶

黑頭巾

其一

●花は咲きぬ「帶」の時節は來れり。

●「帶」の時節は花の時節なり。絢爛たる錦帶の花は、春風春水と共に開く也。

●「帶の季節」は政治季節と交替に循環し來る。衆議院の閉會して、議員の選擧區に歸り去るとき、帶の花は、日比谷原頭の翠葉紅花の間に開いて、麗彩を煥發す。趣味の「帶の花」を知らずんば、則ち、政治上に於ても、「一過江の人」たるを失はず。

其二

●「寒冷」は、帶の趣味を冷殺す。冬は、すべての趣味を封鎖して、唯だひとり「冬の趣味」を示すのみ。

●冬の趣味に見ゆる帶の美は、色彩に非ずして輪廓の書趣ならずんばあらず。

●色香は、冬に包まれて、正面の色彩をかくすときも、其の輪廓を帶に示す。帶は、色香の象徴なり。

●色香の枯れし女性の、コートに包まるゝ帶の輪廓は、霜に凋める花草のくづおれの如く、萎びて、「生氣の拔

けたる硬さ」を表現す。

◉楚々として動きつゝある姿態美は、嬋娟の面を見ざるも、窈窕の曲線は帶の後姿にあらはる。コートに堆かき帶の柔かき輪廓は、寐たる東山を起さしめたらんが如く、軟媚の氣、發露す。

◉女には、薄き衣こそ似合はしけれ。袷か、單衣なるは佳し。貴き小袖といふとも、重ね衣に纒まれたる女は、唐紙に木炭を以て描ける美しき輪廓ならずんはあらず。

其三

◉山の頂にばかり花ありて、滿山の唯だ綠葉に包まれたるは、何と無く、花簪を盛り上げたる雲鬟の麗人にも譬へつべし、花無くとも、峯に松の翠を滋ゑて、山腹に、一帶の樹間花あるを見るこそ嬉しかるべけれ。

◉如上の意義に於て、假令、花簪、櫛、笄の輝かずとも、女には、帶の畫趣ありたけれ。

◉餘りに丈高き花木の梢にばかり花咲きて、匂の樹下に屆かぬようなるも口惜しからずや。

◉梢の花は、枝態と映射して自から畫趣を爲す。花ばかりにて心賞の對象となり難し。花の高き木は、須らく、姿致横生の枝幹無かる可らず。

◉元祿の水木辰之助は、絕代の美形なれども、丈高かりき。彼は、華やかなる帶を、大きく、左右に結び垂らして、枝幹の姿態美を作り爲したり。則ち「水木結」は彼の創意也。「水木結」は「吉彌結」のよう也。

◉人體の美は頭に花ありとせば、手足は枝にして、腰腹は、幹に當る。天も、幹には、多くの裝飾を與へず、人間が、帶を以て、其の幹を美化するは、靈智靈覺の力也。

◉花や、枝や、萬殊の畫趣を發揮し得る。人の手足は動きて、無量の變化美を發す。靜中、則ち、姿致の單調に流るゝを免るゝ能はず。這般の缺點を補ふものは、帶の畫趣ならずんばあらず。

其四

◉帶の上に東西文明の相違は、遺憾無く表現す。西洋のバンドは細くして前に結び、日本の帶は廣くして後に垂る。

◉衣裝と帶との調和の美を以て畫趣を爲すものは西洋のバンド也。日本のは、帶の中にも畫趣を籠めんと力む、帶より見たる日本婦人は「畫趣の女」也。

◉西洋の女のバンドは瓢簞の紐の如き乎。其の如何に美しきものと雖も、元と、締め括りの爲に設く。日本

の帶は、文筥の帶の如し。自から模樣を爲すものなり。
◉「書趣の女」は、模樣の帶を以て、模樣の衣裝に配合せしめ、相待ちて、更に、一の「模樣の女」を描き成さんとする者也。彼女の身幹を彩どるもの、一として模樣ならざるはあらず。
◉畵趣の女を謳ひて、芍藥、牡丹、百合の花といふもの、動靜坐臥の別をばいへど、要するに、動かざる花也。摸樣の女の畵趣は「靜」に在り。就中、其の要素の特色を爲すものは帶也。
◉靜趣の極端に發達せるものは遊女なり、遊女の帶は特地に、廣くして美し。動趣の美を發揮するものは西洋の女也。彼女の帶はバンド也。
◉西洋の女は、裾を飜へし、手足を以て舞ひ、日本の女は、袂を飜へし、袂を以て舞ふ。西洋の女は姿態美を示す爲に、バンドを細くす。日本の女は、姿態を模樣化する爲に、大なる帶を結ぶ。

其　五

◉東西の帶の趣味を以て、建築に對照せば、バンドは唯だ廊下にして、帶は則ち應接室ならずんばあらず。
◉廊下は獨立の意義を有せず。廊下は、「從」「附屬」の意義に於て存在す。バンドは唯だ、品位を代表す。應接室は則ち、主人公のすべてを代表す。日本の女を見ずとも、帶を結べる種々の圖を、集めて見ば、日本の女を悉くすことを得べし。
◉バンドは簡明にして、帶は複雜也。帶の模樣の萬殊なるのみにあらず、其の結び方は、更に、強き意味を有す。帶の結び目は、「日本の女」を說明する雄辯ならずんばあらず。

其　六

◉吾輩は、吾が近世史に、帶の二大革新あるを知る。元祿と明治となり。元祿は、日本の女をして、「帶の女」たらしめ、明治は、則ち、「帶の女」に新生命と、新畵趣とを附與したる時也。
◉元祿以前には、女の帶も二三寸の幅にして、帶に男女無く、畵趣に男女を分たず。元祿の「若衆」の妖艶なる、女と併せ書いて、其の相違を發見するに苦しむは、其の表情にも帶にも何等の差別無ければなり。
◉女の頭と顏とを飾るは、未開の蠻人も亦之を能くす。帶の革新は、元祿の趣味が、腰腹の裝飾にまで及びたるなり。
◉「鉢の木帶」といへるは、其の頃の、理想の帶也。金襴にして、黑地に、梅櫻、ところ〲に松を織付け

たり。かゝる美しき帶も、幅は僅に二寸ばかりにて、心には紙を入る。禮服に結ぶつけ帶といふは、錦にて僅かに八分斗りの幅也。

●當時、帶の趣味を論ずる者は、廣すぐれば下品になり、狹すぐれば腰元あやしといひ、程善きところは二寸五分なりと論斷す。帶より見たる今古、趣味の變遷此の如きものあり。

●明治の美人は、如何に細腰なるものにても、五六寸の狹き帶を結びて、似合はしく見ゆる者はあらず。

●金太夫といへるは、延寶の頃、島原に並びなき遊女也。ニット笑める目元は世界の伽羅ともいふべしと謳はれたるほどの美人なれど、幅廣き鹿子の帶と、天鵝絨の帶を結びたるを、柳の腰に、藤こぶの纒へる如しとさへ言はれたる也。その廣帶といへるもの、今の帶より見れば、半分にも過ぎざる可し。

●明治の帶の幅廣くなれるは、強ち、贅澤に馳せたるばかりにもあらず。金毛碧眼の美人と對照して、日本の女の姿態美が、世界的に批評せられ、丈短く腰太き弱點の、暴露するに至りて、其の難處を蔽はんが爲には、ます／＼廣帶の必要を感ずるなる可し。

●明治の帶の廣くして、其の模樣の畫趣の向上に苦心するは、則ち、日本の女が、世界に對して、其の特色美の獨立を要求する所以の一ならずんばあらず。太腰に狹帶の、元祿の女は鎖國の美なりし也。

●明治の「帶の女」は、其の帶を以て、日本女性の姿態美と、日本的の趣味美とを、世界的に發揮すべき新使命を有するなり。

其七

●此日、稿を草するの時、恰も春陰、輕寒を催ふし、細雨窓を撲ち來る。烟樹微茫として、梅花ところ／＼に開く。

●此の時、端なく、傘をすぼめて、雨に向つて、俯いて急ぐ女の後ろ姿を想像す。傘の下に見ゆるものは、唯だ帶也。風雨の中を、帶の給の、拔けて、動く也。

●竹內棲鳳の「あれ夕立に」は、一時、藝苑の話題に上る。畫中の女は、扇と帶とを以て畫趣を爲す。畫の大部分を構成するものは帶也。

●後ろ姿といへば、帶を聯想す。後ろ姿を畫面とせば、帶は畫面の眞中に、大部分を占領して、畫趣を發揮す。

●「帶」は、其の模樣と、結び目とを以て、其の人を說明す。後ろ姿を見れば、其の人を想像するに餘あり。「二度喫驚」といふ事あれども、其の人の趣味と閲歷と

は、遺憾無く、其の帶に表現さる。

●看版に僞無しといふは、必ずしも確實ならざる事あり。前に懸けたる看版は、往々、堂に上りて客をして失望せしむること無きに非ず。女の看版は後にあり。帶を見れば、女は僞ることを得ず。後ろに懸けたる看版に、必らず僞無し。

●日本の女は、正面には、巧みに箇性の弱點を防護す。正面より見たる彼女は、いづれも普遍的にして、背面より見るときは、特殊的也。襟は、寧ろ、流行を代表すれども、帶は則ち箇性を暴露せずんばあらず。

●西洋の女は、正面に自から語り、日本の女は、背面に、帶をして表白せしむ。是れまた東西、女性の趣味の相違也。

其八

●帶にも人國記あり。唯だ、帶の結び樣ばかりを見るも、東京と上方の女を鑒別するに難からず。

●東京のは、結び樣に引締まりたるところあり。上方及び田舍は概して寛舒也、むしろのび／＼したる風あり。

●帶の細きは、上方の方なるべし。昔の風の殘れるなるべし。

●京都の「羽織下の帶」といふものも、地方的の表章ならずんばあらず。羽織下の帶といふは、冬の羽織は隱れざる部分ばかりを美しく見する、短かき儉約帶也。今の東京には、必ずしも江戸兒ばかりに非ず。強ち、儉約帶を笑ふを得ざるべし。

●羽織と書いて鯨舍と讀むは、文化、文政の趣味なるも、寧ろ、江戸兒の趣味の、漸く變革するを示す。江戸兒は、明治に衰へたるに非ず。既に、文化、文政の最盛時に其の衰兆を見る。

●羽織は深川唄妓也。東京の羽織は、京都の儉約帶と小似の點無くんばあらず。妓にして、羽織を著るをつねとするは帶の趣味を沒却するなり。帶は女の趣味也。

●輓近、女の羽織は、冬に止まらず、東京に於て、夏羽織も亦た流行するを見る。薄き羽織を透して、帶を見するもの、別種の畫趣ありとするも、羽織は、女の全輪廓の美を減却せずんばあらず。

●吾輩は、女の羽織を排斥す。藝術美として見る日本の女は夏羽織に親しむ可らず。夏羽織は、男のインバネスに該當す、極めて沒趣味也。すでに、ヴェールに蔽はれ、また夏羽織に包まれん乎。日本の女の姿態美は、霧中花の如く、輪廓の、つねに朦朧たるを免かれ

ざらん。

●北野恒富の日照雨は、頗る東京人の注意を惹けり。書中の美人の、帶の、甚だ細きは、其の特徴とせずんばあらず。

●恒富は大阪の人、彼は大阪の趣味也。聞く、彼、帶を説いて、日本の女の筋肉美は、其の腰に在りと爲し、東京の廣帶の、全然腰を隱くすを以て無趣味と爲し、大阪の稍細帶にして吉彌結びなるを可とすと爲す。

●吾輩、必ずしも吉彌結びに左袒する者に非ず。然れども、帶より見れば、日本の舊趣味は、尙ほ、上方に在り。東京のは專らハイカラに馳す。地は、西洋にして、往々、材題を江戸趣味に借るものなり。

●東京の女は、帶を見せて、肉體の姿態美を見せず。大阪のは、稍、姿態美を示す。此の點に於て、恒富の説取るべしとせん。

其 九

●趣味を以て言へば、昔の武士は「帶の武士」たりき。彼等が、帶を重んじたるは、日本刀を挾む可き帶なればなり。趣味ある武士は、綿衣を著くと雖も、錦帶を結び傳家の名刀を佩びたる也。

●世相と武士道の變遷は、男の帶の上にも現はる。今の軍人は悉くぐる〳〵兵兒帶を卷きつけ、角帶を町人帶と思へるらし。

●軍刀を佩ぶるはバンド也。今の軍人は、多くは無趣味なれば、バンドに趣味を寄するものを見ず。

●趣味あるバンドを求めば海軍士官のそれならずんばあらず。彼等のバンドの趣味は、其の短劍なるに在り。

●吾輩は、角帶を結ぶの、何となく、腹具合善きを覺ふ。男の角帶に、帶留を施すものに至つては、實用にして、趣味に非ず。

●今の力士の、縮緬の兵兒帶を、幅廣に廣げて結ぶは如何にしても見苦し。力士に似合はしきは、結髮と角帶となり。

●若しそれ、取的の、未だ軍鷄頭なるが、短き衣に、木綿の兵兒帶を、ダラシ無く、堆かく卷き付けたるは彼等の全體に調和して、一種、滑稽の趣味を覺えしめずんばあらず。此の場合に於て、白き兵兒帶は、彼等の美に非るも、其の色彩也。

其 十

●脊筋を垂直線とし、之に對して、結び目の帶の折返しの爲す角度は、帶の趣味を爲すもの也。

●帶と脊筋とが、直角に交るものは、所謂「よ大鼓」な

り。斜角に交るは、「引懸け」也。直角は、野暮にして上品に、斜角は、意氣にして下品也。

●前年の帶は、「お太皷」は、嚴に、角形を爲し、結び目の折り返しは、正しく、脊筋に直角を爲せり。輓近、「粹」氣、世風に浸染し、角形は動かざるも、また正しき直角を爲さず、角形の儘にして、其の全體が、漸く、垂直線に斜角を作りつゝあり。結帶の角度は、また以て、流行の變、「粹」と「野暮」との調和、及び、社會的中心勢力の推移を徵するに足らずんばあらざるなり。

●「斜」「斜線」は、粹を示す。意氣も野暮も、結び樣に逕庭あること無し。唯だ其の手心に「斜」「斜線」を加味するの如何に依つて相違あるのみ。結び方の巧拙如何に依るとばかり言ふ可からず。

●「粹」といふは、老ゐたるも、必ずしも老ゐ込まず、若きも、必ずしも其の若さを遲しくせざる意義あり。之に反するものは則ち「野暮」なり。帶に於ける「粹」と「野暮」にも、また這般の表章無くんばあらず。

●「竪やの字」といふものこそ、斜線の尤も大なるものなれ。「竪やの字」は、其の角度に於て、樣式に於て、威嚴と美麗とを極む。蓋し、女性の靑春時の艶華を發揮するものなるべし。

●日本人の「趣味の女性美」に於ては、「後ろ姿」は重きを爲す。「高島田」と「竪やの字」とは、後ろ姿の尤も艶麗なるものにして、種々の結髮と結帶とは、前面よりは見えざるも、此の二者ばかりは、髮と帶との頂きを、前髮を越し肩を踰ゑて正面美を映發す。「高島田」に「竪やの字」は、女性前後面の渾身を艶冶化するものなり。

●結帶の形式は、すべて女性の肉線美と內部美との發達、變遷に相應す。要するに其の年時に依つて變化す。

●老人、兒女の小帶は、其の身心の縮少と幼稚とに調和す。中年の帶時は、兩者の中程に在り、而して前程に發達するものは、畵趣に於て、華やかに、收縮しつゝある者は地味あり。

●靑年時の、花の全盛時に在るものは、發達の絕頂に、油の乘り來りて、肉線の到るところに緊張し、緊張の氣の、內に、抑ふ可らざるもの、沸々として煥發の表情を爲す。若し、這般の表情を「動」に表現せしめなばまさに、輝ける、大なるヂェスチュアを爲すべし。之を靜中に裝飾するもの、日本女性に在りては、則ち、高島田に竪やの字の畵趣ならずんばあらず。

●日本に在つて、「高島田」と「竪やの字」は、妙齡の象徵也。人は此の二者だけに對するも、靑春の肉線美の艶

冶煥發する畫趣を想像するに餘あり。

●帶の畫趣は、(一)結び樣(二)結髮の種類との調和に依る。「高島田」は、尤も艶なる髮にして、「竪やの字」は、尤も華やかなる帶也。而して此の二者は、其の濃艶莊美の氣を以て、相合して、青春の精神を煥發せしむ。「高島田」に「竪やの字」は、「斜」と「直」とを併せ、「粹」と「野」とを兼ねて、すべて日本の女性を統一して一生一時の肉線美の盛時を、尤も適應したる形式の裝飾美に於て發揮するものならずんばあらず。

其十一

●從來の日本人は、多く裸體畫を描かざるも、裸體の畫趣を解せざるに非ず。横綱力士の土俵入りは、裸體に、帶の畫趣を調和するものに非ずや。

●横綱力士は、其の强味と、全盛とを表現する肉體美を飾るに、「注連繩」と「伊達褌」とを以てす。此の二者は、「粹」を以て、彼を飾り、土俵入りの型は、チエスチユーアを以て、全盛の内容を現示す。而して「伊達褌」は、艶美を以て、正面に、彼の全盛を形容し、「注連繩」は、背面に、崇高を以て、其の强味の無敵を象徴す。

●常陸山、太刀山を見よ。油の乘つたる强味は、其の肉線美に發露して、人をして、快感を覺えしむ。必ずしも之を飾るに、「伊達褌」と「注連繩」とを要せざるなり。或は、此の二者は、魁偉なる身幹の中部を蔽塞して、寧ろ、眼界を狹くするの遺憾無しともせず。

●横綱の「注連繩」は、史的趣味の美也。「伊達褌」は、「帶の趣味」の美也。注連繩も伊達褌も共に帶也。日本人は何處までも「帶の趣味」を發揮せずんば已まず。

●褌は、すべて帶也。西洋人に褌無し。日本人は、帶の趣味を以て、裸體美を飾る。

●褌の美なるものは、力士第一、漁夫第二とすべし。彼等の美しき褌は、趣味に於て、「猿股」と區別する所以のものは、褌、其のものを美しくすると共に、强健に發育せる、腰の筋肉美を見せしむるの點に在り。

●漁夫は、裸體にして、小舟を操つり、萬丈の奔濤に乘ず。人間の發達せる自然の體力ばかりを以て、大なる自然と戰ふの壯觀は、文明世界に在りては、吾が漁夫の奮鬪を以て、唯一の美と爲す。此の際、彼等の身體に加へられたる人爲の裝飾は唯だ褌の一つあるのみ。

●漁夫の喜んで用ゆる褌は、赤、第一、黄第二とす。赤は危險色也。もと人目を刺戟し易くして、危難の救濟に便なり、是等の色彩は、則ち實用の目的に出づとは雖、之を事實に徴すれば、則ち、赤、黄の二色は、

蒼海に映じて、天然に對する漁夫の活働の景象を浮き出さしめ、多少の趣味無しとせざるなり。

●懸命の大努力を要するの場合、無學の漁夫も、「趣味の帶」を擇ぶことを爲す。人は「趣味の塊」なること、吾が漁夫に於ても徴するに足らずんばあらず。

其十二

●「帶の結び目」は、一箇の書趣を爲す。帶は、之を嬋妍の肉體美に纒はずとも、帶自ら獨立の趣味を有す。

●流石に、趣味の江戸兒も、帶の模樣に、豊富と絢爛とを極むるは、則ち、明治に及ばず。明治の帶の模樣は、古今東西の趣味を集成して、女性の裝飾美に、多量の書趣を寄與す。

●「三越」の三千兩の帶といふもの、先年、稍、都人の注目を惹く。帶は、源氏五十四帖を書き、畵面は、古趣味を發揮すと雖も、人體に用ふべき實用の帶に非ずして、之を裝飾に供する、純ら趣味の帶たり。帶の獨立の趣味を爲す點に於て、帶の趣味の歴史に一新例を開けるものたり。

●江戸趣味の艸草紙に及び錦繪に描ける帶は、書趣の帶にして、實用の帶を描けるに非ず。「三越」の帶は、唯だ、此の錦繪の帶の書趣を、事實に織り出したる也。錦繪を、江戸土産として田舎人の持ち歸りし如く、彼の帶も、亦た地方富人の手に歸せりと聞く。

●「ハイカラ」の一語、現代の流行を現示す、然りと雖も、「ハイカラ」は最近の發明にはあらず。「ハイカラ」は古今、流行の精神也。江戸趣味と雖も、當時の流行の精華は「ハイカラ」に在り。辛くして、戸の節穴の一つを長崎に有する鎖國時代に在りて、早くも、外界の輝ける光を、流行に、映發せしめたる江戸人の努力は今人の意料の上に出づるもの無くんばあらず。

●今の帶の織り方に豊富なるは、前代の比にあらず、殆んど、すべての織物を、帶化せずんば已まざるの慨あり。コブラン織、アルテース織、或は土耳其模樣といふ如き、形質ともに西洋の新趣味を採りて帶に入る。

●帶の書趣に至つては、未だ、多く日本趣味を離れず。復興せる元祿趣味の衰頽は、帶の發達の爲めに喜ぶ可しとするも、概して、江戸趣味の鼓吹は、ハイカラの語中に、一種、變態の雅味調和しつゝあり。日本裝せる西洋婦人に似合はしかるべき、世界的新趣味は、未だ産み出されず。

●文化、文政の江戸趣味の菓子袋の一片にすら、既に、西洋書を應用せるものあり。之に比すれば、今の「ハ

イカラ」は、少しも驚くに足るもの無し。「三越」の帶と雖も、其の「ハイカラ」たる所以は、啻だに、帶の獨立趣味を鼓吹したるに止まらしめずして、其の畫面も、更に、最新の、泰西の畫趣を、日本趣味に調和して、光彩を發せしならば、一層の價値ありしとせん。

其十三

◉其の形に於ても、古今東西の趣味を集成するものは、今の帶也。

◉帶は紐より進化せり。昔の「名古屋帶」といへるは、今の「シゴキ」に當るものなるべし。「帶留」は西洋のハンドに恰當すべきが、其の材料に畫趣を帶びしむるに至つては、その者、既に、一箇の帶たるを失はず。而して元祿以前の細き女帶は、帶の下に、「伊達卷き」となりて、隱れて、趣味を凝らしつゝあり。

◉單に帶といへばとて、帶そのものゝ外、更に附屬物の豐富なるは今の帶の特色なるべし。吾が女帶の如く、道具立ての燦爛たるものは世界に比類あること無し。

◉「趣味の帶」を以て、女の魂なりとせば、帶は、男の刀に相應すべし。帶は則ち大刀に、伊達卷は脇差に、帶揚は下げ緒に、而して帶留は小づかに當るべし。是等の帶の一切が、其の趣味を凝らす所以の意味も亦た刀の、それ等に於けると異ならず。

◉趣味を湛へたる田舍女の盛裝は、帶の粹なる所以に於て、花の都に及ばず。若し、帶の新趣なるを得ることあるも、其の襟に於て、舊趣を暴露せずんばあらず田舍美人の寫眞を見よ。往々、其の華やかなる半襟の一杯に廣く食み出して、輝ける頸を包めること、恰も發達せる蕚の、美しき花を据えたるにも似たらん乎。

◉王代の貴女に至りては、襟を以て、修飾す。帶は則ち振はず。「十二一重」は、源氏物語の女の畫趣ならずんばあらず。今の若き女は、恐らくは、此の語を、耳に聞き、繪に見るばかりなるべし。而して其の帶は、七重八重に、飾られつゝあり。「十二一重」の襟の趣味は、千年の後、七重八重の帶に推移したるなり。

其十四

◉遊女の帶といふもの、帶の畫趣に、一大異彩を發するものといふ可し、其の畫面の燦爛たるに於て、其の形の前結なるに於て。

◉帶の前結は町人に限られたる也。昔の隨筆にも、武家は、老婆に至りても必らず帶を後結にすといへり。

◉帶の前結は、島原の茶屋女の、忙がしきに任かせて後に引廻はす隙も無く、前結の儘に、愛嬌をかゞせきた

るが、其の風趣の、また捨てがたきが、島原の遊女に流行したるを起源とすといへど、必ずしも此の事實に拘泥せざると可とすべし。

◉今の遊女は、昔に比ぶれば、趣味の價値の大なる一半を失へり。蓋し、維新前の武家政治に在つて、階級の精神は社會を支配す。四民平等の世界は、唯だ一の遊廓あるのみ、佛に貴賤無し、遊女の女菩薩の前には武家無く、町人無し。武家も、其の刀を佩ふるを得ず。町人も富の威を失ふ、吉原を極樂世界といふは、此の意義に解すべし。今は則ち武家無く極樂世界到處に在り。

◉吉原は趣味の都也。武家政治の極樂世界といふものは、則ち趣味の國ならずんばあらず。趣味は、平等也、自由也。貴賤の隔なく、老少の別も有らず。

◉趣味の國の女王が遊女なりとせば、特に、遊女は、武家に對映して、其の趣味と、價値とを發揮するものならずんばあらず。此に於て乎、彼女の前帶の、特地に、精采あるを覺ゆるなり。

◉賣笑女は、古今、世界、到處に在り。ひとり遊女、殊に、太夫と稱するものに至つては、「趣味の日本」の武家政治が產出せる、美しき紀念物ならずんばあらず

◉武家政治の社會の趣味は、凝つて、遊廓に在り。遊女は、趣味の凝滴也。たとへば、全線を通ずる趣味の電流の、發光點の、それの如く、唯だ一小點なりといふとも、燦爛として眩ゆき光彩を有す。遊女は、社會の一小塊のみ。然れども頭の頂より足の尖端に至るまで趣味の彩光を集む。彼女には、既に含蓄あるを許さゞるなり。故に、頭髮に、駘蕩の春色を、花簪に盛り上げ、前帶に、うちかけに、暴露せる趣味の光を以て、滿面を飾り、一擧手一投足にして趣味の光波を簸揚す。

◉此の場合に於て、裝飾美の趣味の廣き部分を占領する帶を後結にするは、遊女の立場に於て不適當なり。今の遊女は、則ち前結にするも亦た妨げず。

◉大阪の遊女の前帶の趣味の美が、吉原の、それの如くに發達せざりしといふは、江戶は武家の都にして、大阪は町人の都なればなり。町人の都は金力の世界にして武家の支配する階級の精神稀薄なればなり。

◉遊女を一箇の美術品として見るも、頭上に、あれほどの堆かき簪あれば、前帶の華々しきもの無くんば均齊を失はん。前帶、此の如くんば、莊麗なるうちかけ無くんば、全體美の偏傾するを免かれじ、而して、此の仰々しき裝飾美の女性の全體を支ふるには、また仰々しく裝へる、趣味の下駄を必要とせずんばあらず。

◉遊女の前帶は、又た別箇の趣味を有す。前帶は、「前

掛」の位置を占有す。「前掛」にも伊達あれども、本來の主義は、職業を示し、勞力を示す。遊女の前帶は、前掛に換へて、趣味を表章す。

●實に、華麗なる、大なる立兵庫に、簪、笄を滿載し、三枚歯の下駄の高華なるを踏み、春風に擴げし孔雀の尾のように、金襴の光輝に滿てるうちかけを掬き、趣味の濃き傘影の下に、纎手を以て、前帶を、少しく捧げ持ちて、稍、反り身に推し出したらん、全盛の太夫は、武家政治の下なる趣味の國の詩にして、其の前帶は、此の夢のような圖の中心たらずんばあらざる也。

其十五

●男の胸は、寛やかに、脇を締めて、袂は則ち膨らめり。而して帶は細し。女は胸を窄め、脇を放ち、袂を開きて飜へし、翩々として姿致を爲す。其の帶は則ち濶し。

●懷と袂とは、男のポケットにして、帶は則ち女のポケット也。

●男は、貨財も、用件も、趣味も、すべて之を之を懷と袂とに藏す。女は則ち、之を帶に藏す。

●女の袂は、花瓣の趣味あり。花瓣には秘密無し。秘密は帶に在り。

●女の帶には金あり白粉あり鏡あり。箱せこあり香袋あり時計あり。武士道に於ては、懷劍も亦た此に在り。懷劍は貞操を守る所以也。女が女を守る所以也。日本の女の一切と、生命とは、帶に在ることを知るべし。

●女の帶揚は、往々にして、戀の秘密を藏すといへど帶の藏する秘密は、こればかりに非ず。一切の秘密と本領とは、其の帶に藏せるなり。

●貞操の意義の、切、且つ烈なるは、日本の武士道に發揮せらる。貞操の字は支那に出づるも、原語の義は、日本女性の武士道に比すれば、頗る緩漫たるを免かれず。而して貞操の意義を具體的に表現するものは帶ならずんばあらず。

●支那の帶に玉帶あり。彼土の「趣味の帶」は唯だ、僅かに、これあるのみ。支那文學の豐富なるを以てしても、「帶の詩」に於ては甚だ貧し。西洋のバンドも亦た然り。佛蘭西に「貞操の環」あり。また是れ帶の詩趣なり。然れども、帶の意義は甚だ狹し。

●水の地中に浸み渡れるがよう、日本の文學に磅礴せるは、「帶の女」ならずんばあらず。到處に、「帶の女」の詩あり、畫あり。帶は日本の女と文學とを纏へるなり。

●吾輩は、日本の繪に詩に戯曲につねに、「帶の女」を認めずんばあらず。見よ帶は『貞操の書趣』なり。日本文學を西洋に紹介せん者、須らく、帶の趣味を發揮せよ。

春光輝々たり、不忍池を環りて、活ける「帶の繪」の列なりてく。稿を畢るの時、樹間の鶯の、囀ふて遅しきか、硝子窓より見ゆ。

黒頭巾記

中學程度の男女學生に性慾に關する知識を與ふるとの可否、適度及び方式

拜啓。時下愈々御清榮奉欣賀候。扨弊社發行の『中央公論』に於て『中學程度の男女學生に性慾に關する智識を授くるとの可否、適度及び方式』と題し、全國知名の醫學大家より得たる御回答を發表する計畫に有之候が、惟ふに男女間の關係紊れ勝にして一國壯丁の體格も漸次不良に赴きつゝある今日に於て、學生に授くるに、性慾に關する適當なる智識を以てすることの必要なきや否やは實に刻下の大問題と申すべく若し之を授くる必要ありとすれば其適度及び方式の奈何は、之を各位等の如き專門大家の御高見に據るの外途なかるべしと愚考仕り候につき御多忙の處恐縮に存じ候へ共、男女學生の爲め、延いては國家の風敎の爲め何卒御高說御洩らし下され度伏して懇願奉り候。敬具

次に掲ぐる所は右の如き問に答へられたるものが、記者は玆に懇篤なる返書を賜りたる醫學大家諸氏に感謝いたし候

（記者しるす）

○ 醫學博士　山田弘倫

拜復本月十二日附にて貴社發刊の中央公論へ『男女學生の性慾に關する智識を授くるの可否適度方式』に就て小生の意見を申告可致樣御照會に相成候處此事に關しては未だ發表すべき程の研究を爲し居らず候花柳病豫防に就ては多少調査候ものも有之又發表せるものも有之候得共御照會の問題は單に花柳病豫防の目的よりのみ論ずべきものに無之甚だ其の趣を異にする點有之と信し居候漫然たる私見なれとも中學校の課程に性慾に關する一課を設くるとは現況に於て尚早ならずや吾國にても此問題は研究中なるも實施には至らざる樣子彼我の國情を比較せば歐洲にては已に實施したると思はるゝにも係らず未だ其の事なきは尙風敎上と何等かの衝突點あるものと推察被致候日本に於ける實施は一層習慣風敎上に支障を來たすが如き困難の事情に逢着する點尠からざるべきかとも存候然し小生は花柳病豫防の方面よりのみ見れば青年男生（女學生の如きは尙次の問題に候）には一方消極的に敎育方面よりすると同時に又積極的に其の豫防の方法を開示し置く事は今日必要と確信致居り候所謂花柳病の勢力は駸々乎として盛大になり種々の形式に於て發展するは事實（東

京大阪等の如き大都市にては一に有之候故從つて對抗して豫防法を普及せしむるは當然の措置に可有之候何等かの方法を以て之を實施せざる可からざる儀には無之哉獨國に於けるが如く幻燈或は講話又印刷物等に依るも可ならん目的は花柳病の傳染經路を說き其疾患の症狀後發病家族間に及ぼす危險の程度等を彼等靑年の腦裏に明瞭に印象せしむると同時に其豫防を敎示するに外ならず候其場合に於ては勿論生殖器の構造生理的作用等をも說明するの要可有之候豫防法を知らしむるは却て性慾を挑發し爲めに實行家を多からしむるの一端なりとの論者も有之候得共假りに多少其の傾向を免かれずとするも之を生殖器に關する智識を普及せしめ以て豫防の效を奏する利益とは同日の論にあらざるべくと存候又實施の順序としても此方面より着手するは第一階梯にして成功も望まるゝやと被存候故に私見としては隨意課にせよ正課にせよ中學課程に此課目を設くる以前に於て單に花柳病豫防の目的たる方面よりするを寧ろ急務にして其効果に鑑み更らに貴社提出の問題を討究するを有利と信し居候右御返事までに申上候以上

○

醫學博士　松浦有志太郎

拜啓中學程度之男女學生に性慾に關する智識を授くる抔申す事甚だ不可なり有害無益の業なり

子曰。中人以上、可ニ以語一上也。中人以下、不レ可ニ以語一上也。

近世學者の其言論を愼まざる、反つて毒を社會に流し、風敎を害するもの多し戒めざる可らざる也、

右申上候也

○

醫學博士　小川劍三郎

拜復、中學程度以上の學校に於ては無論と存じ候へども中學程度に於てはその最上級丈に於て衞生の科目の下に一般公衆衞生と共に性慾に關する知識を授くること必要と存じ候。この科に於て一般衞生思想を與ふると共に國民病（肺病癩病黴病痳病「トラホーム」等）の性質豫防早期治療の必要自他に及す害毒等に就きて說明をなせることに候生理科擔當の敎員をして講せしむるか或は校醫をして講せしめ候はゞよろしと存じ候。

○

醫學士　大坪武之助

中學程度の男女學生に性慾に關する智識を授ることの可否てふ問題に接するや、余は直に否なりと答へんとせしが、偶ま其の適度及び方式の兩語を見るに及んで熟考の要あるを感ぜり。之れ有害なる毒物と雖も亦使用の方式を誤らず其の度に適すれば、以て人命を救ふに足るものあり、或は電氣或は蒸氣皆其の適度と方式とにより利用厚生の具となればなり。唯夫れ本問題に於ては其の適度及び方式を確定せんことの至難なるを憂ふ、即ち吾人の藥物毒物に對する動物試驗の如き實驗によるの便を得る能はす、又彼の心的作用は電氣蒸氣の如く無機物により一定の法則の下に一定不變の反應を起さしむるが如き事を得ず。靑春の血漲り來つて性慾の情火方に燃えつゝある中學程度の男女學生にありては、極めて微量の刺戟も其の反應或は極めて大にして、往々常識を以て律すべからざる者あるを思はざる可からず、猶は極めて鋭敏なる天秤に觸るゝがご

とく最も愼重に之を扱はずんば其の適度を發見すること或は不可能に終らん、斯くて若し一歩を過らば忽ち蠆蛇の恐れあり。故に退く者は君子危きに近よらずとなして本題を否定すべし。然れ共例令同一敎室にて同一敎師より敎へらるゝ生徒に成績の優劣あるは勿論、罕には其の智識を惡用する墮落漢を出だす事ありと雖も、之を以て全然敎を受けざる者に比せば、大體に於て敎育ある者の優れるは言を要せずして明かなり。されば性慾に關しても亦其の智識を與へ、之を愼むべき所以を解せしめば、之が敎を受けざる者に優らざるなからんや。故に進で敎ふるに其の人を撰び其の才を得ば以て其の厄を免れしむべく其の効を擧げしむるを期待して過ち無からん。則ち余は此理由の下に進で敎ふるの勝れるを信ずるものなり。

而して余が其の適度及び方式として考ふる所は、先づ男女各其自巳を知らしむるを主として、男生徒に對しては（一）男性生殖の解剖生理大要（二）衞生法（三）花柳病の危害（四）結婚と夫の義務（五）房事の凡そ五綱に就て中學三年より五年迄の間、修身科の時間を割き、或は之を增加し、學校醫をして校長立會の下に、最も嚴肅に科學的に之を講ぜしむ、尙ほ之と對せしめて一年級にありては煙草の害、二年級にありては酒の害を醫學的に敎ふるも可ならん中學以外の學校にありても略ぼ之に準ず。

女生徒に對しては先づ、月經に關する注意を以て始むべし、小學六年を終りて高等女學校に入れば略ぼ十四五歲にして、月華の開く何時なるか圖り難し。母によりては未だ注意を拂はざるに處女其の初潮に驚き悲泣爲す所を知らざると往々にしてあることなればなり。而して四年に至りて（一）女性生殖器の解剖生理大要（二）衞生法（三）結婚と妻の務（四）姙娠分娩及び産褥に關する攝養法（五）育兒上の注意（六）房事（順序顚倒すれども特に最終に廻す）の六綱となして之を敎ふ。方式に至りては男生徒に對せしと同じかるべし。

以上數綱より章目を分てば僅少の時間にて到底敎へつくすこと能はざるべきを以て、可成其の健康上害毒を惹起するが如き諸點を注意指摘し、攝生に重きを措かしむる方針を採り、殊に他の學科と異り言語擧動を謹み、莊重溫雅に人生の大禮なる所以を說示すべし。

本問題は實に重大にして泰西に於ても未だ確定せしを聞かず、苟も之を論ぜんとせば古今東西の書卷を繙き、碩學大家の意見を涉獵し、更に本邦中等學生及び其の卒業の品行と健康とを實査し、之に自己の經驗と判斷とを加へて、玆に初めて私見を公表すべき筈なれど、未だ其の暇を得ず、從つて此稿唯偶感偶話に過ぎざれば、或は後日改むる所無きを保せずと雖も、暫く我が意の趣く所に委せて筆を擱く。（四四、一一、二五稿）

○　醫學博士　林　春雄

學校敎育に於て中學程度の男女學生に性慾に關する智識を授くるの必要なし、之を授くることは害多くして利少しと信ず、

○　醫學博士　松原三郎

生殖器の誤用殊に手淫によりて中學程度の學生が身體的或は精神的衰弱を起し得るは明なり故に過度の手淫が神經衰弱の原因となるは論なし。

然れども青年が異常に早期に手淫を初め或は過度に屢々手淫するは其局部に疾病ありて異常の知覺を發し爲めに知らず／＼の裡に少年が手淫する者あり。或は然らずして單に好奇心より出づるものありと雖も、又た其少年の精神が先天的既に變質して居る者尠なからず。故に此種の者は手淫が神經衰弱症の原因にあらずして單純なる合併的現象なり。斯る者は手淫を止めるとも其の精神の衰弱症を治癒せしむること能はざるべし。思ふに多數は此右者に屬する者なるべし。斯る者は先天的に神經衰弱症を有する者なれども其過度の手淫によりて其精神及身體の衰弱を更に一層增劇するの虞あることは疑を容れざる所なり

精神及び身體の全く健全なる者が多少の手淫によりて神經衰弱症を誘發することなし或はありとするも甚だ稀なるものと余は信ず故に學校に於て特に性慾問題に就きて生徒に敎授すべき必要なしと信ず。殊に此問題を明に敎ふることは風敎に有害なり殊に精細に亘ることは不可能なり就中女生徒に向て然り。此を單簡にあたらずさわらずに云ふことは容易なり。然れども只だ淺薄に手淫は身體及精神に有害なりと云ふが如きことは本能的に手淫すべき年齢のものは皆な常識的に知得する所なり殊に高等女學校程度の女學雜誌には衛生欄の如きものありて敎師が實際女生の面前に云ふをはゞかる程度のことを明記するを以て口にては普通の女學雜誌以上のことを云ふこと不可能なり故に西洋諸國の諸學校及び普通敎科書に於て性慾のことを敎授せざるもの丶如し

余の考によれば諸學校に學校醫なる者あり。一年に一二回生徒を集めて衛生講話をなし「トラホーム」。肺結核。皮膚病赤痢等の傳染病の豫防法を精述せしめ其中の一節として性慾的有害の條件を講演せしむるも可なり、然れども此以上に進むの必要なく又た無効なり或は有害なり

尙ほ學校及寄宿舍には生徒監。舍監。殊に學校醫ありて生徒の健康狀態に常に注意しつゝあり。故に神經衰弱或は身體虛弱者を一々學校醫に於て診察し、其疾患の原因が手淫と關係ありと認定する時は一室内に伴ひて秘密に同患者と問答し手淫の有害なること等を秘密的に個人的に說諭するを良とす。然らずして生徒一般を集め事々しく性慾事情を說明するは無垢の者にも無効或は有害なる話を聞かすのみにして實際の効なかるべし

手淫には二種あり普通人の所謂手淫は肉體的手淫なり。其他猥褻なる小說。新聞雜報を讀み。演劇。義太夫等を見聞し或は猥褻なる空想に耽けりて獨り自ら樂むは之を精神的手淫と云ふ其害は前者に讓らざるべし。

手淫は過度に亘るに非らざれば絕對的有害のものにあらず。過度に手淫せずして而して有害作用を見る者は既に其精神に異常あるものにして手淫のみの有害作用にあらず。

故に過度の手淫者を發見すれば個人的に說諭すべし決して責むべから

ず若し其害を過劇に説明すれば既に精神變質せる者にありては過度の恐怖心を起し自己の生殖器が將來絶望なることを失望して、厭世的に陥り會に神經衰弱症を却て增劇せしむることあり注意すべきことなり。

手淫者に對する注意としては其人の思想を高尚にして音樂。寫眞。寫生。手工等の趣味を涵養し。嚴格なる監督の下に起床し。體育を寧ろ過度に行はしめ、遠足。游泳。登山。散歩。自轉車。體操等によりて晝間疲勞せしめ從ふて夜間には猥褻なる觀念を起すことなくして就眠し得る樣にすべし。其他冷水摩擦等も有効ならん。又た便秘の習慣なき樣にすべし

○

醫學博士　三浦謹之助

御申越の問題は獨逸等にては研究致居候得共尤も困難なるは教師の位置にて候其教授の方式に苦しむと申事に御座候右は小生の聞及候丈け申上候

○

醫學博士　宮入慶之助

一、此の問題に答ふへき適當の資格者は父となり母となりたる五十歳以上の人にして我か既往を回顧し小兒等の育ち行く經路を分明に凝視し得る平靜の心を持ち居るものたるべし。

二、醫學上の知識を有することは此の問題の答案者を少しも有利の地位におかず。

三、今の敎育の弊はあまりに敎へ過るにありと信ずる我は學校生徒に對する教科目を減するに贊して加ふるに贊せす。

四、かりに此の知識を授くるとしても之を授くへき適當の人あらざるべし。

○

東京腦病院長　後藤省吾

男女共に、異性に對する性慾の發動は、種屬の保存、及其蕃殖上、最も必要の事件なれとも、之れら少年者に明に解説することは、父兄並に教師の口より授くるは憚りあるとして、今日に至るまで、自然の自覺を待つへきものとし、父兄教師は、之に關し何事をも少年に告ぐるなきを普通の法となしたりしが、近時識者は、男女各自の間、及男女相對の間に、性慾の發動に際し、忌むへき弊害を生じ、又生しつゝあるを憂慮し、之れを防ぎ、之を矯正せんかために、寧ろ、少年男女の此弊害に陥らざるに先つて、性慾に關する智識を與へんと、論議せらるゝを聞く、中央公論紙の問題は、則ち其意是れにあるべく、依て以て其弊害を除かんと企てたるものと解し、教育上、家庭上、乃至健康上、道德上に甚だ緊要なる、且重要なる企てと、深く敬服し、且贊同する次第なり、

此問題は、問題の性質上、醫學者の關する部分は其一小部にして、大部分は實に教育者、宗教家、及一般家庭、及社會の研究者の所理すへきものなりと信す、故に、醫學者は、此に就ては門外漢とも見るへき位置に立てとも、然れとも又た、父兄として、且社會の一員として、醫學者として、其意見を發表するの責なしと云ふへからす、之れ平素懷く所の意見を記し、貴問に答ふる所なりとす、

余の答は極て單簡也、曰く學校醫をして性慾、及ひ少年の此慾を充た

すの害を、學校に於て說述せしむるを以て最も適當なりとすと、

子弟の前に於て、性慾の說明(たとひ害惡を告くるにしても)は、教師不可なり、父兄素より不可なり、之れ寧ろ、醫師をして之に當らしむへきものとす、殊に其害を論する如きは、醫師を除きて他に良法あるを知らす、醫師の說明あり、聞くもの初めて之れを信用すへきなり、然れとも醫師の解明は、身體に對する害に止まる、男女の關係紊る、と云ふか如き重大なる弊害は、其說明訓戒は、實に教育者の責任ならさるへからす、然れとも教育者は、少年か今醫師の說述を聞きて其智識を得たる後なれは、其訓戒も亦今迄の如くに困難を感せさるならむ、

醫師の說述すへき程度は如何にすへきか、そは極めて概略にして決して深入せさるを可とすへし、只性慾なるものは、誰人にも發動すへきものなり的の度に止まる、今日までは此單簡なる宣告すら爲すを敢てせざりしなり、今既に此根本の宣告を能ふれは、其他の問題を說示するは比較的容易なることならさるへかす、此程度なるか故に、此智識を授くるを可なりとすへく、此程度を超えて深入する說明の、却て性慾の發動及其弊害を挑發するの結果に了るへきや明かなり、

只爰に注意を要すへきは、學校醫をして克く教育界の此問題に對して苦心しつゝある有樣、及ひ之れを授くるに付きての目的を、充分領解し得たるの後に於て說明せしむること之れなり。否らされは、說明者の興に乘し、又は聞くものゝ質問に會して、知らす識らす深入し、却て所謂角を矯めて牛を殺すの愚に陷ることなきを期しがたければなり、家庭の醫師を避けて學校醫となし、且學校に於て之れを授くへしと謂ふは、是を顧慮したるか爲めなりとす、

以上余の答は單簡なれとも、中央公論の懸けたる問題の意のある處は、悉く之を竭し得たるへきを信す、其詳細なる說に至りては、一朝一夕のよく竭し得へき問題にはあらすと謂ふへし、余は元來、文章に慣れす、前後錯雜、其意味解し難き點多かるへし、願くは斧正を玉へ、敬具、

○ 醫學博士 伊藤隼三

中學程度の男女學生に性慾に關する智識は絕對に之を授けざるを可となす

○ 醫學博士 藤浪鑑

(一)

中學程度の青年男女に「性慾に關する」知識を或る適度と方式とに於て授くることは可なり、且必要なり。

(二)

「性慾に關する」智識は凡そ左の適度と方式に於て授くるを可とす。

(A)(イ)生物全體に亘れる生殖の理の大意、

(ロ)遺傳の理、及之によりて受くる子孫の影響、

(ハ)人身健康及疾病の理の大要、殊に性慾との關係、

(余の確信によれば、精神的修養ある人間に於て、並に假令ひ此の修養を缺ける人とても、之を或る境遇に置けば、性慾の抑制は毫末も心身の健康に害あるものに非ず。之に反して性慾の妄

動は人の精神及身體を毀害すること至て多し。性慾は人及び動物の自然性なるが故に、之を抑制するの害ありと謂ふ議論は、正鵠を失したるものにして、世の青年子女を荼毒するものなり)。

此等を說述すると共に、他面には

(B)(イ)最高級に迄進化し來れる人間の價値(他の動物に對して特殊の差別ある點即ち人間の精神の働)を明にし、性慾の自然性ある外に人間には、亦之を制御する精神力の存在を閑却す可からざるを教へ、

(ロ)一人が一身の健康を圖る外、又家族及民族の健康に對して負へる責任あることを十分に示す可し。

此等の知識を基礎として、人間が徒に性慾を玩弄し若くは之れが奴隷となることの妄と陋と害とを理解せしめ、人間の特色なる克己の美徳を奬勵し、向上の道義的勇氣を振起せしめ、以て性慾より起る弊を遮斷す可し。

性慾問題に對しても、要は知識と道德との協戮なり。孤立偏頗の知識は往々危險を招き、知識をのみ依賴する「衛生」は無力なり。余の平生信ずるところによれば、「衛生」の根本は寧ろ道德なり。人間の性慾に關することの如き甚だ眞面目、甚だ重要、又甚だ實際的の問題を捉へて、世の青年子女に好影響を附與せんとするの士、大に玆に留意するものなりと考ふ。(完)

○ 醫學博士 熊谷幸之輔

本月十二日附之芳翰拜見仕候右に對し早速御返事可申上筈に候處公務繁忙やら病氣やらにて大に遲延に罷成り失禮仕候扨て御尋ねの中學程度之男女學生に性慾に關する智識を授くることの可否、適度及方式之儀に就ては可及的性慾に關する智識を授けさる方可然と愚考致候唯可成虛榮虛飾に傾流するを避けるの方向を取らしめ質素と各種の運動を奬勵して健實なる男女學生を養成するの外途なかるべしと存候　敬具

○ 醫學博士 池田廉一郎

中學程度の男女學生に向て性慾に關する詳密なる知識を授くることは甚だ危險なりと信ず、若き男女の性慾は主として觀念に因て誘起さるゝものなれば、之が爲めに惹起さるゝ少年少女の觀念は勢ひ性慾の上に向かふの恐あればなり、然して次に述ぶるが如き方針を以て學生を導くことは必用なり、而して、成るべく課外の講演に於て又出來得る限り家庭に於て教訓するを可とすべし

第一、性慾を充たすことは生理的必須なるものに非ざれば之を抑制して毫も障碍なきことを知らしむること

第二、アルコホル飲料は性慾を促進する機會を與ふること多きが故之が飲用を嚴禁すること

第三、總て性慾を誘ふべき觀念を與ふる書籍は之が閲覽を禁ずること

第四、性慾を抑退するものは新鮮なる大氣中に於ける活潑なる運動なるを以て弊害なき戸外運動は極力之を奬勵すること

第五、生殖器傳染病の恐るべきものあることを間接に知らしむること

○ 醫學博士 桂田富士郎

中學程度の學校生徒に性慾に關する智識を或程度に於て授くべしとは、方今我醫學社會に於ける同人の鼓吹する所であつて、余も亦其れに異論はない、即ち男女共に青春の血湧くの齡に達すれば性慾の滿足を得むとして、不倫の行爲を試むるに至ることあるは是れ現社會の裏面に於ける實際である、故に寧ろ進みて生物界の通則として生殖の必要なるを説き此生殖に繋がれて性慾の滿足を索むるは自然の道理なるを明にし、而も不倫の滿足は國家風教の上に於て大に戒めざる可からざる所なるのみでなく、恐る可き花柳病の蔓延は多く此不倫なる性慾の滿足に由來するものなるを教ゆるは頗る時宜に適したるものであらうと思ふ。

歐羅巴大陸に於ても近來は男女學生に向つて此性慾に關する智識を授く可きか否と云ふことは一箇の緊要なる問題と見做されて居る、而して唯だ單に風教の上より之を觀るときは特に這般の教育を施す必要はない、とは寧ろ害ありて益なき事柄であると云ふ樣な意見を持つて居る教育家も少なくはない、獨逸の樣な一般に云ふと質朴な國民を有する國柄に在つては妙齡以上の比較的高等の教育を受けたる處女にして黴毒 Syphilis の文字を知らざるのみかは尚ほ其何たるかすら了解し得ない者も實際少なくはないとのことである、若しどこまでも斯かる有樣で無事に經過すれば別に議論はない、されど今後益複雜に成り行くべき社會に在つては斯かる青年少女こそ却て世の誘惑に遇ひ一身一家を誤ることになるであらうと思れる、それに花柳病の如何して傳染するものであつて其余何に恐る可きものであると樣なことを知らないと云ふのも甚だ寒心す可きことである。

以上の次第であるから余は中學程度の男女學生には性慾に關する智識の概念を與ふるを可とする論者の一人で、其程度は男女兩性生殖器の大要と其官能の概略とを示し而して其之を不倫なる性慾滿足の爲めに使用することの倫理上其の衛生上に百害ある所以を諭さむことを希望する者である、若し夫れ這般の智識を何人に依りて授けむかと云ふの一段に至りては何れにも多少の缺點がある、今博物學擔任の教師に其責任を負はせむか、純醫學的智識に缺くる所あるを奈何せん、又學校醫をして之を授けしめむか、今の日本に於ける中學程度の學校醫は實際上教授と云ふの點に於て堪能なるべきか、共に一長一短は免れ得ない樣である、然れども學校醫に其人を得れば比較的理想に近き教授を施すことを得るであらう。(完)

○ 醫學博士 山極勝三郎

第一、男女學生に性慾に關する智識を授くることの可否

(愚考)必要無し、或は授くるは否なり。

(若有之とせば母親が子女に「女と成る事」につき餘て教へ置くべき位のものなり)

其理由に曰く、惟ふに「男女間の關係紊れ勝ちにして。一國壯丁の體格も漸次不良に赴きつゝある」事は、全く事實なるが如く、小生に於て

も承知致居候、但去其原因は必らずしも青年男女が性慾に關する智識の缺乏に存する者と謂ふべからざるは、古來本邦に於ても青年男女に對し性慾に關する敎育などは毫も施されざりしのみならず、彼等に對して性慾に關する事項は、勉めて聞知せざらしめんとせるを從來の風習とせるにても明なりと被存候、然かも「今日の青年男女間の關係紊れ勝ちにして。一國壯丁の體格も漸次不良に趣きつゝあるものとすれば、是れ他に最も有力なる原因の存するもの無からざるべからず、換言すれば今日に存して從來に見ざりし事情の伏在するに相違無かるべくと愚考被致候、其如何なる事實なるべきやは、多言を要せずして明なれども、玆には申陳べず候、唯性慾に關する智識を授くるの必要なき理由、若くは授くるを却て不可なりとする次第を略述致すべく候。

御承知の如く、性慾は全く「インスチンクト」(本能)に基き、自然に一定の年令(氣候、土地、風俗、習慣等に由りて遲速はあれど)所謂春機發動期に達すれば、青年男女をして自覺せしむるものなり、之れに加ふるに家畜動物の交尾期の狀態を不知不識日常目擊して、動物の交尾、妊娠、分娩若くは家雞の交ひ、産卵する事などにつきて、自から性慾に關する智識を得、且つ小中學の動植物學課目講義に於て、動植物生殖の次第は略ぼ學習する事なれば、更に立入りたる特別の敎育を要せず、右にて充分なりと言ふものは、性慾に關する生理解剖學的若くは醫學的智識等は、恰も非醫者が或病氣の智識を有することの、却つて其健康上不利益なる場合多きが如く、春機發動期に在る青年男女の好奇心は、自然の發動と相待つて新たに學べる性慾上に關する智識を濫用し、玩弄するの傾き多くあるが故に候。

如上の着眼點よりして、小生は青年男女をして可成性慾問題に觸れしめざるやう、避けしむるやう、之れに關する智識の如きは可成遲く學び候やう勉むるを、父母又敎育家の心掛けべき儀とも存候。已に習はずして早晚知得すべき性慾。之れを知得し、それが發動するや、之を滿足せしめんとするは自然の欲求なれば、而して又之を滿足せしめて、然かも害なからしめんには、自然の男女交接の外あるべからず。自然の男女交接素と罪惡に非らず、人類子孫の繁殖上必要現象に之れ有り候へども、唯問題は、已に原人の域を遠く隔たり複雜なる社會を組織せる吾人々類に在りては、到底夫の男女開放等の事行はるべくもあらず、社會道德上社會國家又個人の利益上よりして、是非共婚姻制度は嚴重に維持せられざるべからず、然るに青年男女は諸種の點より未だ婚姻すべき境遇に發達し居らず、然かも婚姻と同價値否性慾滿足の點に於て先づ婚姻に近かき所謂一夜妻に、或は不潔なる男女交際に、一時的余義なき性慾滿足法を見出だすの止むなきに至るべく、是れ即かて種々なる病的狀態を社會に發現せしむるの原因に有之候へば、此の性慾に關しては前述の如く、勉めて消極的敎育法仕附方を取るを、青年男女の爲め、又國家社會の爲め、最適當なりと被存候。

然らば青年男女をして、可成性慾問題より遠ざからしむるの方法は如何と申さば、兵法に所謂牽制運動の夫れの如く、醫學には透導療法と申

して、例へば腦出血の時水蛭を拈して、腦に充血せる血液を外方に誘導するが如き方法有之、青年男女をして、可成生殖器方面へ充血を來たさゞる日常の生活法、習慣を取らしむるを最良と被存候、即ち精神的には少しにても性慾を刺戟すべき讀物を避け禁ぜしめ、交友を撰ばしめ、肉體的には、朝夕の冷水浴摩擦を勵行し飽食暖衣を避けしむる等に有之、極めて平凡なる事なれども、唯右等の精神肉體の兩方面より軟的生活法を避け、硬的生活法に慣れ候へば、一般健康の爲め頗る好適なるは勿論隨而青年の墮落を豫防する點に於て、最大有功なるべきや疑なかるべく候。

卑見は即ち上の如くに有之候、隨而

第二、性慾に關する智識を授くる適度及方式

に就いては、御答へ申上候必要無之、乍然唯茲に婆心お申添へ候は手淫之害の如きは、申す迄も無之、此の害毒に陷らざらしめんには、就中寄宿舍々監等の監督、說諭、若くは家庭に在りては、母親又兄姉等が、之れを(襯衣、犢鼻褌等に)認めしとき、之を注意し、其害を懇諭するを可と致候、之れとて、前以て手淫と云ふ事の智識などを、理論的に恰も今日の學校の修身課の如く、一般に教師より授くる事は前記と同じ理由にて効果なきか或は頗る不利益に御座候。

又萬一已に誤つて生殖器に或疾病故障を生じたる場合には、不得止、直ちに掛り附けの醫師に診斷を乞ふを最良策と致候、之れも前以て一般青年男女に生殖器に來る疾病などを敎ふる事は何の利益も之れなきのみならず、却て例の生兵法大怪我の基と可相成危險至極に有之候。

終に、吾人科學上の問題としては、性慾の壓抑及生殖器充分に發達し性慾發動期に達したるに拘らず、事情許さゞる爲め、不幸にして、長年月間性慾を滿足せしめ能はざるときの身體及精神狀態如何に有之候へ共之れは未だ統計的にも、實驗的にも正確なる解決を下し得る迄に、發展致し居らざるやに存候。(完)

東西 花だより

○巴里の花

齋藤與里

巴里の花と云へば自分は直ぐに、彼の薄い軟かな葉の間から、薄紫の匂のする大きな房の様な頭を見せて居るリラの"Lilas"花を思ひ出す。

今頃からそろ〱巴里市内の公園は草花の植込みで、至る處にヂヤルダニーの無恰好な姿を見ない事はない。彼等は草花栽培所からチユウリツプ、カンナー、三色菫、白菫、等の草花の未だ蕾の固い奴を運び出して、マーブルのスタチユウの廻りや、噴水の畔を飾り立てゝ居るのである。

佛蘭西で所謂タツピイベール(綠(ミドリ)の敷物)と云ふ巴里獨特の芝生の綠を彩(フナイロド)つた草花の雜然たる處も面白いが、花の色彩を應用して様々の圖案をして居るのも流石に巴里式で面白い。

マロニイの眞黒な枝から鋼綠色の新らしい芽を吹き出す頃セーヌ河の小蒸汽船でサンクールの公園に遊んだ人は、日當りの好い崖が盛んに此の花の圖案に飾られて居るのを見るだらう。

巴里には東京の様に別に花の名所と定められた處はない様である。けれ共春の巴里郊外は悉く花の様な印象を與へる。自分の住んで居つた近村は實櫻や杏子の花が春になると一杯に咲いた。

巴里から三四十町離れたマラコツフと云ふ處迄電車に乗つて出るともう其れ等の眞白な花が丘や畑に咲き廣がつて居るのを見る事が出來る。東京の春の郊外が友禪メリンスの様だと云ふ事が出來るなら巴里郊外の春色はゴブラン織程の厚みがある。自分は繪具箱を擔いて此の邊を歩く度毎にこう感じた。

實櫻や杏子の花は凡て白であるけれ共日本の梅の花を見る様な冷えた感じのないのは、薄桃色の暖い空氣が作る自然のトンに酔はされる爲かも知れない。

ピサロの花の景色と共に此の邊の花の印象は殊更に深い。

モンパルナスの停車場からとルーヴとから出るベルサイユ行きの汽車や電車の二階が混雑するのも此の頃からである。日曜日などは諸工場の男工女工などが打ちまぢつて汽車や電車の二階で思々の歌を大きな聲で唱ひながら、郊外の春を樂しむ様に巴里の市街から流れ出る。けれ共彼等には日本人に見る様な所謂花見らしい様子は少も見えない。隨つて花はあつても觀衆を待つ様な仕組に出來て居る茶見世式のものも、所に依つてはあるかも知れないが自分は見受けなかつた。彼等は何等の目的もなく、徒に唱つて、花や鳥が春を嬉ぶ如くに春を嬉ぶのである。

マリグレツトは娘子供に嬉ばれる花である。而して好く戀の原因に類するものを占つて見る時此の花を用ひると云ふ話である。あの方は私を好いて居るのか知ら、其れとも嫌つて居るのか知らと半信半疑の時マリグレツトの花を摘み取つて花瓣を一片づゝ、好き、嫌ひ、好き、嫌ひと交りばんこにとつて捨てるのである、而して最後の一片が好きに當れば非常に嬉び、反對の結果に終る時は非常に悲しむと云ふ事である。こんな話は誰でも知つて居る事だが、マリグレツトと云ふと其の娘の可憐な心情を思ひ出さずには居られない。

花屋の店頭に並べてあるのは薔薇が多いカツフエー店などには花賣り娘が居ると定つてゐる。矢張薔薇や菫を持つて居る。華奢やかに着飾つた巴里美人の遊女が男にネダつてそれを買つて貰つて、大きな花束を得意にあつちのテーブルこつちの椅子とねり廻はつてあるく事になつて居る。こゝらが眞の巴里の花かも知れない。

花市は所々のプラスに見受けるが一番大きなのはノートルダム近くのプラスにあつた様に記憶して居る。それを見ても巴里人に、如何に花が好まれるかと云ふ事が分る、形式的でも何でも。隨つて草花の栽培も發達して居る様で面白い種類も深山ある様で、自分の目も少からず樂まされた。

けれ共自分は、巴里の花と云へば彼の薄い軟かな葉の間から、薄紫の匂のする大きな房の様な頭を見せて居るリラの花を先づ思ひ出さぬ譯けには行かない。

モーパツサンの小說の中にリラ畑に沈んで行く太陽を書いたものがあつた。日頃好きな處へ持つて行つて、其の小說を讀んでから益々好きになつて、丁度リラの花の咲く頃小說に書いてあつたセーヌ河の畔を歩いて見たが、そんな美しいリラ畑や、紫の谷などを見出す事が出來ないので失望した事がある。

そんな關係からも來て居るのか知れないが兎に角自分は、今でも、リラの花の咲いて居るあたりを歩く爲に巴里郊外の春を訪れて見たい様な氣になる事がある。

リラの花は殆ど始終自分の部屋に絶やさなかつた。終には人から何かの動機でリラが好きになつたのではないかと云はれる様になつた。一體自分はさう花は好きな方ぢやないからそれ迄は何の花が一番好きだと云はれてもこれと云ふ答をする事は出來なかつたが、其の時からはリラと云ふ答を出す事が出來る様になつた。以上は在巴中に受けた巴里及び巴里郊外の花の印象の大略である。

……………………

巴里からスペインに旅した時、國境に近いあたりに梨の花盛りを見た時の心持ちも花の思ひ出の嬉しいひとつになつて居る。

○英國の花

漱石生

「英國の花」とて殊に吹聽致して然るべきものを思ひ浮ばず候。春の始め、公園などにて、大木の根元に、芝草の中より咲き出でゝ、恥しげに頭を垂れ居るスノウドロップはいかにも可愛らしく、水淸き湖畔に微風に靡ひ居るナアシッサス、ジョンクイルも可愛らしく眺め候。田舍道の芝土手に、其處に一團、此處に一團と、群を爲して咲き居る黃色の櫻草もよろしく候。田舍の寺院の境内などに、よく芝草の中に一面に咲き居るデイジイを見かけ候が、一寸二寸の紋細き莖に五厘銅貨大の、日本の嫁菜より稍や白の勝つた小さき花をつけ居り候は可憐に候。

栗の花を彼地にては賞玩致し候が、栗は概して二丈三丈と云ふ大木が多く、葉はドングリの葉に似て厚く、頗る密生致し居り候。その大木の木末〱よりして、紫藤の花を逆立ちさした樣な花を附け候が、仲々の美觀に御座候。倫敦郊外のハムプトン、コオト宮殿には、栗の大木の並樹を爲せるテレイス有之、花時には臨時列車を發する迄に見物人參り候。百日紅に似たライラツクもよろしく候。ロドデンドロンは灌木に候へど、高さ二間三間のもの尠なからず、躑躅の花に似し花を葉の見えぬ許りにつけ候ものは實に美觀に御座候。紅もあり、白もあり、斑もあり、黃もあり、色は樣々に候。キユウ植物園内に、ロドデンドロンが谿と稱する一區劃ありて之れのみ植はり居る處有之、花時の美觀今に忘れかね候。薔薇は申す迄も無く候。要するに春の末より夏の初にかけては、千紫萬紅、野も山も美しく候。草々。

○米國で見た花

野口米次郎

隨分以前の事だが忘れもせぬ春は四月で季節もハムレットが着て居る黑い冬のコートを脱捨た頃、余はミラー先生守護の下で初めて米國で詩的生活に入つた今から先生と同じ山上の小屋で共同生活を初めるといふ其の朝、余は先生がこれから余の部屋だと與へられたカテージの戶口の石の上に腰を掛けて居た其光景が今日眼前に彷彿して來る、腰を掛けて眼下の景色(實際四十幾ケ所がパノラマの如くに眼前に開展せられて居る)に見とれて居ると老先生が遣つて來られて余の側に腰を下されて、今迄少しも氣を留めず注意し無つた小さい花が眼前に咲いて居るのを指して、其れから其花の一つを摘んで『美なる哉花』と嘆息せられた、『美なる花は常に地上に接近して笑ふ』と語を續けられた其花たる余は之を見る初めて、其名を先生に聞くと『キヤリホルニアン、ポピー』(ポピーは譯して罌粟と云へど日本の罌粟とは類を異にして居る)と云はれた。其燃えるやうな色彩、其嫋婉風に堪へぬ樣な細くて靑い莖と葉、先生は『こん

な小さい花がこんな大きい加洲の洲花だとは面白いじゃ無いか」と云はれたので余は初めて此ポピーは洲花で日本で云はゞ櫻の資格だなと承知した、美其物が花の全體ならば其花の大小は論ずる必用が無いのでポピーが美ならば大なる加洲の洲花として恥かしくは無いポピーは斯くも美なる花だ、其後一ヶ月二ヶ月と月日が經るとミラー先生の山は此の燃えるが如き火のポピーて一面に蔽はれるといふ有樣で、夕日の反射で其美は一層高められるので人間も死んで埋められるならばこんな山上に埋められたいと思つたことが度々あつた、此ポピーは朝日を受けて朝顏の如くコップのやうな花瓣を開いて、夕景に成ると一日の仕事を終へたといふやうに其花瓣を閉づるのである、詩人マーカム氏のポピーを歌つたものに一の蝶が一夜の宿を此罌粟のカップに賴むといふのがあつたのを記憶して居る、此ポピーの季節と時と同じくして山を蔽つて春の衣裳を着けさする野生の花はバターカップ(毛莨の類)でこれはポピーと類似しては居れど、異つた色で、全く黄いバターの色を持つて居る、ポピー程美感を與へ無い、花として所謂サツザエスチープで無いが一里二里と廣い野原を一面に蔽つた體は特別で日本では見られぬ圖である、バターカツプやポピーの野原或は山上に横つて、余は眼前に金門灣の光景を橫へた乍ら優々閑々と讀書し得た過去の歴史を難有いと思つて居る。

ミラー先生の園庭は中々廣いので其一部、余の部屋の窓の外一面に梅、米國のプラム、ツリーが一面に植ゑて有つて其花盛りは一入の眺であつた、米國人は日本の花は香氣が無いと一概に云ふけれど此米國のプラムは日本の梅とは其類を異にして居るのであらふ馥郁たる香氣に乏しい、然し幾百幾千本のプラムが列立して滿開して居る有樣は中々の見物であつた、先生の家では家庭でもあるまいが夜はランプを點し無い、先生は常に人は夕日と共に眠り朝の鳥と共に起るものだと云つて居るので其生活狀態の原始的單純を何處までも追ふといふのである、火を點じて花と賞した古代支那人の風流を現實ならしめ得ぬけれども月夜がある、左樣だ月夜特に薄明い月も若くて四五夜目といふ頃には全く『暗香浮動月黄昏』の詩境を自由にすることが出來た、東西其人間と事情を異にして居るけれど、余はミラー先生の山居に居た時には少くも此一角は東西の差別無くて、云替へると先生は全くの東洋人であると思つたことがある、先づ第一沈默の美といふ敎訓を與へたのは先生で、又第二に花の美を觀ぜしめたのも先生である、花を愛し賞するのは日本人の專有の如くに思つて居るものがあるけれども中々左樣で無い、マホメツトでは無いけれども麵麭を買ふ半錢を割いて花を買ふ米國人が居るのである。

余の記憶して今日迄忘れることが出來ぬのはこれも隨分以前の事で、余が所謂トランプ旅行をして諸々方々を見物して歩いたことがある、トランプといふのは徒歩の意味でまづ乞食旅行だ、或る朝早くサンノゼを出でロスゲトスへ向つた、此地方は加洲中でも有名な櫻の實の産地で即ち日本で云ふと櫻の名所と成る資格がある所である、サンノゼを出ると直ぐ櫻の林で幾萬幾十萬本、一日千本どころの形容じや無いので、それは〳〵賞入るの外は無い、其場所を百姓の大八車に乘つて櫻の花のトンネ

ルを犠牲にしたことがある物質的價値に重きを置く米國であるから花の方を飾りに粗略にするのを殘念に思ふた大抵であるが、人は米國の櫻は日本の櫻程美で無いといふけれども余は一概に左様は思はぬ、成程日本の櫻花の如く淡紅色で無く全く白花で、日本のはデリケートな蕋が比較的長いので微風にそよ〳〵と様子振つて云ふに云へぬ所があるに反して、米國のものは其蕋が短いやうで花が葉と共に出てるので日本の如く花のマツスを大々的に賞觀することが出來ぬ、然しだ木の數を考へて見玉へ幾十萬本といふ假令日本のもの丶如く美ならずとしても其櫻樹を一時に見るに至つては其壯觀一通りで無いのは云ふ丈け野暮の至りであろふ。

春も進んでイースター近くに成ると花も段々と咲揃つて來る、野生では左うで無いがまづ年百年中有る花はバイチレツトで、米國の都市至る所の町の隅で穢い乞食見たやうな老婆などがバイチレツトを賣つて居る白銅一つ位で一寸した束を呉れる西洋では薔薇〳〵とて賞美するけれども野生の風味を帶びた花程感心せぬ『アメリカン、ビユチー』と云つて驚く程大い眞紅色の薔薇の一種があつて米國人は之を自慢するけれども兎ても東洋人たる我等には適當せぬ、イースター近くに成るとパイオレツト共に其香氣の點で思出すのは『リヽー、ナブ、バレー』で其花は恰も田舍娘の稚氣を帶びては居れど中々捨てられぬ美をほのめかして居る様だ、黄金色のチユーリツプ(鬱金香)はイースター、サンデーを飾る唯一の花であらふ、此時分余の一番愛する花はライラツクである、ライラツクは日本に無いものと見えて余の机上にある英和小辭典には其譯名さへ發見することが出來ぬ、此ライラツクの香氣に初めて接したのは此も隨分以前の事で華盛頓府でエム街に老詩人スタツダートが住んで居る頃で、老詩人の宅へ御各に行つたことがあつた、一陣の微風に不思議な香氣が飄して來て思はぬ時に余の鼻感を驚した、尋ねて見ると一町先にある或る庭の隅にライラツクの木が一本あるのがそれで、此木の側に寄つて其香氣に接するよりは遙か離れて思掛けぬ時其香氣に接して見玉へ、堪へ切れ無い程嬉しいのだ、余の友人の女詩人でバルチモアに居るリース孃に此ライラツクを歌つた名詩がある、其詩中にライラツクを形容して不思議な白い羽』と云つて居るが如何にもよい形容だ、更に詩中に『小路の幽靈』と云つて居るが幽靈、美の幽靈とでも評するより此花の美は許されまい、一二週間前ジヨンスといふ青年詩人が新詩集を郵送して來た此の詩人もリース孃と同じく鼻感の發達した詩人で詩集中に題して『ライラツクタイム』といふのがある、春を老いて六月に入ると薔薇は榮へて夏の蜜蜂は草に集る、然しライラツクの花は幽靈の如くで悄然として居る詩の最後の句はとでうある、

But I Shall anly see the line sway And seek this fragrance neath
my empty trees.

○花祭と誕生日

巖谷小波

十二、私には獨乙に居る頃の、花に付ての記臆を感想すると云ふのですクヤそれもそう一ト昔になるので、一向ボンヤリしてしまでました、尤も花に付ての偶想は、其頃の拙著『洋行土產』の中に聊か書いておきましたから、今更らにも繰り返へすのは止めませう、

但、今でも心に浮ぶのは、丁度伯林に居合はせた、姉崎博士や、近角常觀、薗田宗惠などとふ諸君と謀つて、花祭と云ふものをやつた時の事です、云ふよりも無く、これは灌佛會を意味するのでまた彼地のオスニジン祭とも偶合する所から、大きさも彼地の人々の好評を博して、豫想以上の盛會を見たのでした。

正面の花の堂は云ふまでもなく、會場を一切花盡しに飾つてその中で演說や、餘興があつた果は例の舞踏會。これには活きた花が盛んに發展したのです。

私も幹事の一人として、自作の『花祭』と云ふお伽噺と、津輕伯に直してもつて朗讀したり、また手製の『花の堂』の畫葉想を一枚一アーツで賣りつけたりしました。隨分向不見の藝當でしたが、若い時分は度胸の好いものだと云ふ事と、我ながら今に感心して居ます。彼地の花も一つ感心したのは、豐富な事です。其季節の物ばかりでなく、例の園藝の進步の賜物で、他の季に竹木の花まで皆一堂に集め得る・これはまだ日本では、一寸眞似の出來ない事でせう。

イヤ、此時では眞似は出來ないが、彼方ではさきに日本の花を取つて、菊でも、葡萄でも、躑躅でも、殆んど）日本以上の物を作つて居ます。が、まだ櫻丈はさうは行かない、此邊で日本はやつと誇れるのです。

今一つ、彼地に居る時分に嬉しかつたのは、年に一度づゝの誕生日毎に、友達や知人や、乃至下宿屋の主婦などから、祝つてくれる物の多くが、鉢の瓶から生花である事です。

其日はまだ待て居る時分から、使の者が花を持ち込んで來る。學校から歸つて來て、自分の室の戶をあけると、もうプーンと香氣がして、テーブルの上が花だらけ！　あれはほんとに惡くないものです。

○朝鮮の花

村田懋麿

○春は花木、夏は草花、秋は紅葉、冬は常盤樹、四時の詠めは半島も內地と異なる所なし。而して、花卉の中、朝鮮人の尤も愛賞するものは、牡丹、蓮、菊の三つにして、尙此の他、彼等の好んで詩を詠じ、文に綴し、繪畫を描くものは、桃李、海棠、躑躅、菖蒲、蘭、石榴、百日紅、芙蓉、蜀葵、蘭等あり。內地は梅信を傳へて、先づ春を知り、朝鮮は迎

春花を以て百花の魁と爲す。蓋し、梅は、京都雜志の花卉の下に「梅以欹斜倒垂。自然槎爲佳。」と有り。欹斜は斜座梅也。倒垂は枝垂梅也。自然槎は古木の槎枒として臥龍に似たるを曰ふ也。高麗時代は梅の盆栽など隨分流行せしならんかなれども、今は然らず。諺にも梅を移し植ゆれば悉く杏に變ずといふ事あり。素より信を措き難しといへども、元來、梅の朝鮮に絕へて無くして、罕に見る所なるは爭ふべからす。迎春花は、雅言覺非に、「迎春花爲連翹。誤也。」と有り。黃梅と爲すを正しとす。何れも木犀科に屬する小木本にして、早春時を同じうして鮮黃花を開く。半島に齎出さるべき連翹に二種あり。一は支那傳來の普通種にして、他は朝鮮連翹と名けらるる固有種也。後者は小形にして、直莖、單葉、疎花なれば、容易に前者と識別するを得べし。倶に朝鮮名を連翹 어ー어ー나ー무 と呼ぶ。黃梅は朝鮮名黃梅木 쇠ー앙ー나ー무 にして、支那名迎春花 Ying-chun-hua. 也。

○迎春花の京城内外の丘陵を彩るの時は、嶺南は麥苗既に田圃に秀て、北關は福壽草正に雪谷に傲るの時にして、内地は恰も桃の節句頃に當る。半島の山野は之より春光一時に度り、百色妍を競ふの時候とはなる也。牡丹は百花の王と云へど、李朝に在りて、李花 오ー얏ー꼿ー を以て國華と爲し、土民は一般に桃花 복ー숭ー아ー꼿 と併稱して、之を愛するの風あれば、寧ろ李花を花王とすべし。傳說に曰ふ、道詵秘記に、高氏に次ぎて王たるものは、李を以て姓と爲し、京城に都す、と有り、由て、麗朝の末葉に當りて、李氏を擧げて京城府尹と爲し、城の周圍に盛んに李樹を植へしめたりと。京城内外に李花の多きは之が爲め乎。桃李に次ぎて半島に普遍的なるは、櫻桃 이ー스ー랏、杏 살ー구、郁李 유ー리、山櫻 벗ー나ー무、海棠 히ー당 等也。櫻桃は、東醫寶鑑に「一名含桃。先百果而熟故古人多貴之。以薦寢廟。」と有り。内地にてゆすらといふは、恐らく朝鮮語より轉訛し來れるならん歟。杏を殺狗杏 と呼ぶは、朝鮮に狗を食ふの風あり、杏を用ゆれば能く其の毒を滅するが故也と曰ふ。郁李は甚だ多からず。若夫れ、山櫻、海棠に至りては、聊か主張の在る有り。柰に二說あり。現代朝鮮三文士の一人なる崔永年は曰く、「柰 벗ー지 即山櫻也。別名曰頻婆 빈ー바。」と。多くの人も亦斯か信じて疑はざるが如しといへども、東醫寶鑑に「柰子 빈 或云 능금。似林檎而小」と有るを正しとす。乃ち柰は支那名小蘋果 Shao-pcin-kuo. にして、紅林檎を指し、決して山櫻を云ふに非ざる也。内地人は半島に櫻なしと思へるも、實は然らず。山櫻は往々にして有り。しないのめざくらも亦無きに非ず。又海棠に三說あり。内地にて普通海棠と名くるものの外、樝子、玫瑰も亦土俗之を海棠と呼ぶ。

○朝鮮の東北海は、沖合は其の色藍に似て物凄く、地方は其色無きが如く透徹れり。蓋し、清きは潮汐干滿の度合少きにより、濃きは寒流あり。海藻の底を蔽ふを以て也。林巒一灣を環拱して、青松白砂の趣きある、之を永興灣となす。大小の島嶼灣の内外に棊布し、鱗族多く、漁戶少く、海禽海獸の樂園たり。麗島は其の最大なるもの。予、曾て元山に在り。一日、事を以て此に遊ぶ。島中玫瑰花多し。礒菜取りに誘はれて一巡す

れば、濃紅岩角を彩るところ、往々にして水狗の夢を驚かす。磯菜取りは大抵總角にして、濱防風、松菜などを取り、床に供ず。玫瑰も亦其の實は生食し、根皮は味酒を造る。「一名裂囘花。東人誤以爲海棠。」と丁洌水は言へり。北間島より牡丹河流に至る曠野にも、此の花多し、之を支那名山玫瑰 San-ebin-kuei, と曰ふ。

玫瑰の咲く頃は、盛夏の候にして、柘榴、百日紅、牡丹、蓮、芙蓉、蜀葵など、濃紫嬌紅とりどりに趣きあり「朝鮮人は存外柘榴を愛すること深く、京城にては閭閻盆栽に仕立たるを見る事あり。百日紅は三南に多し。牡丹は一名含朴 哲-曖 と曰ふ。紅白二種あり。平北、咸南北の山奥に野生のものなきに非ざれども、元來朝鮮の固有種に非ず。日本、支那の原産にも非ず。遠く渤海より傳來せしものの如し。其の故何ぞや。姓氏錄によれば、深海、深水、の深見など、有らゆる布加美姓を名告るものは、渤海國歸化人の子孫也。是等の姓は勿論後世に至り日本全土に普遍的になれりと雖も、古は北日本及九州に限られしものの如く、現今とても猶此の二地方に多し。蓋し、渤海國の入貢路は、其の日本道より今の波西圖灣附近に出で夫より海路直に北日本を指ししものの如く、後我より九州を經て正式に入貢すべく命ぜられしに拘らず、猶依然として出雲、加賀、能登、佐渡、奥羽等の地方に漂着せしこと多かりし。此れ前記の二地方に布加美姓の多き所以にして、渤海は乃ち深海也。然らば乃ち牡丹を知名布加美草といふ以上、渤海の産に非ずして何ぞや。

〇而して、其の始めて我が邦に傳來せしは、何時頃の事なりやと言ふに、渤海の始めて入貢せしは、聖武天皇の御宇にてあれば、今を距ること少くも千二百年前に在り。史を案ずるに、渤海の使節は來朝の度每に奈良朝の貴賓として歡迎せられしが、其の入貢相繼ぎて、應接に遑なく、國費に堪へざるに迨んで、十二年に一囘と定められたり。十二年と言へば、隨分永き月日也。然るにも拘らず、根好く入貢を絕ざる以上、渤海が我が邦との交易に、如何に味を占しかは略察するに難からざるべし。然り。其の入貢の目的は、獸皮、明珠、藥材等の土宜を齎して、主として黃金と替へんが爲に外ならざりし。牡丹は布加美草也。渤海の産也。其の根皮を丹皮と曰ひ、漢法醫に缺くべからざるの藥材たり。乃ち知る、渤海の貢物たりし藥材は、主として此の牡丹皮にして、後或は其の種子をも輸入したりしなるべく、或は又株の儘を移し來りしやも知るべからず。果して然りとせば、和漢三才圖會に「本朝聖武帝時。盛貢之今亦奈良多出名花。」と曰へるもの、實に左も有るべきの道理ならずや。

〇若夫れ、支那本部に至りては、事物起源に「隋ノ二帝ノ世。始傳牡丹華。而唐ノ開元中。宮中及民間。競尚貴之。」と見へたり。煬帝の時に征東の事あり。其の際、恐らく之を高勾麗より傳へしなるべく、下りて唐代に至りては、渤海との交通頻繁なりければ、定めて之を直輸せしならん歟。黑龍江の源流の一に牡丹江といふあり。長白山の北嘴なる牡丹嶺山脈中の牡丹嶺に發し、寧古塔の東を洗ひ、三姓に至りて松花江と合す。其の流域は則ち渤海國の發祥地にして、實に牡丹の鄕土たり。通志に曰く、諸寨記に渤海の富室は往往園池を營い、牡丹を植ゆ。多きは二三百本に

至り、數十餘の叢生するありと。今、此の風を存せずといへども、而かも旅行者にして盛夏の候に北間島より西北行して、足一たび此の流域に入らんか、紅白の百兩金花が林灼として、廣漠たる草原に咲き誇れるを見ん。蓋し是れ江名の由りて來る所以也。渤海は乃ち深海也。牡丹國也。斷じて疑ふべからず。因に此の野生牡丹の分布區域を按ずるに、南は平安北道の狄踰嶺山脈より、北は北滿洲の小白山脈に至り、西は西間島の老爺嶺山脈より、東は咸鏡北道の白山山脈に盡くるものの如し。牡丹に亞ぐの名花なる芍藥の野生も亦此の地方に多し。東醫寶鑑に「一名解倉。有兩種赤白」とあり。又刀枝と呼ぶ。淡紅及白の二種あり。赤芍藥白芍藥と曰ふ。

○牡丹は日盛りに見るを可とし、荷花は朝未起露を戴ける風情を愛すべし、荷花は則ち蓮花也。紅蓮花白蓮花の二種あり。京都雜志には「天然亭荷花。」と見へたれども、蓮花の名所は慶福宮裡の蓮池に若くはなし。慶福宮は故閔妃の命を落せしの處。北岳脊に屹乎として、殿宇松林の間に隱見し、慶會樓邊景趣尤も佳。前に一池あり。水甚だ潤からず、清からざるも、蓮多く、四頃蒼然たり。素より西門外の廢池の比に非ず。荷花は又の名を芙蓉と稱する事あり。然れども、芙蓉は木芙蓉と爲すを正しとす。支那の原產にして、半島には唯閒其の盆栽のものを睹るのみ。此の外、庭園、菜園の片隅に栽培せらるる觀賞植物は、蜀葵花(たちあふひ)、向日花(ひまはり)、鳳仙花(ほうせんくわ)、旋覆花(おぐるま)、翠菊花과ー꼿(えぞぎく)、金蓮花금ー련ー화(のうぜんばれん)、罌粟花외ー솟ー꼿等、數ふれば伺許多あるべし。然りと雖も、朝鮮人は概して內地人の如き園藝趣味を有せざれば、所謂京城兩班(ヤンバン)の邸內にさへ、庭園らしき庭園を備へず、盆栽らしき盆栽を有するもの稀れ也。但だ造園の稍見るべきものは、昌德宮秘苑と大院君の別墅なる石坡亭と有るのみ。秘苑は李王の居城なれば言ふに及ばず。石坡亭は躑躅に宜しく、亦藤に宜しく、而かも紅葉の名所として、幾何之に優るの地あらず。

○故に花を探らんと欲せば、勢ひ遠く之を城外數里の山野に覓めざるべからず。半島は山河荒廢して、風光の掬すべきなしと曰ふと雖も、豈一木一草の耳目を娛ましむるもの無からんや。旅行者にして、深く內地を跋涉せんか、峽路、磧原、草野、芝地、柴場、禁山、幽谷、林藪、到る處として花木、草花の春夏間斷なく錦繡を綴れるを睹て、寧ろ意外の感に堪へざるもの有らん。躑躅に羊躑躅양ー쭉ー쭉(うまつつじ)、山躑躅산ー쭉ー쭉ー(やまつつじ)、映山紅진ー달ー래(さつき)、紅杜鵑왕ー산ー쭉(きりしま)等あり。桃李辭して、野に雉子の聲を聞くの候、山角溪間を彩り、淡紅新綠と映發し、人をして爽氣を起しむ。巳にして菖蒲の季節と爲る。京都雜志の端午の下に曰く、「小兒女著紅綠新衣。菖蒲湯類面。又例淡蒲根作簪。」と。端午の節句と菖蒲とは、古より內地と同樣に何等か關係あるものと見へたり。半島には、菖蒲、溪蓀、燕子花、蠡實、射干の類多く、溪蓀(ねじあやめ)、燕子花(黃花のこかきつばた)を殊に然りとす。

○草花は堇菜、蒲公英を魁とし、薊(あざみ)、剪金花(だうかんさう)、

白頭翁（おきなぐさ）、山丹（ひめゆり）、强（やまゆり）、桔梗（ききやう）、萱草（のかんざう）、栗花（いわうのはな）など、相先後して初秋に至るまで香氣を絶たず。乃て、紅葉、蘭、菊を迎へて、荒涼の冬に入る。是等の花卉に就て一一數言を費さんには、卷を爲すも尙足れりとせず。但だ玆に菫菜に就て、是非共一言せざるべからざる事あり。他なし、菫菜は朝鮮人の殊の外嫌惡する所にして、其の嫌惡する理由の極めて奇拔なるもの有れば也。菫菜は土俗兀良哈花と曰ふ。之を釋けば夷の花と曰はん程の意也。夷の花とは北國に產する花といふの意に非ず。菫片距を包みて、花梗の長きこと、恰も淸人の辮子を後頭より垂れたるの狀に似たるより、斯か名くる也。朝鮮は明の文化を受くること大にして、隨て之を德とし、之を奉ずることも亦厚く、之に反して、淸朝は女眞卽ち兀良(ウオラ)哈(ンカイ)の出にして、北虜也。野人也。且前後二回も半島を蹂躙せし讐敵也。三百年後の今日に至る迄、斯かる感情は毫も朝鮮人の腦裡を去らず。竟に坊主が憎ければ袈裟まで憎しの諺の如く、可憐なる一朶の花に對してだに、憎惡の念を洩すに至れる也。亦異とすべからずや。

紅葉も十二月の中也。花と言はば言ひつべし。半島にては紅葉を丹楓と呼ぶ。雅言覺非に「漆葉紅日丹楓。柿葉紅白柿日楓。」と有り。內地にてかきもみぢ、はぢもみぢ、うるしもみぢなど曰はんが如し。楓(もみじ)ははうちはかへでを多しとす。文人墨客の蘭を愛するは、獨り朝鮮に限らず。大院君は蘭を描くに妙を得たりと稱せらる。而かも半島には蘭の類少し。此の怪傑は見て來た樣な蘭を描(か)きしと見へたり。菊は、京都雜志に「有紅黃白三。白鶴翎。禁苑黃。醉楊妃之號。又有烏紅。大小雪白諸品。」と有り。培養のものは、鑑賞に勝へず。野菊(のぎく)の秋霜に傲れる、却て見處あり。朝鮮の花曆は蘭、菊を以て殿と爲す。故に筆を此に擱く。

○北京の春色

服部しげこ

わたしが北京にゆくまでは支那では昔から詩や文で朗詠し嘆美する如く到る處に梅林や杏林が有つて暗香浮動するので有らうと思つたしかるに行つて見るとそれはほんの想像で有つたので梅林などは何處をさがしても夢にも無い第一婦人などは日本では梅を屋外に植えるそうですれなどといつて梅と云へば盆栽にして室內に置く物と思つて居る月下の美人とか山中の宰相とかいふのは南方での事と實に失望した

北京では杏花も李花も多くない唯海棠は往々王公貴人の庭院にもうえられて爛熳と吹亂れて春風に舞ふ姿は櫻とあまりちがはぬ美觀であるしかし我らが櫻に對しては敷島の大和心とか國華とかいふ一種の觀念を以てするから脆く風に散つて泥土に委したきたない姿もちればこそなとゝしひてこじつけて愛惜するが海棠が雨に萎れて色の褪せたのは美人の愁ふる樣よりは淺ましいむちがする

此花に匂ひのないのは缺點で又日本人が思ふほど支那人が愛好しては居

らぬ
年末より新春にかけて貴婦人同士贈答する花は重もに迎春花臘梅碧桃花又は牡丹のきり花である

支那人は他の花よりも牡丹を愛好するそれは此花のもちがよいから何處までも經濟的な支那人にむくはづである此花の容姿がふく〳〵しく濃艷であるのを富の表現とし華麗の標本とするのも尤もで實際紅こほるゝ此花は宮粧を凝した美人とはよき對照で宛然極彩色の畫のやうであるかの無想衣裳花想容といふ詩の通りである

しかし此花の栽培は中々むづかしい故貴人の庭院には多くはない唯萬春山離宮には多くうえられて四月の候にはそれは〳〵美觀である

茉利花といふ花は見た處の小さくよは〳〵しいに似ず其匂ひはまことに刺擊的で强烈である我々は餘り感心せぬけれども元來匂ひの强烈なるを好む支那人は此花を絕愛し此南方からくる高價な花を線にとをして頭に挿してほこりとして居る又是を摘んで銀皿などに並べて人に贈るがわたしはいつもそれを戴く每に今少し長めに摘んで下さつたらばと思つた

わたしは殊に碧桃花を好んだ碧桃花！其名からしてまづ西王母の伴侶らしい霞たなびく太乙宮に淡彩を漂はして碧紗をへだてゝ東方朔のかいまむも知らずに爪の長い美人が花下に佇立む心ちがしてわたしはいつも此花を見る每に漢武の黄金時代を想像してひとり時のうつるも知らなかつた

○伊太利の野の花

文學博士　姉崎嘲風

ゲーテが二年間の伊太利旅行て彼の精神に偉大なインスピレーションを受けた事は有名な話だが、就中特に伊太利の植物を見て、それから一種の植物進化論を唱ひ初めた。北歐羅巴では五月になつて纔に樹々が芽を吹き、草が靑く爲り初むる位であるのに、伊太利では三月に巳に野は靑々とし、アルプの雪を望む山麓は桃や李が咲き初め、四月、五月となれば草花が野となく山となく咲き亂れて一面の花の錦となる、其生長發達の速に生氣に充ち滿てる樣といつたらない。昨日迄葉のみであつた草に、今日は美はしい花が咲き、明日になれば又それに違つた花が咲く。一日一日太陽の當るに連れて有らゆる色の花で縫目のなき襉を作る有樣、我々日本人から見れば、如何にも伊太利の春は野の花に在りといふ感を抱かせる。ゲーテは今迄北歐羅巴の單純なる植物を見居れる後に、伊太利の春に接して植物の生長に一貫の力あり、幹と葉と、葉と花とは別物に非ずとの結論、換言すれば、植物の變形といふ考に想ひ宿いた、ゲーテは乃ち植物の變形に就いて學究的に講義をしたが、又同時に同じ題を以て其變形成長を歌つた。

伊太利の春の花を見て驚く者は獨り外國人のみでない、伊太利人自らも、即ち畫家でも詩人でも皆其野の花を愛し其美はしさを描き若くは歌はざるものはない。ボチセリーの作として最も有名な春の繪の如き、深

綠の間に春の女神、天使天女の群が舞戯れる其足下には、百色の星ともいふべく咲き亂れた花を描いて居る。フラア、アンジエリーコの天女の繪の如きも、天使や聖者の手を携へて逍遙するあたりには、白いジエルソミネ、紫の菫赤い野罌粟（ノゲシ）、其他色様々形様々の花が咲き亂れ、天女の碧色と相對して居る、此アンジエリコの住んで居たフイツレの丘のあたりは矢張り彼の繪に在る様の花の野原であるが、彼は正に春の晨、風靜に光麗かな時其野邊を逍遙しつゝ、心の眼に小さな天使が花の間を遊び戯れると見たものであらう。詩人といへばダンテの如きは天國を詠ずる場合に至る處に花を歌つて居る。或は日本でいへば四條派に在り相なただらかな丘の上に、千々の草に萬の花が咲き、其影の菫の流に映ずる有様とか、或はレーテの川を隔てゝ彼がベアトリスに逢ふ場合に、彼を導いて來た天女が川邊の草原を花を摘みつゝ行く有様や、或は又天上光明の中、聖母の姿の現はるゝ周圍に、薔薇の花が處狹く咲き亂れて、其光明と相映發する有様やを描く、ダンテは一方には光と焔との詩人であるが又一方には花の詩人といつて宜い。レオパルヂーの如き厭世詩人でも矢張野の花を詠じ、エスヰチの麓に咲き亂れたエニシダの花に、人生の無常を驚かず天地の變化を物ともせずに、春毎に咲き揃ふ優しき姿を詠じて居る。

實に伊太利の春は野邊の草花の世界である。日本で花といへば、霞罩めたる春の空に雲かと見紛ふ櫻の美を擧ぐるのだが、伊太利ではそれと違ひ空氣飽くまで透明にして一點の曇なき青空と相映ずる花の褥の野原を稱へるのである。全く趣を異にして居る。羅馬の周りのカンパニアの野邊、フイレンツエの郊外の野邊などで、花の褥に身を横にして眺むると、身は宛ら草花の世界に入つて胡蝶と化し、翩々として色彩の天地を飛び廻るかと思ふ。フイレンツエの町は花の郷、詩の都と呼ばれて居る處で、或る詩人の句に次の如くに歌はれて居る。

あたりの丘は綠の中
　紺青滴る美はしき空の下に、
調和と愛に抱かれてフイレンツエは笑み榮ゆる。
　人界の悲よ此都にな觸れそ。
美はしき夢よ覺むる時なく。
　彼の詩人と共に花に眠れ。

更に言ふべきは、伊太利の特別の春の景色は廢墟の壁に咲く花である。二千餘年前の榮華の夢の跡は空に聳ゆる壁に殘り、それを疊み上げた石又は煉瓦は春が來冬が來ても同じ灰色赤色の錆變化なして居るけれど、其廢墟の間にも春が來れば心有りげの花が咲く、岩菫と稱する黄色の花が半ば毀された石垣の頂に咲き揃ひ、倒れた柱や崩れた壁を掩ふて蔦蔓紫の花が香ふ、迚も他國に見られぬ春の姿である。是は私の曾遊の折の歌だ。

色あせし宮居の跡に人の業
　嘲らんとてか千々の花咲く。

人物評論（二十七）

坪内逍遥論



△坪内博士

正宗白鳥

私は上京すると、直ぐに早稲田の專修英語科といふのに入學しましたが、その時は内村鑑三氏や德富蘇峰氏を崇拜してゐて、耶蘇教の會堂へも通ひかけてゐた

時分で、坪内先生に左程の敬意を拂つてゐませんてした。文學物は好きで、早稻田文學なども毎號讀んでゐたのにかゝはらず、早稻田の文學の學風と云ふものが嫌ひでした。その頃の早稻田の文科はいはゞ享樂主義が流行してゐたらしく、元祿だの江戸だのと、創立當時からのロマンチックの風潮が殘つてゐたやうに見えて、風流心のない私などは文科に對して反感を持つてゐました。文科の生徒は運動會で芝居をする。假色を使ふ。不斷話してゐることもキザだと思つてゐました。そして、學生が「坪内さんにかぶれてあゝなつたんだ」と、我々の友達間で批評してゐました。世間からも博士に對して、そう云ふやうな批難があつたやうです。て、私は英語科を卒業してからも、直ぐ文學科へ入る氣がしなくて、一年延して、實用英語科へ入つてゐましたが、それが濟むと、一寸方向に迷つた。何だか文科へ入りたいやうな入りたくないやうな氣がしたが、その時幸ひに浮田博士が主任で史學科と云ふのが出來たので、その方へ入つて、二年目から文學科へ轉じたのですが、そう云ふ氣になつたのは、一年の間坪内博士の文學上の講義を聽いてゐた結果だつたらうと思ひます。私の入つてゐた教會の先輩が或時私に向つて、「坪内さんの家へ行く人は次第に會堂へ來なくなる。綱島君なども彼處へ行き出してから信仰がなくなつた」と、私を警戒するやうに云つてゐました。私の宗教を止めるやうになつたのは、少しも坪内先生の感化ではないんですが、專念文學の研究する氣になつたのは、二三年先生の講義を聽いてゐたゝめだらうと思ひます。私の在學中は早稻田文科の風潮の過渡期で、外形から云つても專門學校から大學へ移る時でしたが、先生の思想好尚も變遷期でなかつたかと推察されます。倫理の研究をしてゐられた時で、實踐倫理に關する表をつくつて、二時間に渡つて、それを說明されたことがありました。私はその時上野の圖書館へ通つてゐて、聽洩したのですが、圖書館から歸ると、同宿の老實な友人が非常に感動した口振りでその話しをして「自分もこれまで坪内さんの態度にはあまり感心しなかつたが、

今日先生の眞相が分つた」と云つてゐました。兎に角この倫理の講義は同級の者に餘程の感動を與へたやうでした。しかし、先生は何事も熱心に說かれるだけに、學生は感ちがひして、さも先生が文學を卑んでゐられるやうに思つた者も多かつたやうです。所がその年の試驗に「現今の演劇に對する所感」と云ふやうな問題が出たので、一度も芝居を見たことのない學生は答案に窮して、中には、道德上觀劇の害を說いて、かゝる問題の提出者を非難した者もありました。すると、先生は答案を見られた後で、それを駁擊して蒙を啓かれましたが、そのために芝居は觀なくてはならぬ者となつて、一部の者は早速連中をつくつて、歌舞伎座へ行きました。

先生のシエークスピアの講義は早稻田の文科の生命で、私は自分の學課を休んでは、他の級へも傍聽に行つて、凡てで十一二は聽きましたが、この講義では、シエークスピアその物ばかりではない。西洋文學、演劇、日本の文壇に對する先生の所感がよく語られて、それが却つて私共の心を動かしてゐました。鏡花の湯島詣を推賞されるとか、抱月氏の利根の一夜を評されると、我々は直ぐにそれを讀むと云ふ風だつたのです。その時々の團十郎の藝に對する印象はよく語られました。「自分は團十郎の態度については甚だ飽足らぬ思ひをしてゐるが、しかし、時々思はず感歎することがある。文學でも何でも敵をして感動せしめるやうではなくてはならぬ」と云つて居られたことがありました。イプセンやゾラのことも、フローベルの「マダムボバリー」や「サランボー」のことも敎場で聞きました。

我々の時代には最早先生のお宅であまり會がありませんでしたから、私は學生時代には敎場以外で直接に先生のお話を聽いたことは滅多になかつたのです。でも、卒業の際には、德田秋江氏と私と二人先生に招かれて、晩餐の御馳走になりましたが、私共が日曜附錄に書いてゐたから、二人は東京に留まつて文學をやる者と、先生も思つてゐられたのでせう。文藝協會創立以前の朗讀會の時分には、先生のお宅へもよく伺つて

ゐたが、近年は遠くから、先生の多年の理想の着々歩を進めつゝあるのを、いろ〳〵の感慨を以て注目してゐるばかりです。

私は先生の作物では、「梨園の落葉」を最も愛讀してゐました。演劇論としてあの位の者はこれ迄の明治の文壇に類がない。と思ひます。あの中のシエークスピアに對する所感は、絶好の散文として、幾度も讀み返してゐました。

△坪内逍遙君

森林太郎

○坪内君は僕の尊敬する先輩の一人である。僕は物を書き出してから、坪内君のお世話になつたことは度々である。或る時しがらみ草紙の内部に衝突が出來て困ると云ふ話をした。さうすると間もなく坪内君の書いた評論風の文の中にしがらみ草紙關係者の間に平和が維持せられるやうにと云ふ勸告の詞があるのを見附けた。いづれあの文も「文學その折々」のやうな集のどこかに保存せられてあるだらう。あれは僕を助ける心持で書かれたに相違ない。坪内君が盛んに評論をしてゐられた頃は、一人の其所を得ないのをも憂ふる君主の槩があつたのである。

○その頃坪内君は「記實」と云ふことを唱へて、褒貶はしないことにしてゐられた。併しその記實の中に知らず識らず褒貶の交るのは爭はれない。いかに公平な積でも神ではないからである。僕がそれを見て肝積を起してあばれたのが、所謂沒理想の爭論の起りであつた。

○製作家としては、坪内君は最初小説を書かれた。それから脚本を書かれた。脚本を書きはじめると同時に、小説は書かないことにせられた。それからリブレットオ様のものを書かれることになつて、今も猶書いてゐられる。リブレットオ様のものを書きはじめると同時に、脚本は書かないことにせられた。僕は此遣り方を見て、坪内君のために惜まずにはゐられない。僕の希

望は坪内君が小説も脚本もリブレットオも同時に又交る〳〵書かれれば好いと云ふに在る。併しこれから後に、そんな時期が來るかも知れない。僕はさうありたいと思ふ。

○坪内君が住宅に舞臺を構へて舞や劇を興行せられると聞いた時、僕はヲルテエルのやうだと思つた。それから劇場を興されると聞いた時、僕はワグネルのやうだと思つた。但し坪内君は王侯の助力を藉らずに遣られるから、えらい。

○明治の文藝家で子分の多いものは、故尾崎紅葉君と坪内君とだらう。今の文藝の評價も大抵坪内君の子分の手で極まると云つても好からう。僕はその評價に一々服することは出來ない。坪内君の子分も神ではないからである。

○以上で僕は坪内君と云ふ人の事業の輪廓を一筆書きに書いた積である。無遠慮な所は容赦して戴きたい。

△坪内博士

島崎藤村

坪内博士の人となりや、事業や、見識などに就いて、私はこれまで種々傳聞する機會は多かつたが、それはいづれも間接で、木挽町にまだ厚生館といふ建物のあつた時分一度氏の演説を聞いたことゝ、故透谷の追悼があつた日に氏の出席せられたことなぞが、私には直接に氏を知る僅かの機會に過ぎなかつた。斯の同時代の先輩に對して私が最も尊敬の念を抱いたのは、故二葉亭に對する氏が謙遜な態度告白、及び盡力等を知つた時である。『二葉亭四迷』と題して西本君の『趣味』發行所から曾て出版した本の中にある氏の回想錄を讀むと、氏が友情は溢れるばかりに出て居るが、それにも增して私が尊敬の心を起したのは、氏が世間一般の人から明治文學の開拓者として仰がれて居るに關らず、自らは反つて明治文學の先覺者として二葉亭の價値を認めた點にある。理解あり、見識あり、宏量あるの

人てなければ、あゝいふ態度には出てまいと思ふ。氏の美質はあの回想錄の中によく表はれて居る。思ふに氏は高田早苗氏などと共通な觀察力を持つ人て、種々な方面に才能が働くし、又た心を配つても來られたやうだ。これが氏をして廣い意味の指導者、一般の文學の開拓者たらしめた所以てあらうと思ふ。私ども後進の輩から言へば――氏が二葉亭の認め方は廣い意味であり過ぎる。慾には、もつと細く認めて頂きたい。そして氏が二葉亭を認めるとの細ければ細いほど、氏が今日精力を傾けつゝある演劇事業に一層の光彩と陰影と意味とを添えるてあらうと思ふ。今はほんの思ひいた點のみを書きつける。氏の如き長き閲歴と文學的事業を成して來た先輩に對しては、もつとゆつくり書きたい。

△講堂と書齋と舞臺の黑幕の後と

上司小劍

坪内先生を評論しやうなどといふことは、私たちに出來ることてない。私は直接に先生の敎を受けたことはないが、間接にはドレダケ先生によつて開發されてゐるか分らぬ。これは私たちと前後してこの國に生れて、多少とも文學にたずさはつてゐるものゝ齊しく感ずるところてあらう。

今度文部省といふ役所の文藝委員會といふものから先生をば文壇の功勞者として褒美を贈つたのに就いては私は、たゞ可笑しくてならぬ。先生の考へては『折角呉れるといふのだから貰つて置かう』と、長尾から牡丹餠でも持つて來たくらゐに思つて居られるのてあらうが、兎角に表彰なぞといふことを好むこの國の政府が三十年勤續の巡査に褒美を與るやうなつもりて、この文壇の大家に金錢を贈つたといふことが、私は其の前後の由來やら成行きやらを考へて、餘計に可笑しい。

一國家の政府によつて表彰されるといふとは、運動會の旗持ちにされるやうなもので、三十年勤續の巡査が旗持ちや提灯持ちをするのは當然てあらうが、この儼然たる文壇の大家に提灯持ちをさせやうとするのは

隨分だ。

私はあらゆる點に於て坪内先生を尊敬してゐるが、特に其の隱遁的なるところが好きである。講堂と書齋と、舞臺の黒幕の後と、それだけを城廓にして、一切他の場所に顔を出されず、强權のにほひのするところなぞへは決して近寄られないのを私は常に嬉しく思つてゐる。世には先生よりも若い人、先生よりも新しい人て、舊迷信の斷礎碎瓦を大切に拾つて、俗世界に勢力を張る飛礫にしやうなぞと工夫する人もある。

私はこの國の文學者が古今來、隱遁的の趣きから離れないのを愛する。其處に絶對の自由があり、超越した尊嚴がある。浮世の所謂えらい人の仲間入りなぞは、「野人禮節を知らず」を看板にして、何時までも避けてゐたい。

坪内先生が羊羹色のモーニングコートを召して梳られぬ頭に古い型の帽子を被り、狹い場末の町をスタスタと早稻田の講堂に通はるゝお姿、それは數年前にお見かけ申したのであるが、私は其のお姿をば、曾つてアクロポールの上に活きた希臘の彫像よりも尊く思ふ。希くは先生をして永久に斯くしてあらしめたい。我が先生をば勳章や佩劍の光る場所に曳き摺り出したくはない。

△逍遙先生

徳田秋聲

△私は以前—明治二十何年と云ふ頃に、一度田舍から出て來て、坪内先生と尾崎先生とを訪ねたヿのあるのを、今でも時々憶出して苦笑するヿがある。その時私は田舍て、私を提嘶してくれた或先輩から、東京文壇の話を色々聽かされ、逍遙先生の「書生氣質」とか、「妹背鏡」とか、それから「細君」と題する有賀と云ふ學者のヿを書いたのだとか云ふ短篇小説などを讀んでゐたが、取分け先生の講堂に於けるセイクスピアの講議振の面白いヿを傳聞して、私かに胸を躍してゐた。其頃の私等の目にはセイクスピアと云ふ名が、非常な光と力とを有つてゐた。

私は越前堀の宿から大久保の先生の其時分の新宅を訪ねたが、先生は其時はまだ若く、色の淺黑い、目の淸しい、何處かノッペリしたやうな顏であつたやうに記臆してゐる。そして褞袍のやうな廣袖のものを着て、長煙管で莨をふかして居られたが、初對面のぽつと出の田舍ものに對しても辯說は流るゝ如く、外國の文藝や思潮について、辷るやうな調子で述べられたやうに記臆してゐる。その事は私の耳には餘りに高尙で、第一言語からが聽取れないやうな點が多かつた。私はそんな迂疎究まる靑年であつた。そして其時私は熱があつたので、長いあひだの道に憊れて、先生のお話を伺つてゐるうちに目が眩みさうになつて、水を一杯頂いて悄々お暇したやうな次第である。

其後も私は先生や、早稻田の其他の人の講義を聽きたいと云ふ念は絕えなかつたが、矢張緣がなかつた。先生にはその後二三度餘所ながらお目にかゝつたヿがある限てある。

あの頃の先生の勢は實に大したもので――今でも然ではあるが――あつた。そして先生は紅葉さんなどの其頃の書生肌よりか、もつと洒落れた作者肌の人であつたやうに思はれる。たしか「妹背鏡」のなかにリットンのヿが出てゐたが、私はその感化だつたか、リットンが、何と云ふヿなし面白いやうな氣がして、其時讀んだリットンの作物は今でも古葛籠の底に二三冊あるかと思ふ。その時分のヿを考へると、私は堪らないやうな氣がする。私が先生をお訪ねして、牛込見附から上つて行つた神樂坂は、其頃はまだ人影が寥々たるものであつた。先生の前に現はれた當時の自分の見すぼらしい姿も目に浮んで來るやうである。

先生は歸朝された鷗外先生の出された柵草紙紙上の淸新で眞摯な評論文に對して、間々洒落澤山な戲文めいた評論文を書かれたが、今日の先生の態度は餘程變つてゐられるやうである。神經質過ぎるかと思ふくらゐ眞摯であつた鷗外先生が、段々垢ぬけがされて皮肉になられた代りに、逍遙先生の方は反つて偏窟になられたやうである(語弊はあるが)そして文藝協會とい

ふやうな其仕事も、傍から見ると、道樂氣のある隱居が可愛い孫娘に遊藝を仕込んで、老後の自分の樂みにしやうとするやうな傾がないでもない。先生の芝居の世話の燒方は全く然云ふやうな風に見えて、甚だ床しい點があると同時に、舞臺上の優人を仕立てるに就ては、最も堅い叮嚀な遣方ではあるが、自分の好みに凝過ぎて、反つて過渡時代の劇界に對して迂遠なやうな氣もする。しかしそんなことは半可な私等の議すべきことでないのみならず、先生一私人の好みは好みとして、經營される文藝協會には自から劇壇の運命の繫つてゐることは言ふまでもない。

先生の友情に厚いことは屢々耳にする。川上さんの亡つた時なども、逸早く馳せつけて、其死を悼み、紅葉先生の葬禮の時には、遺兒の燒香するのを見て、齋場で卒倒された位である。文部省から授かつた金も、思ひきつて芝居の方へお使ひになつた方が、文部省の趣意にも叶ひ、斯道のためにも悦ばしいことであるに拘はらず、反つて其半分を文士の遺族に惠まれたり、色々思遣のある金の使分けをされるところなどは、苦勞人の先生の衷心から出たのでいかにも床しい。

△坪内博士

阿部次郎

坪内さんの私的生活に就いては何事も知らない。私の坪内博士觀は社會の公人として、文藝の人として、博士自身の著述及び新聞雜誌の道聽塗說から構成した影の又影である。蓋し甚しく當にならぬものに相違あるまい。

直接に師弟の關係ある諸先生は特別として、單に著述を通じて影響を受けた先輩の名を數へる時、博士の名が十指の中に入つて來る事は勿論である。私は博士の噂をするに當つて先づ養育の恩に對して感謝の念なきを得ない。併し博士に對する私の感情は他の諸先輩に對する感情と可なり着色を異にしてゐる。內村鑑三、高山樗牛、島崎藤村の三先生に對して私は熱烈なる景

仰の情を捧げた。私の情意生活は此三先生の情熱によりて基礎を置かれた部分が甚だ多い。又森鷗外先生に對しては其精煉せられる文章に驚喜した外に、先生の議論や思想は私にとつて大なるサゼスシヨンであつた。中學時代の幼稚な頭に先生の六ケしい文章が解る譯はないけれども、兎に角森先生の説だから偉いに相違あるまいと思つてゐた。森先生の名は大きな黒い山の影の樣に私の心を威壓してゐた。併し坪内先生に對しては崇拜者の熱情を感じたともなければ、不可思議なる大きな物として威壓される樣な氣がしたともなかつた。私の先生に對する感情は常に尊敬す可き隣の伯父さんに對する樣な心持であつた。今でも此心持は依然として持續してゐる。之は多分博士の人格から來る必然の印象であらうと思ふ。剜る處はないが一番永續する。一番永續するが心の奧底に影響を與へるとは割合に少い。先生の印象は何處か春のやおぼろと云つた趣がある。坪内さんと云ふ言葉は森さん、島崎さんなどと呼ぶ場合よりも一層妥當な、落付いた響を傳へるのである。

之は坪内さんに親炙する人の心持を想像するのであるが、思想や趣味の上で先生から離れる樣になるとは隨分あり相に思はれるが、其爲に先生其人から叛く氣には滅多になるまいと思ふ。何處かに相觸れる處のない二つの心は到底義理で結びとめられるものでないから、之は博士の心の奧に思想や趣味より更に深い意味に於て他人の心に觸れる美點を持つてゐられる爲だと解釋しなければなるまい。此處に來ると坪内先生は夏目先生に似てゐる樣に思ふ。議論をしても、叱られても兎に角後進子弟が其膝下に親むとを喜ぶのは兩先生の偉い處である。但し夏目先生の態度には少とも外觀上何處かにシエルッハフトな處がある。坪内先生にはもつと嚴格で氣が詰る處があり相に思はれるが、親炙する人にきいて見なければどうだかわからない。

坪内先生は文壇の先輩中嚴格な意味で最も事業に堪へる人の樣に思はれる。森先生の吏才は先生の器用な性質を證明するのみで、先生自身が吏務を以て自分の

事業とする自覺を持つてゐられるとは思ひ難い。道義的自覺と道義的精神の充溢とを背景として、天職と云ふ樣な高尙な意味に於て事業をするに堪へる人は恐く坪內先生を除いて外にあるまいと思はれる。俳優養成所（？）卒業生に告る辭の如きは讀んで涙のこぼれるほど貴いものであつた。文藝協會の事業の內容に對しては隨分批評の餘地はあつても、其態度に就いては徹頭徹尾敬服せざるを得ない。

作者、批評家、思想としての博士に對しては固より隨分遺憾がある。眞正の意味に於て客觀的であり得る程主觀內容が豐富になつてゐられないのは何よりの缺點であると思ふ。併し私達の漂蕩定まらぬ主觀に苦む時には、此の如き博士の缺點さへも羨ましと思ふ、博士の心は碇を卸した船である。兎に角人生を觀る獨自の立場を持つてゐられるのは尊敬に價するとと云はなければならぬ。

△調和的改革者

文學博士 幸田露伴

坪內君の文藝上の製作品の價値の批評といふやうな事は、僕は批評家でないから避けて置いて、坪內君が眞面目に文學の爲めに盡されたといふ事を認むることに於ては何人も異論はあるまいと思ふ。或は強いて議論をしたら、文藝上の盡力というても、其盡力は或意見から生ずるに相違ない、其意見について反對の考を抱いた人がありと假定したならば、意見の相違は、盡力の價値如何といふことも問題になるかも知れない。然し我是とする所を以て他を非とすれば天下皆非ならざるなしである。暫らく人我の別を捨てゝ公平に觀察すれば、矢張り盡力は盡力丈けの結果も價値も生じて來るのである。

第一、僕一個として考ふる所によれば、小說とか戯曲とか德川時代からの因襲の結果、社會の最下層に落ちてゐた、そして文藝のやうな事に携はることを名譽

ある仕事と考ふる人が絶無であつた時代に於て、文藝を一つの立派なる事業として、自ら身をそれに寄せ、力をそれに費やし、そして世間に或は反對的の感情があるに拘らず、勞苦を惜まず文藝の爲めに盡されたのは非常に感謝すべきことゝ思ふ。若し坪内君がなかつたらどうかといふに、時勢が時勢だから、文藝も何時までも德川時代のまゝでゐやうとは考へられない。然し兎に角まだ〳〵手も屆かず目も及ばず、思慮も到らぬ時代に時て、思慮も到り、目も働き、手までも動かしたといふ事は、實に非常の功績であつて、時勢が坪内君を然らしめたといへばそれ迄であるが、矢張り坪内君の内的の尊ぶべきものゝ發揮といはなくてはならぬ。

坪内君によつて新文藝が起つたといへば褒め過ぎたといふ人があるかも知れないが、坪内君に指導されたといふ事には誰も異存はあるまい。側かに聞く所によれば當時の大學生などいふものは皆世の權勢權力に憧れて誰一人文藝に身を投じやうなどいふ人がなかつた嗜好として文學の好きな人はあつたけれど、身を入れやうとする人はなかつた。政治の上、經濟の上、乃至醫學化學の上に我心の全部を占領させる人はあつても文藝に心の全部を捧げるといふやうな人は丸でなかつた。それは詰り德川時代からの因襲で、文學をやるものは戯作者として賤められて居つたからである。斯の如き時代に坪内君が文學に身を入れ、全心をそれに傾注されたといふ事は非常に多とすべき事である。それだから當時の人からは、隱居臭いの、坊つちやん臭いのと見做された。隱居などゝ思はれたのは確かに一種の侮辱壓迫である。それにも拘らず文藝上に努力されたのはなか〳〵大きい、立派な仕事といはなくてはならぬ。今日の如き文藝が相當に尊敬されるやうになつた時代を以ては、到底當時の實情を考へることは出來ない。

坪内君は「小説神髓」を著して、勸懲主義を金科王條として居つた古い思想を破り、文藝に携はる人を戯作者と卑んだ風習を覆し、文藝の相場附を、ずつと上

の方へ押し上げたのは、假令直ちに恐ろしい効力がなかつたにしても、次第〳〵に文藝の社會的地位が出來て來たのは、坪內君の不斷の勇氣と眞摯なる嗜好によるとて、漫ろに人をして嘆賞せしむるのがある。

新しい著作に手を著けられた、其著作の成功不成功は擱置き、兎に角其時代に於ては新しき試みて、其時代に於ては確かに成功したものといはなくてはならなかつた。今日から見れば坪內君の初期の作は、古い臭ひが強く、德川臭が可なり多いと認められるかも知れない。然し調和といふことを忘れぬは坪內君の長所で文藝上の努力に何時でも伴つて居る特性である。それて在來のものと飛離れ、歷史を無視するといふやうな破壞一方の事をしないのは、全く坪內君の性格から來て居ると思ふ。それだから時勢の推移と共に坪內君の作物も變り、後の劇界の活動の開始された頃には小說界に試みられたものに比して古の臭ひが薄い、之が又坪內君の仕事の功を奏する一原因と思ふ。

最初勸懲主義の破壞を勉め、偏狹なる道義の拘束から文藝をはなした、之は固より坪內君の大功であるか其弊も亦自ら生ずるに至つてずつと後には坪內君は自ら省みて餘りに勸懲の傾向を破壞し過ぎたかの如くに感じられた事があつたかも知れぬ。然し之は坪內君の穩和の性質から出でた過慮であつて、あの當時は矢張りあゝでなくてはならなかつたと思ふ。第一の小說の革新運動を起された時は今申したやうな風であつたが、第二に劇界に對する革新運動を起された時も其通りであつて、又實に嘆賞に堪へたるものがある。在來の劇界といふものは一種の別世界なるかの如き觀があつて他のものゝ侵入することを拒んで來た。演劇矯風會などいふものが早くからあつて劇に對して、いろいろの註文や批評なども幾らかづゝはあつたけれども、然し劇界は矢張り特別權を有する一種の居留地の如き觀があつた。其結果因襲的の勢力牢として拔くことが出來ず、改良したり、進歩させたりすることが出來ぬものゝやうに思はれて居つた。それにも拘らず坪內君は驀進して、社界と劇界との間にあつた幾重かの柵を

段々に破り〱て、遂に劇界と社會との空氣が流通し呼應するやうに導いて來た。坪内君の外にも盡力した人があつたかも知れぬが、矢張り心も目も手も一所につけた人は坪内君を推さなくてはならぬ。劇界の事について、實際の仕事は櫻痴居士などもやつたけれども、然しそれは寧ろ古い趣味の繼續者として働いたかの如き觀がある。古い趣味からいへば明治では默阿彌が、消えなんとする燈火の最後の光を投げたのであつて、公平にいへば此人を櫻痴居士が凌駕したといふ事はどうしてもいへぬ。劇界に於ける新らしい最初の運動は矢張り小説の革新と同じく坪内君に初められたといひたい。此時も小説の時と同じやうに、古い歴史を無視せず、矢張り幾何か古の臭ひを持たせることを認容してやつた。此等は皆坪内君の性質の穩やかな調和的な所から來て居ることゝ思ふ。此ういふ性質は、物の新陳代謝をさせる時には却て具合のよいもので、其爲めに無益の衝突や摩擦や軋轢を起さずに、滑かに物の更革の途を開くに便利である。

後に至つては演劇に對する坪内君の仕業も亦いくらか最初とは變つて來たやうに思ふ。然しこれは今尙繼續して居ることであるから今後の事を豫想するのは無益の業であると思ふ。

要するに坪内君の遣り口は或物を革新せんとしても其れを單に革新の方からのみ見て、歴史を撥無するといふやうな事をせず、穩和な性質と、認容する力とを以て、辛辣でなく、緩和の態度で進んで行くのである。それが爲めに無益の衝突や摩擦や軋轢がなく、潤滑に運ぶことが出來る。之は今日の時代にとつて必要な事と思ふ。

廣義に於ける文學の坪内君に負ふ所極めて多きは前述の如くなると同時に、又よく後進を世話をして來者の途を開拓した點も大いに多としなくてはならぬ。餘り嚴しく自己の意見を固持せぬ爲めに却つて或一つの範圍に跼蹐することなく、自然に進歩を助長することになる。別に坪内流の文學や理屈を樹てずに何時も何時もいろ〱な物を容れる所の德を以て來者の途を開いて行つた効も亦沒すべからざるものと思ふ。

△明治の文學の開拓者

内田魯庵

○坪内君の功勞は誰でも知つてる。何も特に云はんでも解つてる。明治の文學の最も偉大なる開拓者だと云へば夫て濟む。福地櫻痴、末松謙澄などゝいふ人も創業時代の開拓者であるが、是等は鍬を入れてホジタリ返したゞけで、眞に力作して人跡未踏の處女地を立派な沃野良田たらしめたのは坪内君である。

○有體に云ふと、坪内君の最初の作「書生氣質」は傑作でも何でも無い。愚作であると公言しても坪内君は決して腹を立つまい。私が今云ふと生意氣らしいが、私は兒供の時からヘタヤタラに小説を讀んでゐた。西洋の小説も其頃リツトンの「ユージニ・アラム」を半分教師に教はり教はりながらであるが讀んでゐた。(之が私の西洋の小説を讀んだ初めて)。であるから貸本屋の常得意の隱居さんや髪結床の職人や世間普通の小説讀者よりは廣く讀んでゐたし、幾分かは眼も肥えてゐた。であるから坪内君の「書生氣質」を讀んでも一向驚かず、平たく云ふと、文學士なんてものは小説を書かせたら駄目なものだと思つてゐた。格別氣にも留めずにゐた。其時分私の親類の或るものが「書生氣質」を揃へて買つて置きたいからつて私に買つて呉れと云つた時、私はあんなツマラヌものはおよしなさい、アレよりは圓朝の牡丹燈籠の方が面白いからと云つて代りに牡丹燈籠を買つてやつた事がある。牡丹燈籠は「書生氣質」の終結した時より較やおくれて南傳馬町の稗史出版社(今の吉川弘文館の横町)から若林玵藏氏の速記したのを出版したので、講談速記物の一番初めのものである。私は眞實の口話の速記を文章としても面白いと思つて牡丹燈籠を愛讀してゐた。「書生氣質」や「妹と脊鏡」は明治かぶれのした下手な春水ぐらゐにしか思はなかつた。

○私のやうな何にも知らないものさへ實は此位にしか思はなかつたのだから、其の當時既にトルストイをもガンチヤローフをもドストヰフスキーをも讀んでゐ

た故長谷川二葉亭が下らぬものだと思つたのは無理も無い、小說に關する眞實の先覺者は坪內君よりは二葉亭であると云つても坪內君は決して異論無からうと信ずる。私は公平無偏見なる坪內君であるが故に少しも憚からずに直言する。

〇けれども「書生氣質」や「妹と脊鏡」に堂々と署名した「文學士春の屋おぼろ」の名がドレほど世の中に對して威力があつたか知れぬ。當時の文學士は今の文學博士よりは十層倍の權威があつたものだ。其の重々しい文學士が下等新聞記者の片手間仕事になつてゐた小說――其時分は全く戲作だつた――其戲作を堂々と署名して打つて出たといふ事は實に靑天の霹靂と云はう乎、空谷の跫音と云はう乎、著るしく世間を驚かしたものだ。

〇自分の事を言ふのは笑止しいが、私は兒供の時から餘りアンビシヨンといふものが無かつた。此點から云ふと餘程馬鹿だつた。夫故大學を卒業して學士にならうなどゝいふ考は微塵もなく、學士といふものがどれ程エライものであるか何かそんな事は一向念頭に無かつた。であるから「書生氣質」や「妹と脊鏡」を見て、文學士などゝいふものは小說が下手なものだと思つたばかりであるが、親だとか伯父だとかゞ私が小說に耽溺するのを頻りに喧ましく云つて「下らぬ戲作などを讀む馬鹿があるか」と叱られるたんびには坪內君を引合に出しては「文學士でさへ小說を書く、戲作戲作と輕蔑するやうなものでは無い」といふと、親や伯父は文學士をエライものだと思つてるから聊かへコタレの氣味であつた。

〇こんなわけで「文學士春の屋おぼろ」といふものは非常な權威があつた。且坪內君は同時に小說論を屢々書いた。後の「小說神髓」は之を秩序的に纒めたものだが、此評論は確かに「書生氣質」などよりは重かつた。世間を敬服さした。之も私は丁度同時にパーチーンの修辭學を或る外國人から授かつて、始終講義を聞いてゐた故、確かに其一部をパーチーンから得たらしき(坪內君には聞いて見ないが、)「小說神髓」を餘り

に驚かなかつたが、シカシ例證として日本の作物を擧げて論じられた處は面白くも讀み且又お庇て蒙を啓いた點もある。二葉亭は此『小說神髓』に不審紙を貼りつけて坪内君に面會し、盛んに論難してベリンスキーを揮廻したものだが、私は日本の小說こそ京傳の洒落本や黃表紙、八文字屋もの丶二ッ三ッぐらゐ讀んでゐたけれど、西洋のものは當時の飜譯書以外には今云つたリットンの『ユーゼニ・アラム』だけしか知らず、小說論如きは皆目解らなかつたから、『書生氣質』こそ下らぬものだと思つてゐたが『小說神髓』には大分お庇を蒙むつた。

○其後私は一年ばかり專門學校に籍を置いた事がある。坪谷君、大阪朝日の土屋君、獨逸のドクトルになつてる渡邊龍聖君なぞと同時代だつた。尤も據ろない理由で籍を置いたので、專門學校の科程を履修しやうといふツモリは初めから無かつたのだから、籍を置いたといふだけで、殆んど出席しなかつたが、坪内君の講義は其時分評判であつたゆゑ數回聞いた事がある。

であるから坪内君は私の先生ではあるが、多勢の聽講者の中に交つて唯ッた二三回しか講義を聞いただけの頗る薄い關係であるし、平生先生呼ばりをされる事が嫌ひな人だから一度も先生と云つた事は無いけれども、たしかに明治二十二年頃の初對面以後今日まで始終往來して少からずお世話になつてる。實に親切な人だ。親〻になつて世話をして呉れる。私はお世話になつたが、お世話を甘受しなかつた事もあるから、事に由ると世話甲斐の無い男だと思はれてるかも知れぬがシカシ心中では常にお世話になつた事を感謝してをる。故二葉亭に關する坪内君の厚情は實に言舌を以て盡し難いほどで、私如きは二葉亭とは最も親密に交際して精神上には非常に誘掖されてるにも關はらず、二葉亭に對して未だ曾て何も酬ふてをらぬ。坪内君に對して實に恥入る。且又二葉亭に對して彼ほど厚情を寄せられるのを深く感謝してをる。

○話は見當違ひに飛んで終つたが、坪内君の世間に及ぼした勢力は非常なもので、苟くも文藝に興味を持

つた當時の青年は、『文學士春の屋おぼろ』の名に奮起して身を文壇に投ずる志を立てた。例へば二葉亭の如き當時の造詣は寧ろ坪内君を凌ぐに足るほどであつたが、ツマリ『文學士春の屋おぼろ』の爲めに崛起したので、坪内君莫かつせば或は小説を書く氣には一生ならなかつたかも知れぬ。又『浮雲』の如き世論『書生氣質』以上であるが、坪内君の合著の名で無かつたなら出版する事は出來なかつたのだ、出版しても恐らくアレほどに評判されなかつたらう。

○尾崎、山田、石橋の三氏が中心となつて組織した硯友社も無論『文學士春の屋おぼろ』の名聲に動かされて勃興したので、坪内君が無かつたなら唯の新聞の投書ぐらゐで滿足してをつたらう。紅葉の如きは二人とない大才子であるが、坪内君其の前に出てゝ名を成したが爲めに文學上のアンビシヨンを熾やしたので、左もなければ矢張世間並の職業に從事してシヤレに戯文を書く位で終つたらう。從來片商賈として扱はれ、作者自身さへ戯作として卑下してゐた小説戯曲等が文明に貢献する大なる精神的事業である事を社會に認めしめたのは全く坪内君の功勞である。

○坪内君はイツても新らしい道を開く。劇の如きも今日でこそ猫も杓子も書く、生れて以來まだ一度も芝居の立見さへした事の無い連中が一と幕物を書いてる。兒供のカクゴトじみた文句を聯べて辻褄合はぬものをさへ氣分劇などゝ稱して新らしがつてゐる事の出來る誠に結構な時勢である。が、坪内君が『桐一葉』を書いた時は團十部が羅馬法王で、櫻痴居士が大宰相で、默阿彌劇が憲法となつてる大専制國であつた。此間に立つて論難批評したり新脚本を書いたりするはルーテルが法王の御教書を燒くと同一の勇氣を要する。『桐一葉』は勿論『書生氣質』のやうなものでは無い。中々面白い。花見の夢の場、奴の槍踊の處は坪内君でなくてアレほど面白く書くものは外にあるまい。が、今日坪内君は之を傑作とも思ふまいし、又坪内君の劇に於ける功勞は何百年來封鎖して餘人の近づくを許さなかつたランドオブ・シバヰの關門を開いたのであつ

て「桐一葉」の價値を論ずるが如きは抑も末である。
○早稲田に於ける坪内君の功蹟は、左も右くも文壇に早稲田派なるものがあつて、相應に文學に貢献もすれば勢力も持つてる一事が明白に證明してをる。此以上一語を加ふる必要が無い。早稲田大學は本と高田、天野、坪内のトライアンビレートを以て成立した。三君各々相讓らざる功勞がある。シカシ世間が早稲田を認めるのは、政治科及び法律科が澤山の新聞記者や代議士や實業家を輩出したにも關らず、政治科でも法律科でも無くて文學科である。何と云つても日本の最高學府たる帝國大學に對しては民間私學は顔色なき中に優に大學と拮抗して覇を立つるに足るは實業に於ける三田と文學に於ける早稲田とて、此の早稲田の文學をしてシカク威力あらしめたるは一に坪内君の功勞である。文部大臣が三君の中先づ第一に坪内君を擢んでゝ報ゆるに博士の學位を以てしたのは推薦者たる大學も亦坪内君の功勞を認めざるを得なかつたのであらう。下らぬ比較をするやうだが、此三君を維新の三傑に比べたなら高田君は大久保甲東で、天野君は木戸である。大西郷の役廻りはドウシテも坪内君に向けなければならぬ。坪内君がゐなかつたなら早稲田は決して今日の隆盛を見なかつたであらう。

○文藝協會の成功は更に一層明白な事實である。腹藏なく云へば文藝協會の芝居が夫ほど立派なものだとは思はぬ。少くも見物して夫ほど面白いとも思はぬ。沙翁劇にしろイプセンにしろ、本を讀んだ時に與へられた以上の印象を受けたといふ事は出來ぬ。私は坪内君が諛辭を好む人で無い事を知つてるから少しも憚らずに直言する。シカシ世間に與へた感動は非常なもので、大多數は盡くヒプノタイズされて了つて、紅隈の團十郎が大眼玉を剝いたのでなければ承知出來ぬ連中までが「チンプンカンで面白くねエ、馬鹿にしてやがる」と云ひながらも一種の暗示を與へられて之を迎へずにはゐられなくなつて了つた。坪内君の威力はエライものだ。之が時勢であらうけれども、此時代の汐先きを早くも看取して、西へ東へと文壇を指導して徐ろに

彼岸に達せしめる坪内君の力量、此力量に伴ふ努力、此努力が産み出す功勞の大なるは誰が何と云つても認めなければならぬ。

○近來はアイコノクラストが到る處に跋扈してをるから、先輩たる坪内君に對して公然明言するものはあるまいが、内々ては坪内君の文學は自分等とは交渉しないナド、云つてるものもあるかも知れぬが、坪内君が新らしい文學の道を開いて呉れなかつたなら今日の文學は之程までに進歩しなかつたかも知れぬ、諸君のやうなアイコノクラストが澤山生じたのは即ち飛りも直さず坪内君の功勞である。坪内君は明治の文學の大いなるエポック・メーカーである。

△坪内逍遙氏

文學博士　三宅雄次郎

文藝委員會の決議は變な事になつたが、其邊に落付く外無かつたてあろう。外のが總べてはねられて、坪内氏のセーキスピアの飜譯が滿點になつたなど、出席委員の中にセーキスピアの讀めぬ者がある割りにして少し纒まりが善過ぎた、却て其の位が善いのかも知れぬ。飜譯ばかりを滿點とするを如何と思つてか、功勞を表彰する事となつたが、功勞となれば漠然たる丈無難である。坪内氏自ら遠慮した通り、獨りだけ功勞者てあるといふのも如何がてあるが、重なる功勞者たるに相違ない。氏は文藝の或る産物を以て認むるよりも文藝の功勞者として認める方が都合よい。

氏は一分の天才九分の常才を備へて居る。氏は大學に在つて政治、經濟を專門とし別に文藝に就いて吹き込まれたこともないに、文藝に趣味を持ち、文藝に携はることに爲つたは、幾分の天才なくて叶はぬ事てある。書生氣質は後から見て何でも無いやうてあるが、其頃人の氣附かぬ所てあつた。併し産物の上では氏に劣らず、或は優つたものが他に現はれた。氏にして全力を創作に注いだならば明治時代に最も傑出し得たかも知れぬが、それは疑問とし保留し置かねばならぬ。今迄ては、他人の及ばぬ所は創作の才よりも其目先の

利く處に在る即ち戯作者流の小說の行はれ、稍々て政治小說の行はれ居る頃、小說神髓を著し、自らも從來に異なる小說を作つた。そして世に多くの作家が出て己れの關係者が文士として生計に苦む樣子なれば、數育に轉じ、剩へ倫理を受持ち、放蕩を戒め、處世上の事を敎へたりする。そして演劇なり戯曲なりの問題が起る頃、之に關する飜譯及び創作を以て方向を指し示さうとする。小說に於ては既に已れに優るものが出たからであるか、之を作らうとせず戯曲に於ては未だ已れに優るものが出ないで其の必要を感じ、猶ほ頻りに從事して居る。目先の利くのも天才であるといへば天才といへる、併し世に處するの巧なる處であるとすれば、是は常才に屬ずる。

明治になつて小說新體詩の類ばかりで長く續き得たものはない、長く續き居るものは少くも二つ違つたことを兼ねて居る。何れかと言へば相矛盾し居る事を兼ねて居る。戯曲の如何はまだ分らぬが、小說一方なのは或る邊で思想枯渇と見らるゝ。早く死んだのは致方ないとして、紅葉でも病氣の重くなる前に創作を續でるに困難を感じた、讀賣の一段半を埋むるのはやつとであつて、それが既に多過ぎると自分でもこぼした。他の人と違ひ字句の洗錬に勉めた處もあるが、一としきり勉强したが爲め、餘力が少くなつたのである。而して一段半をも書かず、幾月も其儘となつた事がある他には頻に書き聯ね、或は幾つも新聞小說を受け持つたのもあるが、濫作するとは無しに何時しか世から遠かつて仕舞ふ。都の華時代のもので今日誰が殘り居るか、若し長く續いて來て居るものが有れば、相ひ異なるものを兼ね用ひたのである。森氏は醫業と小說とを兼ねて居る。小說も飜譯が多い、若し早くから創作のみであつたら如何であらうか。幸田氏は最早や小說作家でない、隨筆家である、故實を取調べる方である。學識に於て位置を占め、前の小說家たる位置を維持し居るのである、今後小說を作らぬとは限らず、或は戯曲をも作るであらうが、今日の處物知りとして存在して居る。夏目氏も英文學者たると小說家たると何れが

重なのであるか分り惜い、學位一件も英文學者たるが重もであつたらう。塚原氏の六十を過ぎて歴史小說を續け居るは、作の特質として然る處もあるが、自らは曾て地質學を修めたり。文藝と關係ない事をして來て居る。故山田氏も創作の人氣の衰へると前後して辭典の編纂に取り掛つたが、若し今少し轉換を巧にしたならば優に位置を維持し得たであらう。

坪内氏の他に優るは轉換を巧にする處に在る、向ふ處特殊の才能を備へ、新に或る事業を爲し遂ぐるに堪ふる。少くも之を發表する頃は他に及ぶものがない、他の及ばぬ才能を何處迄發揮し得るかは分からぬが、或る邊で切り上ぐる事になる、着手しつゝある時は頗る熱心で、殆んど全力を注ぎ、誠に凝集力に富んで居るのであるが、一つ思ひ直すと之を止めて、他の方面に熱中する。一方から他の一方に移る時、多くは前に從事した所より別になり、折角の惰力を失つて仕舞ふが、氏は左樣ではない。其兼ね合せが頗る巧である。小說家たる時と修身家たる時と、戲曲家たる時と趣を異にしつゝ何處となく纒まつて居る。氏は惰力を失はぬのみでなく、能く之を活用し、決して虻蜂取らずに爲るやうな事がない。文藝を以て世に處するに於て他人の容易に企て及ばぬ所があると謂ふべきである、セーキスピアは彼の如き天才を持つて居つて、而かも安樂に世を渡つたといふことだが、坪内氏は天才を發揮する迄に特別の產物を成し遂げぬが、文藝に從事しつゝ安樂に世を渡つて行く所は一と通りでない。固より金持ちから見たら何でもないが、普通の文士に較ぶれば下らぬ心配がない、特に世に阿るでなく、敢て容れらるゝを求めるでなく、求めずして何處にても容れられる。といふも相異なれる事を擔任する、甲で善くなければ乙、乙で善くなければ丙、次から次と變つた目論見をする所もあるであらう。若し人より一歩先きに思ひ着くを天才とすれば、少からず天才を備へ居るのだか、斯ういふのを常才とすれば、殆んど盡く常才となつて仕舞ふ。

氏は性格よりして相ひ異なる所を併はせて居る。一

方ては眞面目てあり、嚴格てある。他の一方ては洒落てあり、浮世を茶化した様てある。森氏も之に似た所がある。規律の嚴なる軍隊に居り作ら發賣禁止になるものを書き、風俗壞亂に觸れさうなものを書くを贊成する調子があり、而して文部省あたりて受けの宜いのは政治關係の事に冷淡てあつて、少しも反抗がましい事をせぬのが與つて居る。若し坪内氏にして政治に趣味を持つて居つたならば、議會にも出て、或は政治家と見られたかも知らぬが、政治に冷淡て、政治一方の連中から除け物となる丈、文藝に伸び得た處もある。大隈伯に關係ありながら、官僚に睨まれぬ處もある。時代が時代なら政治家となる方が幅が利いたてあらうが、今てはデモ政治家たるよりも文藝家たる方が遙に受けが宜い、氏は先見の明があつたか如何てあるか、自ら順境てあつたといふが如く順境てあつたといはねばならぬ。併し存命中に多く福を得れば後に福が殘らぬともいふ。氏が五十四歳にして文部省から文藝の功勞者として推奬されるのは急に幸不幸を判斷し難い。併し氏は能く此邊に氣が附き、表彰された所を他に分與したが、是ては今後益々功勞の積む譯てある、文藝家として誠に有効に且つ安全に切り拔ける方てある。

島村氏も學校に授業しつゝ文部て少々苦い顔をする性質の文藝に携はつて居る。是れ亦相ひ異なれるものを併せ居るので長きに續く所以てある。今日の處文藝家の生活は一調子て行き難い。長く續かうとするには別に副業を持ち、場合により、何れが本業てあるか分らぬ様になるが宜い。若し時代が、變るか、又は大なる天才を備へ居るかすれば、早く創作に取り掛り、創作又創作と幾十年も續き、量と質とに於て並び優ることが出來るだらうが、小なる天才て一時の人氣に任せ事に專なるは、早く行き詰つて仕舞ふ、四十歳前に行き詰つて仕舞ふ。併し誰が天才てあるか天才てないかは容易に分らぬ。兎に角試みなければならぬ。實に多くの人が試みたが、今ては坪内氏が尤も功勞ありと認めらるゝこととなつた。氏は自ら認めず、他に幾人もあると言つて居る。

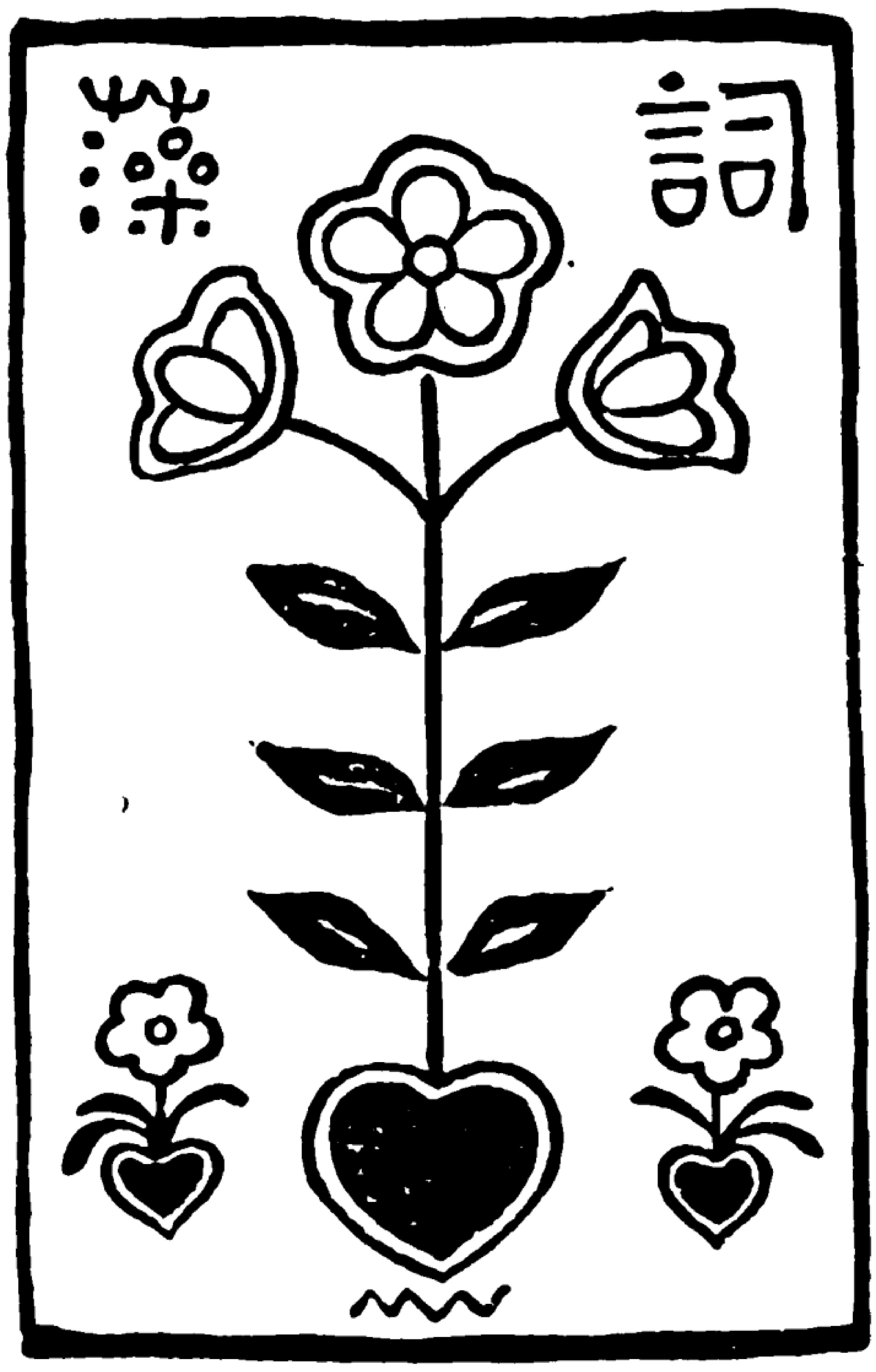
池邊吉太郎先生を弔す

三山池邊吉太郎先生、其病疾たりし心臓病の激變によつて二月廿八日溘然として逝かる。先生が「東京朝日」の主筆として、獨立公平の論を行ふに穩健老實の筆を以てし、十數年間常に論壇の雄鎭として内外に重きを爲せしは天下の等しく皆知る所、先生逝いて論壇頓に寂寞を加へたるの感なき能はず。先生の死は實に天下の一大損失として天下の人と共に嗟惜の情禁ずる能はざるものあり。

特に吾儕に取つては、此公人を嗟惜する公情以外、更に〳〵切に、先生の死を哀悼するを禁ずる能はざるものあり。先生が本誌の爲めに力を效されしこと、前後玆に五年、其間本誌に寄せらるゝ同情は年と共に密に、吾儕に注がれし溫情は月と共に濃やかに、本名を以て、或は匿名を以て、論文及び人物評を公けにせられし數は百篇にも及べり。殊に最近に至つては毎號二篇乃至三篇の高論を誌上に見ざることなかりしに、今や先生逝いて永久に其溫情高論に接すること能はざるに至る。之を思へば悲愁胸を衝いて言の出づべきを知らざる也。

先生が本誌に寄せられし「伊藤公論」「大久保公論」「岩倉公論」の如き、「巴里通信」を除けば、恐らくは先生の最も力を籠められし長篇にして、正に維新史論の一新形式を創められし者。又玄黄子の名を以て寄せられたる支那論の如き、其見識嶄然として時流を拔き、今や先生の豫言一々隣邦の事變に適中するを見る毎に、先生を嗟惜するの情一層切ならざるを得ざる也。

先生の遺兒未だ皆幼。之を思へば浮世の俗事に超然たりし先生の鐵腸と雖も、家中に九回せざる能はざるべし。然れども幸に、天下に摸範たるに足るの賢夫人のあるあり。よく之を鞠育して先生の遺志を繼紹せしむるに餘りあるべし。冀くは先生の瞑せられんことを。（瀧田哲太郎）



百首歌

與謝野晶子

目に見えぬ不可思議國の手枷をばわれもはめらる若きならひに

不覺なる君をば倒し少女子のわれを逃さぬ火の鎌きたる

あけぼのや雀かすめし山がらす血をこぼしゆくうまごやしかな

戀と云ふ紅き上着の下に著るおらんだ染のもの好きごころ

鋸はいとよく惡をあらはせるものにしありけり姿も音も

行ふをためらふことを見んために男は目をば持つにかあらむ

懲らさんとこぶしを赤くしたる人二人行くなる夕月夜かな

五月雨黴のにほひのする床にほととぎす聞くわれの古郷

琴を彈きさかづきとりて祭りけるその世の神も輕くおもはる

少女子は馬七つ持つ婿とりて安からざらばいかにしてする

まし

菜の葉食ひ母の廻りを走り居る小兎たれやな來りそわれに

明き日にわれの心を苦しむる戀調伏す壇にのぼりて

幼き日大海を知りことたりぬ心は次になにを見にけむ

人おもひ眠りをなさて朝の街ゆけばかなしき街の錆聲

乾きたる人の子に指切りやりて走せさる時に寒かりしかな

きりすとは聲を發せぬ啞の弟子この頃疎み逐はんとぞする

こころよく分ちあたはぬ酔ひをしぬ目前のことといにしへのこと

人群れて黒き林をながめ居し夕方の村目に消えぬかも

知る子みな懺悔をもたず過ちは少しにてやむものとおもへり

この君は河に小川の入りたりし戀とことわるいにしへのため

四月の日しろき顔して出てこよとおのれを呼びぬ青き暖房

初夏の夕ぐれの庭わが上をかずもしらえずしら玉走る

破屋に濡るるに濡れて相佗びしことのみ云ふがつとめなるべき

そのひとつ狼の子の顔をして翹のあるところ引き合ふ

もの欲しき心も知れる人なりとあさましがれどかひのあらなく

人とする話を忌みて與之助がまぼろしつくる山ざくら花

十年へぬ刀を袖にしたるより危き人とうたはれしより

快き秋の日はやく來れかし飽ける男の報せをとらん

うら庭の千日紅を血まみれの花と忌みつるわれを知る君

火のごとしありし列より出でて來し浦安の世をすててこしわれ

野薔薇摘む青水無月の月の暈しろあざに似る下にわれ居て

ふと心白馬に乗りむち上げて勝つべき城の程ちかく來し

誰やらにひざまづくをば夢に見てやめる病を戀ととりそね

戀ひたらば自然に寄らむ人一人來よと招くはからくりに似る

葉一つの香のかなしさに子がとりしおびただしかる蕋の芽かな

山ざくら酒屋の前につみ上げし樽に乘るなる春の日輪

わが祖母これを初めに寺の門くぐれと撫でし振分の髮

悲しさは昨日立ち退きたりし家覆面をして街に立つ時

もの哀れ知れるこころは一日に秋のかぜ吹く春の風吹く

唯ならぶ道のべの木とみづからをわれおもふことぞり

ふしにある

さびしかりわが許す人われを見て變化のものと思はずなりぬ

樂を約せる人となりたれど日の黑むことそれより起る

うば玉の夜のなき國となりたらば嘲笑をのみ人はつくらむ

靑柳あなづりそめて目におかぬ三日目の小雨髪にしむかな

百日ほど飛行をしたるそののちの氣落ちのごとし今癒えぬべし

〰〰〰

思ふこと半夜にいたり忘れむと道理にもどり眠りにつきぬ

見しところ天そそり立つ高山もわがもてあそぶ男もひとし

若き日の戀ゆゑ書きし文の反古積みかさぬれば隱處となる

夢にして阿片を吸ひし小さき室の壁畫にありし廓の女

死ぬとせしめまひ心地の刹那にも一いろならぬ心とぞ見し

的を置き弓ひく時に高らかに笑ひし父にやがて背きぬ

高樫の風の涼しき道あゆみ日のあかねする見ておびゆ夏

かにかくにわれを包めと世へだてと身にて口にてしら雲をよぶ

集めたる心ちりたるあちこちの心のかげとなてう似るべき

多きよりおほく人戀ふ心をば道行人にわれの云はめや

戰ふ日獅子が團亂旋舞ふなる日よきこと語り人の子は寢る

身も君も人にまなばじ彼等云ふ外に行けども幸ありと

別るればかよわき事のいちじるしこれを恐れてかたはらに行く

うぐひすの來り歸るをうつし世のけうとき人を見る如く見る

あてやかに華奢にましろき波をもて水草洗ふ朝のかぜかな

戀ゆゑに道理うしなひある人もかばかりものの悲しかるらん

棄兒なる身を知らずやと夢うつつ分かぬ境にきて生ひ立つ

心をばものに充たして戀もせむ蝶の針さすその時ほども

わが前に眼鏡もて來てうちのぞきあらはならずとおも
へる如し

跳るなれ今人のごと戀と云ふ生死の種まきしいはひに
前に居ておもへることを諷しする人形はやも飽きられ
にけむ

木蓮のちる日となればおぼろしの大理石の家水にくづ
るる

花やかに初冬の風いとたかき二側の杉うごかしめ行く

歌うたひ腹にて伏せる男居ぬうすくらがりの初夏の家

人戀ひて歎く心をうちわらひ夜通し爆ぜぬうき炭櫃の
火

寢へぬわれ失はばやすからむあるまじきことかく思ふ
まで

われ知りぬ身のかたむかずゆくりなく死にし心はよみ
がへること

この黒瞳ただよはしげに神を見る魔見る惡見る戀人を
見る

そよ風の春のあかつきとらへ來て君に這はせむ水いろ
の雲

ここちよく大熊星を見上げたる人引きいれて春の琴ひ

く

つむじ風巻きてかたへにはこび來ぬいと遠やかに思へりしもの

この少女羊を殺す旅人の再び來ぬを證しするかな

君をとれ口あり舌のある人の云ひ寄ることの多きが中に

人人はわが話にて靜まりぬ秋はかかりと思ふ夜かな

おのれの身つながれし綱かみそりを持て切るごとし初秋の風

あかつきの星そよ風にわらひ居ぬ白げし並ぶ馬ぶねの

前へ

この人を知りて多くの日をへつること忘れむとおもひ立ちにき

這ひ入りて床下などにねむらまし靜かならまし死ぬによからめ

山の花溪の流れにこぼれおつ反り逃げさる心のごとく

心よりうち喜びてひとひをば語れりつるも人とかぞへず

さまよへる牝鹿を殺す白金の光おもひぬその新し世

尾を振りて波をきりさる大きなる魚の姿はなきかわが死に

たぐひなき身のめでたさよわれ一人日のいづるより入るまでを見ぬ

自らの心のごとくいちじろし金錆色のさびしき胡蝶

はかなしや男と遊ぶことすると世の騒ぐをばなみしかねつも

烏瓜緋に透くはだはもたれども著る衣なしと歎くがごとし

涙をばな流しそね身を入るるつかあなうがつものとをしへぬ

いちじくの大きくなるを日ごと見むかく子をおもひ死ぬを悲しむ

はだかなる神きたれども蜘蛛のいをもてわれつなぎ事なさしめず

人おもひ涙こぼしぬ廣小路乞食娘のをどるうしろに

御心に衝き入りし日のおもひての何ぞ今日さへめでたかるらん

目に火あり胸に蛇抱くこれなどを生けるあかしに申すべからむ

夕ぐれの光りにそひて動く人高殿にあり水色を着る

若き日におのれを愛づる心よりなしいづること悪からぬかな

おのづから今日知りにけれよりよりに妄議したりし奇靈はわれと

和歌

尾上柴舟選

無名氏

○

ほの白きよるの渚のなみの音きゝにゆくなり胸をしづめに

かなしさのひろごりてゆく冬の海のはてにつらなる白き山々

君を思ふ甘きなみだがきゆるぞやわが頬にきて吹くなはまかぜ

官能のにぶきをおぼえ横はる春磯山の草のかゞやき

なまめかしきふたことみこときゝながしいづる廊下の夜氣のつめたさ

若かりし日の思ひてになけよとて野に花さかせ春まろびくる

○

内田月城

悲しとて樅の若芽の香をかげば眸にうつりきぬ青き山脈

日本橋夕さりくれば河岸庫に白くうつろふ夕月の影

野をゆけば野のをちこちに蛙啼くふるさとの野もさびしかるらむ

松の葉の青き刺戟にわれ泣けば波の音ぞする夕の松山

磯山のかげの小さき水たまり松のうつればかなしなつかし

○

花村草人

雪降らぬこゝの港の一月の眞晝にいてゝ日を浴びて居ぬ

神よ見たまへいつ死ぬるともわかぬ身があらぬ思ひにわづらへるさま

立ちつゐつ春がうごける天地のこのひと隅に靜こゝろなき

水底にあるにも似たりものゝ音のなべて絶えたる林のまひる

浮草も花の咲くなるあめつちになにをかわれの身のにほはざる

かく立てば樹にや巖にや見えもせむもの言はぬ

わがうしろ影かな

○　捫垣青花

鬱々と愁へごろりとねころべる室よりみゆる春の山々

逃れゆく愛を悲しみ初春の夜のにほひにうちむせぶかな

春となりぬ悲しき愛の醒めぎわの夢の淋しき夜のつゞくかな

窓によれば君ありし日の思はれぬ花散る春の夜のうすあかり

ひそやかに死をば抱きてあるといふことをし知らば君おどろかむ

○　藤見さよ子

柳の芽さみどりいともあざやけくなる朝夕の我が涙はも

春よいづく白き墓のみ眼にうつる我がこの頃の切にいとほし

少女てふ名にひかされてたをやかに生きんとぞ思ふ海の夕ぐれ

水禽も春來るといふあしたよりいとかろかに河原にあそぶ

眼の前に遠く白める大海にいとかろやかに春の風吹く

○　堀草春

春の夜の甘き涙は薄月の白く匂へる花よりぞくる

枯草の山鳩色の明るさをうすむらさきに彩るすみれ

草の芽の青きに春は匂ふらむふるさとの野に泣きにゆきたや

すべもなき人戀しさを薄青くいざなひ光る三月の海

○　田村胡春

紀の海の夕べはよしやしろじろと霧雨にぬれ月のいづるも

きまぐれに三味ひくことを覺えたる男の胸のあはれさびしや

春の夜のわれの心かわびしくもくらやみにのみ咲けるたんぽぽ

さらさらと心くすぐる如くにも若草に降る雨はかなしき

○　日下實

野火ひとつみえぬ夜汽車のまどによりふく口笛も旅かさみしき

よりそひて立てばほのかに匂ひくる黒髪の香のかなしかりけり

思ふなかれものおもふなかれやよ女かがやける瞳をくもらすなかれ

○　北里柳外

曉の光に消えし淡雪に加茂の立木の雫するかな

いと遠き川瀬の音に通ふ風朧ろめく夜のカーテンを吹く

水めぐる京のみ寺の藪陰を光りて落ちし紅椿かな

○　若林牧春

わかれかね人を送りて家をいて月の光に春の草踏む

春芝居はねたる後をゆら／＼と緋幕のかげにのこるともし火

朝の霧はれし川邊の明るさに柳の花のしらじらと咲く

野も山もわがゆくところすべて今春なり何ぞ涙こぼるゝ

○　志村花命

死するまで櫻さく日は幾度來んわれの泣く日よいくたびかこん

暗に這ふ野火のほのほにわが心吸はれて泣かず夜に入れるかな

かわきたる唇にぬるリスリンのうすあまさにもものゝ思はる

○　鈴木風影

かなめ垣に薄日さすなる奥津城のあはひ／＼の落葉の冷たさ

物の影淡くさみしき黄昏を柱時計のおごそかに鳴る

霜柱白く立ちたる牛込の何やら坂を靜かに下りぬ

をちこちに山茶花の花散りてあり共同墓地の冬の夕暮

○　森花影

泣くことを自からもとめやう／＼に林に來ては泣きし日ありけり

わがほかに猶來る人のあるごとくあと振返りた

ゝづみし丘

○　徳島杜の子

肺病むわが枕邊に悲しきは讀みふせられしヂムボアの色

病み細るわが蒼白き双の手を悲しやふとも思ひぬ君が手

○　伊藤蓮二郎

わが倚れるこの樹このまゝこのわれの心となりて呉れずやと思ふ

青麥と暫時ともに日をすはむ初春の陽はわれらつゝめり

冬は行くわが親しめる老人を逝かしむるごとさびしかりけり

○　丸山英

戀すれば若き心は動力のメートルのごと安きひまなし

誰が投げし枯野につゞく路ぞひの疲せし梢にかゝる梳髪

○　松島落果

いろやゝにうすれそめたる松原の入日のなかに風ぞひゞける

如月の明るき山のいたゞきにつめたくひかるひともとの松

しづやかに青山並に對ふとき心しづかにうるほひにけり

○　苗加白光

唯一語諾とし云ひしある人を忘れず猶も世を歩むかな

香油にも似るかほりすと醉ひ痴れて君の濡れたる春の夜の雨

○　島翠花

しめりたる畑の土ふみ君とゆく二月はかなし鳴く鳥もなし

少年のごとくに泣かば忘れんか語るよしなきわれのかなしさ

○　大野のぼる

別れくる二月の夜はうら悲し鴨はもなきぬくゝみ聲して

冬の河淡き灯影をたゞよはせ夜霧に濡るゝ舟一つ浮く

○　佐久間夢塔

あたゝかき晝はことさら郊外を好まぬ吾れの肺

病む發作

片そくぼやる瀨なき程よく見えて朝の冷さた空氣かなしも

○　打田紅雨

霜のおく朝の舗石ふめばなる靴のひゞきも淋しや冬冬

酒くみていだせる人の白き手にふと落としたる我が泪かな

○　美里夢三郎

色赤きたわれめどもに囃されつ旅の二階に晝の海見る

荒みたるまゝに心はなぎ果てゝいつかさびしき事を思へり

○　下浦潭水

口噤むこのさびしさにこと問ふなわが涙聲をきくに堪ふるや

ちらちらちら雪ふり出てぬ柿の木の梢にもだし群れゐる雀

○　河田敏

冷え性の寐ざめさみしきカーテンにうすくかすかに雪明りする

十一月の土のうるみに裸木の影顯はして鳥去りにけり

○　伊瀨ますほ

はかなくも我が十八の過ぎゆきぬ見のこしし夢のたへずなつかし

二階より蒼茫として暮れて行く街のいらかを見てありしかな

○　伊藤楊花

わが胸の奥をのぞけば客去りてむなしき椅子のあまた並べり

○　今井紫郎

明るくも枝はらはれし雜木の丘に靜に春の日のてる

力なく眺むれば丘に夕日照る事なく今日もくれんとすなり

○　村山泰陽

涙するを興がる男若草の匂ふ堤に身を投げて泣く

○　井田薬歌

我を去りしなべてのものをなつかしみから風なぎし野に立ちつくす。

自からをすごすてだてを思ひつつから風になる楡に身をよす。

○　奥屋白暮

ゆふぐれの窓より山の雪を見る汝と別れし日の心にて

○　冬雨

うらさびし只何事も我身にはかゝはりなきが如くさびしも

ゆら／＼と青き煙の立ち上る巻煙草もつ手のさびれかな

○　長濱芦琴

しづかなる秋の夕の港街カンテラいくつ見て歸り來ぬ

○　伊藤錄

砂山のかげのわれらの哀別の涙にぬるるこぼれ松かな

このままにわかるる愛をいとほしみわりなう君を泣かされぬする

○　室町三技

大風のあとのしゞまの丘にいてしばしは君の事のみ思ふ

○　金子秋川

夢もなくふと眼さめたる黎明の光の中のこのさびしさよ

ゆきずりにふと見し女春の夜のひともしころにふとうかみきぬ

○　須賀紫浪

試驗後の物足らなさに新しき本など買ひて書架に列ぶる

○　戸田露葉

銀色の荒みし姉のかんざしを見つめてありし春の夕暮

○　宮内麻茅郎

寢返りを打てば紙燭の煽られて消えなんとして燃ゆるもかなし

○　小林茂吉

君泣けば我もまた泣く今日といふ凶日送るその術にとて

○　中里富

なまめきて春のあしたの雨がふる汀の松に啼きぬるる鳥

○　芥川葉雨

十ばかりふくれ雀が裸木に動かぬひまをくるゝ夕日よ

○　津端修

水の上に投げし小石と我運命と似たり淋しく柳によれり

○　横田湖峯

暦らば骸は土に歸るべしされど愛ふる魂のゆくゑを

幸かはた不幸か知らずながらはうから集へる中に默せる

○　津田たき子

群集のなかにおぼへしさみしさが床にいるころ涙となりぬ

○　森花影

味もなく冬の日暮れぬわけもなくたゞいたづらにわが生くるごと

○　小川流葉

冬の夜の街のどよみを遁れ來てつと立ちどまり枯草を踏む

○　佐々木霞汀

公園のかはたれ時の靜さと美しさこめさく花らちる

○　川添暦花

舟ひとつ通はざる海わが窓に近き悲しさ冬に入りけり

和歌應募の注意

○東京市小石川區原町百十五尾上柴舟氏宛
○用紙は半紙大の原稿紙に限る
○封筒の表面には必ず「中央公論歌稿」と朱書すべし
○氏名住所明記の事

▼口繪の解説▲

本號には英人アルバアト・ムーア氏 AlbeMotr ore (1841——)の"Blossoms"を掲載したり。氏の畫風は凡て感覺と現實とに立脚し、本然の儘なる美と正確と古典的均整とを描き盡す力に於て現代比肩する者無し。"Blossoms"は氏がかゝる特色の最も明かに表現せられたるものと言はる。

俳句

踏青

高田蝶衣選

晴れぬ貌の青踏む君に態夫來て　鎮西郎
踏青の公主にも古き艶話ある　同
踏青の和子拜まんを雨となり　同
興亡を狐知る野や青き踏む　同
白馬殊に飾り榮え見ゆ青踏む野　同
里人戀ふて今日も詩ありし青き踏む　青輪子
踏青や尙約す登攀の事　同
青き踏む踏み忘れたる岬かな　同
難關越しに青きを踏める在所見ゆ　同
野遊に離れて磯の船卸し　同
青き踏んで曉風に奇調を得たり　摘星辰
踏青の王孫會釋賜ひけり　同
歸依寺に奥野の青き踏みしめて　同
はや京に歸任の命を青き踏む　同
師の不平言はて青き踏み連れし　同

院の晝を踏青に噴井亂す風　三石
青を踏みて森夕日に牧主訪ひ寄れり　同
青踏めば閣塔の彩雨杉よりす　同
踏青や晝月に沼氣澄める凪　同
野遊や牧表風埃る見て　紫浪
踏青や草深に待命の君　同
青き踏む心佛法の樂土かな　同
座礁船踏青の歸途淋しうす　同
野遊や丘亭の絃樂に和す　波月
踏青や宗覺佛旗垂る忌日　同
青き踏んで瞑想や開講の柝　同
巨鯨解體見學に來て青き踏む　同
石怪我に血を止め草も踏青や　愛香
化石掘る山も名所に青き踏む　同
花の留守居庭の青きを踏みにけり　同
歸錫送り出て青き踏み江に到る　花畝史
踏青の君とこそ洗髮よかり　同
森は日負ふ彩に出て青き踏み戻る　同
史疑晴れし遺跡あり青き踏む私領　寝覺草
踏青の學徒等に貝塚の晴る　同
踏青摘み漬けしものに酢白けて　同

踏青戻り船伏せし磯は物日なる　白刃
青き踏みて酌むによし湖魚名ある茶屋　同
蒸れ煙る糞納屋を眼に青き踏む　紫禽
青踏むや牛百持てば里長者　同
鞍装ひの風の戸に野遊人あり　鬼囚
鳥居晴れやかに假店張る野遊の日　同
野遊の日暈に眠る草あらむ　不寢庵
石となりて寢くさる牛や青き踏む　同
野に遊びてあらましを書けば日も入りて　琴水
佳章暗誦の努力の快も野遊びに　同
青き踏めば溫泉香迫る丘日和なる　石黒
礦廣ロを船たてる踏青の夕　同
踏青や春雁影を落しゆく　竹美
北嵯峨に文使すれば踏む青き　稻塲
踏青や鷺泊島宿の景を叙す　朱雀
踏青の原に貢の荷は繼げり　夢雪
山官吏に知己ありて逢ふ踏青の宴　日泉
踏青に不時客の宿塵押へ雨　紫樓
死蜘蛛垂るゝ叢竹に見て踏青の春　國郎
離盆汲むと思はざりしよ野遊ぶ春　冬櫻
野遊宴舞へば𩗗引く霞あり　六林生

學資兄もうべなひぬ踏青の晴　銀竹
懸賞の製圖も終えて青き踏む　碧水
退廳を踏青す窯場煙も午后　羊子
上梓功を告ぐに此賜暇青き踏む　楚丘
籠固むらしの槌ときく踏青に　十寸穗
癒えし君踏青の顏に艶薬映ゆ　一其
踏青や野守よしそゝぎ水噴れて　芳葩
踏青や臺場朗らに布干せる家　紫舟
祿に遇ふて師訪へば野遊に鎖せる　松句
造船をめづら立見も野遊歸途　子雨改揚舟

課題　若鮎　四月十日締切
初夏　五月十日締切
規定　淡路假屋町在釜口高田蝶衣宛
一人三十句以下△用紙は半紙

正誤（前號）

龍膽捨てろ思ひ主に侍す庭　白刃

評論

ロオスヱルトの出馬

一

ロオスヱルト氏遂に起つ、知らず其遂に起ちたる所以如何、其遂に起ちたる心事如何、彼や其大統領候補たらんとを熱心に慫慂せる州知事連の一團に回答して曰く、

予は本件（大統領候補承諾問題）を以て一箇人の希望利益を本として決定す可きものにあらず、純粋に人民全體の利益を本として決定す可きものなりとなすと全く諸君と一致す、予は大統領候補に指名せられなば之を承諾す可し、

何ぞ其言の堂々たるや、是宛然士君子の口吻也、然かも顧つて彼が先年天下に公約したる言を見よ、

大統領を二期と限定せる賢明なる慣例は實質に關するものにして形式に關するものにあらず（選擧の形式に依つて二回大統領とならざるにせよ、實際二期大統領たりし以上は、矢張り此慣例に束縛せらる可きものなりと言ふ意味）、予は如何なる事情の下に在りても又もや大統領候補たらざる可し、

と、敢て問ふ、ロオスヱルト氏が俄かに稱道する「大統領候補たるや否やは個人の希望利益よりも人民全體の利益に依つて決す可し」てふ眞理は彼が最近新たに發見したる眞理なる乎、將た米國最近の政局は、ロ君をして過去の宣言を反古として迄も起たしめざる可からざる程の必要を示せる乎、

否々詭辨曲說、以て言行の矛盾を隱蔽し若くは辨解せんと欲せは、何ぞ其途無きを憂えん哉、然かも赤裸々の事實を言明すれは、原因は寧ろ矢張りロオスヱルト氏自身の性格に出てずんばあらず、

由來ロオスヱルト氏は富豪の出身、生來平安に在つて我儘放題をなし盡したる人物也、彼や順境あるを知つて逆境あるを知らず、彼や權威權力に住んで、無權

威無權力に住む能はず、他人に君臨するも、他人の臣僕たる能はず、況んや亦彼は活動の人物たり、滿身レストレスネスの血流れ、功成り名遂げて、衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ふの徒にあらざるをや、

それ然り、故に彼は雜誌記者に滿足する能はず、演說家に安んずる能はず、今や華盛頓、ジェファソンの先例を排して、三度び白館の主たらんと欲するのみ、之に加ふるに彼亦子分あり、前内閣派たるガーフキルド、ピインショット以下多數の政客、現内閣に快からざる故に、或は現内閣の下に在りて志を得難きが故に、彼の出馬を冀ひつゝあるものも、亦感情的なる彼を動かすの一因たり、吁嗟斯くの如くして彼は遂に起ちたる也、

二

ロオスエルト氏馬を陣頭に立つ、現大統領タフト氏も勁敵を得たりと謂ふ可し、何となればラフオレット(上院議員、前ウヰスコンシン州知事)、カミン(上院議員、前アイオワ州知事)の徒輩の候補談こそ一笑に附するを得たれ、ロ氏の此擧に至ては、決して然るを得可からざれは也、

然りと雖もロ氏幸ひに來る六月の共和黨大會に際しタフト氏を破つて候補たるを得たりと假定せよ、(吾人は唯た假定と言ふ)、彼の出馬は本年十一月の選擧に際し共和黨の勝利を齎らすに於て多大の功果ある可き乎、彼の主張には特に衆民を服するに足る者存する乎。

吾人の所見に依れは、彼の主張にはタフト氏のそれと比較して特に見る可きものあらず、蓋し二者の政見は本來多大の逕庭差異ありたるにあらず、最近ロ氏がタ氏に對抗する意見は、反對せんが爲めの反對なりと言ふ可き感あるを奈何、世人の注目を惹かん爲めの反對なりと言ふ可き感あるを奈何、見よロオスエルト氏は、タフト氏のトラスト政策を攻擊し徒らに大會社破壞を期圖せず、寧ろ之が完全なる監督を謀る可しと說くと雖も、由來トラスト解散訴訟は、ロ氏自身か「ノーサン、セキユリテース、コムパニー」事件に於て着手したるもの、タフト氏は唯ロ氏の政策を繼承し、一層完全に有効に之を實行しつゝあるのみにあらさる乎、而して私立大會社監督の如きは、政府萬能官僚萬能の國家も猶且つ之を難しとす、米國の如き私人の權利發達し、政府の勢力微細に、殊に聯邦組織の結果中央政治機關、種々法理上の桎梏に苦しめる國柄に於て、そが困難なるは、ロ氏自身夙に經驗したる所にあらざる

乎、氏の如き議論は少數の富豪に執りて福音ならんも、一般人民恐らくは之に賛同するに苦まん、次ぎにロ氏又曰く、人民の直接投票に依りて任期中の裁判官を免職し、其判決をも取消すことを得せしめよと、是即ちタフト氏が屢演說せる所と反對す、然かも吾人は疑ふ、一時の感情に支配せらるゝ衆愚の投票に依りて裁判官を免黜し、其判決すらも動かし得可しとせば、是殆んど司法權の破壞を主張する無政府主義的議論にあらざる乎を、

三

其他關稅改革以下重要問題に關しては、ロ氏別に明策の耒目を惹く可きものを有せず、然らば則ち殘留する問題はロ氏對タ氏の人物比較是也、

一言にして之を蔽はん乎　タフト氏は聰明の人也、餘りに聰明なるか故に、又餘りに冷靜也、之に反してロオスヱルト氏は不聰明と言ひ難きも、感情の人也、感情の人なるが故に、其聰明も屢雲翳に蔽はる、冷靜に至ては、到底之に望む可きにあらざる也、然かも凡人の政治たり、衆愚の政治たり、時としてはモッブの政治たる米國の如きに在りては、タフト氏の人物は民心を己れに集中せしむるの光彩を缺く點に於てロ氏に一步を輸せざるを得ず、換言すればタフト氏は能く迄判官なり、僻見無き丈けそれ丈け、彼はロオスヱルト氏の有する黨首的資格、親分的資格を有するを得ざる也、然れどもロオスヱルト氏には又タフト氏が有せざる不利益の點あり、何ぞや、ロ氏はタフト氏以上に米國民に知られ居ると共に其缺點もより以上に知られ居ると是也、即ち其我儘にして輕卒なる遣り口、傲慢なる態度、眞卒なるか如くにして眞卒ならざる言僞は、最早や多數の米人の了解せる所たり、一九一〇年秋の各州選擧が共和黨の敗北に歸し、就中ロ氏の後援ありたる候補者最も激甚なる失敗を甞めたる如き、歷々たる其證據にはあらざりし乎、

斯く比較し來れば、ロタ兩氏各候補として優劣相半はするを覺ゆ、何ぞ俄かに其勝敗を斷せん哉、左もあらはあれ、こは唯た兩候補の論評のみ、若しそれ今年の大統領選擧か何如に決定す可きかに至ては、吾人はロタ兩氏の孰れか共和黨候補たりやと言ふ問題よりも、寧ろ民主黨か如何なる候補を擧く可きかに注目せざるを得す、顧みるに目今民主黨候補と稱せらるゝもの、ハーモン氏（オハイオ州知事）あり、ウイルソン氏（前プリンストン大學總長、ニユゼルシー州知事）あり、

ゲイナー氏(紐育市長)あり、クラーク氏(下院議長)あり、前侯補ブライアン氏又満更ら野心無しとせず知らず、內訌紛々を特色とする民主黨は、能く各種の情弊を一掃し、適良を選定して、今秋の戰場に雌雄を決するの擧に出づるを得可き乎、是恐らくは天下の刮目、注視する所なる可し、

土耳其の難局

土耳其の難局も亦た久しいかな、吾人は轉た同情の念禁ずる能はず、

一九〇八年革命以後、青年土耳其黨は極力國家の基礎を鞏固にし、文明の政治を布き、內、希臘、勃牙利、猶太、アルバニヤン以下諸民族を調和し、外列國との交誼を親厚にするに勗めたり、然かも其得たる所果して如何、

先づ之を內に見んか、先きにはエーメンの動亂あり、アルバニヤの暴動あり、今や又マセドニヤの紛擾あり、前者は少焉らく置き、後者に至ては如何なる原因ぞや、根本的に言へば、各民族の軋轢衝突自ら歷史を有し、一朝の盡力未だ其功を奏するに足らざるにも依らん、或は中央執政者の志、能く地方官に了解せられず、其施設、往々內閣の冀望と背馳せるものあるにも依らん、近き原因を言へば、土耳其財政節約の結果、マセドニアの憲兵數減少し、爲めに無賴の徒を鎭壓するの困難を生ぜるにも依らん、

然りと雖も、更らに深く觀測すれば、土耳其の禍源は其地勢に在り、蓋し土耳其は歐亞の境界なり、聯絡の地なり、君斯丹丁堡府は一衣帶水、亞細亞と相對し、將來商運發達の要路を占む、此地勢を占めたるが故に昔日も歐洲紛爭の中心となりき、今も亦同じく紛爭の中心となりつゝあるのみ、

君斯丹丁堡を占領せば、我が關門海峽の如き水路に隔てらるゝのみにて、歐亞の聯絡玆に成らん、此聯絡を占むる邦國は、即ち將來雄を天下に稱ふるの邦國ならん、是實に獨墺が極力土耳其を利用せんと欲する所以也、又英露が極力之に對抗する所以也、而して此競爭の野心が弱少の邦國に現はるゝものは、所謂勃牙利團隊、希臘團隊となりて、互ひに土領の秩序紊亂を促すに至る、他なし、小國は各勢力を土領土內に張り置きて、他日土領分割の際、ヲイオンス、シエヤーを得んと欲する也、

其れ然り、以つて內亂の裏にも列國の潛むを見る可

し、斯くの如くにして、青年土耳其黨の事業振はず、其實蹟の擧らざるもの、其罪青年土耳其黨のみに存せずして、寧ろ列國に存すと言ふ可き也、

（備考本年に入りてマセドニアの人種的軋轢一層甚し、勃牙利人革命黨の運動殊に顯著なり人家も燒き勃牙利教會に服せざるものを虐殺すると頻々たり、土耳其新內相バジ、アチル、ベイ深く鎭定に苦心中と傳ふ）

英國大罷業

英國炭坑勞働者一百餘萬、二月二十九日を以て同盟罷業を斷行す、於是乎石炭缺乏し、船舶、鐵道列車、電車皆な運轉を制限し或は全然之を中止するの止む無きに至れるもの多し、何等の大影響ぞ、况んや亦た諸工場の閉鎖相次て來り、饑餓に泣く勞働者幾十萬たるを知らざるに於てをや、

思ふに資本對勞働の戰爭に於て、此程の慘事を見るは悲む可きも、同時に吾人は英國勞働團隊の勢力堂々たるを驚嘆せざるを得ず、就中斯く許り大なる罷業に於て些細の騷擾、暴行無く、却て之に聲援して起りたる獨逸坑夫二十萬人の罷業に騷擾の報を聞くの如きは、英國勞働同盟が獨逸の該同盟に優る所あるを認めざるを得ざる也、

英米仲裁條約

米國上院、遂に仲裁條約案を可決す、然かも全く骨拔也、何となれば各事件を仲裁に附するや否やは米國上院の處決に一任せらるゝことゝなり、又モンロー主義、移民問題等を悉く仲裁より除外したるを以て也、斯くの如くならば總括的仲裁條約の實何くにか在る、知らず英國は斯くの如き得手勝手の修正を甘諾す可き乎、甘諾して以て我國民に迫るに日英同盟條約第四條の適用を以てす可き乎、吾人は竊かに之を以て日英同盟に對する英國の誠意如何を量るの尺度とせんとす、

（日英同盟條約第四條に曰く兩締盟國が第三國と總括的仲裁々判條約を締結したる場合には、本協約は該仲裁々判條約の有效に繼續する限り右第三國と交戰するの義務は前記締盟國に負はしむると無かる可し）

日露戰爭の恩惠

露國海軍會議、新に海軍法規を定め、從來「露國軍艦々長は或る條件の下に軍艦を敵國に引渡して降服するを許せる」を改め、如何なる場合に於ても軍艦引渡を許さざる旨を定めたり、新條文に曰く

「露國軍艦の艦長は、最早や戰鬪を繼續すると不可能なるか、若くは敵手に落つるの危險ある場合には自ら其軍艦を破壞せざる可からず」

と、而して此規定は二月二十六日露國皇帝の裁可を經るに至りき、

觀じ來れば、日露戰爭の鷲旗國に與ふる恩惠、一何ぞ多き、今回の改正も、是亦對馬沖海戰の賜にあらざる乎、(懐沙隱客)

中央公論記者足下

三月十五日甲斐に發するの前夜

東京朝日編輯局にて　松崎天民

眞に申譯が有りません、何んな理由があるにしろ、ほんとに申譯が無いと思つて居ます。

「淪落の女」の第三篇として、「十二階下」の一文を、四月號の間に合ふ樣に、執筆する筈でしたが、何うも材料が思ふ樣に集まらない。夫れに「十二階下」は、「黒縮緬」や、「捨ばち」と違つて、些の小説的色彩を許されない、生々とした材料を捉へて、大に氣を吐く積てしたが、心身に障る事のみ多くて、果し得なかつたのは、殘念に思ひます。

「十二階下」は五月號に延ばして貰つて、四月號には、女子教育家に宛た、「お小夜」を執筆する樣に、瀧田君にもお斷りして置いたのですが、夫れも甲州旅行のために果す事が出來なくなりました。新聞社の命を帶びて、東宮殿下行啓前後の山梨縣を觀るために、私は明十六日東京を出發せねばなりません。滯在豫定三週間、何や彼や準備があるので、落着いて「淪落の女」の運命なんか、考へて居る餘裕がない。「お小夜」は二十枚ばかり書いたけれど、大分長くなる豫定、兎に角四月號には間に合はぬ事となりました。頁數の都合もあらうし、いろ／＼お手違ひを生じさせた罪は、平に謝ります。

その代り、甲州から歸つたなら、是非書きます。「十二階下」か「お小夜」か、兎に角大に書いて、今日の無責任の罪を償ひたい。新聞記者生活の人である以上、こんな事は何でもない手違ひですが、雜誌社たる貴君の方に、豫定を狂はした責は免れ難い。

眞に以て何とも申譯がありません。



文藝委員會 豫選作物について

文藝委員會の豫選作物に對する各委員諸氏の意見を聞く爲に手紙を出した所が左の四氏から返事を賜はつた。玆に謹んで感謝します。(編者しるす)

〇

塚原澁柿園

文藝委員會の經過の模樣。幷に豫撰の書名等まで堅く秘密を守るべき事との約束をしましたから、此れは言へませぬ。但し其の撰定等に關係の無い、一個公刊の小說「家」や「微光」に就ての考へを單獨のものにて言へとならば、私も即座に御答へが出來る。兩作とも誠に力の有る、近來の好い作物と申しませう。――はア、あの「家」の戀愛一件ですか。成る程破倫は破倫でせう。併し此れも其の作者が主觀の眼を以て、其の破倫の戀に是認の宣告を下だしたとならば不都合でもあらうが。客觀的描寫を以て、唯だ或る事柄を其の有りの儘に描いたと云ふ丈けなら、何んの差支へも無い事と私は思ふ。すなはち宇宙間の萬象を我が物として居る作家の眼からは、「かゝる戀も世の中にあるから寫す、」と言ふ迄で、之を作品の材料としたとて毫も不思議は無い事と信じて居る。ーもう其樣な筈は無いのであるが、或は世間は何だ、或る事實を感興を以て描いて、何等の拘束をも其間に受くまじき筈の小說と、其の材料に一定の規律のある敎科書とを混同して居るのかとも考へる。だが倘し、恁る破倫は小說と雖も見遁しは出來ぬ、箇樣な書物は手に觸るゝすら汚れになる、とでも言うならば、私は問ひたい。今の文學者が金玉として執り扱ふ「源氏物語」は何うだと。其れが破倫は實に激しいもの。御存知の、お話しにもならぬ程の物である。

改めて言ふ迄も無いが、「源氏」には母子の戀がある。即ち光る源氏は、御父の妾たる藤壺と姦通してゐる。其の息子の夕霧は又た、義母たる紫の上に懸想した。恁う云ふ不道德の太甚しいのを書いて居るけれど不思議や誰も其れを不都合と異しまぬのみか、物語としては古往今來此の右に出るものは無いとして、珍重して居る。異しまぬのも道理であらう。誰も此書を敎科書とも、倫理書とも經典とも見ない。謂ゆる詞花言葉の妙を翫ぶといふ藝術品だと見てゐるからである。既に藝術品の小說ならば、母子の戀をも容認して置く。然して其れが問ふ處は、唯だ結構

描寫の巧拙如何に在りとする時は、此論移して以て「家」の上にも用ふべして。「家」の評價は唯夫れ描寫の巧拙のみで高下されねばならぬもの、と僕は獨りで信じて居る。だから「源氏」が已む事なき際と云ふのへ上がるとならば、「家」も同一の待遇を受けても、其の品質上、聊か差支への無いものと思つてゐる。

「微光」も材料の取捨が何うだとか云ふので、大分世間に批難の聲もあつたやうですが、其れ將た前のと同じ論鋒で、私に言はせると「世間に在るものを描いた」！其れで面倒も無いこと〻思ふ。これを、地獄が怪しからぬ、月圍だから惡いとか言うやうでしたが。借問す、昔し鳥養の院の御遊に「淺みどりかひある春」の名歌を詠んだ白女は、何者です？其の實體は、右の怪しからぬ種類のものなのでせう。「降るあめりかに袖は濡らさじ」と慷慨死に趣いた龜遊は什麼？公衆に淫を鬻いだ娼妓ぢや無いですか。さう戸籍の洗ひ立てすると、虎も少將も宿場の飯盛で、祇王も靜も藝妓上りの圍妾。然して其等は高貴の方々がお口弄みにもなる謠曲の材料にも採られて居るですな。然らば今日の月圍が何故不可でせう？况んやあの小說の主人のお國。其の氣慨には大いに感激すべきものがある。彼女は「自分の軀體を金にして、親族の窮者を救ひたい」と淚を零して、心から言つて居る。縱し其の行爲は、現下の皮相的文明の軌範を脫した所謂る「不都合」なるもので有るにもせよ、恁う云ふ愛他の心に富んだ正眞の人間らしい人間が目今の貴夫人令孃なる人達の中を搜しても幾個あらうかで。世間は滔々、無識者、不人情の空氣の呼吸に其の頭を腐らせつゝ、行きつゝある中に、小說でもあれ這樣な温かい、潔い江戸ッ兒の血の光りが微見せてくれられたは、空谷の足音とも謂ふやうな氣がして、私は、右の、深い感動を禁じ得なかつた。隨つてあの全篇を通じて何處にも卑猥な個所を見出だされぬ。いや有つたかも知れぬが其れは皆な彼女が境涯の口惜し淚に搔き消されて、痕も留めぬ。作者はこれを現代の忙しい生活の表裏を寫したものとして、唯だ書き流されたのかも知れぬが、僕は、暗示もあり、諷刺もあり、嘲罵もあり、嗚咽もある、近來稀れに見る好作物、一種の珍として見たのである。（談）

○ 饗庭與三郎

拜復

文藝委員會豫選作物に付鄙見發表の事御申越し候得共右は御推察の如く迷惑之儀に付此際發表の事御斷り申上候右御返事迄匆々

○ 文學博士 姉崎正治

御書簡拜誦仕候文藝委員會にて選奬の作一もなかりしは遺憾とする所に之有小生一人としては意見述べたき點多々有之候へども一々の委員が各々所見を公表することと相成ては結局誰々は何の作を推奬し何の作を排斥したりとの事を公表する結果となり委員相互の感情問題をも伴ふ次第に有之委員會を破壞分裂する目的ならばいざ知らず左ならぬ限りは相控へざるを得ざる儀と信じ候此點御諒知被下度と存じ候一般に亘りて申さ

ば小生は清新の氣象と高尚の理想と之に加へて眞摯なる努力あるものには少々の缺點に關せず推奬するを義務と考へ候

右御返事旁御斷まで如此候早々

○　佐々醒雪

文藝委員會に於て推選に上りし作物の批評をせよとの御申し聞けに候へども、實は委員會の議事は絶對の秘密といふことに相なりをり、從つて世間に評判せられしものが、果して盡く推選に上りしや否や、或はその外にも推選に入りしものなかりしや否やといふことだに、公言致し難き次第に候まゝに、不本意ながら、御尋れに對する御答は致しかね候。併し、世間にて推選に上つたと申しふらし候小說中にて小生が最も面白く感じ候ものは何であつたかといふことだけは、申上候ても差支なかるべきかと存候。

それも文藝上何れが價値多きかとなどゝいふことは、容易に判じ難き義にもこれあるべく、且つはそれが例の會に對する小生の主張の樣に聞こえても困り候間、唯々小生の嗜好趣味に最も近きもの、即ち好きなものといふ意味よりのみ申上候。

第一には「隅田川」に候、青年の哀れなる戀もなつかしからぬにはこれなく候へども、最も床しきは殘れる江戶の匂ひにこれあり候。小生自身にも、屢々あの樣なる色にも音にも觸れながら、唯とりとめもなく何處から來る刺戟とも知らぬものに醉ふ心地のみ致し候ひしに、あの一篇を讀み候てより、何か新らしきものを捉へ得た樣にさへ感じ申候。荷風君の父は僕の父と同じ名古屋の人に候へども、氏には純粹な江戶の血が流れてゐるのではなからうかとさへ思はれ候。小生の樣に書物からばかり江戶を覗いてをり候ものには、そゞろに敬服するの外これなく候。

次には「家」を推し候藤村君の例の艶麗な筆致が全く垢ぬけがしたとも申すべきか、文章から言へば、荷風君の未だ所々に才筆といふべきものが仄見えてゐる若々しさには確に立ちまさつてゐると存候。唯內容はさまで僕の心を惹かす候へども、これは好物でないといふ丈けにて理窟は無之候「微光」は氣持のよくないものに候。僕はあゝした氣分が何となく嫌ひに候。但しその文章や描寫の新味と緊張とは、誰にいはせても當代第一流にて未來の永き作者たることは請合に候。

「刺靑」は、これこそまだ試作と存候。江戶めいた刺靑屋や深川の描寫などは、未だ〳〵書物から出て來たかび臭さが殘りをり候。趣向は面白く候へども、未だ細工物らしくて、眞に讀者を魅して壺中の天地に遊ばしむるだけの力はないかと存ぜられ候「象」の象徴とかがやかましき評判と聞え候へども、箇中の抽象的感念があまりに單純に、餘りに明白にて、比喩談の樣に感じ候。僕は「象」よりも「麒麟」の方が何だか奧深い餘意がある樣で好きに候。殆んど篇ごとに見える南子夫人流の殘忍な性質は頗る新意と存候。さもあれ、今からこれを賞めそやすは考物にて、僕は今少し拍手の手を辛棒して、他日の必ず來るべき大成を待つてゐたいと存候。

「門」は漱石氏の作としてはよいものにてはこれなしと存候。いはゞ硯友社風の材料にやゝ新しい描き方があるだけに候。氏の特長は作中の人物に對する冷やかな觀察、いはゞ三馬風のものに新意の加はつた所かと存候。さるを「門」にては往々主人公に同情してをり候樣にて、時々漱石氏でない樣な心持も致し候。さうだから惡いといふ譯にはこれなく候へども、氏の特長が十分に發揮された作ではないと存候理由を申述候のみに候。

全くの個人的な好惡のみにて、餘白を瀆し候ことも如何と存候、御取捨御隨意に願上候、草々。

新刊批評

△幻影と夜曲

秋田雨雀著　新陽堂發行

戯曲五篇、小説五篇を收めてある。就中戯曲『權三の死』『市のマホメット』小説『おそのと貞吉』が、さま〲な意味に於て際立てゐる。新しい戯曲の運動がやゝ形をなしてから已に數年になるが、まだ新運動相當の効果は擧つて居らぬ。戯を書く人も多いし作物も澤山あるが、何時も失望の仕通しだ。新脚本のイタにのる等といふ事は到底も期待されない下手揃ひの俳優を持ち扱つてゐる日本の現劇壇の事であるから、隨分變妙な劇も見せられた。凡て致し方がない。唯此等の中にあつて、何處までもヂミに着實に隱者の樣に自分の道を踏んで行かうとする秋田君の努力は、その態度に、その製作に現はれて、常に若い劇壇の重鎭である。場當りをせず、割據時代の奪掠をせぬ君の一方ならぬ人格本來の苦心は此の簡潔な一篇に現はれてゐる。力の極めて散慢な現劇壇に於ける秋田君に對する注意は、更に〲深められなければならぬ。(金七十錢)

△牧水歌話

若山牧水著　文華堂發行

現今歌壇の混沌として捉はざる中にあつて、最も特色を失はず、尙近代青年の心持を表白し同感せしめるのは、何といつても若山君である。君が持つてゐる色濃い寂寥は、此頃少しくその周圍の寂寥と同色相失ひ初めたやうであるが、君一人として見れば、興味は昔に變らない。牧水

君も道々と變つて行くのであらう。それが只管待たれる。此書はさうした有樣にある君が君の周圍に向けられた靜かな注意の表白てある。柴舟晶子、夕暮、諸氏の歌及若山君自身の歌の評釋、時折の感想斷片等がある。(金八十五錢)

△哲人カアペンター

石川三四郎著
東雲堂發行

印度風の草鞋も作り、車力馬方もやり、芋掘も上手、積肥もやり、天文學にも指を染め、ホイットマンの無韻詩も作り、文明を否定し、進化論を無價値とし、音樂繪畫も嗤り、ドラマも作り、そして超意識的自然觀を說く。現代、殊に都會人の讀物としては面白からう。著者が考へてゐるより以上に愛讀者は多いであらう。蘆花氏の序、尙江氏の跋がある(金八十錢)

△新氣運

伊藤證信著
丙午出版社發行

主張、告白、人物、評論、問答の四篇に、凡て著者が無我愛の信仰の內容を知らしめやうとしてある。信仰の表白といふものも數多いが、此書等は、熟讀されゝば、可成容易く心に入つて來る性質を持つてゐるやうてある。書中、告白の篇に於て、著者が信仰、乃至研究の變遷經路を語る邊が特に面白くもあり首肯される點に富んでゐる。(金八十錢)

△碑碣法帖談

樋口銅牛著
玄黃社發行

前揭題及之に附錄として、孫過庭書譜、和漢歷代法書がある。書に對する鑑賞といふ事は、狹いながらにして中々に根强く、又興味の深いものである。現代人の書に對する嗜好は、此著者が考へてゐるとは、寧ろ正反對の方面からであると思はれるが、此差違に此書の提供さるゝ點に於て何の障りもない。收められた三書共廣く世に知られてゐて、而も一方手に入らない性質のものだ。凡そ字を書くといふ程のものゝ見逃してはならぬ書物だ。(金一圓五十錢)

△南半球五萬哩

井上圓了著
丙午出版社發行

南球往航日記、濠洲紀行、南印度洋船中日記、英國行日記、北極海觀光日記、歐洲大陸紀行、南米行太西洋橫斷日記、南米東部紀行、南米南部及墨士古紀行、太平洋歸航日記、世界周遊再見、の十一篇之に約五十枚の珍しい寫眞が挿んである。(金九十錢)

△新謠曲百番

佐々木信綱校
博文館發行

俳人蕪村の戲書と考證せらるゝもの、普通の謠曲文體で、脚色も從來のものが含まれてゐる。此を彼に比較して見ると、文體が簡勁平易で脚色に新味が加はつて居る。節付も悉くあるといふ事だ。作者、年代等は凡て不明であるが、珍品であるだけでも價値だ。謠曲名寄對照表が添へてある。(金八十錢)

△美人探檢

黑法師著
東亞堂發行

獨身で容貌の醜い栗本といふ博士が、大勢の從僕をつれて、亞剌比亞の內地探險を企てる。そこで種々な傳奇的な神仙談めいた事がある。何れ粉本もあつたらしいが、句々章々興味が充實してゐる。かういふ風のたゞ面白いものを書くには、黑法師君は特にいゝ筆を持つてゐる。材料も珍らしいし、ローマンスとして先のわからぬ面白味は實に豐富だ。(金一

圓四十錢）

△赤裸の人　堺枯川譯　丙午出版社發行

ジャン・ジャック・ルソーの「赤裸の人」が世界にある自傳の中で、最も傑出したものである事は知らぬものがない。殊に此譯文は、原文にも、懺悔といふ事にも適してゐる。ルソーの「告白錄」の讀むべくして廣く讀まれなかつた今日、此譯文の出版の利益は幾多の敎訓的な讀物とは、とても比較にならない。（金九十錢）

△最近の小說家　生田長江著　春陽堂發行

漱石、鷗外、花袋、藤村、鏡花、秋聲、青果、の七氏に關する評論。よく理解してある。こゝが此書の價値だ。新しい藝術的な人物評論といふ慨がある。就中花袋、藤村二氏に關するものが到り盡してもゐるし、有益な文章である。若い文學愛好者等に良質の暗示を與へる事の多いものと思ふ。（金二十五錢）

△死の方へ　田山花袋著　春陽堂發行

「死の方へ」「幼きもの」の二篇。前者は一度本誌に掲載された。「死の方へ」は最近の同氏が瞑想の一高頂を示すもので、こゝに「幼きもの」と對照して讀ませたのは一層面白い。此集はよく氏の最近消息を語るものだ。（金二十五錢）

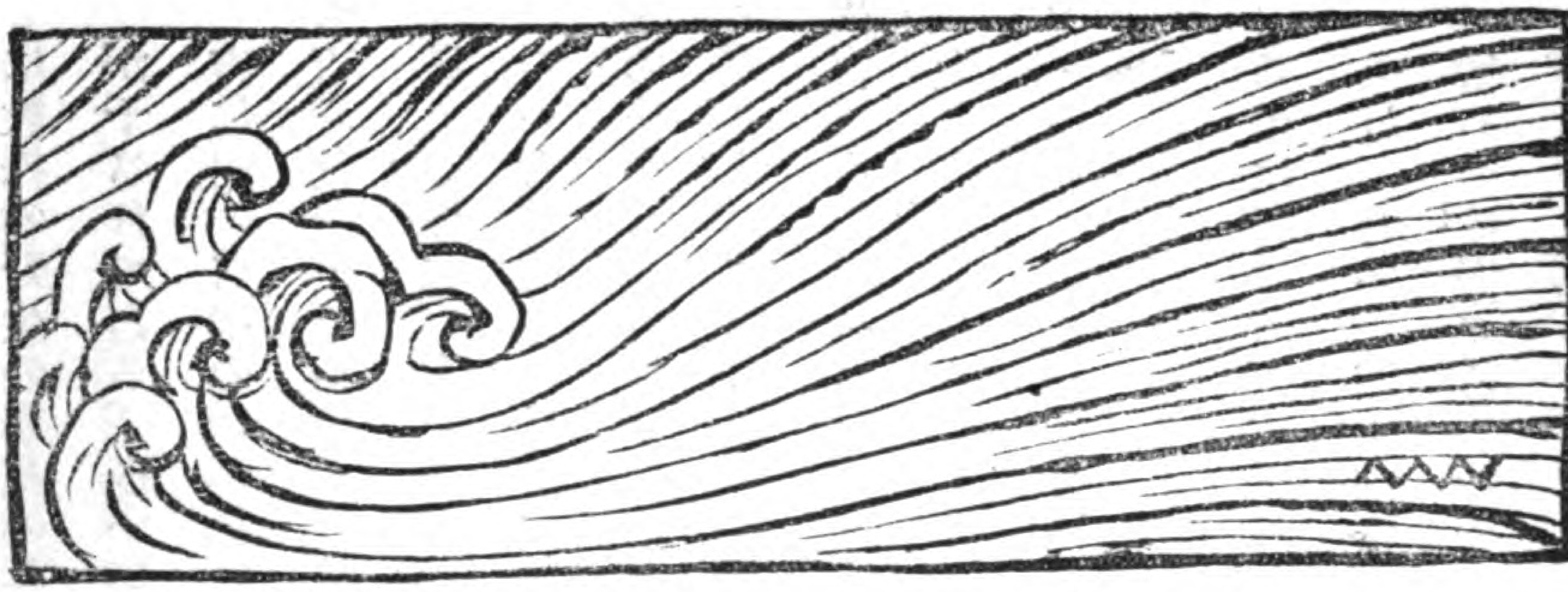
△賣笑婦研究　市場鴨村著　嚴松堂書店

賣笑婦、墮落の徑路、救濟策を說いたものだ、可成に調べてある。が賣笑婦研究とはもつと大きな問題であるまいか。物足らぬ節が多い。（金六十五錢）

△黄昏に　土岐哀果著　東雲堂發行

修辭、句調共に未成品たるを免れぬけれど、尚ほしかすがに輕々讀過を許さぬものがある、それは内容に於て甚だ淡き刺激の、而かも刺激は矢張り刺激として何人の感覺にも觸るゝものを現に寫し止めた點にある作者と異なる詩法を持つ人にも此種の作風が行はれ行くなら一道の新空氣が今の歌壇に漂ふ事と思ふ。（定價金五十錢）

春期大附録



白壁

正宗白鳥

場所。中國の海岸の小村

人物。相川久吉

妻　さと

母　せき

濱田仙次（相川父子と懇意な近村の資産家）

鶴見平造（村の青年、久吉と同窓の友）

その父才平（魚問屋）

旅藝人、村の人々

時。晴れた秋の午後から夜

上（午后）

奥行の深い古びた田舍家の緣側。その前の庭とも云へぬ狹い荒れた空地

は數株の野生の菊花のみて色取られてゐる。張物板が縁側の片隅に立掛けられ、刻んだ大根や芋などが干されてゐる。低い垣根の直ぐ外は海近い通路て、さま〴〵の村の者が通つてゐる。空地から奥の方に斜に白壁の倉が見えてゐる。

久吉。（色の黒い小柄な見榮えのしない二十四五の男。黒つぽい兵子帶を締めてゐる）は縁側に腰掛けて、眩しさうに空を見上げながら、巻煙草を吸つてゐる。二三人の農夫や漁夫が垣の外を通り拔けたがその一人は此方を見て、輕く挨拶して行つた、久吉は氣付かぬ風て、矢張遠くの方を見てゐた。と、その後から澁紙包の荷物を擔つた男が現はれたが、立留つて、

×。「一寸お尋ね申します。鶴見才平さんと云ふ家はどの邊て御座いませう」（高い聲で訊く）

久吉。（その方へ目を向けて）「鶴見の家かね。それは此處を三丁ばかり行つて、右手の角の家だ。新しい大きな家だから直ぐ分るよ」

×。「有難う御座います」

その男が行過ぎると、直ぐ後から葛籠を載せた荷車が來た。子供が二三人隨いて來る。車を曳いてゐるのは村の者て、話しながら一緒に歩いてゐるのは隣國の面藝役者。（麻裏草履に黒い股引て、尻をからげてゐる。四十前後の男）それを見ると、久吉は懷かしさうに垣根の方へ近づいた。村の者も足を留めて挨拶する。役者も久吉の顔を見詰めて會釋する。

役者。（愛嬌を含んて）「お變りも御座いませんか。一昨年はいろ〳〵御厄介になりました」

久吉。「……去年は來なかつたね。病氣だつたのかね」

役者。「いや。家の中に少し取込みが御座いまして。……度々お手紙を頂きましたが、つい御無沙汰を致しまして、申譯が御座いません」

久吉。「毎年極つて來る者が來ないと淋しいよ。僕なども子供の時分から、大抵毎年君の顔を見てるね」（感じを籠めて）

役者。「御土地ぐらゐ贔負にして頂く所は御座いませんから、私も一年でも休みますと、何だか氣に掛つてなりません。……今年も矢張此方のお宅でお邪魔になることと思つてゐましたら、今度は別だそうて御座いますな。しかし、今晩は是非お出掛けなすつて下さいまし。後幕も新奇に拵えましたし、變つた面白い仕草も御覽に入れます」

久吉。（親しげな口調で）「さうかい。何をやるんだつたな。今少し前に桀次が觸れて廻つとつたが、うつかりしてゐて聞かなかつたが、何だつたかね」

役者。「藝題ですか。今晩は八陣に堀川。それに千代の御殿か何かやらせて頂く筈になつて居ります」

久吉。「毎年同じ者だね。偶にはもつと變つた面白い者はやれないものかね。僕は君の八陣は三度も見てるよ。子供の時分には君の親爺のを幾度も見てるし、……」

役者。「しかし、鬘も衣裳も随分新奇に買込んだんですぜ。私が工夫して拵へさせたのも御座います」

久吉。「どんなのだい。一寸見せて貰えないかね。」（荷車の方へ目をつける）

役者。（笑ひながら）「今夜彼家でゆつくり御覽下さいまし。途中で商賣物の玉手箱を開けちや、手品の種を明かすやうですから（と、珍しさうに此方を見てゐる子供を顧みて）鬼が出るか蛇が出るか、どんな別嬪が飛出すか、今晩のお樂みにして置きませう（と、垣根を離れて）此方の御隱居樣も相變らず、どれか語つて下さるんでせう」

久吉。（不快な面持して）「これで語り手次第で君の藝も演り難いだらうな。方々廻つてゐると隨分下手な奴に語られて困るだらう。しかし何も商賣だ。まあ、御機嫌取つて喜ばせときなさい」

役者。（笑ひながら）「いや、御當地は皆樣が御熱心ですから、張合ひが御座います……いづれ明朝は御挨拶に一寸御伺ひ致します」と行過ぎる。

子供等は何か囁きながら隨いて行く。久吉は後を見送つてゐる。と、おさと（十八九の色白の女。手拭をかぶり赤い襷を掛けてゐる）横手より手紙を持つて來る。

さと。「貴下（と、後から聲をかけて手紙を渡して）先つきから濱田の叔父さんが見えて居ります」

久吉。「さうかい。早く來たね。此方へ來て貰つて呉れ」（緣側に腰掛けて、封筒の裏を見ながら封を切る）

さと。「それから、あの今而藝に幾らか寄進をして呉れつて云つて來ました。幾らぐらゐ包んでやつたらよろしいでせう」

久吉。「斷はれ〳〵。今時そんな詰らないことに錢一文も出せないよ（と、強く云つて、手紙を讀みかけたが）しかし、おれの家だけ出さない譯にも行かんだらうな。お母さんに相談して幾らでもやつて置け。

どうせ見に行きやしないが……」

さと。「でも、お金を出すほどなら、見に行かいては損ですわ」

久吉。「ぢや、お前だけ行きたけりや行け。あの家でやるのに、おれは行つて見たつて面白くはない」（次第に手紙の中に引込まれて、俯首いて目を凝らす」

さと。（行きかけて手紙の方を見て）「まあ、長い手紙だ。その人は何を云つて來たんでせう（と、氣遣はしさうに訊く）また借金の催促ぢやないんでせうか」

久吉。（顔を上げて微笑して）「お前は手紙さへ來りや心配してる……しかし、おれにだつて偶には氣持のいゝ手紙を寄越す奴もあるんだよ」

さと。「それだと、私も安心ですけど、郵便の聲のするたんびに、私胸がドキッとするんですよ」

おさと退く。鶴見才平（五十歳位の色の黒い頬の痩せた、頭の禿げかゝつた男。老人染みた衣服を着てゐれど、角帶を締めて前垂を掛けて、舞臺へ現れる他の村の者よりも、氣が利いてゐるらしく見える）白壁の見える方の道から出て來て、注意して家を見ながら垣の外を横切つて、ふと久吉に目を付けて「今日は」と聲を掛けたが、久吉は手紙ばかり見てゐて氣が付かない。才平は行過ぎる。久吉は手紙を封筒に收めて考込む。

濱田仙次（五十近い頑丈な男。紋付の羽織を着てゐる）「久吉君此方かい」と云つて、縁側の障子を開けて、

仙次。「今日は馬鹿に温い。風がなくて海も油を流したやうに靜かだ。何時來ても此處は眺望がいゝ(と、海の方を眺めてから、端近く座つて)先日中の疲れは癒りましたかい(と、久吉の顏を注意して見て)少し血色が惡いやうですな」

久吉。「どうもまだ心が落着かないのでブラ／＼して居ります。……今日お出で下さらうとは思ひませんでした。お忙しいのに毎度御迷惑を掛けます」

仙次。「いや、私も氣掛りぢやて、一日も早くと思ひましてな。君のお手紙はなくても、どうせ最一度は來る筈であつたのですし……それはさうと、先日荒方極りを付けといたのに、また大將が無理を言出したと見える。どうも困つた人ぢや。假りにも親子となつてゐながら、さう人情を踏付けちや寢醒めが惡からうと、私は思ひますがな」

久吉。「それは何をしやうとも先方の勝手だから仕方がありませんが(と、俯目で萎れた聲で云つたが、次第に興奮して)しかし、當然私の所有となつてゐる土藏までも道を塞がれちや困りますからね。御承知の通り、二軒の家を籤引で分けて、地所も眞中から二つに分けたので、土藏の中ほどが堺目になつてゐます。ところがどんな量見だか、二三日前に親爺が自分であの堺目に繩を引いて、竹垣を拵えかけてるんです。垣が出來れば土藏の入口はすつかり塞がれて、此方からは入れなくなるんです。無論入らすまいと思つてあゝしてるんでせうが。……一體あの土藏は私の家の屋敷續きだから、地所は分けても、土藏だけは此方で使用することに話が極つてるんですが、あゝされた日にや、入口を新奇

に造り變へてもしなければ、土藏は何の役にも立ちません。ですから、二三日前に使をやつて、入口だけ開けて貰ふやうに話して見ますと、おれの地所へ入るやうにして呉れ、垣がないと不用心だからと云ふんです。しかし空地なんだから不用心も何もないんだと思ひますがね。……兎に角ほんの通り路だけ開けて貰へばいゝんですから、どうか貴下から親爺にその譯をお話しなすつて下さい。」

仙次。(呆れた様子)「成程。あの人は旋毛曲りの分らず屋ぢや。自分の方で土藏を横取りしようと云ふのなら、まだしも譯が分つとるが、自分も使用しなければ、人にも使用させんために入口に垣をつくるなんて、何と云ふ量見だらう……よろしい。これから行つて私が話をつけて上げよう。そんな無法な事があるものぢやない」

久吉。「どうぞ。お願ひします。貴下でもなければ、外の人の云ふ事は親爺は耳にも入れんのですから、尤も今土藏の中には何も入つてはゐないんです。刀でも道具でも大抵親爺が賣つてしまつて、古い書物やがらくたが少し殘つとるばかりです。しかしあの土藏は相川家を興した先祖が建てたので、あれだけは、祖父の時分の大火事にも燒けなかつたんださうですから、いくら朽ちても私の家の者として保存しときたいんです」

仙次。「それはいゝ事ぢや。私も昔話に聞いとるが、當家の何代目かの興助と云ふ人が、初めて瀬戸物を上方へ賣出した時分に、商賣物を入れとくために、あの土藏を建てたのだとか云ふことです。その人

が一代に隨分儲けたんぢやさうですぜ。先づ當家の中興の祖とでも云ふんだらうな。……それが君のお父さんの世になつて、かうなつてしまつたが、これからは君の世だから、大に奮發しておやりなさい」

久吉。「えゝ、それはやつて見ます。一生懸命やつて見ます。（興奮した口調で）五六年の間にはどうかして借金を拂つて、昔通りに回復して見せます。先日貴下の仰有つたやうに、今の場合離れても二階でも、不用な所は崩して、家を縮めても構ひません。母が何と云はうとも、家の格式をぐつと落して、腕一本の貧乏人になつて、これからやり直します。しかし、あの土藏だけは、たとへぼろ〳〵になつてゝも保存しといて、何時か私の家の運が芽を吹き出した時分に、壁を塗り直して蟲の喰つた柱も取換へて充分に修繕します。母の話を聞きますと、昔白壁の珍しかつた時分には、あの土藏の壁が沖からでもよく目に着いてたさうですよ。舟が島の角を廻つて入つて來ると、あの土藏がこの村の目印のやうに一番よく目に着いてたさうです（その白壁の方を顧みながら）私一人のためにも、あれはいろんな紀念になつてゐます。小さい時分にあの中へよく押込められたし、大きくなつてからは、自分でよくあの中へ隱れたのですよ。家の中で厭な事を見たり聞いたりするのが堪へられなくなると、あの中へ逃げて行つて、戸を締めてしまつて、金網の窓の側で書物を讀んだり、海の方を見たりしてゐました。　三ヶ月もつゞいて町の學校へ行つてると、必ず何かの口實で親爺に呼戻されて、家の詰らない用事に追ひ使はれるから、私は藏の中を學校のやうにして、隙を見ちや、彼處へ入つて勉強してゐま

した。……いや、彼處てはいろんな事がありました。金網の窓から一度恐ろしい厭な者を見ましたよ」

仙次。「ふゝん(相手の言葉には心を留めず、その顏を見詰めながら考へてゐて)君の人相を私が判斷すると、この二三年が大事なところだ。今の中用心して間違つたことのないやうになさい……かうして見てると、人相の上から、君は九州て死んだ實のお父さんよりも、此方のお父さんに似て來てるやうに思はれますて」

久吉。「何故てせう、それは(氣味惡き顏付して)私はどちらの父にも似たくはありませんよ。今てもぼんやり覺えて居りますが、實の父の病窶れた顏は、懷かしいよりも恐ろしい氣がします。よく子供の時分から、死んだ父に似てゐないと云はれてゐましたが、私は似てゐないのを悅しいと思つてた位てした。そして此家の親爺もよく、お前はいろはも知らん時分からこの家て育つたのだから、おれがお前の本當のお父さんだ。おれの後嗣はお前の外にないんだと云つて、私もその氣になつてゐたんてすが……しかし、今となつて見ると、私には實の父も義理の父も、父と云ふ者はないんてすね。何方の父に對しても懷かしいと思ふことがないんてすもの。そして結句父のないことを望むやうになりました。先日親爺に緣を斷たれて別れた後て、一晩獨りて考へて見ましたが、私がこれまて親爺から受けた者て、一つとして幸福な事はなかつたと思ひますよ。二十年間あの父の顏を見てゐたゞけても、どの位私の心は傷つけられたか知れません。何故父はあんな相をしてるんてせう。……あの藏の中に、與助といふ人の繪像と、曾祖父の繪像とがありますが、どちらも豐かな氣持のいゝ相をして居りますよ。

あの系統を引いて居りながら、父だけは何故その幸福な相を受繼いてゐないんてせう」

仙次。(微笑しながら、煙草の煙をゆるく吹いて)何代も續いてる間にはたまには屑も出るだらふ(と輕く云つて)しかし、お父さんも以前はあゝでもなかつたんてすぜ……矢張魔が差したやうなものだな(と獨言のやうに云つて首付く)

久吉。「魔が差したのかどうしたのか。私はこれまで親爺の心が些とも分りませんてした。幾度も借金の使ひにやられたり、幾度も一緒に舟に乘つて方々の島へ行つて見たりしましたが、何のために親爺は奔走してるのかよく分りませんてした。自分でも明ら樣に心持を私に打明けたことはなかつたのてす。そして、私の方から訊きたくつても、あの顏を見ると、氣臆れがして、とても訊く氣にはなれなかつたのてす。だから、何時も只云はれたまゝに默つて從つてゐたのてすが、默つて從つてた揚句に、親爺はあの通り不意に母と私とを殘して、自分だけ出て行くやうになつたのてす」

仙次。(相手の話を抑へるやうに)「分つてる〳〵。私にもよく分つてるから、その後は話さん方がよろしい。家のためには、一日も早く大將が別れて呉れた方が却つて得策だと思つたから、私も強いて留めはせなんだが、いづれゆつくり君の相談相手になつて、この後の方法を極めやうと思つてゐます。帳簿の整理はまだやつてないんてすかい」

久吉。「えゝ。ゴタ〳〵してゝそれどころぢやなかつたのてすよ。これまで親爺から何も聞きませんてしたから、一寸調べたぐらゐぢやよくは分りません。帳面を見ても頭が混雜するばかりて、容易に見當

お付かんのですよ」

仙次。「當分は見當が付かん譯ぢや。無理はない。誰れにしてもさうぢや（と、冷淡に言つて）兎に角私はお父さんの新宅へ顏出して來ませうわい（と立掛けて）今の話は充分して見ますが、外に何か君の方て云ひたい事はありませんかな。こんな場合には得て後で苦情が出るものぢやが……」

久吉。「母は何かブツ／＼云つてるやうですが、私は外の事はどうでもいゝと諦めてゐます」

仙次。「ぢや、一寸行つて來ませう」

と、奧へ入る。久吉はまたかの手紙を取出して讀んでゐたが、やがて大儀さうに部屋へ入つて、障子際の机の前に座る。机の上や左右には帳簿や算盤などがゴタ／＼置かれてある。彼れはその一つを取上げて見ては、煩さうに直ぐに下へ置いて、かの手紙を見詰める。

母せき（五十あまりの痩せた皮膚の荒れた女。田舍びた短かい羽織を着てゐる）奧より出て來る。

せき。「仙次さんも力になつてやると、云ふてお出てたから、お前からもよう賴んで置いた方がいゝぞな（と、縁側へ出て、眩さうに空を見上げて）毎日々々いゝお天氣だ（と云つて縁側に蹲んで）納戸の方から此處へ來ると、明るうて溫かい」

久吉。（相手にせぬやうに身動きもしない）

せき。「後仕末がついたら、私も金平樣へお詣りに行つて來やうかの。留吉の催ほしてお詣りの舟が出るさうだから。… 願掛けをするばかりで、一度もお詣りせいでは申譯がない」（外を見ながら獨言のやう

に云ふ)

久吉。(尙手紙を見ながら返事をしない)

せき。(振返つて)「お前も氣が疲れたらうから、荒方極りがついたら、草臥休めに湯治にでも行つてお出でな。今お前に患はれでもしたら、それこそ大變だよ。掛替えのない身體だから、本當に大切にしてお呉れな」

久吉。「え丶。それはお母さんに云はれないでも、自分の身體は自分で大事にしてゐますよ。だけど、さう八方から、私一人を目掛けていろんな事を脊負はせちや、私は息が詰まりさうになりますから、成べく私一人を打ちやつといて、觸らぬやうにしといて下さい」(少し焦立つたやうに云ふ)

せき。「觸らぬやうにと云ふたつて、私もお前だけが手賴りだから、そのつもりでゐて貰はにやならん」(齒切れの惡い不快な聲で云ふ)

久吉。「え丶分つてゐます〱。お母さんの長い間の苦勞も心配も、私は飽きるほど見て知つてるんですから(口早に云つて立上つて)私は調べ物で少し頭が痛み出したから、氣晴らしに濱邊を歩いて來ます……帳面はそのま丶にしといて下さい。貴女が見たつて仕方がないんだから」

と、逃げるやうに庭へ下りて、片隅の木戸を開けて、外へ出掛けると、鶴見平造(二十四五歳。赤黑く逞ましい顏。着物は質素だが、縮緬の大幅の兵子帶を締めて、中折帽子をかぶつてゐる)の訪ねて來るのに出會ふ。

平造。「何處へ行くのだい」
久吉。「なに、一寸散歩しやうと思つて。僕に會ひに來たんかい」
平造。「急に一寸話したいことがあるから……此處で話してもいゝんだが」（と、母親の方を眩しさうに見上げる）
久吉。「ぢや、濱邊を歩きながら話さう。……汐も退いてるから、乙女岩まで行つて見やうと思つてたんだ」

二人は並んで歩きながら見えなくなる。おせきは氣拔けのしたやうな顔で外を見てゐる。と、おさとは張物を片付けに來る。

せき。「平造と云ふ男はこの頃、何を話しに度々家へ來るのだらう。何時も高慢な顔をして、私などには碌に挨拶一つせいで。久吉もあんな男とは友達交際はせん方がよさゝうに思はれるがな。友達が惡いと、自然に風儀が惡うなるんだよ」
さと。「でも、平造さんは元氣がよくつて面白い人ぢやありませんか」
せき。「いくら面白うても、あんな男と交際つてゐては、他聞が惡いでな。……あの子の家では、この家を家屋敷とも買取りたいと狙つとるさうだから、その話で度々久吉に會ひに來るのかも知れん（と考へて）お前はそんな事を久吉から聞かなんだかい。あの子もこの頃は私に隱立てをしとるから、どうも疑てならんのだよ」

さと。「そんな話なら些とも聞きませんわ。」

せき。「して見ると、噂だけだらうかい。少し落目になると、世間はいゝ加減なことを云ひたがるものぢやてな……だけど、久吉が萬一どんな量見にならうとも限らんが、私はこの家を人手に渡す氣には、どうしてもなれんのだよ。もう先は永うないんだから、私も死なれた祖母さんのやうに、この家の座敷て息を引取りたいと思ふとる……いくら貧乏しても、二階を壞すの屋敷を縮めるのと、そないな他聞の惡いことはしたうないよ。お父さん一人は人間外れのことをしようとも、私が死なれた祖母さんは慈悲善根を積んて、神佛の信心をして、春秋のお彼岸には村中の困つてる者に施しをしてるんだから、天道樣は決して私達を見捨てはなさるまいよ。……ほんの今一時の辛抱だから、賣るの壞すのと騷ぐには及ばんと、お母さんは思ふがな。まして、才平などに家屋敷を讓渡すなんて、聞いたゞけても私は氣色が惡うなる。お前も聞いてお出てだらうが、才平は若い時分にや隱亡をしとつて、家の座敷へは上れた身分ぢやなかつたのだよ。今こそお金の威光て、何處へでも出しやばれるやうになつたけれどな、昔はこの村の寄合ひにも出られはせなんだのだよ。……八幡樣の修繕をすると云ふて、この家て重立つた衆が相談をしてた時に、あの男が呼ばれもせんのにやつて來て、座敷へ押上らうとしたから、お父さんが怒つて、突出すやうにして追出したことがあつたよ。……あの時才平が恨めしさうな顏をしとつたのを、私は今ても覺えとるぞな」

さと。「その話は一度聞いたことがありましたが、お父さんも隨分酷い方ぢやありませんか」

せき。「だつて、お前、その時分は今のやうに風儀が惡うなかつたから、素性の惡い者は爪彈きをされとつたのだよ。いくらお金を出すと云ふても隱亡の寄進でお宮を建てちや、神樣が穢れるてないかな。……あの家でも今こそ漁船の五六艘も持つやうになつて幅を利かせてるけれど、昔を思ふたら、平造なぞが久吉を友達呼はり出來た義理ぢやあるまい」

さと。「だから、誰れが行つて頼んでも、黒川さんで娘を嫁に呉れないんでせう。氣の毒ですわね」

せき。（嘲けるやうに）「そりや呉れんのが當前だよ。いくら今零落れたつても、昔の大庄屋の家柄だもの。望む方が間違つとるがな」

さと。「……お金があればいゝてせうのにね」

せき。「さうは行かんよ。お金ばかりで縁付かれるものかな」

さと。「てすけど、あの人のお嫁さんになる人は仕合せだと思ひますわ。平造さんは顔は剛いけれど、お腹の中は親切な人ですし、それにお金はどつさりあるし」（無邪氣に云ふ）

せき。「人の腹の中が、お前、當てになるものかな。私には子供の時分から育てた久吉の腹の中さへ分らんてないかな」

さと。（笑ひながら張物を剝かしてゐる）

せき。「久吉はこの四五日、私の側へお寄付かんし、話を仕掛かても身を入れて聞いては呉れん。お父さんが出て行くまでは、あんな風な男ぢやなかつたんだが……何を考へとるんだらうな……お前も知つ

てお出てないかい。あゝして、お父さんに置去り同樣にされたんだから、私達三人は助け合うて、一生懸命に身代を盛返して、見せつけてやるやうにせいては腹が癒へんてはないかの。……お父さんの家は私達の恨みだけても、この先よくなる氣遣ひはない（と、ふと顏に力を入れて憎々しさうに云つて）自分の實の子がないと淋いと、いゝ加減な言拔をして、あんな素性の惡い女に引掛つて、先祖から人に後指一度差されたことのない家に泥を塗るやうなことをして、あれて末がよかつたら、世の中は暗闇ぢや。道も法もありやせんがな。……鬼子ても生れるか、三ツ口ても生れるか、滿足な人間の姿をした子が生れやう筈がない」

さと。（氣味の惡さうに）「そんな赤ん坊が生れたら、どうするんてせう。お松のやうな髮のない子を見てさへ、私ぞつとしますわ」

せき。「あれも父親の心掛けが惡いから、罰が當つたんだらうよ（と云つて、目を顰めて沖の方を見て）釣舟が二三艘戾つたやうだから、お前は晩の副食物を買ひに行つてお出てな。私達は何てもいゝけれども、仙次さんには御馳走をせにやなるまい。これから度々面倒を掛けるだらうから、粗末にして機嫌を害ねちやならんてな」

さと。「ても、あんなお金持には御馳走の爲樣もありませんわ。貧乏な內輪を見られて極りが惡いやうに思はれますよ。あの人の家てはさぞいゝ生活をしてゐなさるんてせうから」

せき。「あの家にしてもほんの此の頃のことだよ。あの人も子供の時分にや、冷飯草履を穿いて、この邊

を通つて、五里もある所を日歸りで商賣に行つとつたのだよ。たび〳〵お辨當を使つとつたが、何時も握飯二つと極つとつて、見てゐても可愛さうだから、三度に一度は私がお膳を出して上げてたのだよ。その時分のことを思ふとるから、あの人にしても、私の前ぢや、些とも威張つた風をせんのだがな。家の格から云ふても、昔から相川家の方がよかつたのだしな」

其處へ久吉と平造とが何か話しながら歸つて來る。おせきも目を顰めて、不快さうに見ながら、

せき。「おさとは後で、其處の菊を二三本折つて來てお呉れ。今日は與助さんの末の子の命日だから、花ぐらゐなけりやなるまい」(と云つて奧へ行く)

おさとは張板を片付けて入る。

久吉。「そんなに早く行くことになつたのかな。……意外だよ」

平造。「……僕は行かなくつても仕事に差支えないんだが、自分から望んで無理に行くことにしたんさ。明夜寢てる中に決心したんだよ」

久吉。「しかし面白い。僕も朝鮮へでも臺灣へでも行きたいよ。君のやうに自由に何處へでも行かれるやうな身分になりたいね」(と、感じを籠めて云ふ)

平造。(思出したやうに)「あ、それよりも黑田の手紙を見せたまへな。」

久吉。「部屋へ上つて以前の手紙を搜して平造に渡して)「これだ。讀んで見たまへ」

平造。(緣側に腰を掛けて手紙を受取つて)「玉造か。僕は去年此處を通つたよ。大坂でも此處等は邊鄙だ

ね」(と、中を披いて見る)
久吉。「黒田はあまり賢さうぢやなかつたが、何處か傑い所があるんだね。餘程い丶地位になつてるらしいよ」
平造。「さうかねえ」(考へながら讀む)
おさと、また横手から出て來て、鋏で菊を切りかける。
久吉。「おい〳〵」(と叱るやうな聲を掛けて、おさとの側に近寄り)まだ咲き切らない花をさう折つちやいけないよ。佛樣にはどんな花だつてい丶ぢやないか。そればかりの花でも、おれの慰みになるんだから、少し殘しといて貰ひたいね」
さと。(鋏を持つたま丶躊躇して)「でも、裏の庭にはもうどんな花もないんですもの」
久吉。「皆んな佛樣に供へたのかね(冷笑して)母さんは花と云ふものは、佛壇に挿して見るものだと思つてるね。お位牌をお供にして花見をしなければ滿足しないんだから驚くよ」
さと。「では、これだけにしときますよ」(二三本細いのを切つて行く)
平造。(手紙の蔭から、二人の方を流し目に見てゐたが、また讀みつゞけながら)學問は出來ても出來なくても、商人としては、黒田のやうな辛抱強い人間はい丶のだらう。……それて、君は黒田を手賴つて行く氣になつてるんかい」
久吉。「いや、まだ極りどころぢやないよ。僕の方から黒田に賴んでやつたぐらゐだから、先方て使つて

呉れるのなら、無論行きたいことは行きたいんだがね……氣紛れに手紙をやつたゞけて、些とも當てにはしなかつたのに、本氣で世話をしやうと云つて來たんだから、何だか天が僕を導くんぢやないかと思はれてならんよ。それに君が急に決心して、今夜朝鮮へ出掛けると云ふのを聞くと、急に僕だけ何時までも此處にじつとして居られないやうな氣がし出した。……いつそ、君のお父さんの望通りにこの家を賣つてしまはうかね」

平造。（手紙を置いて）「しかし、それはいけないよ。……何だか、君のお父さんの方でも近かに古道具の競賣(せりうり)をするだが……」

久吉。「へえ。親爺はもうそんなことをするんかね……」（呆れた樣子）

平造。「だから尙更だよ。……今僕が注意した通り、君は飽までこの一家を維持して行かなくちやならんのだからね。……僕にしてもさ。たとへ一生この村で暮らすにしたつて、君が今までかうして住んでゐた部屋へ移つちや、友人として氣持が惡いだらうぢやないか。何だか金の力で君を追出して家(うち)を奪つたやうでいけないよ。そりや、親爺は何百年と傳はつた村の名家の家屋敷を買ふと云ふことが、自慢にもなるだらうし、僕を此處へ住せたい氣になつてるんだから、少々價が高くつても讓受けるつもりだらうがね。……しかし僕はそれが些(ちつ)とも望ましくはないんだ。第一この村に住む氣は全くなくなつたんだもの」

久吉。「だが、こんな古いぼろ〳〵になつた家を、高く買取つて呉れる人は外にありやしないよ。修繕費

だつて容易ぢやないからね。……君のお父さんなら、一度思込んだら、金目を構はないだらうがね」

平造。「だから、僕が豫め注意しとくんだよ。親爺がたとへ話を持出しても、その話に乘らないやうにして呉れたまへ。その代り、僕が自分の力で儲けたら、彼地から君に宛てて金は送ることに堅く約束しとくよ。これが僕が出立間際の遺言見たやうなものだから、よく覺えといて呉れたまへ。一體君の家を買取つちや、親爺のためにもよくないんだよ。(意味あるらしく云つて、)それに君はとてもこの村を出て行く譯に行くまい。妻君はあるんだし……」

久吉。「それも決心一つさ。こんな機會に出て行つて、自分の腕で働いた方が、却つて僕の家のためになるかも知れんよ。第一僕はこんな古ぼけた家にゐると、次第に身體が腐つて來るやうに思はれる。僕はこの家に貰はれて來てから、二十年の間新鮮な空氣は一度も吸はないで育つたやうな氣がしてならないよ。親爺はあの通りだらう。一生極つた職業はしないで、只先祖の殘した財産を荒らすばかりで愚圖々々してゐて、終ひにはあんな卑しい女と別居するやうになつたんだらう。母は母で先祖の位牌や墓ばかり大事にして、親爺の不始末を只の一度も堰止めることはしなかつたのだらう。(かう云出すと、次第に言葉に熱を帶びる)そして、僕はこれまでこの腐つた空氣の家を思切つて出ることが、どうしても出來なかつた。矢張僕が意氣地がなかつたんだね。……仕方なしに土の藏中を隱れ場所にしとつたのだが、あの中にはあれを建てた時分からの埃が溜つてゐたんだからね。親爺の自慢にしてる拜領の御紋服や古い書物もあるけれど、先祖代々の黴臭い匂ひがしてるよ。僕の健康はどれほど害はれ

たか知りやしないよ」

平造。「君は何時もそんなことばかり云つてる。(微笑して)しかし、君の家は衰えても、先祖の名殘があるだけがいゝ。村の者の頭にも君の先祖の影が殘つてるからいゝよ。僕の家にや先祖の奥床しい遺物と云つちや、些ともないぢやないか(次第に感情を高めて)たとへ、君のお父さんが少々酷いことをしやうとも、世間ぢやまだ大目に見て許しても呉れるけれどね、僕の親爺のしたことなら、一寸した思ひ違ひの失策だつて、決して許して呉れやしないよ。……結婚するにしたつてさうだからな(と、聲を沈ませて)……だから、僕はいつそ冒険をするつもりで、漁船に乘つて、半年ばかり朝鮮へでも行つて見やうと決心したんだよ。親爺にや漁が濟み次第歸るやうに云つといたけれど、甘く當りや、それを資本にして何處ででも一人で相當な稼業をやつて暮すつもりなんだ。こんな村で村の奴の鼻息を窺つて小さくなつて一生暮らすやうぢや、僕は生きてる甲斐がないやうに思つてるよ」

久吉。「それはさうさ。僕も君の決心には同感するよ。……しかし、舟の五艘も仕立てて、大海へ乘出して行けるだけでも羨ましいよ。僕なんか、黒田を手頼つて、大坂まで行くにしたつて、今に今旅費を拵えることさへ困難だからね」

平造。「なに。僕の境遇に比べりや、君の方がまだしも幸福だよ。當分苦んでゐたつて、努力すれば、またいゝ運が向いて來るだらうが、僕はどうしたつて駄目だよ。世間態のいゝ家へ生れ變つて來なきや、僕の力でどうすることも出來ないんだもの」

久吉。「なに、さうぢやないさ（爭ふやうな口調）素性や門閥はどうだつていゝよ。無敎育な村の者がいくら影口を利からうとそんなことは構はなければいゝと思ふ。君も不斷さう云つてるぢやないか」

平造。（萎れた聲で）「無論その覺悟はしてゐたんだがね……」

久吉。（相手の目顏に注意して）「ぢや、あの緣談の破れたのが、まだ氣に掛つてるんかね（と、解しかねるやうな顏付をして）だつて、あの女はさうよくはないぢやないか。あんなのなら外にいくらでもあるよ」

平造。（手を振つて相手の言葉を止めるやうにして）「……その話はもう止して吳れたまへ。……だが僕はもう結婚なんかしやうとは思はないよ」

久吉。「それもいゝさ（と、冷かに云つて）兎に角、君は財產はあるし、自由に働けるんだから幸福だよ。そんな逞ましい手足をしてるだけでも羨ましいね。その體格なら、波風を淩いで奮鬪されるだらうがね。僕なんか自分が生れた家でもないこんな家のために、一生押潰されてしまうんぢやないか。僕の方が君に比べて、餘程不幸な人間だよ」

平造。（顏を柔げて）「まあ、そんな不幸の優劣なんか、理窟の言合ひは止めにしよう。……兎に角僕は今夜月の出る時分には、沖へ出て行くから、これがお別れだよ。何時また會へるか知れないが、行先は知らせられたら知らせるから、さうしたら君もたまには手紙を送つて吳れたまへ」

久吉。「いよ〱君もこの村を出て行くのかなあ」（感慨を含んだ調子）

平造。「しかし、今云つた僕の決心は秘密にしといて呉れたまへ。知つた者に見送られるのも厭だから。……僕が乗る舟は一艘だけ離れて、早く漕出す手筈にしてるんだよ。幸ひ今夜は面甕だなんて騒いでるから、誰れも氣が付かないだらう(立上つて)奥様にはお目に掛らんから、後でよろしく云つて呉れたまへ」

久吉。(も立上つて縁側を下りて)「別れるとなると、何かまだ云ひたいことがありさうな氣がするよ」

平造。「僕もさうさ。村中で打明話をしてゐたのは君一人だから、別れる前に一晩ゆつくり話したいがね、急なことだから、そんな暇もないよ。……今夜も決して見送らないやうにして呉れたまへ」(垣の外へ出る。久吉も隨いて出る)

平造。「ぢや、君も身體を大事にして、今度會ふ時には目出度い話を聞かせて呉れたまへ」(と挨拶して、名殘惜しさうに奥へ入る)

久吉は茫然として見送る。平造の姿の消えて後は、華やかな夕日に照らされた土藏の壁を見詰めてゐる。と、向ふから、村の若い男が近づいて

若い者。「お宅へ拜借に參つたんですが、面甕に使ひます三寶と銚子を貸して頂けますまいか」

久吉。「そんな者が家にあるか知らん」

若い者。「御座いますさうで。大旦那が御當家にあるからと、さう仰有りました」

久吉。「ぢや、其方へ廻つて聞いて御覧。」

若い者。「はい（と行きかけて）今夜はよろしい場所を空けときますから、是非お出なすつて下さいまし」

（と奥へ入る）

久吉は倚垣の外をうろ〳〵してゐる。と、濱田仙次、部屋の方から緣側へ出て、「久吉君」と高く呼ぶ。

久吉。（庭へ入つて來て）「大變早かつたんですね」

仙次。「や、其處にゐたんですかい。彼處は面甕騷ぎて大變な混雜ぢや。落着いて座れもせんから、肝心の話も些つと匂はせたゞけで逃げて來ましたよ」

久吉。「さうてせうね（緣側へ上つて）そして、若い衆が大勢行つてゐますか」

仙次。「いろんな男か寄つて騷いてゐますわい。高座を拵えるやら、幕を釣るやら、巫山戯るやら。……彼處から此方へ歸ると、里から寺へ歸つたやうてすぜ」

久吉。「そして、どんな男が行つてゐました？」

仙次。「誰れ〳〵だか、私はあの連中の名前を一々知らないが、あのヒョロ高い龜と云ふ男は居りましたよ。鴨居に釘を打付けてたが、馬鹿に脊の高い男ぢや。爪立したところはかれこれ六尺もありませう、な」

久吉。「へえ。あれも行つてゐましたか」

仙次。（首を捻つて）「どうも、あの隱居はあんな慰み事にばかり肩を入れたがる。村のためになるやうな事件だと、中々槓杆ても動く人ぢやないが。……（ふと氣付いたやうに）しかし、私が受合つて、土藏の

通り路は開けさせることにするから、安心なさい。先方でも、私の顏を見ると、直ぐ察したと見えていづれ明日の朝ゆつくり話をつけると云つて居りましたよ。ほんの立話をしただけぢやが、私がそれとなく索つて見ると、土藏の金網の窓から、あの別宅の中が見えるので厭がつてゐるらしい。口振りがどうもさうらしいてすわい」

久吉。(沈んだ調子)「さうてせう。親爺がまだ此處に同居してた時分にも、私はあの窓から、今親爺のゐる別宅の方をよく見てゐました。私は彼處から見た親爺の顏ぐらゐ忌はしい者を見たことがありません(と、今目の前にそれを見るやうな不快さうな顏付をして)一度親爺の方でも窓を見上げてたことがありましたよ」

仙次。(微笑しながら、穩かに)「そりや、お父さんにしても、君達にこつそり見下されてると思つたら、氣が引けるだらう。……ぢや、いつそ、窓だけは付變へることにして、垣根は取除けて貰つたらい丶てせう。さうして、先日は喧嘩腰で財產別けもしたのだが、もう日數も立つたから、これからは、何方も角目立たないで往來の出來るやうにしちやどうです。私も今日此方へ來るについては、その取做しをしやうと思つてゐたのですよ。お母さんはさうもなるまいが、君とおさとさんだけは出入をするやうにしたいものですな」

久吉。(氣のなさ丶うに)「そんな事はどうでもよろしい。……私はあの土藏がどうなつても氣に掛らなくなりました。路を塞がれやうとも、窓を壞されやうとも、何とも思ひません」

仙次。(不思議さうに相手の顏を見詰め)「何とも思はなくなつたつて、それは何故です?」
久吉。(落付いて)「貴下が彼方へお出てになつた間に、急にそんな氣になりました」
仙次。「だが、それは少し變ぢやありませんか。私には呑込めませんわい。……私のゐない間にお母さんと言合ひでもしたんですかい」(と、左右を見廻はす)
久吉。(落付いて)「いや、母とは立入つた話はしないことにしてゐます。しかし、私はこのまゝこの朽ちかけた家を回復しやうとするのは、無駄な事のやうに思ひますよ。骨折り損のやうに思ひます。父に別れてから一時力んで見ましたが、今の今、駄目だと云ふことがつく〳〵分りました。」
仙次。「何故?。今更そんなことを云つちや、君もよくないな。君が奮發して盛返さなくちや、誰れが相川家を支えて行きます?。十幾代も續いた相川家を絕やしたくないと思へばこそ、私達も及ばずながら力を添へてゐるのに、肝心の君がそう急に弱い音を吹いちや困るぢやありませんか」
久吉。(默つてゐる)
仙次。「他人が立入つて差圖がましいことを云ふのはよくないかも知れんが、しかし、君の家には近しい親類はないんだから、私のやうな者でも親身になつて、御相談に乘らうと思つてるんですぜ。(と云つて言葉を切つたが、やがて感じた調子で)これでお父さんに兄弟があつたり、君に兄弟があつたりしたら、お父さんもあんな風にはならなかつたらうが……この家にも子種がなくなつたんだな」
久吉。「親爺も歲が寄つてから、實の子が欲しくなつたんでせう。しかし、あんな血統は傳へん方がいゝ、

と思ひますよ。血統を受けないて、只この家にゐただけても、私のやうな人間が出來るんてすもの、だからいつそこんな家は叩潰して、この跡へ新しい勢ひのいゝ家を建てる方がいゝんてすね」

仙次。「君がさう云ふ氣になつて、新奇にやり出すさ。私は今度は二三日ぐらゐ逗留してもいゝから、皆んなて將來の方針を評議して見ちやどうてす。私も先日から考へてることもあるんだから」

久吉。「えゝ。」

仙次。「帳面も、私が一度よく調べて見て、借金をも拂ふ者は拂へるやうに道を付けたいものぢや（と云ひながら、沖の方を見て）これて何とか極りがついたらう、氣晴らしに一日沙魚釣りに行かうぢやありませんか。丁度時候がいゝから、沖へ出て一日浮世を忘れるのは、何よりも保養になりますぜ。……あれは一昨年の春てしたかな。一緒に釣りに行つたのは」

久吉。「えゝ、そうてす。私は海岸に育つてゐながら、釣りをしたのはあの時だけてす。だからあの時も鰒が引掛かるばかりて、碌な魚は一匹も釣れませんてしたよ」

仙次。「さうてしたかな。折角海邊に住んてゐながら、釣の樂みを知らんやうぢや話せないな。私なぞはもうあまり慾はないが、時々釣りに行けるといゝと、それだけが不足なやうな氣がしますよ。海邊へ來ると、それだけが羨ましい。今日も途中て子供が釣つてるのを、暫く立つて見てゐたのだが、只見てるだけても面白いがな」

久吉。「私も釣りても覺えとけばよかつたんてすね。子供の時分から、母が海は危いと云つて、水泳にも

行かせて呉れませんてしたから、海は毎日見るばかりて、大人になるまて、あの中へ入つて行つたことは一度もないんてすよ。だから、未だに櫓が一つ漕げないんてす。この村て櫓を漕ぐ術を知らない者は、男ては私と親爺とぐらゐてせう」

仙次。「さうかも知れない。この家は昔は船を乘廻して身代を造つたんぢやが（と、感じた調子）……君のお父さんは若い時分から舟が嫌ひて、向ひの島まて乘つてさへ醉ふんだと云つてゐましたよ。それだから、とても稼業は繼げなんだのてすわい」

久吉。（ふと耳を聳て丶）「藝題を觸れて廻つてますね。……榮次の聲はよく通る。い丶聲だ（と、獨言のやうに云ふ）

仙次。「拍子木の音は氣持のいいものぢや（と、耳を澄して、二人暫く默つて聞いてゐたが）岩浪太夫も出るんてすは（と笑つて）お父さんの淨瑠璃は暫く聞かなんだが、今夜次手に拜聽しませうかい（と立上つて）さあ。彼方て少しお母さんのお相手をしやう。君もどうてす。彼方へ行つちや」（と奥へ入る）

久吉再び以前の手紙を取上げて見る。拍子木の音近くに聞え、藝題觸れの聲もハツキリ聞え出す。

下（夜）

同じ場所。締切つた障子には薄明るいランプの影が差し、庭は明るい月の光に照らされてゐる。蟲の

音も聞える。

二十歳ぐらゐの村の男。垣根の外の片隅に寄つて、奥の方を振返つてゐる。と、其處へ女が足早に近づく。

男。「皆な出掛けたのかい。」(周圍に氣をつけて歩き出す)

女。「あゝ皆な見に行つぞな。私にも是非行けいと勸めて仕様がなかつたけれど、加減が惡いからと云ふてやう〳〵斷つたけれどな。悟りやすまいかと思ふて、いら〳〵しとつたの。」

男。「おれも心配しとつたぞ。(女を引立てるやうにして)さあ急いで行かう。……夜遊びをする奴は、皆面藝へ行つとるから、見つかりやすまい」

女。(甘へて)「私、今夜が待遠うしうて〳〵……」

二人は横手へ入る。久吉(晝間の着物に羽織を重ねてゐる)は、二人の後姿を見ながら外から歸つて來て、縁側に腰を掛ける。障子に人の影が映つる。

久吉。「おさとか」(と振向いて聲を掛ける)

さと。「はゝ(と、障子を開けて)貴下は平造さんを見送つて來なさつたの。舟はもう出て行きましたか」

久吉。「今一艘だけ出て行つたよ。おれは松の蔭に蹲んで見てゐたら、鶴見が飛乗ると、直ぐに纜を解いて、二挺櫓でグン〳〵冲の方へ漕いで出た。鶴見は突立つて暫く村の方を見詰めてるやうだつたよ。舟が早いから、見る間に島の角を廻つたが、おれは羨ましかつた。今夜のやうないゝ月夜にあんなに

して乘出したら、さぞ面白いことだらうね」

さと。「でも、あの人は何故危い思ひをして、そんな遠方へ行くんでせう。去年米吉の船が土佐の沖で嵐に會つて、未だに生死が分らんのに……」

久吉。「この村で多少身代を造つたものは、大抵そんな目に會つてるんだよ。村にじつとしてゐて、幾らの金が出來るものか。あの島を越して波や嵐に揉まれて來にや、白壁づくりの家にや住めんと、昔から云つてるんだよ。」

さと。「でも、あの人の家は、あんないゝ身代になつてるのに……」

久吉。「……あの男は一人息子だのに、親爺がよく承知したものだ。自分一人の腕で身代をつくつた人間だけあつて、元氣がいゝ（と云つて調子を變へて）若しもおれが鶴見のやうに、誰れにも知らさないでこの村を出て行くやうなことがあつたら、お前はどうするだらう？」

さと。「貴下が？（驚いたやうに）貴下も舟に乘つて遠方へ行きなさるの。まあ！」

久吉。「なに、おれは行きやしないよ。おれは鶴見の眞似をしたくつても出來やしないよ。あの島まで行くんでもビク〳〵してるぢやないか。……だけど、若しそんな事があつたらどうする？。おれがゐなくなつたら」（戯談らしく云ふ）

さと。「そんな事があつたら、私だつてこの家にじつとして居られませんわ」

久吉。「何故？」

さと。「だつて、お母さんの側に一人てゐると、何かしら怖いやうな氣がするんですもの。今夜も誰れとかの御命日だと云つて、お看勤をしてゐなさるのを聞いてると、淋しくつて仕方がありませんから、此處へ逃げて來ましたのです」

久吉。「またお看勤か。この頃は矢鱈に先祖の誰れだの、その從弟だの妹だのと、昔の人の命日を捜しちや、お看勤したりお供へしたりするのが、お母さんの道樂になつたね。しかし、お母さん相應のいゝ道樂だ。あの道樂でもなけりや日が送れまい。……お前もお看勤のお仲間入をしちやどうだい。お母さんが喜ぶぜ」

さと。「いくら喜ばれても、そればつかりは厭てすわ。私はあの聲が何故だか怖くつて仕様がないんてすの。こんな薄暗い室の多い廣い家だから、さうでなくつても、夜は氣味が惡いんてすのに」

久吉。「さうだな。舊ひ家にや床の下に代々蛇が巣を組んでると云ふぜ」

さと。「蛇が?。まあ厭な」(と、身震ひする)

久吉。「それは戯談だが、おれとお前との世になつたら、こんな氣持の惡い家は崩して、床の下に蛇がぬたくつてたら、その蛇を叩殺して掃棄てゝ、小さくつても氣持のいゝ家を建てたいものだが……」

さと。「ぢや、何故早くさうなさらないんてす」

久吉。「お前にや分るまいが、おれの力ぢや容易にそれが出來さうぢやないよ。親爺に邪魔をされたゝめに、おれにや滿足に學問も藝もついてゐないんだから(萎れた聲て云ふ)

さと。(無邪氣に)「おや、これから學問ても何てもなさつたらいゝてせう。お父さんと云ふ邪魔かなくなつたんてすから」

久吉。「いや、もうお前はおれをあまり手頼りにしないてゐて呉れ。今鶴見の舟が出るのを月の光て見ながら、じつと考へてたのだが、おれがもつと勢ひのいゝ男だつたら、今夜にも村を逃出したかも知れなかつたのだよ。こんな所に愚圖々々してゐないて、思切つてあの舟へ無理にても乘せて貰つたかも知なかつた。幾度もさう思つて見たが、矢張後髮を引かれるやうに此處へ歸つて來るやうぢや、おれもこの家の棟木が頭に落掛つて來るまて、此處を出て行かれないらしいよ(と、おさとの顔を見て)しかし、心配するなおれはもう死ぬるまて、お前やお母さんの側を離れはしないだらうから」

さと。「でも、私何だか心配てすわ。濱田の叔父さんが、皆んなが安心出來るやうに、家の事をよく相談して見やうと云つてゐなすつたけれど、貴下がもつと確りしてゐて下さらなくては……」

久吉。「お前だけはそんな事を云つて呉れるな。親爺が此處にゐる間は、皆んなが親爺に罪を着せて、おれを庇つて呉れてたが、おれが一人立ちて此家の主人になると、村の者までも八方から、おれを目掛けて厭なことを云ひ出した。龜ても辨次てもこれまてよく來てた者が、親爺の家へ行つても、此方へは滅多に顔出しなくなつたぢやないか」(忌々しさうに云ふ)

さと。「惡く云はれても、お父さんの方へは人が行くんてすわね。お豊てもお勝ても、彼家へは毎晩行つてるらしいんてすよ」

久吉。「そりや、お看勤よりや面藝の方が面白いからね。……お前も見に行きたいだらう」

さと。「え。私一度も見たことがないんですから。どんな事をするんてせう？」

久吉。「ぢや、今から見に行くといゝ。（と云つて、耳を傾けて顔を顰め）あ、まだお看勤をしてるな。悲しさうな聲を出して。……お前はお母さんのお看勤が濟むまて、面藝を外からても覗いて來い。おれは無駄ても帳面調べをせにやなるまい」（と、机の前に座る。そして、以前の手紙が目につくと、引裂いて丸めて庭へ棄てゝ、懶さうに帳簿を披いて見ながら）「今夜はあのお看勤が馬鹿に耳につくよ」

おさとは呆れたやうに久吉の方を見て、奥へ入る。と、間もなく久吉は手に取つてゐた帳簿を押のけて身體を伸して、月の照る空を仰ぐ。

鶴見才平（前と同じ姿にて）濱田仙次に隨いて、謙遜した態度て出て、家の方を仰ぎ見ながら、

才平。「只今申し上げたことをお含み下されば、今日が今日てもお引受け申しませう。實地に當つて見積つちや、とても算盤に合ひませんてせうが、今度だけは算盤を棄てゝかゝりませう」

仙次。「兎に角お前さんの云つた條件を、母子によく話して見るから、明日の晩にまても改めて御返事しよう。……どうせ、このまゝにしてゐちや、此處の立行く方法はあるまいから、母子が何と云はうとも、今云つたやうにてもしなけりやなるまいと、私は思ふ心ぢや。だけど話が極るまては内方にしといて貰ひたいな。」

才平。「それは私からもお願ひ申します。世間が煩う御座いますから」

仙次。「それもさうだが、此處の母親が大人しく得心して呉れゝばいゝがと、私はそれが氣掛りなのぢや。見す〳〵抵當流れになるよりや、今の中君に讓つた方がいゝに極つとるんぢやが、」

ふと聞耳立てゝゐた久吉は、緣側へ躙出て、仙次と顔を見合はす。

仙次。「御勉强かな(と聲を掛けて才平に向つて)一寸寄つて行きなさい。次手に話を初めてもいゝから」

才平。「左樣ですか。……遲くお邪魔に上るのも(と、躊躇しながら)ぢや、御挨拶だけしてまゐりませう」

仙次。「なに、久吉君にや遠慮は入らんさ(才平を連れて庭へ入つて、緣側に腰を掛けて)いゝ景ぢやないか。今夜は舊の十六七日だらうな。……この室は月見にも誂え向きぢや。松の葉越しに見えるのが、格別に面白いぢやないか。繪に書いたやうぢや。こんな時にや、私達のやうに歌も發句もつくれんのは情ないて。早速一つやらかすところぢやが……(獨りて感歎してゐたが、訝しがつて二人を見てゐる久吉を顧みて)實はな。才平君に面藝の座敷て會ひましてな。中途て連出して、月見がてら、馬鹿話をしてゐたんてすよ」

久吉。「面藝は賑かだつたてせう」

仙次。「いや、身動もならんほどの大入てすわい。大將のだけ聞いて來ましたが、中々上手になられた」

久吉。（不快な顏をする）

仙次。「大將が高座へ上ると、えらい騷ぎぢやつた。何しろ爺さん婆さんまで村中殘らず押寄せとるんだから溜らない。あの窮屈ぢや私達はとても終ひまで見て居られはしません。側で手を拍つ、囃立てる。逆せ上るやうてな。（才平の方へ）お前さんは藝事がお好きかい」

才平。「いえ、どう致しまして。私どもは聞いてゐましても、一向分りませんので困ります。據所なくまゐりましたんですが、何をしてゐるのやら、見てゐても呑込めません……（煙管を出して煙草に火を點けて、久吉の方へ身體を向けて）每度お邪魔に上りまして……」

久吉。「鶴見君は今夜朝鮮の方へ出掛けたんてすね」

才平。「もう御存じてすか。貴下には始終お心安くして頂いてゐましたから、お暇乞ひに上つた方がよからうと、申付けましたのてすが……」

久吉。「え、一寸會ひましたが、あまり急だから、染々話も出來ませんてした。餘程長く行つてゐるんてせうか」

才平。「どうて御座いますかな。あれも辛抱氣のない我儘な奴てすから、とても長く彼方へは居付かれますまい。何時まて行つてゐやうとも、私の家ぢや些とも差支えは御座いませんて、あれの勝手にさせて置きます」

久吉。「しかし、餘程決心してゐたらしいんです」

才平。「さあ、その決心が何時まで續きますことか。苦勞を知らん若い者の決心は當てはなりませんてな」

仙次。「全くさうぢや。お前さんや私は隨分苦勞して來たが……しかしお前さんも息子が確りしとるから、これから身代が伸びる一方ぢや」

才平。「いや、伜なぞは身體ばかり大きうなつても、とても私の片腕にもなりさうぢやありません。もう見切りをつけました、あんな奴を手頼りにせんて、獨りて息の續く限りはやつて見ることに極めました。……稼業もこれから本式にやり出さうと思つて居るんて御座います」

仙次。「さう身代を殖すばかりしてどうしなさる?。さうしてゐると、十年も立つ中にや、この村は丸てお前さんの者になるかも知れんが」(戯談らしく云ふ)

才平。「どう致しまして(恨しさうに)私どもは學問は御座いませんし、いくら瘦腕て踠いたつて知れたものてすが、一日も寢て暮らしちやゐられん性分てしてな。……因果なことてす」

仙次。「しかし働けさへすりや結構ぢや。私なぞ、お前さんに比べりや意氣地がないから、この歳てもう伜まかせて樂隱居をしたがつてる……(久吉に向つて、ふと思出したやうに)さう云へば、今土藏の一件を話してる中、ひよつと當家の話になつたんてすが。才平君も君を氣の毒がつて、慾得離れて一つ

相談に乘らうと言つてるんぢやて。私も大變喜んでるんですよ。至極いゝ事と思つてる。いづれ帳面調べをして、さうしないでも濟みさうだと、それに越したことはなからうが。……」

久吉。(落付いて)「鶴見君からも一寸その話は聞きました。私はさうしてもよろしい」(冷淡に云ふ)

仙次。「しかし、君がよく考へて極めなけりやなりませんぜ。外の事とは違つて、傍(はた)から彼此(かれこれ)差圖しちや、後で苦情が出た時に困りますてな。私の量見ぢや、あの土藏と離れだけを殘しといたらいゝと思ひますよ。」

久吉。「さうすると、いよ／＼土藏の番人になるやうなものですね。」

仙次。「土藏さへあれば、先祖に言譯は立つ譯ぢやて」

久吉。「さうですか。貴下(あなた)でもその外にいゝ智慧はありませんかね。母は貴下(あなた)に御相談すりや、紙片(かみきれ)一つ無くしないで、家の立行く方法がありさうに思つてますが」

仙次。(苦笑して)「私だつて、灰吹から駒は出せんてな。……しかし、一應評議してからにした方がよからうな。君も自分の事だから、身を入れてよく考へて御覽なさい。急に取極めるにも及ぶまい」

おせき。襖を開けて入つて來る。それと見て、才平は煙管を仕舞つて、緣側を離れて、

才平。「ぢや、私はこれで失禮いたしませう。いづれ明晩またお目に掛ります」(仙次に挨拶して急いで出て行く)

久吉。「相川家もあの人に取られてしまうんですかなあ」

仙次。（默つてゐる）

せき。「あの男は才平ぢやないか。何をしに來たのかい」（立ちながら、不思議さうに二人の顏を見る）

二人とも返事をしない。

せき。「私はあの男を見ると、氣持が惡うなる。あの男を見るたびに、昔、座敷から突出した時の顏が思ひ出されて仕樣がないよ。‥平造が矢鱈に來る上に、才平まで來出しちや、私は何だか緣喜が惡いやうに思はれる」

仙次。「さう氣に掛けなさらいでもいゝてせう。今前を通つてたから、私が呼んだてすて」

せき。（不平らしく）「そんなら構いもしませんけれど、どうもあの男の目付が私の性に合ひませんのでしてな‥‥昨日も土藏の側に立留つて、暫らく此方を見廻しとつたが‥‥」

仙次。（微笑して）「まあ、此處へお座りなさい。月を見がてら、面白いお話をしやうぢやありませんか」

せき端近く出て座る。

久吉。「俄かに騷々しくなつたな。面藝が濟んだのか知らん」

仙次。「さう早く濟む譯はないてせうに‥‥成程騷々しい」

久吉。「喧嘩ても始まつたのだらうか」（庭へ下りて垣根の方へ行く）

其處へおさと、アタフタ歸つて來る。

久吉。「どうしたんだい」

さと。「まあ、大變なんてすよ（緣側へ驅込んて、息を吐いて）私外に立つて聞いてたんてすから、よく分りませんけど、何ても鹿太と云ふ男が、お父さんの女に恨かあると云つて、刄物を振廻りしとるぢやさうてすよ。切つたとか切られたとか、大騷ぎをしてゐますの」

三人とも驚いて、暫く言葉がない。

仙次。「鹿太と云つて聞いたことのない男だが、そんな男がありますかい」

久吉。「この村の者ぢやないてせう。思出せないから」

せき。「その男は向ひの村の古着屋ぢやがな。時々舟て商ひに來るてないか。……あの男の噂は先日お豐に聞いたことがあつたが、それて今夜來たのかいな」

仙次。「そんな男があるとは些とも知らなかつたが、困つたことじや。……兎に角私は直ぐ行つて樣子を見て來ませう。（立上つて）久吉君は行かん方がよからう。」

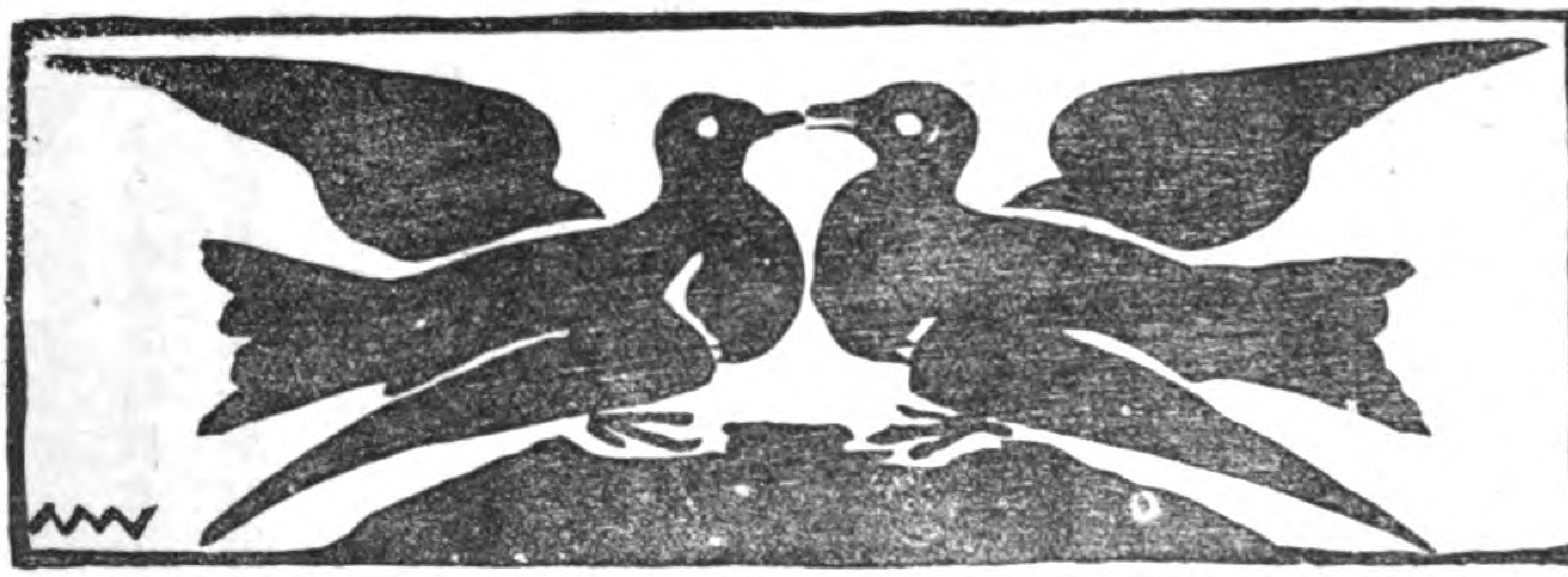
庭から出て行く。久吉は身動きしないて眉を顰らせてゐる。

さと。「どうしたらいゝんてせう」（泣出しさうな顏をする）

久吉。「どうせこんなことになるんだ」

三人また沈默

（完）



風邪ごゝち

永井荷風

一

梅一輪一輪づゝの暖かさ。春の日向に解けやすき雪の中裏なか〳〵に、憂き事つもる假住居。それさへ兼て米八が、三筋のいとし可愛さの、女の一念信實に、思込んだる仕送りを、請けてその日の活業は、世間つくる丹次郎‥‥

と差向ひの置炬燵。男が中音に讀み聞かしてゐた「春色梅暦」の一節は、突然梯子段の下から鳴り出す消魂しい電話の鈴の音に遮られた。

女は今朝方からの風邪心地、惡寒をしのぐ八反の褞袍の襟に埋めた其頤を起し、眉を顰めて、聞耳立てる間もあらず、勝手の方からは障子の開閉物荒く、あはてゝ馳け出る下女の足音。やがて梯子を二三段みしみし踏み鳴し、

「姐さん。揚箱からもうお仕度に上つてもよござんすかつて。」

「もうそんな時間なのかい。」いかにも驚いたらしく女は用箪笥の上なる置時計を顧みたが、男はいつもより今日は又一層朝寐した冬の日の短さは斯くもあらうと以前から覺悟してゐたやうな沈着いた聲で、

「もう五時なんだね。」掛蒲團の下から煙管を搜り出しながら「お前。心持はどうなんだい。何なら一晩位、無理をしないがいゝよ。」

女は默つて考へてゐたが、梯子段の欄干を片手につかまへて、下から顏を出してゐる下女に心付き、

「今すぐ此方から電話をかけると然う云つてお置き。」

下女は再び頑丈な足音をさして姿をかくした。

「三日も前からのお約束なんですからね。それに地の事で春若さんからもくれ〴〵賴まれてるのよさ」

「春若が踊るのか。いゝ度胸だね。」

「私の地ならわざ〳〵手合せしないでも濟むからつて……昨日も電話で念を押されてるんですよ。困つたわね。」

「一體、心持はいゝのか惡いのか。」と男は手を差伸して女の額を押える。

「まだ熱があつて？」

「うむ。少しあるやうだね。」

「わるいでせうか。」

「わるいにやア極つてらアね。お前は兎に角あたり前の人の身體だと思つちや、大間違ひだぜ。」

「ほんとうね。去年から見るとまた瘦せた事よ。もう後何年位生きられるんでせう。」

女は氣味惡いほど沈着いた調子で云つたが、男は最早やそれには答へなかつた。そして女の視線から避けるやうに置炬燵の上なる梅暦を開閉ぢしつゝ、處々の挿繪をさがして眺めてゐた。かう云ふ差向ひの傷しい沈默は、口に一度か二度は必ず二人の間に襲ひかゝつて來るのである。けれども二人は、云はゞもう馴れ切つて仕舞つたと云ふやうに、初めの中は實に堪えられぬばかりの悲痛に覺えず涙を浮べた事も度々てあつたし、又中頃はお互によしない事は口にせぬやうにと、出來るかぎり氣をつけてゐた事もあつたのてあるが、遂には凡ての事を成行次第にまかして仕舞つて、敢て事新しくは悲しまぬやうにまて立到つてゐるのてある。悲しいと思ふことがあれば、あるだけ、故意と反抗的にそれ等の悲しい事を云つて見て、せめての腹癒にするのてある。

思へば一昨年の秋の事てあつた。まだ自前の增吉にはならずに、玉扇屋から分て出てゐた時分、急性の肋膜炎にかゝつた後、女は不治の肺病といふ醫者からの宣告を受ける身となつた。然しこの一大不幸はその當時の增吉の身に取つては、同時にまた幾分かの幸福をも齎し來る原因ともなつたのてある。四五年に渡つて增吉を世話してゐた旦那は、增吉が肺を惡くしたからと云つて、流石に薄情な切れ方もてきない處から、入院中の手當一切を支拂つてやつた上に、猶若干の見舞金をやつて、此の後も商賣をつづけるのなら、奇麗に呼んて贔負にするとの事。又抱え主の玉扇屋ては、煉瓦地の狹い二階に四五人の

抱えと、これから仕込んで出さうといふ小供の二三人も、ごた〳〵に雜居さしてあるので、若し傳染りでもしてはといふ見え透いた實をばそれとは云はずに、唯だ增吉の方さへ其の心持ならば今までの借金は月々出來るだけを入れる事にして、自前の看板を分けてやらうとの事であつた。增吉は抱主と旦那とからつまり敬遠主義を取られた事を能く承知しながら、寧ろそれをば有難いと嬉しく感じた。

外の理由ではない。增吉は丁度其の當時、同じ家の朋輩に對して、藝者したものでなければ分らない藝者特有の意地として、縱へどんな無理をしても早晩自前の看板を出さねばならぬ時期に迫せられてゐたからである。玉扇屋から出てゐる藝者の中で一番古顏の姐さん株と云へば、增吉と小兼との二人で、後の三四人は皆二三年も後れて弘めをした二十前後の若い子ばかりである。小兼と云ふ意地惡は五年前の同じ年、增吉よりも三月ばかり晩く弘めをしたのであるが、好い旦那がついて、己に三月ばかりも前に立派な自前になると同時に、抱えの二人まで置いて貰つて、豪儀な姥さん面をし出した始末に、日頃から何かにつけて自然と競爭の地位に立つてゐた增吉は、自分から世間を狹めて、寧そ外土地へ住替へしやうかとまで思込んでゐた矢先、病氣に取りつかれて仕舞つたのである。

それ等の事情に加へて、玆にまた一層增吉の嬉しく思つた理由は、此れまでも度々新聞などに書かれて旦那をもしくじりかけた程思ひ込んだ男をば、自前にさへなれば、自由に自分の家へ引入れて夫婦同樣に暮されるといふ事である。增吉は其の思ふ男が萬一病氣が傳染したつて、戀の爲めなら命を捨てゝも惜しくはないと云ふに到つて、一夜を淚に明すほどに嬉しく思ひ、まだ病み上りの血色もすぐれぬ中

から、二人して金春、仲通り、板新道から信樂新道と、それ〳〵に名のついた横町や露地の貸家をさがし歩いて、丁度今から一年ほど前增玉扇といふ新看板を揭げたのであつた。

「足掛け二年になるわね。斯うして一緒に暮してゐられたんだから、もう私やいつ死んだつて、實際のところ思殘りはないのよ。」

增吉は默つてゐる男の顏を覗き込むやうに、炬燵の上に前身をのしかけた後、退儀らしく立上つた。長らく此の社會に沈倫してゐる男は、藝者と云ふものがお座敷の掛つた其時に抱く一種特別の感情をば飽くまでもよく了解してゐるので、其の眼は依然として梅暦の挿繪を眺めたまゝながら、獨語のやうに、

「それぢや、早く行つて、早く歸つて來るさ。」

「でも、無理をして又どつしり寢込むやうだと困るわねえ。」

「だからさ。風邪でも引いた時なんぞは、順當な身體ぢやないんだから、後口へ廻らうなんて慾を出しなさんなと云ふのさ。」

「なんぼ私が向見ずだからツて。」

增吉は調子だけ腹立しさうに云ひすてゝ、梯子段の下口から「政や。」と大きく女中を呼んで、「揚箱へ電話をかけてをくれ。そろ〳〵仕度に來てもいゝから。」

一足ばかり梯子段を下りかけたが、突然立戾つて用箪笥の曳出から小菊の紙を取出し、空解けの伊達卷を引きしめながら、增吉は降りて行つたが、再び上つて來ると、直樣電燈を向うの方へ引張つて行つ

て、窓際に据えた鏡臺の前に坐つた。下女が癖直しのお湯を持つて來る。増吉はまう今朝からの風邪心地をも、今日一日は湯にも行かずに頭痛がすると云つてゐたのをも、萬事は全く忘れ果てゝ仕舞つたやうに、あるかぎりの全身の魂と精力とを鏡の中に打込んで、火の氣の乏しい裏二階の、しかも二月の大寒の夕まぐれと云ふのをも更に頓着する氣色なく、くるりと兩肌をぬぎすてたのである。そして電光石火の如くに挿してゐる櫛と簪と髱留などを抜き取るかと思ふと、前髪の中と兩鬢の髮の下に入れた梳毛の珠とを取り出し、熱湯にひたした布片を摘んで適度に絞るや否や、髮の毛は根元からも抜け落ちよとばかり、力任かせに兩鬢を揉んで擦つた。

男は電話を掛終つた下女が姐さんの長襦袢を炬燵へかけに來るのを機會に、少し後じさりに後方の壁に背をよせかけ、半は感歎に、半は傷しさに堪えぬやうな目容て、弱々しい撫肩に貝殻骨の痩立つて見える後から、その化粧するさまをぢつと打目戍つた。無論二人ともに交すべき話もない。話をしかけたとて、男は女が髮に氣を取られた時には碌々返事をする餘裕もない事を承知してゐるに於てをや。外には日暮をいそぐ下駄の音。人力車の鈴、羅宇屋のピー〳〵、歯入屋の皷の音。此方は折々ぢれつたさうな舌打の響につれて、明放した鏡臺の曳出しの幾個と知れぬ櫛や毛筋棒の中から氣に入つたのを取り出さうとする手荒な物音と共に、風邪心地の寐亂れた銀杏返しは、昨日の晝過ぎこの土地で老手のお若さんが結つた時のやうに變つてしまつた。髱は長く粛然として金鶏鳥の尾の如く、意氣な柔味の中に幾分の氣品をさへ帶びて、浮立つやうに鮮かな襟足から稍々蒼白に頭の上に伸び、兩の鬢は左右から挿

す毛筋棒の上に、水櫛の齒の曲線を鮮かに、ふうわり休んでゐると、前髪は凜として勇しく額の上に直立し、髷の兩輪は電燈の光を浴びて漆のやうな輝きを示してゐるのである。

然も増吉も、己れの製作品を眺めやる美術家が、此れで滿足したのではないが、滿足して置くより仕様がない、手をつけ出すと切がないからと云つたやうな、寧ろ遣瀬のないやうな目容で、合鏡の一瞥を終つたかと思ふと、一秒間の休息もせずに、今度は白粉下の花筏を取つて溢るゝばかり掌のくぼみにつぎ、兩手で顔から頸から、咽喉から胸から、肩の後も手の屆くかぎりぺた〳〵塗りつけた後には、つゞいて御園白粉を水刷毛にしたして目も鼻もないやうに一面に塗り立て、しよぼ〳〵瞬きする睫毛と眼の縁を手拭でふき、次には粉白粉のついた大きな軟い毛の牡丹刷毛で、鼻の上から顔中襟元、耳朶の後まで、水白粉の濃淡のないやうに磨きをかけた。

「箱屋で御在ます。」と云ふ聲と共に格子戸のあく音。下女は出し忘れた着物の叱言を喰ぬ中にと、周章て梯子段を駈け上り、

「姉さん。お召はどれを出すんです。」

増吉は頬紅を淡くぼかして、樂屋使ひの引眉毛を施しながら、

「さうだつたね。あなた、鳥渡その引出の中の帳面を見て下さい。」

「二十五日……しま屋さま……五時……。」と男は女が覺書の帳面を讀みにくさうに讀む。

「へい。今晩は。どうもお寒う御在ます。」と東棧の羽織に同じやうな着物の裾を端取つた四十年輩の、

頭をくる／＼と剃つた揚箱の男は、幇間や落語家などにも見るやうな、何處となく角のとれた腰の低い態度て、梯子段を上りきつた壁際に小く身を寄せて膝をついた。

「爲さん。着物は出てなくつても可かつたんだね。」

「へい。別に何ともついちや參りません。」

「それぢや、あのお召の‥‥雪輪の裾模樣を出しておくれ。」

増吉は下女に命じながら音高く鏡臺の曳出を閉めると共に、白粉のほごれた寢衣の膝をぱた／＼と叩いて立ち上つた。箱屋の爲さんも同じく坐を立ち、増吉が新しい足袋をはき替へて立直るや否や、下女が取出す置炬燵の長襦袢を引取つて、後から着せかける。増吉はその裾を踵に踏へながら、縫模樣の半襟をかけた衣紋を正して、博多の伊達卷を少しは胴のくびれるほどに堅く引き締めると、箱屋は直ちに裾模樣の二枚重を取つて、後から着せかけて置いて、女がその襟を合せてゐる暇には、もう兩膝をついて片手では長く敷く裾前を直してやり、片手では薦の上なる紋羽二重の長さは全一反もあらうと云ふしごきを、サッと捌いて其の端を女の手に渡してやつた。着せかけるものにも、着せられるものにも、共々に飽くまで専門家的の熟錬と沈着とが備つてゐて、聊かの混雜も澁滯もなく、凡ては輕妙に迅速に取扱はれて行くのである。

この年月、見馴れに見馴れた事ながら、男は流石に始終肱枕の眼を離さず眺めてゐる中、これも今夜初めてと云ふてはないが、藝者がお座敷といふ一聲に、病を冒して新粧を凝し、勇しくも出立つて行く

時の樣子は、恰も遠寄せの陣太鼓に戀も涙も拋つて、武智重次郎のやうな花武者が、緋縅の鎧美々しく出陣する、その後姿を見送るやうな悲哀を催させるものだ……と思つた。

箱屋は袋につゝんだ三味線を持つて、這入つて來た時のやうに腰をかゞめて出て行くと、增吉は男の傍に膝をつき、締めたての帶の間から、今挾んだばかりの煙草入を拔き出しながら、

「お化粧したら却つて氣がさつぱりしたやうだわ。それぢやア、私行つて來ますよ。早く貰つてすぐ歸つて來るから、待つてゝ頂戴よ。晩の御飯一人で食べちまつちやアいやですよ。」

「姐さん。車が來ました。」と下の方で下女の聲。

男は半身を起して唯だ頷付いてゐると、女は其の手を輕く握つて、「お腹が空いたら、私の牛乳があるから、あれでも呑んでお置きなさい。」それから何ともつかずに唯だ、「よくッて？」と嫣然して見せて、增吉は褄を取つて梯子段を下りた。

直樣切火をかける音が聞える。男は再びごろりと置炬燵へ肱枕をして、大きな長い呎をしながら、置時計を眺めると、丁度六時を指す針と共に、其の中に仕掛けたオルゴールが點滴の落ちるやうに懶く、「宮さん〱お馬の前で。」を奏し出した。

二

日の全く暮れ果てた屋外の寒さは、建付の歪んだ西洋窓の隙間から、糸を引くやうに浸入して來る。

男は仕様事のない退屈しきつた身體を如何にも持扱ひかねると云ふやうに起き直らして、再び置炬燵の上に梅暦を開いたが、もう挿繪を見るのでもなく、唯だ茫然と電燈の光に照らされた亂雜な二階の身のまはりを眺めるのであつた。たつぷり夜になると共に、電燈の光は屋外の薄明かつた夕方よりは、幾分か其の力を增したらしく、四邊一體を何ともなく新しく見せるやうに思はれたからでもあらう。

俗に三等煉瓦の貸長家と云はれてゐる此の家の二階は、今日では明治初年を追想させる荒廢した一種の紀念物とも見られるだけに、不思議な程拙なく不便に出來てゐる。立てば丈身の屆くほど低い天井は紙張りにしてある爲めに、二目とは見られぬばかり、鼠の小便と雨漏りの斑點と、數知れぬ切張りとに汚され、間數は襖を引き得べき敷居の溝を以て境とすれば三間と數へられるのであるが、梯子の下口の一間と、それに續いた次の間とには、丁度西洋室の煖爐の煙筒を見るやうな太い煉瓦の柱が突出してゐる爲めに、孰れも二疊半に三疊半と云ふやうな不思議な疊の半數を示してゐる。他の一間だけは稍廣く八疊ほどの疊が敷かれてあるが、後から付け出した一間半の折入がこゝにも亦邪魔らしく突出してゐる上に、次の間を區切る敷居の上には、どう考へても解釋のつかない、飛んでもない處に、細い柱が然も二本並んで立つてゐる。最初男は增吉と二人で此の貸家を見に來た時、猫に瓜を磨せる爲めわざ〳〵こんな柱を立てたのぢやないかと云つて、笑つた事があつた。

男は一昨年の秋から每夜々々同じ電燈の光で、增吉のお座敷へ行つた後一人でぼんやり眺め廻はす三間打通しての此の二階をば、今夜もまた仕樣事なしに眺め廻すにつけて、此れもまた每夜のやうに、自

分の身の行末はどうなるのであらうと、矢張同じ事を思ひつゞけるのである。近所の女達から兄さんとも旦那とも或は單に進さんなぞとも呼ばれずに、歴とした祖先の性を名乗つて、親の家から丸の内の會社へ通勤してゐた時分には、凡て正當なる事は馬鹿々々しく思はれ、一時半日の怠惰をも許さぬ職務の束縛には遂に堪えられずして、恰も日に解される雪達磨の下から次第に崩れ出すやうに、この藝者家の二階に主人同様に入りびたつて仕舞つたのであるが、それも今になつては、あまりに爲す事なき退屈の折々には、自分から抛つた規則正しい生活の活氣ある勇しさを、成程返つて來ない昔の夢だと追回して見たくもなる。けれども男は直樣、かうまでに持ち崩してしまつた現在の身體では、唯てさへ根氣の續なかつた勤勉な生活なぞには到底復歸されるものではあるまい。寒い〳〵冬の朝目覺し時計に起されて慌忙しく洋服を着る辛さ。雨の降る堀端に電車を待つ果敢さ。乘つてからは雜踏の苦しさ。それから漸く會社の入口を潜れば、人々皆それ〳〵の階級に從つて、其れ相應に立身出世の野望をば、唯だ謹直と云ふ名の下に押隱して、凡そ人間の多く集る處には必ず免れがたい反目やら競爭やら阿諛やら讒訴やら、其れ等一切の不快な陰險な感情をば亦も交際と云ふ假面の下に何事もないやうに包みかくして行く。そんな事を思ひ出すと、こゝに斯うして藝者家の二階にごろついてゐる現在の方が、どれだけ幸福だか比較にはなるまい。會社の人達が蟻のやうに働いて、明けても暮れても、月給と賞與金との增額をのみ夢みつゞけるのも、其の最終の目的は榮華と安樂に耽りたいと云ふに過ぎない。詩人でもなく仙人でもない吾々の安樂榮華とは、つまる處美衣と美食と美人とに圍繞されたい事を意味するのであらう。然り

とすれば、自分は社會的名譽を抛てた報酬としては已に業に餘りある程の安樂を得てゐるてはないか。惜しむ事は無い、悔る事は更にない‥‥男は重ねて二階中から自分の身のまはりを見廻した。

押入と相對した一方の壁際には、新しい桐の簞笥が二棹と、時代の知れぬ程古びたのが一棹と並べてあつて、其の上には用簞笥やら箱入の人形やら羽子板やら、稽古本を入れる見臺やら、其の他さま〴〵な玩具や小道具が、天井の片隅なる酉の市の熊手や、穴守樣の河豚の提灯なぞと一緒になつて、どう云ふ譯か堅氣の家には決して見られない艶しさを帶びて見える。向うの窓際には大小の鏡臺があり、此方の窓に添ふ壁には、お召の不斷着が古びた長襦袢を重ねたまゝ、だらりと下つてゐる。置炬燵の掛蒲團が古疊の上に其の花やかな更紗模樣を延べた端には、紋縮緬の裏をつけた八反の褞袍と、浴衣を重ねた絹の寐衣とが細帶と共に、脫ぎすてたなり、其の襟のあたりの處なぞは丁度身脫の殼のやうに女が着てゐた時の儘の形をさへ殘して、花蓙の上に狼籍としてゐる。見廻す二階中の壁と襖と天井のいたましいまで古びた汚れ目に對して、いかにも優しい其等の家財道具と見るからに艶なる女の衣類は、全く一致しない各自の特徵を互に鋭く引立たせ合つてゐるので、それをば同時に眺めやる男の心には、いつも斯うした藝者家の二階といふものに對して、一ツは放蕩の身の末の尾羽打ちからした哀傷と、又一ツには云ふに云はれない柔かな住心地を感じさせるのであつた。それは今夜のやうに女のゐない留守の間に於てさへも、其のぬぎ捨てた衣服のさま〴〵からは絶えず一種の重い生暖い氣が吐き出されてゐて、譬へる事のできない程手觸りよく、男の身を蔽ひ包むやうな心持とても云はうか。この快感と同時に古び

た家から感じられる彼の哀傷とは、常に相混和して、遂に〳〵今ある如くに男の良心と、男が誰でも持つてゐる生活に對する固有の奮鬪力とを根底から麻痺させてしまつたので、男は此の頃になつては朝湯の行き歸りなぞ、女着を仕立直した半纏を引掛けて戸外へ出る折々、横町の彼方に見える銀座の大通りの忙しさうな生活を傍觀してさへも、何となく其の空氣の荒々しさに堪え得ぬやうな心持がして、直樣この二階なる絹の柔かみと白粉の匂ひの古巣へもぐり込んでしまふのであつた。されば男が一向に增吉の病氣を恐れず、傳染したとて構はぬと云つてゐるのも、つまりは何うにも斯うにもならぬ程じだらくに持崩してしまつたわが身の成行の、寧そ早く片が付いてくれる事を絶望的に希ふ爲めに外ならぬ。否、男は死といふ事よりも今は、增吉が先きに死んで自分ばかりが無病息災で後に殘されたら其れこそ見じめなものだと氣遣はずにはゐられないのである。

三

自働車が二階の簞笥の環をゆすぶる程、恐しい地響を立てゝ通つた。裏隣りになつてゐる小待合の二階からはサノサ節を歌ふお客の聲が聞え出すと、横町の彼方からは、「これ今年の九星八卦よみに御在ます……。」といふ皺枯れた讀賣の聲が次第に近付いて來る。下女が澤庵臭い噯をしながら增吉の寢衣を炬燵へかけに來た。

「大分腹がへつて來た。何かないかなア。」

男は振向くと、斯うした稼業の家には年久しく使ひ馴らされた三十前後の下女は、わざと調子をすげなくさして、「旦那一人に先へ御飯なんぞ上げると、後で私が姐さんに叱られます。」

「だつて食はずにや居られないぢやないか。この間の雀焼はもうなくなつたのか。」

「もう暫くだから御辛棒なさいよ。姐さんだつて樂しみにしてお腹をすかして居らつしやるんぢや有りませんか。」

下女は丁度物馴れた新造が若いお客をすかすやうな調子で答へながら、其の邊を取りかたづけて階下へ行つてしまつた。

同時に電話が鳴出す。男はまだ少し時間が早過ぎるけれど、もしや増吉がお座敷から迎ひの車を寄越せとの事ではないかと、取次ぎに出る下女の聲に耳を澄したが、矢張り豫想通りさうではなくて、他のお茶屋から明日の何時にお約束といふ電話なのであつた。

「旦那。」と階下から下女が聲をかけて、「あちらへ直ぐ通して置きませうかね。」

「受けてしまつたのか。」

「いゝえ。唯今お座敷ですからと云つて置いたんですよ。」

「さうかい。そんなら出先へさう云つてやつてお呉れ。」

かく吩附けたものゝ、男は家の下女からまで、そんな商賣のお座敷に關する相談なぞ仕掛けられたくないと云ふ心の苦痛を、眉の間の皺に現はさずには居られなかつた。自分より外には誰もゐない二階の

中ながらも、猶人に見られはせぬかといふやうに、其の顔をさへさあらぬ方に外向けさした。下女は増吉がお座敷へ出た留守に起る家業の用事や掛引の少し込み入つて來る場合には、其の挨拶や返事のしやうをば、「旦那々々。」と云つては何時ともなく男に相談しかけるのも、思へば既に久しい以前からの事であるのだ。實は男も最初は面白半分に増吉が稼ぐ玉帳の總高を算盤にはじいて見るやうな事も無いではなかつたが、いざ全くの無職業の身となつて、二階にごろ〳〵してゐるより外には仕様のない現在に至つては、時に觸れ物に感じる折々、云ふに云はれない慚愧と苦痛の念に迫められてならぬ事がある。

休みなく鳴し立てる電話の鈴の音につゞいて、階下からはまたもや下女の聲。「旦那。困つてしまひますよ。電話がいくら掛けてもお話中なんですよ。」

男は今度はもう答へなかつた。今方火を入れ直した炬燵に燒き立てられる苦しさに、男は坐りくたぶれ寢くたぶれた身體を立ち上らせ、ゆるんだ帶を締め直したついでに、階下の便所へでも行つて置かうかと思ひついたが、突然又何か思ひ返したらしく、梯子段の下り口から窃と階下を覗いて見ながら、其の儘立戻つて座敷の眞中の細い柱に脊をよせかけてしまつた。階下の座敷といふのは元來は二階同樣の廣さであつたらしいのを、手て押せば直ぐに拔けるかとまで危まれる薄壁に境して、今の煎餅屋との二軒に後から分割したものらしく、僅かに三疊の一間も勝手道具のさま〴〵に狹められて下女一人やつと寐起きされるばかりになつてゐる。下女より外には誰もゐないのである。けれども男は其の三疊に置いてある長火鉢を見ると、左官をしてゐる増吉の實父が、折々こゝへ酒を呑みに來る度々、極つて娘と口

喧嘩を初める事から、つゞいて増吉が毎月その親に仕送る二十圓の爲めに、優れぬ健康を犧性にしてまて思はぬお客をさへ取つてゐるやうな秘密を連想せねばならぬし、猶其れよりも一層避けたく思ふのは、薄い隣りの壁越しに絶間なく聞える年寄つた煎餅屋の老母の咳嗽の聲である。それは何と云ふ事なしに男の不身持を嘆いてゐる自分の母親の事を思ひ出させてならぬからである。

鍋燒うどん。焦立て豆やの呼聲と、支那饅頭の鈴の音に、横町の夜も少し更け出したかと思はれる頃、男はいつか又置炬燵へもぐり込んで、獨りで淋しく、梅曆の痴話口説に强ひても興味を得やうと勉めてゐる時、突然格子戸の外に車夫の聲がして、思つたよりも早く増吉が歸つて來た。

「政。すぐ御膳の仕度をするんだよ。」甲走つた聲と共に梯子段を踏む音が一段〳〵上つて來ると、此方は幾分か待ち佗びてゐたといふ弱點のあるだけに、瞬間に起る男の意地が、自然とその場合、男をして歌澤の文句にある通りな思はせぶりな空寢入。女は梯子段を上り終るや否や、襟卷を解き捨てながら歩みよつて、「早かつたてせう。」と小聲に云ひながら男の肩の上に身體を載せかけた。

氷のやうに冷えきつた絹の女着の冷さに頰を撫でられ、男は覺えず身顫ひして女の手を取つたが、「大變な熱ぢやないか。」

「背中がぞく〳〵してとてもお座敷にゐられなかつたのよ。矢張無理をしたのが惡かつたんだわね。」力のない調子で申譯らしく男の顔を見た。

「だからさ。云はない事ッちやない。」

「もう叱らないて頂戴よ。私が惡かつたんだから。」と艶しく謝罪ると同時に、女は又甘へるやうに其の不平を訴へて、「それても今夜は一杯もお盃なんぞ受けやしなかつたのよ。この上身體をわるくしちや大變てすもの。いつだつて少し頂いたと思ふと、直ぐ内所で厠へ行つちや頬紅を薄く塗つて、酔拂つたやうな眞似をしてゐる位にそれア用心してゐるんぢや有りませんか。」

「だから、何もお前が好んで不養生すると云やしないぢや無いか。いゝから早く着換へておしまひ。何かよく暖まるもんても食べて早く寢た方がいゝよ。」

「あなた。お腹が空いたてせう。もう一體何時てす。」男の身體に凭りかゝつた儘て羽織を脱ぎ帯留の金具をはづしながら、置時計を見返つて、「九時過ぎたばかり……割に早いわね。」

「お醫者さまを呼ぶのなら、今の中に早く政に行つて貰つたらどうだい。」

「さうね……。」と考へて、「ほんのちよいと風邪を引いたゞけなんだから、此の間の頓藥がまだ殘つてるから……。」

下の方から其の時強い葱鮪の匂ひが立ち昇つて來た。女は何も彼も忘れてしまつて、

「あゝ嬉しい。政やが葱鮪をこしらへたわ。」

「さア早く脱いておしまひ。襦袢一枚てどうするんだよ。」

「あッ。暑い。燒けどするわ。あなた。」

増吉は男が炬燵から取出して着せ掛ける寢衣の陰に、早や襦袢もない眞白な肌身を艶めかしく悶えさ

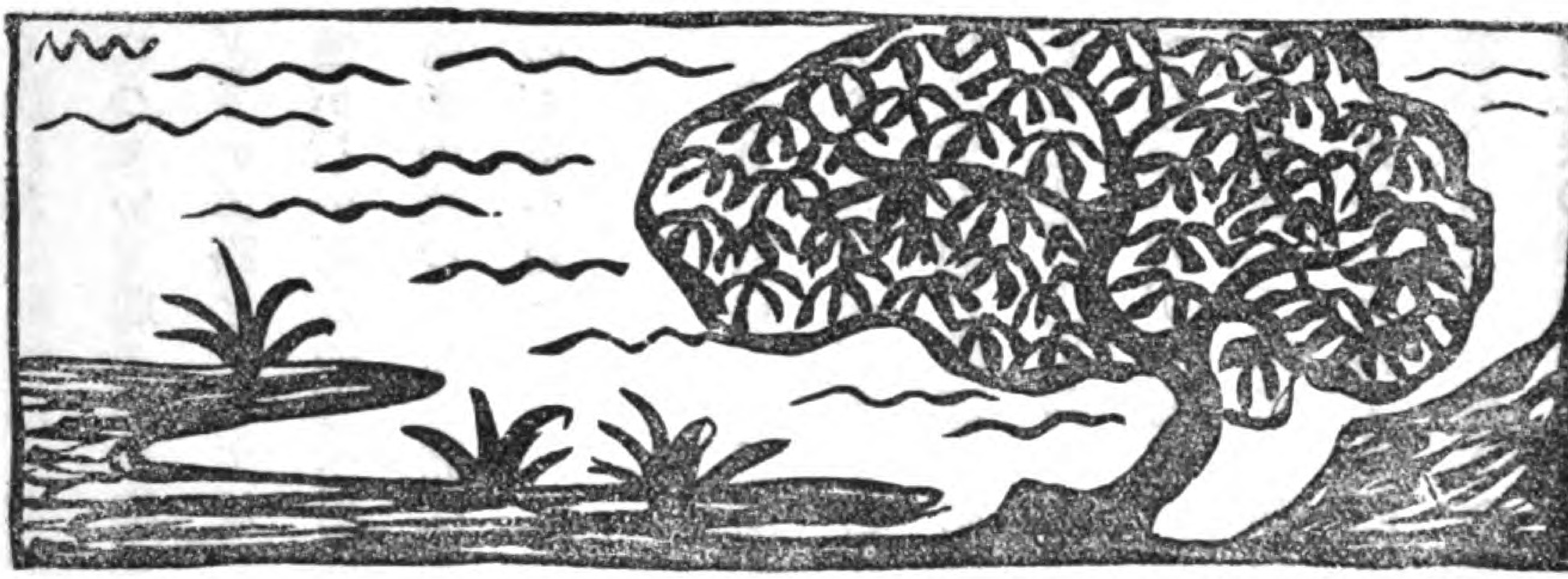
せた。

格子戸があいて箱屋の聲。「姐さん、もうお歸りて御座ますか。」

「どうも御苦勞さま。」暫して、お政が香の物でもきざむらしい肴板の音がし出した。

二人は唯だ何といふ事もなしに顏を見合はすと共に、さも嬉しさうに笑つた。

(完)



零落

長田幹彦

私が野寄の町へ入つたのはもう十月の末近い頃であつた。北の國の冬は思つたよりも早く來て、慌たゞしい北風が一夜のうちに落葉松の梢を黄褐色に染めてしまつたかと思ふと、すぐそのあとから凍えたやうな灰色の雲が海の方から斷絶なしに流れて來て、夜となく晝となく、寂しい氷雨がはらはらと亞鉛葺きの屋根に降り灑ぐやうな日が幾日となく續いた。收獲のすんだ野面や、なだらかな起伏のつゞいた傾斜地には薫りの高い林檎が紅く熟しきつて忙はしげに餌を漁りながら冬に慴えて啼きしきる群鴉の聲も悲しく、雲のきれめから時折姿を現はす國境の連山の頂にはもういつかしら眞白に雪が降り積もつてゐた。

私はその町の大通りの端れにある穢ろしい旅人宿の二階で、なすこともな

く幾日かの取留めもない日を送つた。二箇月に餘る長い長い旅を續けて來た私は、いつしか疲勞のあとにつゞいて起る不思議な心持ちに惱まされて、もうすつかり元氣と云ふものを喪つてゐた。これから先どういふ路をとつて旅をつゞけて行かうといふ計劃もなく、それかと云つて、また自分から進んで急に懷かしい東京の方へ引返へさうといふ氣もなく、唯その日の徐ろに移つてゆく果敢ない變化を賴りに、路銀の殘つてゐる間は何時までもこの衰頽してゆく靜かな廢市に逗留してゐたいやうな氣になつてゐたのであつた。

事實、私にとつては此度の旅ほど法外な、變化の多い旅はなかつた。――青い酒や、紅い酒を並べたカッフエーや、毒を含んだやうに脣の紅い女や、瞳を爛らかす眩ゆい燈火の輝き、すべてさうした若い生命を蝕む濃烈な刺激に充たされた都會の生活がしみじみ厭はしくなつて、眞夏の白らけた日射しがまだ甍の上に烈々と燃えさかつてゐる頃、至純な自然の抒情詩を懷かしむ心持ちでふと旅へ出たのではあつたが、常陸の沿岸から磐城境の炭坑地方まで來かゝると、例の氣紛れな私の好奇心はいやがうへに增長して來て、福島、仙臺と旅程は次第次第に延びてゆくばかりであつた。鑛山の坑夫を誘拐して歩く山のしと稱する惡漢に欺かれて、龕燈返へしの密室を有する怪しげな淫賣窟で四日も五日も逗留を强ゐられたり、樺太へ出稼ぎに行く若い酌婦の一團と道連れになつたり、路銀が盡きて、賭博に耽る鐵道工夫の群や藥賣りの親爺などと宿場はづれの木賃宿に夜を明かしたり、種々さまざまな、普通の賢い

旅人の見も知らぬ危げな出來事に出逢へば出逢ふほど私は却つて誘なはれるやうな不思議な興味を覺えて兎角するうちに到頭青森まで來てしまつた。そして眞紅に燬け爛れた夕雲が陰鬱な青森灣のうへを北へ北へと流れて行く光景をみると、今度は平生から遙かに憧がれてゐた北海道の未開の自然が俄かに慕はしくなつて、まるで理性の痲痺した狂人のやうな氣持ちで即夜夜航の連絡船に飛び乘つたが、愈々函館の港外へ近づいて、暗い津輕海峽の怒濤が舷側を打つ轟響（どよみ）を聞きながらほのぼのと白んでゆく曉方の空に眞白な海鳥が幾羽となく群れ飛んでゐる姿をみた時には、さすがに我ながら涙の滲むやうな悲壯な氣にうたれて、船尾の冷たい欄干に身を倚せたまゝ遠い遠い海の彼方の內地の空をみつめながら茫然と立ち盡した。そして荒寥とした駒ヶ岳の高原から遙かに噴火灣の紺碧を眺めた時も、人住まぬ未開地のやうな知別（ちべつ）の谿谷から雪を戴いた崇嚴なマッカリヌプリの山容を振り仰いだ時も、また倶知安（くつちやん）の新開町て暗澹とした夜の闇の底に黃いろい灯が幾つとなく寂しげに瞬いてゐるさまを望んだ時も、胸に迫る遣る瀨ない哀愁は覺えながら、私にはまだそれでも自然に對する好奇な旅人の鋭い感覺が殘つてゐた。遠くカウカサスの山地の方へ遁れてゆく彼の「コザック」の若い主人公のやうな美しい憧憬も、情感も殘つてゐた。そしてまたこの新らしく開拓された地方の奇怪な熊の話にも、純樸なアイヌのメノコの戀語りにも限りない興趣を誘はれるだけの素地を、私は決して失はなかつたのであつた。

　それがどうしたものか僅か一箇月ばかり經つた後、あの殖民地のやうな美しいアカシアの並木をもつた札幌の町を離れる頃にはもういつの間にかその新らしい歡喜も、憧憬も悉く跡かたもなく消え失せて

自分自身が既に生れおちからの漂泊者てゞもあつたやうな寂しい、頼りない氣持ちになつてゐた。旅宿て逢ふ人も、汽車の中て逢ふ人も、親切な人も、冷淡な人ももう唯通り一遍の逢遇て意味もなく身邊を流れ過ぎてゆく水のやうに思はれ、自分の身が全く孤獨であることを痛いほど明らかに知るにつけ、もう美しい自然の魅力さへ私の心には何等の印銘をも殘さないやうになつた。そして、この野寄へ來る途すがら、ほそぼそと降りしきる雨に濡れながら、索漠とした石狩川の流れを渡つた夜の、滅入るやうな疲れ果てた氣持ちは、到底旅愁といふやうな空疎な言葉て云ひ表はすことの出來ない切なさをもつてゐた。一度は後に見捨てゝ來た都會の華麗な生活に對する思慕の情が、その時、忽然と湧き起つて、暗い河面には珠玉を聯ねたやうな妖艶な燈火の幻影が波紋のやうにありありと蕩めいたが、それとともに私は何とも知れぬ不安さへ覺えて、遣り端のない悲しみが潮のやうに胸の底へ波うつて來るのであつた。…………………

野寄へ落着いてから幾日目かのことてあつた。その日もいつものやうに朝からなすこともなく空しい時を過ごして、人氣のない部屋の隅へ火鉢を抱へながらしよんぼり坐つてゐると、いつのまにかもう寂しい黄昏の色が障子のうへゝ一面に匂ひかゝつて來た。

「あゝ、今日ももうこの儘暮れてしまうのか。」と思ふと、私は餘りの所在なさに堪へ兼ねて、小窓の硝子戸を細目にあけて、そこから蒼茫と暮れてゆく四邊の光景を眺めた。

黄褐色に霜枯れた石狩の原野は際涯もなく小雨に煙つて、みるもの總て生色を失つた冷たい黄昏の底にひろびろと溢れた湖のやうな石狩川の河面がほの白く浮き出してみえた。枯葦のそよぐ蕭條とした岸邊には灰色に建ち腐された製紙工場や、洪水のために半ば倒壊しかゝつた倉庫などが今にも河底へ滑り落ちさうに平たく建ち續いて、濕つぽい風が聲もなくそのうへに吹き満ちてゐた。眼を移して町の方顧みると、其處にも灰色の衰頽が力なくたち澱んで、軒並の店看板にも、家々の外壁にも、または路傍の石崖の斷面にも、すべての繁榮を嘲ふ「時」の浸蝕が怖ろしいまで鮮かに浮きあがつてゐたが、中にも、旅宿のすぐ下を流れてゐる大きな溝渠が、開拓者といふ純潔な理想家の手によつて人工的に井然と塀鑿されたにも拘らず、最早いつしか死相を帯びた蒼黒い水垢に閉ざゝれて、痩せ細つた水草が底の方から湧きあがつて來る沼氣に誘はれながらぬらぬらと蛆のやうに蠢めいてゐる有樣は、この町の悲慘な推移を最も鋭く暗示してゐるのであつた。

　私は、身も心もそのもの悲しい色彩のなかへ引込まれてゆくやうな氣持ちて、何時までも、何時までも、遠くたちかさなつた町の家並のうへゝ眼をさまよはせてゐた。と、深い溝渠の底からも、家々の陰からも、または往きゝの途絶えた狹い街路の面からも、いつかしら濃い夜の闇が次第々々に湧きあがつて、その底には、寒氣に慴えたやうな灯の光がぼんやり雨に滲みながら遠く近く瞬きはじめた。私は、その黄昏の死色が頭から足の爪先まで沁み徹つてゆくやうな寂しさに犇々と取圍まれながら身動もせず茫然としてゐたが、そのうちに、果てしもない空虚のなかへ唯ひとりとり殘されたやうな心細さが容赦

もなくじりじりと心の底へ喰入つて來て、しまいには到頭座にゐたゝまれない程氣が滅入つて來た。て何と云ふつもりもなく立上つて、その儘冷たい糠雨の降り罩めてゐる戸外へふらりと飛び出してしまつた。

大通りへ出ると、町の人々はもう越年（をつねん）の準備で忙はしかつた。納屋から橇を曳出してきて丸釘をしめなほしたり、冬籠りの間の食用に供する野菜物を圍つたりするので、疲れきつたやうな顏容をしながら靜かに立働いてゐた。

案内さへ知らぬ暗い巷路を、寒い風に追はれながら右へ左へさまよひ歩いてゐるうちに、私はふと思ひもかけぬ色街らしい一廓の街へ出た。硝子窓のある西洋風の板羽目を用ゐた廢滅しかゝつたやうな建物ばかり建並んではゐたが、それでも河の漁期で、人が入込んでゐるだけに何處となく景氣づいて、賑やかな三味線の音や、艶めいた女の笑ひ聲はそこにも濃い酒と、安價な媚びを賣る女のあることを想ひ起こさせた。と、私の心はもう久しい間さう云ふものに飢ゑてゐたやうに激しく躍つてきて、火の方へ引寄せられてゆく夏蟲のやうに前後の辨へもなくふらふらとそのなかでも一番見附きのいゝ醉月亭と云ふ料理店の表階子を登つてしまつた。そして明るい洋燈の下に鮭の刺身や、胎子の酢あへといつたやうな土地の季節に應じた種々の肴と、熱い湯氣のたつ酒が置（くるゝ）きならべられた時には、云ひ知れぬ嬉しさが喉元まで込みあげて來て、貪るやうな手つきで頻りに盃の數を重ねた。

遮るものもない興趣が靜かに胸に溢れてくる頃、私は勸められるまゝに、内藝者の美登利といふ妓を

招んだ。小樽生れの頰の紅い、氣の輕さうな女だつた。年は十八だと云つてゐたが、その割りには老けてみえる方で、別に取立てゝいふほど美しくもなければ醜くゝもなかつた。私はかうした寂しい晩にふさはしい情調の滿足を求める外に、この女をどうしやうといふ好奇心もなかつたので、旅宿の廊下で行逢つた人のやうな拘はりのない態度であつさり遇らつてゐたが、そのうちに漸次とまわつて來る酒の醉ひと一緒に河の漁獵の話なども思はずはづんで、お互に少しづゝ隔てがとれて來た頃、彼女は急に思ひ出したやうに浮々した調子をかへて、

「ねえ、貴方、少しお願ひがあるんですけど、聞いて下すつて?」と、云つて、顏色をよむやうな眼眸をしながら私をみつめた。

「何だい、遊んでゐる姐さんでも招んで吳れつて云ふのかい?」と、私もつい引込まれて眞顏になつて訊いた。

「いゝえ、そんなことぢやありません。」暫らくの間躊躇するやうな氣振りをみせてゐたが、やがて思ひきつたやうに、「あの、誠に申兼ねますけど、これから芝居見に連れてつて下さいな。」

「なに、芝居? 此邊のことだから又圓車の浪花節だらう。俺は誰方のお願ひでもあいつばつかしは眞平だね。」

「いゝえ、今度のはさうぢやないんですよ。」と、美登利は眞氣(むき)になつて打消しながら、「今度は中村一座つていふ舊芝居がかゝつてゐるんです。昨夜內の姐さんと一緒に見にいつたんですけど、そりや實によ

ぐ演りますよ。もうふたりしてさんざ泣かされちやつて、筋もなにもよく覺えて來なかつた位なんですもの。」

私はさう云はれて初めて思ひ出した。この二三日前から、毎日午後になると慵い廻はし太皷の音が雨に紛れながら町から町へ、どろんどろんと靜かに響いてゆくのであつた。平生から旅役者とか、旅藝人とかいふやうな憐れな漂泊者に對して特殊の興味を懷いてゐた私は、舊芝居、中村一座といふ言葉を耳にすると、急に誘はれるやうな懷かしさを覺えて、その儘直ぐに行つてみる氣になつた。て、立ちぎわに、「その一座に誰かお前の惚れた役者でもゐると面白いんだがな。」と、心に思つた儘を揶揄ふやうに云ふと、美登利は

「ゐないこともないわ。」と、云つて、蓮葉に笑ひながらいそいそ身仕度をしはじめたが、その眼には包みされぬ嬉れしさが輝いてゐた。そして姐さんも見度がつてゐるからといふので、その店の若い女將も取卷きに加はつた。

野寄座といふ芝居小屋はその廓を出端れた處にあつた。濕つぽい沼氣のひそひそと匂ひあがつてくる暗い溝渠を渡ると、僅かばかりの廣場があつて、風雨に吹曝らされたバラックのやうな見すぼらしい小屋の表がゝりがすぐその向ふに立ち現はれて來た。白堊塗りの板壁はところどころ創痕のやうに剝げ落ちて、傾きかゝつた破風の下には役者の藝名をしるした繪看板と小さな紅提灯が薄寒さうに懸けつらね

られ、色の褪めた幟がその薄闇のなかで雨に濡れながらはたはたと重々しく鳴つてゐた。そして、大人十二錢、小人六錢と拙い勘亭流で書きあらはした黄いろい懸行燈の影から客を呼ぶ木戸番の聲さへ何となくひつそりとしてもの寂しかつた。私は女將のあとについて木戸を潜つた。

「へえ、お三人さあ。」と、下足の老爺が勢よく札を打合はせると、爐傍で股火をしながら居睡りしてゐた表方の男は吃驚したやうに眼を覺まして、きよろきよろ四邊を眄はしたが、すぐ後に女將と美登利が立つてゐるのをみると、急に間のぬけた愛想笑ひを浮べて叮嚀に挨拶をした。そしてアセチリン瓦斯の匂ひの漂つた階段を上つて、私達を二階棧敷へ案内した。

小屋のなかは表がゝりの割りに廣かつた。それでも、たかだか四百の入りが關の山であらう、じめじめするやうな垢染みた疊を敷きつめた土間には、隅の方に小さな花道がついてゐるきりで、桝もなければ、鶉もなかつた。低い天井には眞黒に煤けた廣告繪のやうなものが幾枚となく貼り連ねてあつて、その上には雨漏りの跡がぼやけたやうな雲形を一面に描いてゐた。そして、舞臺寄りに僅か四つのアセチリン燈が點つてゐるきりなので、場内の隅々にはいぢけたやうな薄闇が漂つて、饐ゑ腐ちてゆく果敢ない廢滅の香がそのなかにじつとたち澱んでゐるやうに思はれ、殊にその晩は入りが漸う四分ぐらゐの景氣だつたので、がらんとした寂しさはまたひとしほだつた。

その晩の出しものは「中將姫」に「野晒悟助」だつた。もう一番目は既に終つて、丁度中入りの幕間であつたが、私達が坐につくとやがて色の褪めた繼ぎはぎだらけの引幕を掲げて、直垂れのやうな淺黄の着

附けの上へ穢い紋附の羽織をひつかけた一人の役者が、今鬘をとつたばかりといふやうな顔容をしながらぬつと出て來た。そして、

「東西、東西。」と、聲高に云ひながら舞臺の端へ平蜘蛛のやうに平伏して、新潟訛りのある鼻聲でながながと口上を述べはじめた。

「演藝半ばには御座りますれど、一寸御免を蒙りまして明晩の解題を御披露致します。またしても扮裝を致した儘でこれへ出まして、さぞかしお見苦しうは御座いませうが、今晩も最早時間が迫つて居りますので、お湯に入つてゐる暇がありません。……えゝ、御當處開演中は御贔負をもちまして、毎夜毎夜賑々しく御見覽下され、樂屋一同大喜びて御座います。さて、又候明晩取り仕組んて御一覽に供しまする狂言の儀は、一番目狂言と致しまして「苅萱道心筑紫苞」二番目「野狐三次」都合あはせて八幕、幕あひなしの大勉强をもつて御覧に入れまする間、何卒明晩もお誘ひあはされまして御來場のほど偏に願ひ上げ奉ります。……扨て、茲もと取り仕組んて御一覽に供しまするは、お馴染の「野晒悟助」、先づは愈住吉社內の場より始めますれば、幕が開きましたら隅から隅まで御神妙に御見覽下さる可し。先づはそのため口上東西。」

緣日商人のやうな切り口上て述べたてながら、態と首を左右に振り動かして、白粉を塗つた美しくもない顔を觀客の前へ見て呉れがしにひけらかす容子が蟲唾のはしるほど厭味だつた。東京の華やかな劇場の空氣に馴らされた私は、襟られるやうな可笑しさを耐へながら、

「おい、美登利。お前の惚れてゐるのはあの役者だらう。」と、揶揄ふと、さすがに彼女も噴笑して、
「厭だわ、あんな厭味な奴ッ。」と云ひ放つて私の膝を輕くうつた。
「何を云つてるのさ。お前さんにや丁度いゝ似合ひ聟ぢやあないか。」と、女將も相槌を打つて面白さうに笑つた。

幕が開いた。住吉神社の松原はまるで櫟林のやうに暗かつた。海の遠見にはたゞ淺黄の幕を垂らしただけで、役者の頭の閊へさうな低い鳥居の傍には玉垣もなければ、鋪石もなかつた。そして、妙な處に藪疊みがあつたり、石塔があつたり、有り合はせの道具を種々にはぎあはせたものと見えて、場面には辻褄の合はぬ處が多かつた。そして舞臺へ出て來る提婆組の惡侍どもや町娘の小田井までが兎もすると役々の氣をぬいて、女將や、美登利の方へ厭な眼使ひをする容子が可笑しくて、私はしみじみ芝居をみる氣にもなれず、丁度その時醉月亭から婢が運んで來てくれた酒肴を開きながら、手酌てちびりちびり酒ばかり飲んでゐた。

そのうちに、ふとした機會て、私の眼は思はず土器賣の娘に扮した若い役者の方へ惹かされた。年はまだ十八九てあらう、細りした眼の大い、何處か愁ひを含んだやうな美しい顏容て、細く慄へる柔やかな聲までそつくり女だつた。私は輕い驚きに打たれて、美登利の肩をそつと突きながら、
「ありや何んて云ふ役者だい。眞迦に奇麗ぢやないか。」と、小聲て訊くと、彼女は振顧へりもせず、
「田之助つて云ふんです。」と、うわの空て答へて、釘づけにされたやうに一心にその役者の横顏を凝視

めてゐた。

私の心はその美しい田之助の顔からいつの間にか漸次と演技のなかへ吸ひ込まれて行つた。と、土器賣の詫助に扮した扇昇といふ役者の藝がその時になつて初めて眼について來て、娘に對する濃やかな情愛や、場當りの輕い諧謔のうちに、旅藝人にはまるで豫期してゐなかつたやうな老熟さが現はれてゐるのをみると、私の心からは今までの不愉快な矛盾が悉く消え去つて、熟しきつたやうな興味が自然と湧きあがつて來た。そして幕が下りてから後、女將に、

「東京の芝居で、千兩役者ばかり見つけて被居つた口にやさぞ可笑しう御座いませうねえ。」と、云はれた時には眞實私はもう笑へなくなつてしまつた。

「いや、どうして中々うまいよ。」と、私は自ら確めるやうな强い聲で云つて、「扇昇と云ふ役者なんざ東京へ出したつて決して恥かしかないね。」

「まあ、可成りにや演りますけど、なにしろ田舍のことですから……。」

「それに、今娘になつた女形なんざあ男にや惜しい位の容貌ぢやないか。」

「え、全くですねえ。私もあんな可愛いゝ役者は久振りで見ますよ。ねえ、美登利さん。お座敷へ招んだらさぞだらうね。」と、若い女將は生娘の昔に歸つたやうな浮々した聲で笑ひながら、美登利の袖を强くひいた。

美登利は意味の分らぬ薄笑ひを浮べながら眼で答へて、思ひ出したやうに

「はい、お酌。」と、冷たい酒を私の盃へ注いだが、暫らくするとまた何時の間にか舞臺の方へ顏を振り向けて、風を孕んでふわりと膨れあがつてゐる幕の面をうつとり凝視めてゐた。

幕數が進むにつれて私は益々深くこの憐れな一座の演ずる不具な技藝に引込まれていつた。そして、一座の役者達の境遇が孰れも一種の永遠の旅人であることが私の心に强い强い懷かしみを喚び起して、彼等の過去の生涯に對する空想や、萍のやうな現在の生活に對するさまざまの感情が漸次と細かく纏れてゆくうちに、到頭或不可思議な感激が私の胸一杯に漲つて來た。私は突如我を忘れたやうに財布のなかゝら三圓ばかりの紙幣を取り出して、それをそつと女將の手へ握らせながら、

「お前の家の名にして、これて纏頭をつけておやり。」と、小聲て囁いた。

「まあ、」と、女將はさも吃驚したやうに私の顏をじろじろ眺めてゐたが、やがて、「こんなに澤山お遣りなさらなくつても宜しう御座んすよ。此邊ぢや五十錢が定例なんてすから。」

「まあいゝから、それだけ通ほしてお呉れ。」と云つて私はその儘顏を背けてしまつた。

女將はそのうへ抗ひも出來ず、笑ひながら立ち上つて廊下の方へ出て行つた。するとやがてさつきの表方の男が揚幕のところからそつと花道へ出て來て、私達の坐つてゐる棧敷の横板へ脊のびをしながら、金三十圓、中村一座へ、醉月亭御客樣。と筆太に書いた疊一枚ぐらゐな大さのビラを貼りつけた。多數の觀客は一齊に舞臺から眼を移して私達の方を不思議さうに眺めた。そしてしまいには仁三と刄を合はせてゐる悟助までが、時々そつとそのビラの面へ流眸をはしらせた。

幕がありると間もなく後の板戸がすうつと開いて、そこから二人の老爺が顔を出した。とみると、一人は舞臺顔とさし〻變らぬ扇昇て、もう一人は一座の紋のついた印絆纏を着た座頭だつた。

「どうも只今は有難う御座いました。」と、二人はその儘冷たい板敷のうへ〻手をついて、卑下した言葉て纏頭の禮を述べた。

「いや、どうも僅かなことて。まあ此方へ入つて一杯お上り。」と、私は妙に嬉れしくなつて盃をさしたが、座頭は舞臺の都合てゆつくりしてゐられぬと云つて、幾度か禮を繰り返へしながら歸つて行つた。そして扇昇だけが私達と一緒にあとまて棧敷に殘つた。

彼はもう五十の坂を餘程越してゐるのであらう、世路の艱難が刻みつけた深い皺は額にも頰にも幾條となく暗い陰影を描いて、何處となく生に疲かれたやうな弱々しい表情が動いてはゐたが、それても輕く微笑む度に、その圓らな瓢輕な眼と、色の褪めた脣の邊には惡氣のない心をその儘證據だてるやうな何とも云へぬ懷かしみが濃く浮きあがつて來た。そして洗ひ晒らした盲縞の布子に、緣の摺り切れた角帶をしめて、少し前屈みに坐つてゐる彼の姿をみると、私は胸をそ〻られるやうな感激にうたれて、頻りに彼へ盃をさした。

「いや。どうも有難う御坐います。手前は至つてこの御酒の方は好物てな。」と、彼はさも嬉れしさうに脣をひきゆがめながら、殘り少なになつた酒を惜しむやうに味はつてゐたがやがて私の顔をしげしげうち眺めて、

「失禮な事を伺ふやうて御坐んすが、貴方樣は此地のお方て？」と、怪しむやうに訊いた。

「いや、私は東京からやつて來たものさ。」

「さうて御座いませうな。どうもお見懸け申すところ彼地の方としきや思はれませんもの。」と、彼は大きく合點いて、又盃を脣へもつてゆきながら、人懐い調子て、「かう申すとお恥かしう御坐いますが、實は私も生れは東京て御坐んしてな。……」

「東京？　へえ、そりや懐かしいねえ。」思ひもかけぬその言葉にひどく驚かされて、私は思はず聲を高めながら云ひ放つたが、丁度その時は野晒の後日譚めいた次の幕の愁嘆場があいてゐたので、しんとした土間からは白い顔が幾つとなく私の方を見上げた。そして連の女達も涙ぐむだ顔をそつと振向けて薄く笑つたが、私はそんなことは氣にもかけず熱心に、「そうしてもう久しく旅へ出てゐるのかね。」

「へえ、もう何て御坐います、彼此二十年にもなりますよ。」と、扇昇は寂しく笑ひながら嗄れた聲て徐かに答へた。

「東京は何處だね？」

「生れは淺草て御坐いますけど。彼地ても矢張り小供の時からこの稼業をして居りましたもんてすから……。」

「ほう、何處へ勤めてゐたね？」と、私は益々興味を惹かれて、貪るやうに彼の顔を見詰めながら訊いた。

「今は何うなつて居りますか、もう長いことかうして他處の土地へ出て居りますんて薩張り分りませんが、その時分にや吾妻座といふのが御坐んしてな、その座へあれても五年越し缺かさず出て居りましたよ。」と、彼は深く息をついて、「自體、私はもと橘屋てしてな、三八さんや、橘藏さんなぞとは隨分久しいこと交際つて居りましたが……。」

と、何か長い話てもしさうにしたが、その時、板戸の隙間から勞働者のやうな顔容をした一人の下廻はりが首をだして、小聲て扇昇の耳へ何事か囁いた。と、彼は急に浮かぬ顔になつて思ひ切り惡さうにもぢもぢしてゐたが、やがて舞臺てするやうにとんと疊のうへ〻片手をついて、

「ては、樂屋の方が忙がしいさうて御坐いますから、私は此れて失禮を致します。どうもつい長座を致して。」と、云つて徐かに立上つた。私は何だか一旦貰つたものを奪ひ返へされるやうな離れ難い氣がして、幾度か止めてはみたが、使に立つた下廻はりがせきたてるので詮方なく別れの言葉を述べた。そして、

「暇があつたら私の宿へ遊びにおいて。毎日寂しくつて困つてゐるんだから。」と、感情の籠つた聲て云ふと、彼は板戸の外へ出ながら名殘惜しさうに振顧つて、

「有難う御坐います。是非彼地のお話を伺ひにあがります。貴方樣もお隙て御坐いましたら、穢い處て御坐いますけど、樂屋へもお入りなすつて下さいまし。ては姐さん方、どうも種々御馳走樣になりました。」と、低く頭をさげて、その儘樂屋の方へ歸つて行つた。

私は、その肩寒げな寂しい後姿をみると急に胸が込みあげて來て、板戸の閉ざゝれたあとまでもじつとそつちを凝視めてゐた。二十年も昔に都會を逐はれた憐れな藝人の成れの果。その長い長い漂泊の生涯。それを思ふと、酒の醉ひに彩られた私の心には慘ましい同情の念が息塞まるやうに波うつて來て、冷やかな事實の裏に鉛の如く膠着してゐる暗い人生の姿がまざまざと見透かされるやうな突詰めた氣持ちがして來た。

打出しの太皷が鳴ると、私は連れの女達にせきたてられて漸う立上つた。漸次と客の減つてゆく薄暗い土間には、すぐそのあとから陰影のやうな寂寥が匐ひ寄つて來て、幕の裏で道具をかたづける物音だけが冷たく響き渡つた。狹い階段もうわの空で下りて木戸へ出ると、表方の溜りの薄闇がりには座頭と大夫元が待受けてゐて、

「又明晩もおいでを。」と、いひながら賑やかに私達を送り出した。その聲が私の胸には住み馴れた世界から逐ひたてられるやうに慘たらしく響いた。

芝居を出ると、冷たい風の吹きしきつてゐる廣場の角の處に迎ひの婢が醉月とかいた提灯をみせて待つてゐた。私はたつてと云つて勸められるのを斷つて、その儘女達と別れて、唯ひとり寐靜まつた眞暗な街路をとぼとぼと旅宿の方へ歸つて行つた。そして横しぶきに吹きつける冷たい雨の脚に追はれながら憐れな扇昇や田之助のうへを夢のやうに思ひ續けた。

その翌晩も私は魂を引寄せられるやうな氣持ちて、降りしきる霙のなかを野寄座へ行つた。

例の小橋の上まで來懸ると、その晩はどうしたものか、軒へかけた懸行燈も、紅提灯もすつかり消えて、四邊はまるで空家のやうにしんと靜まり返つてゐた。近寄つてみると、木戸の格子戸も堅く閉ざゝれて、裸の幟棹だけが四本も五本も闇のなかへぬつと突立つてゐるばかりであつた。私はその樣をみると胸を押縮められるやうな失望を覺えて、暫らくの間その儘ぼんやり座のまへゝ立ち悚んで、眞暗な表がゝりをうち眺めてゐた。漂泊常ならぬ旅藝人の事ゆゑ、入りが思はしくないのに見切りをつけて、急にまた先の興行地へ移つて行つたのではあるまいかと思ふと、しまいには淡い悲しみさへ犇々と湧き起つて、そのまゝ宿へ歸る氣にもなれず、足は自ら醉月亭の方へ向いたが、小半丁も來た頃、私はふと樂屋へ來いと云つた扇昇の言葉を思ひ出して、若しやと思ふ氣に先立たれながらまた急に後戻りをした。

眞暗な座の周圍を幾度か行きつ戻りつした末、私はやつと樂屋口へ通ふ狹い路次を探し當てた。恐る恐るそこから木戸をあけて中へ入つてゆくと、丁度舞臺裏と思ふ邊に荒れはてた小庭のやうな十坪ばかりの空地があつて、張りものゝ壞れたのや、空俵や、薪などが堆く積んであつた。樂屋の小窓からは黄いろい灯の光がぼんやり末廣がりに雨のなかへ滲みだして、呟やくやうな人の話聲がひそひそと洩れて來た。私はその下へ歩み寄つて案内を乞つたが、降る雨の音に紛れて私の聲は容易になかへ通じなかつた。幾度か試みてゐるうちにやつとすぐ上の硝子戸が開いて、そこから印絆纏を着た道具方らしい若い男がぬつと顏を突出して、迂散臭さゝうに私の顏をみつめながら、

「何だな。」と、突慳貪に訊ねた。

私は態と言葉を卑くして扇昇に逢ひに來たことを告げた。そして案内を頼むとその男は煩さゝうにぶつぶつ口小言を云ひながらそのまゝ顔を引込めたが、それと同時に樂屋のなかでは

「誰れだ。誰れだ。」と、三四人の聲が聞えて、いろんな顔がかはるがはる窓口へ現はれた。私は態と傘て顔を隱した。

少時するとあらぬ方てがらりと板戸を開ける音がして、さつと流れた燈の光のなかに半身外へ乘り出した扇昇の姿がみえた。

「誰れてすい？」と、彼は眉を顰めながらじつと私の方をみてゐたが、私だといふことが分ると急に聲の調子をかへて、

「おや、貴方樣てしたか。こりやどうも失禮を。さあ、とうぞ穢いとこて御坐んすげとお入んなすつて下さいまし。」と、いそいそ戸を開け擴げた。

私は俄かに溢れて來る懷しさを抑へて、

「實は今夜も見に來たんだけど……」と、暗い足許を探りながら其方へ歩み寄ると、彼は額に人の好さゝうな太い皺をみせて、

「そりやお氣の毒さまて。何分入りがありませんので到頭休んてしまひましたが、まあ、ずつとお上んなすつて下さいまし。おい、野郎共、そのお通り路を少しあけてくんな。」と、彼は忙はしさうに先へ立

つて私を案内した。

入口の土間の隣りは道具方や、下廻はり達の溜りになつてゐると見えて、賤しい顏容をした男の顏が薄暗い洋燈の光のなかに幾つも並んでゐた。私は、怪訝な眼眸をして見返へる彼等の間を通りぬけて、冷たい板敷の上へ出たが、わたり七間にも足りない狹い舞臺はすつかり道具がかたづけてしまつてあるのでがらんとしてもの寂しく、樂屋の方から流れてくる靄のやうな薄い光が簀の子の上までぼんやり匍ひあがつて、人氣のない觀客席の暗闇からは濕つぽい匂ひのする風がすうつと顏を包むやうに冷たく吹いて來た。私は導かれるまゝに、扇昇の後についてぎしぎし軋む階子段を上つた。

二階の樂屋は二十五六疊も敷かる細長い大部屋だつた。天井には煤けた梁が肋骨のやうに現はれて、乘込みの時に使ふ各自(めいめい)の藝名を記した繪ビラを結んだ造花の櫻が一列に挿しつらねてあつた。反古で張つた板壁の際には衣裳の入つてゐるらしい三升(かます)や桔梗の紋どころの剝げかゝつた古葛籠が幾つも積み重ねてあつて、その側の棚にはいろいろな男や女の鬘が曝首(さらしくび)のやうに置き並べてあつた。そしてまた三つの窓際にはそれぞれ小棚が釣つてあつて、そのうへには白粉入の竹筒や、水銀の斑らに剝げ落ちた凸凹な鏡や、その他の細々した化粧道具が亂雜に取散らかしてあつた。そして二箇所に釣るした暗い釣洋燈の光は、それ等總ての慘ましい物象のうへに深い深い悲しみの陰影を隈どつてゐた。

部屋の眞中に据ゑた大火鉢の周圍には、田之助や、昨夜口上を云つた幸吉をはじめ一座の役者が八九人圓坐になつて茶話しをしてゐたが、私が入つてゆくのをみるとぴたりと話をやめて、急に坐を開いた。そ

して孰れも好奇心に充ちた眼眸で私の顔を偸み視ながら默つて挨拶をした。

扇昇は坐に就くと、大藥罐から濃い番茶を湯呑みに注いで薦めながら改まつて昨夜の禮を云つた。そして長い煙管で煙を吐きながら、

「寒いのによくお出掛でしたなあ。」と、云て嬉れしさう笑つた。

私は口を開かうにも何しろ見知らぬ男ばかりの中なので、妙にとり附き場がなくて困つた。それに役者らしくない二三の男の容子をみると博徒の宿へでも連れて來られたやうな淡い恐れさへ手傳つて、猶更舌の力を奪はれてしまつた。

扇昇は頻りに取做す氣で、

「だがまあ妙な御縁で、珍らしいお方にお眼にかゝれたものですよ。私やもう東京のお方を伺ふと眞から懐かしう御座んしてな。」と、しみじみ懐かしさうに眼を細めながら云つて、「此地には大分長く御逗留で？」

「いゝや、まだ一週間ばかりですよ。」

「何か御商用でゞも？」

「なあに、唯ぶらぶら見物旁々旅をしてゐるんでさあ。」

「そりや何より結構で御座いますなあ。」と、扇昇はつとめて一座の話を促がすやうに笑つたが、併しその甲斐もなく却つて重苦しい沈默が火鉢の周圍にたち歸つてきた。それとともに、私の心からはいつ

かしら初めてこの小屋へ入つて來た時の疼くやうな歡びが漸次と消え失せて、緊張してゐた情趣はみるみる厭はしい破綻を示してきた。そして樂屋の隅々まで遍滿してゐる詩のやうな美しい廢滅の匂が、今にも醜いもの丶爲めに裏切られてしまいさうな恐れが胸一杯に込みあげて來て、しまいには到頭我慢しきれなくなつた。て、私は思ひ切つて扇昇を隅の方へ呼んて、何處か氣のおけない家へ行つて一杯飮みながら面白い昔話ても聞かうと云ひ出すと、彼は急に相好を崩して、

「有難う御座いますが、それじや餘りお氣の毒てすから、……」と、心にはない遠慮をした。

「い丶さ。暇なら是非一緒につきあつておくれ。」

「さうて御座んすか。ぢやまあお言葉に甘えまして。」と、云つて、暫らくの間、何か思惑ありげにもじもじしてゐたが、やがて云ひ難くさうに、

「實は誠に申兼ねますが、少々お願がひがあるんて、」と、口のなかて呟きながら、一座の方を顧みて、田之助をそつと眼て招んだ。

田之助は怪訝な顏容をしながら立つて來た。と、扇昇は笑ひながらその耳へ口を寄せて、まるて我子にても對するやうな優しい聲て、

「今旦那がな、何處かへ連れてつて一杯飮してやると仰有るから、お前もお願ひ申して一緒にお伴をさせて戴きなよ。」

それを聞くと田之助は女のやうな柔い頰に包みきれぬ嬉れしさを波だ丶せながら默つて頭をさげた。

固よりその願ひを待つまでもなく、此方から頼んで無理にも來て貰ひ度いくらゐだつたので、私は幾度か大きく合點いて、その儘階子段を下りた。そして薄暗い張物の陰に立つて待つてゐると、二階では二人が皆に何か云はれてゐる聲が聞えた。

「おい、田之公。お前は何處へ行くんだい？」と、頓狂な聲がしたが、それに答へる田之助の返事は聞きとれなかつた。と、今度は幸吉の意地張つた聲が嫉ましさうに、

「旨え穴に喰らひ附きあがつたなあ。一體ありや何者てえ。……ふん、錢のある奴にや兎角莫迦が多いや。」

「失禮なことを云ふもんじやねえ。東京の方はみんな太ッ腹だ。手前えみたやうに根性がぎすぎすしちやゐねえんだ。」と、扇昇の太い聲が聞えた。私は聞くに耐へないやうな不愉快な氣になつて、そつと足音のしないやうに舞臺から樂屋口の方へぬけ出した。と、やがて扇昇は鯉口やうな厚いアッシを引被けて、その後から田之助が銘仙か何かの座敷着に着換へて、帶を結びながらいそいそ下りて來た。

「どうもお待ち遠樣でした。」と、扇昇は笑ひながら戸を開けて、暗い路次を先へ立つた。

戸外へ出ると、私は今迄の不快な氣分がさらりと消え失せて、再び新しく熱しきつたやうな情調になつた。遠い北の國の果てで、見も知らぬ旅の藝人と夜の霙に濡れながら、燈の疎らな寂しい街を歩いてゐるのが、何か深い深い因縁ごとのやうにも思はれ、懷かしい東京の空を思ひ起しながらも私の胸には口をきくさへ惜しいやうな嬉れしさが一杯に漲つてきた。

「あの幸吉つてのは一座に長くゐる男なのかい？」と、私は長い沈默の後に、ふと思ひ出してつかねことを訊いた。

「なあに、渡り者でさあ。」と、扇昇は吐き出すやうに云ひ放つたが、そのあとに續いて田之助は、

「性が惡くてほんとに困るんです。」と、女のやうな約ましやかな聲で添け加へた。

ふと氣づくと、私達はもういつの間にか醉月亭の前まで來かゝつてゐた。今夜は珍らしく客がないと見えて、明るい二階座敷もひつそりとしてゐた。私が先にたつてつつと店口へ上ると、帳場に坐つて子供をあやしてゐた女將は吃驚したやうに飛んで出て來て、口早に昨夜の禮を云ひながら。

「おや、まあ、今夜は面白いお連れさんですね。」と、云つて蓮葉な聲を出して笑つた。

「驚いたらう。もうすつかり口說き落して、いゝ仲になつちやつたんだよ。」と、私もつい引込まれて笑談を云ふと、後では扇昇が聲をあげて笑つた。そして彼は卑下した言葉で田之助を女將に紹介はせながら。

「どうぞこれから御贔負に願ひます。」と、叮嚀に頭をさげた。

私達はすぐ奥まつた二階座敷に案内された。そして一つの餉臺を三方から圍んでゆつくり座つた。見つくろつた肴も通つて、熱い酒が各自の盃に注がれると、扇昇と私との話は期せずして東京の芝居談に落ちて行つた。扇昇は貪るやうな調子で、諸方の座の運命や、役者達の浮沈を細々と聞糺したが、併し、二人の間には餘りに長い歳月の徑庭があつた爲めに、同じ事實を話し合つてゐながら互に意味の通じな

いやうな事が多かつた。殊に私の語る現在の役者の名や、狂言の名は彼にとつて最も解し難いもの丶一つて、それが話題に上る度に、彼は幾度が「先代」といふ言葉を繰返さなければならなかつた。

そのうちに、彼はまだ若かつた時代の思ひ出の方へ漸次と話しを移して行つた。その頃繁榮を極めてゐた芝居街の光景や、當り狂言の荒筋や今はもう殆んど世人の記憶から拭ひ去られたやうな多くの名優の逸話などがそれからそれへ絶え間なく續いた。私は過ぎ去つた世界の美しい繪卷を繰り展げてゆくやうな面白さに引入れられてうつとり耳を傾けたが、そのうちに深い皺の刻まれた扇昇の頬には酒の醉ひとともに異樣な若々しさが漸次と輝いて來て、身振手ぶりをする度にじつと私の顔を瞻める彼の瞳の底には限りない歡びが燃え上つて來た。そして戒を破つた僧の怨念で生きながら手足を地獄の毒氣に蝕まれた昔の田之助の上へ話が及ぶと、その妖艶な「時代」の亡靈が巧みに彼の脣から織り出されて、私は全く彼の話上手に魅せられてしまつた。

その時、ひそやかな足音がするすると廊下の面を滑つて來た。と、みると、二人の役者達にはみえない障子の陰に美登利の白い顔がふうわりと浮び出て、暫らくの間そこから私の顔をじつと瞻めてゐたが、何と思つたかにつと艶やかに笑つて、輕く體を揉みながら兩手を犇と組み合はせて私を拜んだ。私は、物語の腰を折る心許なさに、たゞ默つてその容子を見てゐたが、到頭我慢しきれなくなつて噴笑しながら、

「何をしてゐるんだな。入つたらいゝぢやないか。」と、呼んだ。

その聲に應じて彼女はやつと明るい座敷のなかへ入つて來たが、いつもより厚く化粧したその頬には上氣したやうな血の色がぼうつと燃えてゐた。そして私の傍へきて坐をしめると、妙に取澄ました顔容をして、

「ほんとに酷いわねえ。」と、意味の分らぬことを云ひながら突如有り合ふ銚子を取り上げたが、その手は可笑しいほどぶるぶる慄へてゐた。私はそれをみると可憐な女の心持がすつかり讀めて、再び擽られるやうな氣持ちになりながら、

「おい、美登利。お前の御贔負はこの田之助さんだつたつけね。」と、空恍けて正面から揶揄ふと、彼女は俄かにさつと耳の附根から眞紅になつて、

「知りませんよ。そんなこと。」と、云つて、私の膝をちかッと抓りあげた。

美登利のために話の繼穂を奪はれてぼんやりしてゐた扇昇は、その容子をみると直ぐ氣の好い笑ひを洩らして、

「いやはや、この田之さんにも困りもので御坐いますよ。方々で惡い罪を作りましてな。ははは、、、。今にあの手足へもきつと怨靈が憑きませうよ。」さう云ふ聲はまるで祖父が孫自慢をしてゐるやうだつた。そして笑談らしく眞顔になりながら、「ですが、全く情事は若いうちの事ですな。男盛りも二度とないつてことを云ひますが、全く白髮が生へちや意氣地がありませんや。」

「だけど、二十年もさうして旅をしてゐる間にや、隨分面白いこともあつたらうねえ。」と、私は又話

頭を扇昇の方へ移しながらしんみりした調子て云つた。
「そりやないぢや御坐んせんけど、今から考へてみりや皆夢てさあ。ははは、、、。」と、深く息をひくやうに笑つたが、やがて又徐かな調子になつて、「私はいつも此奴に云つて聞かせるんですが、修業盛りにやまつたく女は絶ちものてさあ。私どものやうな細い稼業をしてゐるものは、ちよいとした一時の迷ひて出世の梯子を跨ぎそこなつたら、もう一生涯浮ばれやしませんからなあ。」
「さうだらうともさ。併し田之助さんのやうに餘り奇麗すぎると、ついこんなのが引懸るんだねえ。」と、私は、時々田之助の方へ燃えるやうな流眸を送りながらうつとりしてゐる美登利の肩を叩きながら笑談のやうに云つて、「お前も惚れるんなら先の修業の邪魔にならないやうにするがいゝぜ。」と、高く笑つた。
　酒の弱い彼女はもう度胸が出來たと見えて間の惡い顔もせず、浮々した聲で、
「大丈夫てすよ。私の方ていくら惚れたつて、先樣て相手にして下さらないから。」
　それを聞くと、扇昇は急に氣が變つたやうに噪ぎ出して、
「ふゝ、味を仰有るぜ。」と、頓狂な聲て叫びながら、舞臺てする「茶屋場」の伴内のやうに、平手て顎をついと上へ押しあげて、態と猿のやうな滑稽けた顔容をしながら、「私がもう十年も若いてえと、お相手になつて相當の一幕も演じるんだが、惜しいことにや年を老りましたよ。ははは、、、。だが、今だつてなあに相手次第に依つちやまだまだ。昔からこの役者つてえ商賣にや思惑違ひの益得がありまし

てね、この顔だつて、舞臺で精々塗り立てた所を御覽に入れりや萬更でも御坐んすまい。」

「ほほほ、、、厭だわねえ。」と、女も、田之助もその容子をみると、腹を抱へた。

そこへ階下から餘りお賑やかだからと云つて、女將まで笑ひながら上つて來た。扇升はまたそれに機を得て、一時に醉ひが發したやうに浮かれ出した。側で見てゐると可笑しい程擧動に油がのつて、輕い地口を云つたり、多愛もない笑談を云つたりひとりで騷いでゐたが、そのうちに感興が張り切れさうに熱して來たとみえて、到頭さびた中音で語呂のいゝ流行唄をうたひはじめた。そしてそれにも飽きてくると、今度はついと立上つて、勿體らしく衣紋をつくろひながら、

「近頃は地がないんで、舞臺ぢやさつぱり踊りませんが、……と、」云つて、美登利の絃をかりておどりを踊りだした。

「紀伊の國」や、「喜撰」をやつてゐるうちはよかつたが、美登利の知らない古い手になると、彼は笑ひながら、

「えゝ、面倒臭え、口三味線で踊つて退けう。」と、聲色まじりに云ひ放つて、忙はしげに口で絃の音を眞似ながら頻りに踊つた。體の固くなつたせいか、身ぶり手振りに折々調子のはづれた穴はあいて來るが、それでも流石は昔みつしり仕込んだ藝だけに、決して醜くゝはなかつた。そして一生懸命に踊りぬいてゐるうちに、漸次と息づかひがせわしくなつて來て、彼の額には玉のやうな脂汗が自づと滲み出て來たが、やがて苦しげな咳嗽をたて續けにせき込んだかと思ふと、急に眩暈でもして來たのか、鼎の

上へぐたりと倒れてしまつた。
「どうしたい。」と、私が思はず聲をかけると、彼は顏を顰(しか)めながら力なく笑つて、
「愚痴を云ふんぢや御坐んせんが、全く年にや勝てませんなあ。」と、悲しげに呟いて漸う起上つて坐になほつた。私はその恍(とぼ)けたやうな萎えた顏をみると過ぎ去つた憂い辛い苦勞がその儘その面に凝結して來たやうに思はれて、思はず眼を逸らした。そして亞鉛葺の屋根を打つ霙の音にじつと聞き入つてゐると、いつかしらこの年寄つた藝人の悲慘な生涯が暗い陰影のやうになつて私の眼の前にふらふら搖曳して來たが、それとともに私はその行詰めたやうな深い悲しみを心ゆくまで味つてみたい氣になつて、噪(はしや)いてゐる女達や田之助を外にして、新らしい盃を扇昇へさしながら、
「一體、お前さんはどうして旅へなんぞ出ることになつたんだい？」と、感情の溢れた聲で訊いた。
　扇昇はそれを聞くと、暫らくの間まじまじ私の顏をみつめてゐたが、やがて苦しげに笑つて、
「まあ、それも、かう云ふと可笑しう御坐いますが、つまり女故ですな。それをお話しすりや隨分長いことになりますが、……」と、彼は酒で唇を濕ほしながら、淳々と身の上話をしはじめた。初めは促がされてやつと一句二句つゞ途絶れながら云つてゐたのが、暫らくすると漸次興にのつて來て自分から身を入れてしみじみ話しだした。
　彼をかうした憐れな旅役者の境涯へ追ひ落したのは、今からはもう二十餘年も昔、吉原の京町で可成の全盛を誇つてゐた遊女だつた。お互に惚れあつて、夫婦約束の堅い誓紙まてとり交はした。そしても

うあと半年で年明もあけると云ふ間際になつて、その女はその頃流行つた虎列刺の爲めに扇昇を跡に殘して死んでしまつた。彼はその女ことについて餘り多くを語らなかつたが、その時分、彼がまだ額に皺のない若い役者であつたと云ふ事實だけで、私はこの相思の二人の間に纒綿してゐた情緒と、それが女の死後彼の胸にどれほど慘ましい創痕を殘したかと云ふことを充分想像することが出來た。そして、戀人の死は彼にとつて耐へ難い損害ではあつたが、それよりも猶一層彼を苦しめたのはそれ迄につくつた諸方の不義理であつた。その爲めに彼はその頃淺草の三筋町で清元の師匠をしてゐたたつた一人の母親まで喪つて、到頭憐れな流浪の身となつてしまつた。

「……その時分にやまだ座の方でも相中どころでしたから、身上と云つたつて別に定まつたものがあるぢやなし、年が年中まあ貧乏のし通しだつたんです。ですから一旦捨鉢になつたとなると、肩身の狹めえ土地なんぞにや微塵も未練は殘りや致しませんや。錢にさへなりや何處へでも行けつてんで、丁度あれは憲法發布の時でしたよ、十人ばかりの見ず知らずの一座で千葉へ買はれて行つたんです。それがまあこんな旅役者風情に身を落すはじまりで、それからずつと房州路へ廻りましたが、その時分にや何と云つてもまだ年が若いし、女は出來る、金は出來る。全く旅つてものはこんな面白いものかと思ひましてね、先のことなんかまるで考へもしずぐるぐる廻り歩いてうちに、到頭何時の間にかほんとうの旅役者になつてしまいました。」と、彼は寂しく笑ひながら、又盃をとりあげた。そして冷たくなつた酒を口に含んだまゝ、じつと一處に眼を据ゑてゐたが、やがて嗄れた聲で咳をきりながら、

「その間にや幾度かもう一度東京へ歸つて見度いとも思はないぢやありませんでしたけど、その時分にやもう師匠も亡くなつてしまう、他に頼りにする人はなし、自分も結句かうして旅へ出てゐる方が氣樂のやうな氣もするんて、到頭この年になるまでこんなことをして暮らしてしまひましたよ。…… 何しろあの中村一座へ入つてからだつて、もう十年近くにもなりますすんてすからなあ。」

「さうかねえ。」と、私は涙の滲むやうな悲しい心地に浸りながら、「今ぢやもう少しも東京へ歸つてみやうと云ふ氣はないかね？」

「いゝえ、もうどう致して。私のやうなものが今更歸つてみましたところで仕様が御座んせんや。身寄りのものも生きてるか、死んでるかそれさへ分りませんし、たかだか飢ゑ死にする位が落ちかも知れません、はゝゝ。まあかうして旅を歩いて居りますうちに、せめて内地で骨になれりやそれでもう本望て御座いますよ。」と、彼は汚れた前齒をみせて態と聲高に笑つた。

私はそれを聞くと眼の前が急に暗くなつてゆくやうな氣がして、心の底では人知れず嘘唏した。この一篇の哀史を身に纏つた憐れな藝人に對する同情の念は、その瞬時から不思議な執着に變つて、私の心に深い深い創痕を印した。そして到頭その晩は二人を無理に引留めて、一緒にその料理店へ泊つた。私は女將や美登利が餘りだと云つて留めるのも聞かず、扇昇と臥床を並べて寢ながらまた彼の色褪せた唇から起伏の多い生涯の追憶を貪つた。秋田で機屋の下男にまで成り下つた話や、函館で小料理屋の入夫になつた話や、さうした可笑しいやうな悲しいやうな閲歴を細々と物語つてゐるうちに、彼は宵からの

酒疲れが出たと見え、いつの間にかすやすやと深い睡眠に落ちてしまつた。苦もなげな寢息は、滅入るやうなひそやかな雨滴の音に紛れて、暗く息づく行燈の火影は彼の横顔を木彫りの假面のやうにぼんやり浮き出させたが、私はそれを瞻めてゐるうちに譯もない悲しさが犇々と胸に込み上げて來て、到頭曉方までさまざまな妄想にとり圍まれながらまんぢりともしなかつた。

その翌日も、またその翌日も私は野寄座を訪れた。扇昇は久振りであんな面白い一夜を送つたと云つて、私の顔をみる度に禮を云ふことを缺かさなかつた。田之助もそのうちにすつかり私に馴染んで、時には「大江山頼光館」や「太皷わりの仁田」などゝ云ふ古い臺本などを持つて私の宿へ話しに來ることもあつた。そのほか一座の誰れ彼れとも漸次と知合ひになつて來たが、深く知れば知るほど私はこの一團の役者のなかに不思議な零落の人がゐるのに驚かされない譯にはいかなかつた。そして扇昇にひかれた執着はいつともなしに漸次と一座の人々の上にまで擴がつて行つた。

座頭は嵐佳久藏といつて、大阪の先代璃珏の弟子であつた。今では舞臺へ出ることは多くないが、臺本や演技にかけては驚く可き精通家だつた。道具方の豐爺はこれも矢張り大阪もので、以前は梅升の弟子で、小供の時から舞臺の上で苦勞をして來た男ではあつたが、今ではもう暗い簀の子の下で、塵に塗れながら道具を組立てることより外に殆んど何の能もない憐れな不具者だつた。鳴物のお吉も生れは東

つた。

併し此等の人々の中で最も不思議なのは蝠若といふ年老つた役者であつた。生れは何でも栃木邊で、若い頃には東京にもゐたといふが、もう七年も一座にゐながら誰ひとり彼の閲歷を詳かに知つてゐるものがなかつた。彼は一座でも全く一個の廢人として通つてゐる男で、「達磨」といふその字名が示すやうに、日が一日口もきかず樂屋の片隅へ孑然と坐つて、ぼんやり空を瞻めてゐるやうな男であつた。宙乘りで舞臺へ落ちてからさうなつたのだとは云はれてゐたが、それには鉛毒や女の毒も餘程手傳つてゐるらしく、口をきく時には必ず脣を激しくひき歪めて、やつと小供のやうな片語を發し得るに過ぎなかつた。そして唯食慾だけが並はづれて激しかつた。三人前の飯を平氣で平らげる位のことは決して珍らしくなかつた。田之助などは彼が猿のやうな顔をして怒る容子が可笑しいと云つて、よく惡戯したり、揶揄つたりしていゝ玩弄ものにしてはゐたが、併し一座ではこの科白も碌に云へぬ男を誰れも皆不思議な位親切に介抱してやつてゐた。或日、私が扇昇にその訣をきくと、彼は寂しく笑つて、

「彼奴も可愛さうな男ですよ。あれでもこの一座へ來た時分にやケレン師で素晴らしい人氣をとつたもんですがねえ。私達だつてこんな稼業をしてゐりや、何時あゝなるか分らねえんですから、義理にも薄情な眞似は出來ませんや。」と云つた。

それから又一座にはもう一人妙な老婆がゐた。それはお花婆さんと云つて、以前は郡山邊の有福な生絲商人の後家であつたが、去年の夏、網走へ興行にゆく途中、上常呂の谿間の寂しい驛遞で病死した鶴

藏といふ役者に惚れて、身上もすつかり入揚げてしまつた揚句、何時ともなしに一座のものになつて、もう八年近くも一緒に旅歩きをしてゐるのださうて、氣の輕い、酒の好きな呑氣な女だつた。

私は死んだ鶴藏の名人てあつた話も聞いた。旭川て女の手品使ひと駈落をした梅吉の話も聞いた。それから又田之助が去年の冬、小樽の運送問屋の娘に唆かされて、東京の方へ出奔しやうとした話も聞いた。雨に降りこめられたうすら寒い樂屋て、一座の人々と膝を並べながら、さうした耳新しい話を聞くことが私にとつてはどんなに樂しかつたらう。日一日に新らしい興味と、憧憬がそのなかゝら湧き起つて、私は知らず識らずの間に漸次と深く沒頭して行つた。そして私の名が誰彼の別なく自由に呼び馴らされるやうになつた頃には、もう私はその一座から全く離れ去ることの出來ないものになつてゐたのであつた。

或晩、私は寂しい夕餐を終はると又例のやうに宿をとびだした。

その晩は珍らしく風の吹き去つた跡て、深海の底を思はせるやうな大空には蒼白い月光が際涯もなく充ち溢れてゐた。觸れたら音をたてゝ崩れさうな脆い寒氣は萬象の面を恐ろしいまて透明にみせて、ひつそりした廢市のうへには柩衣のやうな凄まじい色が傈へてゐた。

野寄座の前まて來かゝると、その晩も木戸の灯が落ちて、人影もない廣場には月の光が我ものの顏にた

ちはたがつてゐた。私はいつもよりひとしほ堪え難い寂しさに誘はれて、また扇昇達と面白い話しでもしながら一夜を暮らさうと思つて、通ひ馴れた狹い路次を樂屋の方へ入つて行つた。

階下の溜りでは道具の疊爺や、鳴物のお吉や、下廻はりの誰彼が暗い洋燈の下へ集まつて頻りに花札をひいてゐた。僅か二厘か、三厘の端錢を賭けて勝負を爭つてゐるのだが、彼等の顏には張りきつた熱心が動いてゐた。私はその側をすりぬけて二階の樂屋へ上らうとしたが、階子段のところにお花婆さんが小さな豆洋燈をつけて眼鏡をたよりに衣裳の綻びを縫つてゐて、私が來かゝのをみると、急にその手をやめて笑ひながら挨拶した。

「どうしたんだい。又丸札ぢやないか。」と、私も愛想よく笑ひながら訊いた。

「え、つい今しがた札が上りましたて。」

「困るねえ、毎晩これぢや。二階もいやにひつそりしてゐるぢやないか。皆はどうしたい？。」

「今夜はねえ、座頭が割前を出して、皆して醉月亭とかへ飲みに行きやしたよ。散錢でも敢かなきやとても遣りきれねえつて云つてるんです。」と、彼女は眉を顰めて困つたやうな身振りをした。それを聞くと私は急に落膽して、

「ぢや誰もゐないのかい。」

「いゝえ、二階にや扇昇さんや、照さんが殘つてゐやすよ。扇昇さんは又例の持病でな、今日は一日ひどく鬱ぎ込んでゐやすから、旦那どうにかしておやんなせえな。」と、婆さんは小鼻のわきに一杯小皺を

寄せて笑つた。

私はその儘樂屋へ上つた。

火鉢の側には扇昇と、照十郎がしよんぼり對向ひに坐つて、少し離れた窓際には例の蝠若が棚の上へ片肱凭せながら憎えたやうな空洞な瞳を空にさまよはせてゐた。そのほかには三つの大入道のやうな黒影が壁の上へ匍ひかゝつてゐるぎりて、廣い樂屋はいつになくひつそりと靜まり返つてゐた。

側へ寄つてみると、扇昇は「新田館の場」て笹目の兵太を勤めたらしく、鬘をとつたゞけて布子で作つた色の褪めた鎧の上へ眞紅な陣羽織を着込んて、その上から樂屋着の穢い褞袍をはおつてゐた。照十郎も湊御前の派手な着附けに金絲の繍のある裲襠を着た儘大趺坐をかいて徐かに煙草を吸つてゐた。いづれも仕度をかへる元氣もなさゝうに悄れ返つて、今入つて來たばかりの私にも、彼等がもう長い間一言も言葉を交はさずに坐つてゐたらしいのがはつきり感じられた。それても一番先に挨拶したのは照十郎だつた。私はそれに輕く答へながら、

「又今夜も出來ないんだつてねえ。」と云ふと、彼はつくづく情けなさうな聲て、

「何うもこれぢや全く遣りきれませんよ。なにしろ三幕もあけて、入りが十二つて云ふんですから驚ろくぢやありませんか。それに今夜つから特別大勉強をして、場代木戸錢とも八錢てえ安値にしたんてすから、上り錢がしめて九十と六錢さ。これぢや一座二十五人がお飯を戴くことはさて置き、一晩の税金にもなりやしませんや。」

「酷いねえ」。私も氣の毒になつて思ひやりの深い調子で云つた。

「なにしろ科白(かつぜき)を云つたつて、土間ががらんとしてゐやがるから、張合ぬけがして、てんで芝居になつて來やしませんや。」と彼は自棄に烟管を叩きながらくどくどと不入りの愚痴をこぼしだした。――一體この石狩川の下流に沿つた町々は漁期をあてに入りこんでは來たもの丶、一座にとつては殆んど初めてと云つてもい丶ほど馴染の淺い土地だつたので、初日から三日目頃までは可成りの大入りを占めたにも拘らず、もう五日目となるとがらりと客が落ちて、二週間ぢかくもうつてゐながら上り錢は一座の米代を支へるにも足りない程だつた。一座は今更どうすることも出來なかつた。幾許(いくら)かの纏つた金が集まるまでは次の興行地へゆくことはもとより、越年のために小樽の根城へ引上げる事すら出來ず、毎日毎日當てにもならぬ客足を賴みにして、何時までもこの野寄へ逗留してゐなければならないのであつた。

扇昇はその晩どうしたものか、いつもとまるて違つてゐた。丸札を出さうが、入りがなからうが、いつもなら眞先に飛び出して來て根も葉もない輕口を云ひながらひとりで喋いてまわる人が、どうしたものかその晩ばかりは蒼ざめた顏容をしてまるて口もきかず、前屈みに圓く坐つて影の薄いやうにしよんぼりしてゐた。私は心細くなつて、

「おい、扇昇さん。どうしたんだな。馬鹿に悄氣(しよけ)てるぢやないか。」と、賑やかに話を促した。

「また例の持病てさあ。鬱ぎの蟲が腹んなかへ入えたんですよ。」と、照十郎は側から笑ひながら口を入れた。

「持病つて、何處が惡いのかい？」

「いゝえ、私は時々たゞから鬱いて來ましてな……」扇昇は聲まで低く落して、寂しさうに呟いた。

「ぢやなぜ座頭なんかと一緒に飲みに行かないんだい？　盃のちんと云ふ音を聞きやそんな持病なんざ何處かへとんで行つちまはあね。」と、私は氣をひきたてるやうに云つたが、併し彼はたゞ

「えゝ。」と、煮えきらない返事をするばかりであつた。

私は詮方なしに默つてその横顔をじつと瞻めてゐた。薄暗い洋燈の光を斜に受けた半面には濃く塗つた白粉がばさばさに乾いて、處々荒れた地膚が黒く透いてみえた。そして蟀谷から頰へかけてたるんだやうな薄い陰影が浮いて、深い皺が幾條となくその上に斷れこんでゐる様をみると、私はまた耐らないほど胸が迫つて來て、態と景氣よく調子を張りながら、

「どうだい、此れから座頭達の向ふを張つて、何處かへ飲みにいかうぢやないか。」と、云ひ出すと、彼は何時にない氣の進まぬ氣振をみせて

「え、有難う御坐います。」と、禮だけ云つた。

照十郎もいつかその調子に引込まれて、つまらなさうな顔をしてゐたが、やがて

「そんな無駄なお錢を使ふより、今夜は樂屋でしんみり飲まうぢやありませんか。さつきつから扇さんのおつきあひて、私まですつかり氣を腐らしちまいましたよ。」

相談はすぐそれに纏つて、照十郎は引立てるやうに扇昇を促しながら階下へ着換へをしに下りて行つ

た。私は僅かな酒代を彼に渡してそれていゝやうに取計らつて貰つた。そして二人が立つて行つた跡には、私と蝠若とたつた二人ぎり對向ひに面を合はせて殘つたが、やがて彼は何と思つたかふらふらと蹌めきながら立上つて、隅の方から引幕の古いので作つた夜具をひき出して來て、窓際へごろりと横になつてしまつた。そして痩せた手を延ばして小棚から駄菓子のやうなものを袋ごと取りおろして、頻りにもりもり噛つてゐたが、その音が聞えなくなつたかと思ふと、彼はいつの間にかもうぐつすりと深い眠りに落ちてゐた。そして緩かに寐息を吐く度に、夜着の脊なかで、鶴蔵さんへと書いた大きな紅文字が、生命を得たやうにかすかに蠢めいた。

暫らくすると、扇昇も照十郎も風呂を使つて平生の樂屋着に着換へて上つて來た。と、すぐにもう三升のついた大葛籠が餉臺のかわりに火鉢の側へ持ち出されて、小道具のなかゝら撰り分けた徳利や、盃がその上へ體よく並べられた。そして階下から下廻りの一人が買つて來た酒をもつて上つて來ると、照十郎はまめまめしく立働いて、それを大藥罐のなかへ注けて燗をした。やがて香ばしい乾魚を肴に、私達の貧しい饗宴は開かれたのであつた。

扇昇は私や、照十郎にすゝめられて重い手つきで幾つとなく盃を重ねたが、それでも矢張り浮いて來なかつた。默つて俯向いて考へ込んでゐる間に、光のない瞳は時々私達の方へさまよつて來たが、ふと視線があふと彼は輕くうなづいて寂しく微笑むばかりだつた。それにひきかへて酒の弱い照十郎はすぐに眼の周圍を眞紅にしながら、話の調子までひどく若やいて來て、何くれとなく口まめに喋舌りつゞけ

た。私も餘り扇昇が沈んでゐるのでつい照十郎の話の方へ引入れられて、

「どうだい、照さん。ちつと罪つくりな話でもして聞かせないか。」と、思はず水を向けると、彼は急に相好を崩して、

「はゝゝ。いゝねえ。だけど、私や妙な性分でね、こんな稼業をしてゐながら、美い女をやらうなんてえ了見を起したことは一度もねえんですよ。まあ大概の場合が、此奴あ錢になる女だと踏んでからでなきあ手が出ませんや。」

「そりやまた酷いねえ。よく絞るとか、貢がせるとかいふ事を聞くが、隨分腕がいるもんだらうねえ？」と云ふと、彼は益々圖に乘つて、

「なあに、大した腕もいりませんや。だが此の息はかりや旦那方みてえな錢のある方にや分りませんな。此間も旭川で饂飩屋の娘から七兩がとこ卷きあげてやりましたが、こいつが此節ぢや一番面白うがしたね。一體田之公なんざ年もいかねえ癖に大きな事はかり云つてやがるけど、澁皮のむけた面ばかりぢや中々さう口ほど器用に行くもんぢやありませんや。どうして、當節の女ときたら皆悧巧になりやがつて、散々人を遊んどいて、いざとなると錢一文だつて私達の自由にやさせませんからなあ。その饂飩屋の娘なんざあ　名はお菊ちやんてんですが、馬鹿な惚れかたをしやがつたもんでさあ。年は二十七だが、面だつてなに大して踏めねえ方ぢやねえんで……」と、彼は齒の脫けた穢らしい口を開けながら、聞くに耐へないやうな惚話を並べはじめた。

私はいゝ可減な返事をしながら側を向いて、いつか田之助の口から聞いた此の役者の身の上を思ひ起してゐた。彼はなんでも函館在の生れで、父親は博徒で、彼がまだ頑是ない小供の頃、入獄した儘行衛不明になつてしまつたのださうである。そして彼はたつた獨りの母親に死別れるとすぐ大工になつて、樺太から露領のニコライエウスク邊を散々流浪した揚句、到頭この一座へ入つて役者になつてしまつたが、浪花節と、賽ころが一番好きで、五十近い年をしてゐながら、過去に大工であつたことが唯一つの誇りであるらしく、一生に一度でいゝから舞臺らしい舞臺で、二丁鉋をグッグッとひききるやうな威勢のいゝ役を勤めて見てえと始終口癖に云つてゐるやうな男であつた。

「……つまり私が役者なんかしてるけど、何處か堅氣なところがあつて頼もしいと、かう云ひやがるんです。だからお前さんがそんなに苦勞してるんなら、私や身の周圍のものをすつかり賣り拂つてゞもきつとどうにか助けて上げるつてね、へへへゝゝゝ。一寸安くねえ幕ぢやありませんか。」と、賤しげな笑ひを洩らしながら飽きもせず管を卷いてゐる。そして私が聞いてゐないのをみると、今度は扇昇の方を向いて、「なあ、扇さん、おい、橘屋。まあ聞きねえつてえことよ。さうずばぬけて惚れて來りや、ちつとやそつとの錢を絞つたつて罰も當るめえぢやねえか。なあ。」

扇昇は盃の縁をかみながら私の方を向いて苦笑ひをしたが、急に眞顔になつて、

「そんな罪なことをするもんぢやねえ。」と、腹の底から押し出すやうに重々しく云つた。

「へん。畜生めえ。堅さうなことを仰有るぜ。ねえ、あなた。旦那。それからねえ、私も愈々度胸をき

めましたね、………」と、又彼は私の肩を叩いて、妙な手つきをしながらその先を話しはじめた。
やつとその一段を話し終ると、彼は急に今迄の女のこともケロリと忘れてしまつたやうに、
「時に橘屋。そんなに鬱がねえて、ちつと騒がうぢやねえか。今夜はやかましやの座頭もゐねえんだから、久振りに三味線でも彈いて景氣をつけてやれ。」と、獨言を云ひながらふらふら立上つて、階子の上り口から下を向いて、
「おうい、豊さん。一寸來ねえ。それからお花婆さん。お前えも三味線をもつて上つて來なよ。」と、呼んだ。
扇昇は私の顏をみながら腹立たしさうに眉を顰めたが、何とも云はうとはしなかつた。照十郎が坐にかへるとやがて階下から豊爺がにやにや薄氣味惡く笑ひながら跛をひいて上つて來た、
「さあ、此方へ來て一杯飮みねえ、今夜は旦那の御馳走だぜ。」
「はいはい。それはまあ御馳走さまて。えへへへゝゝゝ。」と、彼は苦しさうに坐つて、頭の禿げあがつた圖ぬけて長い顏に間延たび表情を浮べながら盃を受けた。
そこへ又お花婆さんが三味線を抱へて上つて來た。
貧しい饗宴は期せずして不思議な色彩を帶びて來た。廢滅の壁に圍まれて、「生活」の日のめもみたことのないやうな濕々した樂屋の空氣もいつかしら濃い酒の香に蒸されて、紋どころの剝げ落ちた古葛籠の食卓の周圍にはいづれも四十の阪を通り越した憐れな零落の男女が五人まで寄り集まつて、互に過去

の閲歴を押し隠すやうな惨ましい眼眸をしながら騒々しく盃をあげた。

なかでも照十郎は獨りで噪ぎながら、

「おい、お花婆さん。お前えも先の成田屋が死んでから、滅切り老けたぜ。ちつと浮氣でもしねえな。はゝゝゝゝ。」

「笑談云ひなさるよ。此年になつて何が出來るものかね。當節ぢやそれよりもひどく喘息が病めてねえ。」

「喘息か、はゝゝゝゝ。そいつがなきや俺も情婦（いろ）に持つがなあ。折角乙な話しになつてる時なんぞにひゆうひゆうやり出された日にや全く浮ばれねえよ。」

「酷いことを云ふ人だよ。これだつて一度は文金に結うたこともあるがな。」

「昔ぢやどもならんわ。はゝゝゝゝ。」と豊爺は長い顔を斜にしながら笑つたが、やがて、それよりや旦那へ御返禮に唄でもうたつてお聞かせや。」

「幾ら呉れるよ。」と、お花婆さんも調子をつけながら笑談らしく云つた。

「あれだもの、色氣どころの騒ぢやあらへん。」

やがて彼女は娘盛りに習ひ覺えたと云ふ仙臺邊の俗謠を唄ひ出した。その顔面には何の情緒も動いて來ないのに、低く沈んでゆくその嗄すれた聲には昔を思ひ起させるやうな哀切な調子があつた。そして私には濕氣て皮のゆるんだ三味線の音までが嗚咽してゐるやうに聞きなされた。

次に照十郎が頓狂な聲を振絞つて得意の「國定忠治」を唸つたが、自分でも旨くいかないと思つたと

見えて、

「どうも寒のせゑかまるつきり聲が潰れちやつた。」と、尤もらしく喉の邊を撫でながら、「ねえ、旦那。豊さんの義太夫をひとつ聞いてやつてお呉んなせえ。さすがは上方だけに本物てすぜ。」

それを聞くと、豊爺は待ち兼ねてゐたやうに微笑んで、勿體らしく居住ひをなほしながら、

「もう喉が潰れてしまうたんで、さつぱり調子がつきまへんや。」と、云つて、「太十」の末尾を語りはじめた。時々はチヨボの代りも勤める男だけに、聲には艶がなくても節廻はしだけはさすがに巧みだつたそして嗄れた聲で綿々とした「操」の情緒を語る時、彼の禿げ上つた額には汗が薄く滲んで、瞑つた眼の周圍には泣いてゐるやうな表情が浮んだ。

照十郎は時々思ひ出したやうに頓狂な懸聲をかけて、體ごとそのもの悲しい佐和利のなかへ引込まれてゆくやうに輕く手足を揺り動かしながら一心に聞き惚れた。お花婆さんも血の氣の褪せた唇をきつと結んで、うつとり眼を据ゑてゐたが、しまいには聞き飽きたと見えて、側をむいて欠伸をしはじめた。

やがて一節を語り終ると、豊爺は汚い手拭で額口の汗を押し拭ひながら、

「これでも、昔は隨分女子(をなご)を泣かせた喉だつせ。」と、得意らしく云つた。

私は、自分の立入ることを許されない世界に連れて來られたやうな氣がして、唯ひとり窓際の柱に脊を倚せながら、異邦人のやうな寂しい眼眸て漸次と興趣が熱して來る一座の饗宴を打眺めてゐたが、しまいには到頭耐らなくなつて、

「どうだい、扇昇さん。清元でも出さないか。」と、親しいものを求めるやうに促がすと、恍けた顔容をして居眠りしてゐた彼は、漸く眼を瞬いて

「もう長いことやりませんから……。」と、氣のぬけた聲で答へた。

二度買ひ足した酒が稍少なになる頃には、豊爺もお花婆さんもすつかり醉ひ疲れて、階下へ降りてしまつた。照十郎は仰向けに寢そべつた儘呂律の廻らぬ口で頻りに「國定忠治」の續きを唸つてゐたが、その間延びた節もいつの間にか高い鼾聲に變つてしまつた。そしてそれと同時に遠くへ吹き去つてゆく風の音を思はせるやうな寂寥が再び樂屋の隅々まで擴がつて來た。私は今更のやうに酒の匂ひの殘つた四邊を眴はすと、座に居耐まれないやうな不安が自然と湧いて來て、燗のつきすぎた酒をそつと扇昇の盃へつぎながらまた彼から懷かしい昔話を貪らうとした。

初めは氣の進まぬやうな顔をして深い思ひに沈んでゐたが、到頭餘儀なくされて彼は盃をとりあげながら徐かに口を切つた。

「今頃こんな事を云つたつて、誰もほんとにしちや呉れませんけど、私やあの松岸にもゐたことがあるんです。全くあすこはいゝ處でした。こんな氣の鬱ぐ晩にや彼處にゐた時分のことが思はれてなりません。」と、云ひながらいつもとまるで違つた途切れ勝ちな悲しい聲で、大利根の流れに沿つたあの寂れ果てた松岸遊廓の昔を語り出した。

今でも現存してゐる開新樓と云ふ妓樓は丁度その時分が全盛期で、大漁踊りの唄にまでうたはれた美しい花魁と酒の香が、遊惰な男を諸方から誘き寄せた近郷唯一の歡樂境であつた。銚子からも、對岸の常陸からも、赤川上の町々からも數多い嫖客が夕暮とともに舟で送られて來て、朝には岸邊に戰ぐ蘆荻の間から、大厦の欄に倚つて見送る妓達と名殘りの盡きぬきぬぎぬの別れを惜しんだ。・・・・

「大漁祝ひの晩なんといつたら、そりや全く豪勢なものでした。百五十疊も敷かる大廣間を明け廣げて百目蠟燭を晝間のやうにかんかん點けて、銚子からは女役者の一座がやつて來る、女魁は女魁で揃の衣裳で總踊りをやつたもんです。大傳馬を仕立てゝ乘り込んで來る旦那衆や、網主なんてえものはその頃の金にして一晩に二百の三百のつて投げだしたもんですからなあ。」と、話し續けてゐるうちに漸次と興が乘つて來て、彼は思はず眼を輝やかした。

「お前さんはあすこでも矢張り役者をしてゐたのかい？」私は燃え上つて來る彼の感興に薪を添へる氣で云つた。

「いゝえ。女魁衆の振附けをしてゐましたんです。あれでも彼此三年ばかりゐましたが、私にや今迄歩いたうちで一番面白い土地でした。」と、彼はその頃の思ひ出をまざまざとみるやうに大きく眼を瞬きながらうつとりした。そして暫らくすると何か樂しかつた出來事でも思ひ起したのか、輕く微笑みながら私の方を向いて物語りを續けやうとしたが、その時、階子段のところで足音がして ひよつくら田之助が歸つて來た。それを見ると扇昇は急に氣が變つたやうに晴れやかな顏容をしながら、

「どうしたんだい、もうお退けかい？」

「いゝえ、私ひとり先へ歸つて來たんだ。」と、田之助は何時にない不機嫌な顏をしてゐる。

「なんだな、氣持ちでも惡くなつたのか？」と、彼は笑ひながら顏をみてゐたが、田之助が返事もせずに着換へをしはじめるのを見ると、急に眉を顰めて、

「又幸吉の野郎と女のはりッこでもしたんだらう。」

「うゝん、詰まらないこつたけど、幸さんがあんまりなことを云ふから……」と、田之助は口籠りながら云つて、火鉢の側の德利をかたづけて、そこへ坐つた。

「しやうのねえ奴等だなあ。一體あの幸吉つてえ野郎は根性がよくねえんだ。舞臺の上ぢや手足の置きやうも碌々知らねえ癖にしやがつて、女を作ることばかり考へてゐやがる。今夜歸つて來たら俺がうんと脂を絞つてやるから、まあ、そんな浮かねえ顏はよしにして、機嫌から直しなよ。」と、扇昇は今しがたと、まるで別人のやうな聲で恐ろしく氣負つて云つたが、暫らくすると又もとのやうな感傷的な沈んだ調子に返つて、

「だけどお前もちつと氣を付けなくちやいけねえぜ。今のうちは女よりも何よりも修業が第一だ。俺みたやうに旅で果てるやうになつちや藝人ももう駄目だからなあ。」としみじみ云つて、私の方を顧みながら、「ねえ、貴方可笑しなことを云ふやうですが、私や此奴あゆくゆく見込みのある奴だと思つて居りますんです。田之助てえ藝名も私がつけてやつたんて、檜舞臺でみつしり修業させさへすりや末はきつと

一廉の藝人になれる奴なんてすが、どうかまあ、いゝ傳手でも御座んしたら、東京へ招んで出世の出來るやうにしてやつて下さいまし。」と、扇昇は沈んでゆく氣持を紛らかすやうに笑つたが、彼の胸の底にふるへてゐる總ての感情は自づと瞳のなかにはつきり映つて來た。

田之助の出世。それが時世に疎くなつた扇昇の果敢ない空想であるとしても、私にはそれを笑ふことの出來ない程の同情がその場合充分に充ち溢れてゐたので

「何と云つても修業が第一だ。」と、つい引込まれてしんみり云ひながら幾度か合點いたが、その時ふと見ると階子の上り口に白い女の顏がみえた。

「誰だい。女がゐるぢやないか。」と云ふと、田之助は彈かれたやうに立ち上つて、私の思惑をよむやうな眼眸をしながら、つッと其方へ出て行つた。そしてその儘長いこと小陰で二人は立話を續けてゐたが私はちらとみた顏が氣になるのでそつと覗くと、その女は醉月の美登利だつた。私は吃驚して、

「美登利ぢやないか。何もそんな處で立話をしてゐることはない、さあ此處へお入り。」と、云つてみたが、暫らくの間返事がしないので、何氣なく立上つてそつちへ出て行くと、彼女は柱の陰へ顏を隱して頻りに泣いてゐた。そして田之助はその肩へ手をかけて何やらひそひそ慰めてやつてゐる樣子だつた。

「何をしてゐるんだな。」と笑ひながら後へ立つと二人は打跼められたやうにつつと兩方へ飛退いて、逼げるやうな身構へをしたが、美登利は私の顏をみると突如袂で顏を掩つて、

「私が惡いんです、私が惡いんです。」と、胸を絞るやうな泣聲で云ひながら其儘階子を降りて、樂屋口

の方へ遁けて行つた。呼び戻さうとして跡を追驅けると、彼女はそこの板戸の口から冷たい月光のなかへすつと消えてしまつた。

私には今宵醉月亭で起つた紛紜（ごたごた）がやつとはつきり分つた。で、當惑した顏をして舞臺へ下りてゐた田之助を連て笑ながら樂屋へ歸て來ると、扇昇は突如、田之助をきつと見据ゑて頰の肉をふるはせながら「おい、田之さん。お前えまさかあの女をどうかしたんぢやねえだらうな。」と云つたが、その聲には罪を詰るやうな激しい調子があつた。

田之助はおどおどしながら俯向いてゐたが、漸う細い聲で云ひにくさうに、

「だつて私の方からどうかうつて云つた譯ぢやないんだもの。」

「小生意氣な口をきくぜ、大概にしな。お前えの方で引緊めてゐりや女が手出しをする譯はねえんだ。旦那がどんなに氣を惡くなさるか、そんな了見ぢや俺や堪忍が出來ねえ。」と叱るやうに鋭く云ひ放つたが、やがてひどく氣を兼ねてゐるやうな眼眸で私をみながら、「若え者は仕樣のねえもんて御座んすなあ。」

相互に何だか氣拙い思ひがして三人はその儘口を噤んでしまつた。扇昇は一處をみつめながらじつと考へ込んでゐたが、深い嘆息をつく度に彼の顏には又漸次と暗い陰影が射して來た。到頭しまいには我慢が出來なくなつたと見えて、田之助の方を向いて悲しげな思ひ入をしながら、

「今更云ふんぢやねえが、女つてえものは全く恐いもんだ。お前えは當人の成田屋から聞かされてるん

だからまだ忘れやしめえが……」と、死んだ鶴藏の情事を、愚痴をこぼしてゐるやうな果敢ない聲でくどくどと私に話して聞かせた。

それはまだ鶴藏が大阪役者の一座にゐた時分のことださうである。或年、金澤から能登路へかけて巡業して歩いた事があつたが、その途中彼はふと或大きな町の町長の愛娘に思はれた。その頃町長といへば一介の河原乞食とは士族と町人よりもまだ激しい階級の懸隔があつたので、粋な乳母の取りもちて嬉れしい首尾は叶つたものゝ、互に思ひ詰めれば詰めるほどその土地が狹くなつて、愈一座が次の興行地へ乘込まうと云ふ時には、愛着の念に眼の眩んだ娘はもう出奔するより外に道がなかつた。て、追手が懸つたら刺し違へて死ぬつもりで、その頃の金で二百圓といふ大金を盜み出して、鶴藏と一緒に舞臺でする梅川忠兵衞のやうな美しい旅路へ出たが、まだ故郷から十里も逃げのびないうちに警吏の手に抑へられて彼は誘拐の罪で獄に繫がれる、娘は母親の膝元に嚴しい監禁の身となつて、到頭彼が入牢してから三月目に慘ましい狂死を遂げてしまつた。……

「そのために成田屋は牢から出て來ても一座へ歸參することは出來ず、あの名人が長年の間苦勞のしづくめで、到頭こんな旅先で死ぬやうなことになつてしまひました。……當人の話しぢや、生涯に一番奇麗で、一番執着の深かつた女だてえますが、よくよく忘れられなかつたものと見えまして、死ぬ二三日前にもそのことを云ひ出して、「俺あ近えうちに又逢へるかも知れねえなあ。」なんて云つてましたつけが、あの氣の剛い成田屋がその時ばかりは涙を零しましたよ。」と、扇昇は急に聲を曇らせながら深い嘆息

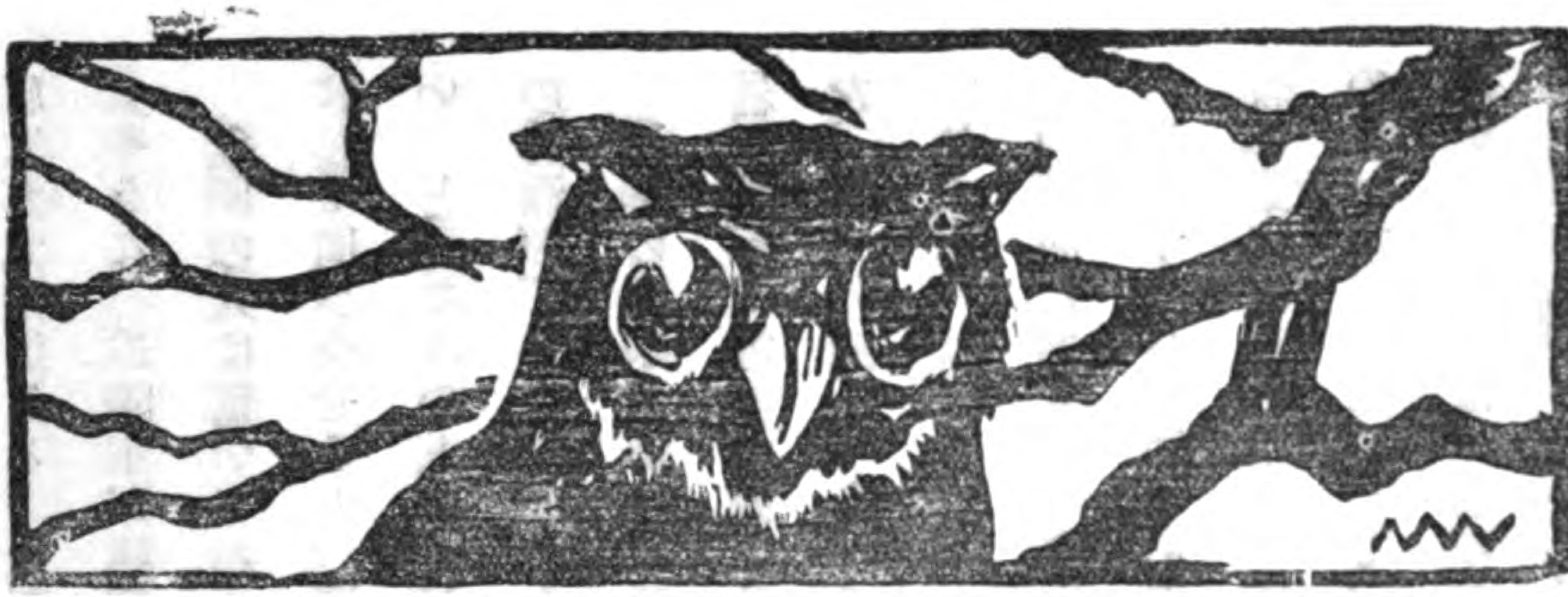
を吐いて、暫らくの間きつと唇を嚙みしめてゐたが、やがてまた失はれた緒を探るやうに、「梅公なんぞも今頃はどうしてゐやがるかしら、彼奴も舞臺へかけちや技量は確かだつたがなあ。……」と、誰れに云ふともなく嘘唏するやうな聲で呟いた。

窪んだ扇昇の眼はいつしか涙に濕んでゐた。それを紛らかさうとするのか、彼は皺だむだ頰に寂しい笑ひを浮べながら空になつた德利を倒さまにして未練らしく酒の餘滴をきつたが、その手は云ひ甲斐もなく小刻みに慄へて盃の緣はかちかちと冷たい音をたてた。私はそのさまをじつと見てゐるうちに、詩のやうな慘ましい零落の姿をその儘凝視してゐるやうな心持になつて思はず苦がい涙を吞んだ。

ひつそりとした樂屋には「時」の滴る音さへはつきり聞き分けられるやうな靜けさがたち歸つて來て、時々田之助が思ひ入つたやうに吐く嘆息が疼くほど明かに響き渡るばかりであつた。硝子窓から戶外をみると、家々の屋根にはもう眞白に霜が置いて、その家並の彼方に荒寥とした石狩川の流れがひろびろと彎曲しながら遠白く眺められた。灯影さへ見えぬ原野の面は無限の寂寥に掩はれ、その果てに聳えた國境の連山には雪が幻の如くに明るく輝いて、見渡すかぎり天にも地にも、蒼ざめた月光が音もなく降り灑いてゐた。私はその廓落とした大自然に面を合せてゐるうちに、いつかしら冷たい眞實の底からひそひそと湧き上つてくる聲なき慟哭が胸一杯に充ち溢れて、今、遠く都會から離れたこの石狩河畔の寂しい廢市で、「笹目の兵太」や土器賣りの「詫助」に扮しながら衰殘の藝を賣つてゐるこの憐れな俳優の末路に藝術的感激の極致を見出さない譯にはいかなかつたのである。

それから二週間ばかり經つて後のことであつた、私は、寂しい河沿ひの街道を、道具や、衣裳や、鍋釜の類まで車に積んで、次の興行地へ移つてゆく旅役者の群のなかにうち交つてゐた。造花の飾りをつけた駄馬は異郷の明るい空氣のなかに爽やかな鈴の音を響かせながら、その群を導いてゆくやうに先へ立つた。私は、晴れやかな顏色をした扇昇と肩を並べて歩きながら、今夜石狩の町で一座の演ずる「忠臣藏」の定九郎に扮するため彼から仔細にその役の型を敎はつてゐた。私達のすぐ後には醉月亭の美登利が涙を封じて贈つた守袋をしかと肌に押當てゝしよんぼり俛首れながら歩いて來る田之助がゐた。その後にはまた照十郎や豊爺や一座の誰彼が苦もなさゝうに笑ひ興じながら續いた。そして、冷たい風が河面から吹きあげて來る度に、霜て浮きあがつた街道の黃い砂塵は車の轍から道を遮るやうに濛々と舞ひ騰つた。…………

(をはり)



鼠坂

鷗外

小日向から音羽へ降りる鼠坂と云ふ坂がある。鼠でなくては上がり降りが出來ないと云ふ意味で附けた名ださうだ。臺町の方から坂の上までは人力車が通ふが、左側に近頃刈り込んだ事のなささうな生垣を見て右側に廣い邸跡を大きい松が一本我物顏に占めてゐる赤土の地盤を見ながら、こゝからが坂だと思ふ邊まで來ると、突然勾配の強い、狹い、曲りくねつた小道になる。人力車に乘つて降りられないのは勿論、空車にして挽かせて降りることも出來ない。車を降りて徒歩で降りることさへ、雨上がりなんぞにはむづかしい。鼠坂の名、眞に虛しからずである。

その松の木の生えてゐる明屋敷が久しく子供の遊場になつてゐたところが、去年の暮からそこへ大きい材木や、御蔭石を運びはじめた。音羽の通まで牛車で運んで來て、鼠坂の傍へ足場を掛けたり、汽船に荷物を載せる crane と云ふものに似た器械を据ゑ附けたりして、吊り上げるのである。

職人が大勢這入る。大工は木を削る。石屋は石を切る。二箇月立つか立たないうちに、和洋折衷とか云ふやうな、二階家が建築せられる。黒塗の高塀が繞らされる。とう〳〵立派な邸宅が出來上がつた。

近所の人は驚いてゐる。材木が運び始められる頃から、誰が建築をするのだらうと云つて、ひどく氣にして問ひ合せると、深淵さんだと云ふ。深淵と云ふ人は大きい官員にはない。實業家にもまだ聞かない。どんな身の上の人だらうと疑つてゐる。そのうち誰やらがどこからか聞き出して來て、あれは戰爭の時滿洲で金を儲けた人ださうだと云ふ。それで物珍らしがる人達が安心した。

建築の出來上がつた時、高塀と同じ黒塗にした門を見ると、なる程深淵と云ふ、俗な隸書で書いた陶器の札が、電話番號の札と並べて掛けてある。いかにも立派な邸てはあるが、なんとなく様式離れのした、趣味の無い、そして陰氣な構造のやうに感ぜられる。番町の阿久澤とか云ふ家に似てゐる。一步を進めて言へば、古風な人には、西遊記の怪物の住みさうな家とも見え、現代的な人には、マアテルリンクの戯曲にありさうな家とも思はれるだらう。

二月十七日の晩てあつた。奥の八疊の座敷に、二人の客があつて、酒酣になつてゐる。座敷は極めて殺風景に出來てゐて、床の間にはいかがはしい文晁の大幅が掛けてある。肥滿した、赤ら顔の、八字髭の濃い主人を始として、客の傍にも一々毒々しい綠色の切れを張つた脇息が置いてある。杯盤の世話を燒いてゐるのは、色の蒼い、髮の薄い、目が好く働いて、しかも不愛相な年増て、これが主人の女房らしい。座敷から人物まて、總て新開地の料理店て見るやうな光景を呈してゐる。

「なんにしろ、大勢行つてゐたのだが、本當に財産を拵へた人は、晨星寥々さ。戰爭が始まつてからは九一年になる、旅順は落ちると云ふ時期に、身上の有る丈を酒にして、漁師仲間を大連へ送る舟の底積にして乘り出すと云ふのは、着眼が好かつたよ。肝心の漁師の率領は、爲事は當つたが、金は大して儲けなかつたのに、内では酒なら幾らでも賣れると云ふ所へ持ち込んだのだから、旨く行つたのだ。」から云つた一人の客は大ぶ酒が利いて、話の途中で、折々舌の運轉が悪くなつてゐる。濕紙のやうな顔に、胡麻鹽鬚が中伸びに伸びてゐる。支那語の通譯をしてゐた男である。

「度胸だね」と今一人の客が合槌を打つた。「鞍山站まで酒を運んだちやん車の主を縛り上げて、道で拾つた針金を懷に捩ぢ込んで、軍用電信を切つた嫌疑者にして、正直な憲兵を騙して引き渡してしまふなんと云ふ爲組は、外のものには出來ないよ。」から云つたのは濃紺のジヤケツの下にはでなチヨツキを着た、色の白い新聞記者である。

この時小綺麗な顔をした、田舎出らしい女中が、燗を附けた銚子を持つて來て、障子を開けて出すと、主人が女房に目食はせをした。女房は銚子を忙しげに受け取つて、女中に「用があればベルを鳴らすよ、ちりん／＼を鳴らすよ、あつちへ行つてお出」と云つて、障子を締めた。

新聞記者は詞を續いだ。「それは好いが、先生自分で鞭を持つて、ひゆあ／＼しよあ／＼とかなんとか云つて、ぬかるみ道を前進しようとしたところが、騾馬やら、驢馬やら、ちつぽけな牛やらが、ちつとも言ふことを聞かないで、綱がこんがらかつて、高粱の切株だらけの畑中に立往生をしたのは、滑稽だ

つたね。」記者は主人の顏をじろりと見た。

主人は苦笑をして、酒をちびり〳〵飮んでゐる。

通譯あがりの男は、何か思ひ出して舌舐ずりをした。「お蔭で我々が久し振に大牢の味ひに有り附いたのだ。酒は幾らでも飮ませてくれたし、あの時位僕は愉快だつた事は無いよ。なんにしろ、兵站にはあんまり御馳走のあつたことはないからなあ。」

主人は短い笑聲を漏らした。「君は酒と肉さへあれば滿足してゐるのだから、風流だね。」

「無論さ。大杯の酒に大塊の肉があれば、能事畢るね。これから又遼陽へ歸つて、會社のお役人を遣らなくてはならない。實はそんな事はよして南淸の方へ行きたいのだが、人生意の如くならずだ。」

「君は無邪氣だよ。あの驢馬を貰つた時の、君の喜びやうと云つたらなかつたね。僕はさう思つたよ。君だの、あの騾馬を手に入れて喜んだ司令官の爺いさんなんぞは、仙人だと思つたよ。己は騎兵科で、こんな服を着て徒歩をするのはつらかつたが、これがあれば、もうてく〳〵歩きはしなくつても好いと云つて、ころ〳〵してゐた司令官も、隨分好人物だつたね。あれから君は驢馬をどうしたね。」記者が通譯あがりに問うたのである。

「なに。十里河まで行くと、兵站部で取り上げられてしまつた。」

記者は主人の顏をちよいと見て、狡猾げに笑つた。

主人は記者の顏を、同じやうな目附で見返した。「そこへ行くと、君は罪が深い。酒と肉では滿足しな

いのだから。」

「うん。大した違ひはないが、僕は今一つの肉を要求する。金も惡くはないが、その今一つの肉を得る手段に過ぎない。金その物に興味を持つてゐる君とは違ふ。併し友達には、君のやうな人があるのが好い。」

主人は持前の苦笑をした。「今一つの肉は好いが、營口に來て醉つた晩に話した、あの事件は凄いぜ。」から云つて女房の方をちよいと見た。

上さんは薄い唇の間から、黄ばんだ齒を出して微笑んだ。「本當に小川さんは、優しい顔はしてゐても惡黨だわねえ。」小川と云ふのは記者の名である。

小川は急所を突かれたとても云ふやうな様子で、今まで元氣の好かつたのに似ず、しよげ返つて、饌の上の杯を手に取つたのさへ、てれ隱しではないかと思はれた。

「あら。それはもう冷えてゐるわ。熱いのになさいよ。」上さんは横から小川の顔を覗くやうにしてから云つて、女中の置いて行つた銚子を取り上げた。

小川は冷えた酒を汁椀の中へ明けて、上さんの注ぐ酒を受けた。

酒を注ぎながら、上さんは甘つたるい調子で云つた。「でも營口て内に置いてゐた、あの子には、小川さんも慨はなかつたわね。」

「名古屋ものには小川君にも負けない奴がゐるよ。」主人が傍から口を挾んだ。

矢張小川の顔を横から覗くやうにして、上さんが云つた。「なか／＼別品だつたわねえ。それに肌が好くつて。」

此時通譯あがりが突然大聲をして云つた。「その凄い話と云ふのを、僕は聞きたいなあ。」

「よせ」と、小川は鋭く通譯あがりを睨んだ。主人はどつしりした體で、胡坐を搔いて、ちびり／＼酒を飮みながら、小川の表情を、睫毛の動くのをも見遁がさないやうに見てゐる。その癖顏は通譯あがりの方へ向けてゐて、笑談らしい、輕い調子で話し出した。「平山君はあの話をまだしらないのかい。まあどうせ泊ると極めてゐる以上は、ゆつくり話すとしよう。なんでも黑溝臺の戰爭の濟んだ跡で、奉天攻擊はまだ始まらなかつた頃だつたさうだ。なんとか窩棚と云ふ村に、小川君は宿舍を割り當てられてゐたのだ。小さい村で、人民は大抵避難してしまつて、明家の澤山出來てゐる所なのだね。小川君は隣の家も明家だと思つてゐたところが、或る晩便所に行つて用を足してゐる時、その明家の中で何か物音がすると云ふのだ。」通譯あがりは平山と云ふ男である。

小川は迷惑だが、もうかうなれば爲方がないので、諦念めて話させると云ふ樣子で、上さんの注ぐ酒を飮んでゐる。

主人は話し續けた。便所は例の通り氷つてゐる土を少しばかり掘り上げて、板が渡してあるのだね。そいつに跨がつて、尻の寒いのを我慢して、用を足しながら、小川君が耳を澄まして聞いてゐると、その物音が色々に變化して聞える。どうも鼠やなんぞではないらしい。狗でもないらしい。小川君は好奇

心が起つて溜まらなくなつた。その家は表からは開けひろげたやうになつて見えてゐる。坑の縁にしてある材木はどこへか無くなつて、築き上げた土が暴露してゐる。その奥は土地で磚と云つてゐる煉瓦のやうなものが一ぱい積み上げてある。どうしても奥の壁に沿うて積み上げてあるとしか思はれない。小川君は物音の性質を聞き定めようとすると同時に、その場所を聞き定めようとして努力したさうだ。自分の跨がつてゐる坑の直前は背丈位の石垣になつてゐて、隣の家の横側がその石垣と密接してゐる。物音はその一番奥の所でしてゐる。表から磚の積んだのが見えてゐる邊である。これ丈の事を考へて、小川君はとう／＼探險に出掛ける決心をしたさうだ。無論便所に行くにだつて、毛皮の大外套を着た儘で行く。まくつた尻を卸してしまへば、寒くはない。丁度便所の坑の傍に、實をむしり殘した向日葵の莖を二三本縛り寄せたのを、一本の棒に結び附けてある。その棒が石垣に倒れ掛かつてゐる。それに手を掛けて、小川君は重い外套を着た儘で、造做もなく石垣の上に乘つて、向側を見卸したさうだ。空は靑く澄んで、星がきら／＼してゐる。そこら一面に雪が積つて氷つてゐる。夜の二時頃でもあらうが、明るい事は明るいのだね。」

　小川はつぶやくやうに口を挾んだ。「人の出たらめを饒舌つたのを、好くそんなに覺えてゐるものだ。」

「好いから默つて聞いてゐ給へ。石垣の向側は矢張磚が積んであつて降りるには足場が好い。降りて家の背後へ廻つて見ると、そこは當り前の壁ではない。窓を締めて、外から磚で塞いだものと見える。暫くその外に立つて聞いてゐると、物音はぢき窓の内でしてゐる。家の構造から考へて見ると、どうして

も坑の上なのだ。表から見える、土の暴露してゐる坑は、鉤なりに曲つた坑の半分で、跡の半分は積み上げた磚で隠れてゐるものと思はれる。物音のするのは、どうしてもその跡の半分の坑の上なのだ。かうなると、小川君はどうも此窓の内を見なくては氣が濟まない。そこで磚を除けて、突き上げになつてゐる障子を内へ押せば好いわけだ。ところがその磚がひどくぞんざいに、疎に積んであつて、十ばかりも卸してしまへば、窓が開きさうだ。小川君は磚を卸し始めた。その時物音がぴつたりと息んださうだ。」

小川は諦念めて飲んでゐる。平山は次第に熱心に傾聽してゐる。上さんは油斷なく酒を三人の杯に注いで廻る。

「小川君は磚を一つ〳〵卸しながら考へたと云ふのだね。どうもこれは塞ぎ切に塞いだものではない。出入口にしてゐるらしい。併し中に人が這入つてゐるとすると、外から磚が積んであるのが不思議だ。兎に角拳銃が寢床に置いてあつたのを、持つて來れば好かつたと思つたが、好奇心がそれを取りに歸る程の餘裕を與へないし、それに取りに歸つたら、一しよにゐる人が目を醒ますだらうと思つて諦念めたさうだ。磚は造做もなく除けてしまつた。窓へ手を掛けて押すとなんの抗抵もなく開く。その時がさ〳〵と云ふ音がしたさうだ。小川君がそつと中を覗いて見ると、粟稈が一ぱいに散らばつてゐる。それが窓に障つて、がさ〳〵云つたのだね。それは好いが、そこらに飯のやうな物やら、籠のやうな物やら置いてあつて、その奥に粟稈に半分埋まつて、人がゐる。慥かに人だ。土人の着る淺葱色の外套のやうな服

て、裾の所がひつくり返つてゐるのを見ると、羊の毛皮が裏に附けてある。窓の方へ背中を向けて頭を栗稈に埋めるやうにしてゐるが、その背中はぶる／＼慄えてゐると云ふのだね。」

小川は杯を取り上げたり、置いたりして不安らしい様子をしてゐる。平山はます／＼熱心に聞いてゐる。

主人はわざと間を置いて、二人を等分に見て話し續けた。「ところがその人間の頭が辮子てない。女なのだ。それが分かつた時、小州君はそれ迄交つてゐた危險と云ふ念が全く無くなつて、好奇心が純粋の好奇心になつたさうだ。これはさもありさうな事だね。儞と聲に力を入れて呼んで見たが、只慄えてゐるばかりだ。小川君は炕の上へ飛び上がつた。女の肩に手を掛けて、引き起して、窓の方へ向けて見ると、まだ二十にならない位な、すばらしい別品だつたと云ふのだ。」

主人は又間を置いて二人を見較べた。そしてゆつくり酒を一杯飲んだ。「これから先は端折つて話すよ。これまでのやうな珍らしい話とは違つて、いつ誰がどこて遣つても同じ事だからね。一體支那人はいざとなると、覺悟が好い。首を斬られる時なぞも、尋常に斬られる。女は尋常に服從したさうだ。無論小川君の好嫖致な所も、女の諦念を容易ならしめたには相違ないさ。そこて女の服從したのは好いが、小川君は自分の顏を見覺えられたのがこはくなつたのだね。」こゝまで話して、主人は小川の顏をちよつと見た。赤かつた顏が蒼くなつてゐる。

「もうよし給へ」と云つた小川の聲は、小さく、異様に空洞に響いた。

「うん。よすよく。もうおしまひになつたぢやないか。なんでもその女には折々土人が食物をこつたり窓から運んでゐたのだ。女はそれを夜なかに食つたり、瓶の中へ便を足したりすることになつてゐそのを、小川君が聞き附けたのだね。顔が綺麗だから、兵隊に見せまいと思つて、隠して置いたのだらう。羊の毛皮を二枚着てゐたさうだが、それて粟稈の中に潜つてゐたにしても、炕は焚かれないから、随分寒かつただらうね。支那人は辛抱强いことは無類だよ。兎に角その女はそれ切り粟稈の中から起きずにしまつたさうだ。」主人は最後の一句を、特別にゆつくり言つた。

違棚の上てしつつこい金の裝飾をした置時計がちいんと一つ鳴つた。

「もう一時だ。寢ようかな。」から云つたのは、平山であつた。

主客は暫くぐずくしてゐたが、それからはどうした事か、話が榮えない。とうく一同寢ると云ふことになつて、客を二階へ案内させるために、上さんが女中を呼んだ。

一同が立ち上がる時、小川の足元は大ぶ怪しかつた。

主人が小川に言つた。「さつきの話は舊暦の除夜だつたと君は云つたから、丁度今日が七回忌だ。」

小川は默つて主川の顏を見た。そして女中の跡に附いて、平山と並んて梯子を登つた。

二階は西洋まがひの構造になつてゐて、小さい部屋が幾つも並んでゐる。大勢の客を留める計畫をして建てた家と見える。廊下には暗い電燈が附いてゐる。女中が平山に、「あなたはこちらで」と一つの戸を指さした。

戸の撮みに手を掛けて、「さやうなら」と云つた平山の聲が小川にはひどく不愛相に聞えた。

女中はずん／＼先へ立つて行く。

「まだ先かい」と小川が云つた。

「えゝ。あちらの方に煖爐が焚いてございます。」かう云つて、女中は廊下の行き留まりの戸まで連れて行つた。

小川は戸を開けて這入つた。瓦斯煖爐が焚いて、電燈が附けてある。本當の西洋間ではない。小川は國て這入つてゐた中學の寄宿舍のやうだと思つた。壁に沿うて棚を吊つたやうに寢床が拵えてある。その下は押入れになつてゐる。煖爐があるのに、枕元に眞鍮の火鉢を置いて、湯沸かしが掛けてある。その傍に九谷焼の煎茶道具が置いてある。小川は吭が乾くので、急須に一ぱい湯をさして、茶は出ても出なくても好いと思つて、直ぐに茶碗に注いで、一口にぐつと呑んだ。そして着てゐたジャケツも脱がずに、行きなり布團の中に這入つた。

横になつてから、頭の心が痛むのに氣が附いた。「ああ、酒が變に利いた。誰だつたか、丸く酔はないで三角に酔ふと云つたが、己は三角に酔つたやうだ。それに深淵奴があんな話をしやがるものだから、不愉快になつてしまつた。あいつ奴、妙な客間を拵へやがつたなあ。あいつの事だから、賭場でも始めるのぢやあるまいか。畜生。布團は軟かで好いが、厭な寢牀だなあ。坑のやうだ。さうだ。丸で坑だ。あゝ。厭だ。」こんな事を思つてゐるうちに、酔と疲れとが次第に意識を昏ましてしまつた。

小川はふいと目を醒ました。電燈が消えてゐる。併し部屋の中は薄明りがさしてゐる。窓からさしてゐるかと思つて、窓を見れば、窓は眞つ暗だ。「瓦斯煖爐の明りかな」と思つて見ると、なる程、礬土の管が五本並んで、下の端だけ樺色に燃えてある。併しその火の光は煖爐の前の半疊敷程の床を黃いろに照してゐるだけである。それと室内の靑白いやうな薄明りとは違ふらしい。小川は兎に角電燈を附けようと思つて、體を半分起した。その時正面の壁に意外な物がはつきり見えた。それはこはい物でもなんでもないが、それが見えると同時に、小川は全身に水を浴せられたやうに、ぞつとした。見えたのは紅唐紙で、それに「立春大吉」と書いてある。その吉の字が半分裂けて、ぶらりと下がつてゐる。それを見てからは、小川は暗示を受けたやうに目をその壁から放すことが出來ない。「や。あの裂けた紅唐紙の切れのぶら下つてゐる下は、一面の栗稈だ。その上に長い髮をうねらせて、淺葱色の着物の前が開いて、鼠色によごれた肌着が皺くちやになつて、あいつが仰向けに寢てゐやがる。頤だけ見えて顏は見えない。どうかして顏が見たいものだ。あ。下唇が見える。右の口角から血が絲のやうに一筋流れてゐる。」

小川はきやつと聲を立てて、半分起した體を背後へ倒した。

翌朝深淵の家へは醫者が來たり、警部や巡査が來たりして、非常に雜遝した。夕方になつて、布團を被せた吊臺が舁き出された。

近所の人がどうしたのだらうと囁き合つたが、吊臺の中の人は誰だか分からなかつた。「いづれ號外が出ませう」などと云ふものもあつたが、號外は出なかつた。

その次の日の新聞を、近所の人は待ち兼ねて見た。記事は同じ文章で諸新聞に出てゐた。多分どの通信社かの手で廻したのだらう。併し平凡極まる記事なので、讀んで失望しないものはなかつた。

「小石川區小日向臺町何丁目何番地に新築落成して横濱市より引き移りし株式業深淵某氏宅にては、二月十七日の晩に新宅祝として、友人を招き、宴會を催し、深更に及びし爲め、一二名宿泊することとなりたるに、其一名にて主人の親友なる、芝區南佐久間町何丁目何番地住何新聞記者小川某氏其夜腦溢血症にて死亡せりと云ふ。新宅祝の宴會に死亡者を出したるは、深淵氏の爲め、氣の毒なりしと、近所にて噂し合へり。」（完）

〔正　誤〕　本誌一月號の「かのやうに」中ハルナックの名がオットオとしてあるのは、無論アドルフの誤で、「兄」テオドジウスとあるのも、「父」としなくてはならない。當時オットオのファウスト刊本を飜譯の參考に使つてゐて、ふとオットオと書いたのである。とう〳〵宗教雜誌にまで誤謬の儘鈔錄せられた。　（鷗外）

靄

泉鏡花

一

「もし〳〵、其處へ行らつしやりますお方。」……と呼ぶ。

呼ばれた坂上は、此の聲を聞くと、外套の襟から先づ悚然とした。……誰に似て可厭な、何時覺えのある可忌しい調子と云ふのではない。が、辿りかゝつた其のたら〳〵上りの長い坂の、下から丁と中央と思ふ處で、靄のむら〳〵と、動かない渦の中を、見え隱れに、浮いつ沈みつする體で、跫音も聞こえぬばかり――四ッ谷の通りから穴の横町へ續く、坂の上から、しよな〳〵下りて來て、擦違つたと思ふ、と其の聲。

何の約束もなく、思ひも懸けず行逢つたのに、ト見ながら行過ぎるうち、其れなり何事もなしには分れまい。呼ぶか、留めるか、屹と口を利くに違ひ

ないと坂上は不思議にも然う思つた。最も其は、或機會に五位鷺が闇夜を叫ぶ、鴉が啼く、と同じ意味て、聞くものは、其處に自分一人ても、鳥は誰に向つて呼ぶのか分らない。けれども、可厭な、可忌しい聲を聞かずには濟むまい、と思ふと案の定……

來て、其の行逢つたものは、一ならびに並んだ三人づれて、どれも悄乎とした按摩である。

中に挾まれたのは、弱々と、首の白い、髮の濃い、中年増と思ふ婦て、雨の肩がげつそり痩せて、襟に引合はせた袖の影が――痩せた胸を双の乳房まて染み通るか、と薄暗く、褄をかけて、帶の色と同じやうに――黑く映して、ぴた〳〵ぴた〳〵と草履穿か、地とすれ〳〵の褄を見た。

前に立つたのは鼠てあらう、夜目には此の霜を織つてなやした、被布のやうなものを、ぐつたりと着て、縁なしの帽子らしい、ぬいと、のほゝづに高い、坊主頭其のまゝと云ふのを被つた、背のひよろりとしたのが、胴を畝らして通る……

後なる一人は、中背の細い男て、眞中の其の盲目婦の髮の影にも隱れさうに、帶に體を附着けて行逢つたのてあるから、形、格好、孰れも判然としない中に、此の三人目のが就中朧に見えた。

其の癖、もし〳〵、と云つた、……聲を聞くと、一番あとの按摩が呼留めた事が、何うしてか直ぐに知れた……

「私かい。」

と直ぐに答へて、坂上は其のまゝ立留まつて、振向いた……ひやりと肩から窘みながら、矢庭に吠え

ゝる犬に、(畜生、)とて擬勢を亦す意氣組てある。

「はあ、お前樣て。」

と沈んて云ふ。果せる哉、殿の瘦按摩て、恁う口をきく時、霧を漕ぐ、杖を撞に、斜めに握つて、坂の二三歩低い處に、伸上るらしく仰向いて居た。

前の二人、頭の長いのと、何かに黑髮を結むだのは、芝居の樂屋の鬘臺に、髷をのせて、倒に釣した風情て、前後になぞへに並んて、向ふむきに立つて、同伴者の、然うして立淀だのを待つらしい。

坂上は外套の袖を捻ぢて、踵を横ざまに踏みながら、中折の廂から、對手の眉間を透かし視つゝ、

「私に用か。」

「一寸……お話しが……ありまして……」と落着いたのか、息だわしいのか、冬の夜ふけをなまぬるい。

二

「用事は何てす。」

はじめ、霧の中を、此の三人が來て通りすがつた時、長いのと短いのと、野墓に朽ちた塔婆が二本、根元にすがれた、尾花の白い穗を絡らせたまゝ、土ながら凩の餘波に、ふわ〳〵吹き送られて來たかと思つた。

噺つと、其の(思つた)が消えて、まざ〳〵と恁うしてものを言交はせば、武藏野の岳の横穴めいた、

山の手場末の寂ひだ町を、捜り〳〵に稼いて歩行くのが、誘ひ合はせて、年を越す蚊のやうに、細い笛の音て、やがて木賃宿の行燈の中へ消えるのであらうと、合點して、坂上も稍もの言ひが穏かに成つたのてある。

按摩は其仰向いて打傾いた、耳の痒いのを掻きさうな手つきて、右手に持添へた杖の尖を、輕く、コト〳〵コト〳〵と彈きながら、

「用と云ふて、別に、此と云ふてありませぬ。ありませぬ、けれども、お前樣、今から、何處へ行かれます。何處へ、何處へ、え、何處へ？」……と些と嘲けるやうに、小鼻て調子を取つた聞き方をする。

「構ひなさんな。」

無理な首尾の、婦に忍ぶ夜てあつた……

坂上は憤然として、

「何處へ行つても可いてはないか。」

「可うない、其が可うない、お前樣、」と押附けに言つた聲に、振切つては衝と足の出ぬ力が籠る。

「何故惡いんだね。」

と、却つて坂下へ小戻りにつか〳〵と近づいたが、餘り傍へ寄ると、霧が、ねば〳〵として顔へ着きさうて、不氣味て控へた。

「もう遅い！……」

と急に巾のある強い聲。按摩は其の時がつくりと差俯向く。

立ち窘むだ體だつた、長頭の先達盲人は、此の時、のろりと身動きして、横に崖の方へ顔を向けた。次の婦は、腰から其の影を地へ吸込まれさうに、悄乎と腰をなやして蹲む‥‥裳のはづれへ、ひよろりと杖の尖が抽けて青い。

三人が根をおろしたらしく見て取ると、坂上も、急には踏出せさうもなく、足が地に附着いたが、前途を急く胸は、はツ／＼と、毒氣を掴んで口から吹込まれさうに躍つて、血を動かしては、ぐつと膨れ、肉をわなゝかしては、げつそり挫げる。

坂の其の兩方は、見上げて峰の如き高臺のなだれた崖て、‥‥時に長頭が面を向けた方は、空に一二軒、長屋立が恰も峠茶屋と云ふ形に、霜よ、と霧のたゝまり積むだ、枯草の上に灯の影もなく、鎖さるゝ。て、此のものどもの寄つた方は、木の根ぐるみ地厭への杭も露顯に、泥の崩れた切立てゞ、上には樹立が參差と骨を繋ぐ、其の枝の處々、濁つた月影のやうな可厭な色の霧が搦むで、星もない‥‥山深く谷川の流に望むだ思ひの、暗夜の四谷の谷の底、時刻は丁ど一時頃。

激しく動くは胸ばかり‥‥づん／＼と陰氣な空から、身體を壓着けられるやうで、

「遲いのが、何て惡い。」

とものいひも重く成る。

「然う言はれる、申される‥‥」

と杖を持つた手の甲を、丁と敲き、

「如何にも、もし、それが惡い……」

「行つては不可いと云ふのかね。」と、心がゝりな今夜の逢ふ瀬の、辻占にもと裏問へば……

「惡いと云ふたりとて、お前樣氣一つて行かるれば、それまでの事てはあるが、先づお留め申したい。

これは、私一人か……

其處に居る人も。」

と云つて、杖をまつすぐに持直すと、むかふて長頭が、一つ幽な咳。

三

「行くなつたつて、行かなけりや成らない處だつたら何うします。」

と坂上の呼吸はあせつた……

「親が大病だか、友だちが急用だか、知れたもんてすか。……君たちのやうに言つちや、何か、然も怪しい處へても出掛けるやうだね。」

「へゝゝ、」

と杖の尖に頰をすりつける如く傾がつて、可厭に笑ひ、

「其が分ればこそ申すのなり、あの人も言へと云ひます……當てますか、私が……知つても大事ない。

明けて爾々とお言ひなされ。お前様は婦に逢ひに行く、」

「……」

「なゝ然も、先方は、義理、首尾て、差當つては間の惡い處を、お前様が突詰めて、斷つて、垣塀も、押倒し、突破る、……其の力て、胸を搔挘るやうにあせるから、婦も切つて、身にお生命にも代へて逢はうと云ふ。其へ行く……お前様、其の途中てありませう。通りがゝりから、行逢ふて、慥りやつて擦違ふたまての跫音て、よう知れました。とぼ〳〵した、上の空なて丁と分る……

露もかゝり、霜もおりる……月も曇れば星も暗し、此の大空にも迷ひはある。迷ひも、其は穩なれども、胸の塞り呼吸が閉る、もやくやなあとの、電はたゞがみを御覽ぜい。

人間の思ひ、何事も不思議はない。

「私が心に思較べた……身に引較べればこそ、此の掌を……」

と云ふ、巳が面へ、掌を蓋する如くに、

「……見るとやら申す通り。見えぬ目にも知れました。」

あとの二人とも、此の時言合はせた體に、上と下て、衣ものゝ襞積まて、頸いたのが龍に分つた。

坂上は、氣拔けのした狀に、大息を吻と吐いて、

「辻て賣トをする人たちか。私も氣が急いだので、何か失禮を言つたかも知れない……

先方は足袋跣足て、或家を出て、——些と遠いが、これから行く處に、森のある中に隱れて待つた切、

一人で身動きも出來ないで居るんです。

其の事は、私が今まで居た處へ、當人から懸けた、符牒ばかりの電話で知れて、實際、氣も顚倒して急ぐんです。行かないで何うしますか、行つては惡いんですか。」

「われら考えたも其の通り……いや、男らしく、よう申されました。さて、いづれもお最惜しいが、あゝ、危い事かな。」

と杖を引締めるやうに、胴へ取つて兩手をかけた。瘦按摩は熟と案じて、

「先づお聞き申すが、唯今、此の坂の此の、われらが片寄つて路傍に立ちました……此の崖下に、づら〳〵となぞえに並びました瓦斯燈は、幾基が處燈が點いて、幾基が處消えて居ります。一寸、御覽ぜ、一寸御覽ぜ。」

と言ひ〳〵、がく〳〵と項を棹つて首を垂れる。

言に引向けられたやうに、三人の並んだ後を拾つて、坂下から、上の町へ、とづらりと視ると……

坂上は今夜はじめて此の路を通るのではない。……片側へ並べて崖添ひに、凡そ一間おきぐらゐに、間を籠めて、一二三堂と云ふ、界隈の活働寫眞の手で建てた、道路安全の瓦斯燈がすく〳〵ある。

しろ〳〵と霜柱のやうに冷たく並んで、硝子火屋は、崖の巖穴に一ッ一ッ窓を開けた風情に見えて、ぱつたり、燈が消えたあとを、目の屆く、どれも是も、靄を噛んで、吸ひ溜め吸ひ溜め、透間を覗いて切れ〳〵に灰色の息を吹出す。

かと思へば、目の前に迮のは、あらう事か、鬼の首を古綿て面形に取つた形に、靄がむら〳〵と瓦斯燈の、其の消えたあとに蟠つて、怪しき土蜘蛛の形を顯はし、同じ透間から吹く臭も、これは可恐しい糸を手繰つて、天へ投掛け、地に敷展べ、宙に綾取る。や、然う思へば、靄のねば〳〵は、這個の振舞か。

四

「大低、皆消えて居ります筈て。」

と按摩は、坂上が然うして、きよろ〳〵と瓦斯燈を眗す内に、先むじて又云ふ。

「すつかり消えて居る。あゝ、」と尚ほ一倍、夜の更けたのが身に染みた。

「な、消えて居りませう……けれども、お前様から、坂の上の方へ算へまして、其の何臺目かの瓦斯が一つ、まだ燈が點いて居らねばなりませぬ。……見えますか。」

「見える……」

と答へた、如何にも一臺、薄ぼんやりと、灯が亂れて、靄へ流れさうに點いて居る。

「しかし、何本めだか一寸分らない。」

「餘り遠い處てはありませぬ。人通りのない、故道松並木の五位鷺は、人の居處から五本目の枝に留ります、道中定り。……其の灯の消殘りましたのは、お前様から、上へ五本目と存じます。

私が間違つた事を言ひますれば、其處に居ます師匠、沙汰をします筈。黠つて立つて居ります上は、決して相違ないと存じます。數を取つて御覧ぜ、御覧ぜ……一つ、」と杖の尖をカタ〳〵と二つ鳴らす。

「一い……」

「二ッ、」と三ッ、杖の尖をコト〳〵コト。

「三い……四う……確に五本目……」

「てありませうな。」

「何うしたと云ふんてす。」

「お前様、此の暗夜に、われらの形、崖の様子、消えた瓦斯燈の見えますのも、皆其の一ッの影なのて。然もない事には、鼻を撮まれたとて分りませぬが。」

成程、覺束ない、もの丶形も、唯一つ其の燈の影なのてある……心着くと、便りない色ながら、其の力には、揃つて消えた、街燈が、時々ぎら〳〵と、光りさへする——霧が息を吐いて瞬く中に、——坂上の姿もふら〳〵として、

「一體、其が何うしたんてす。」

「然れば……其の五基目に一ッ殘りました灯の下に、何か見えはいたしませぬか。」

「何が、」

と云ふのも聲が震ふ、坂上は又慄然とした。

「何か、居はいたしませぬか。」

「何にも、何にも居らん。」

「居りませぬか。」

「居ない。」

「居ないが定に成りませぬ。お前様が其處までお運びなさりますれば、必ず出ます……それ故に、お留め申すのでありまして、まあ、お聞きなさりまし。」

と捻向いて、痩按摩は腰を屈めながら、丁ど足許に一基あつた……瓦斯燈の根を、其處に轉がつた、ごろた石なりにカチ〳〵と杖て鳴らした。が、音も響かず、靄に沈む。

「先づ……最う一ツ念のために申さうに……われらが居ります。此なる瓦斯燈、唯た今、お前様を呼留めましたなり、一歩とて後へも前へも動きませぬ……此は坂下からはじめまして、立ちました瓦斯燈の、十九基めに相違ありませぬ。

間違へば、師匠沙汰をなされます。

さて、三年前、……日は違ひます。なれども、同じ此の霜月の夜さり、丁ど同じ今の時刻、私にもお前様と同じ事がありました。……

其の頃は、決して其の、恁やうな盲目てはありませなんだ。」

と云ふ、まともに坂上に對して、向直つたけれども、俯向いたなり顔は上げぬ。

「ようこ似た、お前様と同じ事で、然る婦にあひときに参るので、此處を、此の坂を、矢張り、向つて下から、うか〳〵と上りかけたのでありました。

時に擦違つたものが、これだけは、些と様子が違ひまして、按摩一人だけが見えました。」

其の時、件の、長頭は、くるりと眞背後にむかふを向いた、歩行出すか、と思ふと……熟と其のまゝ。

五

婦は、と見ると、其は、彫間の話を聞くらしく、蹲んだなりに、くるりと此方に向直つた、帯も膝も、くな〳〵と曼まれさうなが、咽喉のあたりは白かつた。

按摩の聲は判然して、

「で、其で矢張り、お前様に私がしましたやうに、背後から呼留めまして、瓦斯の五基目も、足もとの十九の數も、お前様に今われらが言ふた通りの事を申します。

私はこゝで、其の通りを、最う一度申しますばかりの事。

何で、約束した其の婦に逢ひに行つては成らぬのか、と――今のお前様の通りを、又其の時私が尋ねますと、彼の盲人が申すには、」

其の盲人は、こゝに先達の其の長頭である事は、自から坂上の胸に響く。

「上へ五本めの、一つ消え殘つた瓦斯燈の處に、怪しいものゝ姿が見える……其は、凡て人間の影を捉る、

影を摑む、影法師を喰ふ魔ものぢや。

彼めに影を吸はるれば、人間は形痩せ、嘗めらるれば氣衰へ、蹂躙らるれば身を惱み、吹消さるゝと命が失する。

凡そ、月と日とゝもに、影法師のある處、件の魔もの附絡はずと云ふ事なうて、且つ吸ひ、且つ嘗め、蹂躙る。が、いづれ其の人の生命に及ぶには間があらう、其もつて大事ぢやに、可恐しいは、今あるやうな燈の場合。一口くわつと遣つて、」

と云つた。按摩の唇は尖つたな！

「立處に影を喰ふ、喰はるれば、それまでぢや、生命にも及びかねぬ。必ず此の坂を通らるゝな……

と恁う言ひます。

私も血氣て、何を言ふ。第一、其の魔ものとはどんなものか、と突懸つて訊きますと、其の盲人ニヤリともせず、眞實な顏をしまして、然れば、然れば先づ、守宮が冠を被つたやうな、白犬が胴伸びして、頭に山伏の兜巾を頂いたやうなものぢや、と性の知れぬ事を言ふ。

いや、聞くよりは見るが疾い。さあ、生命を取られて遣らう、と元來、あたまから眞とは思ひませぬなり。づか〳〵、其の、……其處の其の五基めの瓦斯燈の處まで小砂利を蹴つて參りますと、道理な事、何の仔細もありませぬ。

處に、右の盲人、カツ〳〵と杖を鳴らして、駈上つて、飛んで參り、これは無體な事をなされる。……

強い元氣ぢや。私が言ふて聞かす事を眞とは思はぬ汝に、傳托けるのは無駄ぢやらうが、ありやうは、右の魔ものは、さしあたり汝の影を、摑まうとするではない。今夜……汝が逢ひに行く……其の婦の影を捉らうと、豫てつけ狙ふて居るによつて、嚴い要心、深い謹愼をしますやう、汝を通じて、其の心づけがしたかつたのぢや。

と恁う又言ふのでありました。」

六

「まざ〳〵と譫言吐く……私の婦知つたりや、と問ひますと、其を知らいて何をする……今日も晩方、私が相長屋の女房が見て來て話した。谷町の湯屋で逢ふたげな、……よう湯の煙で溶けなんだ、白雪を撫てゝふつくりした、其は、其は、綺麗な膚を緋て締めて、淡い淺黄の紐で結えた、乳の下する〳〵辷るやうな長襦袢。小春時の一枚小袖、藍と紺の小辨慶、黒繻子の帶に、又緋の扱帶……髷に水色の絞りの手柄。艶の雫のしたゝる髪に、ほんのりとした耳のあたり、頸元の美しさ。婦同士、も見惚れたげて、前へ廻り、背後で覗め、姿見に透かして、裸身のまゝ、つけまはいて、黒子が一つ、左の乳の、白いつけ際に、ほつッりとある事まで、よく知つたと云ふ話。

何と、此の婦に相違あるまい、汝が逢ひに行く其の婦は……

と又其の盲人が云ふのであります。」

聞くうちに、坂上は、ぶる〳〵と身震ひした。其は、其處に、此の話をする按摩の背後に跪ゐ居て、折から面を背けた婦が、衣服も、帶も、まさしく、歴然と、其の言葉通りに目に映つたゝめばかりてはない。——

足袋跣足て出たと云ふ、今夜は、もしや、あの友染に……あの裾模樣、と思ふけれども、不斷見訓れて氣に染みついた、其の黒繻子に、小辨慶。

坂上は血の冷えるあとを赫と成る。

「何うてありませう、お前樣。此から逢ひにおいてなさらうと云ふ、其の婦の方は、裾模樣に、錦の帶、緋縮緬の蹴出しても、……其の黒繻子に、小辨慶の藍と紺、膚の白さも可いとして、乳房の黒子まて言ひ當てられました、私が其の時の心持、彈りながら御推量下さりまし。

こゝな四ッ谷の谷底に、酷い事、帶紐取つて、あか裸て倒されてども居りますのが、目に見えるやうに思はれました。

て、右の其の盲人は、例の魔ものは、其の婦の影を、嘗めう、吸はう、捉やう、蹂躙らう、取喫はうとつけ廻す——此の儀を汝から托けて、氣を注けるやう言ひなさい、と申したのを、よくも聞かずに、黒雲を捲いて、飛んて行き、電のやうに、鐵の門、石の唐戸にも、遮らせず、眞赤な胸の炎て包んて、弱い婦に逢ひました。

影を取る、影を吸ふ、影を嘗める、魔ものに逢つた。此の坂しか〳〵の瓦　あかりて見て來た。……

婦の家は、つひ此の居まはりてありました。——

夜も晝も附廻すぞ、それ、影が薄いわ、要心せい、とお前樣。可哀氣に、苦勞て氣やみに煩つて、帶をしめてもゆるむほど、細々と成つて居るものを、鐵槌で打つやうに、がん〳〵と、あたまへ響くまで申しましわ。

他人に、脇を見せたと思ふ妬みから、——婦が膝に突俯して、震へる聲の下て、途中、どんなものに逢つて誰に聞いた話だ、と右の影を捉る魔について尋ねました時、——おのれ、胸に問へなぞ、と云ふて、盲人から聞いた事は言はずに了つたのてありました。

此が飛んでもない心得違ひ。其の盲人こそ、其の婦に思ひを懸けて、影のやうに附絡ふて、それこそ、婦の家の居まはりの瓦斯燈のあかりて見れば、守宮か、と思ふ形體で、裏板塀、木戸、垣根に、いつも目を赤く、面を蒼く、唇を白く附着いて、出入りに附狙つて居たとの事。

はじめから、威したものが盲人と知れゝば、婦も然まては呪咀はれずに濟んだのてありませう。」

七

「今度、……其の次……段々に婦に逢ふ事が少くなりました。

兎角むかふて、私を避けるやうにするのてあります。

……殺して死なう、と逆上するうち、段々悉しく聞きますと、其の婦が、不思議に人に逢ふのを嫌ふ。

妙に姿を隱したがるのは、此の、私ばかりには限らぬ樣子。

終には猫又が化けた、姿のやうに、日のめを厭ふて、夜も晝も戶障子雨戶を鎖めた上を、二重三重に屛風で圍ふて、一室どころに閉籠つた切、と言ひます……

漸との思ひ、念力て、其の婦を見ました時は、絹糸も、むれて、ほろ〳〵と切れて消えさうに、なよ〳〵として、唯うつむいて居たのであります。

顏を上げさした……ト目が、潰れました。へい、いえ、其の婦の兩眼で。

聞きまするを、私に、件の影を捉る魔ものの話を聞いてからは、瞬く間さへ、瞳に着いて、我と我が影が目前を離れぬ。

臺所へ出れば引窓から、椽に立てば沓脫へ、見返れば障子へ、壁へ、屛風へかけて映ります。

映ると其の影を、魔が來て、吸ひさうて、嚙めさうて、踏みさうて、揉みさうて、絡みさうて、寐さうて成らぬ。

月の影、日の影、燈の影、雪花の朧々のあかりにも、見て影のない隙はなし……影あれば其の不氣味さ、可厭さ、可恐さ、可忌しさに堪兼ねる。

所詮が嵩じて、眞暗がり、我が掌は見えいても、歷々と、影は映る、燈を消しても同じ事で。

次第に、床の間の柱、天井裏、鴨居、障子の棧、疊のへり、場所、所を變へつゝ、彼の守宮の形で、天窓にすほりと何か被つた、あだ白い、胴の長い、四足で歐るものが、ひつたりと附着いたり、ことり

と聞くなつたり、長々と這ふのが見えて、やがて、闇の中、枕の下にも居るやうに成りました。
見る毎に、あツと聲を上げて、追へば、其の疾い事、ちよろ〳〵と走つて消えて、すぐに、のろりと顯はれる。

見まい、見まいの氣が逆上つて、もの丶見えるは目のあるため、と何とか申す藥を、枕をかいもの、仰向けに、髮を縛つた目の中へ點滴らして、其の兩眼を、盲にした、と云ふのであります。

心も暗夜の手を取合つて、爾時はじめて、影を捉る魔もの丶話は、坂の途中て、一人の盲人に聞かされた事を申して、其の脊格合、年ごろを言ひますと、婦は、ハッと、はじめて目の覺めたやうに成つて、さめ〳〵と泣出しました。

思ひの叶はぬ意趣返しに、何と！　右の其の横戀慕の盲人に、呪咀はれたに相違ありませぬ。

頰の肉を引掴んで、口惜涙、無念の涙、慚愧の涙も詮ずれば、たゞ〳〵最惜しさの涙の果は、おなじ思ひを一所にしやうと、私これ又此の通り、兩眼を我と我手に、……　これは針てツブリと突いたのてあります。

三世、一娑婆、因果と約束が繋つたと、いづれも發起仕り、懺悔をいたし、五欲を離れて、唯今ては、其なる盲人ともろともに、三人一所に、杖を引連れて、晝は面が恥かしい、夜とあれば通ります……

路すがら行逢ひました。

御迷惑か存ぜぬが、露の袖の擦合ふた御縁とて、ぴつたり胸に當る事がありましたにより、お心着け

申上げます……お聞入れ、お取棄て、ともお心次第。

此の上は、さて、何も存ぜぬ、然やうなれば、お暇を申受けます。」

言の下より、其處に、話の途中から、さめ〴〵と泣いて居た婦は、悄然として、しかも、すッくりと立つた。

とぼ〳〵とした後姿て、長頭から三つの姿、消えたる瓦斯に、幻や、杖の影。

婦が、白い優しい片手て、立つ時、目を拭いた切が姿を偲ぶ……其の紅絹ばかり、ちら〳〵と……蝶のやうに翻を縫ひ……

（完）



日光

島崎藤村

左様だ、光と熱と夢の無い眠の願ひ、と言つた人もある。斯ういふ言葉を聞いて笑ふ人もあるだらうか。もしこれが唯の想像の美しい言ひ廻してなく、實際斯の面白さうなことで滿されて居る世の中に、光と、熱と、それから夢のない眠より外に願はしいことも無いとしたら、奈樣なものだらう。丁度私はそれに似た名狀し難い心地で、二週間ばかり床の上に震へて居たことが有つた。

過る年の冬の寒さも矢張斯の神經痛を引出した。私が靜座する習癖は——實は私はそれでもつて自分の健康を保つと考へて居るのだが——それが反つて斯うした疼痛を引起すやうに成つたのかも知れない。それに喋舌が煩しく

て、月に三四度づゝは必ず頼んだ上手な按摩も廢めた。私は自分の身體が自然と回復するのを待つより外は無かつた。はか〴〵しい治療の方法も無いと言ふのだから。

私は眠られるだけ眠らうとした。ある時は酣醉した人のやうに、一日も二日も眠り續けた。我等の肉體は、ある意味から言へば、絶えず病みつゝあるのかも知れない。それを忘れてゐられるほど平素あまり寢たことも無い私は、斯ういふ場合に自分で自分の身體を持てあました。ある時はもつと重い病でも待受けるやうな心地で、床の上に眼が覺めることがあつた。不思議な震動が私の全身に傳はつて來た。それが障子の外に起る町の響か、普通の人の感じないやうな極く輕い微かな地震か、それとも自分の身體の震へか、殆んど差別のつかないもので有つた。私は自分で自分の眠が恐ろしく成つて來て、枕許にいろいろな本や雜誌を取出して讀んだ。

「我等藝術の憐むべき勞働者よ。普通の人々にはしかく簡單に自由を與へられるものも、我等には何故に容易に許されぬてあらう。それも理てある。普通の人々は眞心を持つ。我等は遂に眞心の何物をも持たぬ。我等は到底理解されざる人間てある……。」

斯の言葉に籠る可傷しい眞實を私は寢ながら思ひ續けた。

回想は私の心を高い煙突の立つた火葬場の方へ連れて行つた。長く續く貧しい町々、畠中にある細い平坦な一筋の道路、車の兩側へ來て煩いほど取付く乞食の群、左様いふものが雜然と私の胸に浮んで來た。今でもまだ私はあの待合處に朝早く集つた人々の顏、入口の棚の上に並べてあつた陶器の壺、床の

間に掛つた地獄極樂の繪などを記憶てしかもありくと見ることが出來る。私達は導かれて、天井の高い、薄暗い、赤煉瓦の建物の中へ入つた。そして大きな竈の鐵の扉の前に立つた。御坊(おんばう)がその中から、灰色に焼け遺つた貝殼のやうな骨や、齒や、それから黒い海綿のやうに焦げた腦髓などを取出して、私達の前に置いた。それが私の妻だ。

回想は又、私の心を樹木の多い靜かな墓地の方へ連れて行つた。長雨の降り續いた後のことて、墓守が堀つた土の中には黄に濁つた泥水が涌き溢れて居た。墓守は兩手を深くその中に差入れたり、兩足の爪先て穴の隅々を探つたりして、小さい髑髏を三つと、離れくの骨と、腐つた棺桶の破片とを堀出した。殘酷な土の臭氣は私達の鼻を衝いた。丁度八月の明るい光が綠葉の間から射し入つて、雨降揚句(あめふりあげく)の墓地を照らして見せた。蒸々(むしむし)とした空氣の中で、墓守は汚れた額の汗を拭ひながら、三つの髑髏の泥を洗ひ落した。その中でも一番小さく日數の經つたのは頭や顔の骨の形も崩れ、齒も缺けて取れ、半ば土に化して居た。一番大きいのは骸骨としての感じも堅く、齒並も揃ひ、髮の毛までもいくらか殘つて、まだ生々とした額の骨の邊に土と一緒に附着して居た。それが私の子供等だ。

すべてこれらの光景に對しても、私は涙一滴流れなかつた。唯、見つめたまゝて立つて居た。憐むべき觀察者。然り、我等は遂に眞心(ハート)の何物をも持たぬのてあらう。

多くの悲痛、厭惡、畏怖、艱難なる勞苦、及び戰慄は、私の記憶に上るばかりてなく、私の全身に上つた――私の腰にも、私の肩にまでも。

"The whole of winter enters in my Being—pain,
Hate, horror, labour hard and forced—and dread,
And like the northern sun upon its polar plane,
My heart will soon be but a stone, iced and red."

私は斯の歌の意味を切に感じた。その意味をヅキ〳〵病める疼痛で感じた。

斯ういふ中で、最も私の心を慰めたものは、本間久雄君が譯したオスカア、ワイルドの『獄中記』であつた。私は床上であの翻譯を讀むのを樂みとした。

いかなる苦痛も、それが自己のものであれば尊いやうな氣がする。すくなくも人は他人の樂みにも勝つて自己の苦みを誇りとしたいものである。しかし私は深夜獨り床上に座して苦痛を苦痛と感ずる時、それが痲痺して自ら知らざる狀態にあるよりは一層多く生くる時なるを感ずる度に、斯くも果てしなく人間の苦痛が續くかといふことを思はずには居られない。

オスカア、ワイルドは傷いた天才のやうな傲然とした調子で、ある時は人目も忍ぶ囚人の心弱い調子で、一生の憤りと感激とを泄らして居る。

彼、『獄中記』に駄多をこねて曰く、

『神々はありとある凡てのものを私に與へた。私には天才があつた、優れた名前があつた、高い社會的地位があつた、潑溂たる情緒、智力的勇悍があつた。私は哲學をして藝術たらしめ、藝術をして哲學た

らしめた。私は人々の心根を更へ、事物の色彩をも更へた。私の言つたこと、乃至行つたことゝて世人をして驚嘆せしめなかつたことは一つとしてなかつた。私は最も客觀的形式の藝術として知られて居る戯曲を取つて、それを抒情詩や小唄の如き主觀的表白の藝術を造り上げた。同時に戯曲の範圍を廣め、その特質を豐富にした。　私は僞りなるものも又眞なるものと等しく、同樣の領域を占むべきが眞理であるとなし、眞僞は要するに智識的存在の形式に過ぎないことを明かにした。私は藝術を以て最高の現實となし、人生を以て作り物語の單なる樣式となした……これらのことに關しては私は全く他人と異なつた天才を持つて居たのである。けれども私は、又、愚かな、婬逸な安佚の永き連鎖に吾れと吾身を誘はれるに委せた。私は流行兒を以て自ら任じ、洒落者を以て自ら快しとした。自分の周圍をも亦、多くの小人物、卑しい心の人々に取まかれるに委せた。私は吾れと吾天才の浪費者となつた。而して曾て自分に不可思議な喜悅を與へた永への若さを恣まゝにするやうになつた。高きものに疲れ果てた私は、更に新しき刺激を求めて一向に下劣きに就いた……………………………私は最早靈魂の支配者でなくなつた。而もこれを知らなかつた。私はたゞ〳〵快樂の命ずるまゝに身を委せた……。』

風流にして才氣ある貴公子の面目がこれを讀むと想像される。同時に人をして、斯の婬逸な一生に何が根强く潜んで居たかを思はしめる。彼は二年牢獄に呻吟し、堪えがたき絶望に陷り、悲痛のかず〳〵のありとある心持を經驗したとまで記して居る。所謂流行兒であるならば、そこを終の幕としたかも知れない。否、そこまで行かなかつたかも知れない。「獄中記」の面白味はそれから更に始めやう……

ころにある。彼は悲哀のかず〳〵も、一生の根底に横はれる苦痛も、拭ひ難き恥辱も、墮落も、隱れたる卑しき行ひも、罪惡も、乃至身に崇れる刑罰までも、直にそれを靈的な意味あるものに化さうと努めた。彼の『新生』とは人生を以て藝術の形式と成すにあつた。斯くして始まる藝術的生活は結局一種の作り物語であらうと思ふけれど、彼の所謂智力的勇悍には動かされる。

『私にして、私が到着し得る最高のところを言明すれば、それは藝術的生活の絶對的實現といふ境地である……ペータアはその「快樂主義者マリウス」に於て、藝術的生活と、深い、快い、而かも嚴かな意味に於ける宗教的生活とを融合しやうと試みた。けれどもマリウスは要するに一種の傍觀者に過ぎなかつた……ワーヅワースは詩人の眞の目的を、人生の諸相を適當な情緒もて觀照するにあると言ふたが、理想的傍觀者も又、かくの如き觀照眼を有する。けれども要するにたゞ〳〵傍觀者に過ぎない。この人々は靜かに靈場の長椅子に腰うち掛けて、自分の眺めて居るところが悲哀の靈場であることに思ひ到るものは殆んど無いのである。』

見よ、いかに哀傷多き音調と、宗教的情緒の色彩と、そして性急な夢想とに富めるかを。

彼の聲はあまりに高くて、どうかすると直に嗄れて了ひさうな氣がすることや、警句百出して星の如くに其言說を飾るところから、見たところ多趣多樣の趣はあるが、その基調を成すものは割合に單調な氣がすることや、それから野に埋れし寶の如く心の奧深く潜めるものは即ち謙讓といふことであると說いて居るにも關らず、その實、彼が嘲笑した傍觀者ほどの謙讓をも感ぜしめないことなどは、私の心を

滿足させない。けれども私は慰藉を得た。私の病んで居る耳に、種々な快いことを囁いて呉れたやうな氣がした。私は種々な暗示をも受けた。その證據には、ボオドレエルの詩集と斯の『獄中記』は絶えず私が自分の枕許から離さなかつたばかりでなく、若い友達で見舞に來て呉れる人がある度に、『苦難は一種の長い瞬間である』といふ句だの、「囚人の一人でも斯の世に象徴的な位置に立つて居ないものは無い」といふ一節だの、其他、彼の熱心な基督論に關する部分だのを引合に出して、かのガリレヤの農夫が幾多の驚嘆すべきことを單に己が身に想像したのみに止らずそれを實際に實現したといふ、あの魔力のある言葉なぞを話して聞かせた位だから。

十二月の末のある夕、私は床を離れて忘年會に行つた。集つた友達の中には久し振で逢つた人もあつた。私はまだ顔色が惡いと言はれた。N君はしきりに私に温泉行を勸め、春は早々箱根へ同行するといふ約束までした。O君もその仲間に加はるとのことだつた。

私は遠方に居る親しい友達なぞから見舞の手紙を受取つたが、どうかするとそれからも床の上に横に成つて、左樣いふ手紙を讀んだ。私はまだ臥たり起きたりして居た。

「心が渴いて來た――どれ、日光を浴びやうか。」

これはある畫家の版畫集のうちに、以前私が書いて贈つた言葉だが、丁度私の願ひは斯の短い言葉に盡きて居た。長いこと友達も訪ねず、旅にも行かず、寒い部屋の中に閉ぢ籠つてばかり居た私は、國府津の海岸あたりの暖い日光に饑え渴いた。

春が來た。正月らしい朝日が私の部屋の障子にあたつて來た。電車の車掌や運轉手が同盟罷工を行つて、東京の町々はめづらしく靜かだ。皆ぞろ〳〵年始廻りに歩いて居る中を、私も親戚の家だけ訪問して、二日には早や旅の仕度を始めた。

青い國府津の海は私を呼ぶやうな氣がして居た。私は一時も早く箱根へ急いで行つて、溫泉の浴槽の中へ身を浸さうとした。

（をはり）



別れてから

田山花袋

一

親しい友達は段々其處に訪ねて行つた。

「停車場から五町、牛舍の向ふの斜阪の上にある小さい家」

から端書に書いてあつた。成程五六匹の牛の寐轉んで居る牛舍がある。道路に添つて處々に樹木の茂つた芝草の斜阪がある。茅葺の小さい屋根は其中に埋れるやうになつて見えてゐる。

「これはしやれた處だね。誰かの別莊にでも造つたものと見えるね」

から友達の一人は言つた。

一人の友達は、運わるく丁度主人が散歩に出かけた留守に遣つて來た。秋の日影の明るく射した八疊の間には、本だの雜誌だのが散ばつたまゝになつて居て、案内を請うても返事をするものがなかつた。

その友達は縁側に腰をかけて暫く四邊を眴してゐた。

新宿の女郎上りだと言ふ大工の嬶が、その入口の處の一間しかない小屋のやうな家に住んで居た。其處に下りて行つて聲をかけると、上さんは窓の處から顔を出して、『なアに、散歩に行つたんですよ。ぢき歸つて來ますよ。上つて待つて入らしやい。』かう言つて、客と一緒に上の家に遣つて來て、勝手の七輪に火を起し始めた。

『え、え、私が御飯だけ炊いて上げるんです。こちらの方は、それは寐坊ですからねえ。默つて放つて置けば、お午までは屹度寐てゐますよ……。そのかはり、夜は隨分遲いんですから。一時位まで、雨戸も閉めずに、灯が點いてゐることがよくありますよ。一度、餘り氣になるから、私がそつと來て見ると、机に向つてちやんと勉强してるんですもの。勉强するなら、晝間したら好いと思ふんですけれども、矢張夜でなくつては駄目な稼業なんてすてつてね』話好きな上さんは、誰でも構はずこんなことを饒舌つて聞かせた。

あたゝかな午後の秋の日影に照されながら、縁側に腹這ひになつて、客は新刊の雜誌などを見て居た。モウモウといふ牛の聲が時々向ふから聞えて來た。上さんは縁側の一隅に腰をかけて、いろいろなことを話しかけてゐたが、七輪の鐵瓶が俄に白い湯氣を立てゝ沸き出したので、急いで立ち上つて、番茶を淹れて、客に出して勸めた。

書棚の傍の柱には、束髪に結つた、眼の綺麗な、十八九の丸顔の女の寫眞が、草色を縁にした立派な

寫眞挾に插まれたまゝ懸けられてあつた。それを上さんは外して來て、『これがこちらの方の前の奥さんだつて、本當ですか』などと訊いた。

此家の後には、廣い野原が續いて居た。楢や栗の林が多かつた。路がうねうねと丘と丘との間を縫つて、思ひもかけない處に五六軒の百性家があつたり、小さい川が流れてゐたりした。昔、誰かの邸宅であつて、すつかり荒廢した跡とも思はれる池や築山などもあつた。

野に働いて居る百性達は、竹の根のステツキをついた何方かと言へば丈の低い瘦せた三十前後の一人の男の散歩姿を到る處で見た。林の中の細い路からヒヨツクリ出て來ることもあれば、畑に添つた路に立つて、塵埃の山の燃えるのをじつと見詰めてゐることなどもある。レールの上に架つた橋の上から白い烟を立てゝ汽車の遣つて來るのを見てゐることなどもあつた。大抵、ステツキを抱えて、凝と物を思ふやうにして步いてゐた。

林の私語や、小川の流や、靜かな百性家や——さういふものをかれは求めるやうにして步いた。かれは靜かに物を考へたいとばかり思つて居た。

かれは百性に話した。

『今年は豊年てしたらう？』

『いや、駄目てすァ』野にある人達は、腰を延すやうにして、こんなことを言つた。

百性の娘は、莞爾しながら、かれの散歩姿と擦れ違つて行つた。

時にはかなり遠い處まで出かけて行くこともあつたが、其日はいつも行く池の周圍を一廻して、林に透徹る秋の日影の中に暫し座つて、それから俄に歸りたくなつて歸つて來た。

緣側に寐轉んで居る友達の姿を見て　かれは喜悅の聲を擧げた。

二

近所に居る友達も來た。

夕日があたりを照して居た。樹の影が黑く地上に落ちた。垣に傍つた路を通つて行く荷車の音が靜かに聞えた。

やがてランプの灯は八疊の一間を青白く照した。大きな机の上の書籍や雜誌を片附けて、其處に大工の上さんがカレー粉を交ぜた炊き立ての飯を大きな皿に山盛にして運んで來た。人達はスプンを手に旨さうにして食つた。お仕舞になつた時には、戶外はもう全く暗くなつてゐた。

歸る時には、かれは友達を送つて、水車のある橋の處まで出かけて行つた。若々しい笑聲は垣に添つたり牧牛場に添つたり星のうつる水田に添つたりする闇い田舍道を暫し賑かにした。

「加藤君、大分落附いたやうだね」

「好い鹽梅です」

二人の友達は別れて少し來てからかう言つた。

三

加藤は家に入る前に、入口の大工の許に寄つて見た。大工の磯さんはまだ歸つてゐなかつた。上さんは三分の洋燈をつけて其處に座つてゐた。

「今日は賑やかてしたね」

などと上さんは言つた。

加藤は暫し默つて其處に腰をかけてゐた。何となく家に歸るのがさびしかつた。夜の空氣が靜かな思出をかれの胸に誘つて來た。

「つまらんなア」

思はず知らずさうした言葉が口から出た。

「本當に獨(ひとり)ぢや淋しいでせうね。……」上さんはかう言つて、「一人(ひとり)お持ちになつたら好いぢやありませんか」

「さう簡單には出來ないからな」

「それもさうね、あんな綺麗な奥さんがまだ家に待つてゐてはね」

戲談らしく上さんは言つて笑つた。加藤は默つてゐた。

暫してから家の方に歸つて行くかれの姿が見えた。點けたまゝにして置いた机の上のランプは夜風にチラ〳〵した。四邊の樹木の葉裏はその餘光を受けて明るく照つてゐた。

かれは先づ縁側に腰をかけた。種々なことが思ひ出された。二年足らずの年月が、何んなにかれに辛い悲しい經驗を與へたか知れなかつた。かれは思ひもかけない人生の一面に觸れて、悶へたり悲しんだり苦んだりする人であつた。かれは今靜かにその二年間の年月を顧つて考へて見た。自分ながらよくもその火水の中を通り拔けて來た。よくもその苦悶を過去のことのやうにして考へるまでの餘裕が出て來た。……ふと何も彼も逸早く過ぎ去らせて了ふ時の力といふことが頭に上つて來た。かれは堪へられないさびしさを總身に覺えた。

別れてから――女が家出してからもうかれ是れ五ヶ月になる。其間の苦悶は? 苦痛は? かれは絶えず短刀を懷にして、女に邂逅し次第、其の胸に恨みの刄を當てなければ承知が出來ないと思つたことさへある。また時には自分等二人の間に入つて、二人の仲を劃かうとした奴等を片端から斬殺して呉れやうとまで憤怒の思ひに燃えたこともある。かれの戀には、傷けられた男性の矜持に對する怨すべからざる屈辱があつた。

かれは病院の一室で最後に女に逢つた。白い寢臺……白い女の顏……女は涙を流して侘びた。それは虛僞の涙であつたてはないか。

「貴郎の爲めにも、當分一緒にゐない方が好いから。……私は外部から貴郎を助けることにしますから」

其時、女はさう言つた。さう言つて置いて、女は身を躱して了つた。

友人や先輩が心配して、靜かに考へるやうにする方が好いと言ふことになつて、無理につれて行かれた京都の三ヶ月――かれは嵯峨に近いある農家の一間にさびしい辛い日を送つて來た。仁和寺の山門の上に蔽ひかぶさるやうな鮮かな新綠、愛宕道から炭を背負つて下りて來る田舍娘、自分の居る室から雨の降る日にも晴れた日にも見える妙心寺の屋根、地響をさせて通つて行く丹波への汽車、中でも忘れることの出來ないのは、自分が世話になつた先輩の懇意にしてゐる家の娘であつた。娘はもう二十位だつた。純なやさしい京都辯で、いろいろなことを話して聞かせて呉れた。髮の濃い、眼の綺麗な娘だつだ。その娘と娘の父親と先輩と一緒に伴れ立つて嵐山に行つたことなどもあつた。娘は男の苦悶の原因を知つて居て、何ぞと言つては慰めて呉れたりした。そんな女ばかりではありませんといふやうな語氣を洩したこともあつた。それが男の心に深く殘つて居た。今でも殘つて居た。

其時、娘は手を舟緣から透徹るやうな水の中に浸して居た。水は新綠の色を帶びて、一層濃い碧を呈してゐた。娘に近く座を占めたかれは、娘が樂しさうな笑ひを顏に漂へて、ぬれた手を手巾にふいて居るのをじつと見てゐた。

かれは心の蠢くのを覺えた。かれは死ぬほど戀ひした女の外に猶ほ他の女を思ふことが出來るのを不思議にした。

「しかしこれは戀ではない。女に對する廣い同情だ」

かれはかう思つたのを今でも覺えてゐる。

かれは緣側から座敷に上つて、眞中に引出してある机を床の間に添つた一隅へと押附けてやつた。かれは机の上に置いてある洋燈を前にして座つた。

遣らなければならない仕事が澤山にあつた。某雜誌に送らなければならない飜譯の〆切はもう明後日である。某雜誌の文叢欄は明日までまとめて送つてやらなければならない。それに飜譯しかけた叢書の仕事もある。かれはそれに着手する前に、先づ日記を書いた。

日記は罫紙を綴ぢ合せたもので、今年のだけでも、もうそれがかなり厚くなつてゐる。時には、一日の感想を十枚も二十枚も書くこともあるが、今日は五行ほど書くと、パッタリ筆を措いて、卷烟草を一本スパ〳〵と旨さうにして吸つた。

再び筆を取つたかれは、原書を傍に、原稿紙を前にして一字一字書いて行つた。始めてからは容易に筆を留めやうとしなかつた。家の周圍には、夜の暗が犇と押寄せて、をりをり風がガサガサと窓の外の寒山竹を動かして行つた。

笠を深くかけた洋燈は、机の周圍を照すだけて、室の中はぼつと薄暗くなつて居た。それにも拘らず、柱にかけた寫眞は、丁度かれの大きな影の頭の處あたりに、分明と浮出すやうに見えてゐた。

かれが筆を捨てゝ、後部頭に掌を當てゝ、仰向に身を倒した頃には、もう餘程夜が更けてゐた。氣が附くと野を過ぎて行く風の音にかれは耳を欹てゝ居た。

かれはこれまで深夜に眼覺めて、何んなに深く强く女のことを思つたかといふことを考へずには居られなかつた。殆ど毎夜――ある時などは自分ながら自己の考の恐ろしいのに戰慄して、それをまぎらす爲めに夜更に戸外に出たことさへある。時には、女が後悔して自づから此處に遣つて來て、今、戸を叩かうとしてゐるのではないかといふやうな想像に驅られて、わざ〳〵雨戸を一枚繰つて見たことなどもある。何故女には男の心が解らないのか。何故、これほど思つて居る心が女に通じないのか。

何故に女はかれを捨てゝ去つたかといふことが、今でもかれには解し得られぬ疑問であつた。樂しかつた半年の海岸生活、そこに暗い影が潜んでゐるなどとは夢にも思はれない。東京に歸つて來てからの生活にも、女の家出を促すやうな際立つた事件やこんがらかつた葛藤があつたとは思はれない。さればと言つて女の父母、親戚の側からの誘惑に崩れて行くやうな二人の間柄ではなかつた筈だ。かれは殘念ながらも自己の貧と女の虚榮心とにその原因を歸するより他に仕方がなかつた。

『僕等の熱烈なる戀が虚榮心の犧牲になつたかと思ふと實に情ない!』かれは幾度となくかう友達に向つて言つた。

「いつそ死んで吳れゝば好かつた』かれは自分で敷いた床の上に身を橫へながら獨語のやうに言つた。て、仰向に寐たまゝ、暫くは天井を見詰めて居た。

四

「死んで吳れゝば好かつた」

死んで吳れたのなら、二人の間に取交された感情、言葉、秘密、それが皆な藝術品のやうになつて、其處から樂しい悲しい記憶の泉を無限に汲み出すことが出來るのであるが、假令いかに離れた、いかに遠い沒交涉な土地に二人が住んでゐても、一度其の體を合せた男と女との何方かが依然として生存して居る以上は、一方の相手は不安な不愉快な念に驅られない譯には行かなかつた。かの女はかれの吸つて居る空氣を矢張同じく吸つてゐて、かれに與へた媚と肉體とを矢張同じく他の男に與へることが出來るではないか。

「死んで吳れた方が何んなに好いか知れやしない。死んで吳れゝば、僕はいかやうにも女を美化して、そのイリユウジヨンの中に樂しく住んでゐることが出來るけれど、別れたのでは、さういふ譯には行かない。樂しかつた事實の思ひ出てさへ、暗い不愉快な醜い影を帶びて來るのだからね」

かれはかう親しい友達の一人に言つた。

二人が同じ空氣を吸ひ、同じ太陽を見、同じ月を仰ぐに堪へないといふやうな苦しい時期が續いた。女を得なければ死！さう思ひ詰めた時期はかなり長かつた。其時には、女の胸を透つて來る空氣が、そ

のまゝ男の心に無線電信のやうに傳つて來るやうにすら思はれた。

女が遠い東北の親類の方に遣られたといふ噂を聞いたのは、別れてから一月ほど經つた頃であつた。女とかれとの戀の間に立つたある人からは、それを知らせた長い手紙が來た。それを見てから、かれは始めて京都に行く氣になつたのであつた。

かれは女から來た手紙を束にして持つて居た。それは十通や二十通ではなかつた。戀に落ちた二年前から段々捨て難い離れ難い間柄に至る間の手紙が中ても殊に澤山であつた。最後の一通は、卷紙に書いてあつて、封筒には切手が六錢張つてあつた。

其の最後の手紙を見たといふ友達の一人は、それに違ひないと言つたやうな調子で、その別離の原因を男が肉慾を滿足させなかつたためだと言つて居た。それほど其手紙は情慾の匂ひに富んで居た。

其頃では、もう其手紙を明けて見やうと思ふやうな氣分がかれには起らなかつた。女を懷しいものに思つた心は、いつとなく憎惡の念に變つて居た。かれは手紙から來る刺戟を恐れて、それを深く書棚の底にかくして了つた。

憎む心と愛する心、それがかういふ風に複雜してかれの心に迫つて來やうとは思はなかつた。郊外に來てから間もなく、かれは友人達と其女の話をすることを避けた。

「もう、そのことは言はないて吳れ給へ。」

其の話が出ると、かれはかう言つて顏を蹙めた。

かれは自から問うた。

『では、もし、かの女が今日にも此處に逃つて來て、重々その不心得を詫びるやうなことがあつたら何うだ。それでもお前は許さないか』

『許さない』

かう答へたが、かれはすぐ考へ續けた。『そんな考を起すから駄目だ。汝はもう疾うに女から忘れられてゐるのを知らないのか。詫びに來るどころか、汝を恐れて身をかくしてゐるのぢやないか。馬鹿な奴だ。』かう思つたかれは、その言葉の烈しいのに似合はず熱い涙の頰を傳つて流れ落ちるのを覺えた。憎まなければならなくなつた此身が悲しかつた。さうした處に遁れて行かなければ何うすることも出來ない自分が情けないやうにも思はれた。

『奧さんの寫眞何うなすつて？』

ある日、大工の上さんは柱の寫眞挾に知らない風景の寫眞が挾んであるのを見てかう尋ねた。

『もう藏つちやつたよ』

『何うして？』

『目障りていけないから』

『あんなことを言つてる！』

「でも本當に思ひ出していかんからね。それに、出て行つた女などもう何うでも好いからねえ」
「それはさうでせうね。」
かう言つて上さんは笑つた。
何うかすると、かれはこの上さんと二人切りで一日を過すことなどがあつた。京都から歸つて來た當座は、それでも友達がたづねて來たが、段々それも少くなつて行つた。夕暮など何うかすると、飯を炊きながら、上さんは自分が廓に居た時のことなどを話して聞かせた。今の亭主に惚れ合つて、無理な思やら、不義理な眞似やらして、漸く思ひが屆いたと思へば、男といふものは薄情で、今ではもう女を何處かに拵へてゐるなどと言つた。
「でも、仲が好ささうぢやないか」
「こつちが惚れてゐるから、喧嘩もしないがね。それや腹が立つことはありますよ」
「餘り好い心持はすまいね、女を拵へてゐることが解つちや——」
上さんは、薪をくべながら、『こつちを構はないやうにすれば、それは默つて承知してゐやしないけれど、こつちを好くして置けば、女を拵へるのは男の器量だからねえ』
「さういふもんかねえ」
こんな話をしながら、かれは夕暮から降出した雨を見詰めてゐた。竈の烟は青く薄暮の空に靡いて行つた。

何うかすると、下の家で三味線の音がすることがある。何か唸つてゐるやうな氣勢もする。あの長火鉢の上にかけてある三味線だな！といつもかれは思ふが、ついぞ今まで行つて見たこともなかつた。

それは薄月のある靜かな夜であつた。ふと、かれは、覗いて、嚇かしてやらうと思つて、こつそり窓の下に歩み寄つた。窓の破れから覗いて見ると、磯さんは節つけのしてある本を膝の上に置いて、顔を膨らませて、頻りに義太夫を唸つてゐる。其傍の長火鉢の前には、上さんが三味線を彈きながら、熱心にその拍子を取つてやつて居る。

三分の釣洋燈が薄暗く一間を照してゐた。

かれは聲を懸けて嚇かしてやらうと思つた最初の計畫を忘れて、其儘じつと其處に立盡して了つた。一間（ひとま）しかないこんなあはれな小屋の中にも、かうした樂しい團欒があるかと思ふと、かれは堪らない一種の哀愁を覺えずには居られなかつた。窓の下に印せられた黑いかれの影は、暫くの間其處を離れやうともしなかつた。

「昨夜、窓の處に行つて　立つて聞いてゐたけれど、餘り睦しさうだつたから、邪魔だと思つて歸つて來て了つた」

翌朝、竈の燒落を十納に入れて枕元の火鉢に持つて來た上さんをつかまへてかれは言つた。

「虚言（うそ）だらう？」

「うそなことがあるもんか。壺坂をやつてゐたぢやないか。磯さんの顏を見てゐると、それは可笑かつたぜ」
「でも、上手なんだよ、あれて」
「お上さんが仕込んだんだからな」
「いゝえ、私なぞより本物だ。あれて」
「それに惚れ込んだッて言ふ譯だね」
上さんは笑つて、
「道理て、何だか人の足音がしたやうな氣がしたよ……つむじ曲りね。貴郎は。そんな氣兼をしないて、入つて來れば好いのに」
「邪魔をするより、むつましい處を傍から見てゐる方が好かつたからね」
「あんなことを言つてるよ」
かう言つて、十納を持つて、上さんは勝手へ下りて行つた。
昨夜、それから暫く家の周圍を歩いて居たが、薄月のぼつとした景色にそゝのかされて、つい町の方まで遠く歩いて行つた。かれは卷烟草を吸ひながら、そんなことを繰返して頭に浮べて居た。

野は段々深い秋の色を帶びて來た。

家の前の斜坂の處々に植ゑられてある楓や柞も一雨毎に紅くなつて行つた。何うかすると、淒しい風が廣い野を通つて、其餘勢を高い樹木の梢に見せて居た。

時には、友達が遊びに來て『好いねえ、實に好いね、郊外の秋をこんなに好く味ひ得るところは少い』などと言つて、緣側にじつと立盡してゐる人達もあつた。暖かい日當に座蒲團や籐椅子を持出して、柱に凭りかゝつたり何かして、二三人で頻りに人生問題を論じ合つたりすることもあつた。机に向つて仕事をしてゐるかれは、硝子障子を隔てゝ、日本畫でなくては見られないやうな庭の紅葉を眺め暮した。

雨の降る日には向ふの牧牛場で鳴く牛の聲が殊更に際立つて高く聞えた。

かれは此頃よく町の方に散歩に出かけた。矢張竹の根のステッキを抱えて居た。

町に出やうとする處に水車場があつた。車の廻る響につれて、水の落ちる音が淒じく聞えた。餘流の落ちて碎けるさまは、月の夜などには殊に見事にかゞやきわたつて見えた。門の前にはいつも荷車や荷馬車が置いてあつて、時には白い粉の一杯に體についた男が、叺や俵を運んでゐるのを見かけることなどもあつた。かれのじつと立盡した姿はよく其處に見えた。

町は郊外によく見るやうな種類の町であつた。古びた旅籠屋、くさい臭氣の鼻を撲つ鹽物屋、幾日も同じ腿の肉を下げてゐる牛肉店、さうした家が兩側に古く傾いた軒を並べて居た。汚いチャンチャンを着た子供が遊んで居たり、荷馬車がガタガタ通つて行つたりした。近所にある工場の汽笛がこの郊外の町にをりをり正確な時刻を知らせた。

町はいくらか爪先上りになつて居た。中ほどに小さい川があつて、それには古ぼけた板橋がかゝつてゐた。橋の下流には、欅や楓や楢などの大きな樹が蔽ひかぶさるやうに茂つて、いつも暗い影を水の上に落してゐた。

其處に、川に臨んで、一軒西洋料理店があつた。

それをかれはその町に初めて散歩に來た時から知つてゐた。Restaurant を白壁に大きく書いてある字の四邊に釣合ないのが、一番先にかれの注意を惹いた。それから硝子戸のはまつた二階が眼についた。天氣の好い日には、明放つた窓から、白い布のかかつた卓に、コップや、水の入つた罎や、赤い白い花などの置いてあるのが見えた。何うかうすると、川に臨んで白い服のボーイや赤い襷をかけた若い娘などが皿や何かを洗つてゐるのを見たこともあつた。

其日は曇つてゐた。今にも雨が降つて來さうであつた。かれは家の中にじつとして居るのに堪へられないほどむしやくしやしてゐた。で、かれは出かけて來た。

いつものやうに水車場の前で立留つて、それから町に入つて、雑誌屋の前を行き過ぎて、また戻つて、昨日發刊された雑誌を鳥渡手に取つて見たが、急に、『おいこれ呉れ！』と叫んで、懐の財布から二十錢銀貨を出した。で、歩きながら五六頁其雑誌を飜して見たが、すぐ袂にねぢ込んで了つて、また前のやうな靜かな歩調で歩き出した。

鳥屋の前では、インコだの鸚鵡だの金糸鳥だのの歌つたり飛んだりするのを、長い間じつと見てゐた。

橋の上では、われを忘れたやうにして暫く立盡してゐた。

後には欄干に凭りかゝつて下を覗くやうにしてゐた。

それも道理であつた。其處には、かれを惹きつけるある小さな光景が展けられてあつた。川につき出した洗場には、赤い襷をかけた桃割に結つた十七八の娘が、幾枚も重ねた白い皿を、腕を伸して熱心に洗つてゐた。上には眞紅に染つた紅葉が美しく水を彩つてゐた。

かれは紅葉を一枚摘み取つて、それを欄干の上から流して遣つた。

紅葉は娘の白い腕の傍を流れて行つた。娘は知らずにせつせと皿を洗つてゐた。かれは一枚、二枚、三枚まで同じやうにして流してやつた。

それが――同じやうな眞紅な紅葉が三枚まで流れて來たといふことが、娘の小さい心を誘つたらしかつた。娘はやがて顏を擧げて上を見た。莞爾笑つたかれの顏を見て、娘はさつと顏を赤くした。

こんなことに忘れ難い興味を感ずるほど、かれの心はセンチメンタルになつてゐた。かれは娘が皿を洗つて、恥かしさうに家の裏口に入つて行くまでじつと其處に立つて見てゐた。

坂を登つたところで、町は盡きてゐた。其處からは、半ば林、半は高臺になつてゐた。そりそり秋の午後の空に見るやうな霧が何處からともなく俄かに押寄せて來た。それは深い深い霧であつた。かれはその霧の中に立つて、四邊を見て居た。

何とも名狀することの出來ないやうなさびしさがかれの心を強い力で襲つて來た。其處に立つて居る

かれ！　鼠色の霧の天地の中にぽつねんと立つてゐるかれ！　かれは全く一人である。かれを思つて呉れるものはこの廣い世の中に一人も居ないのである。あの不貞な女は、今時分はもう他の若い男の腕に抱かれてゐるかも知れないのである！　廣い砂漠の中に唯一人この自分は居るのである――かれは雨が降つて來るのも知らずにかう思詰めて其處に立盡してゐた。

其後かれはその娘と知るやうになつた。

娘は名をおてると呼ばれた。年は十七である。その西洋料理店が遠い親類に當つてゐて、手傳ひに昨年から來てゐるといふ話である。

無論、かれが出懸けて行つて逢つたり聞いたりしたのだ。

それは外から見たほど綺麗な二階ではなかつた。テーブルクロースも餘り新しいとは言へなかつた。

其家には、娘の他に男のボーイが一人ゐるばかりてあつた。好い鹽梅に、其日は娘が献立の板をかれの前に持つて來た。

娘は無論先の日の橋の上のいたづらを知つてゐた。

恥しさうにしてゐた。

「お酒は？」

注文を聞いた後に、娘は小聲て訊ねた。

「キリンを一本」

「大の方？」

「え」

かれは笑つて見せた。

橋の上から見たほど綺麗な娘でもなかつた。しかし肌の理の細かいのと眼の光のあるのと丸顔で愛嬌のあるのとが何處となくあたりに際立つて見えた。恥しさうにしてはゐるが、かういふ處に居る娘だけに、客に話をするのを臆切にしてはゐなかつた。

「私、きまりがわるかつたわ」

此の間の橋の上の話をかれがすると、娘はかう言つて笑つた。

「だッて、同じやうな眞赤な葉が流れて來るんですもの。私、あの時、不思議に思つたのよ。ふッと見上げると、貴郎がゐるんですもの、變な氣がしましたわ」存外打解けた口の利き方をした。

かれは蝸のフライ一皿とロールキャベージ一皿とそれにパンを燒いて貰つて食つた。其日は晴れた日であつた。一本のビールに醉つたかれの顏は、夕日に明るくかゞやいて見えた。

娘は調子の好い客の言葉にすぐ引張られたといふやうに、心安くいろいろなことを話してきかせた。客の座を占めてゐる傍の椅子に凭れるやうにして、娘は客と長く相對して居た。その名から年齢まで話した。

それからかれはよく其處に出懸けて行つた。

『今夜は支度をしなくつても好う御座んすよ』

かうかれは度々大工の上さんに言つた。

上さんも後にはそれを不思議にした。『何處に行らつしやるのよ』などと訊いた。

それと知つた時、『まだ子供ぢやありませんか、あんなもの。加藤さんも餘程何うかしてるのね』

上さんがかう言ふと、

『すぐ、君たちはさういふ風に勘ぐるからいけない』言ひかけて笑つて、『何もさういふ積で行くんぢやないよ』

『若いのが好いんだね、矢張』

上さんはその辨解を聞かうともしなかつた。

『あれは、あれてもあんたの家の看板なんてすッて。農科の學生がよくあそこに出かけて行くのも、矢張あの娘が居るからだといふことてすよ』ある時、上さんは、何處からかそんなことを聞いて來てかれに話した。

時にはかれは友達を其處に伴れて行くことなどもあつた。その時は、かれはきまつてその紅葉を流した話をしながら歩いた。『世の中にはロマンチックなことがあるものだね、君。これて僕がラブにでも落

ちれば、それこそ申分がないんだけれど」から言つて、『それからまだ君に見て貰ふことがあるんだ。それは向ふに行つてからでなくつては解らん」

それは他でもなかつた。其處に伴れて行かれたかれの友達は、眼と顔の輪廓との著しくかれの前の戀人に似た若い娘の顔を見た。

「世の中にはロオマンスが多いね」

かれはフォクを動かしながら、かう友達に向つて言つた。

五

ある日、其の幽棲（かくれが）に不意に訪ねて來た女があつた。

大工の上さんは、束髪に結つた縮緬の羽織を着た二十三四の華奢な女が、門から此方に入つて來るのを見た。あの寫眞の女が來たのか知らんと始めは思つたが、何うもそれとは異（ちが）つて居るやうに上さんには思はれた。寫眞挾の女はもう少し綺麗な人だッた。

「秀夫さん！」

縁側に出て本を見て居たかれは、さう呼ばれて驚いたやうにして其方を見た。

かれはイキナリ縁側にある下駄を突かけて、急いで女の遣つて來る路の方へと出て行つた。窓の處から顔を出して居た上さんは、其處で二人が默つて立留つて握手してゐるのを見た。

男の顔には赤く血が上つてゐた。

女も激して居た。

「まあよく來て呉れましたね」

男がかう言ふと、

「でも、まア、漸く知れて好かつたこと。それに、もしか留守だッたら何うしやうと思つて、それはかり心配して來ましたのよ」男の顔を見て、「貴郎、痩せましたね」

「苦勞しましたからね」

「さうね」

女は緣側に腰をかけて、「私はお光さんが家出をしたといふ噂を聞いた時から、何んなに心配して居たか知れないんですよ。それにしても何うして、まア、お光さんがそんなことをしたでせう。私には長い間本當に出來ませんでしたよ」もう一度男の顔を見て、「でも御目にかゝれて嬉しかつた。今日お目にかゝれないと、いつまた逢はれるか解らないんですからねえ」

「何時です？　亞米利加にお立になるのは？」

「この十七日の船で發つつもりですがね。秀夫さん、それは忙しいのよ。」

「しかしまア、お上んなさい。」

かう言つて女を座敷に請して、

『男やもめて、何もお構ひは出來ませんけれど、お茶位は上げられますから』

かれは緣側に出て、聲をあげて大工の上さんを呼んだ。

上さんがのこ〳〵やつて來て、七輪に火を起して吳れる間、二人はポツポツと途切れ勝ちな會話をつゞけた。物語よりも互に昔のことが思ひ出さるゝといふ風に見えた。

お貞さん！　增田お貞さん！　何んなにやさしい溫順な女だつたらう。お光とかれと烈しい戀に陷ちた最初から、彼女は二人の間を詳しく知つて居た。かの女は二人の戀の初めから終までを知つてゐた。そして二人が結婚すると間もなく、良緣を求めて、宣敎師に嫁ぐことになつた。溫順なかの女は、死ぬやうな辛い悲しい運命に服從して其人の許にといふ其頃の噂であつた。

『何うして、一體、そんなことになつたんてせうかね？』

『お互に解らなかつたんてすね』

『でもねえ、あんな熱烈な戀が一年も經たない中にそんなことになつて了ふものてせうか。私には何うしてもお光さんの心が解らない！』

『あなたなどとは丸て違ふ女なんてすから。虛榮心の多い、エゴイスチックな　』

『たよりも何も無いんてすか？』

『えゝえゝ』

『世の中にそんなことがあり得ることてせうか。あんなに熱烈な、まことの戀が、そんな風にしてさめ

て行くものでせうか。それが本當なら、私など、何だか世の中が恐ろしいやうな氣がしますわ』女はかうして獨り住んで居るかれを痛むやうな眼色をして見た。

お光に別れてからのかれの生活を女はかなりよく知つて居た。お光とかれと其女と、その三つの心かある時は巴のやうになつて活きて動いたこともあつた。ある温泉場の旅館屋の一間では、三人は床を並べて寢たこともある。其時、終夜眠られずに長大息をついてゐたのは、二人の戀人ではなくてこの女であつた。若い二人の戀を監督するやうな地位に身を置きながら、其の男に人知らず戀してゐたかの女の心は辭へやうもないやうなものであつた。

大工の上さんの眼にも、二人の間の關係といふやうなものが映つた。女にも男にも昂奮したやうな調子か何處かにある。中でも、女にはそれが著しかつた。熱い赤い頰に幾度となく手を當てたりなどしてゐた。

『然し、もう大丈夫です。夢に見ることも少くなりました』

かれは笑ひながらこんなことを言つた。

『もとのやうにはならないものでせうか。お光さんだつて、可哀相ぢやありませんか。悔ひ改める日を待つて上げて下さい。……女は脆弱いものです』女は犧牲の精神に富んだ昔の感情を男に思はせるやうな口の利き方をした。

『しかしこれまでにするには、隨分大きな苦痛と戰つたんです。男の苦みは女には解らないんですからね』

「それはさうでせうね。……私にはよく解りますわ」
女は考深さ目付をした。
「ぢや、お別れね」
女の眼からは涙が滴れた。「丈夫でゐらつしやい。三年經つと、私も歸つて來ますから」
「三年――その頃は僕は何んな生活をしてゐるでせうね。丸で違つた生活に入つてゐるかも知れませんよ」
二人は堅く手を握りかはした。
「其處まで送つて行きませうか」
かう言つたかれは、不圖あることを思ひ出して、「よく貴孃を二人で送つて上げたものでしたね。まだその時から一年と少し經つてゐやしない。」
「本當にね」
秀夫の送つて來やうとするのを見て、「もう本當に澤山ですよ。それでもかうしてお目にかゝれて、私滿足でした。勇んで、發つて行きますわ」
二人は門の處まで行つた。
「ぢや、左樣なら、」

「左樣なら、お機嫌よく發つていらつしやい。私はお見送りは致しませんから」

「えゝえゝ……ぢや、本當に左樣なら」十間ほど行つた處で、女は振返つて見た。男はまだ其處に立つてゐた。

秋の空は高く鮮かに晴れてゐた。

女の不意の訪問は、落附いたかれの頭を再び根抵から動かして行つたやうなものであつた。二時間！互に昂奮して、別に細かい話もしなかつた。しかし二時間の前と後とでは、心の狀態が夥しく違つてゐた。

かれは女に別れて、斜坂の紅葉の間を縫ふやうにして歩いて、其儘家の緣側のところに來た。其處には、夕日に照された籐椅子がかれを待つて居た。

かれはそれに身を投じて、頰杖をして、簇つて來るいろ／＼な思を一ところに集中させやうとした。傷痍は再び開いた。思ひ出はそれからそれへと續いた。戀に夢中になつた自分が此處にも其處にも居た。郊外の林の中の樂しい私語や、廣い野に下りて行く阪の上の路や、波打際に沿つた海邊の夜の逍遙や、さうした歡樂の追憶が、卷物にした繪のやうになつて眼の前を通つて行つた。

學生生活、都會生活、無邪氣な熱心な一途に學問に熱中した心の狀態から、忽ち引摺られて行つたことが殊に歷然と眼の前に見えた。女からの手紙、初めての物語、夜の闇路、邂逅、郊外への散歩、林の

奥の菫の白い花。——それが何んなに強くかれを引張つて行つたか。かれはその戀に全き力を擧げた人であつた。體も魂も全く其の黒い眼にせ魅られて了つた人であつた。その人が二年の年月を經て、魂のぬけたやうな人になつて、かうして籐椅子の上に身を橫へて居る！

今日訪ねて來た女の心をかれに前から知つて居た。かの女は自己の戀を犧牲にした女、犧牲的に二人の戀の爲めに盡力しやうとした女である。それが長い間二人の戀を彩つて居た。しかしそれももう殘りなく過ぎ去つて了つた。完全な過去になつて行つた。

一人は田舍に、一人はやがて海外に、一人はかうして都會の郊外に。

『一生別れるやうなことはないやうにしませうね』かう言つて、三人して手を握つたのは、溪流の見える山の温泉宿の欄干の處であつた。『貴郎達の戀さへ成就すれば、それで私は滿足よ』その女はいつもかう言つては涙を流した。

[illegible]たかれの[illegible]、[illegible]に今日[illegible]かれは種々の悔恨やら追憶やらの胸に簇つて來るのに堪へかねた人のやうに、長い間額に掌を當てゝ居た。

其夜、かれはさびしい心をその町の橋の袂のレストウランに運んで行つた。

其處でもかれは思ひかけない新しい光景に邂逅した。

晝間はしんとして滅多に客もい無やうな二階の一間に、其夜は珍らしく客が澤山居て、酒を飲んだり

談論をしたりして居た。農科の學生が多かつた。

酒に醉つた赤い顏、髮を長くした蒼白い顏、いが栗に短かく刈つた頭、大學の正帽を被つた丈の高い男などが、卷烟草の烟の一杯に籠つた一間(ひとま)の一隅(かたすみ)に集つて、薄暗いランプの光に照されてわいわい騷いて居た。

「Brabo！」

から大きな聲を立てる男もあつた。

「My littln queen ―ビールを持つて來て呉れ」

群の中の一人がかう言ふと、例の娘はビールの罎を二三本下から運んで來て、コロップを拔いて、彼方此方から高くかゝげる洋杯(コップ)にビールをついて廻つてゐた。

晝間と違つて、娘は綺麗に化粧をして、白いエプロンをかけてゐた。

あとからまた客が一組入つて來て、空いた卓に相對して座つた。

「今日は忙しいね」

皿を運んで來る時、かうかれは娘に向つて言つた。

娘は笑つて見せた。

「いつもかうかね、夜は？」

「え、夜は忙しう御座んす」

から言つて、すぐ向ふの方に行つて了つた。
人々は娘を片時も多く傍に引きつけて置かうとするやうに見えた。
かれは暗いランプの下で、パンを手で割いたり蝦のフライをナイフで細かく切つたりしてゐた。
學生の群では、猶頻りに何か騒がしく議論らしいことを言つて居たが、突然『何だ生意氣な！』といふ高い觸走つた聲がしたと思ふと、ビールの罎やコップや皿の落ちる音が凄しく四邊に響き渡つた。見ると大きな男は、立上つて他の人々の頭をポカポカなぐつてゐた。周圍の人達は頻りにそれを抑へやうとしてゐた。
『生意氣と言ふな！おい、離せ』
その途端に、別なテーブルの上の皿が五六枚また凄しく落ちる音がした。
下から家の主人やボーイが飛んでやつて來た。
二人はやがて引離された。
打たれた方の男は、蒼い顔をして、卓を前にして睨んで立つてゐた。
娘はかれの卓の傍に來て居た。
『本當に、杉田さんは、亂暴をするんで仕方がないんですよ』
『杉田ッて言ふのは、あの大きな男かえ。矢張大學生かえ』
『え』

「打たれた方も矢張大學生かえ」

こんな話をしてゐる中に、多勢の人達は皆な出て行つて跡は靜かになつた。

「え」

「私、本當に吃驚してよ。仲よく何か話してゐたのよ。と、急に、生意氣な奴！　とか何とか言つて杉田さんが打ちにかゝつたんでせう。私、本當に吃驚した！』娘は笑ひながらこんなことを言つた。

暗い夜道を歸つて來たかれは、一層さびしい心持に閉されてゐた。

六

さびしい日が續いた。

野は段々寒くなつて行つた。木枯が凄しく廣い野を吹渡るやうな夜もあつた。落葉は路傍にガサコソと音を立てた。

收穫はいつの間にかもう大抵すんで了つた。大根や菜が徒らに靑々と繁つて居た。かれが出かけて行つて木の葉の私語に聞惚れた林も、今は、もう疎らになつて、下に生えた笹の葉ばかり靜かに朝風夕風に戰いて居た。

丘から丘へ越えて行く低い處には、綺麗に澄んだ水が流れてゐた。そこにはをり〳〵野を過ぎて行く雲の影や鳥の影などが映つた。赤い蹴出しを出して町の方に行く田舍娘の姿も映つた。子供の通つて行

く影も映つた。

富士山がいつもよく見えた。もう半以上雪て白くなつて居た。かれは自分の經て來た苦鬪と艱難とをこの無心な『自然』と對照させて見るといふやうな心持を抱いて、よくその野原を散歩した。

大きな學校の塀に添つた路は、一方楢の林になつて居た。笹の葉がいつもカサカサと風に鳴つて居た。其處を少し行くと黄いペンキ塗の學校の門があつて、中に、ひろい廣場が一面に見渡された。奥深く、建物が一棟二棟見えてゐる。

何うかすると、四角な制帽を冠つた若々しい血を赤い頬に漲らした學生が一人二人其處から出て來るのに邂逅すことなどもあつた。何も知らない人達！　戀の喜悦も憂ひもこれから知らうといふ人達！　かれは過ぎ去つた自分の青年時代をかういふ人達に引くらべて、振返つて考へて見ない譯に行かなかつた。

橋の袂のレストウランに出かけて行く若い人達の生活もかれの想像に上ることが多かつた。丘の陰になつたやうなところには、新たに建築した家などもあつた。大工が鉋(かんな)や釿(てうな)の音を四邊に響かせてゐるのもあつた。

新しい硝子戸、緣側に干したメリンスの派手な蒲團、八ッ手の白い花、風を防ぐために植えた樫の木立――さうしたものがかれの眼の前に映つて見えた。

ある夕暮に、かれは丘と丘との間に横つた低い谷を歩いて居た。疎な林の下には、穂の老けた薄や、枯れてガサガサする萱などが一面に路を蔽つてゐた。もうあたりは薄暗くなりかけてゐた。夕焼が静かに野を照してゐた。

ふと、向ふから、大きな丸髷に結つた若い細君が、片手に臺ランプ、片手に風呂敷包を持つて、萱や笹の中を分けて此方に歩いて來た。

薄暗い夕暮の中に浮出すやうな色白の丸髷姿は、ロマンチックな感をかれの胸に起させずには置かなかつた。それに、片手に持つた臺ランプ！　この静かな秋の光の滿ちた郊外に今日何處からか移轉して來た幸福な人達であるといふことは、その手に持つた臺ランプですぐ分つた。かれの胸には、俄かに海岸で人目離れて樂しく暮した半年の生活が新しい力を持つて蘇つて來た。人目離れた二人の世界！　何を爲うが、何んなことを話さうが、誰も見てゐるものも聞いてゐるものもなかつた。二人はよく枯草の中に身を埋めて、前に展けられた蒼い海を見た……。

かう思ふと、かれは急に其の幸福な男が見たくなつた。新しい細君と秋の光の滿ちた野にかくれて日を送る男！　美しい妬しい男！　かれは十間ほど間を置いて、その細君の後をつけて歩き出した。丸髷姿は薄暮の空氣の中に微かに見えて動いて行つた。

それは餘り遠い處ではなかつた。此間の散歩にもかれが眼をつけた三間位の家屋——路に臨んだ、前

に高窓のある、小さなひらきの門のついた世離れた家屋の中に、その若い細君は入つて行つた。

「かなりあるわね」

かう言ふ女の聲が聞えて居た。

庭にある背の高いコスモスの花の色はもう分らなかつた。それほどあたりは暗くなつてゐた。

「早く灯をつけなけりやいかんね」かういふ男の聲が續いて聞えた。男は何でも緣側に近い一間に居るらしかつた。太い錆びた聲だつた。やがてランプの灯が點いた。

その小さい灯はかれが丘を越えて了ふまで野に見えて居た。

カーキー色の軍服を着けた兵卒の列は、巢から急に飛上つた鳥のやうに、銃劒を先に揃立て突進した。かと思ふと、まだ三間も行かない中に、バタバタと折敷をして、構筒をして發砲した。

銃の音が一しきり靜かな空に響いて聞えた。

かれは林の角や、丘の下などで、よくさういふ光景に邂逅した。長い間、じつとして一處に折敷をしてかゞんで居ることもあれば、躍進に躍進を重ねて、見て居る中に遠くなつて了ふやうなこともあつた。時にはまた昨年あたり士官學校から出たやうな若い青年士官が、小隊を集めて、さも實際の敵が前に居るかのやうに眞面目に命令を下して居るやうなこともあつた。

田舍道の林の角で、晴れやかな秋の日影に浴しながら、其兵卒達は飯盒の午飯を食つてゐた。

さうした兵卒の野外演習は、かれに取つては、不思議なめづらしい奇妙なものであつた。かれは長い間立つて見てゐることが多かつた。

戀の爲めに苦悶に苦悶を重ねて、時には死といふ境まで落ちて行つたことのある其身の心の閲歷に比べて、かれはかうした暢氣な世界のあるといふことを考へずには居られなかつた。自分の心に比べて何たる無邪氣、何たる無意味、何たる平和、そしてまた何たる平凡？

いくら考へても、悶えても、何うすることも出來ないやうな苦痛の連續と、子供の遊戲のやうな眞似をして、人を殺す戰爭の準備をしてゐる演習と、いかにその距離の大きかといふことを考へながら、かれはじつと立盡して見てゐた。

ある日の午後には、黃い肩章をつけた砲兵が大きな砲車を幾箇となく馬て引いて來て、廣々とした平らな丘陵の上にそれを並べた。『――砲車拍て――』といふ命令と共に士官は手を揚げた。凄しい響は白い烟と共に野に轟き渡つた。

『さうですか、もう外國に御出てになつたんですか』

かれはかう言ふより他に仕方がなかつた。

一人の水彩畫家があつた。髯の生えた、體格のガッシリした、丈の高い人だッた。それをかれは野の散步のところどころて見た。

林の夕日を後にしたところ、薄の穂の白く出て居る小川の岸、古い荒廢した百姓家の前、たらだらと下りやうとする阪の上――其處此處にかれは其の人を見た。三脚を据ゑて、筆を手にして、熱心にわき目を觸らずに描いて居た。通りすがりの百姓が後に立たうが、近所の子供が其周圍に集つて來やうが、其畫家はそんなことには頓着しやうともしなかつた。かれも時々は立留つて見た一人であつた。かれは繪畫を見る眼識をさう深くは持つてゐないが、それでもこの畫家の尋常一様の畫家でないといふことはやかて知れた。

一つの畫を完成させる爲めに、其畫家は三日も四日も同じ處に來て居た。

「此處等にそれでも繪になるやうな處があるんですか」

ある日、かれはかう言ひ懸けた。

「何處を描いても、皆な繪になります。東京では、此の郊外が一番好いですな。」

「それは、さうでせう。武藏野の昔の面影は、一番此方面に殘つてゐますからな」

二人はぢき懇意になつた。

畫家はモネーやマネーやシスレーの話などをした。

「本當に寫生から入つて行つたやうな畫家は日本にはまだ無いんですからな、机の上で風景畫を書いてゐるんですからな」

だから碌なものは出來ないといふやうな調子で其畫家は話した。

かれはやがて其畫家を自分の幽棲につれて來るまでに懇意になつた。畫家はつい昨年歸つて來た西洋の話などをしてきかせた。

巴里の畫堂、其處には何んなに澤山な名畫が集められてあるだらう。古いのもあれば新しいのもある。クラシシズム、インプレツレシヨニズム、サンボリスム、あらゆる繪畫の新しい研究は其處で芽を出して花を咲かせて實を結ばせる。巴里に行つて居れば、それはどんな研究でも出來る。『實際、マネーの繪など見てゐると、堪らなくなりますからな、何うしてあんな繪がかけるかと思はれる位ですかな。……え、寫生です、全く寫生から發足して來た畫です。描いてある舞臺は其處等にいくらでもある平凡な景色なんですからな』

こんな風な調子で話した。

熱心に藝術の爲めに盡すといふ其畫家の性質と態度とは、かれに尠なからざるある影響と感化とを齎らして來るに十分であつた。結婚したばかりの細君を二年も三年も家に置いて、其畫家は艱難の多い旅をして來た。其物語も心に響いて聞えた。

『自分のやうに戀に全力を浪費して、書を一冊碌に讀まずに二年の月日を經過し去つたものもある！』

かれはかう思ひながら野の道を歩いた。

『僕には戀が事業だ。戀がなくつては、僕は一日も生きてゐられない』

ある日、机に向つてゐたかれはかう日記に書きつけた。

その水彩畫家は、畫をかきに來た大手に、外國から歸つて來てから、此の郊外の野原で描いた水彩畫を七八枚持て來て見せた。

床の間、机の上、書棚の上などにやがて並べられた鮮かな色彩は、かれの眼や心を新たにせずには置かなかつた。橋の上、落葉道、古池、——皆なかれが知つてゐる景色である。かれは深く眺め入つた。

「何うでせう、貴郎方が御覽になつては？」

水彩畫家は得意さうにかれの顏を見て言つた。

「面白いですな。僕等のやうな素人には分りませんけれど、色彩がいかにもフレッシだ」かう言つてまた見入つて、「僕が毎日テクテクつまらなさうな顏をして歩いてゐる間に、君はかうした藝術品を作つたんですからな」

「イヤ、つまらんですよ」

其日は朝の中に霧がかゝつて、それが日影に映つて、金色に輝き渡つて見えた。郊外はもう寒かつた。落葉の時節はいつの間にか過ぎた。

硝子障子の外には、山茶花の紅と白とが薄い日影を帶びて見えてゐた。畫家は靜かな落附いた言葉で話した。藝術(アート)より外に考へることが無いやうな口の利き方をした。

樂「平凡な言てすけれど、矢張自然を師匠にするより他に仕方がありませんな」

こんなことをも言つた。

畫家とかれとは、時の間に十年も交際した友達のやうな間柄になつた。打開けてかくすところのないかれの態度が、尠からず畫家を動かした。かれは自己の戀と自己の苦悶とをやがて畫家に話した。かれに取つても、舊い昔の友達よりも新しい友達の方がなつかしかつた。かれの前生、かれの戀、苦悶、かれの性格を知つてる友達が餘りにかれの周圍に多かつた。其の友達はいつも「また加藤の苦悶談が始まつた」といふやうな顏をして聞いた。

かれは自己の經て來たロマンチックな境遇を、一度新しい心で聞いて呉れるやうな友達を得たいと思つてゐた。それをかれはこの畫家に見出した。

畫家とかれと伴れ立つて歩く姿は、やがて其處にも此處にも見えた。畫家が三脚を据ゑて寫生をしてゐる傍で、かれは卷烟草をふかしてじつとそれに見入つて居た。二人は遠い八幡の社あたりまでも行つた。

畫家は荷車や肥料車や馬車の通る塵埃の白い街道を越して、汽車の響の絶えず聞えるといふやうな處に住んで居た。二階の一間には、白いカアテンが硝子窓の日影を彩つて、鼠色の壁の處々には近作の水彩畫が二つ三つかゝつて居た。

外國で買つて來たエッチングや、銅版や、寫眞帖や、繪葉書帖や——さうしたものの並んだ座敷に、

カアーテンを透してをりをり夕日が射して來た。
「イタリアでは、かういふものを賣つてゐるんです。一つ上げませうか」
白膏細工のダンテの肖像を畫家はかれの前に置いた。
畫家の細君は痩せた靜かな人だッた。戀愛の時代を人知れず通過して了つたといふやうな感じを與へる人だッた。默つて、丁寧に、茶や菓子を其處に運んで來て、そしてすぐ階下に下りて行つた。
欅を描きかけた大きな水彩畫が其處にあつた。畫家は振返つて、「欅を一つ描いて見やうと思つて始めたんですが、何うも旨く行きません」などと言つた。
汽車は時々大きな地響をさせてその傍を通つて行つた。

獨りで居る時には、まだ女のことを思つて居ることが多かつた。
それは今ではもう女が突然詫びて歸つて來るだらうなどとは思はなかつた。そんな夢のやうな空想から次第に離れて來た。野に向つての散歩の一歩每に、時計の分秒の一刻每に、さうした空想から段々遠かつて行くやうにも思はれた。時にはそれが堪らなくさびしい悲しい情緒を誘つて來た。覺めて行く、覺めて行く。かう思つて緣側に立盡してゐることなどもあつた。
かれは自分の遣つて來たことを遙かに思つて見るやうな人になつて居た。中に入つていろいろなことをした第三者の心持もそれと解釋が出來るやうになつてゐた。常識を外れた自己の行爲をも批判した。

遠い處に居る女の心が鮮かに自分の心を掠めて通るやうな氣分のする日が幾日か續いた。

「不幸な女だ！」

かう獨りで自分に言つて見て、女の一生を頭に描いて見たりした。

「何んなに卒直に、何んなに熱烈に、何んなに眞面目にかれは其女を戀したらう？　かれは心底から女の爲めを思つて居た。物質では貧しい生活であつたが、自分ほど精神的にかの女を愛して居たものは恐らくは無かつた？　將來もなからう？　しかし、それが女には解らないのだ。」

こんなことを日記に書いたやうな日もあつた。

「……猜疑、嫉妬、不安、不信、さういふ暗黒の中を自分は通つて來た。自分のやうな正直な心が、その暗い影の爲めに傷けられた狀態は傷ましい光景である。自分は幾度か自分の赤い血の滴るゝやうな苦痛を覺えた……」

そんなことも書いた。

「事業？　事業？　自分も事業をしなければならない。何の事業？　藝術？　政治？　農業？」

かう書いた翌日の條には、

「しかし、事業に向ふには、自分はまだ疲勞してゐる。それに自分は餘りに事業を戀(ラブ)してゐない」

畫家の性格に關しては、

「事業より外に他を顧みない羨しい勢力家である。其人に取つては、事業が即ち唯一の戀である。……

戀を事業とする人間と事業を戀にする人間と……」

から書いて置いた。

七

娘の顏を描いた小さな水彩畫がいつかかれの机の傍の柱に懸けられた。

大工の上さんは、かれの留守に、二三度その傍に寄つて見た。水彩畫の繪具は上さんの眼を惹くに十分な鮮やかさを持つて居た。

髮を桃割に結つて居た。見たやうな顏だと思つた。

一日、勝手から座敷に上つて來た上さんは、

「あれは、誰？」

「知つてる筈だかな」

かれは得意さうにして笑つた。

「知つてるッて……私が？」

「さうさ」

上さんは傍に寄つて、もう一度見て、「何うも見たやうだとは思つてるんだけども」

「見たやうな處ぢやない。始終見てるぢやないか。」

「さう?」

考へて、「分りませんね。誰?」

「まア、當てゝ御覽」

もう一度見て、

「分らないねえ!」

「それ」とかれは頷て向をしやくるやうして、「あこの橋のそばの西洋料理の娘さ!」

「あゝあゝ、さうね。まさかあの娘だとは思はないもんだから、分らなかつた」上さんはかう言つて笑つて、「さう言はれて見れば、よく似てるよ……あの畫かきさんが書いたの」

かれは點頭いて見せた。

上さんは、それでたん納して、勝手の方に行きかけたが、「貴郎も物好だよ。あの小娘なんか仕方がないぢやないか」

「またあゝ取るからな……まア好いよ」かう言つて笑ひながら、かれは遣りかけた仕事の筆を取つた。

其畫を描いた時のさまをかれは思ひ出して居た。それはある景色を寫生して來た歸途であつた。かれも畫家も餓えて居た。かれは畫家をそのレストウランにつれて行つた。空氣の影の濃い、何となく心の落附いた靜かな日であつた。誰も客の居ない二階には、薄い夕日が硝子を透してさし込んで、赤い實のついた靑木が卓の上の花瓶にさゝれてあつた。かれはフォークを取りながら紅葉を流した時の話をした。

「それは面白いね――」畫家はから言つて聞いた。
「鳥渡、感じの好い娘だね」
畫家は丈の小つくりな色の白い娘の後姿を見て言つた。
「おい、鳥渡其處に立つてお出！」
再び二階に上つて來た娘にから言いて置いて、畫家は傍からスケッチ帖を出した。娘は顏を赤くして居た……。

八

谷について曲つて流れて行く水の音は屋を撼がすやうに聞えた。家々の軒には少さい氷柱が下つて、巖壁を傳つて落ちる瀧のしぶきは、白く岩にこほりついて居た。
溫泉宿は谷の底のやうな處に二三軒並んで居た。二階から二階に通ずる廊下には、綿衣に縮緬の帶をくるぐる卷いた肥つた浴客が立つてゐるのが見えた。浴場からは湯氣が白く颺つた。
山には雪が白く積つて居た。
寒い寒い山の溫泉場には、客といふほどの客もなかつた。室には火燵が開かれ、火鉢には火が活々と起きて居た。「寒い、寒い」などと言ひなから、客は日に幾度となく湯に出懸けて行つた。
谷川に臨んだ二階の一間には四五日前から二人が來て居た。昨年の暮、「僕は山に雪を描きに行つて見

やうと思ふんですが、何うです、行つて見ませんか』かうかれはその畫家から誘はれた。其處には畫家の遠い親類に當る旅籠屋があつた。『何アに、金などかゝりやしません。一日一圓かゝりやしません。それに今は靜かですからな。山の温泉場の冬もまた詩趣があつて好いもんですよ』かう言つて畫家は勸めた。

畫家は、冬になると、何時も其處に出かけて行く話などをした。スケッチなども出して見せた。

霜解の深い郊外の路は、もう以前のやうにかれの散歩を許さなかつた。それに大工の上さんを相手にしてのさびしい生活も、かれに取つては、既に堪へ難いものになつてゐた。傷つい心を山の温泉に…………。かれはかう思つて、畫家の跡に跟いて遣つて來た。

初めて着いた夜の感じが先づ第一にかれ心を動かした。谷に下りる暗い冷たい危ない路から、俄かに明るい靜かな帳場に入つた時、其處にゐた品の好いお婆さんは、『まア繁(しげる)さんかね、よく來たね』と言つて迎へた。それは畫家の細君の叔母さんで、他に細君の從兄妹に當る男や女が二三人居た。賑やかな暖かさうか家庭であつた。

「好い親類を持つてるね、君は」

かれは幾度となく畫家に言つた。

枕を擁して來る谷川の音、それを明るいランプの下で、湯に暖つた體を半分夜着の中から出しながら、長い間かれはじつと耳を欹てゝ聞いて居た。『痛快に堪へんなア！』暫してから言つたかれの眼には、涙が光つた。かれは女のことを思ひ出してゐた。

翌朝、かれは遲くまで寐てゐた。畫家は早く起きて谷川の緣を步いたり、帳場に行つてお婆さんと話をしたりした。十時近く歸つて來て見ても、かれはまた夜着を冠つて寐て居た。

漸く起きて、顏を洗つたかれは、

『だッて、僕は昨夜殆ど寢なかつたんだもの。いろんなことが思ひ出されて思ひ出されて、何うしても眠られない。女のことばかりぢやないんだ。人生のことがしみじみ思ひやられて、万感交々胸に起るといふ風で、三時まで起きてゐた。……君は、そんなことはお存じなしだらう。それや、君は、心持好ささうに寐てゐたからな。グウグウ鼾をかいて寐てゐた。君なとは、夜、夢を見ることはないだらう?』

『まア、無い方だね』

『僕はつくづく羨しくなつちやつた。君のやうに、一日働く時はウンと働いて、床に入るとすぐイビキをかくやうな人は本當に羨ましいね。僕は、君の健全な呼吸(いき)つかひを聞いて、昨夜(ゆふべ)といふ昨夜は、羨しいのを通り起して憎くなつちやつた!』

畫家は莞爾(にこ〳〵)して居た。

『つまり苦勞がないんだね、』

『さういへばさうだらうね』

『僕は昨夜つくづく思つた。僕はこんなに深く人生のことや男女のことや友人のことやいろんなことを

思つてゐるのに、……さうとは知らす靜かに穩かに眠てゐる友達があるんだからなア！　自分の心持は何うしても他人に傳へることか出來ない！　から思つたね」

「たッて、それは仕方がない」

「それは仕方がないのさ。それから水の音、ドゥと流れてゐる水の音、盡すに流れて落ちて行く水の音、それと僕の思つてゐることとの交渉を考へて見たね」

かれは茶を飮みながら、こんなことを言つた。眉を昻けて深く人生のことを考へるやうな眼色をした。

二階の欄干に添つて、船底になつてゐる安樂椅子が一箇置いてあつた。かれは湯に煖つた身をそれに凭せて、輕く體を動かしながら、樹立の間に奔跳して流れて行く泡立つた白い谷川を見たり、朝日のキラキラと反射する山の雪にじつと眺め入つたりしてゐた。谷川の向ふには、獵師らしい男が獵銃を擔いて山の裾を縫ふやうにして步いて行つた。

畫家は川を越えたところに三脚を運んで行つて、其處で川原の石の雪を描かうとした。かれは暫し立つて見て居たが、やがて靜かに踵を溫泉の方へ旋して來た。

湯氣の白く處々に颺つた谷底の冬の溫泉場は、繪のやうにその前に展開されてゐた。ある二階の欄干には、手拭が二筋かけてあつて、それが白く際立つて此方から見えた。赤い襷をかけた娘は忙しさうに此方の廊下から彼方の廊下へと步いて行つた。

地上に雪はあつたが、それでも空は瑠璃色に鮮かに日に輝いてゐた。凍つた筧の口からは、氷がチョ

ロチヨロと靜かに落ちてゐた。

盥を日の當る處に持出して、せつせと娘の洗濯してゐる傍では、手拭で額髮を卷いた子守が、脊中の子をあやしながら唄を小聲で唄つてゐた。

塀のところに立て懸けた張板の紅絹は、目も覺めるやうに地上の雪と日影とに反映してゐた。

かれが机に座つて居ると、障子を靜かにあけて、婢が茶だの菓子だのを運んで來た。

「お淋しいでせう」

かう其婢は言つて、いつまでも其處に座つ居た。

それにこの溫泉宿には、娘が二人居た。一人は二十五六で、一人は二十位であつた。畫家の細君は其の大きい方の娘の妹であつた。『義姉は一度嫁に行つたんですけれど、緣がなくつて歸つて來たんです』畫家は曾てかうかれに話して聞かせたことがあつた。何方かと言へば瘦せた方で、何處を探しても、もう若々しい處はなかつた。身裝なども構はうともしなかつた。

若い方は肉附の好い頰の赤い可愛い顏をして居た。此間まで東京の女學校に行つて居たので、髮の結方から口の利き方まで田舍娘らしい處は少しもなかつた。繪が好きで。『兄さん兄さん！』と無邪氣な態度で、畫家の後を追ひ廻した。端書を持つて來ては、よく繪を畫いて貰つたりなどした。

「お冬さん、遊びにお出なさい。兄さんが居なくつても好いでせう」

二三日經つ中には、廊下でゝすれ違つてもこんなことを言ふほど氣が置けない間柄になつてゐた。かれは机に向つて、手紙だの日記だのを書いた。その多い手紙の中には、別れた女の友達に遣る返事などもあつた。其女は矢張かれの結婚に失望して、親の取きめた夫を持つて田舍に歸つたといふやうな人であつた。女は、田舍の單調なことや、雪の山國の圍爐裏の邊の無趣味なことや、都會の生活の戀しいことや、山の中に埋れる若い心の悲しいことなどを細々と書いてよこした。矢張、運命の悲しさを嘆いて居るやうな女であつた。かれは長い長い返事を書いた。

別れた女の從妹に當る人の手紙には、女の消息がいくらか洩してあつた。いづれ近い中、東京に出るやうな話だなどと書いてあつた。かれはそれを見て心を動かさずには居られなかつた。

矢張、二つの心は空間に波打つゝあるのをかれは染々感じた。東京へ!! かの女が東京へ! 二つの離れた心が東京へ!

もし何處かで邂逅したら! かれは其時のことを想像した。不思議にもかれの心は最早以前のやうな熱烈なものではないといふことに氣が附いた。無論、今では再び一緒になるといふ氣が起らなかつた。さういふ氣はすつかりなくなつてゐた。寧ろ知らない關係のない全くの他人といふやうな顏がしたいと思つた。

『かういふ風にならなければならぬやうな眼を逢せたるかの女が憎く候。またかういふ心の姿にならねばならぬわが身が悲しく候。今は唯、心の落附きて、何處にてかの女に逢ひ候とも、他人に逢ひたるご

とき心の持方をするやうにならんことを祈り居り候――』別れた女の從妹にやる手紙にはかう書いてかれは筆を結んだ。

それにも拘らず、その消息は、尠なからずかれの胸に新らしい印象を與へたやうに見えた。安樂椅子に凭りかゝりながらも、長い間、そのことを考へて居た。散歩に出かけた途中でもそれを思つて居た。川原に行つて見ると、畫家は傍目も觸らず一生懸命に繪筆を動してゐた。かれは其後に立つて見てゐた。その瞬間にも、女の消息が、矢張りかれの頭を往つたり來たりしてゐた。

『何うでも好いぢやないか、そんなこと！』

かれはかう幾度となく簇つて來る女の記憶を打消した。

氣が附くと、かれは岩壁に添つた暗い道を高臺の方へ出やうとして居た。

高臺の溫泉場は一層晴れやかに日に照されてゐた。西洋造の旅館が彼方此方に立つて、賑かな通りには、郵便局だの、外國人相手の美術商だのが軒を並べて居た。土地の繪端書を賣る店などもあつた。

夜は電燈が四邊を明るくした。

かれは此處に來ても、矢張一間に落附いて仕事をしては居られなかつた。一二枚飜譯をしては、すぐ倦きて、例の通りステッキを抱えて出懸けた。

畫家はをり〳〵かれの思ひもかけないことを知つてゐるのに驚かされた。彼處の禿頭のお爺さんは？

彼處の意氣な上さんは？　彼處の廂髮に結つた娘は？　年々遣つて來ても知らないことをもかれは遂にくも知つて居た。

「君はさういふことを探訪する天才ですな」

かう言つて畫家は無邪氣に笑つた。

繪葉書を賣る店の前にかれによく立つて居た。山に圍れた湖、湯氣の白くあがつた谷間の溫泉場、岩壁を傳つて落ちる細い流――その奥には銀杏返し結つた頬の紅い意氣な二十三の娘が座つてゐた。

ある夜、電燈の明るい其店先にかれの姿はくつきりと浮出すやうに見えて居た。娘はこの山の中の溫泉場にはめつらしいやうな派手な裝をして、繪葉書を入れた箱を幾箇となく客の前に並べて見せて居た。

かれは其處に腰を懸けて烟草を吸始めた。

長い間娘と話して居た。

「あれが名高い石風呂ですか」

白いリボンをかけた東京から來た庇髮の女は、橋の上に立つてゐるかれに向つて訊ねた。

「え、さうです」

かれは笑つて見せた。

女は暫く其處を去らうとしなかつた。かれど同じやうに橋の欄干に凭りかゝつて、深く流るゝ谷川の

早瀨を見た。

「深いですね、眼がまはるやうですね」

「え、隨分深い――』

かれはかう調子を合せた。續いて、

「東京からお出ですか」

「え」

「寒いのによくお出でしたね？」

「でも、東京で考へたよりは寒くはありませんわね」

かう言つて、『貴郞は、何方？」

「このすぐ下の溫泉場に居ます」

二人はこんな話をして、其處に立つてゐた。女は、直ぐ其處の溫泉宿に居ることを話して、『母が居るばかりですから、ちと遊びに御出なさいまし」などゝ言つて別れて行つた。

谷に添つて少し行つた處に、竹藪だの梅林だのが續いて、其奧に山門の高く聳えた寺があつた。かれの姿はをりをりその境内に見えた。

本堂に續いて、小さな庫裡が見えて居た。春は近所から人が見に來るといふ大きな糸櫻が庭一杯に枝

を張つて居た。雪が帛の青い葉の上に積つて居た。

かれは糸櫻の幹の周圍を一廻して、庫裡の方を一目見て、それから本堂の傍を通つて墓域の方に行つた。

ある夜、書家とかれとは火燵に當つて何か話して居た。其處にこの家の總領の娘が茶菓子を持て來た。

「繁(しげる)さん、お茶を淹れて上げませうか」

「え、何うぞ御願ひします」

皆な機嫌よく面白さうに話した。總領の娘も長い間其處に座つてゐた。

書家は思ひついたやうに、

「義姉(ねえ)さん、お寺に好い娘がゐますね」

「今、知つたの?」

「だッて、そんなこと平生、注意してゐやしないから、大抵知らずに居るけれども、昨日退屈して、寺に行つて見ると、庫裡から娘が出來た。鳥渡、色の白い、田舍には珍らしい子てすねえ」

「お從(しう)さんッて言ふのよ。あれても二十四よ」

「二十位にしか見えないがね」

「あれて、あのお寺の和尚、道樂坊主だから、遊藝などをあの娘に仕込んて、この土地ても評判者なのよ。お寺て三味線の音がするんだから、隨分開けたお寺よ」

「道理で、珍らしい意氣な娘だと思つた。」

默つて頷を撫てゝ聞いて居たかれは笑ひながら、

「僕も、もう餘程前からあの娘を知つてゐる」

「え！君が――」

「僕の顏を見ると、向ふから會釋する位になつてるんだよ」

「まさか、うそでせう」

かう總領の娘も笑つた。

「君は本當に早いね。さういふことにかけては天才があるねえ」

「いや、別にさういふ譯でもないがね。もう五六度は見てるよ。面白い處に寺があるなアと思つて入つて見ると、三味線の音がするから不思議に思つて立つて聞いて居た。それから本性を見てやらうと思つて、ちよいちよい出懸けたんだがね」

「好い娘だらう」

「うむ、田舍ではまづめつらしい方だね」

總領娘は、默つて意味ありげにかれの顏を見て居た。

初めて見たのは、門から庫裡に入らうとする後姿、次に見たのは、障子を明けて廊下を歩いて行く姿

鳥渡此方を見た白い顏――そんなことをかれは面白さうに話して聞かせた。

「これが、段々出來て行くやうだと、それこそ小說だがね。實際の世の中には、さういふことは餘りないね。」

かれはこんなことを言つて笑つた。

大きな西洋造の旅館の裏通の細い路――長い塀に沿つて、午後の日影が薄い光をほんやりと四邊に落して居た。

旅籠屋の女中らしい銀杏返しに結つた年增の女は、長い間其處に立つて誰かを待つて居た。急に向ふ側の長い塀の木戸が開くと、白い服を着た濃い頭の髮にテラテラと油を塗つたコックらしい男の頭が、其處から四邊を見廻はした。女は急いで其方へと走つて行つた。

二つの姿は寄添ふやうにして暫く何事をか熱心に話して居た。

かれは其傍を通つて行つた。

九

一月ほど後には、かれはもう山の溫泉から歸つて來て居た。

僅かな月日の中にかれはいろいろな變遷を見た。大工の上さん――毎朝飯を炊いて呉れた元氣なその上さんは、かれが山の溫泉に出かけた十日目に發病して、一週間ほど病んで、間もなく彼の世の人になつ

て了つた。郊外にかれの歸つた時が丁度初七日で、その小さい家の中には、大工の磯さんがぽつねんと一人さびしさうにして座つてゐた。佛壇には花やら燈明やらが供へられてあつた。

それに、橋の畔のレストウラ　もうゐなかつた。娘はある夜兼ねて約束して置いた學生と一緒に家出をして了つた。その學生とはかなり舊い關係で、前からその計畫をしてゐたらしく、いろいろ調べて見ても、その行衞は更に分らなかつた。かれはさびしい心に閉されて、其處から郊外の家へと歸つて來た。

かれは柱にかけた娘のスケッチを前にして、薄暗いランプの光の中に座つて居た。

かれの眼の前には種々な新しい幻影（イリュウジョン）が通つて行つた。山の溫泉場での一月、其處で行はれたさま〴〵の光景が思ひ出された。旅店の二人の娘――總領の娘は、不意にかれが歸ると言ひ出したのに驚いて、袂を捉らぬばかりにして引留めた。若い方の娘は、瀧の落ちる暗い路のところにかれを連れ出して、『何うか、忘れずに居て下さい、ね、ね』と言つて泣いた。

かれは畫家の眞面目な難かしい顏を頭に浮べた。

『事業が戀人なんだからね、君などは。何うせ僕等の心は解りやしないよ。僕は空想では生きてゐられないんだから。藝術とか事業とかいふやうな假面を被つたやうなものでは生きてゐられないんだからね。僕は生きてゐるものでなければ興味を惹かないんだから――』かう言つて、かれは畫家に別れて來た。

『君のやうに熱心に繪を書いてゐる人を見ると、尊敬はするが、僕がさうならうとは決して思はない。

僕に言はせると、君はさうして毎日繪を畫いてゐるが、それが何だと思ふね。もつと生々した事業は他にいくらもある。女にラブして、女の心に生々とした自己の像を刻んでやる方が何れほど立派な生効(いきがひ)のある仕事だかわかりやしないと思ふね」

こんなことも言つて來た。

かれは毎日毎日寒い風にも頓着せずに熱心に山陰(やまかげ)に行つて寫生をしてゐる畫家の姿を頭に浮べて見た。そして自分と引較へて考へて見　たる相違だらう。何たる性格の相違だらう？かれはかう思つて今まで通つて來た自分の半生を靜かに考へた。

兎に角、郊外の家はかれには最早　びしくなつてゐた。それに上さんに代つて世話をして呉れるやうな人も居なかつた。

野や、林や、丘や、さうしたものももうかれに滿足を與へなかつた。

大工の磯さんも、一人では不自由で仕方がないから、　もすんだら、親分の家に同居する積だなどと言つてゐた。二七日の日には、それでも其小さい家に、草色の金襴の僧衣を着た近所の寺の和尚さんが遣つて來て、靜かな讀經の聲が長い間聞えて居た。

其夜、磯さんはめつらしくかれの家に遣つて來た。

「可哀相なことを仕ましたよ。矢張、緣がねえんですな」磯さんは、酒に醉つて赤い顏をしてゐた。

聞きもせぬのに、磯さんは上さんとの長い間の關係を話した。「五年ですからな、隨分深い馴染でした

よ」磯さんはこんなことを言つて聞かせた。

「一つ、義太夫の三味線の旨い奴をさがすさ！」

笑ひながら、かれが言ふと、磯さんは染々と、

「まア當分は鳴なしで稼ぎまさア。男がさう薄情ては、佛だッて浮かばれませんや」

曇つた寒い日に磯さんは移轉して行つた。路に添つた入り口の門の前に荷車が一臺長い間置いてあつて、磯さんと、手傳に來た若い男とが、長火鉢だの箪笥だの下駄箱だのを一つ一つ擔いたり持つたりして運んで行つた。

さびしい心を抱きながら、硝子障子を隔てゝ、かれはそれを見てゐた。

道具を山のやうに積んだ荷車には、やがて細引が十文字にかけられた。磯さんは荷車と家屋との間を行つたり來たりした。家の雨戸を彼方此方に閉めてゐるのも見えた。最後に、磯さんは暇乞に來た。緣側から中を覗くやうにして、

「おや、旦那、また御目にかゝります。御機嫌よう！」

かれは障子をあけて、

「いよ〳〵行くのかえ。僕もコヽにはもう長くは居ないよ、」

「どつか好い處がありましたか」

「今日返事が來る筈だ」

「世話をするものがなくつちや、こんな處に居られやしませんや」かう言つて「おやまた御目にかゝります」

磯さんは別れて行つた。

かれは障子を明けたまゝ、じつとそれを見て居た。二人は荷車の處に立つて暫らく空などを見て居たが、手傳に來た方の若い男がやがて梶棒を上げて車をひき出した。荷車の音はガタガタと暫し田舍道に聞えてゐた。

其音もいつか聞えなくなつた時、かれは言ふに言はれないさびしさを感じた。野も、林も、田舍道も古池も、長い間心の傷痍の隱遁所であつた幽棲も、今はかれに何等の色彩をも與へなくなつた。かれは新に前に展けられて來る境遇を想像してゐた。

十

かれは取敢へず友達の居る山手の下宿屋に行つた。

その下宿屋は隣の後家さんが持つて居た。後家さんの住んで居る家も同じ二階屋で、壁と壁とが隙間もなく相接してゐた。造作も似てゐた。後家さんの住居の格子戸の前には、八ッ手が手を擴げたやうに一面に繁がつてゐた。

その昔の友達は、書生達を國から大勢連れて來て居た。かれの行つた時にも二三人其處にごろごろしてゐた。『こんなに狹いんなら、他に行く處が無いでもなかつたんだ』かれは友達に言つた。
『何アに、ぢき好い間が明くよ。國に歸る奴があるんだから。二三日此處で辛抱して居るさ』何も彼も知つてゐる快活な友達はかう言つて笑つて、『境遇を變へやうと思つた時は、ぐんぐん變へて了つた方が好いよ。思ひ立つた時に斷行しないと、得て障碍が起つて來るものだよ。だから、僕は兎に角やつて來たまへ。何うにでもなると言つてやつたんだ。あんな野原の眞中に、いつまでくよくよ思つてゐたつて仕方がないからな』
『でもこれぢや窮屈だ』
『何アに、僕は朝出て行くだらう。書生達もそれぞれ用事を持つてゐる體で、君のやうに遊んで居る人間はないから、晝間は靜かなもんだ』
こんなことを言つて友達は笑つた。
その友達は都下で名高い若手の新聞記者の一人であつた。書棚には、西洋の政治論だの、詩集だの、歷史物などが並んで、四邊には雜誌や新聞が一面に散ばつてゐた。毎朝、十時が打つと、長押にかけたワイシャツを冠るやうにして着て、スコッチの背廣に縞ラシャの外套を被つて、流行の意氣な中折帽を冠つて、快活に格子戸を明けて出て行つた。
その友達は毎日歸つて來ては、『何うも此頃の議會は行つて見てゝも張合がある。今日の豫算案などは

賃に面白かつたぜ」などと話した。賑やかな町の話、忙しい人達の物語、種々雜多な市井の出來事、さうしたことを友達から聞く度に、かれの心は動がずには居られなかつた。かれは徒に過去つた自己の月日を考へた。

夜は一間は賑かであつた。書生達は腕押をしたり、トランプを引いたりした。ハアモニカを鳴すものもあつた。夜、遲くなつてから、阿彌陀をして、汁粉だの、鮨だの、菓子だのを買つて食つた。

「若い人達は元氣が好いナ」

かれはかう言つて其人達の騷ぐのを笑つて見てゐた。

書生の一人が欄干の處に立つて、隣の方を見て手招をしてゐた。それはある夕暮であつた。庭の梅が白く四邊に捺すやうに浮出してゐた。

「ヤアい」

かう言つて、その書生はわざと顏をしかめて見せた。

室の中に座つてゐた一人の書生も立つて其處に出て行つた。

「おい、構ふなよ」

中でも一番年嵩らしい書生は、室の中から聲を懸けた。

「何んてす？」

好奇心に誘はれたやうにして、かれは欄干の處に出て行つた。

其處からは、同じつくりの隣の二階の欄干の處がよく見えて居た。其處には十二三になつたかと思はれる綺麗な一人の娘が、お下げの髮に白いリボンを見せて、此方を見て、赤んべいをしてゐた。

「馬鹿ヤアい」

此方でかう言ふと、其娘は長い紅の舌を出して見せた。

「杉山の馬鹿ヤアい!」

娘は書生の名を知つてゐた。杉山と呼ばれた書生は笑つて居た。

一人の書生は、隣の欄干に接した處に顏を出して、ハアモニカを吹いて見せた。

見てゐると、また奥からその妹らしい十歲位の女の兒が出て來た。七歲位のも出て來た。

「並んだ!並んだ!ヤアい」

此方からは、かう囃した。

「並んだ!並んだ!ヤアい」

其の大きい前の娘は、憎さげに口を曲げてその眞似をした。

「みいちやん、書生さんに調戲つちやいけませんよ」

かういふ聲が室の中でした。同時に二十二三の丸顏の色の白い庇髮に結つた姉娘の顏が、ちらりと障子の間から見えてまたすぐ引込んだ。

かれは其前にもその隣の二階を覗いて見たことがある。欄干の縁側には、古い本箱が置いてあつて、其下に娘の針箱の赤い針山が際立つて見えて居たことなどもあつた。一間は六疊らしく、其間からをりをり母親の錆びた太い聲と總領の娘の若々しい艶な聲とが聞えて來た。子供達の泣聲もした。

「母さん、みいちやんが言ふことを聞かないて仕方がありません」

かういふ聲もした。

「隣は後家さんと娘ばかりだね」

ある時、かれはかう友達に言つた。

友達はいろいろと其の隣のことを話して聞かせた。亡くなつた主人と謂ふのは、一面政治家、一面文學者として、明治十七八年頃に非常に盛名のあつた人て、病氣に罹つて死んだ時には、都下の新聞紙は筆を揃へて皆な哀悼の意を表した。

「さうか、あの人の未亡人か」

かれも其名はかねて聞いて知つてゐた。

「でも、少しは遺産があつたものだから、此處に此二軒の家と向ふの貸家とを造つて、それて未亡人は娘の教育に半生をまかせることが出來たのだ」

友達はかう言つてその話を結んだ。

役家さんと娘達の女幕しては、寂しいことがあつたり、不便なことがあつたりするらしかつた。て、書生達は歌留多をするからと言つては呼ばれ、御馳走が出來たからと言つては呼ばれて行つた。

一人の書生は、二番目の娘に、英語を敎へに毎晩出懸けて行つた。

ある日、その總領の娘は、欄干の處に出て立つて居た。かれと顔を合せて、耻かしさうに輕く會釋をした。頰のあたりが赤くなつてゐた。かれは微妙な心の動揺を感じた。

「梅が大變よく咲きましたね」

かうした機會をつかむことに經驗のあるかれは、かう言つて笑つて見せた。

「もう遲い位ですわね」

「何處か梅見に入つしやいましたか」

娘は存外開けた口の利き方をした。

「いゝえ……」

「今日のやうな天氣の好い日に龜井戸あたりへ行つて見ると好く御座んすね」

「さうですね…… 蒲田にも此頃梅が澤山あるさうですねえ」

晴れた空には鳶が舞つて居た。隣の庭に咲いてゐる沈丁花の强い匂ひが四邊の空氣に充ちてゐた。

「丁子は高い香を持つてますこと」

娘はかう獨語のやうに言つて、隣の庭の方を見た。

二人は暫く立つて居た。

この朝、かれは山の温泉宿の總領娘から一通の手紙を受取つた。=御心のほどしみ〲と忘れ難く=と書いてある處を繰返して讀んで、かれは微笑した。

かれはつらい悲しい失戀の一年の年月の先に、段々わか草の春のやうな氣分の展けて來るのを不思議にした。

かれは冬のやうに寒く冷めたかつた年月を時々頭に繰返した。鳥渡想像が出來ないほどかれの心は其頃別れた女に偏つてゐた。其女の髮、眼、肌でなければ生効がないやうに思詰めたことも一度や二度ではなかつた。かれは野中の一軒家にさびしく過した二月三月の生活を振返つて考へて見た。

男の一分が立たないやうな屈辱を感じて、中に立つた第三者の家に怒鳴込んで行つた時の權幕や、短刀を懐にして邂逅次第女を斬つて捨てやうと思つて歩いた時分の心の焦燥や、人道の上から言つてもこの話はこのまゝに濟まされない、この不道理、不忠實、不貞操の爲めに犧牲になるのが自分の事業だなどと言つて友達を驚かして歩いた頃の熱烈なる情緒や、さうしたものは、今から考へて見ると、丸で別な人間が遣つたことゝしか思はれなかつた。またその一面には、その熱心になつた自己の姿やら形やら

が氣恥しく感じられても來た。

『何うでも好い！』

かういふ氣分の日が長く續いた。

別室が長く明かないでも、かれは他に移轉しやうともしなかつた。無邪氣な書生と、隣の娘達の嬉々とした笑聲との中でかれは暢氣に一日々々を送つた。

一月も經たない中に、かれはもう隣の人達と二三年も交際したやうな懇意な間柄になつてゐた。よく出懸けて行つては、長火鉢の前に座つて、娘や母親などを笑はせて居た。

快活な、話上手な、輕いウヰットに富んだ男らしいかれの言葉は、女故に長けだ未亡人の耳にも鮮かに面白く聞取られた。

『本當に、加藤さん、話が上手ねえ』母親と娘とはかう言つていつもかれの噂をした。

二階の新聞記者は、『矢張、さういふ天才があるんだねえ。先生のは、若い娘や未亡人の前になど出ると特に光彩を發揮して來るんだから堪ない……』十日を經たない中に、もうちやんと長火鉢の向ふに座つてゐるんだからね』かういふ風に、矢張かれを知つてる新聞記者の一人に話してゐた。

前の戀愛事件(ラヴ、アフツエア)を、かれは平氣で、その長火鉢の前で話して聞かせた。靜かな落附いた調子のある言葉が、流るゝやうに滑かに人々の耳に染み込んで行つた。何處までも眞面目といふことを失はないかれの

言葉は、女達の心を捉へるに十分であつた。

總領の娘は、其時、裁縫の上に顏を落しながら聞いてゐた。紅絹の布が上氣した顏に反射して見えた。

『矢張、男には未練があるもんですから……』から言つたかれの顏には、紅い血が上つてゐた。

『でもねえ、母さん、餘りねえ……』娘は小聲で言つて母親の方を見た。

十一

娘の顏が二階の欄干の處に見えた。

『加藤さん居らしつて？』からいふ小さい聲が續いて聞えた。

かれは立つて行つた。午後一時頃であつた。

『何方も居ないの？』から言つた娘は顏を赤くしてゐた。

『え、誰も？』

『私の宅でも、母が子供をつれて里に行つて、私が一人留守番をしてゐるんですかね、遊びに入らつしやらない？』

『行きませう』から言つて、かれが座敷の中に入らうとすると、

『此處から入らつやいよ。跨けばすぐ來られますわ』

『でも……』

「大丈夫ですよ。誰も見てやしませせん」
「見てゐッて構はないけれど……跨げるかしら！」
「跨げますとも！」
隣の二階の欄干と此方の欄干の間には、一尺位の隙があるばかりて、成程、容易く跨げるらしく思はれた。暫くすると、米琉の羽織を着た綺麗に頭髪を分けたかれの小つくりな姿が、此方の欄干から向ふの欄干へと渡つて行くのが四邊に浮出すやうに見えた。
「成程、譯はないね！」から言つて、かれは笑つた。
娘は默つて彼方此方を見廻した。誰も見てゐなかつたのを見て、安心したやうに莞爾した。
やがて伴れられて行つた一間は、座敷の八疊に續いた六疊で、長押にかゝつた父親の肖像が斜に此方から見えてゐた。机だの鏡だの、新しい簞笥だのが並べてあつた。
「待つて頂戴」
娘は聞耳を立てて二階の階梯の處まで出かけて行つた。

文學博士 森鷗外先生序
文學博士 上田敏先生序
與謝野晶子女史著
中澤弘光先生彩畫

新譯源氏物語

上卷忽三版中卷四月中旬發賣

紫式部の源氏物語に關する注釋類や梗概の續出は本書の現代化の要求を證據立てる然るに古典の精神をかみわけて言文一致に譯すことは西歐文學の飜譯よりも困難なる大事業である此困難を切拔けて見事に成功した而して現文壇の權威たる森上田兩先生は本書に序して我國第一の古典文學源氏物語の譯者として晶子女史が現代第一人たるを論じ其の成功を激賞されたのは正に此新譯に裏書したものである加ふるに中澤畫伯の華麗典雅とりどりなる源氏繪卷五十四帖（奉書刷木版極彩色密畫五十四葉）は内容の優美と相俟ち彷彿として平安朝の榮華を展開し平安朝の天才明治文壇の天才と日本に唯二人の才女の合作を飾つて居る

特價貳圓五十錢

鳥子純繪卷物風極彩色金文字入ギルト附頗美本
上卷木版極彩色●一帖中卷同上（自桐壺至乙女）廿（自玉鬘至夕霧）十八葉挿入正價各册金參圓小包料各册拾錢下卷六月中發行完結

新刊圖書要目

尊王愛国論
文學博士法學博士諸大家十九名家執筆合編
七十錢

親鸞聖蹟
東西本願寺高田派法主題字
鐵腸安藤正純新著
題字額面用美本壹圓五拾錢

蓮如上人
東西本願寺法主題字
教祖傳記叢書
須藤光暉著
題字額面用美本壹圓五拾錢

畿內見物
諸大家紀行文執筆中澤弘光彩畫等百數十圖入
大阪の卷頗美裝特價金貳圓

創造
木下尚江著
三拾錢

春泥集
上田博士序
晶子女史著
藤島武二裝
中澤弘光畫
第四版金壹圓

發兌 麴町平河町五 振三八一七 金尾文淵堂
神田錦町二 振替二六〇 勉強堂 發賣

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文章研究者唯一の指鍼

文章世界

四月一日發行 第五號 正價廿錢 郵税二錢 ● 前金郵税共十六冊一年分 三圓拾貳錢

■三月文壇の重なる現象 時評記者

■東京帝國大學の文科 主税

■現代飜譯界の一瞥 岩野泡鳴

■ロシア新寫實主義の代表者 昇曙夢

◎小説 足袋の底 德田秋聲

新著三種
中澤臨川氏の「露西亞」印象記……藤村
高濱虚子氏の「朝鮮」……秋江
小山内薫氏の「演劇新聲」……正雄

◎小説 春雨 上司小劍

■増上寺（東京印象記の四） 黄金冠

■三月の歌の中より（評釋） 前田夕暮

■近時の感想 田山花袋

■泉筆便り 前田晁

東京本町 博文館

信用なき商舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

獨逸戰時通信記者 マックス、ベールマン氏著

和蘭公使館書記官從五位勲四等 齋藤鐵太郎君譯

日露戰記 彈痕

（露軍の内幕）

◉菊判總クロース金文字箱入美本寫眞版數枚入

◉定價金壹圓廿錢

◉郵稅 内地金八錢 臺朝清卅錢

本書は日露戰役の際從軍記者として露軍の陣中にありし獨逸ベールマン氏が其見聞を一々本國の新聞紙上に掲出したるもの譯者公務の餘暇を以て繙譯し稿成りて公刊す編中至る所に鋭利なる觀察眼を放ちて忌憚なく露軍の内情を暴露し陣中に於ける露兵の行動を精寫し又日露兩軍策戰の批評黑木大將對クロパトキン評等其内容の奇拔にして豐富なると他の類書と同一視すべからず一讀露國敗戰の原因が那邊にあるかを諒解するに足る

發兌 東京市神田區西小川町二ノ三 明治出版社 振替口座東京三九三四番

關東大賣捌所

- 東京神田表神保町　東京堂
- 仝　神田裏神保町　上田屋
- 仝　京橋尾張町　東海堂
- 仝　京橋元數寄屋町　北隆館
- 仝　京橋西紺屋町　良明堂
- 仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

- 大阪東梅田町　盛文館
- 仝　京町堀　太華堂
- 京都佛光寺　東枝書肆

○改正定價　金貳拾五錢外に郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
	以上郵税共	

▲但　新年號春秋二期特別號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

廣告一手取扱　神田三河町一丁目　博報堂

一郵便爲替　にて御送金の場合は　本鄕西片町十番地反省社　と指定し拂渡局を　東京市東片町局　と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵劵代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記集金委托料及送達料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

- 一金一圓迄　金五錢
- 一金三圓迄　金六錢
- 一金五圓迄　金七錢

（集金委托料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

明治四十五年三月廿五日印刷納本
明治四十五年四月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所　反省社
振替口座東京三十四番
電話下谷九一一九
電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

▼本號定價金五拾錢　郵税金四錢▲

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.

Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
明治四十五年四月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論第二十七年第四號